眉山全集
松村藏書
番號 第 7 號
分類
分類番號 第 號
第一巻

博文館發行

眉山全集

第一卷

（明治二十二年撮影）

眉山君の全集を出版するに就いて、先づ讀者に告げて置かねばならぬ事がある。

實は此の全集も、紅葉君の其れのやうに、取り纒めて一箇所から出版したかつたのであるが、如何にしても事情が許さず、とう〳〵春陽堂と博文館との、二箇所から出版する事になつた。但し、中味こそ異なれ、裝釘は全く同じにしたから、併せ購つて書架を飾るには、一向差支あるまいと思ふ。

其れに附けても、各篇の轉載を快諾された、民友社、二六社、金港堂、嵩山堂、文祿堂、今古堂、左久良書房、早稻田文學社、中央公論社、女子文壇社、其の他諸氏の好意は、遺族に代つて、茲に感謝するのである。

尙此の書の編輯順序は、製本の體裁を主として、長短を取り合はす便宜上から、著作年月に依らぬ事にした。眉山君の著作は、此の全集に洩れたものもあるが、其の一部分は、版權所有者の轉載不承諾の爲めと、其の一部分は版權所有者の所在不明とに依るので、今更是れを如何とも仕難い。只他日拾遺として發刊する時を期して、要く眼を閉ぢて置く。

明治四十二年七月

遺友　巖谷小波

石橋思案

川上眉山小傳

眉山川上亮は川上榮三郎の長男にして、明治二年三月五日大阪に生れ、後ち父に從つて東京本郷區春木町に移る。　幼名幾太郎、長じて亮と改む。　始めて本郷小學校に入り、十三年十二月之を卒業し、進文學舍に遊び、十七年東京大學豫備門に入り、二十一年七月第一高等中學校を卒業して、帝國大學法科に學ぶ。　一年にして文科に移り、卒業に先つて退學す。　是より先故尾崎紅葉、石橋思案等の諸氏と共に硯友社を起し、明治文壇に一生面を開く。　始め烟波山人と號し後眉山と改む。　二十六年父と別れ、居を小石川區富坂に構ふ、當時居然として既に大家の風格を備へたりといふ。　三十六年里見氏の女鷲子を入れて室とし、男晴彦、國夫の二兒を擧ぐ。　既にして一大雄篇を出す腹案もまた熟して是を筆にせんとし、四十一年六月十五日卒然として自ら逝けり。　超えて十七日駒込吉祥寺に葬り、芳文院眉山清亮居士と諡らる。　著作數十篇皆世に行はれ、就中二枚袷、紫車、網代木、大盃、うらおもて、二重帶、觀音岩、新家庭等尤も評壇の推薦を受けたり。

川上眉山著作年譜

備考 一書籍となりたるは其發行年月、雜誌に出でたるは其發兌年月を記す、尚書肆の名を記せるは、單行或は合作なり

作名	書名或は雜誌	著作年月（明治　年　月）
黄菊白菊	我樂多文庫	廿一、六
注意　故人生前の言葉に依り全集中より除く		
墨染櫻	新著百種	廿三、四
寶の山	少年文學	廿四、八
紫車	春陽堂	廿五、四
蔦紅葉	春陽堂	廿五、十一
袖頭巾	春陽堂	廿五、十二
二枚袷	春陽堂	廿六、九
雪折竹	明治文庫	廿六、十
風流狂言記	明治文庫	廿六、十二
お駒	春夏秋冬	廿六、十二
有明	春夏秋冬	廿七、五

副白　匆々の際誤記脫漏も多からん、謹んて、大方の是正補缺を祈る

眉山全集

第一巻

目次

副白　匆々の際誤記脫漏も多からん、謹んで、大方の是正補缺を祈る

眉山全集

第一卷

目次

眉山全集

第一卷

目次

眉山全集

第一巻

雪折竹

(其一) 涙の雨も凌げぬ浮世

苔衣重ねても寒し、月洩る庇風に戰き、九尺間口の敷居落ちて、積る年に腰弱き雨戸二枚、節々の釘ゆるみて身に寸分の隙間勝に、いつも居住居惡るく柱より曲がみて立てば、内の樣は外より見えすき、冬はつれなき風も遠慮なく吹込み、障子も破り果てゝ、隔てとはならず、袖屏風さへ無き家の内は分けて哀れなり、長屋作の壁一重に隣あるは德ある身すがら悲しく、擂足では歩かれ

ぬ古疊八ッ敷たる一間に居間寢間客間殘らずを兼ねて、天井とては屋根裏の外になく、先代の住人が殘して行きし天滿宮の御符煤に汚れて柱に貼られ、今日買立の襖實は骨露はれをり。罅割し壁落かゝりて腰張の新聞紙効驗薄く、遣戸の手垢の見分けられぬ程古びぬ、去る程に鼠穴又も殖えて防ぐ事もならず、隅々の蜘蛛の巢拂へども又掛くる。座敷の眞中に二分眞のランプ、紙の笠も狐色に變りて、周圍三尺と離れては物の色もよくは見えず、況して隅々は月夜の陰よりは暗し。土燒の火鉢の身代の罅出たるを、古き錦繪を張りて一時を凌ぎたる、其脇に一人の女――十六七の娘、內職に人の縫仕事して、夜もやうやう深きに休みもせず。見れば、顏形人に勝れて、世の常の美しさにはあらず。負けぬ氣の眼キリヽと釣り上りて、リキンだる處男らしけれど、口元愛くるしく、小形の鼻におとなしき處あり。眉は優しき地藏形にして、額の富士は東洋の女の見せつけ處なるべし。一體の肉瘦せたれど、滑かに清く麗はしき羽二重肌、これが臭骸を包むものとは見えず。ことさら節々の引しまりたると、爪先の如何にもすなほなるは、中々かゝる裏店に望まれものにもあらず。情な

き雨も風も、此人の花の姿は損はれぬなるべし、綿銘仙の綿入に、怪しき色の褪めたる半襟を重ね、髪に油氣なければ、後れ毛の顔にバラ付たる樣、姿に合せて見すぼらし。同じ年頃の娘の中には、顔に白粉を離さず、髪に香なきこと無く、今日は鹿鳴館に、明日は歌舞伎座に、其日々々を遊び暮して、浮世に如何なる風が吹くかを知らざるもあるに、此娘今から世帯の苦を知りそめて、頬に血の氣なく額に寒氣立ちて、今が娘盛り、隱したき年を一つも更けて見せる、其身にしたらどれほど悲しかるべき。

しきりに縫立る手もと不圖暗くなりたるに、見上ればランプの眞短かくなりて油のある所まで屆かず。見る內にあたり薄暗く、油注さうにも一合小買の身代の餘裕ある筈もなし、詮方なしに水を注ぎ入れて油を浮かせば、眞やうやう油にひたりて前の如く明るし。嗚呼誰がこんな事を敎へしぞ、貧苦の入智惠と見るほどいぢらし。

娘は今袖口を縫ひかゝりしが、「今夜はなぜ捗が行かないんだらう、お向のお重さんはこんなものは、一晩に仕上げてお仕舞なさるけれど、私は慣れないから

いつも遲くつて……遲いといへばお父ッさんはいつもよりお歸の遲い事……もしや何か有つたんではないかしら、思はず仕事の手を止めてお父さんも取るお年ぢやあるし、此寒いのに夜風に吹かれてさぞおつらいだらう……此頃は活計に御心配なさると見えて、身體も大さうお痩なすッた……今朝髮を梳いて上げた時、白髮のふえたのを見た時はどんなに悲しかつたらう」ホッと息をついて懷に手を差入れ何うかして樂にさして上げたいけれど、女ぢやあるし、意久地がないから、ホンの手助しか出來やしない……アヽ兄さんが生きておいでだと、此樣なしがない事はしまいに……さうしたらお父さんも、奇麗な座敷を隱居所にして、巨燵の中で新聞でも御覽なすッてゐられるだらうし……私も今時分は琴のお淩でもして……それが、濟んだら人形の着物を製ひてやつたり、毛糸の編物をしたりして、さぞ面白く暮らせるだらうし……アヽアヽそんな事思つちや濟まない……それよりかお歸も間があるまいから火でも起して置きませう」

火鉢の灰搔探れば桃の種ほどな炭團の火僅に息をつきたり。「オヤこんなに

成つちまつたよ」
樅の荒木の炭取より量炭取出して、澤山には注かず、消炭を交ぜて火を吹立つる折しも、表の雨戸ガタゴトとつかへながら明きて、五布風呂敷の包を肩にかけたる五十恰好の男、結び目に手をかけて上り口に荷を下し、「お露今歸つたよ」
「オヤお歸りなさいまし、さぞお寒うござんしたらう、包はさうやつてお置きなさいまし私が直しますから」「ナアーニ私がやるよ、イヤどつこいしよ」
壁ある方に片寄せて、火鉢の前にドッカと座り、耄碌頭巾をはづして首にまきつけ、顏をしかめながら――さも痒さうに――兩手で顏を掻く娘は縁の缺けたる團扇で火を煽ぎながら、「お父さん今夜は大そう遲かつたじやありませんか、何うか成すッたかとヒドク案じましたよ」
老爺は古びたる棧留の煙草入を取出し、紙の襟卷したる眞鍮の煙管に、青臭き煙草をふかして、「さうだつたか、今夜は寒いもんだから、九時頃からはまるで人通が無いのさ、だから早く店を仕舞つて、直ぐ歸らうと思つたが、道序だから庄兵衛さんの家へ寄つて來たそれで、遲くなつた」「マアそれは……私ア又間違て

もあつたんぢやないかと思つて、つまらない心配をしてゐましたの、女ッていふものはをかしなもんですねへ」

ニッコと見する笑ひ顔、口元に自然の美を作りて、糸切歯の虫喰ひたるに又いはれぬ愛嬌を添へたり。「アヽ先程、お隣のお家内さんに頼まれて、手紙の代筆をして上げたら、お禮だといつてお父さんの好な鮒の甘露煮を下さいましたよ」

といひながら、燒繼のある皿に盛つたる僅ばかりの甘露煮を見する。「さうかそれは氣の毒だつたの」「それからね、お歸になつたら上げやうと思つて晩方針を買ひに行つた時少しばかりお酒を買つて置きましたよ」「どうもお前はいつもさう優しくして呉れるので、私はこんなに零落ても樂みがある、ホンニいつも心の中で禮を云はない事はない」「なんですねへそんな事を……子が親にするのは當然でさね……おやァ直ぐつけましやうか」「どうも濟まない」「またそんな事をおッしやるよ……威張つて召上れな」

捧げ出る能代の膳の上には、澤庵、櫻味噌、薑の紅漬、さては今の甘露煮の外にな

けれど、これに籠る情は山海の珍味に望んでもなし。大廈高樓の内、うつくしき氈毯を敷つめたる座敷に、本膳二の膳三の膳をつらねて、玉の盃は電氣燈の光にかゞやき、瑠璃の器には、東海の鯔條西山の鳳哺。氷裡の鯉を羹にし、雪中の筍を木芽合にして、白魚は中落を食はず、胡瓜は二月の走りをよしとする、寛活紳士の饗宴に比べて、いづれか樂しかるべき。京の友禪に身の内の痣を隱したるは、木曾の麻衣に雪の肌を包むに若かず。玉の臺には、九華の帳の中に胸の機關を隱くし、賤の伏屋には、さし込む月もあらはなり。誠あるお露の胸、柔らかき手はダイヤモンドの指輪に飾らねど美くしく、清き胸は垢染みたる半襟の中より水氣だちたり。それが花の唇に言葉の花は咲かさねど、たゞ一筋の紅の舌、三寸不爛に縱横の惡氣なし、老爺も機嫌よく呑みかけて、いつになき高笑ひ、盃にうつす影も二ツ三ツ若く見ゆる、此酒の銘は養老といふか、それと知らず「アヽいゝ心持だ、大そう醉つた」「まだありますよ、今夜は久しぶりですから些ツとお過ごしなさいな」「ナアーニモウいゝ、餘り過すと身體に惡い‥‥時にお露、さつき庄兵衛さんの所でかういふ話があつた、アノそれ今度通の

三丁目へ煉瓦作の大きな家が出來たらう」エヽ戴春館といふ額が掛つてる…
…「さう〳〵あすこがその……大そう高尚な品のいヽ料理屋に成るんで、昨今貴紳方の相手になるやうな行儀のいヽ女中が欲しいといつて探してゐるさうだ、尤も向で仕着を出して、給金もよし、それに貰もあるから隨分いヽ仕事になるといふ事だ、デ庄兵衛さんの云ふには、お露さんが行つたらいヽとは思ふがいヽ所とはいへ奉公だから何うだと云つて相談があつたが、私も今かういふ場合でお前が行つて呉れヽば大變都合がいヽんだが、何うだお前行つて呉れるか」

斑なる歯を楊枝でせヽッて居たりしが、此時其手を膝の上に置いて、ヂッと娘の顏を見る、娘は鬢の後れ毛を撫上げ、「私でよければいつでも參ります、かうやつて人仕事をしてゐてもおもふ樣には行きませんから……ですが私が居なく成つたら跡でお父さんが一人で御不自由でしやう」「ナニ家の事は何か私が始末をつけるよ……それに時々暇を呉れるさうだから、其時にマア男に出來ない事は遣つて貰ふやうに仕やうよ」

と云ひながら袂より塵紙を取出し、火鉢に烘つて鼻を嚙む、娘は火箸で灰掻きならしながら、何か思案の樣なりしが、「しかしお父さん先は慥かな家なんですか‥‥若し又まんがちに極めて仕舞つて後悔するやうな事があつてはいけません‥‥」

老爺は白髮頭をしきりに點頭かして、「ウヽそれもナ、能く聞た所が先は極く手堅い家で、女中のうちには隨分家がしッかりしてゐて唯行儀見習に來てゐるといふも有るさうだから、決して不取締な事は無いさうだ」「さういふ事なら私は安心して參りますよ‥‥しかし行けば幾日頃でしやう、其前に出來るだけ家内の事をまとめて行かうと思ひますが‥‥」

鯛は鳴門を越えて骨に節出來るとか、此娘が先程よりの言葉は同じ年頃の姬御前に云はれ可きものにあらず。暮しに足らぬ勝なれば、浮世の味を自と知りて萬に氣の付く事も早し。綿銘仙の薄綿入に北風を凌いでからは、身の內の血凍えて、艱難の中に、心いつとなく大人びたりと、知るや知らずや、老爺は煙草を捻りながら、「それも二三日は間があるだらう‥‥何にしてもお前が行つ

て呉れると、私も大きに助かる、私だつてお前を奉公などに遣りたかアないけれど、以前と違つて今じやア思ふ様に暮しも出來ないし、山本の方からも段々催促されてゐるが、これも早く方を付てやらなけりやならないし、それやこれやてお前に頼んだのだ、お前も厭たらうけれど暫の間辛抱して行つて呉んな、其内には私も何うかするから」「イエ／＼厭だなんてソンナ事がありますものか……私も始終何のこれと云ふ手助に成るやうな事をト思つてゐた所ですから丁度ようござんす」「お前はさう云つて呉れるから有難い……今日もナア買出しに行つたら、問屋の娘が奇麗に着飾つてゐたから、何方へお出と聞いたら、新富へ行きますと云つたッけが、其時私は、アヽ家のお露も同じ年頃だ、さぞ芝居へも行きたからう、遊山もしたからうにアヽやつて家で仕事をしてゐるかと思つて、ツク／＼考へて立つてゐたよ」「何事も時節ですから仕方がありません……そりや私だつても奉公に出たかアありませんが、それも身過世過とやらてですからねへ」

（其二）昨日の冬はゆきの下草

昨日、今日、新聞の裏に廣い場所を埋めて、戴春館の廣告人の目に大きくうつれば、門前の砂利に、手車馬車の轍繁昌のしるしを深く刻んで、玄關に纒半天着た男の顏も春めきて陽氣なり、家は外を煉瓦作りにして內は總檜木普請、三階の手摺から富士筑波を見下ろし塗緣薄絹張の障子に大きな體裁を見せ、どの座敷にも目に餘る程の額あつて、在朝の方々の筆の跡墨つき大きくのこり一間幅の長廊下に優しい足音を轟かし、色白の女が小笠原流に捧げて來る廣蓋の上に、當世の喜助が庖丁の鹽梅、料理通の口を喜ばす方にはあらねど、隅田川に尺餘の鯛はねて、尾鰭に勢ある客人常に絕えず、髭と高帽子の品をかへて引きりなく、玄關番の女中の欠伸はつひに見た事もなし、懇親會、慰勞會それの祝宴、これの賀宴、次第に數を增して、帳場の筆の先に福の神ニコツキ給ひぬ。お露は此家に梯子段を上り下りして人の樂の爲めに働く身の上となり、源氏の機嫌、平家の氣褄、薩摩の御前に愛嬌を賣つて京の殿樣に程を宜くし、奧州の御國

訛分らねど分つたやうに調子を合せ、筑紫の磯臭きも不知火のやうに待遇し、いつか杯洗の中に酒を呑ませる器用な手品を覺え、及び腰の御酌も疊にこぼさぬ程になり、惡口を當座に聞流し、からかはれても耳の根を赤くせず、冷かされても顏を改めず、自然と心は知らぬ白齒を見せ、靨は口の端に作りつけのやうになりし。されど此頃の殿樣チント裀の上に行儀よくして居られず、盃を取らせて無理强の酌に御自身撿分の目を据ゑられ、苦しさうに呑むを見て悅に入り玉ひさては、騷々しき惡洒落に、結立の髮を破はされても腹を立つこともならず。

分けて厭なのは齒の浮くやうな障文句並べたつるお客樣、それもそらさぬやうに仕向けねばならず。何事も柳で送る月日のうちには、つらい事、あぢきない事、度重なれど、お父樣といふ事胸に浮べは、又辛抱する氣になり、心に叱つて元氣よき笑聲を洩らし、眼に物思ひの露を消して、朝日の花のやうに身をつくろひしが、少し閑暇の時は、溜り部屋の火鉢の前に、手の先の冷めたいこともありし。

開業の當日よりこゝは贔負の足を繁くする人あり。蘆澤様といふ名帳場に受よく、女中のうちに分つた方といふ褒美を戴いて、誰にも様子のいゝ男洋行歸りの肩にM.A.の羽をつけて、口にくはへるハヷナに少し鷹揚の烟を吐き、生得薄い髭を能の面のやうに生やしバッチリとした目に金縁の目鏡をかけ、髪は五分苅にして、色白の額の中に何處となく氣高きところあり。丈は人並より高く、胸の幅廣きにフロックコートの着附見事なり。今はさる會社の顧問をして、名刺の幅廣く世間を渡り、今年三十の大人株に這入り、自然と浮世ずれて、角の取れた言葉付に書生のアクを抜き、様子素振何處から見ても氣の丸い人としか見えず。

六時の鐘夕暮を誘ひつれて、障子のうちやう／＼薄暗く、南の座敷にお手が鳴つて、燭臺廊下を馳ける頃、竹の間に一人お客様來たれり。お露は番に當りて出て見れば、此頃見なれた蘆澤様。これはようお越しなされましたと丁寧にお辭義をして御料理はと窺へば、見つくろッてといふ。心得て立上り、程なく杯洗の波おだやかに、一ト通の料理あらはれ。袂をくはへてのお酌二三杯の

うちに、客の目の縁は早く召上ッた招牌をかけて、口の下紐解いたなりに、大きな前歯を遠慮もなく見せかけ、「今夜はいゝ時に來たねへ」「何故で御座います」「お露さんの番に來合せたからさ」「オヤ飛んだおつけあはせですねへ」「イヤ正直の話がそれだ。どうもお前が居ないと大きに酒がまづくッていけない」「貴郎は誰にでもそんな事を仰有いますよ」「さうだッけかの、更に覺はない……」右の手で一寸眼鏡の位置をかへ、態と眞面目な顏をして見せれば、お露は笑ひながら、「お年を召したからお忘れ遊ばしたのでしやう」「可愛さうにまだ耄碌する年じやない……ヒドイ事をいふ……お前もなか〳〵口が惡く成ッたな」「貴郎のお仕込で……」「人聞のわるい、そんな敵役をつけられて堪るものか、私こそお前に仕込まれてこんなに成ッたので」「アラあんなお人の惡い事を……」「それでお互の帳消にしやうじやないかハヽヽヽヽサア仲直りに一つ上げやう」盃を出せば、會釋して受け、一寸口をつけて、「今夜は御ゆるりとして居らしッても宜しいのでしやう」「イヤさうでも無い。これから濱の松岡といふ家へ行かなければならない」「松岡といふ方は歌の先生ではありませんか」「よく知ッてる

ね」取りかけた箸を又下に置いて、不思議さうにお露を見れば「私が以前稽古に上ッて居りましたから……」「へエー中々話せるね……お前歌を詠むのかい」「詠むといふ程じやアありませんが少しばかり習ひましたの……何にも出來は致しません」「何うも些ッとも知らなかッた。さう成ッて見るとお前の素性が聞きたいが……ぶしつけだが何うして此家へ來るやうな譯になッたの」「そんな事をお聞遊ばしてもしやうがありませんよ」「さう云はずにマアお聞かせな。話したッて減りはしまい」「じやアお話し申しましやうか」「アヽ是非……」「何だか變ですねへ」「話し難くけりや蔭でも引かうか。チヤ／＼チヤンサア合方キッパリと成るんだ」「オホヽヽお芝居じやアありませんよ」

私生國は上州。明治十五年頃より横濱に住居して、親父樣は生絲の貿易に萩岡といふ名前は其頃の商館に知られたりき。店藏大きく、角地面を折廻はつて奥藏は三戸前。番頭手代十五人程を使ひて、店の弗箱の動きなき身代。臺所の窓一杯に烟を上げ、波止場の波の寄せて來る繁昌、夕凪の威勢よく今日を暮しぬ。去る程に花は散るに早く、月は缺くるに遲からず。私が十三の春、商

賣不圖左前になり、それよりは何してもよき事なく、親父樣身をあせり給ひて一か六の賽の目を眠つて弗相場に手を出し玉ひしが、それが又帳面に嵐を吹かして、家藏もめり込むべき大きな穴を明けし。私一人の兄樣を持ちしが本郷の學校に、ヂュリスディクションの奥を窺いて卒業の曉までに枕の數も僅かなれば、親父樣はそれを來る年の杖に當てゝ、次第に瘠せて來る身代の尾を人前に見せず、北斗は拜まねど、骸骨の上の玉藻を羅綾の衣と見せて、苦しい挺に傾きかゝる家を支へゐたるうち、かねて目をかけて遣りし勘藏といふ番頭、金の手詰まを年の暮に、餘程の賣懸金を持逃して行方知れなくなりしに、其年の凌ぎドット差支へて店も立ち行かぬやうになり、最早暖簾も取はづして仕舞ふ事と、屈託の手を胸の上に組まして、親父樣の顏色日毎に淋しくなる時、兄樣成業の冠を着てめでたく歸り來たれば、それに氣を盛返へし、これからは兄樣の手にて心安く浮世を送べしと樂みに思ふ春は果敢なく散りて、恨めしや兄樣は腦病の爲めに血氣の命を奪ひ取られぬ。わるい事にわるい事重なり、果は土地にも居られず。年頃住みなれた家を人の物と眺めさして、澁團扇に

煽ぎ立てられ、東京に立退き、さま〴〵の商買何しても思はしからず。筍の皮の一枚二枚、次第に資本の上着を剝がれ、其内に母様を亡くして、哀傷の涙の袖干すやうな面白い事もなく、自然と裏店に其日だけの活計を立てるやうになり、親子二人の命を繫ぐ朝一度の烟絲より心細く、着物といへば洗洒しの二タ子、それも水に入る程縞も分らぬ程に尾羽打枯らして、いつか座蒲團なき疊の上に膝いたからず。今日は昨日よりさもしき事を知りそめ、天神樣の反り橋より渡り苦しい浮世のいとなみに、心の舟もあやうくなれば、少しの手助けとて此家への奉公。年の瀨の流れて行末の海に波の花咲かすべき當もなく、これから何んな渚にうき身をかこつ事か。私はともかく、一人の親父樣の殘り少なき年に苦勞をかけさすことの悲しく、夜もいやな夢に寢覺苦しい身の上となりにき。

※　※　※　※　※　※

何うも……マア……不思議の緣だ……お前は萩岡の妹かへ」「貴郎兄を御存じですか」「知ッてる處か兄さんとは極く親しい朋友だッた。途中で私はベルチヤ

ムの方へ行ッて、彼地で兄さんの亡くなッた事を聞いたが、家がそんな風に成ッてゐることは些ッとも知らなかッた」「それでは兄が寄宿舍に居りました時分……」「アヽ其頃さ……兄さんにはいろ〳〵世話にも成ッたし舍に居た時分も大さう力に成ッて呉れた人　其妹と知ッてはこんな所に置いておく事は出來ない、親父も共々引取つて、及ばずながらお世話をして、お前も行々は立派な所へ嫁付けるやうにして上げやう」「マア……有難い思召し……親父が聞きましたら何んなに喜ぶで御座いましやう」

うれしいにつけ悲しいにつけて女の附物、心の感動を目に見せて、手を合はせて拜まぬばかり。蘆澤は眞面目になり、灰の中に火箸を杖にして、それからは盃も手に親まず。シンミリとした物語り、燭臺の上に堆かく蠟のとりつく頃、機嫌よく笑ッて立歸りし。其夜はお露の心落着かず。始終影のやうなものにつきまとはれ、行末の蜃氣樓を先から先と眺めつくして最早此家は出たやうな氣になり、「マアうれしいじやないか……親父さんのお傍に居て……面白くお伽をして上げて……天氣のいゝ日にはお供をしてお花見にでも行ッて

……何んなに面白いだらう……蘆澤さんは學校へ遣ると仰有ッたが……さう成ッたら屹度勉強して外の方に負けないやうに……お世話甲斐のあるやうにしましやう……琴も中許にならない内に下がッたッ切、モウ行かれないと思ッたが又お稽古が出來るやうに成ッた……有難いのは蘆澤さん……此御恩は決して忘れない……兄さんもいゝお友達を持ッて下だすッた……兄さんといへば一時は私達を置いてお亡くなりなすッたのを何んなにか恨めしく思ッたが……兄さんがありアこそ今夜のやうな事……此家を出たらば直にお墓參りをしやう……兄さんも蘆澤さんの御親切をお聞なすッたら何んなにかお喜びなさるだらう……アヽこれからは毎日學校へ行ッて……歸ッて來たらば蘆澤さんの部屋へ御挨拶に行ッて……それからお父さんの處へ行ッて其日の新聞の事でもお話し申してそれから明日の課業の下讀をして……それが濟んだら琴のお淩をして居るとお友達が遊びに來て……二人て面白いお話をして……其次の日曜には音樂會があるんでそこへ行く約束をして……それから氣晴しに庭へ出て可愛がッてる花に水でも遣ッて居る

と家の猫が來てヂャレるから叱ッて……ア丶猫は憎らしいからカナリヤを飼はう……先の家で飼ッたやうに能く馴れさして肩の上へ止まらしたりなんかして……晩に成ッたらお父さんの好なお茶を點てゝ上げて……それから蘆澤さんの靴下を編んで……肱付を製へて……着物も縫ッて上げて……それから何をしやう……歌を詠んで蘆澤さんに直して貰はうかしらん……手習をしやうかしらん……押繪をこしらへて見やうかしらん……折据の細工物をしやうかしらん……ア丶何にしても早く明日に成ればいゝねへ……今夜の時のたつのが遲い事」

折から帳場の大時計が眠むさうに打つ時の聲、口のうちで數へながら「まだ十時だよ……マアいつ夜が明けるんだらう」

(其二) 戀の流れをせきとめた思川

ひとしきり春雨の空南より晴れて、雲はちぎれ〳〵に、やがて青天井の中より、日の影濡れ心の庭先を照り返へす晝過。花を洩れて滴たる雫の口にいはれぬ美くしさ、佐保姫が身に飾る玉か、ならば其を糸遊の糸に繋いでいつまでも春の筐と眺めたし。艶は櫻にとゞめ嬌は海棠に團扇を上げて、只見れば松にとりすがる姫蔦の前に、蜘蛛の圍につなぐ露の玉簾、秋の古宮とは事かはりてたゞなまめかしき風情なり。一本柳のしげみに隱れて華美を見せぬ早咲の山吹、そこに雨宿りの蝶々が、羽を濡らしたか、さも重さうに低い所をたよ〳〵と飛んで行く。春景色何處を見ても厭と云はれぬ四方一面植込の小天地、其持主は門の表札に蘆澤隆三と筆太の名前、郵便の配達夫が能く覺えこんだ名といへば中々新らしき住居でなし。今南の離坐敷の障子を開けて立出づる女、あちら向いたれば顏は分らねど、都風俗の姿やさしく、高島田の髮ふさふさとして、拔ける程白い首筋に人の羨む襟足、撫肩の如何にも華奢なる、腰のすら

りとして、踵の引きしまりたる、美人の相にこれといふ不足の處なし、銘仙の着物に帶は檜垣に菊を織出した繻珍を少し胸高に締め、褄先のきりゝとしてそこに微塵媚めいた處なきは、如何なる育ちのものか、心柄もゆかしく、庭下駄を履いてこちら向いた顏を見れば、アッ！これはお露がかはりたる姿なり。

花は吉野に眺めて春はこれにきはめ、月は須磨にめでゝ秋の只物でなきを知る。お露の美は此時に活動して、飛石を輕く踏んで行く樣、美術に血を絞る人、に一目なりとも見せてやりたし。やがて目の前の櫻の下をくゞり、右に差出した枝を折らうとして手を上げた途端、後に足音を忍ばして近づく人、お露の美くしい指先の今花に屆く時、ソット其枝を動かせば、雨が殘こして行きし露はバラ／＼と新らしく一と時雨、顏から手へ掛けて一面に降りかゝれば、「アヽ冷めたい」

思はず飛退く後に時ならぬ笑聲「ハヽヽヽヽ」

驚いて振向けば蘆澤隆三、お露の顏を見てまた笑ひ出せば、「オヤいつの間に……わるい惡戯をなさいますね」「何にもするものか」「噓……今私が花を取らうと

しましたら枝をお振なすッたら……コラこんなに濡れましたよ」「私ア何にも爲はしないよ、大方風の所爲だらう」

言葉終らぬうちまことの風が颯と雫を落せば、アラと又脇へよけるお露、蘆澤は笑坪に入り、「ソレ御覽何より證據だ」「それなら何故お笑ひなすつたの」「そりやアお前の風付が餘りに可笑かッたからさ」「まだそんな事を仰有る」「まだそんなに疑がッてる」「マアあゝ云へばかう云ッて……」「何だッて？」「私はとても貴郎には叶ひません」「じやアお過まりな」「知りませんよ……お人の惡るい」「ハヽヽヽ」「貴郎東屋の方へお出なさいませんか、あちらの花が誠に奇麗ですよ」「とんとお前のやうだらう」「アラそんな……」「サア行かう」

二人は東屋に、飛石を拾ひながら庭下駄の音を運ばして、蘆澤は先に腰を掛くれば、お露も其傍に内輪の足を休めぬ。蘆澤は目鏡を指で一寸押し上げて、「成程能く咲いた」「アノ花の上に露を置いた鹽梅は何とも云はれませんねへ」「お前は花と露とどッちが美くしいと思ふ」「それは何うしたッて花の方が奇麗ですワ」「私ア露の方がいくら美くしいか知れないと思ふ、何んな花だッて露に及ぶ

ほどのものはありやしない、況してそれを名にして居る人は……」「エッ」
二人の目と目は見合ッたまゝ暫くはものも云はず。蘆澤は顏付で繼ぎ足す言葉の跡、お露は返事もなく俯向くを、「露の美くしいのはつくろはない美だから態々こしらへたやうな花の美くしさと較べてすッと上に、位してゐる、其さッぱりしたのと邪念が無いのと」と、見た所で如何にも可愛らしい樣子は、花は勿論世界の何んなものにも有りはしない……私はそれ程にいゝと思ッてるよ」熱心に顏を見詰めて云へば、お露は花の辯護もせず、靜かに小さな聲で「若し露が生きてるものであッたら何んなに喜ぶでしやう」「然しそれは分からない」「何故？」「こゝに生きゝる露があるけれども少しも嬉れしがつたやうじやないもの」
ソッとお露の頰を突けば、今更のやうにサッと紅くする顏、見られまいと橫に俯向け、盜むやうに蘆澤を見れば、折惡しく見合す目、ハッと一ト刷其上色を紅らめるを、蘆澤はつく〴〵見て何か又云はうとする時、足音間近く聞えて淸といふ赤ら顏の下女が、「旦那樣アノお客樣がお出で御座ります」

蘆澤は氣まづさうに、「誰だ」「山川樣でございます」「さうか仕方が無い、遇はう」お露を一寸見て客間の方へ立つて行く。跡にお露は暫くそこを動きもせず。襟に手を入れて、前のやうに俯向いたまゝ「今のお言葉は眞實か知らん……それともホンノ冗談半分におからかひなすツたのかも……男といふものは能くそんな事をして蔭で笑つて居る事があるもんだから……だが今日の御樣子はまさか……それとも私の弱身からさう見えるのかしらん……若しホントにあゝ云つて下だすつたのならそれこそ私は出來るだけの誠を……アヽそんな氣を出してはいけない……だけれども何うも……私もこゝへ來るまではこんな風な事は少しも思はなかつたけれども……だん／＼氣に掛けるやうに成つて……私は蘆澤さんを思ッて居るのかしらん……然し私の方で何んなに思つて居たつて先のお心が分らなければ……だけれども先程のお言葉……」

又も考へこむ折、濕めつたやうな風が鬢を吹き上げて、雨催ひの空合に日の影もなくなれば、お露は氣が付いて顏を上げ、「モウ／＼考へまい……お父樣の處

へ行ッてお茶でも點てゝ上げましやう」
立上がッて、後れ毛を掻き上げ、進まぬやうに以前の櫻の前に來かゝりしが、不圖客間の中よりお露といふ聲幾度となく聞ゆれば、思はず耳を引立つるに、紛れもなく自分の事、お露は胸を轟かして、二足三足立戻りしが、又氣をかへて、知れぬやうに次の座敷に行けば、客の聲が落ついた調子で、「さういふ譯か、君の義俠心は實に感心だが、世間では中々さうは思つて居ない、實は僕ア其風說を聞いて驚いて來たのだ……」「何う云ふ事を云つてゐる」「お露さんは戴春館でも有名のものであッたから、今度の事に付ては或る一方では餘程やかましい。君がお露さんをこゝへ引取ッたのは全く色に迷つたからだとして、それから種々の搆造說をこしらへて、實に思ひも寄らん事を云ひ布らしてゐる」「何とでも云はして置かうじやないか、衆口の諤々じやアないが僕は搆はない」「それは大きにいけない、君能く自分の身の上を考へて見玉へ。君は今賣出しの人間じやないか、だから今君に必要なのは社會の信用だらう。それを輕々しく看過のは餘程過まつてゐるだらうと思ふ。さうじやないか」「それは實にさうだ。

然し事實は早晩流言に打勝つだらうと思ふ「だが世間は眩まされやすいものだ。流言が勢力を得ると中々恐ろしいよ……それはさて置いて君はお露さんを細君にしやうなぞといふ下心は無いだらう」「ウー……まだ……さう云ふ事は思はない」「お露さんは實に申分のない婦人じやけれども戴春館に居た事は世間に知れ渡ッて居る、今君の位置で若しさういふ考を持ッて居るならば君の身に取ッて實に不得策だ。これが社會の潮流に關係しない人なら兎も角も、君だから其事に付いては大きに不賛成だ」。「君の忠告は誠に有難い……決して仇には聞かない」

お露は襖の外で溜息一トツ。靜かに引下がりしが、父親の方へも行かず。自分の部屋へ歸ッて、投げるやうに机の前に座わり、袖の中に顔を埋めたまゝ、暮れて行く日を全て知らざりし明くる日からは其部屋の中に、讀書の聲も聞えず。琴の絲の響もなし――お露は病氣となりぬ。

（其四）梨花一枝打込んだ露の命

東の丸窓の障子に、今宵十五夜の月一杯に照らしかけて、程近き松の木の影法師は、面白き墨繪の枝振を見せ、風の音訪れる度に、木の葉は騒ぎ立つれど、こゝに友づれの音もなし。今を山吹の咲き亂れたる下の水際に、昨日を啼はじめの蛙は、馴れぬ調子を遠慮の節をかしく、遙か西にあたりて、何處の色白の仕業か、風につれて聞ゆる絲の音は、途切れ〳〵に耳の邊を掠めて行く。晝は心にとまらぬもの、舞臺に上るやうになれば、夜はやう〳〵靜かなり。障子一枚内は、それにまして淋びしさうに、ランプは蓋を深くして、あるほどの光をかくし、押入に近く黄八丈の蒲團二枚重ねて、天鵞絨の襟つけたる更紗染の夜着の中に、高い括枕して、――やつれて、力無さゝうに、――お露は横になれり。枕元には、師宣の筆に元祿踊を畫いたる六枚折の屏風を建廻はし、黒塗の手箱の上に、歌集二三册を載せ、脇に二三枚の新聞紙ありしが、取り散らしたる、事もなくて、丁寧に重ねてあり病氣は次第に長びきて、暫らく櫛の齒を忘れたれば、髮は淺猿しく

亂れ、元結ゆるんでがつくり落ちかゝる島田も、形は分らぬ程につぶれ、鬢はをかしく寢癖つきて、後れ毛は野分の跡のやうに、たぼは何處にあるやら知れず。瞼の肉落ちて、眼の底いつとなく濁り、鼻の分けて高く見ゆるは、やつれたるの鏡なるべし。蒲團の上からさへもあらはに衰へた姿、生の母親の命短かくて、このやうな處に居合はさぬを幸と思ふほどの心、割つて見たらば、涙の泉は何うして堰く事がならうぞ。

隔ての襖あけて入り來る蘆澤、見るよりお露は直に起直らうとするを、無理にとめて、「さうしてお出よ。何うだい今日はちつとは氣分はいゝかへ、昨日よりは顏色もいゝやうだぜ」

氣遣はしさうに慰めた言葉、其聲に力はなかりし。これも平常よりは面やつれして、色は蒼白く、いつもは知れぬ程の頰骨も、少し際高にあらはれ元氣のない眼附で、つく〴〵お露を見れば「有難う存じます、どうも同じやうでいけません。」「何でも氣を落してはいけない。そんなに大した病氣でもないのに、自分で勵まして癒らない事はないよ。」

お露はデッと蘆澤を見詰めて何とも云はず。眼はいつか涙ぐんで、枕の上に落ちかゝる雫を、見られぬやうに顏をそむけて、細ッた指先でソッと拭く。蘆澤は重ねて「大體の病氣は、心さへ慥かに持ッて居れば直によくなッて仕舞ふ。だから一生懸命になッて早く愈して皆揃ッて芝居へでもゆかうじやないか」

「さう致したいものですが‥‥」

睫毛を傳つて又一ト雫。顏は影になつて、蘆澤に見えねば、それとも知ず、「お親父さんも心配して、先程もいろ〳〵醫者に賴んでたッけ。私もお前が寐てゐれば兎角氣にかゝッて何をしても面白くない。早く皆に喜ばせるやうにしなくッてはいけないぜ。」「貴郎はそんなにお氣にかけて下ださるの。」少し力を入れた言葉、意味ありさうに云へば、「氣にかけなくッて‥‥こゝを離れても始終案じてばつかりゐる。」「アヽ有難い。私は死んでも結構です。」「ナニ‥‥死ぬなんて忌はしい事を‥‥」「貴郎。」「何だい。」「私は貴郎に一生のお願が御座ります」「大そう改たまッて、‥‥何うい ふ事だい。」

お露はうつむけに寐返りして、うるさく垂れかゝる後れ毛を耳の上にかき上

げ、其手を枕の上に置いて、「こんなに御厄介に成ッた上で、又此樣な事を申しては濟みませんけれども、御深切な貴郎の事ですから、押してお願ひ申します。私はかうやッてわづらつて居りましても、只氣掛なのは親父の事、……若し私が萬一の事がありましたら、外にたよりの無い親父ですから何うぞ――どうぞ貴郎力に成ッてやッて下さいまし」

思ひ込んだやうに、力を籠めて云へば、蘆澤は少し驚いて、不思議さうに顏を眺めしが、態と高笑して、「アハヽヽ、何を云ふかと思ッたら、詰らない事を……お前は自分の病氣を餘り大そうに思ひ過ごしてゐるからいけない。そんな心配をするから身體に障るんだよ」。「ですが何うぞ此事を……」「それは云ふまでもない。だがそんな事より癒す方を精出さなければいけないよ」。「私はとても癒りません」。「サアそれがわるい。何も思ひ定める程の病氣じやアないじやないか。ツマリ自分で自分を殺すやうなもんだ。」「私は癒らない方が望みです」。「エッ」。堪へかねたか、お露は枕の上に顏をかくして、ワッと聲を上げて泣伏せば、蘆澤は呆れ顏。「そりや何う云ふ譯なんだい。何も構ふ事は無いか

ら云ッてお聞せな。エ。何うしたの。」
お露は涙を添へた瞼を見せて、「これは決して申しますまいと思て居ましたが、私はモウとても恢復ませんから申して仕舞ますが、私の病氣の本は貴郎です。」
蘆澤は思はずギックリ又お露を見まもりしが、心は顏に出てゝ額に一叢の雲行き、口は結んだなりに何とも云ひ出さず。お露は鼻をすゝりながら、「貴郎、先達庭の東屋で仰有ッた事をお忘れなさいますまい。アノ時私は、貴郎が御冗談に仰有ッたのかしらん、それとも本氣で仰有ッたのか、若も本當であッたら何んなに嬉しからうと思ッて、獨りて考へて參りますと、お客間の方でしきりにお露といふ聲が聞えますから、誠に濟まない事でしたが、ソッと立聞を致しました、しますと山川樣が貴郎に向ッての御異見、承ッて居るほど一々御尤な事で、私見たやうなものと若しそんな事があつたら、それこそ貴郎のお名前に關ることゝ思ひましたら、それまでお慕ひ申した事も空恐ろしく成つて、――アヽ私の身の不運、戴春館へ行つたのも決してすき好んで行つた譯じやないけれども、……せめて兄が居たらこんな思もしないだらうに、親父は失敗ひ、兄は亡

くなる、私は何故こんな不幸な家に生れたらうと、部屋へ歸ッて獨で泣いて居りました。それからは貴郎は何だか御心配さうに、始終考へてばかりお出なさいますから、若しやその事でおふさぎなさるのでは無いかと思へば、私の心苦しさと申すものは誠にお話し致すことも出來ません程です。」

言葉の征矢は、究竟の矢坪に、矢先白く射通したり。戀と名とは、此頃蘆澤の胸の中に闇仕合して、いづれをいづれ、麻の糸のもつれ出して、何處と緒を見付ることもならず。よしあしの繁りあふ世や、分て行く小舟の障がちに、いつか心よき流に身を置く事か、此頃の顔のやつれ、胸の開けぬも、たゞこれの苦み。お露の病は、我への戀にやつれた姿と、知つて我慢がなるべきか、思ふ方に思はれては、隔の垣の結ひ目もいつか、一念に破られ、手を拱いて俯向く中に、決斷の鞘を拂ひかけたを、お露は知らねば吐息をついて又、「貴郎のお爲にならないと知りました上は、私は何んな切ない思をしても諦めやうと心を決めましたけれども始終そればつかりが胸につかへて、クヨ〳〵思ひつめてとう〳〵こんな病氣になりましたので、私は自分の身の上が惡いんだと諦めて、とうから覺悟

をきめてゐます。今では一日も早く死……死ぬ方を願つて居ります。」
冬の夜の霜寒く、凍つくやうな蛬の聲、ものあはれにかこたれて、蘆澤の心も共音の悲しさに、胸はわけも無く亂れ、戀は一身を支配して、お露の外は何もかも忘れ果て、「アヽそれほど迄に思つて呉れたのか。……お露さん改めてお前に賴むが、何うか女房に成つて呉れないか」「それは身に餘ッて嬉しうは御座いますが……私は……い……いやです。」
言葉終らぬ內、目は袖に隱されて、跡はしやくり上る聲ばかり。蘆澤は輕く、「何故？」「貴郎は山川さんのお言葉を何とお聞きなさいました。」「世間の事か……ナーニそれは事情を知らないものは兎や角ういふだらうが、浮世は名聞ばかりではない。お前は私の妻として何處も不足の處は無いじやないか、實力で當ッて行くのに、少し位の妨害に勝てない事はあるものか。」「イヽエ貴郎の出世のお邪魔になるやうな事は、私ア何うあッても出來ません。」
蘆澤は言葉に念を入れて、「お前は何うしても承知は出來ないかへ。」
お露は又目をうるまして、心が許さぬか、口重さうに、「ハイ……何うしましても

……」
聞きすました蘆澤態とあら〳〵しく「ムヽこんなに云つても不承知なのか。じやア先程云ッたのは嘘で、實は私が厭なのだね。さういふ事ならいゝ。」すねて見せるも一ッの手、ズンと立上らうとすれば、お露はせき込んで體を前にのり出し、「貴郎そりやア餘りです。私は何が見得で嘘や僞を申しましやう。云はれても又手強く、「口でばかりは何とでも云へる。厭なら厭でいゝ。」立かける膝を、あはてゝ押へるお露。病氣となる程の心の中、諦めても諦められぬが習ひ、まして其人に同じ心を云はれて、厭といふ切なさつらさ、それを堪へおほしたものゝ、流石は女子、胸はすゑても、覺悟はしても、戀の力には張よわく、「それはモウ私のやうな足はない、――人並の事も出來ないものでも宜しくば、……」「眞實にさうだね、」「ハイ。私の身に取ッては有難いとも何とも申さうやうな言葉はありません。……ですが……」「ナニそこに(ですが)がいるものか。モウ外の事は云ッこなし――サア涙を拭いて笑ひ顏をお見せな。」「でも何うも……」「未だそんな事を……私を厭とお思でなければモウ云ふのはお止し。」

「それは貴郎御無理です。」「これからはモット無理を云ふよ。」笑ひながら云へば、「これからとは何うこれからです。」「お前が蘆澤と名字をかへてからさ。」さうなりましたらさぞ……」

心の素肌あらはれて、眞底うれしさうな顔色、久しく見えなんだ口元の愛嬌は、蘆澤の目に何れ程の價値を見せしか。そんなに身體を出して冷えてはいけない……夜の空氣はよくないから」

云ひながら肩へ手をかけて見て、「大そう痩せたねへ」

これまでの苦勞察したと云はぬばかりの樣子に、お露は何となく嬉しく、少し起直ッて着物を掻合はせる時胸のほとりにチラリと見えた黑いもの、蘆澤は目早く見付けて「何だいそれは」

手を出して取らうとすれば、押隱くして、「何でもありません。」「隱さなくッてもいゝじやないか。」「貴君がお笑ひなさらなければお見せ申します。」「ナニ笑ふものか。サアお見せ。」

手に取つて見れば、蘆澤の半身の寫眞。優しい心根は、千句萬句より男の胸に

染みて言葉も出ず、お露はポッと顔を紅らめて、俯向いてゐるを、ヂッと眺めて、「アヽこんなにも……お露さんこれは決して忘れない」「貴郎のお言葉も決して仇には……」

見合はす眼の中に、心を籠めた働き振。春宵一刻、月は南の窓に今を春の最中、いつか濡れ心の花にあしたの露は、さぞかし美くしかるべし。

風流狂言記

(上)

日本人竹河隆三、親も無し、子も無し、定まる妻も無く、これといふ厄介も無し。浮世にたつた一人の男、此頃學生の梯子を登りつめて、直さま雲の上にさる省の高等官となりすまし、二三の屬官を目の下に、撿印の忙がしき身上なり。うつれば變る川の瀨哉、昨日までは度々の剃刀うるさくて、しやう事なしに延ばした髯も、今更役に立つて髯油に樣子を賣り、短艇競漕に逞ましき櫂を握つた手も、護謨製新形の花車な洋杖を持つやうになり、六尺肥滿の大兵にフロックコートの着工合立派に、朧塗の手車を走らする時は、葉卷の煙高帽子をかすめて製造所の煙筒の如し。神田駿河臺に手廣の邸を構へて、門内は小松の綠を漲らし、二間長四疊の玄關、敷臺の前の小砂利は車の齒を嚙合ふこと日に幾度か知れず。家内は小間使一人、取次の書生一人、日に一度麁相する下女一人、喧

嘩好の車夫一人、主人公を合せて都合五人の暮し、これだけが竹河一家の事務を始末して、朝の奥の間静かに、宵の臺所賑なり。　夕暮の風雲の峯を崩して、八日の月松の梢に涼しく、庭の草木も打水の化粧をすまして葉末をチヤンと立直す頃、主人隆三風呂より上りて、白地の浴衣に着更へ、居間の縁先に捲手して、團扇つかひながら庭を眺めて居られしが、やがてランプの傍近く來て、煙草を相手に、新著のコスモポリタン(雜誌)を讀初めたり、隆三今年二十四歳色は黑けれど顏立醜からず。眉は長く濃く一の字を引き、目は丸くして少し釣れたり。口は大きけれど、脣厚からず。鼻準く、額廣く、笑ふ時頰に深き片笑靨入りて、白く細かき齒に愛くるしき處あり、長く延ばしたる髮は縮れて飽迄黑し。　隆三今は蚊を拂ふことも忘れ、暫く讀物に氣を取られて、垣近き蟲の音、鬢のほとりに騷ぐ風、うと〳〵覺えながら二三枚、心よく讀かけし時、隔の襖の開く音に首を上ぐれば、柱の蔭より顯はれ出たる此家の奏者大沼貞行君、面皰滿面を粧つて筋骨逞しき大丈夫、行丈短き薩摩ガスリを着て、天竺木綿の帶を十重二十重に卷付けたる好の扮裝、座敷へ這入る時腕まくりの袖を直し、まだ主人公に馴

完

染薄き爲か、恭く御辭義して、
「只今此方がお目に掛りたいと云ッてお出になりました。」
いひながら差出す面積の廣い名刺表に三號活字で堀井春雄と大きく讀まれたり。主人は一目見るより吹出し、
「こゝへ通して呉れ。」
程なく入來る名刺のぬし。プラチナ縁の鼻目鏡かけたる丸顔の男、主人を見てうなづくやうに目禮しながら、
「ヤ。大そう暑いじやないか。」
至極簡端な挨拶振、遠慮もなくどつかと座つて、直に羽織を脱ぐ、主人は笑ひながら、
「何だつて名刺なんぞ出して改まつた事をするのだ。そして又こけ威の大きな名刺じやないか。」
「ハヽヽヽナニ取次のものが新参で、僕の顔を知らないと見えて非常に丁寧に、御上使のお入のやうに取扱つたから、一寸容體ぶつて見たのさ。外に仔細

はなし。」
口輕く言切つて扇取出し、大手を振つて扇ぎ立てる、此人主人と同縣の生れにて、同じ經歴を過ごして來た當世男、これと云ふ主義は無けれど、浮世は面白く渡るべしと、始終心掛る人物なり。隆三は勢よく煙草の烟を吐出し、
「役所は隙だナア。兼ての豫想とは全く反對して居る。日數は淺いけれど、今日迄これと云ふ仕事はやらんではないか。」
「然し此儘では過ぎない。今に參考取調といふやうな事を言付かる。さうすると試驗前の復習よりは中々急がしいぞ。」
「そんな事でもないと腕を試すことが出來ない。」
「それほど腕が試したくば羅生門へ行くがいゝ。」
「ハヽヽ、先そんなものかナ……何うだ一昨日の改正案――は僕の意見は中々手酷かつたらう。」
「ムヽ餘程過激な攻撃だつた。然し餘り理論に過ぎて、あれではとても實地に行はれん。君は學校の討論會の氣組でやつてのけたのだらう。」

「イヽヤ隨分實着にやつた積だが…………まだ書生風が脱けないかナ。」

此摸樣の對話長く續いて、舞臺の廻るまでに、小作の小間使顯はれ、黑檀の丸卓あらはれ、それと共に大瓶の白葡萄酒、腹にたまらぬ肴二ッ三ッ出でゝ、臺付のコップ主客の唇にしきゝりなく飮物を運べば、客は先に紅くなり、目の中少しとろけしが、主人はなる口と見えて、顏の色少し艶を出したれど、黑光りの玉山崩れず、だが前よりは笑ふと多きばかり、隆三は膝を建直して、

「君に向つて云ふ事がある。」

「何事だ。」

一段聲を張上げて、眞直に居住居を直せば、主人は笑つて、

「そんな大きな聲をする程の大事件でもないが、僕は此頃大に感じた事がある。」

「謹聽!」

「外でもない、細々した家政の整理に僕自ら當るのが面倒で堪らんのだ。これが第一の不自由で、それから僕が先外へ出て百般の事務に當つて來る、そ

こで家へ歸つてからその勞働を慰め、氣力を勵まして吳れるものがない、ツマリ家内の快樂に乏しいと云ふのが第二の點で、第三には………」
耳を傾けて聞いて居た春雄こゝで口を差出して、
「跡はモウいゝ。言葉をかへて云へば妻君が欲いと云ふんだらう。」
「左樣だ。」
「君も近頃社會的の人物になつた。昔の竹河隆三でない。君が女房を探がすやうになるとは實に有爲轉變の世の中だ。」
「さう云はれゝば大きにさうだ。寄宿舍の中堂で獨身論を主張した時分の考へとは全て變つた。然しこれは僕が望んだ譯でない、社會が僕を餘義なくしたのだ。」
「質屋の番頭が品物を改めはしまいし、そんなにひねくッて見なくッてもいいじやないか、ハヽヽヽ」
といひながらコップを取上げる、主人は眞面目になり、目を下に注いで、
「イヤ冗談ではない。何うも妻がないと浮世が兎角圓滑に行かないよ。そ

れに困るのは云ふとがそれの價値だけ篤實に聞えないのだ。假令ばある議論を提出しても、一般の若氣に速つていふやうに思はれるのが大に不服だ。」

「そこもあり蓋もある、さういふ事ならやるべし〳〵。僕も共々盡力しやう。」

「サアそこで適當の者が無いには實に閉口だ。」

「して見ると君も隨分探したと見えるナ、油斷のならない。」

「イヤさうではないが、少しは當つて見た。」

「小當りにか。」

「そんな浮いた沙汰ではない。極く眞面目にさ。」

「など〻容體ぶつて言ふ内が殊勝だ。ナーニ其人と爲りを知るには情遊も必要だ。」

「それも企て〻見やうと思ふ。そんな知識も得て置くはうがい〻。」

客の言葉は稍々輕く、主人の言葉は稍々重く、一張一弛、井戸替の綱のやうな話の内に、コップの水おひ〳〵にかへほして、替目の瓶も半分ほどになれば、客は全く

醉ひ、主人は少し醉ひ、客は腕を捲り上げ、主人は胸を廣げて手荒く團扇を使ふ。雙方共に胡座かいて、容體は今消えた螢と共に行方しれず。四角なものは椀の中の豆腐ばかり、それもやがて著に崩れては、月も丸く窓も丸く、客の頭も丸く、主人の肩も丸し、此處さすがに書生の名殘ありて、親指の股にペン蛸のあらはれ時なり、客はハンケチを取出して口を曲げながら顏の汗を拭き、鼻目鏡をはづして臺の上に置いて、

「そこでどういふ妻君がいゝのだ。」

「さうだナ……まづ梅山夫人のやうなのが欲しい。」

「年が四十一で額に大佛のやうな黑子のあるのをか。」

「皮肉な男だ、そんな處に目をつけなくともいゝ。」

「では何ういふ處へ目をつけのるだ。脊中へつければ鰈の申子頭へつければ蜻蛉の親類。」

「アヽ度しがたい、止みなん〳〵。」

「やみなん〳〵夕立の空跡よりはるゝ蚤の疵、とこまかせのよいとこさ。」

「ハヽヽヽ手がつけられない。」
「梅山といへば此土曜日に新築の座敷開をやるッて案内狀をよこした。君の處へも來たらう。」
「ムヽ來た。例の華美好の事だから賑な事をやるだらう。」
「その日には未來の妻君が澤山來るぞ。何うだその內で選んで見ては――お望なら審査の勞を取らう。」
「君の審査は眞平だ。此毎の日曜に、三河伯の夜會での失策は未だに忘れられない。」
「アレハ陶器の審査僕の長所ではない。人類の鑑定なら恐らく何處に行つたッて引を取らない積だ。」
「何うだか當になッつたものでない。」
「イヤ決してさうでない。今度は一ッ手際を見せやう。」
「モウ澤山だ。此上は何んな目に逢うか知れない。」
「さう信用が薄くなつては仕樣がない。堀井春雄君の名譽も地に落ちた。」

「地に落たッて犬も喰はない。」
「それじやア僕の名譽は夫婦喧嘩と御親題だ。」
「ハヽヽ、ヽ。」
此時片隅にかしこまつて居た小間使の兼、扇團を額に當てたまゝ居眠をするを、客は見て煙管で指さしながら、
「見たまへ兼が始めた。おも梶とり梶、どつこい〳〵兩國も過ぎたナ、それ當ります。」
言葉終らぬ內、兼の體は前にこけかゝれば、兩人揃つて、
「アハヽヽヽ」
聲に驚いたか、兼は大きな目をパッチリ明いて、キョロ〳〵兩人を眺める。堀井は又笑直して、
「イヤ兼ばかりでない、僕も眠くなつた。ドレ行かうナ。」
立つて帯を締め直す。此時月は南の空に高く。遠き隣の軒より、砂糖水にあやなされたる鈴虫の聲微かに響く。風は若竹の葉を洩れて床の間の掛物に

そよぎ、耳をすませば、四面しんとして去る程に小供の聲もなし、輕く辭義して堀井は歸れば、跡片附に忙がしき小間使を殘して、主人は座敷を捨てゝ庭先に出で、月を上に、影法師は一處に止まらず。庭下駄は飛石を離れて、裏手の植込に近く、こゝは若葉に遮きられて少しほの暗き小天地月にめだつは主人の浴衣ばかり、隆三はそこに足をとゞめて、チット月を眺めしが、其顏次第に打向いて、團扇を胸に――沈む心の內は何？暫くして、

「アヽ女房？」

思はず聲を出せば、足下の蟲の音とまりて、首筋に抱きつく蚊一ッあり。

（中）

下谷西黒門町に黒塀高く角地面を折廻はして、いかめしき門構の邸あり。玄關への大道直うして砥の如く勝手への小路曲がつて鋏に似たり。家は總檜普請、四階の家の棟に、風見の烏ニコライと淺草の塔に背くらべして立つ。近き頃まで纒半天の男二十人ほど日毎に入込んで、鐵槌の音鉋の響一日も絶間はなかりしが、見る内に此家出來上りて今日十五日座敷開の披露あり、主人梅山貞一とて紳士仲間に顔を知られたる男。富沃の鑛山三ッの所得を肥ッた手の内に握り、これだけの收入で、浮世の大道に馬車を走らして人も怪まず。新會社の創立委員に名前だけを貸せば、天下安心して株主直に集るほどの人物、アヽ金は權力なりと、程近き下宿屋の二階に中國訛の書生の話なり。午後三時過より、來客渡鳥の塒のごとくばら〳〵と集りて、門内は目瞬く内に車の立場となり、玄關にお辭義の數しげく、奥の間は笑聲の波を打寄せ、遙に遠き臺所に陶器の壞れる音二三度あり。日は夕暮に程近き頃、竹河隆三、堀井春雄、雨

人打連れて、手車二輛、勢よく走らせ、土砂を蹴立つて門内に乘込んだり。

「お出遊ばせ。」

丁寧に頭を下げし仲働の女に案内されて、堀井を先に竹河と三人、足並不揃に木臭き長廊下を通る時こなたを指して來る人あり。年は四十ばかり、丈は中丈にして、肥りつきたる體に薩摩上布を着流し、其上に黒絽の羽織を着て腹を突出してのつし〱と近づきしが、兩人を見るより少し急足になり、丸く下膨の顔を又丸くして、

「ヤお揃で……能うこそ。サ、何うぞこちらへ。」

これが今日の主人なり。春雄はスッと前に進んで、

「大きに遲刻しました。少々役所の方で手間取つたもんですから、」

「アー左樣で……今一足お早いと、貴郎のお好な河東をお聞に入れましたッけ。」

「それは惜い事を致しました。道理で虫が知らせたと見えて耳の穴がむづむづしました。」

「きつい合鏡ですね。……鏡と云へば竹河さん先日は有難う御座りました、」

「イエつまらんものを……お禮でいたみ入ます。」

春雄は口を動かしかけしが、此時早く拍手の聲耳元に押寄せて、忽ち三十疊敷ばかりの廣間に出たり。電氣燈ぱつと夜を隱して、御召の裾長く、島田の鬢すいたる美形二十人、袖をつらねて今手踊を始めた處、地方の聲うつくしく、囃の皷面白し。來客は、總勢五六十人、髯黑々といかめしきお方、金縁の眼鏡かけた若紳士、ブラッシで髮をいぢめた公達、腦天に艶布巾かけた老人、束髮の姫樣、文金の孃樣、白の丸髷、黑の丸髷、洋裝和粧とりまぜて、綺羅々々しき明治の風俗こゝに集めて洩らす處なし。盃は其間を廻燈籠或は巴の字或は網の目、蜘手かくなわ十文字、八方四面にめぐり〳〵て、止る處何處か知れず。主人は設の席に兩人をつかして、又座敷の外に立出たり。

「竹河、右から三番目のは中々巧者にこなすじやないか。」

小聲に囁く春雄、隆三は笑ひかけて、

「相かはらず其方には鋭敏だナ。」

「イヤ藝を譽めたのだ。單に美術心ばかりのものを捕へて……君も中々酷評家だナ。」

いへど答へぬ隆三、不思議と振返りて其顏を見れば、彼はさる方をヂッと見詰めて身動もせず。春雄も同じく其方に目を注げば、東の窓を少し離れて、行儀よく座りたる美しき人あり。芳紀は十七八、今が春の盛なり、色は底白に白く、鼻は彫刻師に見せてこれほどの作はなしと云ふべし。第一我慢がならぬは愛くるしき重瞼、それの一轉どれだけの命を取るか知れず。受口の愛嬌は母親の讓物か、父親の筐か此脣一ツて城も國も蜻蛉返りすべし。生際の雁行は横禿の伏勢なければ連を亂さず。三日月形の眉は蜒蚰の雲なければ鮮かに拜まれたり。髮は手際よく夜會結びにして、艶々しき黑髮なか／＼厭にあらず。三ツ紋黑絽の衣裝に、裾摸樣は觀世水を淡粧とし、練の下重に、同じ白襟、そのうちより水際立ちたる首筋水仙の根の如し、春雄はつく／＼と樣子を見て、又隆三の方を見れば、未だに目を動かさず。

「オイ竹河、人の事は云はれないぜ。君は何處を見てゐる。」

いひながらソッと肩を打てば、急がしく振向く隆三、
「エ……何だ。」
「とぼけるナ。外の人が踊の方に注目して居るからいゝやうなもの、チッと嗜むがいゝぜ。」
「何を…………」
「ごまかしてもいけん。僕は先刻から觀察して居た。」
「悟られたのか。それでは仕方がない。何うだ中々美人だらう。」
「ムー先マアさうだナ。」
「けしからん。君は兎角點が辛い。」
「てんが辛けりやア鼬が甘いだらう。」
「ハヽヽ相變らず詰らないことをいふ。」
「此方が罪がなくつて餘程いゝ。」
踊こゝに終を告げて、拍手の聲又再び沸出たり。來客の內、新らしく兩人を見付て、矢繼早の聲五六人の口より續けさまに、

「ヤ竹河さん。」

「堀井さん、其後は暫く…………」

「堀井さん一ツ獻上」

「竹河さん大分遲いお出ですナ。面白い道草でもありましたか。」

「竹河何うだ一杯、此大杯で……」

兩人は一々挨拶して、獻酬首尾よく盃に波立つ時、主人兩人の前に來て、例の丸き膝を春雄に押向け、

「堀井さんお盃を戴きましやう。」

「只今差上やうと思つて居た處、」猪口を差出して「時に今夜はいろ〳〵御趣向がありさうですな。」

「ありますとも、これからが山です……竹河さん一向上がらんやうですね。」

「イエ、いつもの通り顏に出ないばかり、腹の中に薦冠で滿たされて居ます。」

「腹ばかりでなく爪先にまで滿たされるやうに願ひます。」

「梅山さん、あちらの窓の右の方に座つて居る束髮の貴婦人は何といふ方で

す。」
何氣なさゝうに問掛る隆三、主人は向を見、又竹河を見て笑を含み、
「あれですか。あれは、は、ゝゝゝ」
言葉を切つて又笑ふ。春雄は口を差出して、
「梅山さん。竹河が先刻から餘程熱心で、踊は餘所にして向ばかり見詰めて居るといふ次第です。」
隆三は春雄を一寸睨んで餘計な事をといふやうな顏付、梅山は見て笑ひながら、
「あの方は西京の室小路男爵の令孃で、ツイ此間此地へお出になつたのです。一昨日でしたか乳母が來ての話に、昨今結婚の口を求めて居られるさうです。」
「ハヽハ成程。」
一寸膝を進めた隆三、春雄は脇目で見ながら、ソッと隆三の背中を突く、主人は得意の快活の音聲で、

「竹河さん、お望なら紹介の勞を取りませうか。」

「何うぞ……　お知己になるのは私の光榮で。」

「暫くお待なさい。」

言捨て座を立つ主人、直に美人の傍に近より、耳に口をつけて何事か囁けば、美人は打向いて莞爾、又隆三を見て笑ふ時、人形笑靨今を春邊の頰に寄せて、花の上に露もこぼれるばかり、隆三は慌てゝ打向き、傍の煙草を急に吹かして、烟の中に顏を隱したり。主人は遠くから手招して、

「竹河さん。一寸何卒こちらへ。」

隆三の心臟今更のやうに波を寄せて、暫く立兼るを春雄は又ソット後を突いて聲を忍ばし、

「早く行かないか。」

いはれては尚進まず、これではならず、思切つて立上り、心に氣遣ひながら、主人の傍、美人には離れて座り、主人に向つて、

「何てすか。」

「態々お呼立申して恐入ますが、今こゝで貴郎の御話が出た處が、お知己に成りたいと申される方があるので……」

と云ひながら美人に向ひ、

「花子さん、此方が今お話申した竹河隆三君で、當時賣出しの若紳士です。竹河さん、この方は室小路花子さんと仰有る鴨川本場の美人で、まだ東京へ來てから一向不案内であるからお引廻を願ひたいとの事です。」

兩人は一樣に辭儀して、竹河は繼足して頭を二度下げたり。「御別懇に、」「お心易う、」釣鐘のやうな聲、風鈴のやうな聲、互に入交りて後は、少しゝらけし風情なり。座敷は最早亂軍となつて、三々五々、鐵輪となり、丼げたとなり、さては百萬遍の圓座を作りて、竹河の居廻りに人氣少く、主人もいつの間にかそこをはづして、兩人差向の疊二疊、こゝぞと隆三の腕は鳴れども、心は旗色におびえて氣合を計るばかり。

「いつ頃東京へお出になりました。」

氣を置くやうな調子で問へば

「ツイ一週間ばかり以前に來りました。」
「モウ大抵御見物になりましたか。」
「イエ、まだ一向存じません。まだ折々方角をも間違へます位で………」
「チト御案内を致しましやうか。」
「何うぞお願申します。」
「當地におちかづきの方は餘程お出ですか。」
「今度始めて來りましたので、親戚の者の外は全でお馴染がありませんですから、何うぞお隙の節はお話にお出下さいまし。」
此時顏を眞紅に染上げた三十恰好の髯男、隆三の傍へよろけながら來て、
「竹河君でなくつては納まらん事がある、一寸來たまへ。サア、」
「僕は一寸用があるから暫く待ちたまへ。直に跡から行くから、」
「いけん〳〵。君の直と鰻屋の只今はいくら待つても埒が明かん。急用だよ、急用々々、珍事急用、早く來ないと消えてなくなる、評判の玉やといふ用事だ。コレ云ふ事を聞けといふに………」

兩手でかゝへて、無理に抱上ぐれば、

「仕方がない、行くよ。放せ。」

「イヤいつかな放さない、放生會の時までは放すことはならん。」

無念ながら、竹河は花子に目禮して抱かれて行く。これからが話の目算無二無三に崩され、後髮我心に引かれて未練帶際に取付き、足袋の裏に執着の膏藥疊に吸ひつきたき思なり。

「サア連れて來た〳〵。」

どつかと下ろされた處は、五六人一座の眞中、春雄の笑顏も其中に並びたり。今隆三の姿を見るより。どつと一齊になぶりたてゝ、和事師！あやかりもの！てんでに脣の反をかへし、花子を名として降來る猪口、敵は多勢味方は一人、初めは觴の一杯も、末は身の内に珉江の波を打つて、命から〳〵此座を切拔け、足元はよろ〳〵、醉眼とろ〳〵と以前の席を見れば、花子は最早居らず、兎角醉心の苦しく、座敷を出でゝ廊下を千鳥に辿り、南の庭を正面に見たる緣先に來れば、樹の間の瀧の音細かに岩を音訪れて小石の上を流るゝ水月に漣をうつ

し、螢二ッ今葦の葉影より流れて水際を慕ひ行く、夏の夜は凉しさを賞美の筆頭として、松の梢を見れば風松にあり、蘭の葉末を見れば風蘭にあり、これを襟元にそよがして、知らず〳〵暫く肱枕の轉寐せしに、夢か、夢にあらず。耳元に微妙の聲ありて、

「もし貴郎、お風邪を召すといけません。」

微かに目を開けば、傍に花子の姿滿面の美を目に集めて、チッと此方を見詰めながら、素直に美しき手を隆三の肩に置いて、靜に搖起して居たり。隆三はゾッとしてはね起き、

「オッこれは……何うも恐入ります。……醉つて餘り苦しいもんですから、ツイ……」

「まだいけませんか。水でも持て來て上げましょうか。」

「有難う存じます。イエ、モウ何ともありません。……貴嬢わざ〳〵お出下すつたのですか。」

「イヱナニ、貴郎がこちらの方へ入らしつたきりお歸がありませんから、何う

かなさりはしないかと思ひまして……實は氣掛で……」

隆三はとゞめを刺されて、何とも答する程の價値ある言葉も知らず。やうやう、

「それは何うも……」

「あちらへお出になりませんか。」

「參りましやう。」

身輕さうに立上りしが、足が座わらぬか、ふら〳〵とよろめくを、

「オヤお危なう。」

手早く抱止める時、折か、拍子か、ヒタと重り合ふ手。……理學でも分からぬ艶電氣……隆三は心の置所を知らず。やう〳〵座敷に着けば、來客は皆歸りし跡、殘るは堀井ばかり、今主人と差向ひて、何事か小聲に囁き居たり。梅山は兩人を見るより、

「や。お出なさい。さうした所は一寸道行と云ふ姿がありますぜ。」

春雄もすかさず、

「僕が一トくさり獨吟をやりましやうか。」

「イや貴郎には本釣鐘の聲色の方がはまりましやう。」

「ハヽヽ。竹河さん今茶を點てやうと思つた所です、一服如何です。」

「結構、戴きませう。」

間もなく茶筅忩がしく、颯と茶碗の中に時雨して、醉後の一服快よく腸を洗ふ折から、梅山は布巾を絞りながら、

「時に皆さん、明日は日曜ではあり、川開ですから、見物かた〴〵納涼は如何です。堀井さんは無論御同意下さるだらうし、花子さんは珍らしいから是非御覧なされなければならん。竹河さん何うです。」

「尤も望む處です。喜んで御同伴を願ひます。」

「花子さんもお出なさるでしやう。」

「御邪魔にさへなりませんければ…………」

「それで話は極つた。」

「一ツ〆めましやうか。」

「堀井さんも中々通つたもんですね。」

話す間程なく、夏の夜の月より更けそめ、迎來り花子は歸れば、其外に春はなし。堀井を誘立てゝ續て玄關に立出る隆三、向を見れば、今門を驅出る車上の花子表の瓦斯燈パッと姿を照らして横顔に鬢のほつれを見せしが、後に隆三の聲に。振返りて見合はす顏、笑靨は美人の極印と、隆三此時に悟りぬ。

月は西の叢雲の中に眠りて、一しきり犬の聲の跡は、萬象死灰の如し。竹河家の周圍は殊更に靜まりかへりて、町の角の立場に客待の提燈も見えず。萬世橋のあたりに、夜賣商人の呼聲川水に響く外は、夜廻の拍木時々消えわたるばかり、それの間は閃めく星の影靜かに夜を守りて、涼しき風張合なさゝうに吹く。されど此時、一人うつゝの夢を見る人あり、隆三の部屋はランプ宵のまゝに燃えて、蚊帳の中に團扇の手未だ休まらず、先程梅山の家を出てより、車の上、部屋の中、さては枕元まで、右に左に、花子の姿は拂へども去らず。身は横に、目は塞ぎながら、あり〳〵面影に取付かれ、耳の底に思の聲ありて我から求めた夜伽、次第に時計の鳴をも知らず。或時は雲霧のやうに目前にあらはるゝ、梅山の祝宴、春雄も貞一も其内にさまよひしが、それは忽ち花子にけをされて、窓近く倚掛りし時より、歸際の笑顔まで一々洩らさず。――念佛講の六字――同じやうに繰返して、いつを限と知らざりしが、果は我と我を笑つて、

「アヽモウ思ふまい。何の事だ、つまらない、一人で思つた所が何になるものか。一寸遇つたばかりで……少しばかり話をしたゞけで……アヽ我ながら心弱い。結果のない空想は身を刻む斧だ。」

煩惱拂ひのけて、心眼しつかと塞ぎしが、寐られやうか、跡より沸出る清水、いつか苔の下より、

「然しアノ仕打……あれを消極的に見做すことが出來やうか、だが……初對面のものにそんな事が……けれども情と云ふものは不可思議なものだから……何にしても早く親しくなりたいものだが……明日——明日は全力を盡して一ツ情遊の眞味を味つて見やうか。そして近しく成つて、心が一致したら梅山に媒介を頼んで、結婚、……さうすれば己の此頃の望も滿たされる。然し男爵が承知をしやうか。己の才器、性質、位置、職分、こんなものは皆調べられるだらう。花子に對して輕重は無いか、ヤ、少し當らんかも知れん。よし／＼、其内に一ツ名を出すことをやつてのけやう……そこで首尾よく貰つたら、其當座は何んな感覺だらう。……ハ子ームーン。西洋流に旅行が

いゝな……。アヽ其日は近くであらうか。又は長い間か。」
想ひつゞけてこゝまで來て、心の駒は又引返し、
「そんな先の事よりも明日の事、アヽ明日は……。」
まだ見ぬ明日は心の向くまゝに寫出されて、二人は首尾よく思ふ同士となりしが、幻燈又消えて、
「そこで夫としての己は何うしたら一番愉快に行くだらう。」
此研究は闇の夜の鐵砲ほどに終りてさて、立歸る波のよるの事、祝宴となり、情遊となり、川開となり、花子の姿ばかりとなり、果はごた／＼になる時、夜の神に取つて押へられ、思の夢見に乘るやゆらり白川夜船！
不圖目を覺せば、東の障子に朝日目のくらむほどさして、朝顏賣は默つて歸る頃なり。枕元に置かれし二三の新聞紙平常はこれを讀流して、三服の煙草を床の中の樂とせしが、今日はこれに目もくれず、夜具はねのけて飛起き、慌たゞしく顏を洗へば、嗽茶碗口につけぬ前に、中の水半分はこぼしたり。これは何事！あきれて立ち、小間使に、

「飯を早く、」
叱るやうにいひつけて、支度部屋に駈込み、直に鏡の前、これは事かはりて長く手間を取る、髪に櫛の齒退屈する程あてゝ、二度頭を分け直し、黒綾のモウニング、白リンネルのチョッキ、いづれも新調の方を鏡に相談して身に纏ひ。先月叔父が巴里より送りしダイヤモンドのピン、これ幸と華美に插して、扮裝見事に終り、形ばかりの朝飯、直に箸を投げて時計を見る時、例のまめ男堀井春雄早くこゝに音訪れたり。

「ヤ、支度は早いな。今日は君に一大吉報を齎らして來た。」

「何んだ。いきなり、」

「今梅山の家へ寄つて、花子さんの事に付て種々な事を聞いて來た。」

「君も中々思遣りの深い男だ。聞いて呉れたか。」

「おもひやりが深いか、輕い薙刀が淺いか知らないが、君の爲と思て聞いた。」

「そこで話の模樣は……」

「花子さんは十分な教育を受けて、學術の方は繪に書いた痘痕面ではないが

點の打處も無い。そこで外の事は何うかといふに、女の事一ト通といふやうならパッとしたのでは無くつて、婦人の修むべきものは極つまらん者まで皆心得て居る。それから最一ツこゝに大聲疾呼特筆大書していゝ事がある。」

「極を云ふナ。聞いて見るとたわいも無いとだらう。」

「イヽヤさうでない、先聞くがいゝ。花子さんは早く母親に別れて、男爵は又放達の性質であつたから、家内の事務は大小となく花子が處置して、十五の年から十八の今日まで、家政學は實驗で天晴奥義を極めて居る。それから花子さんの性質で、少し世智賢い處があるけれど、決して跳返りではない、隨分温順な方だ。さうかと云ッて又内氣でもない、相應に快活で笑ふとが好な替りに泣く事が大嫌だ。」

「オイ、人を馬鹿にするな。」

「マア聞きたまへ。ソコで僕アいつか君が妻君の事に付いて話したのを思合はせて。これは隨分望ましい良縁だらうと思つて、其事を一寸梅山に話

して見た。」
「梅山は何と云つた。」
せはしなく聞けば、春雄は從容いて、
「それは實に似合はしい縁組だ。竹河さんが望むなら充分盡力をしやうと云つた。君何うだその氣はあるかないか。」
竹河の胸今更云ふも管なり。自らもそれと明けてはいはず、
「それは何れ話す折がある。梅山も待つてるだらう、行かうじやないか。」
「イヤニ急ぐナ。まだ時間は早い、」
「でも善は急げだ。」
「椀は跡からか。」
「そんな事を云つてる時ではない。今日の時間は僕には餘程貴重だ。」
「せいては事を仕損ずる。マア僕に任せたまへ。」
ゆう〳〵煙草を燻らす春雄、隆三は堪らず、
「僕は先へ行くぞ。」

立上れば春雉ゝ手で押へるまねして

「マア待ちたまへ、三十日には勘定をするから待つて呉れ。」

其時襖颯と開いて、半分體を入れたる大沼貞行君昔ながらの面皰付の顔を差出し、

「梅山さんがお出になりました。」

續いて入來る梅山貞一、跡に從ふは誰？今隆三をせきこませし花子なり、今日は微塵京風を離れて、髮は江戸前の島田に取上げ、着物はお召の棒縞、帶は本國織身一ぱい華美に仕出して、觸らば溢れるほどの愛敬、世間に魂の融通物あらば、かゝる人物にいれていつまでもとめて置たし、堀井は兩人の挨拶終るを俟つて、

「竹河。これだから待てと云つたのだ。」

「然し君は只待てといふから譯が分らんだ。」

「だが今宵五ッの鐘を相圖にと云ふ程の大業の事でもないから、只待てと云つたのだ。」

梅山は兩人を見て、例の布袋顔を差出し、

「飛んだ鐺咎めですア。こゝは私が眞中へ這入る役だが、それは私より此方のはうが……」

花子の方を指さして云へば、春雄は聲の下より、

「それはモウ慥かな腕ですもの。」

「何う致しまして……正味が知れると吃驚なさいます」

隆三は不思議さうに三人を見廻し、

「それは何の話です。」

梅山堀井は目を見合はして笑ふ。春雄は靜かに隆三に向ひ、

「君實に室小路男爵の令孃花子といふものが成立つて居ると思ふのか。」

「何故？」

怪有な顔をして花子を見詰れば、これも笑靨を片寄せて、

「アノ昨夜はさる方の云付で飛んだ假面を冠つて居りましたが、實は私は瀨川菊枝と申す未熟な俳優で、此度御當地へ登りまして、來月から改良座へ出

勤致します。何うぞ何分御贔負の上、御引立下さるやうにお願申します。」

「女役者！」

隆三の目は見張つたきり、暫く其まゝの木偶の坊、身動きもならず。

「何うです、一ッかつがれましたらう。」

梅山堀井二人揃つて又新らしく高笑、これを木の頭として、此舞臺は幕にすべし。笑止やな竹河隆三、夜一夜の思に亂れて、胸をこがした情遊、結婚、ハ子ームウン、さては今日一日の目論見も、殘らず泡のやうに消えて、今更頭痛を記念に、六尺肥滿の大男、二十四歳の戀初めに、只一口で頰を燒きけり。

お駒

誑されて、捨てられて、散々な目に遇つてお駒は歸つて來た。東京へ行つてから大そう温柔くなつて、奥ゆかしいと親達は思つて居たが、其實元氣が無くなつて仕舞つたので、心には絶えぬ涙がある。躾も最早充分年齢も花の眞盛、聟を聟をと母親が騒げば、父親も腰を据ゑて居る割に落付いては居ず、明暮二人の話はいつも嫁入沙汰、あれ程迄に私の身を厭つて、よい上にもよい者をと種々に氣を揉んで下さるお心の中、思へば寔に濟まない事をした。此樣な淺猿しい疵物を塗隱して、ぬけ〳〵と生娘作つて何處へ嫁かれやう。

お駒は一人庭へ出て、面白くもなく其處等を歩いて見た。周邊を圍む山々の姿も、上から落して來る溪河の流も、去年のまゝに少しも變りはないが、何故此樣に淋しく見えるのだらう。夏は湯治場の花ともいふ土用の半、お駒の家は旅宿といふので、其賑はしさは格別であつた。部屋々々は皆笑聲で埋つて、其處にも彼處にも苦のない顔ばかり。女中を相手に騒散らす若い人もあれば、

さも樂しさうな夫婦連れも見える。家族を引連れて氣保養の人も心の合つた友達同志の一團も誰も彼も浮立つて興に乘つて居る。けれどもお駒は何處までも淋しい。自分は世界の除物にされ、一人取離されて此處に捨られたやうな氣がして、果はたゞ悲くなつて涙ぐんで來た。

其時母屋の方の庭に足音が聞えて、誰か此所へ來るやうな氣勢、人に遇ふのも嫌だと思つてお駒は內へ引返さうとする途端先方の人は植込の間を出て來たので、二人は思はず顏を見合はせた。おやッ！お駒は吃驚して面目なげに俯向いた。此處で此人に遇はうとは。

名は武田參次といつて、お駒が東京に居た時分、氣の毒なほど心盡しを見せて兎や角う言寄つたのを餘所に目が眩んで居れば菅なく跳付けたが、迷が醒めて見れば何とも言盡されぬ實意の程、つく〴〵私が惡かつたと殆終思つて居る人、此身が此家の娘とも知らずに宿をお取りなさつたのか。遇つても笑つて挨拶の出來ぬやうな、此樣な身躰に何故なつた事だらう。

彼方も一目此方を見て、はッと思つた樣子であつたが、一寸目禮をしたばかり

て直に後を向いて行きかけるを、お駒は目を上げてぢッと見た。此間までは振向きもしなかつた後姿が何故此樣に殘惜しいのだらう。言葉を交はすも五月蠅かつた人に、何故此樣に物が言掛けたいのだらう。今になつて昔の緣を繫がうとは思はないけれど、たつた一言でもいゝから謝罪をいつて、此通り後悔して居ると知らせたい。飽くまで憎んでお在には相違あるまいが、此胸を打明けて懺悔して、折入つてあやまつたらば少しは御怒も薄らぐだらう。それも今でなくては最う機會もない。

思はず「武田さん」と呼掛けた。參次は再び此方を見たが、「私に御用は無い筈でしやう。」お駒は何にも言はれなかつた。

足早に先方へ行きかける參次、其人と此世の緣は最う此處で切れる事と、何も彼も厭つて居られないやうな氣がして、「武田さん申上たい事があります。何うぞ暫く。」

其聲は心を動かしたやうに、參次は礑と立止まつたが、振切つて先へ行かうとして、急に又立戾つて來て口早に、「何にも最う言つて下さるな。私は貴娘を忘

れなければならない。此限り貴娘にはお目に掛かりません。お達者で。」逃げるやうにして行つて仕舞つた。

それから半時間と經たぬ中に、參次は取急いで此宿を出發て行つた。物の蔭からお駒は見送つて居る。途中で一度參次は振向いて、暫く此方を見返つて居たが、向直つて首を掉つて、刻足に行手を急出した。お駒は目も離さず伸上るばかり、踏出す度に惜まるゝ名殘の姿も、見る中に段々遠くなる。橋を渡つて岨際を通つて、あゝ最うと思ふ中に影は見えなくなつた。溪河の水松の風。

有明

（一）袖垣

名譽あり財産ある家の當主として、氏には光あり身は長への春、三浦時雄は生れながらの榮華を、大方ならず世の人に見上げられぬ。されど彼は樂しまず。時雄の母は富子とて、俤草も八重深く春は早傾きたる齡ながら、ありし姿は少しも變らず今も尚勝れたる美人なり。子を思ふ闇の人心は、親といふ親に免がれぬものなれば、富子は疑ひもなく時雄を最愛しく思ふなるべし。されど時雄は母の情を知らず、其懐に抱かれて眠りたる事もなし。生るゝより早く膝より取離され、あとは乳母の手に渡されたるまゝ、優しき言葉の端だにかけられし折もなく、あれども無きが如くに人と爲りぬ。乳母は餘所に立越えて肚麗はしき女なりき。時雄を二なく册きて生の子も及ばぬほどの心盡、時雄は流石に母を慕へども富子は大方は見向きもせず、母様は何とて彼樣に我を

傍へも寄せ付けたまはぬかと、或時乳母に向うて問ひぬ。乳母は其顔を見詰めて居たりしが、犇と抱締めて只打泣けり。

懐かしき父に別れたるは時雄が十三の折臨終の際まで枕元に付添ひて、介抱の手を盡せしは母の富子と叔父の利武、父は叔父を身近く引寄せ、亡き跡に心細く殘る妻と子に、力となりて呉れよと幾度も繰返し、あはれ時雄が獨り世に立つほどになるまで、此家の後見をとくれ〳〵も遺言し、次に時雄を招寄せて、我が世を去りし後は、叔父を父とも思ふて必ず心に背くなと、苦しき息の下より嚴かに言聞かせ、富子にも何事も利武と相談せよと申付けぬ。叔父はいとど賴もしげに、其事ならば心安かれ。身にかへて時雄を護立つべしと誓へば、富子は尙殊勝らしく、そのお言葉を忘れまじと、互みに口を揃へていふに、父は世に嬉しげなる顏を見せしが、其まゝ永き眠に就きぬ。乳母は一座の中に交りて遺言の折しも涙諸共傍に差寄りて一言いはんとせしが、富子に睨まれて得言はて止みぬ。

富子は寔によく良人の言葉を守りて其後は何につけても利武を力草、顏を迎

へて心を迎へて、いはれし通りを露ほども背かず、二人の間柄は殊に親しかりき。嫂よりは妹の如く、妹よりは妻の如く、飽くまで柔順に身を振舞へば、一家は利武が思ふまゝに靡かぬ袖もなし。時雄に向ふては取分けて嚴しき躾方、僅かの事にも許しなき呵責は、日に添へていよ〳〵烈しきに、富子も一つになりて容赦なき折檻、それも時雄をよきものに爲んとの、心より出でたる慈悲の笞鞭なるべし。されど時雄は一筋に酷しとのみ思詰めぬ。乳母は尙更恨續けて闇に濺ぐ涙は袖も堰きあへず。

蔭になり日向になり、世に優しき楯となりて、若樣大事と乳母はそれのみに心を煩はせしが思餘りてか病に伏しぬ。雲より落す風早く、其まゝ枕は遂に上がらず、盡きせぬ執着を跡に殘して、敢果なく消ゆる烟の數に入りぬ。生殘る人に引かさるゝ思は戰く、脣に意氣込鋭く、今此息を引取りては、何としてもならぬ事なるをと、口走りし顏は目も向けられぬ凄まじさ、時雄は幾度か折重ねて無理にも死んで呉れるなよと強ちなる言葉、其度毎に乳母は涙に亂るゝばかり、氣で勝負せし身躰も僅かなる日數、最期も近くなりて力無げに何のやう

に悶えましても、壽命には勝たれませぬと、我を折りたる後の聲細く、若樣々々、何處までも御辛抱なされませ。いつかは時節が參りまする。若氣の一圖に逸りたまひて、氣荒の事を必ずなさりまするなと、絶々の命に縋りて辛くも絞出したる言葉、苦しき息をつきて又目を開き、何卒此世の思出に、今一度よくお顏を見せて下されませと、これが一期の言納なりき。

あとに物憂き身一つを、慰めんともするものは世に絶えて無し。日は難面く月はあぢきなく、かゝる中にも流るゝ時を侘びしく送行きぬ。叔父はいよいよ目を据ゑて睨むより外に無く、母は尙つらく顏を見ればいつもむつかしき風采、時雄は只其下に抑伏せられて、絶えず不平の涙を呑むばかり、清く爽やかに力強く事に當りては燃えもすべき少年の心は打沈みて裏淋しく秋の暮の如く、無常の鐘は怪しく胸に響きて敢果なき世の有樣を思はせ、松吹く風も裏悲しく心を誘ひて、あるに甲斐なき身をかこたする折每、寐覺の床には乳母戀しく、短夜の夢に幾度も父を見て泣きぬ。十七十八十九二十、春の花の如き年頃は、空しく霜に閉されて尙解けぬ束縛、雲は行衛を知らず身は籠の鳥。

(二) 下蔭

時雄に一つの疑あり。初めはたゞ朧氣に芽を萌きしが、末葉は漸く茂りて根は次第に深く。それと思へば、忍びがたきまでの憤怒、もしやの目は母と叔父の方に注ぎて、竊かに心を付初めぬ。されども有るまじき事と力めて打消し、此事が其身の邪推に止り、一日も早く裏美しき眞實を見出して、淺猿しき念慮の殘りなくならん事を只管に願ひぬ。

其折柄叔父はさる方より五歳になれる男子を貰受け養立てゝ寵愛一方ならず、名は勝彌とて何處やら富子に似通ひたる容貌、初めて逢ふて其顏を見し時、時雄の胸は人知れず或響を傳へて、暫時は脇目もふらず屹と見護りぬ。富子は我子への疎々しきには引きかへ、血の繼統もなき甥に對しては、勝彌々々と目もなきほどの有樣、時雄はいよ〳〵快からず。

心の雲は折重りて追へども去らず、果は如何にしても堪へられぬほどになれど、それと慥めたる事にもあらねば、よもやと思返して自ら押沈めしが、一夜不

圖行合はせたる物蔭に、ゆくりなく確と耳にとめたる一事、時雄はあッとばかり其場に倒れんとしたり。世は唯苦し。根もなき見違の影なれかしと、祈る事も最早ならずなりぬ。

淺猿しく、腹立たしく、悲しく耻かしく、恨めしく、何たる御所存ぞと胸も裂なんばかり、家の耻を思ひたまはぬか。其身の耻を思ひたまはぬか。濁りなき血と輝きたる名を長く世の人に記臆せらるべき父上を、淺猿しく汚すといふ事をも思ひたまはぬか。我に取りても死すとも消ゆまじき耻辱何とすべき。此まゝ捨置くべき事にあらず。思ふまゝにと我知らず突立上がりしが、俄に又打萎れて、とはいへ荒立てたらば耻の上の耻、相手といふは母なり叔父なり。情なき事と眼は哀れなりき。

人無き折を見合はせて母に向ひ、流石にそれとなく遠廻しなる諫立、胸にあるほどの言葉を盡しても見たり。母は若し顏をも赧らめんかと、言出すにつけて氣の毒なる思は、時雄の胸に滿ち〳〵て、諫むる身が却つて切なかりき。されど富子は案外なる氣色、空吹く風の耳にもとめず、さながら餘所事の如く聞、

流して菅なく坐を立ちぬ。時雄は思はず赫と堰立ちしが、あのやうなる素振は爲たまへど、お心には惡き事をしたりとも思ひたまひしなるべし。流石子に對して打付にそれともいはれねば改りたるお身持を見せし我言葉を立てて下さる事もと、竊かに其後に心をつけぬ。富子は更に憚りもせず。堪へかねて又母を捉へ、涙ながらに思ふまゝを言盡しぬ。胸苦しけれど明らさまに星を指して、手を合せて拜まぬばかり、賴みて强ひて願上げて、何卒と力を籠めし時涙は霰の如く亂れぬ。富子はさも呆果てたる顏して、あられもなき其樣な事を、假初にも我が爲らるべきか。それと思ふだにも空恐ろし。二度とかへらぬ舌の根に、よくも憚氣なくいはれたる事、其方はそも正氣の沙汰で居るのか。以ての外な、これは何としても此儘にされずと、聲の下よりせはしなく利武を呼寄せ、聞いて下されと有りし事を話し、我子の口づからかゝる言葉を口に出さるゝ身の何といふ因果と、末は悲氣に聲も慄出せは、利武は忽ち烈火の如く、無禮とも不埒とも言語に絕えたる不所存者、何を根にさる無法なる邪推を廻はせしぞ。三浦一家は雪の如く潔白なるを、世にも人にも知ら

れて自らも誇る血筋なるぞ。其樣な曲りたる根性の有るべしとは、夢にも思寄らざりしに、心盡して後見したる胸算の我が不面目、情けなき奴めと散々なる叱責、半時ばかりは烈しき言葉を續けしが、日頃我が躾の嚴しきを若氣の心足らず恨むにつけて、其樣なる邪推も出づるなるべし。嚴しくするも其方を英物にせんとの油斷なき我が眞心を其方は知らぬかと涙を落さぬばかりなりしが、後にぞ思合はすべき。我も若き折は其の如き事の有りし。

されど輕々しくかゝる事を言出づる其方の心には、母を何と思ふやらん。我を何と思ふやらん、重ねて此樣な事もあらば、屹度其處置をせねばならず、三浦一家の耻辱なるぞと、いはるゝほど時雄はいよ〳〵激するばかり、父樣の御遺言を忘れてのけしかそでなきものと歌はれぬやうに、心にしめよと傍より母に添へられし時、思はず振仰ぎたる目には一杯の涙、時雄は一時叔父と差違へんかとも思ひぬ。

不平に不平を折重ねて、明けても暮れても口惜しき月日、叔父の束縛はいよいよ烈しく、時雄が願ふ事は悉く斥けられ、片時とても眉を展べたる折もなし。

されど利歩は天晴なる後見人として、世の人の露ほどの非難をも受けず、富子は貞淑なる後室として、假にも惡き取沙汰もされず。指をもさゝれぬは二人に道理ありてか。恨むは時雄の淺はかなる心か。結ぼるゝ腦の中の苦しさを形ばかりは人にほのめかしたる事もあり。されど其人はよくも聞かず、それは其方の我儘とばかり一言の下に押へ付けぬ。時雄は言ふに言はれぬ口を結びて、俯向きたる顔を上げざりき。

其折柄一つの噂立ちて、知る知らぬ耳より耳へと次第に高くなりぬ。時雄は酒色に身を持崩して、嚴しき叔父の異見も切なる母の諫言も、耳にもとめぬ惡所通行末見込なき放埓者と成果てしとなり。此噂は何處より出でけん。時雄は忘れ水の葉蔭に埋れて、獨り鬱々と左る處へは近づきもせぬ身を、動き易き人の口よ。

（三）葉隱

松浦の家に近頃の名物あり。新参の侍女の小夜と呼ばれて、目元にばかりも百の媚、或向には命取と囃さるべき女の自ら名乘る年は十八の春に驕りて、咲誇りたる牡丹の妖艶これが似通ひたる俤なるべし。出生は上方と聞けど素性は誰も知らず、一日利武に伴れられて此家に來り、それより侍女として目をかけて遣はれぬ。態度しとやかにして事に驚かず、外面は鷹揚に見えて中は慧敏しく萬づに氣はつきながらこせつく樣子もなく、濃やかに情籠りて、何處やらに強身ありと見れば又眞似のならぬあどけなさ。言はれぬ笑を作りて人を見る時は、花は思を語りてさながら動ぎ出でんばかりの美しさを、容姿に不足なき富子も或時は嫉む心の出でし。

仔細ありてか心ありてか小夜は殊にまめ〳〵しく時雄に仕へぬ。卌きまゐらす振舞の目に立つほどなるを、富子も咎めず利武も咎めず、朝烏は塒を離れて時雄の目を覺ませば、折ふし咲掛けたる梅一輪を上に浮かせて、手水の水を

縁に運ぶは小夜なり。顔を拭ふて鏡の前に立てば、櫛笥を捧げて侍るは小夜なり。膳の前に箸を上ぐれば、給仕の盆を脇に控ゆるは小夜なり。茶の通ひ衣裳の世話、つれ〴〵の話相手憂き時の共涙、今日はお顔色もよろしからぬに、若しや何處ぞお惡いのではござりませぬかと、言葉に節籠りて心底愁はしげに、又一日はいとゞ可憐く、貴郎樣は屹度お嬉しき事のあるべしと問掛け、何故と問返されて何故でもと答へ、微笑みながら物言ふ目にぢッと見詰めしが、我は少しの喜ばしき事もなしといはれ、左樣でござりましたかと溜息を忍びて、俄にがッかり氣落したる如き素振、其折々の目顏は中に深き思を含みて、穗にあらはるゝ色は麗はしき姿に助けられて、一入の品をつくりぬ。

時雄は此頃獨り物案じに暮れ、忍び〳〵に何やらん支度するを、小夜の目は早くも注ぎて樣子に心を付くる如くなりしが、貴郎樣は此頃お心の中に何事をか思立ちたまふてかと。深く咎めたる氣もなきやうに問へば、時雄は驚きたるさまにて屹と其顏を見護りぬ。小夜は押して訊ねもせざりき。子として甥として、世に對して顯はに其事をいふに忍びず、とは言へおめ〳〵

と看過して、手を束ねてあらるべきにあらず。心盡しの諫立も聞かれぬ此曉を何とすべき。かゝる人々を上に戴きて我慢にも我は一つ處に居られず、それのみならず今の如き境界を送りて、爲すべき事をも爲さで空しく月日を過す身の、返す〳〵も口惜しくてならぬを、我は寧ろ此家を立去るべし。お二人も少しは心付きたまはんと、色に出でたる時雄の胸の中はこれなり。

いよ〳〵と定むれば流石によき心地はせず、出でゝは歸らざるべしと思へば、母と叔父とに餘所ながらの暇乞、此世に一人の母、一人の叔父同じくは其膝元に慈しまれ懐しがられて睦まじき、朝夕を迎へ、長く生涯の歡樂を盡さるべき身なるに、何としたる此一族よと、部屋に歸りて我知らず涙を落しぬ。

危き橋を渡りて最後の支度を調へ、機會を盗みて家を忍出でたるは落人の身に心なき月の照渡る夜、漸く逃出でゝ思はず息つきて、流石に我邸を見返りぬ、月影清く名殘りの屋の上の輝きて、其方より吹く風も目に染む如きに、我が此處を去りし後は、如何に成行く事やらん。かゝる事になれかしと、父上は我等に殘したまひしか。道行人は如何なる目を以て仰ぎ如何なる噂して過ぐる

やうになるべき。我は又此家の主人として、此家の光と此家の富を、好んで捨てゝ行きたる心は、母上も叔父上も願くは汲分けて下されかしと、少時佇立み居たりしが、俄かに思返して踵を回らしぬ。足は直ちに東の方へ、月に守られて淋しき路なり。

途中にてそれと心付きたる如く、向をかへて横足へと曲りぬ。指して行く方は父の葬られたる處、幾多の人が涙を濺ぎたる墓石の間を、脇目もふらず通過ぎて、心一筋に志す墓の前に稽首きぬ。明日は最早此地に居らぬ身の、今夜を限り參拜も叶はざれば、不時のお暇乞をと手向の涙を流して、これより以後此處へ來て、心から後を吊ふものはなかるべし、僞りの法事僞りの回向を、淺猿しく受けて下に眠りたまふ御身の、魂もし靈あらば如何ばかりのお憤怒なるべき。此見事なる玉垣と見事なる石塔は、そも〳〵父上の爲に立てられしか外聞の爲か。生きて此口惜しき目を見る我よりも、死して此辱に遇ふ父上を何とすべきと、濡れまさる目に振仰げば、冴行く月に影作る墓の前に、ありし父の姿のまざ〳〵見ゆるやうなるに、亂落つる涙は瀧の如く消ゆるばかりの思し

て稍多時目も動かさゞりしが、我は寧ろ此處に自殺して果つべきか、去りあへぬ身を起して其處を立出で、人通りなき路筋に差懸りたる折しも不意に後より若樣と呼ぶものあり。驚きて思はず振返れば、月は美しき姿の人を見せて時雄の心を騷がせぬ。これは小夜なり。

(四) 雲間

何として此處へは來たるぞと聲音を押沈めて問出せば、小夜は走寄りてぢッと其顏を見詰め、何としてとはお情なきお言葉、此樣な淋しき處を然も夜になりて、婦人の身として大膽にも、何でわざ〳〵參りましやうぞ。私にも少しはお成り遊ばしても下さりませ。お跡を慕ふて身を捨物にお屋敷を脱けて參りました。

それはとばかり時雄は出づべき言葉も知らざりしが、今夜に限りて來るにも及ぶまじと漸くにして除して見すれば、貴郎樣は喃と取縋らんとせしが、心付きて少し俯向き、何處までも菅なくしたまはんとて、其樣に態と仰有る事か。よしなき醉興とばかりのお口裏に、私を何と思召してと思廻せば、寔に寔に悲しうござりまする。」

知るまじと思召すかは存じませねど、いつぞや母上樣叔父上樣と、宛名を遊ばしてお認めなされし物、慥かに今夜跡にお殘しなされてなるべきが、あれは何

でございまする。先程隠れて立出でたまひしを、再び歸らぬお心とは、私は能う存じて居ります。それなればこそ恐さをも忘れて、一心に此まで參りたるを何としてとか、來るにも及ぶまじとか。其樣なお言葉を承はる身のつたなさはと、思入りたる如くなりしが、それも更々御無理はなし。お恨み申すとは何たる身勝手、私風情のものが、と言掛けしが顏を見上げて急に羞かしげに、はしたない道中で此樣な事をと、差俯向きたるまゝ消入りたげの素振、何とかいはれたらば逃げもすべき態なり。

厚顏しくも此樣な事を、よくもつけ〳〵と口に出してと、さぞかしお蔑視なされてなるべし。御免しなされて下さりませ。最早此後機會とてもなく、事によらば此限お目にもかゝられまじと、思込みたる一圖の心から婦人の身にあられもない。私はまあ何と致したらばよき。

月は中空に照優りて、美しき小夜の姿は十分なる匂、思亂れてわりなき風情は、言盡すべきやうもなく艶なるに、時雄の目は見る程惱まさるゝばかり、此迄家に在りし時も、幾度か胸を轟かしたる事もありし。幾度か其爲に寢つかれぬ

事もありし。いはゞ生若き身の跳易き心に、押へされぬ折は度々なりしに、今かゝる時に臨みて、手強く振拂ふ勇氣は流石に出ず、何とせんかと思惑ひて小夜を見れば、又醉の出たる如く前後も分別も雲となりぬ。
知られたる上は包むも詮なしと漸くに正氣づきて面を正し、成程我は歸らぬ覺悟なり。それ程にまで思ふて吳れる事の嬉しけれど、今は深き仔細ありて其樣なる事は出來ず。心あらば又遇ふ時を待て、切なけれど我はこれにて別るべしと、辛くも言捨てゝ逃れんとすれば、駈寄りて離れじと取縋り、いとせめたる聲の根強く、それは、それは餘りにお酷うござりまする。
思遣なきと申上げたらば、自由がましきかは存じませねど、少しは此身を不便もと思召して下さりませ。此處に捨てゝお出なされて、跡は何とでもなれかしとは、餘りと申せば氣強いお仕方、其樣なお心の中ぞとは知らぬ身のこれほどまでに、とあとは分もなく泣出して髮も亂るゝばかりなりき。
暫くしてしほ〳〵と小脇に取離れ、私が惡うござりました。身の程をも顧みず、大それた其主人樣に、とても及ばぬ願なるを、お搆付けなされぬもお道理な

り。とはいへお傍に居られませぬものならば、あゝ何として此樣な氣になるのやら、寧その事死にたうござります。

叶はぬ事をいつまで繰返しても甲斐もなし。私は諦めまする。若樣は末長うお榮えなされませ。今度家出を遊ばしたも、私は陰ながら御推量申して居りまする。何卒お身躰をお大事に、必ずよき御出世をなされませ。諦めまする。諦めまする。せめて此世のお名殘に形ばかりも優しきお言葉を、一言掛捨てゝは下さりませぬかと、差寄りて見込む目の哀れさ。

御機嫌ようお出なされませ、左樣なればと苦しげに、無理に步むやうにして少しばかり行きかけしが、立止まりて振返り、わッと其の塲に泣倒れんとしたり。

時雄は思はず駈寄つて抱止め、慄へたる言葉を押出す如く其方の望に任すべし。我も寔は。

二人の目は口より先に物を言ひぬ。月白し。

（五）西山

其夜利武と執事の奥井は留守なりき。更闌けて後何の氣もなきやうに打連れ立ちて歸來りぬ。

戸のなき人の口の喋々しく、時雄は放埓の餘り禁足されしを、懲りもなく此度は召仕の侍女を誘惑かし、手に手を取りて家出したりとの噂は、それよ！それと逸早く廣がりぬ。三浦家は八方に手を分けて尋ね盡せしと聞えしが、行衛は今に知れず。

そんじよ某處に家あり。見越の松も色を含みて、萩垣なまめかしく、中は手を盡したる一構、これは何某の妾宅とて、艶ある女主人と下女二人、雨夜のしめやかに忍駒の糸鳴りて、或時は障子の影法師に、樂しげなる對座の映る處とかや。俤も少し變り樣子も違ひたれど、其家の女主人といふは紛れもなく小夜なりき。されど時雄の姿はついに此處に見えず、何としたる事やらん。

折々こゝに通來る人一人、いつも小夜と濃やかなる物語に夜を更かして尚飽

かぬさまなり。其人は利武なりき。

時雄はそも何地へ行きて、其後いかなる身とはなりけん。彼は跡形もなく長く消失せぬ。天地聲なし。日はたゞ上を照らせり。進行く世はます／＼進みて、よき衣着たる人はいよ／＼巧に物言へり。

青葉

（一）

一里の綠濃やかなる松原を出づれば、眞砂を洗ふ浪淸く、苫屋の煙の吹靡く方を一羽の鶚横ぎりて行けり。海原近く目の落つる方は淸見が浦興津川、淸見寺の高閣は青葉の中に品高く、水に影濺す磯山際を漕行く舟は隱れて又現れぬ。薩陀の山田子の浦、愛鷹二子伊豆の山々あるほどの眺望を下に踏まへて、白妙の富士は高く雲を拔きて立てり。

汀に寄せかけたる船の中に、横鬢かけて大疵の跡ある漁師一人、仰向態に足踏伸して、口を開きたるまゝ、前後も知らぬ高鼾、入江の浪は靜かにして夢も騷がず。遙かに聞ゆる茶摘歌は、松を潜りて繁茂の中に消え、其處彼處に亂るゝ茨野百合晝顏の花の人は見ねども其まゝに咲きて、優しき心を雲井の風に呼きぬ。

一叢茂る夏草を踏分けて、今しも堤の上に現れたる二人連、一人は女なり。連立ちたる男は目覺むる如き眺望に我を忘れて、言葉もなく、稍多時立盡しぬ。女は馴れてかそれほどにも目を遣らず、振仰ぎて男の顏を打守りて居たりしが、貴郎は此前打連立ちて來たりし時を、今も尚記臆えて居たまふか。數ふれば早二年越、貴郎の父樣も御一處なりしが、乳母の崎も金藏も、お供の中に連なりしが、あゝ彼時は阿兄も共々參りしが、いづれも亡き人の數に入りて、殘る二人のかくて此處に立つべしとは思設けぬ事なりき。變るは人の上、此後再び來たまふ折は、我は如何なる態にてあるべき。山の姿水の際限は、其折も此の如くなるべきが、とつくづく思入りたる風情、男は我心をいはれたる如く振返りて少し目を見張りしが、其折は誰かの奧樣となりて、玉のやうなる兒を擧けて居たまふべし。我は其愛らしきものを搔抱き、此處に來て昔を思ふ時もあるべし。さならずやと事もなげに打笑ひぬ。

口を結びたるまゝ女は差俯向きしが、奧樣とは、奧樣とは、我はそも何者の妻となるべき。我を人の妻となるべしとも、貴郎はお思ひなさるゝかといふ。變

りたる事を聞くものかな。妻とならで何とならるゝと言へば、口籠りしが稍ありて、我は誰の妻ともなるまじ。かゝる態にて一生を送るなるべし。それは何といふお心ぞと訝る男、女は見らるゝを厭ふ如く、歩出しさまに聲細く氣まぐれなる我のやうなものを、何處に貰手がありましやうぞ、と言捨てゝ足早に立離れしが、砂に雜る美しき貝殼を、ゆくりなく見出したるやうに拾上げてこれは、何といふ貝やら、御存じかと聲ばかり振返りて問ひぬ。

二人はやがて汀に下立ち、干潟の上に歩むともなき印を殘して路を南に再び千歳の蔭に立寄れば、一刷の松林は入江を横ぎりて浪の上に浮び梢を裾に富士は粧を改めて、雲の帶解く立姿のいよ〳〵美しく、木の間を走る白帆の風情は更に得もいはれず、女は木の根の埃を拂ふて、一休の腰を打掛くる折しも、肩を越して翩々と舞來たる蝶の、銀鼠の鼻緒の上にとまりたるが、やがて傍の小草に移りて、其まゝ飛びもやらず美しき羽を引裝ふを、暫く興ありげに見て居たりしが、御覽なされと、指さしゝて、此の蝶の羨ましいではありませぬか。人は陷穽を自ら作りて、それに入らじと身悶えするやうな世を、たゞ美しき羽に

任かせて、花があれば花に行き、草があれば草にとまり、それからそれと行暮らして、餘所には何の覊絆もなき身の人も此樣なものならば、よしなき物思に惱みもせまじきに、其中にも女といふものは、と言葉は途絶えて心の餘るを聞入る男は又少し眉を顰め何とて其樣な事を言ひたまふぞ、それは世に背きたる人の口より多く出づべき言葉なり。豐かなる家に生れて一方ならず最愛しがられて、何の不足といふ事もなき望多き貴娘なれば、華やかなる、若やぎたる心を持ちたまふが其筈なるに、物思とは抑も何の物思と、氣遣ふ如く問出づれば、返事は暫く間を置きて、さればこそ氣紛れとは先程も申せしが貴郎は我を如何なる女と思ひたまふぞ。此樣なる性質のものを貴郎は必ず好みたまはざるべし。

餘りに言過したまふなと、傍の松に男は身を持たせながら、亡き兄上と我との中の、何れほど親しかりしかを貴娘はよく御存じなるべし。其兄上が數ある妹の中に取分けて中のよかりし人を、我も淺からず思ふといふも、好むところの同じければなるべし。我はたゞ貴娘に向ふては、肉親の妹のやうなる思、離

れて吾妻の空にさまよひし時も心にかけたる折毎の音信に懐しむ胸の中はそれと知りたまひしならむ。我は絶えず心の中に、貴娘の身のいよ〳〵幸福なれかし、天晴餘所に誇るべき良人を持ちて、しかも其交情の世に越えて麗はしかれと、樂しき行末を望むばかりなるに、思寄らず先程の裏淋しげなる口吻、聞咎むるも其筈ならずやと聲を收めて答を待てど、女は兎角の言葉もなく、帶揚の端を引出して弄ぶのみ顔も上げず。

貴娘を捉へて妹などゝ無遠慮なるに呆れたまひしかと微笑めば、何として其樣な事をといふ。さらば此後とても我が諫立を聞入れぬまでも斥けたまふなと折返せば、それはとばかり口籠りて貴郎の仰有る事とならば、何をも喜んで從ふべけれど唯一つお心に背く事はあるべし。

其一つとは何と問詰むれば、恨めしげなる樣子を見せしが、最早我を窘めたまふなと話を紛らさんとか急に笑顔作りて、肉親の妹と思ふとの先程のお言葉を忘れたまふな。我はこれより憚る處もなく、我儘を言ふてすねて甘えて、思ふさま貴郎を困らすべし。其時になりてあれは一時の興などゝ、お逃げなさ

れても聞きませぬぞへ。ようござりますか。と念を押す口元に笑を殘せば、其我儘を言はるゝ程でなくば、親しき中にも隔離ありて嬉しからず、我も其時は兄風を吹かせてかさにかゝりて無理なる事をも言ふべきが、其場になりておお腹立ちなさるなと笑ふ。

貴郎の無理ならばと微笑みながらの一言、無理ならば何と問返せば、何でもござりませぬと笑ふて言はず。お聞かせなされと顔を見込まれ思はず彼方に目を外らせしが、急に立上りて振向きさまに聲を潜め、あれ彼處を漕いて行く船頭が、しきりに此方を見て居りまするとなかしげなる風情、見て居ればとて何の構ふ事と男は氣にも止めぬを、それてもをかしいではありませぬか。最う餘程休みましたれば、彼方の濱へ行つて見ましやう。

談話は又歩みながらの間に續きて足取輕く堤の前を一廻、南に差出でたる洲の崎へと出づれば、松は疎に浪荒く我物顏の鶚はこゝにも飛交へり。横一文字大空を分くる青海原の、水は見る目を越えて行衛も知らず。伊豆の岬は消迷ふ煙の如く、遙に漂ふ漁り舟の上を、陰にし日向にして走行く薄雲吹送る風

は浪を誘ふて袂を返して、松に碎けて、茅の中に落ちぬ。英子樣と前に佇立みたる男は振返りて、最早歸らうではありませぬかといふ。最うとばかり女は思設けぬ如く、目を擧げて男の顏を見詰めしが、待つて居る人でもありまするのか。と態とらしき言葉、何の、其樣な事はなけれど、時も餘程移りたるに、いつまで長居もなるまじといへば、それは左樣なれどゝ跡は言淀みしが、貴郎は早お歸りなされたきかと聞く。我は貴娘の儘にすべしと返せば、女は優しく、それならば歸りましやうと踵を回しながら、今度若しお誘ひ申したれば、又御一處に來て下さるか。

それは何時なりとも、と男も打連れて歩出しぬ。同じ道を歸るも面白からねば此方よりと英子の言ふに任かせて、小松に半は埋れたる砂山の横を、形ばかりに通ふ小路を迦り再び木の間の綠を分けしが、英子は不圖思出たる如く、今度は何日頃まで我家に御逗留のお思召か。阿兄も居らねばお話相手もなけれどむげに早くはお歸りなさるまじと言へば、我は容易く歸りたくはなけれど、さうく〳〵いつまで遊んでも居られず、それのみならず心なき長居は、却つて

お家にお邪魔なればと言掛くるを押止めて、其樣な事は仰有れども、寔をいへば面白くなければ、お發足を急ぎたまふなるべし。されど切めて、せめて我が望むほどは、御不請ながら居ては下さらぬか。

貴娘のお望みとは何れほどの日數と問へば、居て下さるか下さらぬかを慥めぬ中は判然とは申しませぬと微笑む。其樣な歸着のなき事に確かなる返事が出來ましやうかと應へば、さう事むづかしく仰有らずとも、兎に角に我が言葉を立てゝ下されと強ちにいふ。それは口先だけなれば何となりとも、仰有るまゝにと笑掛くれば、ようござりますると恨めしげに、たんと其樣な事を仰有りませ。何の彼のとお逃げなさるは、全くお心が無ければなるべし。草深き斯かる處は何うせお氣に入りませぬ。と拗返りて態とらしき刻足、子供らしく分らぬ事をいひたまふな。と後より言掛くれば我は素からの分らず屋。と寄れば離れて横を向く若々しさ。

松原はいつか左に茶畠の間を過ぎて、柳靜かに軒を吹く草の舍の後に出でぬ。釣竿肩に筒袖を着たる里の子と、糞束の髷を殘す胡摩鹽の老爺と、話しながら

行く方を指して、門の傾きたる野寺の角を曲れば、一村の家々は青葉の間を綴りて、立上る烟もいと豊かなり。何の宮か黒みたる社頭の見ゆる岡の東に、日影を篩ふ大竹藪に隣りて、杉垣の中は木深き一構、土地に珍らしき屋根瓦の際立ちたる家の中より、琴の音の物優しく風に乘りて來れり。

家の前を流るゝ淸き小川に懸渡したる古き石橋あり。九歳ばかりなる女の子一人、其上に佇みて居たりしが、振返りて此方へと來る二人を見付け、おやとばかり目を見張りて、深見の兄樣と聲高に呼ばゝりぬ。

おゝ君子樣と言ひもあへぬに少女は走寄りて、何處へ行らしつたの。と首を仰向けて云ふ。濱へと男は答へながら英子の方へ振返りて、君子樣、姉樣が怒つて居るほどにあやまつて下さらぬかと微笑めば、其樣な事をといはぬばかりに、英子は一寸男を睨みて、君孃、嘘だよと言葉せはしく打消しつゝ、よしなき事を仰有るまじ。子供は眞實にしまするといふ。さらば先程のは僞か。我をたゞ苦しませんとて、彼樣な事してお見せなされしかと乘入れば、英子は唯一言、存じませぬ！

（二）

中庭を隔てたる離座敷に雄次は唯一人、我を忘れて物思に耽りぬ。八日の薄月は巻上げたる簾を潜りて、縁に落す唐松の影ほのかに、いさゝ村竹葉分の風の冷しく吹入るゝ宵の程、緑滴る打水の上を消々に流行く螢の優しきにも、目は唯餘所に幾時を過しけん旅鞄は傍に口を開きて書かぬ白紙は机の上に、硯の水は色に出でたれど筆は初より乾きたるまゝ團扇は獨り脇に轉けて蚊は其上に羽を休めつ。

それか。あらぬか。我が見るところの誤まらずば、と雄次は幾度も繰返しぬ。眞實ならば我は何とすべき。英子は美人なり。しかも我が好む際の美人なり。其裏美しく、匂深く、人に越えたる誠實ある、いとせめて物優しき中に動かぬ處ある、或處は豐かに或處は氣高く、取立てゝいはゞ尚盡きぬ可憐らしき心根の、かゝる人と末長く語盡さば、我が世は又上もなく樂しかるべきに、さらば我は應ずべきか。

否、否、否、我は今さる事に心を傾くべき時にあらず。爲すべき仕事をも未だ爲し得ず、早くも離るべからざる羈絆を作りてなるものぞ。我が目は餘所に暇なき身なるを。

それのみならず、あはれ世に天の福音を傳へて遍く人間を慰撫せんとの志を抱く我ならずや。兎にも角にも脱俗の詩人として、高く飛はざるべからず大に歌はざるべからず。我身は飽くまで自由なるべし。我は寧ろ係累のなからん事を願ふ。一生百年の血は既に美の神に捧げたる我、微塵も私慾なきこそ身につけての本懷なれ。我はいつまでも妻なくてあるべし。

或時は烈火の如く或時は死灰の如く、變幻極りなき詩人は殆ど狂兒なり。我は英子が狂兒の妻となるを願はず。自墮落なる、無頓着なる、驚かるゝほど規律なき斯かる男を、良人としたる後の悔はいかゞなるべき。我には我が天地あり。英子には又身に應じたる世界あるべし。まこと我に心あるならば英子の爲にそは悲しき事なり。我は寧ろ早く此家を去るべし。あゝ結捨てたる旅路の夢も一月餘、宿に殘したる古机は、主人の歸るをいかに待詫ぶるなら

む。
されど、されど若し、英子にして心高からば、苟くも俗界の榮華を捨てゝ顧みぬほどの、志の端だにあるならば、若くは天晴なる内助となりて、我を勵まし我を慰め、盡すべき道を一筋に盡さするほどの、力の片割だにあるならば……。思至りしが俄かに眠より覺めたる如く、我は英子を戀ふにあらずや。と雄次は心の內に叫びぬ。今宵は英子の許に行かんとして、何故怪しく心の騷がれしか。逢ふて彼此と談話の間も、何故常に似ず手短くして、舌も儘ならぬ中に立別れしか。何故歸りて後何をもせず、長き時の間物思に沈みしか。然なり。それなり。それならずや。と驚きながらもつく／＼胸の中を讀返せば若くは今の此思も、往時よりして中に蟠りしにはあらぬか。我と我身を欺きたる心のこゝに姿を現したるならずや。然ならんか。然ならんか。あゝ我は我胸をも見分くる事のならずなりぬる。何とすべき。我は今將何とすべき。歸るべし。歸るべし。袂を振つて一思に歸るべし。よしや心なしと思はれんとも、いかに此地の懷しくとも、爰は居るべき處にあらず。何をも捨てゝた

だ歸るべし。我を知れ。我が本分を知れ。咄、我を止めんとするものは誰ぞ。叱、名殘の惜しからずやと囁くものは誰ぞ。あゝ、それは誰にもあらず雄次なり。情けなくも我なりとばかり、心付きて稍、暫く呆果てたる折しも、月影小暗き繁茂の方より、此方へと近づく物靜かなる足音、我にもあらず雄次ははッとして、譯もなく胸を轟かせば、やがて月の前に現れたるは輕肥したる愛くるしき女、これは次の妹の春子なり。

近寄りさまに差覗きて、雄樣お一人？　何をしてお出なさるのと調子輕く此方へ向きて緣の前に立ち、蘆柄團扇に風を呼びながら、彼方へ涼みにお出なさらぬか。御用がなければと姉樣が待つて居まする。妙も、と言添へて團扇に半面を隱し、お厭かとばかり見込みたる面差に言はれぬ愛深し。

無心の言葉も何故か刺すやうに聞えて、さながら胸の中を試さるゝ如く、怪しくも心の咎められて答ふるより先に春子の顏を見詰めぬ。行かぬがよし。近づかぬがよし。行くまじといふ想は中より沸出でしが、何とかしけむ心を狂げて雄次は遂に立出でぬ。行くには行かすべきものゝ有りしならむ。雄

次はそも何に打勝たれたる。

雨とや紛ふ桐の廣葉に、花のはら〳〵と落ちかゝる前に、床几に蚊遣火月を景物の只中として、水髪の涼しきに新藁の清きを引結び、揃の浴衣の物ごし優しく並びて腰かけたる英子と妙子、夏の夜は一割といふに輪をかけたる姿を十五と十九の品に見せて、心地よげに打涼み居たりしが、妙子はゆくりなく振向きさま、雄次と春子の連立ちたる影を見付けて姉様とばかり事ありげに深見の兄樣が入らしつてよと囁く。さう。と英子は答へしが其方へは振返らず。今更のやうに團扇の繪を見詰めぬ。妙子がいふより前に英子は早く知つて居たり。

雄次は來たりしが態と英子に離れて腰を休めぬ。最つと此方へお出なさらぬか。こゝが一番よい風が。と春子は何も知らず言ふ。又面白いお話をして下され。と妙子は差寄りてあどけなく切望む。雄樣、蚊が居りますよ。これを。と英子は持ちたる團扇を差出しつ。

談話の中にも或心を讀まんとて、雄次はそれとなく英子に目を注ぎぬ。あは

れ明日にも此家を立去らば、容易くは又此姿に接する折もなかるべし。此香を身に占むる時もなかるべし。世は廣くして最も狭く、人は衆くして殊に希なり。かゝる優しき花守の身を捨てゝ直に歸る事か。今暫くは足を止めて、荒優る此心を養ふべきか。止まらんか。されどそは危からずや。歸らんか。歸るまじきか。

蚊遣りの烟はほの〴〵と月を掠めて、あとの一筋は小柳の上に迷ひぬ。英子は後れ毛の風に亂るゝを春子の櫛を借りて取揃へて居たりしが不意に口を開きて。雄様、詩人の觀察とやらは鋭いものではござりませぬかと聞く。雄次の驚きたる色を見て微笑みながら、何もかもよく存じて居りまする。先程父様から、委しく貴郎の事を承はりました。と言解く如く言へば、されば と雄次は少し言淀みしが鋭くなくばならぬものなるべしといふ。それならば我他の腹の中をも、從前から見透してお出なさるか。と思はくらしき樣子。誰が、と問へば貴郎がどの返事、我に何として其樣な眼があるべきと笑作れば、それても貴郎はと言掛くるを押へて、我はたゞの書生なり。外に何の働があり

ましやうぞと言ふ。それでも承はれば前々から、其道に心掛けてお出なさるにと返せば、それと名乘りて世に出でぬ中は、我がましくあらはには申すまじ。と稍、眞顏なる言葉、さらば知りながら知らぬ顏をなされるのかと打笑むに、何をとばかり答へかねて打目守れば、されど、久しき御修行は積みながら、何とて世にはお出しなされぬぞ。末を大事の思召はさる事ながら世間には貴郎のやうな方の、現はるゝを待構ふる人は山ほどあるべし。其中の誰よりも誰よりも、一番早くさうなれかしと願ふ人がありまする。有ましやう？と言掛けて見込みたる眼差、我を忘れてぢッと見込す雄次、英子は差俯向きぬ。

竹に風あり。水に影あり。月に團扇に吹上げられていよ〳〵涼しく、空は木の間を飾りて見上ぐるかたは皆清し。談話は漸く筋もなく亂れて、妙子の笑聲は續けさまに聞えしが、雄次は不意に立上りて、流石に形ばかりの捨言葉を跡に、急がはしく其場を立去りぬ。

雄次は其夜何をも爲し得ざりき。

汝、枝を撓めて花を散らすことなかれ。汝が手一度觸るれば、露は忽ち碎くる

べきぞ、あはれ汝は蝶を捕へて籠の中に飼はんとす。いかに汝が行末を見ずや。汝は英子に苦を與へんとするか。汝も又自ら苦まんとするか。我折れ、三千世界を照らすべき大光明にかへて、汝はかばかりの黒髪を斷つことのならざるかと、此聲は胸の中より響渡りぬ。あゝ我は去るべし。そは英子の爲なれば。

（三）

走るが如く廊下を急ぎて、慌たゝしく英子は入來りしが、貴郎は最早お歸りなさゝるとか。しかも明日の夜明にとは、それは眞實でございまするか。貴郎はよもや其樣に、其樣に早く、此處を振捨てゝお出なされはせまじ。と言葉も落付かず。

見るより聞くより雄次は色動きて、苦しげなる胸を押沈むる如くなりしが、容を改めて徐ろに、居たき心は何時迄も盡きねど、思へば中々斯うしては居られぬ身なり。歸途には母の許へも參れば、定めたる日數の未だ殘る中に、ゆるゆると逢ふて行きたくも思ひまする。悠々と遊暮らしたるも最早長き間、ゆるみたる此骨を又固めずばならず。明日はいよ／＼お別れ申すべし。

英子は其顏を見詰めながら、事々しく其樣に何とて今になりて仰有る事ぞ。お恨みと申せば過言かは知らねど、それは他人に對つて仰有る言葉なり。貴郎は何かお氣に障りたるなるべし。さらずば一言の前觸もなくて、管なくお

歸りなさるゝ筈はなしと、邪推をしても宜しうござりまするか。
それは餘りに無理ではなきか。邪推といふものゝ忌ましきを貴女は能く御存じなるべし。と寛ぎもせず言出れば、それは左樣なれど、と微笑みて、それでも貴郎はお歸りなされるものを……、貴郎は是非に何としてもお出なさらねばならぬのか。せめて我が心休めばかりに、今少しお止まりなされては下さらぬか。あとの淋しさをお察しなされて、と割なく賴みかけていふ。
手を拱きたるまゝ雄次は返事もなし。英子は幾度か言惱みつゝ、貴郎は、日頃我が淋しさの、どれほどなるかを未だ御存じなかるべし。かゝる心を何時の間に覺初めしか、又何故かそれは知らず。今も昔も此後も思ふほど尙懷かしき母樣、そを失ひしそれよりしてか。世に取分けて慕はしき兄上、そを失ひしそれよりしてか。殘る暖かき手と只管に憑りたる乳母、そを失ひしそれよりしてか。我はたゞ心細き朝夕を送迎へて、覺束なき限りを目に耳に口にするやうになりぬ。それよりして後心を遣るものとては、賢き人々が世に書殘したる書籍ばかり、我が座右のものは更なり、家に藏めたるもの兄上の殘行きた

まひしもの丶、讀得るかぎりは悉く讀盡しぬ。文字はいよ〳〵我を淋しがらせて及びもなき空を翔けさせんとす。世の常の女の喜ぶ處を、我は漸く喜ばすなり、心をこめて望む事をも漸く願はぬやうになり、あはれ言葉敵といふものもなくて、垂籠め勝の身は次第に世に背くばかり、されど我は世の戀しく、人の戀しく又いろ〳〵の物戀し。我が言葉を怪しみたまふな。我は泣かねばかり淋しくて淋しくていとゞ、淋しくて堪やらぬ折から、ゆくりなくも貴郎のお出なされて、思はぬ嬉しさを覺えたるも束の間の、明日とは餘りなるお急ぎ樣、近々には又お出もなかるべしと思へば、お名殘惜しさの一倍なるも外に語らふ人もなき身には取分けてつらし。我は何とて此樣な氣性にはなりました事やら。

今を盛りなる人の花の如き脣より、かゝる言葉の洩出でんとは思寄らねど、つくづく既往を顧みれば、それと聞分くべき處もあり慰めもし敎へもすべき我が位置なれど、最早それは難き事なり。我には打迷はるゝ怪しき思の底よりして胸に滿ちみちたるをと、見るに怪しくも心を動かす品形を、雄次は暫く打護

りしか、それにても尙ほ歸るといはゞ、つれなしとのみ一筋に恨まるべし。我が苦しさを、と言ひかけしが氣をかへて、時は限りあり思は盡きず。別離は同一なり。よしや僅かなる日を延ばせばとて、それにて名殘の惜しからぬものか。心休めは最も愚かなる業なり。淋しと貴娘は仰有りしが、其思を搔消すほどのものを、歸りて後必ず參らすべし。泣いて別れるよりは笑ふて待つやうなる心を何とて貴娘はお出しなされぬ。それならば何うしてもお歸りなさるとか。あゝ其樣な心强き方に、貴郞はいつの間におなりなされしぞ。幼き昔は何につけても優しくて、我が願ふ事は必ず聞いて下されしにと歎ち顏。雄次は態とらしく打笑ひて、貴娘も又其頃は、これほど聞分のなき人ではなかりしに、と言へども目は更に冴えず。

英子は稍ありていと靜かに、女は何うでも負けねばなりませぬ。最早お引止め申しはせまじ。御機嫌ようお出なされませ。爲すべき事のありとなれば、我身の別離も貴郞には門出なり。さればお心の勇まるゝほどに、祝ふて快くお送申すべし。と憂はしげなる目ざしには異なる思の描かれたり。雄次は

其心を讀まぬにはあらず。言ふべき事いひたき事言へば此上もなく喜ばるべき事の、胸を衝いて押出でぬばかり、されど彼は口を噤みぬ。空を仰ぎたる目の中には、あゝ美の御神よ。おん身の爲に我思を斬捨てたる此あはれなる我を見たまへ。

一叢雲に月暗く、鷺あり、鳴いて行けり。はた〳〵と障子に騷ぐは、夏虫の火むしか何ぞ。

（四）

人々に別れて雄次は遂に此家を出でぬ。英子は従姉なる人の許に行くべければ、そこまで諸共にと同じく立出でつ。こは其となく送らんとてなるべし。日は花やかに差昇りていと爽やかなる朝なり。青葉隠れの茅葺屋根、竹の一簇、雑木山、露吹結ぶ野面の方には、小川の水の光を流して、末は遠く松原の中に入りぬ。雄次が初めて此地を踏みたるは七歳の折、往ふさ來るさの数を重ねたる歳月の中には、二人が間に種々の紀念も、数ふれば更に夥多なるべし。ああ、時も移りぬ。眺望も改まりぬ。我は如何に。英子はいかに。とばかり思はずも振向けば、振分髪も高島田に匂ひこぼれて散りも初めぬ花は今、ねびまさる品形はいよ／＼目を刻むばかり。若くは思へば二人の縁は、早く天より定められたるものにはあらぬか。兎ても角ても此二人は、遂に離れて立たれぬものにはあらぬか。英子は竊かに我を慕へりとは、全く我が僻目にはあらざるべし。これも天ならずや。我は敢て自然を枉げて、果は其中に巻込まるゝに

はあらぬか、あはれかゝる花の懐よりすべり出でたる情を、認めぬ中に早くも打砕かんとは、そは餘りに酷ならずや。もし我が斯くして此處を去りし後、英子はさりとも拭ひあへぬ涙を、小暗き方に振落す事もあらば、そは我が得堪ふる處ならず。夕旦の雲に對ひて、限りなき憂の中に沈む事もあらば、そは我が得堪ふる處ならず。

雄次は忍びがたきまで胸苦ほしくなりぬ。

知るや知らずや英子は進寄りて、相語らふ間も早僅かなるべし。一足ごとに刻まるゝ別れの、此心を何と申すべき。言ひたき事は山ほどもあれど、此場に迫りていふことも得ならず。人といふものはをかしなものではありませぬか。貴郎は早此里を出れば、我家などは直に忘れてお仕舞なさるべし。男子の胸の中に住むものは、限りもなく廣き世界なるを匂もなく響もなき我家如きものゝ、いつまでお心にとまるべき。さならずや。さならずや。

雄次はいよ〳〵忍びがたくなりぬ。そは情の言はする恨なり。我は此いたいけなる人を何とすべきと、しげ〳〵顔を見詰めしが、其樣なる心なきものと

お思ひなさるゝか。
何故今になりてかゝる言葉の貴嬢の口より出づることぞ。さりとも言ひあへぬ心の眞實は後にぞ思合はす事もあるべき。裏をうつす鏡もあらば、あはれ見せたき今なれど、といへば、さらば少しはお心にかけて下さる事も、といふ。かけずして何とすべきと返せば其中には我身をも、露ほどは數へたまふ事もあるべし。と淀みながらに押す。いかで思はぬ事のあるべき。と言放ちたる聲は強みありて聞ゆ。
英子は冴返る如く嬉しげに貴郎はそれほど情ある方なりしか。昨日の耳は僞なりき。昨宵の目は僞なりき。我は其言葉にて足れり。否、否、足らじとするはそは方外なる望なり。我が夢は今より必ず穩かなるべし。我が朝夕は必ず安かるべし。貴郎は今も尙昔の雄次樣なり。よし寔は然ならずとも、我は必ずと疑ふところなかるべし。
情の言はする恨ならずや。と雄次は再び心の中に繰返しぬ。得知れぬ浪は胸を衝いて沸返れり。雄次の身は置處も知らず夢心地に歩みぬ。右も左も

茶畠なる一筋道を迦りて、松一木千歳の枝をのぶる岡の角に出れば、よろけ鳥居の古社を裹みたる林を中に行くべき方は左右に曲りて左には遙かに家居續きたり。雄次は漸く心付きて、從姉の君が家は彼處の道ならずや。さらば此處にてお別れ申すべきかといふ。英子は聞きもあへず、貴郎は其樣に容易くお別れなさるか。我は今別れんとは思はず。兎にも角にも其處の蘆穗の渡津までお送申すべし。

雄次はしきりに辭退したれど遂には强ひかねて其心に委せぬ。道は漸く窮まりて、海原近き空は遠く、風がもて來る舟歌は絶えて又聞えぬ。英子は又雄次に向ひて、やがて相逢ふといふ望のなくば、いかばかり別離のつらかるべき。とそゞろなる言葉寔に、とのみ雄次は形ばかりにいふ。胸には種々の事を思へり。

木立は早く盡きて浪靜かなる海は前にあらはれぬ。渡津は其處なり。いよいよ暫しのお別れをせねばならぬか。あゝ暫しといふことを許したまへ。貴郎は遠からぬ中に必ず來て下さるべし。必ず來て下さるべし。よし僞な

りとも必ずと仰有つて下され。我は賺されたる小兒のやうに疑ふことも知らず心強くお待申すべし。貴郎は我が心の中を御存じか。よもや其底までは御存じなかるべし。

英子の言葉は打亂れぬ。目には涙をさへ持ちたり。

必ず參るべし。と雄次は我にもあらず誓ひぬ。

渡津に着きたれど人待つ舟も見えず。早出切りたる後なるべし。網干す苫屋の中に入りて一艘仕立てよと命ずれば、齒の白き男の走出でゝ直ちに舟裝ひす。英子は雄次を傍に引きて、流石に人目あれば囁く如く、もしも此後、たまたま我を思出したまふ事もあらば、其時我は必ず貴郎を思ふて居るなるべし。我はいつとても思はぬ折もなければ。

雄次は返事にも困む如く、別れの言葉もそれなりに只行かんとす。英子はもしと呼返して折節は筆の便を必ず。といふ。

又行掛かるを再び呼返しぬ。母樣の許へお出なされたらば、何卒よろしくと仰有つて下さりませ。

行かんとするを又も呼返しぬ。必ずお出を待ちまする。

舟は遂に漕出でぬ。英子は汀に佇立めり。風は鬢のほつれを吹きて蘆の葉の上に亂れぬ。櫓は靜かに浪を分けて、舟は音もせず遠ざかり行く。水幾返り浪幾重、山遠く影遠く、白帆に隱れ、出島に隱れて見えず、見えずなりぬ。英子は尚其處に佇立めり。心なき浪は寄せては返りぬ。

水の彼方の雄次は矢立の筆を染めて、手にしたる扇の上に、「梶の雫堪へがたし」「眺むる空はおなじ雲井か」など、書散らしたるを英子は知らざるべし。時は移りぬ。英子は尚其處に佇立めり。鐘の音は遠く浪を渡りて、立盡したる英子を其中に籠めぬ。

大さかづき

（一）

「實に濟まねえ。濟まねえが父樣こゝだ。こゝん處を何うかマア辛抱しておくんなせえ。三年と言やア長えやうだが、ナーニお前、暮して見りやア造作はねえや。然しお前も取る年だし、其上不自由な身體で居るのを、一人放出して行つた跡ぢやア、さぞ心細からう淋しからうと、思やア我慢にも踏出せねえが、父樣、其代りにやア末があらア。こゝを一番ぐツと踏堪へてくんねえか。己ア屹度遣つて見せる氣だ。同じやうな稼に行つて、立派になつた奴がいくらも有るといふが、己ア其奴等に負けやアしねえ。ぐツと乘越した處へ泳出して見せらア。喃父樣、己が一生の願えだ。諾と言つて一つ己を遣つてくんねえ。

つい此間の事だつけ、佐賀町河岸を虛舟で歸つて來る途中でよ、ふら〳〵ツと

考へ事を初めたが、冒頭に胸へ浮かんだのはお前の事だ。己ア實に意久地がねえ。寄合世帶の彼樣な處へ、一人の親をくすぶらして置いてよ、馴れねえ身體に杖を支かせて、毎日稼がせるたア何う考へても濟まねえ事だ。あゝ、何うかして氣樂な身にさせねえぢやアならねえ。如彼して目が見えなくなつて仕舞つちやア、さぞ世の中が詰るめえ。人一倍面白え事をさせて遣らざアならねえが、それにつけても、いつまで此樣な事してぐづ〱しちやア居られねえ。己ア何うしても船頭で果てる氣は無えや。べらばうめ。鍛込んで五尺の身體だ。氣の利かねえ櫓綱に取着まつて、閼伽の中で老込んでなるものか。うんと乘出せ、世界中が金の山だア。なんぞと思込んで夢中になつてね、船の曲がつたのも知らずに漕いだからお前、河岸に繋つてある高瀨へ突掛けて、先方の舵を打碎はして仕舞つたアな。己ア實にきまりが惡かつたぜ。

何も亞米利加三界まで行かずとも、お前は思ふかア知らねえが、己も又お前の事が氣になるから、なんなら此地に居て遣れる仕事をと思はねえでもなかつたが、父樣、引込思案でいぢけて居ちやア、ろくな稼は出來ねえや。勝藏親分

も己の腹の中を察して、連れて行つて遣らうと親切に言つてくれるんだ。彼人はお前十年から彼地に居て、先方の事は鵜で居るから、先へ行つてまごつくやうな事は屹度ねえよ。己アまあ一人ぢやア、行かうと思つて極めて居るんだ。父様悪いと思つたら言つてくんねえ。相談と言つたのは是だ。己ア死物狂ひで遣つて來るが、何うだお前其間、おッ堪へて待つて居てくれるか。」

思込んで言ふ口元はきり〳〵と締まつて、骨格逞ましく今が血氣の二十一二、行の短かい目盲縞の筒袖からはみ出す兩肱の節くれ立つたのを無造作に組合はせて、据眼に父の答を待つて居る樣子は、いかにも一心を籠めたらしく見える。

差向ひに座つて居る老爺もきかぬ氣の面構へ、剃りこぼつた頭の處々、最早初霜の跡がちら〳〵見えるけれど、岩丈作りの骨節は干枯びた中にも流石に屹として居る。一文字口二段鼻、まだ〳〵確かりした男ではあるが、哀れ兩眼は直と盲ひて居る。

首を斜めに肩を少し怒らせて、我子の言葉をつく〴〵聞いて居たが、「うむ、可

矣豪氣だ。遣付けろ。腕一杯に遣付けろ。梅、手前もいゝ野郎になつたな。手前が左樣いふ氣を出してくるのは己ア實に有難え。ナーニ、あとの事は案じるな。己も男だ。何をくよ〳〵思ふもんか。高が三年や五年の間、ぐツと一寢入して待つて居たつて濟まア。此方の心配は些もいらねえ。今でも鋼鐵の平作だ。己アまだ〳〵老込まねえ。目こそ滿足に遣へりやア、手前と一所に行つて見る位な元氣だ。アハヽヽヽ、行け〳〵。行かねえぢやア噓だ。何でも一番うまく遣つて、己の鼻も高くなるやうな、立派な身の上になつてくれ。己ア今ツから樂みにして待つて居るぜ。」

あゝ、其實平作は疝氣で惱んで、昨夜も一晩寢られなかつた位だ。一昨日も起きられない、身を我慢して杖を力に漸つと仕事に出たが途中の阪で流石の強情も遂にへたばつて、片手に笛を持つたまゝ、辛うじて支いて居た杖に取縋つて、稍、多時は前へも踏出せなかつた。「あゝ己も年を取つた」と、思はず知らず出た言葉もつく〴〵身の衰へを感じたからでもあらう。けれども今は充分の元氣を裝つて物の見事に言つてのけた。閉合つた目は淋しさうに笑を含んで、

我子の方へ向いて居る。

聞いて梅吉はぞく〳〵するほど嬉しがつた。着物に餘る膝頭の前を搔合せながら乘出して、

「父樣、よく言つてくれた。何にも言はねえ忝けねえ。父樣なればこそ左樣いつてくれるんだ。其有難え挨拶に對しても己ア乾度遣つて來るよ。行つて歸つた曉にやア、望次第の贅澤も爲てえ放題させて見せらア、己ア眞箇に腕ッ限り魂限り遣つて遣つて遣りぬく氣だ。」

と思はず拳に力も這入る。平作も身を進めて、

「うむ、うむ、手前なら乾度遣るだらう。あゝ己アいゝ子を持つた。」

「ナニお前、褒めるなア未だ早えや。だが己ア、少しの中でもお前に別れて居るのが實を言やア、嫌だけれど、それを言つた日にやア仕樣がねえ。」

と流石に少し萎れ顏、開く身の思も色には出たが、忽ち變つて聲鋭く、

「べらぼうめ、其樣な氣で可けるもんか。己を見や。此樣な身躰で居るけれど、これンばかりも弱い音は吹かねえ。」

一搖身を搖つて梅吉は又乘出した。目には一雫涙を浮べて、

「父様、有難え、有難え、己ア禮のいひ様も知らねえ。最う逡巡は決してしねえよ。一も二もなく我無者に飛出さア。喜んでくんねえ。」

「それてこそ己の子だ。己ア外に言ふ事アねえ。たゞ確かり遣つてくれろよ。」

「うむ遣らなくつて、何うするものか。」

と聲に力の籠る折節、臺所の方からかん高な女の聲で、

「梅様、今鰻と酒が來たが、こりやアお前が誂へたんだらうね。」

「左様だ〳〵。今そつちへ行くよ。」と、父の方へ振返つて、「父様お前な好の蒲燒が來た。一盃飲んでくんねえ。」

「手前又費えな事をしたな。止しやアいゝに。」

「ナーニお前。」と捨臺辭で梅吉は出て行つた。

平作は唯心の中に、あゝ可愛い奴だ、一日も早く出世をさせて遣りてえ。己の身體は何うなつても構はねえ。うんと氣丈夫にして出して遣らう。己ア最

う澤山だ。先は見えてらあ。これが眞實の娑婆塞げだ。こんなものに氣を置かしてなるものか。左樣だ。左樣だ。

とばかり眉は自然と寄る途端、梅吉は無骨な手つきで膳を持つて這入つて來た。傍に出て居る火鉢を除けて、足の曲がつた能代の膳の緣の、離れて居ない方を父の前へ差向けながら、「さあ父樣、始めやう。いゝか注ぐぜ。」

「うむ、此奴ア御馳走だ。手前の志だと思やア、己ア眞箇にうまく飲めるぜ。」

「左樣いつてくれりやア、酒が活きらア。まあ〳〵重ねゝえな。」

肴といへば鰻と菜漬ばかりだ。器はいづれも滿足なものはない。部屋は素より風穴だらけで、根太は夙から拔けて居るから、腹の切れた疊は、波を打つて居る。天井といへば屋根裏ばかりの、何處も彼處も煤け古けて居る此樣な中にも、金で買はれない春は二人の間にある。

「梅、手前は些も飲まねえぢやアねえか。己ア酌をしてえが勘が惡いから。」

「ナーニ先刻から一人で飲つて居るよ。うむすツかり忘れて居た。己ア此間一寸山仕事を遣らかしてね、儲けた金がこゝに八兩ばかり有る。何かの足

しにお前取つて置きねえ。それから今度行く事が極まりやア、親方から遣す金も少しある。それも皆お前に遣らア。」

盃を下に置いて平作は手を拭つた。

「ナニ己アいらねえ。何日中くれたのも、未だ手を付けねえでそツくりして居らア。食つて行くばかりなら按摩でちやアんと渡れるんだ。其樣に貰つたつて仕樣がねえ。手前それで出稼ぎのお名殘りに、何か前祝でもするがいいや。」

「祝は歸つて來てから思ふさま爲らアな。其樣な事を言はねえで取つて置きねえ。え、よう、折角持つて來たんだ。」

暫く押合つたが遂に取らせた。流石平作は老人染みて、

「手前は何うして此樣によく氣を付けてくれるんだ。己アついぞ親らしい事もしず、野放しに抛出して育てた手前だが、親と思やアこそ斯うして始終……、あゝ子は持ちてえもんだなア。梅己ア決して忘れねえよ。」

此上優しい言葉を掛けられたらば涙もこぼしさうな樣子で、殆ど泣聲で言出

した。首の骨を曲げた事は無えと若い時分言はれた意地も、容易く折れて手をつくのを梅吉は慌てゝ押止めた。

「何だな。止しねえ見ッともなえお辭儀なんぞをして其樣な事をされちやア己ア困つちまはア、子が親にするに何の不思議があるものかな。左樣かと言つたッきりて默つて納つてくんねえ。」

周邊の壞れた火鉢の上に手を負ひながらも湯氣を吹いて居る鐵瓶の中から新らしく燗のついた德利を引拔いて、

「さあ、熱いのが出來た。最う少し飮きねえ。お前まだ些も醉はねえぜ。」

「ナニお蔭でいゝ心持になつた。いつも左樣いふが、手前と飮むと早く醉うぜ。」

「己もお前と飮むほどいゝ心持の事はねえ。だが喃父樣、今に確かり儲けて歸つて、かうして又二人で飮んだら、其時ア何んなにいゝ心持だらうな。」

「左樣とも、左樣とも、早く左樣いふやうにしてくれろ。」

「父樣、一つ差さう。」

「うむ貰はう。」
父も喜び子も喜んで、彼是する中に時も移る、酔へばいよ〳〵大束に出て、さも勇ましく今度の見込を話す梅吉の言葉を、喜んで平作は身を入れて聞いて居る。果は前後も左右もなく、我子の愛といふより外は何も彼も忘れて、其昔寐酒の膳の傍に未だ十歳ばかりの梅吉を引付けて、「梅手前は強えなア」と肴を挾んで與つた時のやうに、何とも知らずいゝ心持になつた。
「最う飲けねえ。すッかり酔つちまッたぜ。あゝ酒はいゝものよなア。何んな時に飲んでも事が面白くなる。こゝが有難え。」
「まだお前餘ッ程あるぜ。ぢやア殘して行かう。そんなら父様いづれ改めて暇乞に來らア。これから歸つて親方に其事も話をして、それから勝藏親分の所へ行つて來やう。」
「最う行くのか。まあいゝぢやアねえか。」
「うむ、又來るよ。」
「左樣か。ぢやア又其中に逢はう。」

梅吉はやがて歸つて行つた。時は早暮方になつて、片隅から次第に暗くなつて來た。豆腐屋の聲と茹出溫飩と賣殘りの鹽辛が入亂れて行く跡から、何處の製造所から出て來たか腹の減つたやうな顏付をした一群が、思ひ〳〵の足並で往還を通過ぎる。路次向では赤ん坊が泣出す、隣の家では膳を踏返す、何の祝か遠くの方で花火の音が聞える、鍛冶屋の槌が鳴渡つて、米屋の臼が響くといふ其中に埋つて平作は柱に凭れながら、半ば眠つたやうにポッチンとして居た。折しも吹起る風の音に、氣が付いて耳をそばだてゝ、

「あゝ惡く風になつたな。梅は住馴れちやア居るだらうが、川ッ端は嘸寒からう。」

楯になつて居る破障子はどッと吹撲られて、今にも飛んで行きさうだ。

「あゝ梅は最う家へ着いたらうか。」

遙かに法華寺の太鼓が聞える。四邊はすッかり暗くなつた。

（二）

號外の呼聲は遠くなつて、いつも通る辻占賣も未だ廻つて來ない宵の取付、左衛門河岸の裏道を辿つて行く一人の女がある。三河屋と大きく假名で散らしたぶら提灯をさげ、棒縞の半天の袖に千草色の包を抱へて、島田は根が重たくつてと言ひさうな銀杏返しに銀の一本插、東下駄の突掛工合にも俠といふ處が見えて、白粉無しの口紅ばかり、少しは御自慢らしい風の娘だ。

恰ど其時後ろから、俯向きながら歩いて來る大男がある　女の足の造作もなく追付かれて、前の娘は何心なく振返つた。

「おやツ、梅ぢやないか。」

提灯を取直して莞爾り見上げる。男はそれと見て忽ち顏を和らげた。

「おゝ、お千代さん。今時分何處へ。」

「何處へも無いもんだ。お前は酷いよ。」

「何故々々。」

「此提灯で誰だか分りさうなもんぢやないか。後ろから來ながら聲も掛けないんだもの。たんと左樣するがいゝのさ。」

「詰らねえ事をいふぜ。己ァ考へながら歩いて居たから前なんざァ見やしねえ。」

「何を考へながら歩いてたの。誰かの事をかえ。」

「止せえ。癪をいふなえ。眞實に何處へ行つたんだよ。」

「いゝ處。」

「話しねえな。」

「何ね、一寸用があつて大富さんの處まで行つて來たんだよ。眞實にいゝ處で遇つたねえ。お前は嫌だらう。」

と擦寄つて一寸顏を見る。見返す梅吉も萬更でない笑顏で、

「馬鹿ァ言ひねえ。さあ、一處に歸らう。」

「直に歸らなくつたつて可いぢやないか。未だ早いやね。眞實に態と拵へたやうに落合つたねえ。私ァ此樣に嬉しがつてるのに、お前は何とも思はない

から平氣だよ。憎らしい。」
と優しく睨む。
「べらぼうめ、男といふものはな、表へ出して其樣にぎやア〳〵騒ぎやアしねえ。これでも腹の中ぢやアな、」
「無據くと思つてるんだらう。お前は不實だよ。」
手を擧げて二の腕をぷッつり、梅吉は大げさに顏を顰めて、
「あ痛え、邪慳な事をするぜ。そんなら一寸何處かへ寄つて行かうか。左樣いへばお前に話して置きてえ事もあるんだ。」
と打解けて物和に出る。さうなると又女の方は拗出して來る。
「何もお附合に其樣な事をしなくつてもいゝよ。」
「其樣な事をいふなえ。おつう惡く出るぜ。最う斯うなつちやア嫌だッたつて連れて行かア。」
と少し御機嫌を取る。お千代は片笑凹に内心を見せながら、
「そんなら負けて上げやうか。」

衆が稽古して居る出格子の家から三軒目に、鳥といふ擦硝子の招牌を掛けた家がある。淺黄の壁に箕垣といふ拵への處から這入つて、飛石傳ひにずッと通れば、安普請の見付ばかりの、鈴虫の籠といふ建築の二階家がある。室は大抵二疊三疊四疊半、大きな胡瓜があれば挿んで遣りたいやうな小間ばかりで、細長い緣側が鉤の手に折曲つて居る。表二階の、裏梯子を下りると、猫の額ほどな中庭があつて、橫手に又一つ小座敷がある。床には贋一蝶の浮世人物、脇に氷柱形の掛花瓶が水も入れた事もないから中は塵埃だらけで、誰が惡戲をしたのか護謨細工の花簪が插してある。

暫くして其室に姿を見せたのは先刻の二人だ。鍋を中に差向つて箸を餘所に談話をして居る、梅吉の煙管の詰つたのを、お千代は通して遣りながら、

「女房がないと如此だから困るねえ。」

「一人ありやア澤山だ。」

「おや何處に。」と白ばッくれる。

「べらぼうめ、外に有るもんかえ。其奴はな、三河屋の娘でお千代と言つてな、

自慢おやなねえが美い女よ。お前まだ遇つた事はねえか。」

「馬鹿にお爲でないよ。お前は何だか當にならないよ。」とは言つたが腹では莞爾。

「これほど惚くなつても未だ不足か。だが喃考へて見りやア氣が咎めらア」

と口三味線で、「大事々々のお主樣、勿體ながら家來の身、

「おほゝゝゝ、久松にしちやア色が黒いねえ。」

と掃除を仕舞つて弗と吹いて見て、

「一服つけて上げやうか。」

「うむ氣が付くな。お前のなら美味からう。」

嬉しがらせはお止しよ。そりやア何うせ中洲の彼人見たいにやア行かないのさ。」

「止しねえ、彼樣なものを兎や角いつたッて始まらねえ。」

「お前は性悪だから油斷がならないよ。」

と言ひつゝ一寸吸付けて、

「さあ」と煙管を差出したが、「おゝ苦い」と顔を顰めて口を拭く。

「ハヽヽ、お前始めてか。誰が外の人に此樣な事をするものかね。」

談話が途切れて食事が始まる。やがて梅吉が差出す猪口に、お千代は手輕く酌をしながら、

「お前先刻私に話して置きたい事があるとか言つたね。何だえ。」

「うむ、そりやア是非話さなければならねえ。少し眞面目な事だ。」

「二人で世帶を持たうとでも言ふ事かえ。」

「其もあり是もあるんだ。」

「おや嬉しいねえ、早くお話しな」

とお千代は乘出す。梅吉は膝を直して、容を改めるといふほどでも無いが、少しきまつて、

「まあ一盃注いてくんねえ。おつと可し、」と一口飲んで下へ置いて、「お前まあよく聞いてくんねえ。己ア見掛けた山があつてね、此頃に遠い處へ出稼

ぎに行く事にしたんだ。」
話出すのをお千代は遮ぎつた。
「一寸待つてお呉れ。お前私を置いて何處かへ行くのかえ。私ア嫌だよ。好い事かと思つたら何だね其樣な事を。」
「まあ聞きねえ。それも一つにはな。親父に他まで樂をさせてえし、一つにはお前だつて、今の己の身の上ぢやア、貰掛けた處が親方がてんから承知もしめえ。そればツかりぢやアねえ己だつても、人に押されねえ身になりてえや、そこで己ア身上を拵へに、一番力瘤で出掛ける心算だ。左樣すりやア暫くの間は、お前にも別れて居ざアならねえ。お前もまあ乘掛つた船だ。それも嫌なら仕方がねえけれど、己を思つてくれるなら、歸る時まで我慢して待つて居てくんねえ。己の爲なりお前の爲だ。ぐツと呑込んでいゝ挨拶をしちやアくれめえか。」
目瞬きもせずお千代は梅吉の顏を見詰めて居る。言終つて梅吉も亦おツと見返した

「そして お前何邊の方へ行くの。」
「グッと乘切るんだア。先は米國だ。」
「米國。」と目を見張つて、「あの大津繪で唄ふ米國かえ。何だつて其樣な處へ行つ仕舞ふんだねえ。私ア嫌だよ。其樣な遠い處へ行つて跡の私を何うするんだえ。私ア嫌だよ。一寸逢ふッたつて中々逢はれやしないぢやないか。嫌だよ。嫌だよ。私ア聞かないよ。」
「分らねえなア、」と眉を顰めて、「それだから事を分けて言つてるぢやアねえか。」
「私は何うせ分らないよ。」と生娘らしいダヾをいふ。
「其樣な事を言つちやア困らアな。冗談ぢやアねえ。落付いてよく考へて見ねえ。」
お千代は聞入れず只首を掉通す。
「私ア嫌だよ。何が何でも嫌だよ。一日だつても私ア離れる氣はないよ。お前それでも強て行くんなら私を一所に連れて行つておくれ。」

「仕樣がねえなア。聞きねえ。そりやア己だつてもな。お前に別れるのは勿論嫌だ。嫌は何處までも嫌だけれど、そこが浮世だ。左樣兩方いゝやうにやア行かねえ。當座の別離を兎や角いふのは、そりやアお前鼻元思案だ。ぐッと先へ目を付けねえ。斯うしてぐづ〳〵萎びて仕舞うか。うんと大ばちな身の上になるか。考へなくつても分るだらう、お前どつちがいゝ。苦勞の爲時ッて言ふ若え年頃をあッけらかんと暮らしてなるものかな。お前も從つていゝ目に遇ふんだ。お前此位な辛抱が出來ねえか。」

未だ肚に嵌らねえかと、顏に言はせて屹と見込んだ。流石にお千代も折て來て、さう我儘も言はなくなる。

「それなら何うしてもお前は行くの。私はまあ何うしやうねえ。」投首で萎出したが、「そしてお前何の位の間行つて居るの。」

「見込をつけた處は三年だ。」

「え、三年。」と又目を見張つて、「そんな長い間顏を見られないのかえ。私ア嫌だよ。嫌だよ。嫌だよ。」

と又蒔直しをする。
「そこが辛抱だ。お前の肚は分つてるが、こゝは何うしても己を立てゝくれなくッちやアいけねえ。」
「お前は自分の勝手ばかり言つてるよ。分つてるとお言ひだけれど、お前私の身に成つても御覧な。其間私アまあ何んなだと思つて居るの。些はお前察しておくれよ。」と心細い聲で言出す。
「尤だ。そりやア己も思はねえぢやアねえ。」
太い聲もいくらか物優しくいふ。お千代は尚もしんみりと、
「私のやうなものだつて、お前可憫さうぢやないか。私ア何うしても離れる氣はないよ。お前は平氣で私を置いて行くほど、それだけ情がないのだよ。彼地へ行つたらお前又浮氣をお爲だらう。」と怨言まじり。
「べらぼうめ。其樣な氣樂な事が出來るもんかえ。最う文句はいらねえ。待つか待たねえか返事をしろ。嫌なら嫌でいゝや。勝手にしねえ。」
と癇癪聲、お千代は吃驚して顔を見上げた。

「あらお前怒つたの。」
「怒りやアしねえけれど、何時までも形がつかねえからよ。己ア其樣に優長にしちやア居られねえ。」
「お前は何故さう氣強いのだねえ。私ア待たないとは言はないよ。けれどもお前、別れるのが辛いといふ私が惡いかえ。」
「だつてお前仕樣がねえや。」
「私ア何うして可いか分らなくなつて仕舞つたよ。それなら何だね、斯うして談話をするのも最う僅の中だね。私ア最う何だか悲しくなつて……。」
「左樣言つてくれるな。己だつてもお前を忘れる空はねえ。」
顏を見合せて暫く無言、目は互に物を言つて居る。流石女氣のお千代は涙梅吉はそれなり俯向いて仕舞つた。德利はいつの間にか冷たくなつて居る。

（二二）

立並んで居る船宿の中で三河屋が一番早く起きた。今日は梅吉がいよ〳〵行くといふ日だ。立振舞の酒を出して、親方は目出度く門出を祝つてくれる。朋輩の誰彼も、ぢやア達者で行つて來ねえと、言葉は淡白して居るが充分實意を含んで、銘々に別離の心を酌交はす。そんなら是から親父の處へ暇乞にと、漸く其處を立出でたのは未だ朝汐の引かない時分であつた。

河岸には始終上乘りをした舟が、舳を並べて繋つてある。水は無心に流れて行く。朝霧を冠つて居る厩橋は墨繪のやうで、向島はたゞ髣髴として居る。あゝ、數へて見れば幾年越、朝夕となく通馴れた處、今が別れかとつく〴〵見渡せば、勇む心も流石にたぢろいで、暫く其場を去りあへず佇立んで居た。水に曝れて腐込んで居る杭に古簑の破れたのが引掛つて居るのも、心あつて目を付ければ何となく裏悲しくも見える。

思返して漸く歩出した。親父の方へ行く前に梅吉は一つ寄る處がある。先づ

刻家の首尾を拵へて三河屋を一足先に出て行つた人がある。梅吉は其人と落合はなければならぬ。梅吉は急ぎ足になつて其方へ行つた。只有る淋しい町の二階で、梅吉の上がつて來る影を見るより、待つて居たよとばかり飛立つて迎へた人がある。それはお千代だ。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

「あのねえ。これは紫繻子で異しいけれどねえ、昨夜私が秘密で拵へた胴巻だよ。先達よく締めて居た帶を破したんだから、お前後生だから何うぞ身につけて行つておくれな。其中にお金が少し這入つてるよ。それはお前も知つてる田舍の叔母さんがね、何か買へつて私にくれたんだよ。それから水天宮樣の護符も這入つてるよ。それからね、大變あつかましいけれどね、」と一寸羞かしさうに笑つて「私の寫眞も這入つてるよ。」

「そりやア種々と有難え。帶を胴巻とは妙に思付いた。歸つて來るまで肌身を離すめえよ。其金は己アいらねえ。」

「左樣いはないで私の心意氣を受けておくれよ。少しばかりだけれどお前

の何かの足しになつたと思へば、私ア何んなに嬉しからう。私ア知つてる通りおッ母がふんだんだから、それが無くつても少しも不自由はしないよ。」

「ぢやアまあ貰つて置かう。あゝお前も己のやうなものに掛り合つたが因果で、いろ／＼氣を遣はせると思やア、己ア眞箇に氣の毒でならねえ。」

「其樣な事はいゝけれど何うぞねえ、一つ事を五月蠅くいふやうだが、お前彼地へ行つたら身體を大事にして、屹度病つておくれでないよ。何うぞ早く歸つて來てねえ、一日でも早く喜ばせておくれ。それにしても、最う直に別れなければならないかと思ふと、私ア眞實に堪らなくなつてくるよ。」

「そりやア己だつていゝ心持はしねえ。」

「何だつて今日に決めちまつたんだねえ。」

「其樣な事を言つたつて仕樣がねえ。だが喃、己アお前といふものがあるので、先方へ行つてからも何んなに勵みになるか知れねえ、言ふまでもねえけれど、お前も身體を厭つてな、必ず達者で居てくんねえ。己ア行つて仕舞つてからは、歸つてお前の笑顏が見られるといふのが最上の樂みだ。」

「私ア別れるのが實につらいよ。」

「最うそれを言つてくれるな。無理にも笑つて見せてくんねえ。」

「何うかして最う一日延しておくれな。」

「其樣な事を言つちやア切はねゑ。勝藏親分は新橋で待合してる筈だ。最う何うにも拔差はならねえ。」

「仕樣がないねえ。お前最う外に言置く事はないの。私ア言ひたい事だらけだけれど、何だか胸がつかへて仕舞つて……。」

「己も何だか別れともねえけれど、最う左樣しちやア居られねえ。」

「其樣に早く行つちやア嫌だよ。」

「それだつてお前……。」

「私ア寧そお前と一處に行つて仕舞ひたいよ。」

膝に縋つて、お千代は泣伏す。亂れかゝつて居る髮と眞白な首筋を梅吉はぢッと見詰めて居たが、思はず知らずはらりと一雫衿元へつい振落す。お千代は濡優る顏を上げて、

「お前も泣いてくれるのかえ。」

と涙で一杯な目に見上げたが、「お前と梅吉の諸手を把つて、

「忘れてくれちやア聞かないよ。」

「そりやア己も屹度賴むぜ。」

把合つた手は容易に離れない。稍〻多時は其まゝ言合したやうに顏を見詰めて居る。漸く氣をかへて梅吉は遂に引離した。

「あゝ、斯うして居ると何だか行きたくなくなつて來る。己ア一思に出掛けるよ。ぢやアお前、達者で居ねえ。」

と立上つた。お千代は無言で裾を押へて居る。

「とめてくれるのは嬉しいけれど、それぢやア己ア困らアな。よ放しねえ。」

お千代は尙確かり押へて、忍音に唯泣いて居る。しやう事がなく梅吉は再び座つた。

逢ふの嬉しさ別れのつらさ。思ふ中なら道理ではある。だましつ賺しつ。漸くの事で納得させて、梅吉は遂に往還へ出た。お千代はいきなり手摺の處

へ駈出して手巾を嚙〆めてぢッと見送つた。梅吉も又振仰いで、見れば思へば流石に引かされる。無言で挨拶すれば涙で答へる其いぢらしさには、踏出す力も一時はなくなつた。

「畜生め、おつう遣るぜ。」

と車力躰の男は聞えよがしに言つて過ぎた。梅吉ははッと急足にきまり悪さを隠す。お千代も同じく中へ逃込んだが、細目に引開けた障子の間から、目は何處までも後姿を離れない。鴈が共音に鳴連れて行つた。

（四）

「そんなら父様。」と梅吉は出掛ける。

「うむ、最う行くのか。勇んで行きねえ。文句はいらねえが、うまく遣つて來てくんねえよ。」

聲尻たしかに父は元氣よく言放つ。子は其顏を見詰めて居たが、

「父様、如才もあるめえが、何うぞ先刻言つた事をな。」

「うむ、呑込んで居るよ。最う何も氣に掛けるな。あとへ心を殘すやうぢやア、先へ行つて踏張つた仕事は出來ねえ。己の事は決して案じるにやア及ばねえよ。大丈夫だ。目こそ不自由で些少とひけるが、身躰はいつでもシャンと來いだ。さあ行きねえ。ぐッと景氣をつけて行きねえ。」

「うむ行くよ。ぢやア父様無事で。」

意を決して梅吉は行きかけたが、名殘惜しさについ振返る。今まで屹として居た平作は、樣子を變へて急に立上つた。

「あゝ梅、」と見當の違つた方を招いて、「一寸待つてくれ。」
聞くまでもなく梅吉は驅戻つた。見詰める目には有餘る心。
「父樣、何だ。」
我知らず平作は梅吉の肩へ手をかけて、
「梅、笑つてくれるな。別れに何うかして一目手前を見てえが、そりやアとても出來ねえ事だから、せめて手探ぐりにでも能く覺えて置かうと思ふんだ。梅、親の心だ、探らしてくんねえ。」
「うむ有難え。己も最う一遍よく父樣を見て置かう。」
覺束ない手で平作は撫廻はした。梅吉はいふに言はれぬ悲しさを覺えて、鷲掴にして居た手拭で竊と目の縁を拭く。
「父樣、お前よく分るか。」
分るとも。手前己が目の利いて居た時分と些少も變らねえな。あゝ小氣味よく肥大つてるぜ。何うぞ此身躰を痩せさしてくれるな。」
身躰を抱くやうにして、見えない目で暫く見詰めた。

「梅、己ア眞實に手前を可愛がつたぜ。」
「己だつても喃、一日もお前を思はねえ日はねえ。」
「達者で居てくれろよ。」
「お前も尚更身を大事にしてくんねえ。」
「梅……。」
「父樣……。」
「あゝ目が明きてえなア。」
はら／＼と落つる梅吉の涙は、肩へ横にかけて居た平作の手首を濡した。平作は心付いてはッと引離れた。
「あはゝゝゝ、つい下らねえ愚痴になつたぜ。よしねえ事をした。さあ、一つ笑つて別れやう。」
梅吉は返事もせず唯顏を見て居る。
「梅、何をして居るんだ。」
「己ア最う些少こゝに居やう。」

「えゝ思切の惡い。梅、未練だ。何をぐづ〳〵して居るんだよ。其樣な事ぢやアいけねえ。最つと威勢をつけやな。未練だ〳〵。」

未練だといふ平作にも未練は充分ある。勵ます口の下からも、別れともない色は穗に顯はれないまでも見え透いて居る。形ばかりに二人は又別れの言葉を交はした。梅吉は未だ其まゝ立つて居る。平作は遂に手を把つて外へ押出した。

「いづれ目出度く會はうぜ。」

笑つて見せてピッシャリ障子を閉めて仕舞つた。梅吉は無據く歩出した。二三間踏出して礑と立止つて我にもあらず振返つたが、それなり又駈戻つて來た。

「父様、父様。」

平作も實は障子の蔭で、竊かに耳を欹立てゝ居た。

「何だ。未だ其處に居るのか。何をして居るんだなア。」

とは言つたが急がはしく障子を引明けた。梅吉は直と身を寄せて心を籠め

た目にしげ〳〵と振仰いで見た。

「父様最う一度顔を見せてくんねえ。」

（五）

木枯の果が帆柱の森を鳴らして、沖の鴎も何處へか見えなくなつた冬の晝過、梅吉は遂に横濱を出て行つた。追手の風が殘る烟を吹撲つた跡は渺茫たる水と雲ばかり、汽笛の聲も半ばゝ大平洋の方へ散つて仕舞つた。波止場の浪は寄せて返して、其後外國船は度々來たが、言つた通り三年の間彼は歸つて來なかつた。

桑港へ着いてからの彼の歴史は、勞働の歴史である。彼は腕の續く限り有らゆる力役に身を委ねた。彼が一念は天晴稼出してといふより外は無い。斯くして半年餘りに漸く百弗の金を得たけれども。此ばかりの事で兎ても滿足しては居られない。「こんな道を拾つてちやア仕樣がねえや。」と終りに言放つて、更に荒い稼ぎに目を付けた。彼は一轉して獵虎船に乘組んだ。

ベーリング海の波濤はしば〳〵彼を呑まんとした。張りきつて居る彼の氣は更に危險をも感じなかつた。アラスカの雪を渡つて横手なぐりに吹く風

に海は黒吼に吼えて、寒暖計も爲に凍りつめる寒さの中に、彼は一意奮つて事に從つた。絶海の荒磯際に見るものとては何もない。耳も劈く怪しげな鳥の聲を聞いて、遙かに浪を蹴つて行く一群の鯨を眺めながら、一盞のヂンに辛くも勞を慰める位が山である。それぱかりにも滿足して、彼は飽くまで辛苦に堪へた。

幾度か彼は故郷を想起したであらう。あはれ老に臨んで明を失つて、憂世の渦中に一人格鬪して居る父の上を、彼は思はずには居られなかつた。今一人取分けて心を惹く人が、此方の空を見詰めて唯待焦がれて居る姿を、幾度か彼は現に見たであらう。されど彼は離れて居る間、よしない物思をしまいと決心した。彼は其思を紛らす爲に、進んで忙しい中に身を置いた。彼はたゞ閑暇を恐れた。其上にも有りと有らゆる手段を求めて、それからそれと心を移した、人の思の斯くしても止まるものではない。彼は身を休める直に酒を飲んだ。彼の酒量は非常に上つた。醉つて其儘寐てしまつて、目が覺めるや否や寸時の猶豫もせず飛起きて働いた。

運よくも意外の獲物は日頃の十倍に越えて、乘組員は皆多額なる配當の仕合を喜んだ。多獲の船が着くといふ報知は早くも桑港に來て、是等水夫の上汁を吸はうといふ輩は、手ぐすね引いて待網を張つて居た。されど梅吉は骨牌の席へも臨まなかつた。紅帳の家へも行かなかつた。一瓶のブランデーに疲れを醫して、醒める直に他の仕事を求めた。何處を何う潜り込んだか、彼は熊坂松と綽名された下田生れの男と共に又も或る秘密の船に傭はれた。彼は並外れたる報酬にかへて、拔賣の仲間へ入込んだ。

彼はそれより北米沿岸の津々、浦々を航海して廻つた。一行の仕事は闇の夜である。彼は最もよく其職を盡した船員の一人である。船長の滿足は彼に非常の好遇を與へた。彼は其下に立つて最も大膽に最も敏活に働廻つた。其健腕と其勇氣とは、あまねく船中の稱する所であつた。斯くして彼は遂に太平洋を横ぎつて濠洲へと押渡つた。

彼は船長に愛せられて次第に無二の幕僚となつた。再び桑港へ歸つた時、人人は莫大の利益に從つてそれ〳〵の配當を得て、多くは此船を立去つたが、彼

は尚留つて片腕と賴まれて居た。三たび桑港へ歸つた時は彼が豫て定めた三年の期限であつた。彼は强ひて止められたけれど押して船長の許を辭した。船長は給料と利益の配當との外に餞別として更に夥だしい金を贈つた。上陸しても彼は長く其地に留つては居ない。彼は既に其目的を達した。かの紫繻子の胴巻の中には合せて今三萬弗の手形がある。勝藏親分の許へ行つて充分の禮をして父とお千代とにと目を驚かすほどな土産物を買つた後、彼は直ちに歸國の途についた。日は花やかにテレグラフ、ヒルの燈明臺を射る冬の朝早く、チャイナ號は彼を載せて海原の霧を分けて行つた。

船を共にして歸朝する同國人の中に兩人の紳士がある。彼等は歐洲から廻つて來た人々である。一人はグラスゴー大學出のバチエラー、ヲブ、サイエンスで、一人はリオン大學出のドクトル、アン、ドロアである。幾年かの修學によつて得た學位と名譽とは其兩肩にからまつて彼等は如何にも得々として見える。されど其得々たる點に於ては梅吉も更に讓らなかつた。彼は兩位の紳士よりは尚大なる艱苦を凌いだ。愛嬌のあつた彼の眼からは、人を射る鋭

い光が出て、ふつくりとして笑ふやうに見えた顔も、いつの間にか淋しくこけて仕舞つた。骨折からいへば梅吉は今日の結果を此紳士達よりは或は高く買つたかも知れぬ。けれども彼は少しも其事は思はなかつた。己は己だけの事を遣つてのけたんだと、彼は實に得々として居た、あ、彼が滿腔の喜びは今何れほどであらう。彼は一直線に日本の客を見詰めた。波は浮いて雲は懸つて見渡す限りたゞ縹渺として居る。チヨッ、此船はべらぼうに遲いおやねえか。

（十八）

「し、し、し、しッ、しまつた。父様は、あの父様は、な、な、亡くなつて仕舞つたか。情けねえッ、何故死んだ何故殺した。己ア……、己ア……、己ア……、むゝゝゝゝ。」無念の歯噛に身を震はせ、拳を握んで突立つ梅吉、其まゝ犬居に撞と仆れる。太助も何と慰める言葉もない。

「尤だ。尤だが何といふにも過ぎた事だ。約束事と諦めるより外に仕方はない。お前の腹ぢやァ成程そりやァ済むまいが、斯ういふ事が世間にもよくある。それだけ残念がつて居るお前の心持で、平様も浮ぶといふものだ。諦めなさい。諦めなさい。」

梅吉は殆ど前後不覚で、人前も構はず男泣きに泣出した。手を付けかねて太助は見て居たが。

「そんならお前平様の事は些少も知らなんだか。

哀悼の涙に亂れて梅吉は尚夢中で居る。

「父様、何故死んでくれた。何故死んでくれたよう。愚痴を言ふぢやアねえけれど、三年の辛苦は何の為だ、何故我慢にも待つてゝくれねえ。こんな事になると知つたなら、先の長え己の身體を何あせつて踏出すものか。く、く、口惜しい。己ア口惜しい。思ふお前を先立たして、何うして己が濟むと思ふ。父様恨みだ、何故死んでくれたよう。あゝ何故死んでくれたよう。」

又も聲を擧げて正體もなく泣出した。顔は熱して火のやうになつて、最早拭はうとも爲ない涙は、滾々として其上を押流れる。氣の毒とばかり太助は宥め顔に、

「いくら歎いても仕様はない。取つて返しの出來ない事だ。是非もない運と諦めて、喃、思切つて目を拭いて仕舞ひなさい。」

梅吉は漸く涙の隙から、

「今更泣いたつて追付かねえけれど太助さん察してくんねえ。己ア此様な筈で歸つちやア來ねえ。己ア此胸が實に張裂けるやうだ。」と落ちかゝる涙を拂つて、「太助さん、己が行つてから後の事をお前知つて居なさるだらう。

後生だから聞かせてくんなせえ。」
「それも話せば涙の種だ。然しこりやアまあ追て話さう。此上お前の歎を見るのも氣の毒だ。」
「構はねえから話してくんなせえ。ザッとでも可い。聞きてえから。」
「それぢやアまあ皆打明けて話して仕舞はう。聞きなさい。斯うだ。お前が出掛けてから當座の一年足らずといふものは、何も彼も極々無事でな、平樣は每日稼業に出るし、一所に居る彌太郎夫婦も、知つてる通り惡氣のない人達だから、出來るだけは隨分世話もする。あの儘で行けば何もないんだが、こゝが平樣の運の惡い處だ、恰度冬の取附だつけ隣家の土方の處から火事を出してな、あッといふ中に家は全燒だ。平樣は其前に出掛けて夢にも知らないで、歸つて見ると着て居るものより外に何もないといふ始末さ。彌太郎夫婦も仕樣がないので、田舍へ引込んで仕舞ふといふ事になる。並々のものならば實に途方にくれるといふ處だ。だが平樣は如彼いふ氣性だから、「灰になりやアそれ迄だ。惜しいと思ふ身代でもねえ。あはゝゝゝ。」ッてお前笑

つたぜ。私も心易くした中だから、兎も角も梅様の處へ知らせて遣つて、後の相談でもしなければ早速困るだらう。」と種々言つて見たが平様は一向聞入れないで、「ナニお前梅は今一處懸命に稼いでる處だ。此様な事を聞かせて餘計な心配をさせたくねえ。彼奴はお前親思ひだから、知らせて遣りやア直に跡つて來る。左様すりやア折角遣りかけた仕事も、中途で止めさせて仕舞はざアならねえ。此位な事で己ア彼奴の邪魔アするのは嫌だ。遣る處まで思ふさま遣らして見てえ。眞箇によ此處から若し聲が屆くものなら出來るだけ威勢をつけて遣りてえのだ。ナニ己ア一人で何うにかするよ。食ひさへすりやア、生きて居るんだ。譯はねえやな。」と斯う言つたぜ。」

「うむ、それほど迄に己を思つてくれたか。あゝ父様、己アこれといふほどの恩返しもしねえに、お前は何うして左様己を可愛がつてくれるんだ。」とばかり重ねて目を押拭つて、「うむ、それから。」と又聞きかける。

「それツきり平様は誰にも知らせずに、何處かへ行つて仕舞つたぢやァないか。私も一人で唯心配して居ると、それから恰度三月ばかり經つてひよツく

り私の處へ訪ねて來た。驚きながらも先づ〳〵安心して、何處へ行つて居たと聞いたが其事は一向言はず、見れば樣子もひどく窶れて、顏の色も心細いほど惡いんだ。氣になるから聞いて見たが。何ともねえとばかりで其も言はずさ、自分の苦勞は全躰いはない人だからと思つて、慰めるやうなまあ話をして居ると、「實はお前に少し賴む事があつて來たんだ。」と言ふから、「私のやうなものだけれど、出來る事なら及ばずながら賴まれやう。」と言つて私も膝を進めた。

すると平樣のいふには、「此樣な事を言出しちやア早まり過ぎたやうで、何だか臍ツ玉の小せえやうにも聞えるが、人間といふものは脆えもので、いつ何時どんな事があるかも知れねえ。己も此頃は年を取つて愚痴になつたよ。そこでお前に賴みと言ふのは外でも無え梅の事だ。ひよツとして己の亡え後に梅が歸つて來たならばね、己の心を何うぞよく傳へてくんねえ。己アね、斯うして居ても絕間アなく思出すのは梅の事だ。實を言やア……」と言掛けたが氣をかへて、「そりやアまあいゝや。梅に斯う言つてくんねえ。己ア梅

が一生懸命に稼いで居てくれると思つて心丈夫に其日を送つて居た。處で或日の事、梅が立派に出世した夢を見て、(此夢は眞實に見たんだ)いゝ心持さうに笑つたッけが、其日に目出度く往生したと、忘れずに屹度言つてくんねえ。くれ〳〵もお前頼むぜ。」

これで外に心殘りもない。とばかりで直に歸りかけるから私は慌てゝ止めた。第一居處も聞かないで、それに何だか心元ない容躰の儘で別れて仕舞ふ事は私は何うしても出來ない。そちこちして居る中に晩方にもなる。足元も危ないからと漸との事で引止めて、其晩とう〳〵家へ泊めたが、」

こゝまで續けて太助は俄かに言葉を止めた。暫くして鼻を詰らせながら、

「その翌朝の事だつけ、」

とばかり後を繼ぎかねて、竊と梅吉の顏を見る。聞く身の素より覺悟はして居ても、弱いは流石に子の心、梅吉は總身を我と引〆めて、聲は立てないが苦しげに唸いて居る。太助は目をしばたゝいて、

「私は委しく言ふ事は出來ない。實に其、俄かの事でな、私も其時は何うしや

うかと思つたよ。それッといふので醫者の處へ人を飛ばして遣つたが、最うそれも間に合はずさ。見る中に平樣は土氣色になつて、囈言のやうな事ばかり言つて居たが、いきなり頭を持上げて、「梅を、梅を、呼んで來てくれ。早く呼んで來てくれ。」と最う正氣もなくなつて來た。其中に「水を〳〵」といふから、急いで一杯遣るとごッくり咽へ通つたが、うんと身悶えして一尺ばかり乘出して、ほッ、ほッ、と苦しさうに息切れをさせながら、「梅や。梅や。」と二言ばかり言つて、兩手を出して空を掴んだ。」

「た、た、た、澤山だ。最う其あとは聞かせてくんなさるな。」

庭の紅葉は心なく散つて居る。堪へかねたる咽押破つて、一聲絞る梅吉の悲鳴に、折しも往還を通りかゝつた巡査は、何事と思はず足を止めた。空もいつしか一時雨、其雲の色。

（七）

梅吉は實に暗黑の底へ投込まれた。彼は其中に埋つて出やうともしない。が其暗黑の上に、闇を照すべき光明が一つある。梅吉は此世の中に今一つ慰むべきものを持つて居る。愛の手は此時彼が胸の中にある琴の糸に觸れて美妙の力を以て彼を喚覺ました。彼は始めて首を回らして他の方面に目を付けた。此上はたゞお千代に逢つて、あはれ此歎を忘れんものと、漸く氣を取直して見れば憂きに堪へぬ心は苦みを免れん爲に彼を驅つて、直ちに三河屋へと道を急がせた。

あゝ其途中である。恰度聖堂前へ差懸つた時、向ふから來る一群の人があつた。結城の羽織に同じ小袖、腹懸股引の裾をからげて、女夫鼻緒の草履をいなせに突掛けて居る三十恰好の男は、其群の頭分といふ樣子で先に立つて、後に付添つて來る四五人の野郎共、一盃機嫌の顏を彩つて、中の二人は折を下げて蹌踉々々して居る。小脇に一人、荒木の中に花の色を見せて、派手を裏に着飾

つて居るのは、此頃丸髷に結つたらしい未だ年若な女、前の男に何事か話掛けて嬉しさうに莞爾笑つた。梅吉は何心なく其女の顏を見たが、愕然として思はず歩を止めた。それは紛れもないお千代である。風采、容態、爭はれぬ丸髷、見る／＼梅吉の腸は煮返る。己れッとばかり齒を喰ひしばつて、道の眞中へ仁王立に突立つた。

近づくまゝにお千代も心付いた。はッと流石に一足退つて、我にもあらず前の男の顏を見たが、咄嗟の間に思案を定めて、態と何氣なく落付いて見せた。胸はもとより人知れず轟きながらも、平氣な顏で餘所見をしながら足も慓へず寄つて來た。

「オイ、お千代さん。」

靜かには言つたが根に含む怒氣を樣子に見せて、梅吉は屹とお千代を睨付けた。一群の目は一齊に梅吉の上に集つた。

「おや梅かへ。お前まあ何時歸つたの。先刻生家へ寄つたけれど、其樣な話は些少もなかつたから、私ァ未だ彼地に居るとばかり思つて居たよ。お前何

だとねえ、彼地で奇麗なお内儀を貰つて、大そう仲好く暮して居たとねえ。いづれ此地へ一處に連れて來たんだらう。逢ひたいもんだね。」

「やい〳〵。そんな手で丸められるやうな梅吉じやアねえぞ。己ア、よくも己の面へ泥をなすりやアがつたな。」

「お戲けでないよ。泥をなすつたとは何だえ。人聞の惡い大概におし。私アね亭主がある身だよ。詰らない冗談を言つておくれでない。未だ三河屋の娘だと思ふと些少と違ふよ。お前なんぞに指でも差される覺えは、これんばかりも有りやしない。躰よく挨拶して遣りやアいゝかと思つて、生家の父の耳へでも這入つたら、お前は何んな目に遇ふか知れやしない。」

其ぬけ〳〵とした脣からは嘗て燃ゆるが如き情を含んだ言葉が、そも〳〵幾度出たであらう。手の裏返す冷熱は單に人前といふばかりであらうか。千計萬策は今お千代の腦裏を馳廻つて居る。

「お千代何だ。」と彼の親分らしい男は問掛ける。

「姉御何でがす。」と一人が差出るあとから、

「一躰何うしたんで、」

「何ね、お前さん。」とお千代は前の親分に向つて、「此アね、前に生家で使つて居た梅ッて言ふ男なの。お前さんの思はくも有るわ、私ア口惜しくつてならない。大方いつか肱を喰つたのを遺恨に思つて此樣な事を言ふんだらうが……。

「此阿魔ア。」

梅吉は猛り立つて飛掛つた。見るより親分は割つて這入つた。

「何しやがるんでえ。」

いきなり梅吉の横ッ面をくらはせる。梅吉も氣は立ちきつて居る。忽ち一場の格闘が始まつた。ついて居る野郎共はそれッと言ふより酒の勢は充分に加はつて、各自に親分を助けて打つてかゝる。拳固の雨は梅吉の眞向に隙間もなく降注いだ。黒鐵作りの筋骨ではあるが、多勢に無勢の仕方はない、梅吉は遂に撲倒されて、息もつかれぬほど散々に打ちすくめられた。

「ざまア見やがれ。さあ行かう〳〵。」

あとには塒を急ぐ鳥と五六人の人立、漸くに身を起した梅吉の顔は、脹上つて衣服は寸裂々々に裂けて居る。痛むほど尚沸返る無念に、血走る眼逆立つ鬢、噛む脣に一筋血を引いて、最早見えぬ後影を睨詰めたが、

「己何うするか見やァがれ。」

（八）

月夜も暗い木の間を潜つて、蔽重なる落葉を蹴散らして出て來た一人の男が、小脇に抱へて居るものを摚と投下した。此處は上野の森の裏手である。夜はしん／＼と更渡つて遠くの梢の木兎の鳴く聲が、何となく凄味を添へて居る。

投下されたのは女である。口には猿轡を嵌められて、後手に嚴しく縛められて居る。男は衿元を取つて引据ゑた。

「やいお千代、此處で恨を霽すんだ。付覗つてるとも知らねえでうツかり遠くへ出やアがつた踊り道、捕捉めえたが百年目だ。改めて言ふにやア當らねえ。己が胸に覺えがあるだらう。よくも心變りをしやアがつたな。己ッ、己ッ、己ッ。」

二度三度力まかせにこづき廻して、うんと高蹴に蹴返した。嗚呼、これは梅吉である。やがて腰を差して居た出刄を引拔いて卷いてある手拭を解放した。

「やい。こゝ一時が此世の別れだ。覺悟をしやアがれ。」

逆手に持つて振冠つた。折しも雲間を離れた月は、磨ぎすました刄の上にきらりと宿つて、同時にお千代の眞向から、名殘りとばかり優しい光を投掛けた。四邊はたゞ闃として居る。霜の碎ける音がいとゞ冴えて聞える。

梅吉は屹と見下ろした。お千代は最早惡びれない。流石に顏を得上げないで壞れた髮をがつくりと横へ曲げて哀れな姿で死を待つて居る。梅吉は鬚を摑んで傾向かせて、再び屹と顏を見た。あゝこれが寐ても覺めても忘られなかつたお千代である。あはれ我が半生の幸福を分けてと、樂みに樂んで歸つて來たお千代である。顏も容も其以前命から二番目のものであつたお千代と、それに付いて變りはない。梅吉は其まゝ暫くぢッと見詰めて居た。あはや血を貪る出刄はずんと下る。途端に梅吉の手は躊躇らつた。片手はいつか髻を離れて、たぢ〳〵と二足三足あとへ退がつたが、出刄を捨てゝ撞と坐を組んだ。

月は皎々として高く冴渡つて居る。森を搖動る風は木の葉を捲いて、やがて

何處へか消えて行つた。夜はいよ〳〵深くなつて最早寂寞を破るものもない。

矢庭に梅吉は立上がつて、づか〳〵とお千代の傍へ行つた。

「やい。よく聞け。手前の命は最う無えものだ。此出刄で一つ剜りやア、それで此世はおさらばだが、己ア手前をな己の手にかけちやア殺せねえ。己ア此樣に踏付けにされても、眞から手前を、」と口惜しさうに涙をこぼして、「憎いと思つ、ちやア居ねえのかも知れねえ。えゝい、其樣な事ア言はなくつても可いや。さあ早く歸れ。歸つて亭主に實を盡せ。」

手早く束縛を解放して一寸顔を見込んだが、其まゝ足早に行つて仕舞つた。

お千代は夢に夢を見たやうで茫然として稍暫く佇立んで居た。始めて、眞から惡かつたといふ一念は其時さながら堤を切放したやうに押上つて來た。我知らずばた〳〵と前へ駈出して、夢中になつて梅吉の跟を追つたが、最う影も形も見えない。

「梅、梅さん、梅吉さアん。」

お千代は殆ど絶叫した。けれども返事は更に無かつた。若し引返して來る足音もと、お千代は耳を欹立てた。四邊は底の底まで闃として居る。

「梅吉さアん。梅吉さアん。」

再び聲振絞つて呼立てた。答へるものは風ばかりだ。木兎が又鳴初めた。

「梅吉さアん。」

三たび根限りに呼んて見た。其聲が反響にひゞくばかりだ。月はたゞ冴返つて居る。木枯は亂れた横鬢を吹撲つて行つた。

翌る日の朝早く、大川端にわや／＼と人立ちがある。勝手な事を口々に言つて、眉を顰めるものもあれば笑ふものもある。物見高い市中の事、人の頭は忽ちに黑山を築いた。今しもゆくりなく通掛つた梅吉は、思はず其方へ目を付けた。人々は今其處へ漂着した溺死人を、寄つて群つて評して居るのだ。一目見て梅吉は色を變じた。嗚呼、それはお千代の亡骸であつた。

（九）

なみ〳〵注げば滿五升、猩々倒しと銘を打つた大盃を提げて、市中を徘徊する一人の男がある。口を開けば彼はたゞ「酒だ」といふ。二言めには「酒の事だ」といふ。彼は到る處の酒屋へ飛込んで、其大盃に滿を引いて飲んで廻つた。覺めれば直に飲む。覺めずとも追掛けて飲む。彼は酒と討死せんずばかりの樣子で醉つて〳〵醉ひつぶれた上にも、尚引掛けて飽くまで飲む。二六時中彼は盃を離した事はない。彼は酒の中に其身を葬つて終らむとした。彼は何者であらう。

かくて其後時を經て、彼は其大盃を枕に、大の字なりに踏反りかへつた儘、最期の言葉もなく息の通ひを止めて仕舞つた。酒精中毒との診斷の下に、彼は敢なく淺はかなものにされて、程もなく只有る寺の土となつた。松吹く風は颯颯として居る。誰一人後を弔ふものもない。消えて行く霜。

書記官

（一）

笹に媚る野萩の下露もはや秋の色なり。人々は爭ふて歸りを急ぬ。小松の溫泉に景勝の第一を占めて、さしも賑合へりし梅屋の上も下も、尾越しに通ふ鹿笛の音に哀れを誘はれて廊下を行交ふ足音も稍、淋しくなりぬ。車のあとより車の多くは旅鞄と客とを載せて、一里先なる停車場を指して走りぬ。膳の通ひ茶の通ひに久しく馴睦みたる婢共は、流石に後影を見送りて暫し佇立、めり。前を遶る溪河の水は、淙々として遠く流れ行く。彼方の森に鳴くは鶫か。

朝夕のたつきも知らざりし山中も、年々の避暑の客に思はぬ烟を增して、瓦葺の家も木の葉越しに處々見ゆ。尾上に雲あり。一際高き松が根に起りて、巖にからむ蔦の上に靉靆けり。立續く峯々は市ある里の空を隱して、爭落つる

瀧の千筋はさながら銀糸を振亂しぬ。北は見渡す限り目も遙に、鹿垣きびしく鳴子は遠く連なりて、山面の秋も忙がしげなり。西は遙かに水の行衛を見せて、山幾重雲幾重、鳥は高く飛びて木の葉は自ら翻へりぬ。草刈の子の一人二人心豐かに馬を歩ませて、節面白く唄ひ連れたるが、今しも端山の裾を登行きぬ。

萩の湖の波はいと靜かなり。嵐の誘ふ木葉舟の、島隱れ行く影もほの見ゆ。折しも松の風を拂つて、妙なる琴の音は二階の一間に起りぬ。新たに來たる離座敷の客は耳を傾けつ。

糸につれて唄出す聲は、岩間に咽ぶ水を抑へて、巧に流す生田の一節、客は又更に心を動かしてか、煙草を餘所に思はず其方を見上げぬ。障子は隔ての闌を据ゑて、松は心なく光琳風の影を宿せり。客は其まゝ目を轉じて、下の谷間を打見やりしが、耳に尚曲に惹かるゝ如く、髭を撚りて身動きもせず、玉は亂落ちて僅かに繋ぎ琴の手は再び流れて清く滑かなる聲は次で起れり。客は又も其方を見上げぬ。

對ふ風色に見入りて、心は早そこにあらず。折しも障子は颯と開きて、中なる人は立出でたるが如し。辰彌の耳は逸早く聞付けて振返りぬ。欄干にあらはれたるは五十路に近き蒲丸顔の、打見にも元氣よき老人なり。骨も埋るゝばかり肥太りて、角袖着せたる布袋を其儘、笑ましげに障子の中へ振向きしが、話掛くる一言の末に身を反らせて打笑ひぬ。中なる人の影は見えず。

我を嘲ける如く辰彌は椅子を離れ、庭に下立ちて其まゝ東の川原に出でぬ。地を這渡る松の間に、亂立つ石を削成して自らなる腰掛としたるが處々に見ゆ。岩を打ち岩に碎けて白く青く押流るゝ水は、一叢生ふる綠竹の中に入りて遙かなる閊の前にあらはれぬ。流に渡したる掛橋は小柴の上に黒木を連ねて覺束なげに藤蔓をからみ付けたり。橋を渡れば山を切開きて、わざとならず落し掛けたる小瀧あり。杣の入るべき方とばかり、僅かに荊棘の露を拂ふて有りの儘にしつらひたる路を登行けば、松と楓樹の枝打交はしたる半腹に見るから淸らなる東屋あり。山は俄かに開きて鏡の如き荻の湖は眼の前に出でぬ。

圓座を打敷きて辰彌は病後の早くも疲れたる身を休めぬ。差向ひたる梅屋の一棟は山を後に水を前に心を籠めたる建様のいと優なり。ゆくりなく目を注ぎたる彼の二階の一間に辰彌は又或物を認めぬ。明放したる障子に凭りて此方を向きて立てる一人の乙女あり。彼の唄の主なるへしと辰彌は直ちに思ひぬ。

顔は隔たりて能くも見えねど、細面の色は優れて白く、すらりとしたる立姿は更に見よげなり。心ともなく此方を打仰ぎて、しきりに我を見る人のあるにはッとしたる如く、急がはしく室の中に姿を隠しぬ。辰彌も遂に下行けり。

湯治場の日は長けれど驚て晝にもなりぬ。今しも屆きたる二三の新聞を讀み終りて、辰彌は浴室にと宿の浴衣に着更へ廣き離屋の廊下に立出でたる向より、湯氣の渦巻く濡手拭に頸を延べたる首筋を拭ひながら階段のもとへと行き違ひに歸る人あり。乙女なり。彼の人ぞと辰彌は早くも目を付けぬ。思ひし如く姿は極めて美し。つくろはねども自らなる容の端は浴後の色に一入はの艶を増して、後れ毛の雪暖かき頸に掛かれるも得ならずなまめきたり。其

下萌の片笑靨の僅かに見えたる情を含む眼のさりとも知らず動きたる、婀娜かなる風采の更に見過ごしがてなる、あゝ、辰彌は暫し動き得ず。

折からこれも手拭を提げて、ゆる〳〵二階を下來るは先程見たる布袋の其人、登りかけたる乙女は振仰ぎて、おや父様、又お入浴りなさるの。幕無しねえ。と罪なげに笑ふ。笑顔の匂は言はん方なし。

親子、國色、東京のもの、と辰彌は胸に繰返しつゝ、浴場へと行きぬ。あとより來るは布袋殿なり。上手に一つ新しく設らへたる浴室の右と左の開扉を引開けて、二人は齊しく中に入りぬ。心も置かず話掛くる辰彌の聲は直ちに聞えたり。

程もなく立昇る湯氣に包まれて出來りし二人は、早打解けて物言交はす中となりぬ。親易き湯治場の人々の中にも、かゝる事に最も早きは辰彌なり。部屋へと二人は別れ際に、何うぞチトお遊びにお出下され。退屈で困りまする。と布袋殿は言葉を殘しぬ。是非私の方へも、と辰彌も挨拶に後れず輕く腰を屈めつ。

かくして辰彌は布袋の名の三好善平なる事を知りぬ。娘は末の子の光代とて、秘藏のものなる由も事の序でに知りぬ。三好とは聞及びたる資産家なり。良し。大いに良し。あだに費やすべき此後の日數に、心慰みの一つにても多かれ。美しき獲物ぞ。と長閑に葉卷を燻らせながら暫くして資産家も亦妙ならずや。あはれ此時を失はじ。と獨り笑傾けて又煙を吐出しぬ。

峰の雲は相追ふて飛べり。松も遠山も見えずなりぬ。雨か。鳥の聲の轉たけはしき。

（二）

半日の圍碁に互の胸を開きて、善平は殊に辰彌を得たるを喜びぬ。何省書記官正何位といふ幾字は、昔氣質の耳に立優れてよく響渡り、かゝる人に親しく語ふを身の面目とすれば、訪はれたるあとより直に訪返して、只管に尙睦まじからん事を願へり。才物だ。中々の才物だと頻りに譽稱やし、あの高振らぬ處が何うも豪い。談話の面白さ。人接のよさと一々に感服したる末は、何として、綱雄などの中々及ぶ處でないと獨語つ。光代は傍に聞いて居たりしが、それでもあの綱雄さんは、最つと若くつて上品で、沈着いて居て氣性が高くつて、彼の方よりは餘ッ程ようございますわ。と調子に確かめて膝押進む。ホイ、お前の前で言ふのではなかつた。と善平は笑出せば、あら、左樣いふ譯で言つたのではありませぬ。唯かうだと言つて見たばかりですよ。と顏は早くも淡紅を散らして、嫌な父樣だよ。と帶締の打紐を解きつ結びつ。

綱雄といへば旅行先から、歸りかけに此處へ立寄ると言つて遣したが、お前は

嘸嬉しからうなと戯謔ひ出す善平、又其樣な事を、最う私は存じませぬ、と光代はくるりと背後を向いて娘らしく怒りぬ。

善平は笑ひながら、や、然し綱雄が來たらば、二人で同腹になつて己を遣込めるであらうな。此上尚威張られては堪らぬ。己は奥村樣の處へでも逃げて行かうか。これ、後楯が付いて居ると思つて、大分強いなと煙管に一寸脊中を突きて、はゝゝと獨り悦に入る。

光代は向直りて、父樣は何故さう奥村樣を御贔負になさるの。と不平らしく顏を見れば。何故とは何ういふ心だ。譽めて可いから譽めるのではないか。と父親は煙草を拂く。それだつても、他人ではありませぬか。と思ひありげなる娘の顏、うむ、分つた。綱雄を贔負せぬのが氣に入らぬといふのか。成程それは御尤の次第だ。いや最う綱雄は見上げた男さ。お前のいふ通り若くて上品で、それから何だッけな、うむ其沈着いて居て氣性が高くて、まだ入用ならば學問が深くて腕が確かで男前がよくて品行が正しくて、あゝ疲勞れた、何處に一箇所落といふものがない若者だ。

たんと其樣な事を仰有いまし。綱雄樣が來たらば言告けて上げるからいゝ。眞箇に憎らしい父樣だよ。と光代はいよ〳〵むつかる。いやはや御機嫌を損ねて仕舞うた。と傍の空氣枕を引寄せて、善平は身を橫にしながら、左樣した處を綱雄に見せて遣りたいものだ。と尙も冷かし顏。

よう御座います。いつまでもお弄りなさいまし。父樣はね、其樣な風でね、私なんぞの事もね、蔭では何んなに惡く言つて居らつしやるか知れはしないわ。これからは私ア最う父樣の仰有つた事を眞實にしないからよう御座んす。一躰父樣は私を其樣に可愛がつて下さらないわ。それだから此間家に居た時も、私を出拔いてお芝居へ行らしつたんだわ。私は大變に恨むからいゝ。

はて恐いな。お前に恨まれたらば眠くなつて來た。と善平は其まゝ目を塞ぐ。あれお休みなさつては嫌ですよ。私は淋しくつていけませんよ。と光代は進寄つて搖動かす。それなら謝罪つたか。と細く目を開けば、私は謝罪る譯はありませぬ。父樣こそお謝罪りなさるがいゝわ。

何故々々と仰向けに寐返りして善平は猶笑顏を洩らす。それだつても、さん

ざん私を嫌がらせて置いて、と光代は美しき目に少し角を見せていふ。己が何を嫌がらせるものか。お前が獨りで嫌がつて居るのだ。それは最う綱雄は實に此上もない男さ。

又綱雄樣の事を仰有る。それは最う奧村樣はえらいお方でございますよ。私ア眞實に、眞實に、眞實に、眞實に、眞實に怒つたわ。

はゝゝゝ。大そう「眞實に」怒つたな。怒るのを一々斷るものも無いものだ。お前は眞實に恐つたから、己は嘘に、嘘に、嘘に笑はうか。

何とても御勝手になさいまし。私ア最う……、私ア最う……、私ア家へ歸りますよ。歸つて母樣に左樣言つて、此讐を取つて貰ひます。綱雄樣と私は奧村樣に見かへられました。私は最う此間拵へて戴いた友禪も彼の金簪も、帶も指環も何もいりませぬ。皆そツくり奧村樣にお上げなさいまし。此間仕立てろと仰有つて、其まゝにして家へ置いて來た父樣のお羽織なんぞは、態と裁損つて疵だらけにして上げるからいゝわ。それから其前お茶の手前が上がつたと仰有つて下すつた彼の仁淸の香合なんぞは石へ打付けて破して仕舞

ふからいゝわ。
善平は更に掛構ひもなく、天井を見て莞爾々々笑ひながら、いやもう綱雄は實に天晴な男さ。
又、又、父様は最う、とばかり光代は立掛かりて、いきなり逆手に枕をはづせば、すとんと善平は頭を落されて、や、ひどい事をすると顏を顰めて笑ふ。いゝ氣味！と光代は奪上放しに枕の栓を拔捨て、諸手に早くも半ば押潰しぬ。
無據く善平は起直りて、それでは仲直りに茶を點れやうか。彼の持つて來た干菓子を出してくれ。と言へば、知りませぬ。と光代は未だ餘波を殘して、私はお湯にでも參りましやうか。と疊みたる枕を抱へながら立上る。其様な事を言はずに、これ出してくれよと下から出れば、こゝぞといふ見得に勇立ちて威丈高に、私はお湯に參ります。奥村様に出してお貰ひなさいまし。

（三）

御散歩ですか。と背後より聲を掛くるは辰彌なり。光代は打驚きて振返りしが、隱るゝ事もならず程よく挨拶すれば、いゝ景色ではありませぬか。貴娘、湖水の方へ行つて御覽なされましたかと聞く。いえ未だ、實は今宿を出ましたばかりで、と氣を置けば言葉もすらりとは出ず、顏も自ら差俯向かるゝを、それならば御一所に些と其處等を歩いて見ましやう。今日は氣も晴々として、散歩には誂向といふ好い天氣ですなア。お父樣は先刻何處へかお出掛けでしたな。といつもの調子輕し。

ですが親父が歸つて來て案じるといけませんから、餘り遠くへは出られませぬ。と光代は浮足に、お部屋から其處等は何處も彼處も見通しです。それに私もお付申して居るから、と言つても隨分怪しいものですが、まあ／＼お氣遣ひの樣な事は決してさせません心算、然しお嫌では仕方がないが。

嫌でございますとも流石に言ひかねて猶豫ふ光代、進まぬ色を辰彌は見て取

りて、尚口輕に、私も一人でのそ〳〵歩いては直に飽きて仕舞つて詰らんので、相手欲しやと思つて居た處へこゝにお出なさつたのは貴娘の因果といふもの、御迷惑でもありましやうが、まあ一所に付合つて下さいな。其かはりには私は又、貴娘の何んな無理でも聞きましやう。と親しげにいふ。

否みかねて光代は遂に從ひぬ。時は朝なり。空は底を返したる如く澄渡りて、峰の白雲も行くに處なく、尾上に殘る高嶺の雪は分けて鮮かに堆藍前にあり、凝黛後にあり、打靡きたる尾花野菊女郎花の間を行けば、石は漸く繁く松はいよ〳〵風情よく、灔耀たる湖の影は忽ち目を迎へぬ。

何處までも其歡心を買はんとて、辰彌は好んであどけなき方に身を置きぬ。たわいもなき浮世咄より、面白き流行の事に移り、芝居に飛び音樂に行きて、有る限りさま〳〵に心を盡しぬ。光代はたゞ受答への返事ばかり、進んで口を開かんともせず。

妙な事を白狀しましやうか。と辰彌は微笑みて、私は貴娘の琴を、此間の那須野の外に、まあ幾度聞いたとお思ひなさる。といふ。又其樣な事を、と光代は

逃ぐるが如く前へ出でしが、あれまあ一寸御覧なさいまし。いゝ景色の處へ來たではありませぬか。あの島の樣子が何とも言はれませんね。おう奇麗だ。と話を消して仕舞ひぬ。

名にし負へる、荻は處狹く繁合ひて、上葉の風は靜かに打寄する漣を碎きぬ。こゝは湖水の汀なり。爭ひ立てる峰々は殘りなく影を涵して、漕行く舟は遠く其上を押分けて行く。松が小島、離れ岩、山は浮世を隔てゝ水は長へに清く、漁唱菱歌、煙波縹渺として空は更に悠たり。倒れたる木に腰打掛けて光代は暫く休らひぬ。風は粉膩を撲つてなまめかしき香を辰彌に送れり。

參りましやう。親父も最う歸つて來る時分でございます。と光代は立上りぬ。此處等はゆッくり休む處もなくつて可けませんな。と辰彌も遂に又の折を期しぬ。道すがらも辰彌は種々に話掛けしが、光代は唯かたばかりの返事のみして、深くは心を留めぬ態なり。見るから辰彌も氣に染まず、流石思に沈むものゝ如し。二人は默して歩みぬ。

おや。といふ光代の聲に辰彌は俯向きたる顏を上ぐれば、向ふよりして善平

と共に、見知らぬ男の此方を指して來りぬ。綱雄樣と呼掛けたる光代の顏は見るから活々として、直ちに其方へと走行きつゝ、まあ何時いらつしやつたの、何んなに待つて居ましたか知れませんよ。貴郎がお出なさらない中はね、父樣がね、私をいぢめてばッかり居るの。と嬌優る目に父を見て、父樣最う負けはしませんよ。と笑ひながら又綱雄に向ひ、何故もつと早く來て下さらなかッたの。餘りだわ。私なんぞの事は些少もお構ひなさらないから酷いわ。あら嫌な髭なんぞを生やして、と言掛けしが其時そこへ來たる辰彌の髯黑々としたるに心付きて振返りさまに、あら御免なさいましよ、おほゝゝゝ、と打つて變りたる素振なり。

これは私の親戚のもので、東條綱雄と申すものです。と善平に紹介されたる辰彌は例の隔てなき挨拶をせしが、心の中は穩かならず。此蒼白き、仔細らしき、あやしき男はそも〳〵何者ぞ。光代の振舞の尚心得ぬ。或は、とばかり疑ひしが色にも見せず飽まで快げに裝ひぬ。傲然として鼻の先にあしらふ如き綱雄の仕打には幾度か心を傷けられながらも、人慣れたる身はさりげなく

打笑へど、綱雄は更に取合ふ氣色もなく、光代お前に買つて來た土産があるが、何だと思ふ。中てゝ見んか。と見向きもやらず。

善平は獨り中に立ちて、只管二人を親しがらせんとしぬ。書記官と聞きたる綱雄は浮世の波に漂はさるゝ此あはれなる奴と見下し、去年哲學の業を卒へたる學士と聞きたる辰彌は、迂遠極まる空理の中に一生を葬る馬鹿者かと竊かに冷笑ふ。善平は更に罪もなげに、定めて共に尊敬し合ひたる事と獨りほくほく打喜びぬ。早くお土産を見せて下さいな。と甘える如く光代はいふ。此處では落付いて談話も出來ぬ。宿へ歸つて一献酌まうではありませぬか。と言出づる善平。最も妙ですな。と辰彌は言下に答へぬ。綱雄さあ行かうではないか。と善平は振向きぬ。綱雄は冷々として、はい參りましやう。心々に四人は歩出しぬ。私は先へ行つてお土産を、と手折りたる野の花を投捨てゝ、光代は子供らしく駈出しぬ。裾はほら／＼、雪は紅を追へり。お歸り遊ばせと梅屋の聲々。

（四）

飽まで無禮な、人を人とも思はぬ彼の東條といふ奴、と醉醒の水を一息に仰飲つて、辰彌は獨り我が部屋に、眼を光らして一方を睨みつゝ、全體己を何と思つて居るのだ。口でこそ其とは言はんが、明かに己を凌辱した。おのれ見ろ。見事己の手だまに取つて、こん粉微塵に打碎いてくれるぞ。見込んだものを人に取らして、指を啣へて居る己ではない。狙らつた上は決して免がさぬ。光代との關係は確かに見た。我物顏の其面を蹂躙るのは朝飯前だ。己を知らんか。己を知らんか。はゝゝゝ、流石は學者の迂濶だ。馬鹿な奴。いや徐々政略が要るやうになつた。妙だぞ。妙だぞ。漸く無事に苦しみかけた處へ、いゝ慰みが沸いて來た。充分うまく遣つて見やうぞ。こゝが己の技倆だ。はて事が面白くなつて來たな。

光代は高がひい〳〵たもれ。唯一擊に羽翼締だ。否も應も言はせるものか。然し彼の容色は外に得られぬ。先は珍重する事かな。親父々々。親父は必

ず逃がさんぞ。あれを巧く説込んで。身脱の出來ぬ己の負債を。うむ、それも佳しこれも佳し。さて謀をめぐらさうか。事は手取早いがいゝ。「兵は神速」だ。駈を追つて直に取懸らうぞ。よし。始めやう。猶豫は御損だ急け急げ。

身を返しさま柱の電鈴に手を掛くれば、待つ間あらせず駈けて來る女中の一人、あのね三好さんの處へ行つてね、又一席負かして戴きたいが、外にお話しもありますから、お暇なら直にお出を願ひたい。と斯う言つて來ておくれ。急いで、いゝか。おッと櫛が落ちたぞ。

* * * * * * *

それはお前の一克といふものだ。其様に擯斥したものではない。何と言つても書記官にもなつて居る人だ。お前も少しは我が折つて交際つて見るがいゝ。と宥むる善平に反を返して、綱雄は飽くまで屹として居たりしが、いや私は彼様な男と交はらうとは決して思ひません。見るから浮薄らしい風の、輕躁な、徹頭徹尾虫の好かぬ男だ。私は顔を見るも嫌です。折角樂みにして

此處へ來たに、彼男の爲に興味索然といふ目に遇はされた。彼樣なものと交際して何の益がありましやう。貴郎は又何處がよくつて、彼樣な男がお氣に入つたのです。

私も何だか彼の方は好かないわ。と指環を玩弄にしながら光代は言ふ。

左樣だ。左樣あるべき事だ。と綱雄は一打煙管を拂く。其音も善平の耳に障りて、笑ましき顏も少し打曇りしが、それは何んな人であつても探せば缺點は屹度出る、長所を取合つて、お互に面白く樂しむのが交際といふものだ。お前は段々偏屈になるなア。其樣な風で世間を押通す事は出來ないぞ。と流石に聲は未だ穩かなり。

然し彼男の何處に取柄があります。第一、と言掛けるを押止めて、もういゝわ、お前はお前の了簡で嫌ふさ。私は私で結交ふから、もう此事は言はぬとしやう。それで可いではないか。顏を赤め合ふのも詰らん事だ。と言へども色に出づる不滿、綱雄は尙も我を張りて、では有りますが、これが他人なら兎に角、貴郎であつて見れば私は何處までも信ずる處を申します。私は強てお止め

申さんければならぬ。

默らつしやい。と荒々しき聲は遂に迸りぬ。私は最う聞く耳を持たんぞ。

何だ。出過ぎた事を。

あら父様、お怒りなすつたの。綱雄様だつて悪氣で言つたのではありませんよ。何ですねえ其様な顔をなすつて。

えゝ引込んで居ろ。手前の知つた事ではないわ。と思はぬ飛沫に口を噤む途端、辰彌より使は急がはしく來りて言はれたる通りの口上を述べぬ。半ばは意氣張りづくの善平は二つ返事に承知の由を答へて歸しぬ。綱雄は腕を組んで差俯向けり。

光代は氣遣はしげに二人を見かはせしが、其儘立上る父を止めて、父様、それではお互に心持がよくないではありませんか。何とか仲を直してお出なさいな。私は困るわ。

其抜首のしほらしさに、善平は一時立止まりて振返りぬ。綱雄はむづかしき顔も崩さず、眉根を打寄せて默然たり。見るに此方も燃立つ心、いゝわ、打捨つ

て置け！
袖振拂つて善平は足音荒く出行けり。　綱雄は打沈みて更に言葉もなし。深行く水は俄かに耳立ちて聞えぬ。
綱雄樣、貴郎は何故そんなにも奧村樣をお嫌ひなさるの。いゝ加減にあしらつて居れば可いではありませんか。え、何うかして左樣おしなさいな。こんな事になると私は何方へついていゝか分らなくなつて眞箇に泣出したくなつて來るわ。としみ〴〵言出づる光代、出來るならねえ、何うぞ氣を取直して見て下さいな。え、貴郎、と顏を窺込みぬ。人を惹く風情は更なり。
動かされてか綱雄は顏を上げて少しく色を直しぬ。されども言葉は更に讓らず。私は自分を枉げる事は出來ん。彼の男は何處までも私の氣に入らんのだ。私はもとより據るところがあつて言つたのであるが、伯父樣が用ひて下さらねばそれ迄の事、お前はまあ彼の男を何う思ふ。
私なんぞには能くは分りませんが、あんなに、喋々しい人といふものは、しんには實が少ないだらうかと思ひますよ。

うむ、よく言つた。と綱雄は微笑を洩らして、お前の方が未だ分つて居る。感心なものだ。と飾らねども顏には情を含めり。

それにね、あの方は何だか氣味が惡いわ。私の氣の故だか知らないけれど、一躰變でならないの。

何うして、と綱雄は目を送れば、なにね、何でも有りませんけれどね、あのう、あのう、唯なんだか訝しいの。だから私は好かないと思つて居ますの。と目顏に言はする心の中、ふむ、とばかり綱雄は冷笑ふ如く、彼奴の事だ其樣な事があるかも知れぬ。片言でもそれに類した事を口に出したが最期、思入れ耻をかゝせて遣れ。彼樣な奴の餌食になるは死に優した大不幸だ。

私は何ういふ事になるかも知れないと思ふと恐くつていけませんから貴郎ね、此處に居る間は後生だから傍について居て下さいな。こんな事を思ふと早くねえ……。あのう……。と羞かしさうに打笑みて、まあ止しましやう。

何を言つて居るのだ。と綱雄も初めて淸く打笑ひしが、いや然し私も折角此處へは來たけれど、伯父樣はあの通りであるから彼の男は毎日入込んで來る

だらう。彼奴を見るばかりでも氣色に障つてならんから、到底平和に行く譯はない。私は寧その事直ぐに歸つて仕舞はう。

あら其樣な事をなすつては、なほ父樣に當るやうでもありますし、それに私を、まあ何うして下さるお心算なの。私は一人で嫌な事、貴郎がお歸りになるなら私も御一所に歸りますよ。

それは可かん。と綱雄は心强く、お前は伯父樣を御介抱申さねばならん。お前は未だ三好の娘だぞ。伯父樣を大事と思はんか。何だ馬鹿な涙組んで。

それだつても私は……。貴郎は餘りだわ。と襦袢の袖を嚙初めしが、それでは父樣に無理に願つて皆一所に歸つて仕舞ひましやう。貴郎は何故さう思遣りがないのだらう。私なんぞの事は何とも思つてお出ではないんだよ。貴郎は私を泣かせて嬉しいの。

そんな事を言つては困るなア。と綱雄は苦笑ひして、なに後での氣遣ひはないやうに、それとなく伯父樣に注意は必ず與へて置かう。私も好んで歸りたくはないわな。

嫌、私は歸しませんよ。と光代は捏廻はす。いつまで語られん事を言つても仕方はない。これから又暫く別れるといふのに、お前は其樣な顏を見せてくれるのか。

何でも嫌、私は歸さないからい〻。

綱雄は默して俯向きぬ。光代は摺寄つて顏を覗込み、美しき手を膝に掛けて、

貴郎は其樣にもお歸りなさりたいの。

綱雄は見もやらず衡門を瞰みぬ。それならばと光代はあどけなく、寧そ私を連れて行つて下さいますか。え、と顏を近付けて、ねえ連れて行つて下さいな。うむ寧そ、兩人歸つて仕舞はうか。と俄かに首を上げたる綱雄の眼には優しき光の同時にひらめきしが、瞬く間もなく本に返りて、いや、左樣でない。お前はまあ居て上げるがい〻。

あら嫌、又其樣な事を仰有るんだもの。よう御座んす　私は一人で歸つて仕舞ひます。

何うせ任せた蔦かつらと、田舍の客の唄ふ濁聲は離れたる一間より聞えぬ。

御療治はと廊下に膝をつくは按摩なり。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

綱雄は折れず遂に歸りぬ。流石に一封の手紙を殘して、筆に心を知らせたるまゝ、光代にも告げず善平にも告げず、飄然として梅屋を立去れり。雲は行き水は走りて、車は此山にさらばの響を殘せしが、消えて失せにき。

（五）

勇立ちたる聲のいとゞ喜ばしげに綱雄々々と室の外より呼はりながら歸來るは善平なり。泣顏の光代は悄然座りたるまゝ迎へもせず。何だ。何うした。綱雄は何處へ行つた。

綱雄樣は歸つて仕舞ひました。これを御覽なされと光代は手紙を差出す。

善平は手にも取らず、何だ。怒つて歸つたのか。馬鹿な奴、とばかり後は忘れたる如く、其樣な事は何うでもよい。捨てゝ置け。と急がはしく硯を引寄せ、手早く認めたる電信三通、婢を呼立てゝ直にと鞭打たぬばかりに追遣り、煙管も取らず茶も飲まず、顏はいきり立つて眼は或方にさも面白きものゝ影を見詰むる如く、堀出し物掘出し物、これが眞箇の堀出し物だ。何にしても書記官といふ後立を、背中に脊負つて居れば論は無いさ。綱雄などには斯ういふ處が見えぬから困る。兎にも角にも有名な木島炭山、二十萬とは馬鹿々々しい安價だ、素値に賣つても五十萬の折紙、毎年の採堀高は幾十萬圓利益配當の

多い事は先づ炭山には殆んど稀で、其炭質の良い事は遠く三池の石炭にも增して、內外諸方へ軍艦用として賣込むものでも每年凡そ何十萬噸、いや福の神は飛んだ處にお出なされた。何として他所へ辷らしてなるものか。それにしても奥村は働手だ。どの道惡い首尾にはならぬ。とさながら前に人も無げなり。

何事か起りたるとは知らぬにあらねど、光代は差當りての身の物憂けなるを、慰めてくれぬ父を恨めしと思ひぬ。憂ひに重ぬる不滿は穗にあらはれて、父樣詰りませぬから私も歸ります。と辛きに當てゝ不興らしく言ふ。善平は更に耳にも入れず、何にしても彼の炭山が手に入れば、例の失策の株以來、手ひどく受けた痛みもすッかり療治が出來る。其上日清事件の影響から、海產物に及ぼした損失もこれで埋合せがつくといふもの。いや首尾よく遣つて見たいものだ。と我を忘れて調子づく。

父樣、父樣ッたらば父樣、私は歸りますよ。と光代は聲を勵まして最どけはしく言ふ。善平は始めて心付きたる如く、なに歸る？。私も歸るさ。一時も早

く東京へ歸つて、何彼の手筈を極めねばならぬ。光代、明日は夙く發たうぞ。それにしても炭山は是非共手に入れたいものだ。と半ば、先に心を奪はる。明日の朝直ぐの發足と、容易く言はれたる光代は案外なる思、少しは窘めて困らせて澁々我意に從はせて、そして一所に歸らんとの、所思の張合を拔かされたるが、乙女心の氣に入らず、初めよりして搆付けられぬが、尙氣に入らず進寄りて、父樣、それは眞實なの、え、父樣、あれさア、身に染みて聞いて下さいよう。ぢれつたい。父樣ア。とばかり果は、耳を引張る。善平は五月蠅げに、えゝ喧ましい、默つて居ろ。考へ事の邪魔になる。チョッ、湯にでも這入つて來るがいい。

よう御座います。たんと左樣なさいまし。と先例の如く言放ちて光代は拗返りぬ。善平は更に關せざるものゝ如く、二言めには炭山がと、心は殆んど身に添はず。

疊障りも荒々しく、障子に當散らして光代は部屋の外へ出でぬ。折しも母屋へ通ふ廊下を行くは辰彌なり。上と下とに顏見合せて、辰彌はいつもの如く

笑ふて見せぬ。光代は艴としたる顔して尾上に目を反らしぬ。辰彌は打笑みて過ぎけり。

いひし如く善平は朝まだきに歸りを急ぎぬ。今日も同じく労はられぬに光代の顔は打解ねど、心は早く此家を出づる事を喜べり。見送りにとて辰彌は出來りぬ。見るより光代は眉を顰めて顔を背けぬ。辰彌と善平とは稍、多時呼合ひて、終りは互に打笑へり。光代は知らぬ振して唯餘所をのみ見詰めぬ。別れ際に辰彌は一言、光代樣、綱雄樣にお逢ひの節は何うぞ宜しくと仰有つて下さい。

（六）

上野の森の影を迎へて、光代は初めてほッと息をつきぬ。明日とも言はず母に、親に強請みて許しを受け、羞かしさも或思に殆んど忘れて、直に綱雄の許へと行きしが、あはれ、綱雄は未だ歸來らず、すご〳〵として引返したる光代の、拂ひもあへぬ後れ毛を吹亂すは、いかに身を知る秋の風なりし。

家に歸りてより善平は席も暖かならず、東に行き西に馳せ、半ば物狂ほしく日毎に奔走しぬ。三人四人打連れて訪來る客は、一間に閉籠りて屢〻密議を凝らせり。日は急がしきに連れて矢の如く飛びぬ。露深く霧白く、庭の錦木の色にほのめく或朝の事、突然車を寄せて笑ましげに入來るは辰彌なり。善平は待構へたる如く喜び立つて上に請じぬ。光代は姿を見て何とも知らず又慄としたり。

其日よりして三好の家に辰彌の往復は磯打つ波のひまなくなりぬ。善平との間はさながら親戚の如くなれり。家内の皆々は辰彌の此度の事件に重な

る人なる事を知りぬ。先に立つ善平につれて誰も彼も疎略には思はざりき。辰彌は思ふが儘に蜘蛛の糸を吐掛けて、人々を悉く網の中に裹みぬ。かくして末の妹より上の隱居に至るまで、辰彌は親しき中の親しき人となりぬ。三好の家と辰彌とは、漸く離るべからざるものとなれり。中に立つて光代は獨り打腹立ちぬ。見るほど何故とも知らねどいよ〳〵疎ましき辰彌に、斯くまで語らひ寄る父の恨めしく、隔意を置かぬ母の口惜しく、心易げなる姉の憎く、笑顏を見する兄の喰付きても遣りたく、三方四方面白く無くて面白く無くて果は焦れ出す癇癪に、當り散らさるゝ仲働の婢は途方に暮れて、何とせんかと泣顏の浮世の態はたゞ不思議なり。光代は一筋に綱雄を待ちぬ。他の氣も知らず綱雄はいつまでも歸來らず。光代は一人物憂げに朝夕の雲を望めり。指して定まらぬ行衛に結ぼるゝ胸はいよ〳〵苦しく、今頃は何處に何うしてかと、打向ふ鏡は窶れを見せて、それもいつしか大息に曇りぬ。

善平は見もやらず心もそゞろに、今日は又珍客の入來とて朝まだきの床の中より用意に急がしく、それ庭を掃け裀を出せ、銀穗屋付の手爐に、一閑釣瓶の煙

莨盆、床には御自慢の探幽が、和歌の三夕これを見てくれの三幅對、銘も聞けがし宗甫作の花入に、野山の錦の秋を見せて、あはれ心を筑紫潟、浪に千鳥の蒔繪盆には鎌倉時代と傳へたる金溜塗の重香合、砧手青磁の香爐に添へて、銀葉挾みの手の内に霞を分けて入る柴舟の行衛は、煙の末にも知れと、しば〳〵心に點頭くなるべし。脇には七寶入の紫檀卓に、銀蒼鷹の置物を据ゑて、これも談話の數に入れとや、極彩色の金屏風は、手を盡したる光琳が花鳥の盛上、天晴座敷や高麗縁の青疊に、玉を置くとも羞かしからぬ設けの席より、前は茶庭の十分なる侘を見せて、目移りゆかしく此處を價値の買處と、客より先に主人の滿足は、顏に横撫の煤を付けながら、獨り妙と隈なく八方を見廻しぬ。

豐は碁石の清拭せよ。利介はそれ〳〵手水鉢、糸目の椀は土藏にある。南京染付蛤皿、それもよしか是もよしか、光代、光代は何處に居る。光代々々、と呼立てられて心ならずも光代は前に出づれば、あの今日はな、と善平は競ひ立ちて、奧村樣はじめ大事のお客であるから、お前にも酌に出て貰はねばならぬ。今つから衣服も着更へて早く支度を、と言付くる。

初めより光代はよき顔もせず、耳の役とばかり聞いて居たりしが、今日はお腹が痛みますから、御免を蒙ります。といつもの我儘のかゝる時に勢を見せて、そのまゝ管なく座を立ぬ。其日は遂に、室の外へとは顔も出さゞりき。程もなく入來る洋服扮裝の七分は髯黒の客人、座敷に入りて暫くは打潜めきたる密議に移りしが、やがて開きて二側に居流れたるを合圖として運出づる杯盤の料理は善四郎が念入の庖丁、獻酬未だ半ばならず早くも笑ひさゞめく聲々を、餘所に聞きて光代は口惜しげに涙ぐみぬ。座敷の急がしさに取紛れて誰一人此處を訪はんとせざるも、女心には恨みの一つなり。

夕暮となり宵となり、銀燭は輝き渡りて客は漸く散じたる跡に、殘るは辰彌と善平なりき。別室に肴を新たにして、二人は込入りたる談話に身を打入れぬ。善平は息繼ぎの盃を下に置きて、これならば貴郎も兎角うはございますまい。御周旋料は少うござるが一萬圓として置いて、成功の上は千圓づゝ謝金を年年に差上げましやう。なに、御同僚其外貴郎と事を共にした今日の方々にも、幾分かの割賦金と仰有いますのか。それは、成、成程、其樣な支拂にもなりまし

やうが、追ッつけ其邊は同志のものと、又相談の上いづれにか計らひやうも御座いましやうから、貴郎に對するお手數料は先づそれだけに極めて置きまして、何はさて置き國友商會の願書を途中で遮ぎつて一時も早く私の方のを官へ差出すが上分別、兎にも角にも此首尾を取纏める方に、早速ながら御盡力を願つて、事落着の上で御報酬の方は極める事に致しても、別に差閊へは無いではござりませぬか。

辰彌は笑ましげに頭を掉り、さあ、私の申すのも即ちこゝですて、成程貴所の御了簡では、書面進達さへ急に運べば、萬事は後日の事として、差閊へはないと仰有るのも御尤ではあるが、其願書の事に付いては、私一人では何うあつても計らひかねる場合と申すは、兼てお話しもしてある通り、一躰國友商會のは、初手は私の擔當であつたが、今では局長が引受て、萬事表面上商會の世話をして居る仲であつて見れば、すでに明日か二三日中に願書が出來て、商會からこれを本省へ差出す日には、途中に居つて邪魔をする好分別が更にないので、依ては事の未然に先立つて、彼の局長を我手に引入れ、うまく說込んで遠方へ旅行さ

せるより外はありませぬ。すでに局長が東京に居らず、又旅先から商會の願書を遠く牽制して出させぬやうにして居る中には、私の方便で、監督署長の、それあの先刻來た頰髭の濃い男、兎に角彼の男を利用して、此局面の衝に立たせ、私はどちらへも手を出さずに、竊かに綱を引きましやうが、それには、萬一のあつた時、我々三人の生涯は、貴所の犧牲とならねばならず、それも成功の後ならば兎も角、それ御存じの待合事件の後を受けて、又々其樣な行跡が社會へ暴露した日には、實はよくない事ですからねえ。

そこで私折入つての願ひといふのは、先刻申した、ね、あの事は何うあつても、ここで貴所の御同意を得て、尚其上に、今一つ、それは又此お話しのものとは性質を異にしたもので、是非共お聞入を願ひたい事もありますが、併し、それは追つてとして、先づ今日は、先刻のお話申した筋だけは、三好さん、何うにかお計らひで、お約束をなさつてもいゝではありませんか、成功の上は三十萬圓、早速明日が日にも純益を見られる譯ではありませんか。

成程、々々、とばかり應對ふて善平は又盃を上げしが、それも左樣ですなア。も

とはと言へば不思議の御縁で、思寄らず貴郎のお目に掛つたので、この御相談も出來たと申すもの。事の起りも納りも、皆貴郎お一人の御丹精にある事故、その御丹精に免じまして、と暫く言葉を途切らせしが、よう御座います。それだけは差上げましやう。

膝を進めて辰彌は一しほ笑ましげに、漸く御承知になりまして、此奥村も安心しました。

然し、と葉巻の灰を拂ひながら、假令何のやうな結果になりましても、他日に至つて貴所に決して御異存はありますまいな。私共も時宜によつては、袂を列ねて官職を辭し、共に民間に居て永久に事を取るだけの決心でありますから。

勿論事の破れとなつて、私共は毛頭も利益を得ません時は？

よろしい、我々の周旋費、それは半分に負けて上げましやうが、と眼に微笑を見せて若し又兼て期したる如く事の成就した曉は？

されば、何なりと私の力に叶ふ事なら、貴郎のお望みに應じまして、それは家屋なり別莊なり、至當のお禮は別に屹度いたすとしましやう。

いや、それは重々のお心添、忝なく申受けまする。と辰彌は重ねて笑作りて、うむ、貴所の力に叶ふ事なら私の望みに應じてとは三好さん、屹度ですせ。と冗談らしく念押す。

全躰、まあ何の樣なお望み。と善平は醉に乘じて膝押進む。左樣さ、先づ申して見やうなら、貴所の拵へたものを戴きたいといふやうな事。と辰彌は上づりていふ。はてなア。何か樣子のありさうな謎ですな。と善平も笑出す。いや、其謎は他日是非解いて戴かう。先づ今度の前祝ひに、改めて獻じましやう。と辰彌は盃をさしぬ。對手もなくば善平は早眠き頃なり。

事は思ひしまゝに滯りなく行きぬ。一、薄儀、金二萬五千圓也。辰彌は其夜例の如く新橋泊。

（七）

綱雄の漸く歸來れる報知は、人傳によりて三好の家に達しぬ。されども此方へは容易く顔も出さゞるを、世間氣質の善平は大に面白からず思ひぬ。第一不斷から己を輕蔑して、と伯父甥の間は次第にむづかしくならんとす。光代の母は素からの學者嫌、かゝる折に口を噤みては居ず。全躰日頃から情のない綱雄の事、此位の仕打は何でもありませぬ。先達ての火事見舞にも來てはくれず、此間の產の祝も忘れた時分に漸く遣すやうな仕儀と、世情に踈き綱雄の非は、それからそれと限りもなく數へられぬ。

堪へかねて光代は密かに綱雄の許を音訪れぬ。綱雄は家に在らざりき。光代は時の許す限り待ちに待ちぬ。綱雄は遂に歸らざりき。泣くばかりなる身を起して、しほ〳〵と漸く我家に着けば綱雄は其留守に來たりしとなり。あゝ何といふ緣のない事やら。と光代は心の中に泣きぬ。

奥に善平は烈火の如く打腹立つて居たり。娘を見るより聲を勵まして、光代、

綱雄との縁は破談にしたぞ。あんな偏屈な分のわからぬ奴にお前を遣る事は出來ぬ。これまでの約束はこれぎり最うないものと思へ。

* * * * * * *

木島鑛山拂下げに付ての運動は双互の間次第に其競爭烈しく成行き、國友商會に屬する一派も互に對抗して相下らず、これに加ふるに競爭者の相手も今は數人の多きに上りて、所謂見積りの價格なるもの又次第に騰貴して、三十五萬圓の聲を聞き、尚其競爭の容易に止まるべくもあらざれば、流石に當路の者も扱ひかねて、玆に一片の閣令を出す事となりぬ。この閣令には鑛山の借區若くは拂下げの條規を規定せるものなれば、彼の拂下願書の如きも更に再びこれに據つて呈出せざるを得ざるに至れり。

其閣令が官報紙上に將さに現はれんとする前日なりき。辰彌は急に善平を人知れず或る待合の樓上に招きて、事の危急に迫れるを知らしめ、斯くして最後の大勝利又眼前に臨めるを告げたり。

さて愈々かねての事件も、こちらに負けず國友派の例の運動が烈しいので、双

方非常の競爭となへて貴所も是迄は長々のお骨折でありましたが、當局大臣も明日頃は多分一篇の閣令を發して、それを以て勝敗を一時に極めさせる見込ださうですが、然しこれとても秘密の中の秘密で、當局大臣の外省中のものは誰とて知つて居るものはないのです。

得意らしげに微笑を送つて、我を見よと言はねばかり辰彌は意氣揚々と靜かに葉卷の烟を吹きぬ。

それは大事な魂膽をお聞及びになりましたので、と熱心に傾聽したる三好は顏を上げて、して其事は何のやうな條規を具へて居るものに落札する事になりましやうか。

さあ其條規も格別に、これと六ヶ敷いことはなく、たゞ其閣令を出す必要は、その法令を規定した總べての條件を具へたものには、早速拂下を許可するが、さうでないものをば一齊に書面を却下することゝし、又相當の條件を具へて書面が幾通もあるときは第一着の願書を採用するといふ都合らしく、依ては今夜早速に夫等の相談を極めて置き、愈々今度の閣令が官報紙上に見えた日に、

それを待受けて居て即刻に書面を出す事にしたならば、必ず旗は此方の手に上がるに相違ありますまい。

左樣な譯であつて見れば、早速今夜にも拂下の願書を認めて置きたうござりますが、先づ差當つて困りますのは其願書の書方ですが、それは。

さあ其邊の次第もあらうと、兼て手配をいたして置いて、其閣令の草案も今日漸く手に入れました。

や、それは、と善平は我知らず乘出して、それは重々の上首尾で、失禮ながら貴郎の機敏なお働きには、この善平いつもながら實に感服いたします。

ひらめき渡る辰彌の目の中に或物は今躍上りて此機を摑みぬ。得たりとばかり膝を進めて取出だし示す草案の寫を手に持ちながら舌は輕く、言好さん、これですが、然しこれには褒美がつきますぜ。善平は一も二もなく心は半ば草案に奪はれて、唯々、それは最う何なりとも。

外ではありませぬ。と莞爾と打笑みて辰彌は突入りぬ。此間それ謎のやうな事を申した、あの光代樣さ。懇望して居るのは大抵お察しでしやう。よう

ございますか。お貰ひ申しましたよ。

* * * * * *

我は此後の事を知らず。辰彌は此頃妻を迎へしとか。其妻は誰なるらむ。とある書窓の奥には又、あはれ今後の半生を懸て、一大哲理の研究に身を投じ盡さんものと、世故の煩を將つて塵塚の當中へ投捨てたる人あり。其人は誰なるらむ。荻の上風桐は枝ばかりになりぬ。明日は誰が身の。

うらおもて

(二)

ゆくりなく目を覺ましたる勝彌は怪しき影の障子を掠めて消えたるを認めぬ。我にもあらず首を擡げて、中仕切の硝子越しに訝かしき目を注げば、折しも奥の間に夜を守れる有明の火影の淋しげに餘れる光を投掛くる廊下の中程に當りて、其處に烏散なるものゝ行けり。時も時ならず、しかも此平和なる家の中に何事ぞきびしく身を固めて、鼠を窺ふ猫の如くそよとの足音をも忍びに忍び、弓手に父が許に有りける手文庫の、中には貴重なるものを藏めたるをしかと抱へたる、おのれ曲者、と思はず、叫ばんとしたる其時此時、勝彌が動ける氣勢を敏くも聞付けて振向きさまに烱々たる眼光の力なき燈火を衝いて矢の如くに射込まれしが、蜿りあがれる其眉と抜上れる高き額と、其鉤の如くに曲れる鼻と眞一文字にさながら一度出だしたる言葉を決して引かじと誓

ひたる如き脣の鋭く嚴しき其顏を一目見るより、愕然としてあつとばかり、滿身の肉に小動ぎ打たせて度を失へる途端に曲者は電光の如く、身を躍らすと見る間もあらせず姿は忽ち闇の中に消えて、今まで庭に冴えたる虫の音の、俄かに礑と靜まり返りしが、見越の松の一搖ゆられたるを同時に、巧にひらりと下立つ足音の早くも聞えたり。

夢か、あらず、僻目か、あらず、何事ぞ、慈善家として、德行家として少からず人に知られたる彼波多野十郎は、夜深く他の家に忍入りて竊かに財を掠去れり。あはれ勝彌が身を許し身を盡し、身を與へ、身を擲ち、身を捧げて相慕ふ靜子の父、は、賤むべき憎むべき盜賊なりき。

よし渾身の血は名殘なく飛失せて見る〳〵白骨と化し去らんまでも、勝彌は此の如く驚かざりしなるべく、又此の如く悲まざりしなるべし。勝彌は實に言はん方なき苦痛を覺えぬ。今しも目の前に立ち現れたるは、清く美しく何をも知らぬ靜子の顏なり。

罪は購ふべし、罪は消ゆべからず。潔き心いかでこれに堪ふる事を得む。戀

は割くべし、戀は滅ぶべからず。わりなき心いかでこれを強ふる事を得む。勝彌は殆どせんすべを知らざりき。彼は又も靜子の涙を思ひぬ。ひとしきり虫の音の際立ちて繁く、朝風梢を鳴らして曙近き東は軈て白み渡れり。急がはしく起上がりて勝彌は竊かに窓を押開きぬ。一、父上まで申殘し候。御手許の文庫しばらく拜借仕り候。明日歸宅の上委細可申述、と筆の跡いとむつかし。消殘る薄月はやがて忍び出づる姿を送りて、朝霧は早く蒼白めたる顔を隔てつ。

（二）

明行く空に霧霽れて日は花やかにさし昇りぬ。押開きたる門の前に飼犬は只目を開きて地は箒のあとの清げに、そよ吹く風は塵をも動かさず、常盤木の色も鳥の聲も、車井戸の音も昨日のまゝ、波多野の家は高く四邊を拂つて立てり。十郎は未だ起出でず。

髮は亂れ、眉は顰み、目は殆ど物をも見ず、夢の如くに此處まで來れる勝彌は、ゆらぐ心を引きしめて中に進入りぬ。勝彌が此家を訪ふは始めてなり。あゝ、かゝるさまにて此處に來らんとはいつか期したりし。怪しく怯れたる如き聲しておとなへば、折しも周邊に人もなく、家の中はいと靜かにて頓に應ずるものなし。

再び呼ばゝる聲に奧の方より、輕き足音の小走りに近づきて、やがて襖を押開くは、あなや其人、かゝる時に逢ふことを望まぬ彼の美しき靜子なり。

さもあるべし、見るより靜子は打驚きてひた〳〵と傍へ差寄りぬ。何として

此處へは來たまひし。其たゞならぬお顏の色は？　如何なる事の起りてか。え、何事、その何とも御返事のないは、言ふまでもなくよからぬ事か。と氣遣はしげなる眼は早やおろ〳〵として、それにしても何として此處へは、と俄かに後ろへ振返りて人目を憚るを見るもなやまし。

父樣に遇はせたまへ。と勝彌は僅かに言出でぬ。

えッ、父樣、それなら貴郎は、あの父樣に御用のありてか。父樣とはいつの間にか、はやお相識になられてか。それにしても其氣遣はしき御樣子は？　もしや何事かお身の上にいやな事でも有るのでは？　そのやうな事ではござりませぬか。何故に聞かせては下さりませぬ。

父樣に遇はせたまへ。と勝彌はたゞ苦しげにいふ。

父樣は、と言掛けて心付きたる如く、父はまだ寐て居りまする。お入來の由を申しまするほどに、兎も角こちらへ、と應接の間へ導きながら、餘所を憚りて囁く如く、何とて其やうに改まりて、むつかしい顏をなされる事やら。これほど申すのにそれでは貴郎あんまりでは有りませぬか。少しはいつものやうに

打解けて下されても。と眉は深き思を語りて、目は更なり。たゞ父様に遇はせたまへ。と勝彌は唸き出だしぬ。あとを繼がんとするに言葉出でず。それより外を彼は言ふに堪へざりき。

（三二）

出で丶座につきたる十郎の如何に端嚴なる姿ぞ。奥まりたる閑室に相對したる勝彌は、昨夜の眼のもしくは僞りならざりしかと疑ひぬ。漸くに顏を上げて、唐突夢を驚かしたる事をゆるしたまへ。密かに御身に問ひたき事あり。また密かに乞ひたき事あり。かく朝込に推して過はんことを求めぬ。御心に觸る丶處もあるべけれど、願はくは忍びて聞きたまへ。もとより他聞を憚かる事なり。こ丶にても苦しからぬか。と有得るかぎりなか〱に落着きて見せしが、生憎に亂る丶は心を押へたる聲なり。

御身は以前に我を知れりや。と問には答へず十郎の聲は突として起りぬ。振仰ぎたる勝彌は其時鋭く他を讀まんとする十郎の輝ける眼を見たり。流石に少し氣色立ちて、然り、故ありて我は御身を知れり。

如何なる處にて我を見たまひし。と其聲は却つて穩やかなりき。

初めて御身を見たりしは何處なりけむ。其時心を留めてよくも見ざりしな

らば、今の此苦しき思はなかるべきに、其後いくたびか餘所ながらに見たる事のありしが、そは皆よの常の處なりき。されど昨夜……。

お、昨夜！

顏を見合せて暫く聲なし。驚くべしと思の外に十郎は色をも動かさず、稍ありて徐ろに、御身はこゝに來れる事をさしも御身の限りなき好意と思ひたまふか。

勝彌は此言葉をよくも解せず、思はず少し聲を上げて、御身はこれを好意ならずとしたまふか。たゞ我が醉興とのみ思ひたまふか。

否、まこと御身の好意なるべし。されどそは何かあらむ。と十郎は屹となりぬ。御身は氣の毒なる人なるべし。されどそれも何かあらむ。我は豫め斯かるべき事を知りぬ。よし、十幾年來執れるところの道を、我はたゞ一朝にして捨てんとは思はず。世はかゝるものなり。人はかゝるものなり。あはれなる御身よ。我は一筋に我が道を行くより外を知らず。我が道に殉じたまへ。

避くる間あらせず飛掛つて、突出す拳は稻妻の如く、眞の當身かそれかあらぬか、驚く際さへ、怒る隙さへ、叫ぶ隙さへ、許さばこそ、肋を目がけて打當てんずる間髮一機の危き途端に、襖の蔭より咄嗟とばかり、轉ぶが如く入來れるは靜子なり。

我を覺えず割つて入り、身を投掛くるも上の空、父の腕にすがりつきて、父樣ッ、なゝ何事でござりまする。もし、勝彌樣、どうぞ御免しなされて、父は時々、このやうな無法な事を致しまする。ならぬ處も私にかへて、ゆるして、ゆるしてと言葉も絶え〴〵、色を失ひたる顏は早や涙ぐまんとす。

あはれ、いかめしき十郎の顏に時しも怪しき氣色のひらめき渡りて見えしが、摑みたる手は敢なく離れて、殆ど我を忘れたる如くなりぬ。怒立つたる勝彌が面はさながらに朱を濺ぎて、爛々たる眼に稍しばらくは睨据ゑたるのみなりしが、御身はそも何たる人ぞや。十郎殿、御身が義に報ふの禮はかゝるものか。我は最早御身に向つて人らしき言葉を費さゞるべし。御身は我等が嚴明なる法律の制裁に適するより外には、その式の如く廻れる血の中に何物を

も持たざるなるべし。一點の私情、あゝ我は餘りに愚かなりき。我は只我が父が失ひたる權利を求めんのみ。我は御身に向つて覺悟せよとは言はず。此世が御身に與ふるところの刑は、寧ろ御身には大いなる慈悲なればなり。
十郎は更に答へんともせず、眉を垂れたる彼は半ば眠れるが如し。
勝彌樣、と情に堪へざる聲を擧げて靜子はたゞ身を以て訴へぬ。
おゝ靜子殿。我は最早御身に隱さゞるべし。あるべき事か、御身の父は盜賊なり。我は昨夜現に十郎殿が、しかも我家に於て盜をなせるを見き。あゝ其御身の驚愕よりも、我が驚愕の如何に甚だしかりしかを思ひたまへ。されど、我は此罪惡を憎むよりも尙深く御身を思へり。自ら我を陷るよりも尙深く御身を思へり。御身あればこそ、我は敢て此罪を蔽ひ、御身あればこそ、我はこの罪を引き受けて父を欺き、御身あればこそ顯はれざるに事を治めんとしてわざ〳〵此處まで來たれ。御身よ。如何に我が志の謝せられたるかを御身はよく見たまひしなるべし。御身の父を諫めんとする、御身の父をして辱しめを免がれしめんとする、飜つて正義の道を守らしめんとする、其間におい

て微かなる我が御身に向つての望はありき。されどそれも誤れり。御身の父が犯せる罪はこれのみに止まらざるべし。いづれの時いづれの處に、かゝる人を長くゆるす世かあるべき。あゝ御身よ、二人が夢は果敢なかりき。嘗て未來に向つて描けるさしも美しかりし夢は、あへなく昨夜にて崩果てたり。我はかくても我が愛を渝へんとは思はず。されど我はいかにして、憚かる處なく盗人の子の手を執つて世に立つ事を得可きか。我等が戀は割かれたり。我は御身と離れざるを得ず。されど期せよ。我は決して御身を忘れざるべし。此あたゝかき血の波立ちて、長き短かき此命のあらむ限りは、我は御身を忘るゝ事を得ず、春風秋雨、神はこれより後、昔の夢に泣く我を見たまふべし。あゝ我に一點いかなるものも遮ぎる事を得ざるべき涙あり。其涙のいかに清く如何に悲しきか、を思へ。あゝ御身よ。御身が父をして破れたる二人が戀を冷笑はしめよ。此濁りなき心と心とを、その黑鐵の如き手に屠らしめよ。静子殿。さらば。

袖振拂つて勝彌は直ちに其處を出でんとす。父と勝彌との顏を見比べて、驚

き呆れたる靜子は慌たゞしく其前にかけ塞がりぬ。

勝彌樣、お氣を鎭めて下されませ。父を指して盜人とは、あの忌まはしい盜人とは、餘りと言へばお情ない其やうな誣言を、たとへ貴郞のお言葉とは言へ、何で眞實と思はれましやうぞ。其やうな者か者でないか、生れた時から今日が日まで、傍に居通す私が、知らぬといふ筈がござりましやうか。勝彌樣、此事ばかりはお免し申す事は出來ませぬ。酷い、つらい、お恨めしい、何といふ事でござりましやう。父樣、もし父樣、日頃の嚴しいお心で、何で默つておいでなされまする。何で明りをお立てなされぬ。其お心が私には分りませぬ。よもや、よもや其やうな恐ろしい……とはいへ左樣して口を噤んでおいてなさるは。もし、父樣、何とした事でござりまする。若し此事が眞實なら、眞實なら、私は……あの私は……もし父樣私を可愛いゝと思召すなら、私を助けるとお思ひなされて、一言、たゞ一言、この私に安心の出來るやうな事を、どうぞ仰有つて下さりませ。

十郞は靜かに手を額に加へたり。呟やく如くみづからに語る如く、あゝ我は

我に一人の娘ある事を忘れたり。
俯向きたる目をあげて今しも凝然と二人を見詰めぬ。勝彌殿とやら。と呼掛けたる聲は甚だ沈重なりき。しばらく我が言葉を聞きたまへ。御身は御身が信ずるところを行き、我は我が信ずるところを行く。奪ふべからざる御身と我との間に、我が娘の相互に繋がれて立てるを知らざりき。よし有らゆる世のものは盡く打破すべし。我は遂に我が子の愛を斥くる事能はず。あ、我は今まで或事を知らざりき。勝彌殿、我は改めて御身が好意を謝し、また其好意に報ふところあるべし。尚其上に深く賴み入る處あるべし。料らざりき、御身は我をして再び得がたき或る動機を得せしめんとは。あゝ久しき以前より我はかゝる時の來らん事を樂しめり。我は程もなく何者も犯すべからざる最も尊きものとなる事を得む。いでこれを初め終りとして、聊か我が消息を御身等二人に傳へんとす。勝彌殿願くは忍びて聞きたまへ。
我も初めよりして斯かりしにはあらず。初め我は最も正直なりき。世の人はこれに對して何とか言ひたる。人は我を目して欺きよしとせり。初め我

は最も善良なりき。人は我を目して愚かなりとせり。初め我は最も温厚なりき。人は我を目して意久地なしとせり。我は人に交るに徳を以てしぬ。人は其徳を利用してたゞ自己が利を計れり。我は人に交るに義を以てしぬ。人は其義を餌取つて遠く逃去れり。我は人に輕んぜられたり。卑しめられたり。嘲けられたり。踏付けられたり。そは何等の故にもあらず、唯我が善人たるが故なりき。

初め我は大に富みたりき。能あり才あり智ある人々は蟻の如くに我家に集まり來れり。日として時として我家は多くの賓客と食客との影を絶ちし事なかりき。彼等が交りを求むる事の切なる、其時の我が一言の招きには猛火の中をも辭せざりしならむ。彼等が言葉はいと巧みなり。彼等が禮はいと恭々し。彼等は皆我を喜べり。我を慕へり。我を好めり。されど彼等の多くは皆産なきものなりき。我が餘れる財を散ずるに吝ならざる、彼等が請ふがまゝに與へもし貸しもする事を決して惜まざりき。かくて稍久しかりける後、彼等は一人去り、二人去り、三々五々、果は殘りなく一時に跡を絶ちぬ。其

時我には既に明日の食もなかりき。我が恩と信とに對して、彼等が酬いたるものはそもそも何ぞ。空になりたる我が財布と更に夥だしき負債なり。其他のものを求めたれど何もあらざりき。

我が窮迫と困苦との、其後を言はんとすれども言ふに堪へず。さしも我が惠みに與かれる幾多の人々の中に、一人として我を顧みんとするものなく、一人として我を厭はざるものもなし。曩の巧笑は變じて嘲罵となり、曩の面從は全く惡意となりぬ。彼等は有りし世より我を逐ふて未だ飽きたりとせず、尚も進んで我を葬らんとせり。

然り、何故に我はかくまでの憂目を見ねばならぬかを、我は殆ど解釋するに苦しみぬ。此時なりき。眼を放つて仔細に我と人とを比べたるは此時なりき。我の以て善とするところのものと、人の以て善とするところのものと、甚だしき相違あることを我は遂に見出しぬ。

驚くべし。つく〴〵見來れば如何なる世ぞ。滔々たる無數の人類中、我はただ私利の肉塊を見るより外に何をも見る事能はざりき。彼等が所謂善とい

ひ仁といひ德といひ義といひ忠といひ信といひ孝といふもの、何者かこれ彼等が敵に備ふる精鋭なる武器ならざる。彼等が所謂宗教とは如何なるものぞ。彼等が所謂道德とは如何なるものぞ。此等は悉く彼等が自家保護の機關ならずや。世を擧げて皆僞れり。恐ろしく飾れり。凄まじく衒へり。或者は自ら僞れる事を知らず。或者は更らに僞り。僞れる上を僞る。彼等は自己の心靈を汚せり。彼等は他の心靈を無視せり。我はたゞ彼等の强者が盛に暴威を振ふを見き。彼等の優者が飽まで我意を逞うするを見き。我は彼等に敎へられたり。我は素より進んでかゝる世を救はんとする大德にはあらず。又退いて道を守らんとする隱賢にもあらず。我は人間なり。我は寧ろ我等の優者が爲すところを學ぶべし。こゝに於て、我は彼等が以て本尊とする處の其利を尊みたり。彼等が以て手段とする處の其智を敬したり。斯くして我は新たなる世界に入れり。斯くして我に遂に盜賊となれり。御身は我が行爲を以て赦すべからざる罪惡となすか。あゝ御身は彼の白晝意氣揚々として公然盜をなすものを見ずや。區々たる財帛の掠奪もし罪と

すれば最も微なる最も小なるものゝみ。御身は今天下に行はるゝ尚大いなる掠奪を見ずや。彼の自由を盗めるものは如何に？　彼の名譽を盗めるものは如何に？　彼の性命を盗めるものは如何に？　彼の權力を盗めるものは如何に？　彼の功勳を盗めるものは如何に？　彼等の或者は其罪を飾るに無辜の血を以てせり。人は其血に向つて盛に喝采せり。彼等の或者は其罪を誇るに無數の屍を以てせり。人は其屍に向つて誠意て以て祝せり。御身は此等のものを取つを何とかいふ。

されど御身よ。我は嘗て世に弄ばれたるが故に飜つて世を弄びたるのみ。我は既に我が善を味ひ盡しぬ。また我が惡をも味ひ盡しぬ。我は善の苦しみを知つて其樂しみを知らざりき。惡の樂しみを知つて其苦しみを知らざりき。我はたゞ飽まで我意を振はんとせり。端なくも今日そは或る大いなる力によつて遮ぎられぬ。我は愕然たりき。あゝ知らざりき知らざりき。我は自ら其道に當つて而も知らざりき。我は今にして初めて知れり。世は遂に善を以てのみ立つ事を得べからず。また惡を以てのみ立つ事を得べか

らず。
我は志を翻へせり。庶幾くは今よりして、其善惡を超脫したる一歩高き人となる事を得べきか。我は再び御身に謝す。御身はまこと我が爲に有難き導師なりき。曩に我は御身の好誼に對して少しは人らしく報ふ處あらんといひし事を覺ゆ。御身よ。しばし御身に供ふべき我が贄を待ちたまへ。
靜子。我は日頃汝を慈しむ事に於て言葉少かりき。されど我等をよく知るものは心と心なり。我等が間にはよしなき言葉の必要を見ざればなり。よし、我は足れるが上を餘りに多くは言はじ。靜子、いつにても美しくあれかし。誠あれかし。健やかなれかし。尚その上に、最も幸ひあれかし。
十郎はやがて立上りぬ。書齋は此室と一間を隔てたり。出行く後姿の逞ましきを、勝彌と靜子が見送りてより後幾程もあらせず、爆然たる短銃の音は其書齋に響きぬ。
烟の下に昨夜の手文庫と一通の書あり。そは勝彌に宛てゝ、あはれなる贄の子に目を掛けたまへ。さらば。となり。

鹿子絞

（一）

道夫樣此綾が取れますかへ。と絣縮緬襦袢の袖の絡付いた眞白な手を押付けに從兄の前へ突出して、僕が其樣な事を知るもんか。とにべもなく言捨てられて叔母に笑止がられた唐人髷に花簪の頭さへ未だ障子の棧の半分上まで屆くか屆かないほどに小さかつたのが、朝夕車で送迎ひをされた學校と歸りに廻つた琴の稽古のいつれも業を卒つてから、某の刀自の門に入つて大町攸子と千蔭やうの手を懷紙に認めるまでになつた前後幾年かの間に、隣家の道夫は見上げるほどの大男となつて、眼が近くなつて、樣子がぼんやりして、一方には國史科出の文學士として、當時の官報或は新聞紙の一字を洩らさず讀盡す人に名を言へば必ずそれと知られた。攸子の標致と、道夫の學術を、二なきものに思つて居る双方の母親は互に其子の一人は目の汐を一人は肩幅を

見て殆んど天にも登つたほどに嬉しかつた。けれども道夫は口を結んで多くは書齋に閉籠つて、近く出仕を初めた役所の外はめッたに外出もせぬ。敏子は時たま狆を捉まへて氣まぐれに眉毛を描いて心ない小間使と共に覆へるほど笑ふ事もあるけれど、四邊の靜かな時は、何を思出してか竊と大息を吐く。其大息を兩家の誰も知らなかつた。

庭つゞきの枝折戸一つ、飛石傳ひに行かれる隣家の事であるから、敏子は殆んど毎日のやうに遊びに行く。けれども其髮の出來を見てくれるのは叔母で、着物の變つたのに氣が付いてくれるのも叔母で、詠草を褒めてくれるのも實は心當に自家で鳴らした琴を聽いてくれたのも叱てくれるのも叔母で、かれこれ言つてくれるのも叔母で、敏子はいつも塞いで歸つて來た。

表面には何喰はぬ顏で、道夫が退省の時刻をちやんと計つて其前に遊びに來て居るのが横着であるか。門を引入る車の音に思はず胸を轟かして、悟られはせぬかと叔母の顏を見るのが不埒であるか。お歸りなさいましを叔母より先へ言つて、喰付いてやりたいやうな可愛らしい顏をして道夫を見るのが

不屆であるか。心易立てに紛らして、かいしよらしく道夫の背後へ廻つて、服を脫替へさせるのが以ての外であるか。傍へ寄つて茶を入れて出すのが大それた事であるか。何であるか更に分らぬが、此いたづら者はそれがいたづらであるといふ事も自分は知らないで、はかなくも此樣な事を無上の身の樂みとして居るのである。

「おや〳〵お前は大層働くねえ。まるで自家のお嫁のやうだ。」

と叔母はいつまでも子供あしらひで笑つていふ。

「あら叔母樣。」

と有心か無心か顏を赧くして、

「道夫樣、叔母樣が彼樣な事を。」

と目で訴へて敏子は態と輕く笑つた。

道夫は無頓着に、

「はゝゝ。」

と笑たばかりで前の茶を一息にぐッと飮んで、無骨に立て居間へ行く。

倣子は又僭いて歸つて來た。

いつの夜であつたか、隔ての襖を明けて、

「道夫樣」

と湯上り姿の鏡を相手に出來るだけ拵へた作りを、打明て言へば見せに入つて來た。

道夫は折しも机に向つて居つたが、振向きもせず極めて冷淡に、

「何だ。」

「あの何を貸して下さいな。お明きなら、あの此間佛蘭西から來た繪のある雜誌を。」

「うむ。」と道夫は前に向つたまゝ、

「隅の書棚にある。探して持つて行くがいゝ。」

洋燈と、眞黑な頭と、怒た肩と太い短い首筋の倣子の目に映るものはたゞ熱心に前の書籍を見詰めたばかりか、自分には少しも構つてくれない除りな後姿である。

敏子はまことその雜誌が要るのであるか。直ぐに持つて行かうともせず、手持無沙汰に何かもぢ〳〵して居たが、
「道夫樣、」
と不意に呼掛けた。返事がないので、
「道夫樣ッてば。」
「何だ。未だ其處に居るのか。」
と道夫は始めて振返つた。敏子はさも恨めしげに、
「お邪魔ですか。」
或處で下女と奥樣とを間違へた道夫に、何で其眼の込入た心が讀めやう。最とも生眞面目に、
「邪魔ではないが何か用があるのか。」
「ようございますよ。」
たんと左樣なさいまし。と腹で言つて目で恨んで、つんとして敏子は歸つて行く。何の事であるか道夫にはさッぱり分らぬ。呆た顏して後を見送つた。

未だ五分と立たないに、敏子は又引返して來た。

「道夫樣。」

道夫は驚いて、怪訝な顏で振返つた。

「貴郎怒つて？」

「何を。」

道夫は猶更分らぬ。其顏を一寸見て敏子は莞爾して、

「さう！何でもないの。」

「何を言つて居るのだ。」

と、笑捨てゝ道夫はもとの座に直らうとする。敏子は何か言はうとして俯向いて、詮方なしに羽織の紐の先を指に搦んだり解いたりして居たが、思切つて、それも口籠つて、

「道夫樣、あの貴郎に少うし、あの何を。」

「え。」

と顏を見られて、急に言葉は出なくなつて、眞赤になつて、又俯向いた。

「何だ。何か聞く事があるのか。」

振仰いだ敏子の眼は涙組んで居た。

「なに最うい丶の。」

と言つたが何だか立場がないやうな變な工合で、

「又參りましやう。貴郎は御迷惑でしたらうねえ。」

道夫を見たが甲斐がないので、袂を啣へてしほ／＼として歸つて行く。道夫は其舉動を怪まぬでもなかつたが、敏子などに少しも重きを置いて居らぬので再び机に向つた折には最う其等の事は忘れて居た。

敏子は歸つて母の前を素通りにして突と居間へ入つて、それなり其處へ俯伏してしまつた。おれッたくつて、恨めしくつて、情けなくつて、悲しくつて、最う最う何も彼も人も我も厭である。髮のふるへて居るのは泣いて居るのであるか。はらりと櫛が落ちた。

（二）

恰度其頃、飴屋の太鼓には見離されて、稚兒の親には目を付けられやうといふ淋しい處に、梅岡三治といふ小作りな、凝性の生息子があつた。生息子といつても大門の棒縛を恐れる例の型ではなく、生意氣にと言へば失禮であるが、公平に言へば、正直に、世態人情をも論らふ方で、學問好で、不食嫌で、それで女好だ。生息子が女好、一寸聞くと不思議である。人間といふものには當然の事で、年頃になつて動機があれば大抵御多分に洩れず生心が付く。それが種々の方面に向つて働くので、たとへば此樣な事を言つたといつて不快を感ずるといふ男の腹の中にも、丈夫涙なきに非ずとか何とかいふ英物がりの惡見得がある。其涙の源から花が流れて來る。桃が流れて來る。飛んだ桃太郎といふ可愛らしいのが出來て三界の首械となる。親父や眞面目で笛を吹く。角兵衛獅子も笑はれない仕儀となる。それで市が榮えるのである。

梅岡の心の中に潜んで居たものが、二三の洋書を讀んで戀愛といふものを見

付出した時妙に相觸れて、何の事はなしに戀といふものが美しい尊い華やかな婀やかな何とも言はれぬ味ひのある詰まる處は世の極意であるといつたやうな事を感得した。それから後は可笑しくそは〳〵して戀に焦れて、勿論誰といふ當もなく、たゞ美しい空想を描いて一人で喜んで居た。

其頃天下は子供のやうに治まつて、空は四季の中最も浮氣の春先で、生暖かな、いやらしく下心を持つた風がお世辭のやうに吹いて來て、氣を持たせる花の香が其處等中に膳を据ゑて、枇杷葉湯のお月樣は年甲斐もなく羞かしがつて、小まッちやくれな名もない草までがそれ相應のおしやらくをして、すべて四邊の何も彼も色仕掛の眞最中だ。三治は其時候盛りの夕方に、唐の大和の歌心を寄せて只有る物靜かな、花のちら〳〵散つて來る屋敷町を通りすがつた事がある。其途中で三治はゆくりなく二人の女連の會話を聞いた。

二人共に未だ裏若い、可愛らしい娘頃であつた。島田の一が何うであらふが、又其髮が上つて居やうが下つて居やうが、着物が何だか柄が何だか、帶が繻珍であるか繻子であるか、其樣な事は三治には分からない。ただ其色彩の取合

せが如何にも巧く出來て品を作つて行く後姿に何とも言はれぬ縹緲の音が
あるやうに見えた。然も二人ともに、三治の殊に嬉しがる、且は尊んで居る處女であると思つて一段の好もしさを増した。

「あら仰有いよう。可いぢやありませんか。お隱しなさらなくつても。」
とあどけなく、輕肥した方のが莞爾して言つた。優しく引いた眉の匂、見るほど可愛らしい目元から顏を引立てるほどつんとした鼻筋、笑へば動く片笑靨の、それがあらぬか先刻一目見て、深く三治の注意を惹いた方のが莞爾して言つた。すると一方のも同じく笑つて受けて、

「だつて貴孃、」と妙に目を背けて、

「何だかをかしいもの。」

「でも私になら可いぢやありませんか。えゝお厭。其樣にも隱して置きたいの。さうして獨で嬉しがつてお出なさるの。屹度左樣だよ。憎らしい。」

「あら左樣ぢやありませんよ。けれども、」

「可うございますよ。たんとお隱しなさいまし。此間の明石さんの事だつ

て、私や貴嬢にはから竊と知らして上げたのに、可うございますよ、其氣で居りますから、

「あら酷いわ。それとこれとは事が違ひますわね。」

「それだから私は、」

「まあお待ちなさいよ、言ひますよ、斯うなの、」と言つたが切出しかねて、

「をかしいねえ。」

「いゝぢやありませんか。さア仰有いよ。」

「一寸耳をお貸しなさいよ。」と小さい口元を寄せて、「あのね、」

と目を細くして暫く何をか囁いた。

「まア左樣。」と三治の御贔負は聞終つて一寸目を見張つて、急に相手の顔を見て微笑みながら、

「それから貴嬢何うなさつて、」

「私ア知りませんツて逃げてしまつたの。だつて其樣な事を厭ですねえ、」

「でも何なら、それが若しあの方だつたら何うします。」

「何うしますものか、怒つてそれきり最う口もきゝませんわ。」

「屹度？」

「屹度ですとも。」

「覺えて居らッしやいよ。」

「あら何うなさるの。」

「其樣なら本當の事を仰有いよ。」

「知りませんよ。貴孃は私をいぢめるの。」

此樣な下らない愚にも付かない事を言合つて居る。三治がそれを聞いた處で、泣く譯にも怒る譯にも、笑ふ譯にも行かぬのである。けれどもそこに何かあるのか。三治は殆んど日を離さず其人を見詰めて居た。

二人は談話に氣を取られて其樣な人の居る事は知らないので。其身にすれば寧ろ大膽に、飛んだ輕跳みな事も言つてのける。忽ち輕肥の方は手を上げて相手を打たうとする。袂が飜へる。手巾が落ちる。知らずに追ひつ追はれつ行過ぎる。其手巾の上に蝶が近よつて又飛んで行く。風が吹く。手巾

が散る。花も散る。取立てゝ言ふべき事は何もない。

三治は立寄つて手巾を手に取つた。香水の香は忽ち面を撲つて來る。薄桃色の綾織の隅に敏子とお手縫工の縫がある。それを見て居たのか、稍暫く三治は手間取つて、急に落し主の方を見て、追駈て行つて、惜しかつたが渡した。其時である。一言でも、三治は何か無限の趣味のある言葉を發したであらう。けれども其より先に、言甲斐なくも胸は騒出して、高が帯を一人で締められるだけの少女が、何か犯すべからざる尊貴の人であるやうに思はれて、どちッて、間の拔けた事を言つて、氣の毒にも相手の顏すらよく見られないで、もじやもじやの間に渡してしまつた。

これでも自家では一かどの人情博士だ。それだから面白いのだ。

女連れは驚いた。二人顏を見合せて、きまりが惡さうに、禮もそこ〳〵に急足で其場を外してしまつた。三治は茫然として佇立んで居た。

兩側に立並ぶ垣を溢れて、思ふさま咲亂れて道を壓して居る花と花との下を、小走りに行く二人の後姿が未だ見える。梢は夕日を爭つて花は殆んど醉崩

れて何處の籠からか幽かに鶯の語も聞える。犬は寢續けに寢て糸遊は燃續けに燃えて、ぢッとして居れば眠さうな、夢の樣な時である處である。

三治は二人を見失つたと共に自分を見失つたさうだ。

それでも、烏にも啄かれず、蜂にも螫されず、車にも曳れず、溷にも落ず三治は歸つて來た。歸つて來たけれど忘れる事が出來なかつた。何だ道で遇つて見て別れた珍しくも面白くもない事だ。幾百遍も幾千遍も日々夜々、に其樣な事は數限りもなくある。氣の知れねえ頓痴氣だ。と怒つた處で譽られても始まらないのだ。あくる日三治は昨日の場所へ出掛けて行つた。勿論其人に遇はなかつた。

其後いろ／＼の事があつたけれど遂に遇ふ機はなかつた。それで三治は忘れなかつた。忘れない處かいよ／＼深くなつた。

貞節三治物語といふ事は別にして置いて、世は末法に及ぶと雖も此樣な人があると言ても、政府といふお爲ごかしのものは素よりこれに向つて藍綬章を與へやうともせぬ。世間といふ座敷牢に居る奴等は其馬鹿々々しさを大笑

に笑ふばかりだ。からと言て命づくで喧嘩をする氣遣もないのだ。例に依て例の如く天下は泰平だ。

（三）

其後道夫は忽然と藝者買を始めて、敏子は傍へ寄つて來た狆を、いきなり物指で撲るまでに妬んで、三治は眞面目で其處等を徘徊して、アヽと自ら感歎して居た。

それツきりだ。それツきりでは話にもならぬと言つたつて、それを僕が知るものか。今盛代の忝なさには、此樣な事を言つて時をつぶしても、先々絞罪にもならないのだ。

我々は日に、誰某が女の爲に出刃庖丁を振廻したとか、何處其處の娘が馬の足の家へ驅込んだとか、何某の大臣が待合へ入つて女將を頼んだとか、何處の方丈が什物をこかして普賢さんを受けたとか、奥樣が忍んだとか、後家さんがおろしたとか、警八風だとか、七つ下りの雨だとかいふ事を聞く。それが何であるか。

我々は又、華臍魚鍋の前に胡座を組いて、片手に箸を持て片手に猪口を出す三

尺帶だの、妓を携へて海濱へ行つて、高が酒を飮で戯けて寢ばかりの男だの、今日は全盛に誇つてだゞら遊をして、明日は尻尾を捲て驅落をする相場師だの、全く人を盛潰すほど正義公道を振廻して、其實自分が可愛いゝ志士だの、可笑しくもない事に笑狂つて、踊つて跳て酒落のめして、家へ歸れば惡く氣むづかしい太鼓持だのを日毎に見る。それが何であるか。裸にしなければ雌雄が分らないのか。血が出れば紅いのか。骨が出れば白いのか。痛くなければ正宗か。何が何だかめッちやくちやだ。それでいゝのさ。と或人は語つた。

島田くづし

（一）

一寸見れば素人のやうな、よく見れば何處か垢拔けのした、十八九の、髷のいきな、顔のしまつた、それで何となくあどけないやうに見える娘が、今紙屑拾ひが出て行つたあとから、小走りに路次の中へ入つて井戸の前をぐるりと廻つて、此方へ背後を向けて居る隅の家の、裏口の腰障子を半分明けて老媼さんと言つて莞爾笑つた。

「おやお仙ちやん。遲かつたねえ。何んなにか待たらう。さアお上りな。」

と中から出て來たのは氣の知れぬ若作りの、場所によつては氣味の惡い婆樣である。前の娘は中に入つて上りかけながら、

「私もねえ、眞箇に氣が氣ぢやアなかつたけれど、意地の惡いやうに又用が出來て何うしても手が明けられないんだもの、ぢれッたくつて癇癪が起つて眞

箇に最う腹が立つて仕樣がなかつたわ。」

と上つて未だ座にも着かない中に、

「あの何は？」

「居ないよ。」

「えッ歸つたの。」

「あゝ、大へんに怒つて。」

「まア何うしやう。」と色を變へて撞と座つて、「老婆さんでもない、何故とめておくれでないのだえ。」

「あはゝゝゝ本氣にする中がいゝ、私が付いて居てなに歸すものか。」

「まア憎らしい老婆さんだよ。だが藤さんの事だから、」

「え、何だつて、」

「いゝよ、まけて上げるといふ事さ。おほゝゝゝまア行つて來るよ。そして何は餘程前に來たのかへ。」

「あゝ可なり前だつたよ。さア早くお出な。あんまり來ないもんだから先

刻はすこぢれだッけ。早く行つて腹癒せに思入れ嬉しがらせておやりな。お前の事だから如才もあるまいけれど。」

「おや如才でいろが出來るもんかね。私ァ其樣な浮氣なんぢやないよ。」

と梯子段の方へ行きかけて、又振返つて、

「老媼さんいつもの何を左樣いつておくれかへ。」

「あゝ最う先刻。」

「左樣、有難う。」

と薄暗い、勾配の急な段梯子を上つていそ〳〵二階へ行つた。

「藤さん。」

と障子の外から聲をかけて、「さぞ待つて居たらうねえ」を言はうと思つて、がらりと明けて「おや」と輕く言つて、後を閉めて直ぐに傍へ差寄つた。

藤は寢て居た。二つ三つの肴を載せた膳を横ッちよに曲げて、空の方の德利を轉がして退屈紛れに下したのか、彈きさしの三味線を脇へ抛出して、酒で赤くなつて煙草盆を枕にして、仰向樣にうんと足を踏伸ばして居た。

「藤さん。藤さん。」
と揺起されて目は覺めたが、平氣で何處までも寐た振だ、
「藤さん。藤さんてば。あら狸だよ。憎らしい。」
言ひつゝ藤の煙管を取つて煙草を詰めて、いきなり藤の顏へ烟を吹掛けた。
藤は咽せながら未だ強情に起きないので、耳を引く鼻を撮む、擽ぐる、捻る、枕を
はづす。藤はとう〳〵手をあげて振拂つた。
「えゝ止せえ。」と突放して起上つて、「情なしめえ。今頃來やがつて。」
「おゝ恐い。」
と笑つて少し脇へ寄つたが、顏を見上げて、
「其樣に怒つてくれなくつたつて可ぢやないか。人の氣も知らないで私ア
お前より何樣にぢれッたかつたか知れやしなかつたわ。」
「べらぼうめ、大概方途があらア。いくら己の方から呼出しを掛けたんだから
らッて、高を括りやアがつて、から、左樣踏付けにするんなら己の方でも了簡が
あらア。」

「お前は左様一途だから仕様がありやしない。ちッとはまア私の身を察してくれてもいゝぢやないか。表立つて逢はれるお前ぢやアなし、それ相應に用もありやアおいきたで駈出しちやア來られないし、阿母樣は嚴ましいし阿爺樣は一克だし、それに又此頃は家が忙がしくつて、ほんとに目が廻るやうなんだもの。足しにもならない私だけれど、一人減りやアそれだけ手が拔けるから、一通りの事ぢやア阿母樣も快よく私を出しちやアくれないしさ、それを切拔けて來るんだものお前何樣に骨が折れるか知れやしない。そこに氣の付かないお前でもないぢやないか。え、藤さん、私の心を眞實に知つておくれなら其樣な口上が出る筈ぢやアないよ。」

「ふむ、さん〳〵待されて恩に着せられて、己の器量のよさ加減を見てくんねえ。白痴も其處まで行きやア行止りだア。話の樣子ぢやア馬鹿に忙がしいやうだが、聞きやア前から大分熱くなつて來る奴が五月蠅くあるさうだな。それで遲くなつたんなら猶の事申分はねえのさ。」

「およしよ最う癪を言ふのは、何うでもお前の氣の濟むやうにしやうわね。

たま〳〵逢ふんだのに些少は嬉しい事も聞かせておくれな。厭だよ、いつまで其樣な顏をして居るんだねえ。」と脇の三味線を見て、「いゝものが出て居るぢやないか。久し振で咽をお聞かせな。え、鳴らさうか商買人じみて氣耻かしいけれど。」

と言つて思入れ愛敬を見せて笑顏をむけても、藤はむづかしい顏で默りで居るので、ズッと膝を突付けて少し思込んだ調子で、

「藤さん、それともお前本氣に私が憎いのかへ。」

「憎くつてべらぼうな、馬鹿な面アして斯うやつて待つて居られるもんかへ。だが餘りいゝやうにされちやア己にも虫がありやア腹も立たア。」

「さう柄をすげるからむづかしくなるだらうぢやないか。まア何うすればいゝんだへ。お前でもない。何故左樣捌けないんだらうねえ。まア機嫌を直して一つお上んな。」

と冷たくなつた酒を捨てゝ、さアと猪口を手に持たせた。

「厭だ。」

「勝手におしよ最う。」

と突放すやうに言つて猪口を投捨てゝ、くるりと身體を壁の方へ突向ける。

藤は落付いて、

「愛想が盡きたか。」

「知らないよ。」

言葉は途切れて座は白けて、お仙はまじ〳〵と壁をながめて、藤は所在なく烟草を喫して其まゝ稍〻暫くは納まらなかつた。近くの家から子供の鞠唄が、さも面白さうに拍子づいて聞える。

急がはしく藤は煙草入を腰にさして、矢庭にずんと立掛けた。

「ちよッ、歸らう。面白くもねえ。」

お仙は吃驚して振向いて、慌てゝ駈寄つて縋付いた。

「藤さんお前まア何うしたんだねえ。私に何の落度があつて其樣に腹を立てるんだえ。そりやア待たしたのは飽まで私が惡かつたのさ。だから譯を言つたぢやないか。それとも私が何か濟まない事をした手性を押へたんな

ら、さア遠慮なく言つておくれ。私だつて氣を揉んで漸つと手を拔いて急いで來て、勝手を言やア餘り思遣りが無いやうにもつい思ふぢやないか。まアお座りよ。お座りッてのに。强情だねえ。」

と手を捉へて無理に座らせる。藤はもとより歸りたくはないのだ。接穗がないので意地を張つて見て論もなく止められるのを待つて居たのだ。引かれたを機に態としぶ〳〵座に着いた。

處へ咳拂ひを先觸に、足音を高くして下の婆樣は銚子の代りを持つて入つて來た。

「老媼さん、藤さんが先刻から私をいぢめてしやうがないよ。」

「でもお前、思ふ人ならいぢめられるのも樂みだわね。」

「おや厭だ。」

藤はお仙を尻目にかけて、

「なにね老媼さん、それッてのもお仙の浮氣が過ぎるからさ。」

「いつ私が浮氣をしたえ。」

とお仙は割つて入つた。婆様は笑ひながら、

「まあ見つともない。氣をお付けよ。犬も喰はないとさ、藤様も分り切つて居ながら何うしたもんだね。仲の好過ぎるのもそれだから困るよ。」

と又二つ三つの捨臺辭で、二人を笑はせて軈て下へ降りて行つた。藤は膝を崩して再び膳の前へ向つて、

「まアいゝや。何も大目に見てやらう。惚いやうだが顔を見るとつい迷出さア。魔物めえ、さア酌をしねえ。」

銚子を持ちながら、

「やつと安心した。けれどもお前其様に氣が短かくツちやア、眞箇に此末が案じられるよ。」

「馬鹿ア言ひねえ。底を打ちまけりやア情けねえ事だが、惚切つて居るのだから何うにもならねえ。」

「それでもお前何かしやくられてもすると、直に私を捨ておしまひだらう。」

「なに人、そりやア上ッ面ぢやア何んな事を言つたつて、心の錠前を外しやア

しねえ。」

「屹度かえ。」

「知れた事よ。まア一つ飲んねえ。」

と相酌だ。

「其口をお忘れでないよ。」

受けて、干して、心から莞爾して、はいと返した。

（二）

上根岸の、何とか横町といふ七道具を持つて朝湯に行く女が居さうな處に、鳥御料理の招牌は凄まじいが、それには違ひない一寸した鳥屋がある。娘のお仙は今しがた歸つて來て阿母さんに叱られて、何か腹の立つ事でも言はれたと見えて二言三言口答へをして、つん〳〵して襖に當付けて脇の部屋へ衝と行つた後から、お柳といふ此家では古參の、年も相應に喰つた髮の薄い女中が用ありげに入つて來た。

「お仙さん。おや何うかなすつたの。」

お仙は見てお愛想に笑つて、

「なに今つまらない事で阿母さんと言合つたんだよ。何か用？」

「はア、外ぢやアありませんが源樣の事で。」

「其源樣の事で今やかましく言はれたの。餘り源樣を粗末にするツてそりやア最う今始まつた叱言ぢやないけれど、それでも私にや商賣づくのお世辭

より外にやア言へないもの。成程源樣は久しい前から毎日のやうによく來ておくれで、私等にも眞實に氣の毒なほどよくしておくれだけれど、厭なものは何うしたつて厭ぢやないか。萬更世話になれとまで、阿母さんは言やアしないが、たゞよくしろッたつて此上のよくしやうは最う私にやありやしないもの、何も稼業だからつて左樣しなけりや立行かないといふんぢやあるまいし。ねえ、左樣ぢやないか。」

「そりやア左樣ですとも。ですがね、商賣冥利でなるたけ先にも惡く思はれない方がいゝぢやありませんか。それよりかあの源樣はね。」と少し膝を進めて。「急に遠くへ行つて最う此方へは歸つて來ないんですとさ。」

「えッ。」と突如なので流石にお仙も驚いて、

「何うしてまア。」

「何でも家の都合で是非左樣しなけりやいけないんですとさ。それて暇乞だと言つてお出なすつてね、貴娘にも最う一度逢つて行きたいッて先刻から歸りを待つてお出なの。」

「さう。」

と默つて考へて居る。

「罪滅ぼしと言つちやァ何ですけれど、これがお別れといふのですから義理にも一寸行つてお上げなさいな。」

返事が無いので又、

「功德になりますよ。眞實に。」

俯向いたまゝお仙は未だ默つて居るので、訝かしげに顏を覗いて、

「お仙さん、何うかおしなの。」

はツと氣が付いてお仙は急に顏を上げて、

「え、なに、何でもないの。」

と其まゝ直に立上つた。

「行らッしやるの。」

「あゝ。」

とばかりで後をも見ず源樣の居る座敷へ駈出して行つた。

源樣といふのは車坂あたりの銅版師で、最う血氣を過ぎて女房子もある男である。先刻から餘程飮んだが、少しも醉はないで、まじ〳〵してお柳が行つたあとでは附元氣もなくなつて甚く欝込んで、手酌の無理飮で又一つ仰飮つた處へ、矢庭に障子を明けてお仙は飛込んで來て、直に源の傍へぴッたり座つた。

「源樣、ちッとも知らなかつたもんだから大へん遲くなつて漸つと今歸つて來ましたの。今お柳に聞けば何處か遠くへ行つておしまひなさるつて、眞實ですか。まア何うしたら可からう。え、眞實に行らッしやるの。何うしても行らッしやらなけりやならないの。

堰込んで、むきになつて問掛かる勢ひに呑まれて源は嬉しくも驚いた。是迄長い間隨分長い間根よく來續けたが、嘗て一度も此樣な調子で話された事はなかつた。今日は殊に別れ際の逢つたらば此樣彼樣の心積りはさま〳〵に有つたが、お仙の其樣子にそれは一句も出なくなつて、

「お仙樣、よく來てくれたね、實は最う逢はれまいと半分諦めて居た。」

とばかり其聲も調子が違つて居た。お仙は猶せいて、

「そして何日いらッしやるの。」
「明日。」
「えッ、明日。何うしたら可からう。それぢやア今夜ッきりですねえ。源樣、後生だから何うかして一日延ばして最う一度ゆッくり來て下さいな。斯うなつて見ると、私ア貴郞に濟まないやうで、お氣の毒でお氣の毒で堪りませんものを。」
「お仙樣。」と源は思はず身を押向けて、「よく言つてくれた。それで澤山だ。其言葉て此胸は霽れたといふものだ。お互に淸く笑つてしまはう。」
「左樣お言ひなさるほど私ア猶の事お氣の毒でなりません。ざつとしたお馴染ぢやアなし二年も押通して我儘の仕放題で、」と源の顏を見て、「源樣、あやまつたばかりぢやアお氣にすみますまいが、何卒まア此樣奴だと思つて勘忍しておくんなさいまし。」
「なに〳〵勘忍もへちまもいるものか。其樣な事を言やア此方こそ長い間厭からせばかりを言つて、今思へば重々氣の毒でならないわな。なに最う此

上への願はなしさ、たゞ憎い奴だと思つてくれなければそれでいゝのだ。嫌味ッ氣は根こそぎ扱いてずッと美しくして別れやう。といつて忘れる事は出來ないけれど、こりやア自分の、まア、まア樂みにして腹の中へしまつて置かう。と脇の風呂敷を解いて何か包んだものを出して、「お仙さん、こりやア私のほんの志だ。何かと思つたが働きのない私の事だから精一杯が此樣なものさ、記念と言つちやア可笑しいが何うか取つて置いておくれ。」

「私アまア何うしたら可からうねえ」

投出したやうに言つてお仙は泣伏した。

運命は急奔する。人情も急奔する。一時間ばかり過ぎて後、二人の間に斯ういふ言葉が聞えた。

「今更お前、」

「さア言つたが惡けりや何うともしておくんなさい。」

「だつて私は最う別れる身だ。」

「なに何處へも遣るものか。私の思ばかりでも餘所へ行かせやしない。」

「そりやア無理だ。」

「何うせ無理さ。無理をこれから流行らせやうぢやありませんか。貴郎は最少し實があると思つたのに。」

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

源は行かなかつた。行かないで一月ばかり華美に通つて、紙幣を贋造したとやらで捕縛された。

お仙は其前、或夜藤に捕まつて、島田を根からぶッつり切られた。最う藤さんに逢ふ事は出來ないのかと言つて、お仙は其一夜泣いて泣いた。

お仙は源の記念を腹に宿したさうだ。

奥様

(一)

産婆に抱上げられて玉の如き姫君と囃されしより以來、兩親の鍾愛は後れ毛を動かす風をも厭ひ、雨には當てじ霜を踏ませじ、乳母腰元に春を圍ませて育上げたる秘藏娘、二の腕に殘す種痘瘡の痕より外は黑子ほどの瑕もなく淸浦家の令孃芳子といへば、知らぬものにも美しき名は傳へられて、噂は思はぬ所まで高きに、父よりはまして母親の目は溶けて流れて、簞笥の中に新らしき帶の數となりし。

芳子はまことに可憐なる乙女なり。浮世の風に揉まれねば天眞其まゝに成長ちて、濁に染まぬ白露の淸く優しく素直なる資性、或向の口惡者にいはせたらば世間不見と一概に蹴落して、例の首振のお姬樣と嘲けるべけれど、他人の油をもて我髮を飾る惡賢き輩に比べたらば、芳子は何處までも罪なき天女な

り。もとより深窓の中に養はれたれば内に火の車を廻はして外に抱車を走らする機關を知らず。まして笑の中の劍などを悟るべき塲合もなく、字に見人に聞きて社會の一通は心得たれど經驗といふものが教込まねば、雪は白きもの、人形は可愛きものとばかり覺えたる佛なり。

されど此無邪氣なる無經驗なる雛鳥も、はや親鳥の巢を離れかけて纎弱き羽を刷ひ、行手の方を見上げて春の宿を定めんとす。高嶺は花か雲か霞か。

急がるゝものは暮方の旅と年頃の娘の嫁入、女は更易きものなればと母親の先心せかれて、落付く父親を巴渦の中に卷込みて此頃の婿選、あれかこれかと若殿原の品定して、よきが上にもよきをと望めば、品はいろ〳〵あれど扨手に取るは無いもの、鶴は長く鴨は短く、それと氣を付けて見れば廣くて狹きやうな浮世なり。

婿君の候補者として第一に目に止りたるは書記官某、俊才の切味よきに正宗と綽名つけられて、省中にても二と下らぬ利者とか。舅はあれど男は心廣きものなれば嫁には難なし。資産も饒にて親戚も皆よしとの事、何よりは先づ

榮達の見込ある婿の器量に父親は二なく惚れかゝりて彼をとの望、母親も別に異存は無かりしが、年は三十七と聞いて目を見張り、二十も年の違ふ處へ嫁ると思へば急に足の進まぬ心地して、娘が疵物とでもいふなら兎も角、又は出戻りともいふなら兎も角、縁遠きどころか貰手は網の目からといふ最愛のものを、何の不足ありてかゝる不似合の人に投げて遣らるべき。これに限りたりといふではなし。同じほどの身分同じほどの才覺者にてまだ〳〵幾人もあるべければ、外をも當りたる上ならでは直に承知はなり難しと、流石女氣質に春を通越して夏に飛入る思もし、寫眞を見れば馬蚿眉に金壺眼の類なき醜男飛んでもなき事、容色は男に掛構なきものとはいへ、これには又餘りなる不釣合と如何なる處に目をつけられてか以ての外の頭を掉り、容貌は處世に一文の價直もないぞ、人物々々といはるゝ父親に死力を盡しての抵抗、あはれや書記官殿の正宗も、此母親の前には菜切庖丁ほどの刃も立たざりき。

第二には機敏なる生糸商年は二十五と聞えて男前よく、廿歳の時に暖簾を譲受けて、五年の中に家産を十倍にしたる働き手、これには母親の乗氣になりて

膝を進められしに、縁談の鬼門に當つて姑といふむづかしき道具あり。しかも旋髪に中分あつて目に鋭き光ありと聞いて眉を顰めしが、其上に小姑が四人ありとあるに、鬼四千匹と慄毛をふるひ、これも二の足の姿となりぬ。第三には若手の中に最も聞えたる文學士、ある大學に教授として學生中にも名望ありとか。氣象は淡泊して少しも嫌味なき男、親もなし、兄弟もなし厄介もなし。何處にもこれといふ不足はなきに、硬かりし母親の項も前に傾て、それぞれ聞合せしに何れにもよき取沙汰ばかりなれば、出雲の神も帳付の筆を取上げたまひて縁は七分まで纏り、跡に芳子の胸を開くばかりとまで運びし折から、端なく婿殿に肺病の遺傳ありといふとが耳に入りて、これには父親が先づ手を引き、博學多識の教授殿も此試驗には落第されけり。

次には爵を持ちたまふ四位の君の次男外に非難はなけれど右の足が少し長過ぎるとの事に、これも逡巡して脇を向きぬ。次には某寺の住職の子息、振袖に抹香の匂は思はしからずとて斷り、次に評判よき代言人某、これは再婚とあるに頭から跳除け、それより種々の人に渡りたれど、選れば選るほど劣りたる

ものが出て來るやうになり、これほど見廻して未だ經らぬにぢれながら、其場になれば又迷出し、思はしからぬ雲行に照るかと見れば曇りぬ。
最後に現はれ出たるは洋行歸りの紳士、媒人のいふ處によれば名は高間賢次故郷は伊勢の山田、父は名たゝる實業家、或る文明の利器を初めて我國に輸入して淺草に大工場を開き、都の空に石炭の烟を立上らせたる始祖、其子息に生れて未だうら若き時より英國に留學し、それより佛に遊び獨に行き、米國にも又一年を過して此程歸朝したる人、年は二十七にて人柄よく、玉突を除くれば外にこれといふ道樂もなく、萬事に通じて暗からぬ生れ、今はさる土木會社の監督技師となりて、家はいふまでもなく豐かなりとの事なり。
これに結ばるべき縁なりしか、相談もする〳〵と滑かに運びて、兎も角も見合といふ事となり、場所は何處と尋ねしに、婿殿は何の構もなく、何時幾日自身に此方へ來るといふ。
幾度か芳子の胸は騷ぎけん、又幾度か美しき顏を赧らめけん。　女ばかりの中へ出ても、他人の前にてはほッと上氣して口もきかれぬ内輪者なるを、見も知

らぬ男の前に出るかと思へば、恐ろしくもあり羞かしくもあり、其人を見たくもあれど、顔を合はすとすれば又氣後れし、此方も餘所ながら見、彼方も我に知らせず見て、それで濟むといふ事にはならぬかと、逢ふが一苦勞にて虎の棲家へでも行く如き思、寧そ母樣に願ふて日延をして戴くべきかと、一寸免れの弱き音を鳴らし、なるならば先方に差支でも出來よかし、車が來ぬほどの大雪でも降かしと思ひながらも、明日は其日となれば流石に髮の出來を氣遣ひ、寢る前つく〴〵と鏡を見たるは、何といふ心か知らず。

憎や翌朝は當付がましく晴れ渡りたる空合、母親にせき立てられて湯浴し化粧し畢れば、晴小袖取出して早差付けらるゝも心苦しく、帶上を締めかけながら何うやらお腹が痛くてと、逃口上の前置を並べしが、とても叶はぬものと締め、本を膝の上に取上げて投首を隱す中に、定めの時刻となれば又更に胸はわくつく折しも、がら〳〵と車の音して玄關に止りしは、正しくそれと思はずはッとする途端、小間使が高間樣と母の前への取次、芳子は逃ぐるやうに我が居間へと隱れぬ。

今にも呼びに遣さるゝかと氣が氣でならず、座敷の方に耳を澄ませば、興ありげの話聲聞えて時々笑聲も交れり。太く嬉しげなるは父樣、淸く調子よきは彼人のなるべし。何を語ふて居たまふにや。乾度我が事なるべきと思へば、行きて陰ながら聞きたけれど、もし常小間使にても見付けられたらば、跡で如何に笑はるべき。今母樣のお聲の止みしは、若しや我を連れに來たまひしにはあらぬか。緣の足音はいよ〳〵最早座敷へ出ねばならぬか。行くのは如何にしても羞かしくてならず。あゝもう其處へ母樣が。何としたらばよき。何故世に見合といふ切ないものがあるやら。

案の如く母親は入來りて挨拶に出よといふ。かねて期したる事ながら立ちもせず氣の進まぬ素振、手を取られても猶もおく〳〵して動かねば、母はそれと見て物優しく、少しも羞かしき事はなし。先方は極々氣さくにて心の置かれぬお方、一言口を開きたる後は百年も馴染みたるやうに誠に懷かしき人なり先づ來て見よ。お話振りも面白いと、猶いろ〳〵に勸められて、されば一寸御挨拶だけして直に此處へ戻りてもよきやと聞けば、お客樣は其方とお話がし

たしとのお望とあるに、えッ、お話？座敷へ行くさへ精一杯なるに、何として外の言葉などが交はさるべきと、立ちかけたる膝を又折りて長く座敷に居るは嫌と頭を掉る。其様な我儘をいふと父様に叱られるぞへと威し、又聲を柔らげて、さほどむづかしき事にはあらず。此前川村様が初めて來られた時の如くせばよし。唯々と否々でも事は濟む。必らず重々しく取るには及ばずと云聞かすれば、さらば我は默つて居るほどに、母様が代りて御返事をして給はらぬかといふ。それはよけれど終始默つて居たらば、お客様は痴かとお思ひなさるべしと笑ふに、痴と思はれても我には應答が出來ぬものをと、まだ〳〵行く氣色もなきを欺し賺して立たせ、やッとの思にて客間に足を向けさしぬ。はや間は幾疊と近きて、今は隔の襖ばかりが我が味方それも母親の手にかゝらば身は彼人に露出しの姿と、動氣は高まりて早鐘を撞く途端、敷居はするりと音してぱッと射したる座敷の明り、芳子は瞬く中に顔を紅に染めて、這入りたるも坐りたるも辭義したるも夢の如く、高髷は暫く疊を離れず。

（二）上

まんがちな父様、母様に、我は嫁に行きたしと云ひもせぬに、無理に手を引いて進まぬ方に誘ひ、此様な羞かしき思をさせたまふとは、人の氣も知らぬお仕方なり。今の願をいへばいつまでもお膝下に居てまだ／＼我儘をいふて暮したけれど、最早嫁くに極まりたれば何も詮なし。此迄は外出も稀に、兩親の杖を離れては何事も爲得ぬ身が、俄に馴染もなき家に引渡されて、いかに賴少く心細く、又いかばかり窮屈なるべきかと、芳子は獨かく思へり。

されど昨日母様の仰に、我よりは十段も立優りたる方がとかくに縁遠くて幾年越の物思、鏡の前に赤き手柄の似合はず成行くを歎き、夫となるべき人は耳、遠くて、然も二度添とある縁談にも耳を傾くるが、世にはいくつもある例なるに、更けぬ間に身のをさまりをつけて、申分なき好婿持ちたる其方は天晴なる幸福者、我も丹精の爲榮ありて、此めでたき日に遇ふことの嬉しさよと喜びたまひしが、何故に天晴なる幸福者か我は未だ分らず。

父様はまたつく〴〵と、人の妻となる上はいつまでも世間不見にては通されず。此迄我等に甘えたる如き心を取除け、一人前の女として浮世に立つべきぞ。家を治むるは第一の役、其方の仕向一つにて倒れもすべし起りもすべし。夫に冊くには日頃教へたる道を忘るゝな。下々の陰口によき取沙汰のあるやうにせよ。交際ふ人々に後指をさゝるゝな。愛の一字を骨に刻み、誠の一字を心に印し、高間の一家はいつも春風の渡る思あらせよ。其方が此家を出行きし後も、父は絶えず其方の上を氣遣ふとを忘れず、母も絶えず心を通はすを忘れずば、假初のことをも仇にはせで、よく〳〵身を正して兩親を喜ばせよと平常になく嚴かに宣ひしが、不束なる身になか〳〵お言葉通りの所爲がなるものぞ。これより幾歳と過ぎての後は兎も角、今の我にかゝるむつかしき註文をしたまふとは、人を困らせたまふとにはあるまじけれど、さりとは聞えぬお心の中なり。

されど夫が若し情ありて、我が足らはぬをよく察したまはゞ、叱りもし諭しもして教導きたまはゞ、あるかぎりの眞心を盡して冊くべけれど、人の氣を取る

術などは露知らぬ我なれば、お心に叶ふ節の何處もなくて、暫くの間に飽果てられたらば何とすべき。高間樣は我の何處を見たまひてか、見合の折より一しほ御執心かけられしと聞く。會ふての上に猶の事お望とあれば、取柄なきながらもお氣に召したる處ありしか。人柄も並すぐれて、お心の中も物優しげなるお方、若し我を、我を可憐がりたまふとなら、此上もなく喜ばしき事にはあれど、人の心は讀難しとや、家にてはいかに氣むづかしく、懷きがたきお方かも知れず。されど兩親が殘りなく聞合せたる上に取極めたる結婚、我を慈しみたまふお心に手落のあるべきやうもなければ、それは淺猿しき邪推なるべし。されど若し、いや〳〵根もなき廻り氣なり。我は最もよき夫を持ちたるなるべし。最も幸なる家に住むべき身なるべし。父樣も喜べり。母樣も喜べり。我は何故に先に立ちて喜ばぬか。

夜はやう〳〵更行きて、庭の小瀧の音のみ際立ちて聞ゆ。奧の間にまだ話聲の止まぬは、お二方はまだお寢らでか。幼き折よりお世話を燒かし續け、今日此頃は取分けてお心を勞らせ申したりし事よ。御恩の萬分一も送り得せず。

早くも引離れて人の物となる殘多さ。さるにても數ふれば十八年の歳月、住馴れたりし住家の去るに忍びず、こゝに生れてこゝに成長ち、多くて十日とは離れざりし身の、昔を振返れば懷しき事の山ほどなる故郷、正月小袖雛遊、月に花に思ひ出づる事ばかり、床の間の人形も違棚の繪卷物も、いづれか懷舊の種ならぬはなき。

芳子は手焙の前に身を寄せて、獨つくぐ\と思の中に埋れしが、俄に立つて傍の窓を開き、暫く庭面をづッと見詰めたり。梅はまだ香をも送らず、月のみは朧氣に春めきたる夜半、朦朧として見ゆる汀の燈籠中島の小祠、打寄する漣もそれと見る、眼には名殘を惜しむかと思はれ、殊更手植の椿の二三輪花を持ちたるいとしさと、目は心弱くも濕む折しも影を認めてか此方へ駈來る白犬、おペット(犬の名)ペット、其方は我が心を知つてか。

（二）下

折から床を展べんとて入來りし侍女の里、これは乳母の子にて幼きより此家に召使はれ、芳子とは乳姉妹の好誼とて殊更に親しく、或時は主從の構をも取除けて互に友達の如き思、振袖の陰に御寵愛の深きを慕へば、命令けられぬ用事も自ら心付けて立働き、陰も日方も一つやうなる奉公振、御用にて外出の途に餘所の娘のよき色合の小袖を見たる折も、あれをお孃樣にお着せ申したしなどゝ、心の奥からなづみて册くに、里や〳〵と芳子の聲は自づと繁く、これが口癖となりたるほどの氣に入りなり。

お孃樣、何を御覽遊ばすと後から聲懸けられ、芳子は振返りて里の顏を打見やりしが、あゝ明日は此女にも別れねばならぬか。懷かしかりし面影も絕々になりて、逢ひに來たくとも自儘には外出のならぬ日もあるべし。想起せば幼立よりの記念の相手には、一として里が繫がらぬはなきに、其人とかくてあるも今夜が終りかと思へば、何とやら悲しきやうな心になりて、里、其方にもいろ

いろ世話になりしと、沈勝にいひ出づれば、里は意外の返事に呆れたる如く、貴娘は何をお思出しなされて、其様な事を御意遊ばすのかと少し目を見張れば、芳子はたゞ打萎れて其方は何とも思はぬか知らぬが、我は明日の離別が胸に滿ちて、名殘惜さのいかにしても堪へやらず、懷かしき兩親の膝を離れ、戀しき故郷の此家を跡に、其方をはじめ年久しく馴睦みしものに引別れて、はや知らぬ家の人となる事かと、今しも庭面を眺めて心に暇乞の言葉を繰返せし矢先、其方の顏を見るより又過去を喚起し、此家を出行くつらさに胸も塞がる心地、數ふれば幾歲月の間、隨分と我儘もいひ募り、困らせぬきし事も度々なりしに、よくぞ嫌な顏もせず面倒を見て呉れたりし。かうしてこゝに差向ふて話するもこれを限なれば、其方が眠くなきなら、睦ましく物語の仕納をして別るべし。いふまでもなけれど、高開様へ嫁きての後は、我になりかはりて一倍父様母様に冊申してたもれ。彼方へお使用などありし時は、屹度其方が受けて其都度顏を見せてたもれ。必ず／＼身を厭ふて、病ひなどせぬやうにと、さながら永き離別の如き口吻、目は早くも露を宿して一雫膝を濡らしぬ。

言葉の中程より里は鼻をつまらせ、物をもいはず差俯向きて居たりしが、涙ぐみたる顔を上げて、其様にいふて下さるまじ。御目出度き折に不吉の涙と、今まで、隠しては居りましたれど、先程お立振舞の折からも、殿様奥様とお盃を遊ばして、これまで御丹精のお禮を申したまひし末に、つく〴〵お別れの御挨拶を遊ばせしを、陰で承はりながら獨り泣いて居りました。まことに此の館へ上りてから九年越、餘のものゝ十倍もお目をかけられて下されしお嬢様が、さつなる生れとて麁匆の絶えし折はなきに、いつも御身にかへて奥様の前をよきやうにお繕ひ遊ばし、お安心立に甘えて申過しの不躾も度々なるに、少しのお憎しみもなく、お情をかけられしお優しさ、日頃のお心附の程を思へば、有難き御恩の一々數へても盡きぬお方に、明日よりは彼方此方と立別れて、しげしげお聲を聞くこともならぬかと、後に御用を致しながらも其事のみ思續け、先程お奥へお茶を運びし時も、思はず、お盃の上へ涙を落しましたを、お針の豊に見付けられて何うしたのかと聞かれ、有のまゝにいふてよきものやら惡きものやら存じませねば、歯が痛みてとばかり云紛らしましたれど、何故か猶の事

悲しくなりて、涙はいよ〳〵目に衝上げて來るつらさ、切ない事で御座りましたと、繻袢の袖を引出して目を押へながら女は心の弱いものでござります。芳子はいとゞ物思はしげに、まことを云へば我は明日が恐ろしくて、其事を考ふれば身もすくむばかり。めでたし〳〵と誰も彼もいひ、御喜を申上げまするなどゝ、知合の皆々は勇立てども、我は何故かそれほど嬉しからず。氣心も知らぬ、馴染もなき人のもとに行きていひたき事もえいはず、爲たき事も遠慮し、日がな一日氣をつまらせて居たらば、いかに兩親の戀しかるべき、いかに此家の慕はしかるべき。いかに其方の懷しかるべき。人は嘲りもすれ我は此家を去るが、嫌で〳〵〳〵〳〵と、あどけなき心を露出していへば、里もうら若き女氣にたゞ離れがたなく、私とてもこれよりは力落して、物見遊山のお供に連なりても、心を語ふべきお方を缺きて、興も乘らねば自づと足も進むまじ。朝夕の起臥にもお孃樣の御機嫌よきを見て、いはれぬ嬉しさを覺えたりし身が、隔たりてはたゞ今頃は何う遊ばしてかと、物思のうちに暮すことのいかにうら淋しかるべき。雨夜のつれ〳〵に琴の音を承はりて慰みし事も、貝

合せお細工ものゝお伽して面白く打興じたりし日も、昔の夢と消果つべき時の、止めても來る事を思へば胸苦しさはいかばかり。常々大事にしていたはり給ひしお庭の椿に、心づけて水を遣り蟲を拂ふても譽めて下さるべきお方がお出遊ばさねば、まことに張合もなき事なり。築山際に菫の早咲を見つけて、以前の如くお知らせ申して共々うれしく眺めたくも、最早それもならぬ事か。壁に竈馬の鳴く頃は、松に木枯の荒るゝ夜半は、女部屋の灯の下に、影法師を友として昔を慕ふべきかと、心細げに吐息つけば、芳子は返す言葉もなくすり上げて顏に袖を押當てたるまゝ、話は暫く途切れて座はいよ／＼しめりぬ。

流石少し年量だけに里は心付きて氣を取直し、つまらぬ事を申してお心をいためたり。祝ふて喜廻るべき折からを泣言いふとは何たる始末、奥樣が若し聞きたまはゞ、どのやうにお腹立なさるやも知れず、永くお目にかゝられぬといふのでもなきに、よしなき身勝手の愚痴を申上げし氣疎さ。もうお泣き遊ばすな。お嫁といふものゝ何のやうに面白きかを御存じなければ、餘所へ御

奉公にでも上がるやうな思にてお出なれど、それは〳〵此上もなく樂しく、ゆかしく、嬉しづくめのもので御座ります。今でこそ前のやうに仰有りても高間樣へお出の後は、一寸もお傍を離れるがお嫌になりて、餘所などは振向いても見たまはぬやうになるべし。時々里が參上りましても、餘計な暇取らせに來なくてもよきになどゝ、寧そ邪魔がりたまふべしと、慰むる如く見上ぐれば、それは嘘なり。其樣なことをいふたとて、其方は一度も嫁になつた事があるか。今の言葉は皆其方の當推量といふに、いゑ〳〵何のよい加減の事を申すべきか。考へても見たまふべし。高間樣は先達お越し遊ばせし時、餘所ながらつく〴〵見申せしが、まことにお優しき、お心の涼しき、其上何にも行渡りたるお方なりしものを、お孃樣を引取りたまひし曉は、餘所に類なき程いとしがりたまひて、貴娘がお好みのものとあれば何にても調へ遊ばし、お氣に入ぞべき事は先に立つて手を引きたまふは必定、思へばお羨ましき限りなり。貴孃はかゝるよき目にお遇ひなされても、更に何とも思召さぬか。　其樣な事はなき筈なり。　お隱しなされてもそれ穩にあらはれて、眼元に嬉

しさが釣下がつて居りますものを、それ、それ、それと覗込まれ、芳子は急に顔を背けて、嫌な里やとばかり暫く耳の根までを赧らめて居たりしが、稍ありて口重く、されど里、といひかけて言葉を切り、舌をたぢろがせながら、高間様は其方のいふ通りの、優しきお方かと淀みて聞けば、里は聲に力を籠め、それはもう里が申すまでもなし。たゞにお優しきばかりか。お人柄といひお氣立といひ、尋ても外に又となかるべき殿御、不足をいひたまはゞ冥加に盡きたまふべし。随分と御亭主孝行を遊ばして…………。　最う云やるな。いつ〳〵までもお睦まじく…………。　最う云やるなといふに。やがて兒をお擧け遊ばしたらば…………。　最う何も聞かぬ。里を傳女に召遣ふて下さりませおほゝゝゝ、まあ耳をお塞ぎ遊ばして！

里はやがて夜の物取出して、臥床をしつらへ屛風引廻し、灯も有明の行燈に仕替へ、これを此床の敷仕舞と思ふてか、枕紙をもよく改め、夜もはや更渡りましたれば、快よく御寢なりて樂しき行末の夢を御覧遊ばせと、手焙の火を丁寧に生けて、御機嫌ようの挨拶も長く、部屋へと退がりながら足はいつより捗取ら

ず。

跡に芳子は猶物案じ勝、身は横に目も塞ぎながら、心はなか／＼に夢を運ばず。女として生涯の境遇を定むべき明日なれば、流石に落付かれぬはことわりながら、世馴れぬ乙女氣のいろ／＼に思惑ふて、耻かしきやうな、恐きやうな、嬉しきやうな、苦しきやうな心地、果は我ながら疲れ惱みて、最早何も考へまじ、寧そ寢て仕舞ふてと夜具引冠れば、いつか前に立現はるゝ高間の姿、此前見合の折送りて出でし玄關先に振返られし時の如き笑顏を向けゝるに、猶鮮かに見ゆるやうにと目を見張れば、敢なくもや／＼の中に消えて行きし殘多さ、又もふらふらと思のうちに沈み、行末の事などをあどけなく思廻せしが、子を幾人持ちて其中に比なく美しき娘をなどゝ念じ、不圖明日の衣裳の裾模樣の事に移り、染も柄も願の通りに出來上りしが、あれを着たる寫眞を撮して置きたしと思ひ、新調の簪の事、明日髮の出來がよければよいがとの事、二種の白粉のうち何方を遣ふべきかとの事、それより又飜りて父の上、母の上、里の上などに及ぼし、ペット、椿、諸方よりの祝の品物、それからそれと廻り／＼て又明日の事とな

り、三々九度の盃の時に思至りしが、何のやうに晴れがましく、羞かしく切なき事かと、身は早其場に臨みしかのやうに、汗は流れかけて手足も慄ふ如く覺えぬ。

去る程に心付かざりしが雞の聲は彼方此方に聞え、新聞配りの鈴の音が近き町筋を駈けて行くに夜明も最早程無かるべしと驚き、少しなりとも睡まんと足を伸ばせしが、流石に疲れてか肴屋が買出しに出掛くべき頃、うと／＼と眠りかけて、分のわからぬ夢を二つばかり見、不圖目を覺せば日の影は早東窓に來て、屏風の外は殘りなく白み渡りたるに、寢過しはせぬかと急ぎ起出でゝ手水遣ひ兩親の前へ挨拶に出でしが、我身が我身でなきやうに何とも云はれぬ心持、朝の食事をしながらも、一膳目に腹は早一杯になりて、好物の海苔にも箸は進まざりけり。

めでたき日とて奥も勝手も一樣にさゞめき立ちたる家内、髪結は早詰掛けて女中相手にわや／＼と口まめなる百囀、湯殿の烟も勢よく立昇り、化粧道具も主の手を待つばかりに押並びぬ。流石に父の殿も今日ばかりは落付いては

居給はず。母親はまして我を忘れて其のみに氣を配り、一生一度の身裝なれば、念を入れし上にもよく〳〵念を入れてと、娘の傍に附通しにしてあれこれと身にしみての世話、髮飾りから紅白粉、足袋よ帶揚よと付添ふ里をせかし立て、支度出來上りてから又も前後左右より眺めすかして、さも〳〵滿足したるやうに眞から喜ばしき顏付、やがて手を取つて大鏡の前に立たせ、御覽と見返りたる目の中より、愛は溢れ出でゝ芳子の全身を掩ひぬ。

高島田に花付の笄、上着は薄利久に遠山霞の裾摸樣、下着はさや形白綸子の二枚重、帶は蝦夷錦菊と紅葉の取合、左の手に金剛石入の指環嵌めて、着こなし見事に裾をさばきて立つたる樣、平常見馴れたる里の目も見とるゝばかり美しく、御容色のよきだけ猶のこと引立ちてと申して、傍の母親を殊の外喜ばせたり。

親類の誰彼出入の人々、座敷は賑かに勝手は噪がしく、待間程なく媒人も來りて無上に目出度がりし挨拶、あつさりと祝ひの盃濟めば、日は全く暮れ果てゝ松の梢に一つ星のあらはるゝに、最早時刻と導かれて出でし玄關先、車夫の民

藏は新らしき法被股引して奇麗に梳分けたる頭髪を下げて前に蹲踞ひぬ。
後には送り出でし人の數々、芳子は又も別離の情の迫り來て思返せど猶此家のむげに振捨てがたく、これが娘の境遇の終、此敷臺も淸浦の名を名乘りての踏納と、一足づゝにいよ〳〵名殘の惜まれ、果は歩みかねて暫く佇むを、いざと媒人に促されて力なく車に乘移り、衝立の横に手を支へて居たりし里と顏見合はせて、ぢッと見詰むれば里も同じく見返せしが、急に脇を向きて目を掩ゆるに、此方もむら〳〵と悲しくなりしを衆くの人の前と泣きたさを忍ぶ切なさ。心なき民藏は揖棒を上げぬ。御機嫌ようの聲々は芳子の耳にいかに響きけん。十幾輛の車は前後左右を圍みて、しづ〳〵と外に乘出しぬ。
物見高き習とて表には人の山を築きたる近所の大勢、それ、と云合はせたるやうに目を一つ所に集めたり。お美しい事と獨言つ道具屋の内儀よい帶だねと呟く鑄物師の娘羨ましいねえとつぶやく酒屋の下女、何うでえ、滅法に美いぢやねえかと目を細くする左官の長吉。感心しても齒は立たねえと嘲る大工の辰。畜生、婿は何處の野郎だとわめく土方の定。見ッともねえ、妬くなえ

と罵る痘痕面の龜、皆來いやい、お嫁入だ〱と驅けて來る男の子。自己の娘も一生に一度は、彼樣な裝飾をさせたいとかこつ煙管屋の老爺、默然て見送る蕎麥屋の擔ぎ。思はず乘出して前の人の踵を踏付ける疊屋の職人。中に一人印半纏着たる男が腕を組みて、己ア家へ歸るのが嫌になつたと、今更のやうにつく〲我女房の不足。

（三）上

晝を夜の國もがなとは、仇し契の戀のみにもあらず。羞かしきが上にも羞かしきものは婚禮の翌る日、何の面當に照渡らずともよきにと、空を見上けて無理なる怨言の出づるも、乙女心には左もあるべき事なり。芳子も此數の中に入りて、物毎何につけても赧らみ勝に、二言目にはただ消えも入りたげの風情、高くは咳も得爲ず、思ふまゝには身動きもせで、もぢ〳〵と時を過ごし行く切なさは、假令小葛籠の中に百年も押込められ、息をつめてぢッと暮通すとてもよもや此程窮屈なる事はあるまじ。なるならば雨戸を建切りて日の影を洩らさず、闇を便に聲を交したらば、少しは此樣な羞かしき思も薄さて、心置なく物語もなるべきか。何れにしても今の身の置處の居苦しさ。夢の間にとくとく一月も過ぎよかし。此面羞さゝへなくなりたらば、遠慮なく叱らるるほど打解けたらば、長くなり行く春の日が、いかばかり面白き興を運ぶべき。妻として隔の關を据ゆる事のいかにも氣疎く、心の奥の又奥まで打明けて語ら

ひたきは山々なれど、言掛けられし冗談も氣輕なる言葉に受けて、遠慮なく口を開いて笑合ひたけれど、返事は咽に詰りて舌は何としても動かず。彼此と答を考ふる間につい言ひそゝくれて、折角心盡しの夫を拍子脱さする氣の毒さ。かくぞと前より心付きたらば、思入れ對話の稽古もして來べきものを、垂籠勝の身の少しも浮世馴れねば、口惜しくも言葉に花をさかせて座をはづまする事はならず。此樣な仕打をしてと有の儀に母樣に告げたらば、眼の出るほどお叱言を戴くべし。されどかくばかり腑甲斐なき我を捨てたまはで、此方より冊くべき身を反對に冊かれ、いろ／＼心を籠めて氣を取りたまふ夫の優しさ。今度端緒を見付け出したらば、思ふまゝ精一杯のお話も爲、折もあらば御冗談も言掛けて見るべし。何がな綾ありて面白く、我が胸の中を殘りなく開放してそれと滿足すべきほどの申草はなきかと、膝の上に袂を折返しなどしてとつおいつ。

妻はかゝる物思とも知らず、紫檀の長火鉢を中に二人差向ひの一間に、賢次は貰立の珍らしさに心浮きて、飽くほど眺め盡しても猶見足らぬばかりの目色、

初々しさもなか〳〵に憎からず、汲んで出されし茶の一しほ香ばしき折から、庭の垣近く鶯の聲するに芳子は思はず耳をそばだてしが、此處ぞと夫の方を振向きて、あれ可愛らしきものが聞えまする。あれはお隣家の籠に飼はれてかと問へば、賢次は微笑みて、否とよあれは野放しの藪鶯、東の梅園には四五株の早咲があれば、毎年春を尋ねて我が宿に初音の魁を聞かしに來ると右手を伸ばして窓の障子を押開き、あれあの地を這ふて根のはびこりし梅の梢に、それ、今羽を動かしてと指さしゝながら、此方へ來て見よと呼寄せられ、芳子はしとやかに座を立ちて窓近く來りしが俄に飛退きて顏はいつもの如き紅を染むるに、何とせしといへど返事もなく、重ねて問はれてやう〳〵小聲に、お隣家の垣際に人が立つて居て、此方を見て居りましたものをといふ。何の事、それだけで彼樣に羞かしがりしかと。嘲けりかけしが聲を柔らげ、表立ちての女夫中の我から名乘を上げて掛かるとも、人が指でもさすことではなきに、其方は何故それほどに含羞むぞといへば、理由はありませねど只此樣にとばかり、口の中に言譯らしくほのめき出せしが、やがて少し顏を上げて何卒お願で御

座りまするほどに、其處を閉めては下さりませぬかと、見らるゝは如何にしてもつらき素振、氣の小さき奥樣やと、賢次は笑ひながら障子を引きぬ。折角の鶯も思はぬ人に邪魔されて早飛んで行きしか聲も聞えずと、稍ありて芳子がつぶやくやうに云へば、されど此家には鶯よりも音色のゆかしく、それに百段も立優りて美しき鳥ありと賢次の言葉、それは何處にと聞けば、つい其處にと間近らしき返事、さらば連れて行つて見せてたまはらぬかと、少し調子づきて前よりはやゝ口輕く其鳥は何といふ名と重ねて聞けば、名は其方が知つて居る鳥なり。當てゝ見よと笑顏作るにいふまでもなく小鳥なるべしと裏問へば、鳥でいへば大鳥なりといふ。さらばと少し首を傾けて鶴かといへば違ふと笑ふ。孔雀かといへば、又違ふと笑ふ。雉か。それでもなし。尾長鳥か。それでもなし。さらば少し小さけれど鴛鴦かといふに。追々近くなりしといはれ、暫く考へて居たりしが、最早さしづめの心當りはなしといへば、さらば敎へて遣るべしと莞爾つきながら、其鳥は命取とて、これ此處に居る美しき人なりと、指先に輕く頰を突かれ、芳子は又も言葉にとゞめをさゝれて、「ま

あ其様な事を」も口の外へとは出ず、熱る顔を襟の中に埋めながら心の中に、夫といふものは斯く妻を弄るものか。

（二）下

つらしといふも當坐、耻かしといふも當坐、居馴れては生れてから未だ覺えぬほどの樂しさ、此處ぞ我が爲に作りし春の宿と、早一寸も離れがたき心となり、命の置所、興の捨所、いで百年の下蔭を此家に据ゑて、小さき白髮の丸髷を戴くまでと念じぬ。

今日は土曜日とて夫は早く歸りしに、何の仕種もなけれど傍に居るが娯しく、餘所へ行く用ありといふを頼みて止にして貰ひ、今日は全半日御一所に居通すことの嬉しさと、小說本も編掛の毛糸も傍へ突除けて獨り浮立ち、折角の思立をおとゞめ申せし上は、その埋合としてお心のゆくだけの事をすべし。何なりとも好みたまへ。我が力にて叶ふほどの事ならば仰通りにして見まするといへば、さらば大風呂敷を持ちて横町へ行き、自身に燒芋を買ふて來て呉れと戯弄はれ、其樣な冗談ではなく、何かほんの事をと望めば、賢次は眞顏になりて、それならば我が最も滿足する事があるが、其方は美事それを叶へて呉れ

るかと聞くに、それは何と問返へせば、外でもなし、迷子札提げて往來で泣いて見せよと笑ふ。又しても其樣な事を、我これほど眞面目にお尋ね申すに餘りなと、少し腹立たしげなるに賢次は猶笑ひながら、それが氣に入らずば鼻の先に墨を塗りてと云掛けるを、最う何も聞きませぬと、くるり横を向きてすねて見せぬ。

折から仲働の清が入來りて、只今松坂屋からこれをと芳子に調へて遣りし小袖帶の仕立上を持つて來りしに、賢次はこゝへと取寄せて清を退がらせ、上紙を解きながら芳子を見返れば、芳子は先程より早包紙の中に魂を取られ、寧そ飛付きて見たきほどの思なれば、すね返りし意地にぢッと辛抱する素振、賢次は微笑みてぢらし顏に、小袖を取上げて打返し眺入るに、芳子は堪らず振返りて見るを、夫のいふことを聞かぬものには一目も許さじと、わざと身を楯にして前に塞がれば、貴郎は眞箇に意地の惡いと、つく〴〵恨めしげに見上ぐるに、それならば謝罪まつたか、謝罪まらぬ中は見せぬと子供のやうな言葉、詫びるは嫌なれど見たさに我慢がなりかね、御無理ながら謝罪まりまするといや〳〵

ながらいへば、御無理ながらなどゝいふ冠付では、中々見せる事でなしと笑ひながら聲ばかり強くいふ。さらば重々あやまりまするほどにと、芳子は早や根城を投出して我を折るに、丁寧に手をついて頭を下げてといはれ、其通りにして見せたるおとなしさ。

流石賢次も少し面伏に、つまらぬ冗談に花を咲かして、さん〴〵ぢらしたる事よと品々を前に取出し、それ、仕立榮のする柄ではないかといへば、芳子は早目を綾に手に取上げて餘念もなく、あちこち打返して嬉しげに見て居たりしが、改めて夫の前に兩手を支へ、まことに有難うござりまするとしみ〴〵禮を述べ、又帶の方に振向きて見飽かぬ目は漂はぬばかり、一寸着て見せぬかと賢次の言葉は、我が心を讀みての上の仰かと、いそ〳〵抱へて化粧部屋へと行きしが、やがて着更へて立出たる姿は、芳野の枝を松島に眺めて又一段の見事さ、黑に白茶の帶のうつりよく、下着の光琳千鳥も思ひしより一層引立ちてと、賢次はつく〴〵見て居たりしが、此上もなくよく似合ふたり。かうして見るほど我が妻には惜しきほどの容色といへば、もう弄りたまふなと、しとやかに前へ

座りしが、何とやらをかしく改まりたる思、暫く接穂なく話を途切らし、不圖夫と顔を見合せて、おほゝゝゝゝと笑出したる心根、芳子はまだお孃様なり。

（四）

夢とのみ過ぎし一月二月、花瓶の枝も眺めを改めて、梅のにほひは桃の色に譲り櫻は八重に亂れて海棠の睡たき朝となりぬ。今日は清浦に家例の祝日として、前より使ありて新夫婦に來よとなり。賢次は去りがたき社用ありて席に臨まれねば夫の心を風呂敷の中に包みて、進物も小脇に芳子は獨り車を馳せぬ。母とは暫く顏を合はさねば、そゞろに其膝元も懷かしく、二つには此頃の我が思を打明けて、遠慮なき夫自慢をも言ふて見たく、それに耳傾けて喜ばるるが尙嬉しく、留守の用事もそこ〳〵に婢に言付けて、衣裳髮飾も新調の物ばかり、此前省親の時とは別のものを態と選びて、これも母に見て貰ひたき心組なり。

寵愛の里は最早此處に居ず、此頃似合はしき緣ありて、指物師の親方の家に嫁づき、姉樣冠りの世話女房となりけるが、夫婦の中は麗はしきかあらぬか、安否のほどをも母に問て見たく、それに我家の車夫は近々に故鄕へ歸れば、代りに

抱ふべきものゝ、心當りあらばと、里家へ行きたらば頼めとの夫の言付をも果し、今一つは親戚の子が髮置の祝に、贈るべきものゝ、相談もしてと、序ながら用事の種々を胸に疊みて漸く家に近づけば、見馴越しの門構も改まりて懷しきやうに覺えて、もとは我家の中へ他家の人として入る心地のをかしさ。

折ふし不時の來客にて父も母も座敷に出て居たれば、芳子は婢共を相手に暫く待合はせたれど、客は急に歸るべき樣子もなきに、少し退屈して庭に出て、彼方此方飛石を拾ふて行けば、有りしに變らぬ春は尚匂深く、我を迎へて笑ましげの風情、婚禮の前日には何とて彼樣に名殘の惜まれし事か。柳は泣くが如く池も憂はしげに波立ちて見えしが、今かく華やかなる心を持ちて此處に立つべしとは、思も掛けざりし心の幼なかりし事よと、胸に微笑まれながら小橋の上に佇立めば、今日初めて結ふたる丸髷姿の、水に映りて目立ちたる如く覺ゆるに、母樣は見て何と云ひたまふかと、興ありげの眼付して座敷の方を振返へれば、人の心も知らぬ客は未だ歸らず、優しく舌打ちして築山の方に行けば、小さやかに作成ひし亭の周邊に、色を競ふ小紛團花櫻草壺菫、楂子も五形も一

つに交りて、春の野の錦を此處に集めたれば、これに目を遣りて亭に腰打掛けたる折柄、我を呼ぶものありと聞きて振向けば、これは珍らしや暫く見ざりし里が、裏の枝折戸の前に立ちて、笑顔を向けて小腰を屈め居たり。おやと嬉しげに小手招きすれば、里は其迄もなく此方へと來りしが、見れば既半元服の女房風となりすまして、身裝の故か前よりは更けて見ゆれど、何處やら確りした る處ありて一段と貫目を増したるやうなり。芳子は飛付かぬばかりに進寄りて、里、其方に遇ひたくてならざりしと、昔ながらの心に衣着せず打出づれば、里は少し行儀つくろふて、其後は御機嫌ようござりまするか。私とても近々に上りたさは山々ながら、手前にかまけましてと云掛かるを打消し、其樣な事は云はでもよければ、久振にて打解けたる話もし、其方の此頃をも聞かして吳れよ。何より先に問ひたきは內の人の事、此間母樣よりのお知らせによれば、中中によき御亭主さうながら、始終其方を大事に掛けるかと、以前の芳子ならば鼻白みて挨拶に困るやうな事をいへば、里は其程にめげもせず、お蔭樣にてよき人に添當てました。其節は殿樣奥樣はじめ貴女樣より、いろ〳〵有難き頂戴

物をと、氣まじめなる言葉付を又打消していつまで其樣に堅苦しき事のみ云ふて居るぞ、奥底なく話を柔らげて、内輪の面白き事を聞かして呉れよと、芳子は娘氣質、里は女房氣質、芳子が軟らかき指先と、里が硬張りたる手の皮とに、浮世の品は二つにわかれぬ。

それより里の夫の事此屋敷の事、高間の家の事世間の噂など、物語は細かく進行きしが、里は何にか思入りたる如く、貴女樣は昔のまゝにてお變りもなけれど私は僅なる間に世帶染みて、最早以前の里ではござりませぬ。浮世に何も氣が張らねば、御苦勞もなきお心の中、お羨ましい事でござりまする」と云ふ。それなら其方は苦勞を爲やるかと問はれて、世にいくらも有内の事なれば何の苦勞とに思ひませねど、氣骨の折れる事は一通りではござりませぬ。夫とても根に實意はありますれど、高間樣のやうに優しき處もなく、隨分と口小言勝に、氣に入らねば上つ方には見も知らぬ打擲姑の機嫌の取にくきは押なべてなれど、小姑の意地の惡さは、お話し申さうやうも御座りませぬ。就中取扱ひよきは下の職人共、それも能く使ひこなさねば夫の威を損ずる種と、彼此心

を配らねばならず、宿は表を張る人だけ内輪の苦しさ、身は一つ心は五つ六つに分けても、一日肩の休まるといふ時もなく、臥床に入りて始めてホッと吐く息も、小姑の耳を憚るほどの身に引比べて、お羨ましいと申したので御座りまする。されど此樣な事を大奧樣のお耳へはお入遊ばすな。不足を申せば其通りながら懷しき處のあればこそ添ふて夫をも可憐と思ひ、姑も大切に小姑も憎からぬ節あれ、あくせくする中に何處にか慰むこともありて暮される月日、世間は斯うしたものでござります。

聞くにつけて、芳子は今の身の幸を尚深く覺えぬ。夫の愛は深く家は人手に有餘りて、身は一寸を動かさでも濟むべき日頃、花の生振茶の點振に氣を揉むほどの心安さは、成程世に比べて見れば樂すぎる事か。我をかゝる處に置きたまふ上に、情ある仕向を盡す夫の有難さ、今日家へ歸りたらば、里の事を話して改めて禮をいふべきか。

（五）

泊つて來よと出掛けに夫はいひ殘して行たまひしが、故家の懷しさにもかへられぬ今の家の幽しさは、一夜も尾上を隔てゝ雲を戀ふは嫌と、黄昏をも待たず車を急がして歸來れば、夫は今朝のまゝ未だに戻らず、御用の濟まぬに心ならずも引止められて居たまふかと、衣裳を改めて座に直りしが、待といふ名に外の事は手に付かず、まだか〳〵と次第に一秒の間もゝどかしくなるに、鐘の聲もいくつか聞捨てにして、辻占賣が廻る頃となりしが未だ影を見せぬに、かかる事には今宵初めて遇ふたる身は、若しや何か間違ひもと俄に氣遣はしく、何となされた事やらと眉を顰めながら、此處に久しく勤むる仲働の房に裏問へば、お案じ遊ばすには及びませぬ。お手間の取れる御用向の折は、お歸りにならぬ時も前にはござりましたと、奥には微笑む如き眼ざしを芳子は氣が付かねば、左樣かえと溫厚しく返事しながら、寧そ誰ぞ迎に遣らうかと思立ちしが、流石に餘所の思わくをかねて云ひも出ず。

心に染まず夜は更け行きて、近くの寄宿舍に寐よとの鈴の音が、初めて耳づらく響渡りぬ。夜商人の聲も次第に絶え〴〵に、たまに近寄る車に首を擡ぐれば空しく餘所へと除れて行き、二時となり三時となり夫は遂に歸來らず。芳子は一晩まんぢりともせざりき。軒端を求食る雀は何處へか飛行きて、隣屋敷の馬丁が馬を引出す頃、賢次はやう〳〵我家の門へ入りしが、眼はどろりとして頭重げに見えたり。

どれほどお案じ申したか知れませぬに、何とて一言のお斷りもなく家を明けたまひし。我は心せかれて日も暮れぬ中に立歸り、それから今まで目蓋を合はさで待暮したる胸の中をも、少しも思遣りたまはぬお恨めしさと、初めて覺えたる巣守の苦しさをかこてば、賢次は態と驚きたる面持して、其方は昨日歸りしとや。故家に泊りたるとのみ思込みて別に斷りには遣さゞりしが、料らず入組みたる社用にて昨夜は我も眠らず。それと知らば暫時なりとも立歸りて安心さすべきを、つまらぬ徹夜の相伴させたるうへに、一夜なりとも苦勞をさせしことの氣の毒さと云はれ、邪推を知らぬ身の何も疑がはず、さらばさ

ぞかしお眠かるべきに、少し寝みたまへといへば左り氣なく點頭きて、奥に入りしが早くも鼾となりぬ。

其後かゝる事は折々ありしに、馴れては初めほど物憂くは思はず、たゞそれほどの劇務に氣を遣ふ夫が、身體を害ひはせぬかとはら／＼したり。家には輕口いふ友達が漸う／＼繁く押掛け來りて、其度毎夫は酒を出せと言付けぬ。交際ならばそれも惡しとは云はねど、彼樣に絶えず家を騷がして、いつも更闌くる迄飲續くるを定めとし、或時は烏の起迷ふ頃になりし事もあるを、少しは召使の者のつらさをも察してやらねばと、一日折を見て夫に其事をいへば、成程女はつらき身の上と打笑ふて、寧そ其方も碎けて酒を飲習へ。

されど其心遣ひも一盛、燗番の面倒を離れしと同時に、芳子は新らしく涙を覺ゆる身となりぬ。賢次は會社の用を帶びて、幾月かの間大阪へ出張するとなり。馴染めて程もなきと思ふ間もなく、一時の別離れとはいへ敢なく生木を裂かれて、一人淋しく取殘さるゝ憂さ愁さ、門出の日は、芳子は食事もせざりき。それに及ばぬといふを無理に停車場まで見送りに行き、汽車の内と外に顏を

見合はしたる時は、生れて初めて情なき心地を覺え、別離の言葉の繰返しても盡きぬ折しも、つれなき汽笛は終りの聲を亂して、車は思を載せて百三十里。

（十八）

俄に一人して見れば月もうそ淋しく、留守居の窓に芳子は時を暮らし侘びぬ。心其處にあらねば何をしても慰まず、物事につけて此頃は何う遊ばしてかと、兎角に眺めらるゝは西の空、雲に入る鳥の羨ましき日もありき。火鉢の鐵瓶は昨日と同じく沸返れど、其處に馴れたる笑聲は絶えて聞えず、琴は袋の中に潜み、下駄は暫く主を忘れ、青葉若葉の綠を添へて、目覺むる如く心地よき夏の首の眺めも、餘所にして立居も懶げなる一間に、口は自づから結ぼれて物思ひ勝、鬢もほつれたるまゝに任かて。

絶えず音信を聞かしたまへとは、別離の折に幾度も繰返せし言葉なりき。芳子は首を伸ばしてそれのみを待續けたり。されど來たるは無事に着きしとばかりの報知の外に、何とも筆の便はなかりき。三四行の端書それ一つにて、此胸の中が飽くと思ふてか、男子といふものは、搆氣なきものよと、直に硯に向ふて書つらねたる長文、女心の細々と跡や先なる文字の綾も、よしなに判じて

と送遣りて、今日か明日かと返事の時を待數へぬ。されど思ふに違ふて便りもなく、あだに過したる四日五日、又も此方より手紙を差出しぬ。それもまだ返事は來ず。

何と遊ばされし事か。まだ讀みたまはぬのやら。讀んで返事をせぬといふ夫にはあらず。宿にはお出なされぬのではなきか。それとも何かの間違にて手紙が紛失りてもしたか。さらずは不慮の御病氣などにて、筆を持ち給ふことも叶はぬのかと、案じる程惡き事のみ浮出て、心元なく又もや差出せし一通、それにも直には返事もなく、追かけて此度はいとせめて氣遣はしき限りをいひ遣りしに、やう〳〵の事屆きたる返書、取る手も心せきて中を開けば、亂暴に書きなぐりたる短き文言、相變らず身體は健固で暮らせば、何も心配して呉れるには及ばず、何かと事務のいそがしく。返事を書く暇もなく手紙を讀む暇さへなし。此後は其樣に繁々の便は止めよとの事、芳子は案外の思なりき。いかにお忙しき中とはいへ、我の心も知らぬやうに餘りなる仰有り樣、日頃には似つかぬ此は何たる仕向ぞ。便を止めよとは、便を止めよとはと、思至れば

いふにいはれぬ胸苦しさを覺えしが、よし縱令讀んで下さらぬまでも、我心を通はさねば氣は休まらず封は開きたまゝで捨たまふとも、今の淋しさをせめて慰むるはこればかりのものを、廢止にして何處に思の遣り場があるべき。お思召には逆ふとも絶えず書送るべし。まさかに無下に投げのけたまふ事もあるまじ。其中にはお暇のある事もあるべし。我が眞情の通ずる折もあるべし。あゝ處を隔つればこそこの樣な事、一日も早くお顏の見たや。いつそ跡を追ふてお傍へ行かうかしら。

音信は尙も前の如く續けぬ。續たれど張合のなき心地もしたり。返事は同く來もせず。芳子は愈々樂からずなりぬ。出るものは太息許り、鬱勝なる當中へ訪來りしはいつも懷しさは離れざる例の里なり。かゝる折によくも來て吳れし事かな。早速ながら相談に乘りて貰ふべき人と、心急かれて先こちへと通しぬ。

御無沙汰のお見舞がてら、一日遊びにと上がりましたといふをよくも聞かず、其後はの挨拶もなしにして、里、心配な事があると切出したる言葉、何事と驚く

聲に乘りて、我は何としたらよいやらと物悲しき口吻、聞くに里は眉を顰めて、譯をお聞かし遊ばせと進むる膝、芳子は心弱くも早目に涙。

（七）上

若し泣く涙もあらば我が爲に泣いても呉れよ、我は良人に捨てられたと云放つ芳子、飛んでもなき事をと里は目を圓くせしが、また奥様が詰らぬ案じ過しを遊ばして、御自分で苦勞をお求めなされたに違ひありませぬと、頭から打消し顏を芳子は恨めしげに、我がいふ事を能く聞きもせで、其樣に一圖に了解んだ口吻は、其方にも似ぬ餘りな仕方と少しせきこみたる聲音、里も口ではいふものゝ、寔は氣を滅入らせじと態と手強く云出したるばかり、聞けば流石に胸は安からず、まあ其譯はと話説を誘へば、これを見てと取出したる良人の手紙、差俯向きて力なき目を押拭ひぬ。

良人の餘りなる疎略の事、十度に一度の返事も其樣な難面き書樣との事、思合せて見れば前よりの良人の素振にも、これ〳〵菅なき節もありしなど、いへば笑はれるほどの小さき事をも氣に掛けたる女心、良人は最早我には飽きたまふてかと、それ迄には思はぬ事も情の餘りには云ふても見、何としたらば我が

此程に思ふて居る心が通じるやら、里智惠を貸してと未だ止めぬ處女氣質、里は片頰に笑ひかけて、何事と存じましたらば、それだけの事で御心配を遊ばすのかと、顔を見て聲を強め、それならば何の、何のお案じには及びませぬ。御用が多ければお手紙のなきも其筈、まだ〳〵世間を御存じなければ、貴女樣の思召も御無理とばかり云ひ捨てましませねど、殿方と申すものは、婦人の思ふ樣な細かい處へ、中々お氣の付くものでは御座りませぬ。此樣にお鬱ぎ遊ばしてと、後ちに旦那樣がお聞きなされたらば、馬鹿々々しいとお笑ひ遊ばすは定、總じて何事にも心強く、上邊は容易に動かぬが殿方の常、お手紙が參らぬとて、細々との文言がないとて、これぞといふ證據もありませぬに、先潜りな御心配も餘り過ぎまする。其樣に早くお氣の變る旦那樣かあらぬか、平素傍にお出での貴女樣が、私よりもよう御承知の筈と、いへど芳子は未だ得心の行かぬ樣子、されど、されど、と云掛かるを抑へて、奥樣々々、假例に引きまするも不躾ながら、内の我夫を御覽遊ばせ。常々も申す通り、表面には少しの優しさもなく、ひどいと思はるゝ事も度々の人、先月旅路へと出ました折も、別離に情らしい事

をいふではなし、留守の内に手紙の一本とて遣しもせず、これが若し貴女樣ならば、何れほどお氣遣ひ遊ばすやら知れませぬ事、其樣な良人ながらも、私の爲とて歸りかげに反物を買ふて、其方には似合はぬか知らぬがと、わざ〳〵土產に持つて來て吳れました。況して日頃からお睦ましき旦那樣が御歸宅の折は、貴女樣は何の樣な嬉しき目にお遇ひなさるやら、今から思ひましてもそれは〳〵お羨ましき限りと、口に關もなく流出る言葉、溫和しき芳子の耳には、聞けば左樣かと思はれもし、其方は眞箇に其樣に思ふかと問へば、思ひます段か、私が請合ひまするとて乘調子の舌の根、搖めき勝の乙女心に、確められてそれに極めて、一時は憂さをも忘れて喜びもしたり。跡はいつもの浮世雜談、口輕の里に載せられて、芳子が皎き齒も折々は見えぬ。

されど其安心も對話に打紛れたる眞箇の一時、里が立歸りての後は、所在なき身の又もくよ〳〵と一人物思、あゝと幽かに出づる溜息の下には、如何に優しく可愛らしく、手弱なる心根が今の境遇をかこつやら。頭痛がするか額を押へて、吸習ひしばかりの煙管を杖に、追ふて行くは只現の影なり。

其萠もなかりし廻り氣さへ、果はぶら〳〵と浮出でゝ、思ひも掛けぬ事まで、心を走らし驚きて其樣な事はと自ら打消して、先程里がいひしを寔と、無理に押付けてそれに定めながらも若しや？　もしや？　かゝる事は夢にもあるまじけれど、外に增花とやらいふものが我との隔意を作りしにてはなきか。外にこれといふ心當りのあるでは無けれど、良人とても其樣な人ではなけれど、通り魔のやうな迷ひもあるもの、浮氣の凝聚といつか聞いた事もある浪花の土地良人を誑して引付けて、何をも彼をも忘れさするやうなものが、若しひよッと出來たのはでなきか。　里は大阪に知る人もあれば、良人の上をも聞合はせて、傳手もあらばよく探らせも致すべしと、歸り掛けに力付けまでに云ふてくれしが、もし此思ひし事が寔ならば。　手出しもなりかぬる氣の弱さ、我は其時はまあ何うしたらばよき。

されども常々良人の言葉にも、浮氣稼業のものは見るも氣色に障るとの口癖、たとへ何の樣な事して招けばとて、曳けばとて、色ある里へ足を踏入るゝ事は夢にもしたまはじ。　まして迷ふなどゝいふ事は假にもなかるべし。　さすれ

ば我が淺はかなる心より、跡形もなきを邪推してか。それか、それでなきか、當らぬまでも遠からぬ事であれかし。

よしなき氣苦勞よ、何をも考へまじ。我は何とて此樣に胸の狹きやら逢ふ日を眺めて笑ふて待つべし。時の經つは早きもの、待つといふも知れた日數、お目に觸れて心の眞情を語らば、あの優しき良人が何とて仇に思ひたまふべき。よしや何れほど物を思へばとて、今は詮なき留守の間、たゞしほらしく家を守りて、歸りたまふてから譽めらるゝやうにするが、まこと良人を思ふものゝ仕方なり。

とはいへ我が此樣に案じて暮らすを、絶やさぬ我よりの音信に知りたまはぬ筈はなきに、つい一筆これ／＼と書くは譯もなき事を爲て下さらぬとは思遣りなきお心かな。疑はぬまでも氣にかけ易き女の身に只一筋に安心がなるものぞ。あゝ又か。もう思ふまい思ふまい。

手を伸ばして障子引開け心を紛らすばかりに庭面を見渡せば、草も木の葉もさえ／＼しき若緑、牡丹は伊達を飾りて卯の花は一しほの肌自慢下僕が笄の

跡清く、そよ吹く風も香を送るばかりなるに、それにつけても欲しきは此處に對坐の良人、共に此景色に添ふて、懷かしき節をも語らはゞ此上どのやうに心地よく見ゆる四方の樣やらと、何につけても直に其事、あゝ今頃は何をして居たまふやら、宿に歸りてかそれとも外にか、もし又此身のやうに同じく端居して我は何うしてかと思ふても下さるやら、見たし逢たし懷かしき、俤何故此樣にお傍の戀しき事か。

されど幾度思直しても解けがたきは此頃の難面き爲され方、これも淺ましき疑念ながら旅立前よりの良人の素振にも、氣を廻せば薄闇きことの數々、もし知らぬ間に我を出抜いて、思ひ人を彼地へお連れなされたのではなきか。それとも……、おゝそれよ。あの英國に居るローラとやら、父御は以前に我國へ渡りて、今の住居は慥か大阪、大阪大阪、今迄少しも氣が付かざりし。平素良人が折々の物語、戀にし人なり戀はれし人なり。彼女が若し來たとすれば、落着く方はさしづめ大阪……、と思至りしが、俄に頭を掉り噓々〳〵々〳〵々何の何の其樣な事が、有るべきものぞ有るべき事かは、無し、無し、無し、無し、無し。

無理やりに押付けて嘘と極めはしたれど其思は執拗くも殘りて、拂へどいよいよ纏付く切なさ、果は血も沸く目もくらむ庭の樹も草も模糊となりて、前にすつくと人の立姿、見るから妬ましきほど美しく、品よく、華やかに、しかも色を含みて、中にも取分けてふるひつくばかりの眼附、其眼は次第に冷笑を帶び、此方をぢッと見込むと覺ゆる途端、奥の時計の鳴るにはッと心付けば、消えて跡もなき現の影、庭はもとのまゝの綠を重ねて、雀は芝生の上を求食りて居たり。何思ひけん芳子ははら／＼と涙を流して、其のまゝ袖の中に顔を埋めぬ。

（七）下

奥様、奥様と、いつの間にか小間使は後に來て、手に一封の文を持ちたり。芳子は懶げに振返りしが、手紙と見るより目は走りて、急がはしく受取りて裏を打返せば、苦勞もこれ故の良人よりの音信、さては今迄案じ續けし事も皆淺はかなる思僻みか。手觸りにも知れたる長文、樣子は何も彼もこれにと、封を解く間も我ながら指先もどかしく、一字も讀まぬ中に早跳るは心なり。先づ目を喜ばす二行、三行墨は優しき思を染出して、言葉の何れもこれも暖かならぬはなし。それより無沙汰の言譯に移りて、到着ての日より目の廻るほどの急しさを、一々語らば嘘とも思ふべし。夜を日に繼ぎて追ひかくる用事に責められ、我物とては半時の閑暇さへもなく、其方が心にかけての度々の音信も、車の上にて讀むほどの仕儀、いつも無事とあるに先づ〳〵と返事も延び延びになりしが、今の斯く忙しき身の上を思測らば、それでなくとも常日頃我を知拔いたる其方の事、必ず恨んでは呉れまじと思ふ。

旅に出て故郷懷しきは誰しもの例、まして其方といふものを殘して來たる我の、一日とても思出さぬ折があるべきか。何につけても不自由勝の借座敷用の繁きは未だしも打ち紛るゝ種なれど、心慰めとては何一つなき物足らなさ。むつくり床より起出でゝ一日あくせくして、跡は又ごろりと寢るばかりの境界、味もなく趣もなく、胸はたゞ既徃を繰返して我家戀し其方懷かしと、それより外に藝もなき身を、心あらば歸りて逢ふ時の思出に、天晴我を滿足さするやうなる事を爲てくれかし。

其逢ふ時の樂しさを思へば、離れて居るも興を增す種かも知れず。工事も見込より捗取りたれば、其方の顏を見るも來月の末を出じ。我は中に包む眞情の極印ともなるべきものを、その折其方の許に持つて行くべきが、何の樣なものか其方は知つてか。それのみならず我が買ふて歸る土產物に、それは〳〵其方の好な品物があるが、云當てられるなら當てゝも見よ。其方は又その折柄、いかなる心盡しを我に見する胸算か。我のに比べては必ず劣るなるべし。あるほどの誠實をあらはしても見よ。其方が若し優りたらば、我は其方の望

むまゝに、如何なる事なりとも命令を背くまじ。されど我が優りたる曉は其方は何の様な償ひを出すべきか。我は隨分と難題を云掛けもすべし。其時詫びてもゆめ〳〵聞きはせぬぞ。

筆は笑言交りに走行きて、後は未だ果もなく長し。芳子は心嬉しく讀續けながらも、今迄狹かりし胸の中をたゞ悔むばかり、良人は何處までも仁情をかけたまふに、假初にも恨みかこちし申譯なさ。まして跡形もなき悋妬三昧、どれ程お詫び申せばとて濟まぬ〳〵事なり、天晴比例なきよき良人を持ちて此上もなき幸福を肩にかけたる身を、自ら求めて益もなき苦勞したる事の、思ふほど我ながらおこがましきと、猶奥へもと讀行かんとする折しも、誰やら後より手を伸はして不意に手紙を引握みしが、力任せに早くも奪取りぬ。こは何事ぞ。

驚きて振返れば又驚きたるも無理ならず、後にすツくと立ちはだかりたるは彼のローラなり。手紙を一目見て眉を逆立てしが、容赦もなくずん〳〵に引裂きて、押丸めて下へ投付けたる狼籍、流石の芳子も赫とせき上げて聲鋭く、こ

れは何たる無法なる仕方ぞ。斷りもなく家の中へ踏込むさへあるに、許しがたき無禮をと云はせも果てず、嘲る如き唇を反して、こゝは我家なり、最早寸時も其方を置きがたし。立去れとばかり逐立んず身の構、理も非も辨へぬ亂暴者と、芳子は急がはしく下僕を呼立てゝ、久藏々々と打叫べど返事もなし。下女も小間使も音さへ立てず、如何はせんと胸を騒がす途端、襖颯と開いて現はれたるは、見も知らぬ外國人娘其處にかとローラに聲掛けて、づか／＼と芳子の方に近づきしが、會釋もなく孱弱き手首を鷲握、矢庭に玄關へと引立て行きて、門より外へと突放し閉切る扉の貫木差、どつと揚ぐる二人の高笑の聲、芳子が耳を貫きて骨もつん裂けんほどに思ひぬ。

纖小き女の腕に何として手向ひのなるべき、無念の齒嚙に身をふるはす後の方に、聞馴れし聲音して此方を呼掛くるは、おゝ我が良人かと芳子は走り寄つて縋付きて、涙の雨の中に有りし次第を訴ふれば、言語に斷えたる事かな。よし／＼其方の復讐は今取つて遣るべし。おのれ不法者、目に物見せてと賴もしき言葉、嬉しき贔負は何よりの下蔭と勇立ちて早く／＼とせがめば、點頭

きて門に立掛かる途端に、戸を押開きて突と出來りしは先程のローラ、立寄る芳子を突退けて、賢次の手を把つて中に入るよと見えしが、素早く門を鎖固めて奥へと引返しぬ。跡は暫く物の音もなし。芳子の胸はたゞ沸返るばかり。やがて聞ゆるは待設けたる物爭の聲ならで、案に相違して樂しげなる笑聲聞は隔離れたる奥の間ながら、話說はさながら手に取るやうに聞えて、殊に訝かしきは舌たるき良人の言葉、我が命かけたるローラをば、今日より如何にして樂ませんかといへば、相手は憎らしくも優しげに、御身が愛の續かん限りは我は何日までも樂しかるべしといふ。其愛のいつか消ゆべき時ある事を御身は今思ふにやと問掛くる良人、いかでさる事を思ふべきと口早に答へて後は又優しげに、永く御身の愛をひくほどの力を、もし身に添へて持つならば、今の我が言葉は出でざるべしといへば、否。變るべき戀は我等二人の交情の如く始らざるべしといふ。眞個にかと又も品よき聲、慥かに莞爾と笑ひしなるべし。立上りて輕き靴音に歩むが如き氣勢、然り、我が最愛のものよと、良人も同じく立上る氣勢。

芳子は最早聞くに堪へず、苦しげに息ついて身を退く耳元を、重ねて騒がすは妙なる洋琴の音、弾者は誰といふまでもなし。胸は又も引締めらるゝ折しも、あッ、節に合はせて面白げに歌ふ良人の聲。

欺かれしか、何とすべき。かゝる性根の腐りたる人に身を捧げて、かゝるよしなき浮かれ男に一生を任せて、世に朽果つる女となる事か。とはいへあの良人があの良人が此様な不人情な心根とは、かうなりても我はまだ定と思はねど、再び奥の方を見返れば、又も節面白く爽やかなる良人の聲、しかも其歌は此方を嘲る意義、はッと俄に癪痞む如く覚えて、息も絶ゆるばかりなる苦しさ切なさ、思はず一聲絞り出す悲鳴。

愕然として芳子は目を覚ましぬ。枕元の燈の影細く、夜は更渡りて殊に淋しげなる閨の中、身は殘りなく汗に浸されて、夜具の上に諸手を重ねて押付けて居たり。夢か、夢なりしか。まことに夢なりしか。あゝ嫌なとホッと息吐きて、まだ落付かぬ胸を撫下して居たりしが、起上りて寝衣脱替へ、再び床に入りしが目は塞がれず、此様な夢を見たも今夜が初めて我が彼のやうな恨を持ち

しも今夜が初めてあゝ恐ろし、何事も嘘、皆我が心からの迷なり、今日さま〴〵の物案じやら、宵に寫眞帖を引出して、ローラの寫眞を見し事やら、それやこれやが心に纏りて、今の夢となりしなるべし。良人とローラとの對話の樣子も、いつぞや良人が共に留學して居たる人の戀物語とて、我に聞かせたまひし事に能く似通ふて居るものを、それを直樣ローラの上に引當てゝ、心の鬼が作出したる根なし草、我身恥かし申譯もなし。

打捨てながらもまだ氣にかゝりて、これは正しく無きものとするとも、此樣な事が若しあらば、我が成行は此夢より外に出でじ。もし萬一にも其境に落ちたらばと、先刻の塲を思返して身慄ひし、有るな有るな、我はさる不幸に守られはせじ。たわいもなき事、夢にまで苦勞するとは、愚痴に生れつきし女の我ながら果敢なさよ。

それにつけても何とて音信のなき事やら、音信といへば嬉しかりし夢の中の手紙、嘘にも彼樣なものを遣はして下さらば、憂さも淋しさもそれに紛れて、何れほど命を延ぶるかも知れぬに。今日あたりは料らず御用の隙もありて、若

し一筆染めたまひしか。はかなけれど其も明日までの心憑これを思出に最う一寢入と、枕を直して目を塞げば時は早三時、小雨はさら〳〵と降來りて奧深くしめやかなる四邊、鐘の音は闇の中を這渡りて、やがて耳より遙かになりぬ。大坂にては今如何なる夢を結ぶやら、百三十里夜は同じ夜なれど。

（八）上

賢次は歸來りぬ。髯を剃落したれば二歳三歳若やぎ、見違ふほど肥太りて、眼色は得意らしげに活々としたり。芳子は顏を見るより何事をも忘れ果て、留守居のつらかりしを云ひも出でず、根强き邪推もなき身は先立つ喜悅に蹴落され、御機嫌ようとやら御疲れ樣とやら、浮立つばかりなる態度のまめ〳〵しく、馴れし座に導きて差向ふて改めて越方の事を云はんとするに、逢はゞ如彼いふて如此いふてと、山ほどありし種々の話說も、工みしほどには口に上らず、最早お歸りもない事かと思ふて居りましたと、あどけなき一言を精一杯の怨言にして、あとは笑崩れて只譯もなく嬉しかりき。

されど芳子は心の中に、良人が濃やかなる物語を、前の如く優しげにいふて呉れるを。それとはなしに待ちに待ちぬ。離れし間の過越方、其お心の行衛をも知らせて、我が獨居のつれ〴〵なりしを、滿足するほど慰めて下さるお言葉の、出る事とばかり思設けぬ。賢次は少しもさる節はなくて、誰にもいふべき

一通りの挨拶のあとは、外の用に移りて目も呉れず、果は疲れたりとて枕引寄せて高鼾思ふに違ふて芳子は望を失ひぬ。男心はさうしたものか。さぞ淋しかつたであらう位の思遣りの一言はあつてもよきにと、少しは胸にも持ちたれど、それも身勝手かと自ら抑へて、久々に歸りたまひし良人、飽まで居心よく休きて、旅寝の憂さをも忘れさするが、爲すべき第一と殊勝にも心付きて、彼是と身を入れて管待の數々、有る限りの事は盡して見すれど、賢次は心にとむる樣子もなく無用といはぬばかり菅なく過ぎぬ。

來客の應接、引殘りの事務と、當分は歸京につけての忙しさに紛れて、我方を振返りたまふお暇もなき事と初めの中は芳子も心に掛けざりしが、賢次が變りたる樣子は漸く現はになりて、言葉に接穗なく眼は冷やかに、以前の如く打解けたる氣振は洗去りたるやうに消失せ、些細の過失をも嚴ましく叱付くるやうになりぬ。何とて此樣に氣むづかしくなりたまひしやら、されども何日かは本のやうになりたまふべしと、芳子は素直に何事も逆からはず、萬づにつけ

てしほらしく振舞へど、滿足したる笑顔は微塵も見えず、少し心利きたる事をすれば、小癪なとばかり云落され、それではと控目にして見すれば、荒々しく手ぬかりを罵られ、これなればと隙間もなき程よき所爲も舌打のあとは恐ろしき眼付さるゝに、何の樣にすればお氣に入るものかと、おろ／＼涙ぐみたる日もありき。

良人の外出はやう／＼繁くなりて、歸る日もあり歸らぬ日もあり、歸りても顏を突合して居る間はほんの一時、まして打解けたる折などは、用事の外には數へても無き程、果は幾日と打續きて姿も見せず、芳子は有るか無きかの如き身持に、いかに溫柔しき腹にも据ゑかね、さりとては餘り酷い爲され方、我はこれほどにも盡して居るに、何がお氣に入らで此樣に難面い事ぞと、泣きたくばかりなるにつけて、かねてよりの疑念も漸く根を持ち、良人は寔に我に飽きたまふてか。外に思召寄る方が出來てか。我が一生の苦樂を任かすべき人が、今から其樣なお心にて、これから末は何となる事ぞ。淺猿しく捨てられし妻となりて、世に生甲斐のある事か。とはいへ良人は眞箇に眞箇に、眞箇に、お心が

變りてかと物思ふ傍へ、小間使が御膳を召上りまするかと聞きに來るに、今日も良人は歸りたまはぬなるべし。我は未だ進まぬほどに、後にと力無げに言渡して、あゝ四月ほど前までは、食事も世に越えて味美かりしにと、終はいつも涙なり。

夏は一層暑苦しく過ぎて、萩の葉の露になまめく頃となりぬ。歌舞伎座の新狂言の噂は聞けど、花屋敷に七草の見頃との事も、競馬の評判も祭禮の取沙汰も人傳には耳に入れど芳子は何處へも出ず、世間は餘所にして一人うそ淋しく垂籠めたる朝夕、落葉は庭に取亂れて、蜘の圍も荒れて見ゆる詫びしき秋なり。良人が言葉の樣子にては芝居をも觀秋草をも眺め、時の人々の集るべき處は、足の及ぶ限り見逃したるはなし。取散らして出行きたる良人の居間を、片附けながらも、心の中に、あゝ今日も例の御酒に亂れたまふべし。餘りに强くお過しなされて、身體を害めたまはねばよいがと、流石に案遣る物優しさ。

珍らしくも二人差向ひの折芳子は少し笑を作りて承はれば先頃より櫻が岡に美術展覽會の開かれし由なるが、若しお暇の折もあらば、一日連れて行つて

下さらぬかといへば、いつもの曲もなく、我はとうに見て仕舞ふたとの挨拶、行きたくば、一人で行くがよしとあるに、一人行きて何樂しかるべき。暫く外出もせねば餘所の有樣をも見たさに、何處ぞへ召連れたまはぬかと裏問へば、馬鹿な、なまのろく女房と手を引かれて、世間の奴等に笑はるゝ眞似は爲たくなし。女は家内を守れば足るもの。二人見ともなく繋がりて、痴氣を大道にひけらかす事かはと、情の入るべき隙間もなし。芳子は微笑みて、貴郞も變りたまひし事かな、いつぞや御一所に外出の時、妻として世間に何遠慮、夫婦を私事の戀かのやうに、表に出ては人目を憚りて、離れ〳〵に見得をつくらふが、氣の知れぬ至と申されしに、裏表なる今のお言葉と聲の少し強くなりしには、ツと心付きて、言過ごしはせぬかと良人の顏色を見れば、當然さと鼻であしらふて、いつまで物珍らしき若夫婦で居らるゝ事ぞ。人は年取る眞面目にもなると云はれ、其眞面目になられし方が、此頃のお身持はと思ひながら、さらば我は何處へも參りませぬと物柔かく、そして貴郞は今日は家内にお出なさりまするかと聞けば、それは我が勝手とばかりの返事、居ては下さりませぬかと優しく

頼めば、いつまで其方と榮もなき話のみにて、居られるものかと味もなき言葉、芳子は尚も押返して、いつもお留守勝にて淋しくてならぬに、少しは我をもあはれと思召して、我慢して偶には家に落付きたまふてもよいでは御座りませぬかと言出づれば、用があればこそ外出もするに、不足をいふかと腹立聲、さうでは御座りませねどゝ下から出れば、それならば默つて居よと量にかゝつて荒々しき舌の根。

芳子は言葉もなく俯向きながら、我が何ともいはねばよいかと思召して影護き事もなきやうなる手强さ。寧そ打付に云ふて仕舞ふたらば、良人も少しは御身の上を省みたまふべきか。とはいへ端たなく言過ごして、尚のこと中の疎ましくもならばと、兎角は控へ勝に聲も出し後れ、恐は〳〵良人の方を見上げて、氣色を窺ふもいとゞ心苦し。

そして今日は何地へお出掛かと、やう〳〵にして口を開けば、差出がましや。女の知つた事ではなし。聞いて何の益に立つと思ふぞ。それほどの暇ある身ならば、買物帳でも調べて置けといふ。心なきお言葉かな。差出がましと

は仰有れども、女の身に關はる事を、伺問ふは分際を越えたることか。打續けて家を明けたまふて、お戻りはいつも御酒機嫌にて、我には取分けて御不興といふ御用を、何ぞといふまでも御座りませぬ。

大方それとは察しながら、今迄何をも申さゞりし我胸を、露ほども可憫とは思ひたまはぬか。それほどにも早お心の移りて、我をば知らぬ他人よりも、尚の事疎みたまうにか。足らはぬ事を言立つれば、山ほどもある我身ながら、定めたまひし妻ならずや。其名の下にも少しの御不請はあるべきに、それともまだ一年もたゝぬ中に振捨てたまふ御了簡にて、初めから我を娶りたまひしか。

家を外にしたまふても。決して悪いとは申しませぬ。よし外に思ふ人の出來たりとて、それをも兎や角は申しませねど、せめては家にお出の折、御機嫌のよきお顔をば、三度に一度も見せて下さらば、どれほど嬉しきことか知れませぬにと、思ふほどには云へねど尚も續けんとするに、賢次は眠氣なる顔に生叭して、面白くもなし最う止めよ。何里も同じ女の繰言、人を動かす氣が凄まじ

と風が撫でしほどにも思ふて呉れぬに、さりながら我が胸の中をもと、云はせも果てず聲鋭く、止せといふに分らぬ奴かな。我は最早聞く耳も持たず、喋舌りたくば勝手に何時までも喋舌れと、見返りもせずどんと立上りぬ。

やがて聞ゆる車の音、つれなき響を芳子の耳に殘して、賢次はさす方を急がせて行けり。情なく口惜しく恨めしく、切なき胸を押へながら、妻といふものは斯うしたものかと、行手の心細く悲しきにつけて、つく〴〵思出づるは娘の時の事、あゝ彼の頃はいかに樂しかりしと、過ぎし俤を追ふて行けば、戀しきは兩親の膝元懷しきは故家の軒下、いつまで此樣になりて沈果つるよりは苦しくとも一思に出戻りて、其處に長閑なる世を送りたし。とはいへお兩親の前へ出て、何と合はさるゝ顏があらうぞ。親の子なれば我が上を氣遣ふて、變らず中よく暮して居るかと、今も思ふてお出なるべしと、身も張裂くばかりなる切なさ。

良人の不行跡は妻の不行屆、女の恥ぞと父樣がかねての仰なれど、我は此上何の樣にしてよきやら分らず。良人には疎まれ果て、親には歎をかくべき我は、

どれほどの惡い事をしたかと、禁めても涙は溢出づる折しも、門の内に乘入る車の音、お歸り遊ばせしかと立上る外より、お故家の大奥樣がと入來る取次の婢、何母樣がお出遊ばせしとや。今の憂身を告ぐる事の嫌さに此頃打絶えてお音信もせねば、何うしたかと案じて來たまひしなるべし。世に優しきお心の前に、何として此泣顏が見せらるべき。とはいへお目には掛からねばならず、と急ぎ鏡の前に行きて見れば、顏は淺猿しく髮も亂れたるに、目を押拭ふて櫛を取上げながら、此やうな容態にて母樣にお目にかゝらうとは。

（八）下

遇へば懐しく語ればつらく、いつまでも傍に居て欲しき人を、直にも歸つて下されかしと、念ずる身のいかばかり悲しかりし。芳子は母の前に出て挨拶しながらも、今にも家内の事を聞かれんかと心も心ならず、打絶えて暫く顔も合はさねば、いひたき事も聞きたき事も有餘る程にあれど、胸は憂愁に塞がりて言出づる力もなく、其後は御無沙汰を致しましてと、形ばかりに口を開けば、何としてか、餘りに久しく音信も聞かぬに、懐しきまゝ其方の見えるのも待たれず、心を先にわざ〳〵出掛けて來たり。其方も未だ初めの中は、折々機嫌をも聞きに來て呉れたが、此頃は良人に心を取られて母の懐をも忘れて仕舞ひしよ。其分にてはいよ〳〵睦じく暮してと見ゆる。以前に輪をかけて尚深く可愛がられてなるべしと、微笑む目元はいつもの優しさに、子を思ふ心の一しほ色に出でぬ。

何と答ふべきか。今日此頃を知りたまはねば、相も變らぬ仲とのみ思召して、

此様に仰有らるゝ程心苦しくて堪へられぬに、寧そ斯う〳〵と事情をお話申して、何と致して宜しきかとも打付に今の上を訴ふべきか。いや〳〵夢にもそれとは御存じなきものを、思も寄らぬ事をお聞かせ申さば、何のやうにお心を傷めたまふやも知れぬに、折角うき〳〵してお出の處へ料らぬ歎を見する事の如何にもおいたはしき。生家に居たる頃は一方ならぬお心勞をかけ、漸く此家に嫁けて望ましき身の納りと上もなく安心したまふ折柄、お氣にかゝる事は假にもいふまじ。良人の身持とてもいつまで斯くてあるべき。やがて本に立返りて、前の如く優しき人となりたまふべし。同じくは知らさずとも濟むべきに、なまじ泣言をいはぬが花ばかりか、良人の爲に隱すは妻の嗜そ、れはともあれ今此時何のやうな饗應して母様に喜ばれんかと思ひながらも沈勝なる胸の中を若し素振にも悟られはせぬかと、心ならぬ笑顏を作り、存じながら用事にかまけまして、ついお遠々しくなりましたれど、母様の事なればお叱りもあるまじなどゝ、此頃は殊の外づるくなりました。父様は同じく御機嫌よくてか。時候も肌寒くなりたるに、今年は御持病の氣も見えませぬか

といへば、其事なれば喜んで呉れよ。お年を召すほど丈夫になられて、日にまして一しほの元氣よさ。其方の事を始終お噂なされて、芳が居らずなりてからは、何とやら其處等が淋しくなりしと、昨夜もいつもの御酒半ばに、かゝる折柄以前の如く、芳を傍に置きて酌をさせたらば、酒も一段と味美く飮まるべきに、あるべき事ならねど尙暫く娘にして置かばと、嫁にやりたるが惜しきやうなる氣の浮ぶも可笑し。今此方へと招寄せても、此のやうな胡麻鹽頭よりは、婿殿の傍がと直に逃げて行くべし芳に聞かせたならば、何といふかと冗談交りに仰有りしが可笑しいではないか。其言葉は耳に浸みて、今の身の程のいよ〳〵辛く、變らぬお慈愛のいつまでも有難きに、我は何とてお雨人に引離れて、かゝる物思の日を送るやうになりしぞ。此樣にて斯くてあるならば、願ふてもお傍に付通して、昔の夢を繰返して見たし。父樣なつかし御許戀しと、思入りしが、心付きて、何としてかゝる氣にはなりしぞ。我は此家の妻なるに。

談話は種々に移りて行けど、冴えぬ芳子の氣色を流石に母は見咎め、其方は何

とかしてか。常時に似ず浮かぬ樣子と、氣遣はしき目を向けられ、胸を轟かせしか左あらぬ躰に、いゑ〱何ともござりませぬ。四五日前より血の加減か、少し頭の重きやうなれど、珍らしく母樣のお出に、それも打忘れて今は只すがすがしといへば、それならばよけれど包みて要なき事、疚しき事もあるならば、心隔てず打明けるがよしと顏を見込まるゝほど尙隱しづらく、それは仰までもござりませぬ。僅かなりとも惱ましき事もあらば、我から進んで申すべきにと、言葉に力を入れて紛らしながらも、母に僞をいひしはこれが初めてと、いふにいはれぬ不快さ。

賢次殿は何處へ出掛けられしぞ。たま〱來たるなれば遇ふて行きたけれど、お歸宅の程は知れぬかと、稍ありて母の言出づるに、先程さりがたき用ありて遠くへ參り、歸宅は遲くなると言殘して行ましたれば、今日はお目には掛かられまじ。母樣の思召は、我よりよく申して置くべし。此頃は彼是と忙しくて良人も外出勝、我は留守居の折に裏淋しき時もござりまするど、包む心のそれとなくほのめき出づるに、家を守る役なればそれも是非なし。外々の性惡

き出歩行とは違ふて、身につきたる用事なれば其方も心安く、内には氣を置く人もなき樂なる身躰、其方は何處までも留守を大事に家内を見事に整へて、良人に譽めらるゝやうにせねばならずと、いはるゝにつけていよ〳〵堪へられず。寧そ一思に打明かすべきか。御心配をかけるは嫌なり。それとも言ふてのけやうか。言ふまじきか言ふべきか。此上御苦勞をかけるは如何にもつらし。いふまじ。いふまじ、よし此胸の裂くるまでは。

（九）上

華車を一構の心として、千本格子に網代天井、障子は杉柾の洗出、上り口の隅かけて島原形の女下駄に、藤天鵞絨の鼻緒の媚めかしく脱捨てたる、これは何者の住居ならむ。

往還の方に物見の窓あり。半ば開きたる障子に寄添ひて、其處に一人の女立てり。二十一二の姿よく、結立の三輪に丸髷形の荒齒櫛、黒の羽織に着物は角通しの小紋織、顔は色めきて殊に物いふ眼なり。薙刀酸漿を鳴らしながら、心もとなく表を眺めたるを、艶を悦ぶ若き人々は多く見返りて過ぎぬ。女は見られて羞らひもせず。

轍二筋砂烟を捲立てゝ、勢よく驅來る一輛の車あり。窓の女は直ちに其方を向きぬ。車は家の前に止りて、上の人は下立ちさまに振向きて車夫を歸し、案内もなく格子戸を引開けて中に入る途端、女は飛立つばかりに走出でゝ、おやといふ聲と共にさも嬉しげなる笑顔、入來る人も先づ輕く笑ひぬ。これは賢

次なり。
今朝程から虫が知らせてか、何とやらお出のやうな氣がしてならぬに、今も今とて窓へ出て心待に待續けて居りました處と、未だ座も定まらぬ中から言出せば、其方にそれほどの實があるものか。其調子も久しいものと、火鉢を中に座りかけていふ。何の、お出がないものならば、髮をも結ひますものか。お湯に參りますものか。これ此通り火も起し立てゝ、餘計な支度を致しましやうぞ。申せば果敢ない心當ながら、それをも樂みにするほどの我とは、よう御存じながら其憎い口はと、優しき目に角立つるに、それは何處ぞの忍ぶ人を、大方待受の支度なるべし、油斷のならぬと微笑みながら返せば、貴郎は未だ其樣な氣でお出なさるのか。此程までになつて居ながら、此肚の中が分りませぬか。人を、其お心意氣ならば、此樣にして待つのでは無かつたものを、悔しいとばかり勘癪の八當り、嚙切りたる酸漿を前に叩付けてつんと横を向く。來早々喧嘩でもなかるべし。先づ茶でも飮ましては呉れぬのかといへど目を餘所にして取合ひもせず、これと袖をひけば肱先に力籠めて突返す。手も

つけれらぬと賢次は笑ひながら、傍の茶盃を取らんとすれば、お止しなされと拂退けて、これは私のお茶でござりまする。其樣な水臭いお方に、お飲ませ申す事はなりませぬと、盃を奪取りて彼方へ引寄せ、又も身を背けて見も返らず。賢次は樣子を眺めて再び打笑ひ、煙管を取上げて吸付けかゝるを、其樣な方には煙草も喫ませませぬと、煙管を引奪りて投出し、又も背後向けて知らぬ顏の思はせ振。

其樣な事して見せるよりは、一通りの挨拶して一通りに應待ふて、手輕く歸して仕舞ふ方が、お役目からは割方なるべし。さうして腹を立つて居る程、あとが長引くと口先に笑へば、開直りて、貴郎は……と胸づくしもせぬばかりの氣色、何故さう思ふやうにないのやら、冗談をのけて貴郎は眞實に、眞實に、眞實にさうしたお心ではなきか。いつも其樣な御樣子なるにつけて、思へば思ふほど尚憑りなくて、と眞顏になりての涙聲、賢次は物ともせず、それを今更になりていふ事か。我はたゞこれだけの男といへば、其これだけが案じられまするると思餘る言葉、それほどに案じられるならば、何故初めに念を入れてはかゝら

ぬ、安のみこみの當が外れしかと、いつまでも焦らして見る氣なり。

貴郎は私を窘めにとて、わざ〳〵お越しなされしか。お氣に染まらぬ處もあらば、何故かう〳〵と打付に、お叱りなされては下されぬ。弱いものを弄殺しの、それは餘り罪ではなきか。今日に限りて其やうに。他の氣を惡くする事ばかりを仰有るは、胸に何か所思のありてかと、果は一圖になりて詰寄れば、賢次は又も微笑みて、「所思の無いてもなし」といふ。「包まずお聞かせなされと膝を進むれば、實は其方を喜ばせんとて、內々支度をして來たといふ。

そら〳〵しき事を仰有るまじ。それ程の賴もしきお方が、今のやうな嫌がらせを疊みかくる事か。他の氣も知らぬ。何處まで戲弄面のお心ぞ。私は何うせ玩弄物なれば、御勝手な眞似をなさるもよけれど、此樣な果敢ないものながら、少しは虫があれば」といよ〳〵不興顏、賢次は尙元氣よく最早熱くならいでもよし。眞實の處を打明けて言へば、此間其方が望んで居た明治座を見せて遣らんとて、態々誘ひに來たのなり。いつもの場處を取らせて置きたれば、支度がよくば直に行かうではなきか。よしなき言掛りに勿體つけたは、一時

の出來心なれば水に流すがよし。怒つてくれたは嬉しかりしがと、いふ顔を物をも言はず見詰めて居たりしが、「私は根が愚かなれば、よいやうにしてお遊びをなさるがよし。正直にして何事も受けて居るほど、末は詰らなき目に遇ふばかり、其様な上付いたお心は、私は初めから大嫌、何の、芝居などは見たくも有りませぬ」。

「生眞面目の御挨拶で痛入れど、其様な老實なる言葉は、また聞く折も言ふ折もあるべし。物は早分りがよいとして。行くか行かぬか平たき返事が聞きたし」。

「何處まで罪なお方ぞ、私は知つて居ります。さん〳〵私を嫌がらせて、後で喜ばせて遊んで遣らんとのお心なるべし。此様な人の良きものを捉へて、其戯弄氣が憎いてはありませぬか。

今日は口火が悪かりし。最早仲直りして機嫌を直さうではなきか。折れるは女の譽處、それとも嫌かと差寄れば、餘りといへば氣隨のお仕方なれど、思ふ弱身で負けて上ぐべし。憎いやうな最惜しいやうな、貴郎は眞箇に、と後は言

はず目に心を持たすれば、何だと誘ふ顔の賢次を、優しく見上げて、「おほゝゝゝ、二重目縁に魂通へり。

（九）下

往還を流す新内は遠くなりて、一しきり騒がしかりし喧嘩の聲も、やがて横町へなぐれて行けば、あとは按摩の笛、柳吹く風、軒先に磨硝子の點燈も稍々淋しげなり。留守居の下女は覺束なき手に、洗張の半襟を縫付けて居たりしが、倦厭してか思ふさま長き欠し、振返りて柱時計を見上ぐる折しも、門口俄にひしめきて兩人は歸來りぬ。「若衆樣御苦勞樣」と、流るゝ汗押拭ふ送りの車夫を勞ひて、「これは旦那から」と心附を遣る女、賢次は先に格子引開け、啣楊枝の足付をかしく中へ通れば、下女は二重顋に莞爾つきて出迎へぬ。

華美を表に花を持たせ、聲高の謝禮に景氣づけて歸る車と、引違に女は中に入りて、しだらなく脱捨てたる賢次の下駄を、片脇へ直して上へあがり、長火鉢の前に先づとばかり座りしが、「兼、お前にもお土産が」と、蔦の紋ある簪に下女を喜ばせ、提げて來たる折を渡して、「そして座敷に燈火をつけて」と、言付けながら長煙管を取上げ、何とやら疲勞れたやうな氣持と獨言てば、賢次は頬杖に身を持

たせて、未だ時は早かるべし、座敷で飲直さうてはなきかといふ。其上にまだお飲りなさるとか、今日はいつよりお過しなされたに、最うお止しなされと顔を見込めば、小酒盛の相酌といふものも、氣が變りてまづくはなし。あつさりと只一寸飲むべし、明日はさしたる用もなければ少しは過ごしてもよし、其方も顔を顰めるほどの口でもないに、わるく世帶染みて止立するが可笑しと笑へば、それは飲るならば飲りてもよけれど、貴郎の身體を思ふからさ」と、常時のあだめきたる仕打なり。

兼は事に慣れて手ばしこく、酒の支度も瞬く中、加賀塗の取膳に程よく小道具を並べ、小脇に玉火屋の飾洋燈友禪の座蒲團を差向ひに直して、盃上ぐる手を待つばかりに整へぬ。女は賢次の脱捨てたる羽織を疊みて簞笥に入れ、やがて薩摩筋の平御召に着更へて、ほつれかゝる鬢を直しにと鏡の前に寄るを、賢次は早成る口を急ぎて、お村、早く來ぬかとせはしなし。立上りさまに後姿を見て座敷に出で、待たるゝ膳に差向ひて、いつもの元氣よく銚子を持てば、一燗二酌三肴、道具が揃はねば酒が旅らずと盃を出す。一口二口の初は靜かに差

して受けて、又差して重ねさせて、其方も上がつたなと漸く漂ふ目元、醉は一人の面白からずと、無理に強られて助けて貰ふほどになれば、女も流石一刷の櫻色、賢次はとくに居住居を崩して、人交なしの斯かる中に何ともいはれぬ其味と、吹出す息も稍、荒くなりぬ。

「貴郎も此頃はめッきり強くおなりなされし」といへば、それは酌が酌なれば、飲めるやうにも成らうではなきか」と持たせ顏、其お酌も漸う／＼黴が生えて、最早鼻につくべき時分なるに、未だよく辛抱して召上らるゝよ」と品作れば、今更柄をすげる事かと打笑ひ、「我は根が凝性の、これぱかりが一つの取柄なれど、其方に取りては此上もなき迷惑といふに、「口は御調法な、言へば言はるゝものかな、さう仰有るお肚の中を見たらば、閻魔樣が釘拔持つて睨んでお出なさるべし。我は知つて居まする」と目の中に笑ふ。　「何を？　「知つて居まする。　何を？　「お酒の無くなつたのをと訝しく打笑み銚子を取つて立上がらんとす。

何も其樣に氣を持たするには及ばじ。有體に言つて仕舞ふがよしと支ふれ

ば其樣に押して聞かうとなさるは、屹度御身に暗い處があればなるべし。早知られしか」と脛に疵の、少しは吃驚したまひしかといふに、左樣いはれては尙更聞かずには置かれぬ。　判然星を指していへと膝を進むれば、「まあ其しらじらしさ」と冷笑顏、「よし、其方がその氣で居るとならば、其疑念を眞實にして、我は爲放題の事をするほどに、覺悟せよ」と少し怫としたる言葉、お村は急に太息つきて、「末は何の道左樣なつて仕舞ふべし。　男には生れたいもの」と底ありげなる聲音、賢次は獨言のやうに、「女といふものは下らぬ事をと、盃を下に置きて、「其方は我心を何と思ふてか」と聞けば、外れぬ處を申すべきか」と微笑みて、貴郎は以前から此身には、愛想をつかしきつてお出なれど、これほど思込んで居る義理ばかりに、惡い顏を見せるも不便なればと、體よく調子を合はせてお出なるべし。　それなればこそ先が見えて、思へば詰らなしと喞ちがましく仕懸けて來るを、何方が迷うてか迷はせてか、左樣いふ其方の胸にあるべし。　家を外に常浸りの、何うにも斯うにもならぬやうに、我を爲てのけたは何處の人ぞといへば、それは口ばかりの根なし事、貴郎は其樣な體のよき言葉を、餘所へ行きて

も同じやうに振蒔いておいでなるべし。私は何うせ一盛の眺物、貴郎は外に極々大事にして、これはと御本尊にして別にしてお置きの、末の末まで御寵愛なさる筈の美しい、立派な、お優しい、奥様があるではありませぬか。眞箇に思へば奥様のお羨ましさ、貴郎のやうな好もしき方に世間晴れて添遂げて、並々ならず最惜しがられ、如彼して御不足なき家の中に、沸いて來る幸福を一人占にして、貴郎の心は一生我物と極印打つたる身の上、その樂しさは如何ばかりぞ。

外ならぬ貴郎の事なれば、至らぬ隈もなく氣をつけて、彼の此のと優しくしたまふ事なるべし。かうして度々私共へお入來なされても、咎立もなさらぬ奥様には、常々御安心なさるほどの仕向を爲盡してお置きなされぱなるべし。それほどにも思はれたまふお方の、爪の端なりともあやかりたきものなり。一寸奥様の事を申したれば、最早思出したまふてか、直にもお歸りなされたげのお顔付、これは寔にさもあるべし。お懐しさのほどはお察し申しまする。奥様もさぞお待ちなされてお出なるべきに、一時も早くお歸りなされて、顏を

見せてお上げなされ、此方はどれほど歸しともなくても、惡止するは貴郎のお心を知らぬといふもの、さあ〳〵お構ひなくお歸りなされ、兼や、車を命令けてお出」と態とらしき高調子、あとは言葉もなく匂ひ飜るゝ笑顔を向けて、優しみ鋭き眼の中に十分なる心、羽織を出せと言はれたらば、大方ありませぬと答ふなるべし。

（十）上

今日も又お歸りのなき事か。待たじと思ふ心にも、待ちに待たるゝ胸の中には難面き仕打の流石恨めしながらも、如何ばかり懷しさの籠りてかと、我ながら我身のあはれとも思はるゝに、吁、とばかり太息に埋れて、一人侘しさに堪へぬ一間の中、有るか無きかの如く芳子は送苦しき時を過しぬ。折からの秋も我身一つに尙深く、霧に明けて露に暮れて、宵毎の燈は物淋しげに、友もなき影法師を打守るばかり、梢を拂ふ風は軒端に落ちて、窓を打つ木の葉の又何處へか吹返されし後は、絕々の虫の音を吊ふ如き鐘の聲、夜は長けれど夢は短く、明くれば同じ憂思、末は女氣の又しても淚なり。

かゝる中にも妻として爲べき事務は露ほども疎かにせず、いつ如何なる時に歸來たまふとも、家內はよく整ふて何處までも行屆きたるやうにと、及ぶ限りは細かなる心遣このやうにして盡したりとも、張合のなき、爲甲斐のなき事と折節毎の淚の隙には穗に出れど、それは我身の得手勝手なり。天にも地にも

かへがたき良人、思ふ誠實があるならば、假にもそでなき仕向がならうか。其樣な了簡を出しては濟むまじき事、よしや今は悅ばれぬとも、蟻の思も天までといふにいつかは此心の通ぜぬ事はあるまじ。我は根から憎まれてとは、何としても思はれぬものを、長き月日の間には、かゝる事も度々あるものなるべし。

胸は廣く氣は大きく持たではと、さま／＼に心を押へながらも、眉はおのづから顰まりていとゞ重げに、禁めても尙さしぐむは何故の淚ぞ、いつしか我を忘れて兎や角と思煩へば、悲しき事つらき事、腹立たしき事、口惜しき事と、孱弱き心の得堪へやらず、何を思出してか顏に袖をあてゝ俯伏したるまゝ稍多時起きも上がらず。哀を知らぬ婢部屋には、折しも笑聲の哄と起りて、逐ひつ逐はれつ、打たるゝ聲の打交りて端たなく聞えぬ。

我に返りてか濡れたる顏を上げて、亂下る後れ毛を搔上げながら、それにしてもいつまで此樣に疎まれ果てゝ有らるべきか。假令我を愛でたまはぬまでも、少しは家に落付きたまふて、せめて三度に一度ばかりは、打解けたる言葉をも

交さるゝならば、それのみにても我は嬉しけれど、此頃はお歸りのある度に、いよいよ御不興の募るばかり、何がそもお氣に障りて、あのやうに一々角立ちたまふのか。我は無愛想らしき振舞をゆめ〳〵爲た覺えはなけれど、若しや不足がましく思はるゝ心の、自づと顔にあらはれてか、何とせば御機嫌を損ねずに快き御樣子を見る事のなるべき。及ばぬながらも心盡しの有る限りはすれど、かゝる身なれば氣のつかぬ處は山ほどなるべし。それも如何せよとさへ言ふて下さらば、火水の中をも否とはいふまじきに、あゝ何として此心の知られぬ事ぞ。

珍らしくも門に轟く車の音は、それかと聞耳の再び跳りて立出れば、三日目の閾も平氣なる顔して立歸る賢次、酒氣に先を拂はせて突と入來るを、芳子は恨めしき樣子も見せず、機嫌よくしてしほらしき挨拶するを、一言の返事もなく奥へ通りぬ。

前に胡座かきて口を結びたるまゝ、ぢろり其處等を見廻して早落度を見付顔の良人、お召替をなされまするかと優しき聲音も、持つて來いとばかり花吹く

嵐の如きを、物和に受流して用意したる常着に着更へさせ、留守の中に訪ねたる人來たる手紙の、この方は斯う申殘して、これは何時頃參りてと、それ〳〵の用事を言終るを、半ばはよくも聞かぬ如く、膠もなき一言に後をつがせず、手紙を繰擴げて讀出すに、妨げすまじと芳子、靜かに身を退きて、脱捨てたる着物を疊みて居たりしが、料らず八つ口の搔裂を見付け、これはと言はんとして良人の顏を見て、いはゞ又氣に障る事もあるべし。何をもいはて繕ふて置かばやと、さり氣なく疊終れば、賢次は早手紙を卷納めて、續けさまに生欠するに、芳子は茶を薦めながら、お嗜好の鳳梨がございますが、召上るならば「と言出づるを、無用」とそつけなく打消して二三杯の茶を流込み、何をか話出さんとする芳子の前を、菅なく立上りて居間に入りぬ。

芳子は手爐の火を運び、時も稍暖き支度を急ぐ敷物の、此柄は必ずお氣に入る事と思ひましたればと、新らしく調製へたるを取出し、彼是と忠實やかに心をつくるを、賢次は振返りざまに聲鋭く、最早何も不要、我は調物をせねばならぬに、邪魔になる、彼方へ行け」と叱付くる如き言葉、芳子は逆らはず素直に立上り

て、茶の間に戻りしが流石に浮かぬ顔、差俯向きたる眼の中は悲氣なり。やう／＼思返して臺所に出で、良人が夕餉の支度をと、それ／＼の指揮をしながらも、これが心よく箸を上げたまふものならば、如何ばかりか嬉しき事なるべけれど、又してもお叱言の種ともなるのではなきかと、進まぬ勝の氣を追退けて用意も整へば此間に先程のお召物をと、針箱を出しかゝる折しも、良人の居間に鼾の聲、お寢りてかと心元なく差窺けば、有合ふ書冊を枕にして早くも夢に入る賢次、机の上を見れば何一つ出して覽たる跡もなきにこれがお調物かと、少し眼色を變へしが根は強からず、お風邪を召してはと靜かに被卷を打着せ、眞の枕に仕替へさせたる優しさ。　此芳志は鬼も受くべし。　良人は知らず高鼾。

（十）中

これを勤務なる粧飾を濟ませば、煙草一服の後は用もなき身體、お村は猫を相手に長火鉢の前に、今朝の新聞も讀盡し、觀菊の折求めて來たる鉢植の、花は末になりたれど未だ眺めらるゝに、かいしよらしく水を遣りて、暫くは見入りて居たりしが、やがて又火鉢に倚れながら、灰に冗書のそこはかとなき中に、不圖思入りたる我身の事、つく〴〵行末を考ふれば、いつまで此家に此樣なる暮しして指環を光らしてのみ居たればとて、いはゞ敢果なき人の眺め物、根を浮草の風が變らばいかなる岸へ吹付けらるゝ事やら。

今かく我儘なる月日を送るも、姿の花の衰へぬ一盛、やがて小皺の一つも殖えて、髮の薄くなるを氣にするほどにもならば、賴みても構手はなかるべきに、うかうかと鏡を相手の中に年を寄らせて、飽かれて別離といはれたる曉、一言の返しも出來ぬ身の上にてあるべきや。

我も今年は二十二の、赤きものは早適らぬ年輩、老易きは女の身のやがて來る

秋は見えすきたるに、今から何の慌てゝ末の支度をと、のんきなる顏して居るは大きな白痴なり。

吹けば飛ぶ放せば落ちる、此境涯にて我は何としても滿足せじ。さりとて獨り引離れて、慥かなる身の納りをと探した處が、一度濁りに染みたる身體を我がこれはと望むほどの人は、何がよくて迎取るほどの醉興を爲すべきや。

とはいへ、捩手拭して鍋を洗ふやうな處へは、假令山ほど好き處がありても嫌な事、輿入の明くる日から薪瀧に汚れて、味噌漉提げて五厘が葱買ひに行くほども、それほどもしがなき事はなくとも、世帶の屈托に四寸づゝの膳が何面白かるべき。

それも更行きて捌場のなくなれば、我から手を下げたりとて其より上の處へは行かれまじ。附目は今の花ある間、それと覺悟して慥りして掛からずば、行末人に壓されぬ顏にはなられじ。

目指す方は今の頼む人なれど、それには立派なる瘤の附きたるを、押除けて先へ乘込む事の出來やうか。兎に角好かれたる此折柄を機會に、爲る事だけは

爲てかゝらねば損なり。

あゝ、幼き折より兩親心を合せて我を色仕立にし、學校も半ばより退かせて遊藝專一と浮きたる事ばかりにしこまれ、譽めらるゝが嬉しさに精を出せば、右より左より大事にされて、湯には母親が付添ふて磨立つるほどに、鑄掛屋のお村と名取者になりて、父親は繼剝の衣服着たるに、我は華美なる光るものを取廻はし、半日化粧のあとは何もせず、親には我儘の爲たい放題の事して暮しけるが、早十六の春を待たず、羞かしき人の心を取るやうな事に身をなされ初めはつらくつらく、只一筋につらかりしが、慣れては結句それも面白く、いつしか今の身の上となりぬ。何の道横へとそれたる身體の、此垢は洗ふとも落つまじ、我は我だけの事をして、行末の安堵を計らねばならず。今の旦那ほどよくして下さる方はなければ、必ず機嫌を損ねぬやうにせよと、母親の口癖のやうにいへど、煙草の火より移り易き男心、切るとも離れぬほどにして置かずば、油斷のならぬ事と思入る折しも、鐵瓶の湯の沸り出したるに心付き、手近の急須を取下ろして、茶請に引出したるは辻占入の干菓子一つ取つて中を見れば、い

づれ其中お禮詣りさ。おや緣起のいゝと、容易く見せぬ笑顏なり。

肩に餘る大包を脊に、唐棧づくめに小倉の帶、前掛の端を折りて腰に挾み、千草の股引尻からげの小作りなる男、臺所口より腰低く入來るを、今しも鼠不入の掃除して居たる兼は目早く見付けて、おやお出なさいと言ひさまに奧へと振向き、御新造樣、あの淸助が參りましたと勸走りたる上調子、おゝ恰度よい處へ、唯つた今お茶を入れたばかり、さあ此方への聲を誘導に、男は次の間に荷を運びて、敷居腰の挨拶も馴染顏の手輕く、お誂が漸く今日と家名の紙蔽したる小袖をそれへと差出し、お見立通り仕立上げましてからの見榮よさ、貴女樣にお着せ申しては、寧そ罪作りといふお召物でござりますぞ。いゝえ油ではござりませぬ。お茶菓子の効驗などゝはいつもながらお口の惡い、それでは正直お譽め申す事も出來ませぬ。先づお着初は那邊へなどゝ、口數少からず。これから廻る處もなきか、先を急がぬ浮世話のいつよりも長く、荷を結直して片隅へ寄せ、一服戴きながら、時にと煙管を取直し、貴女樣御油斷はなりませぬと首を差出す。何がと返せばそれには答へず、旦那樣は前のやうによくお出

なされますするかと聞く。お出なさるが何うしたえと、胸は早くも聞咎めて思はず膝を立直せば、此頃御樣子に訝しな處は見えませぬかといふ。何故といよいよ眉を顰むれば顔色を見て居たりしが、はてな、それとも私の惡推か知らぬと、小首を傾けて考込む樣子なり。

ぢれッたい、何だねえ、早く言つてお仕舞なと急立つ主婦、實は此方は乘出し、二三日前一寸暇をかすりまして、内所で歌舞伎を一幕窺いたと思召せ。すると東の鶉に見物の一組が、不圖目につきましたと思召せ。人交なしの二人切で、只は通されぬ樣子だと思召せ。そこで氣をつけてよく見ますと、一人は此方の旦那樣だらうではござりませぬか。

ふう、それからとお村も身を入れて聞くに、清助は勢付きて膝を進め、一人は曰附きの丸髷に、黒縮の羽織で素人振つて居りましたが、衣裳付から、風采から、化粧の鹽梅の何處から見ましても山のものではござりませぬ。貴女樣のやうな方を控へて居ながら、餘りと申せば旦那樣も氣が多過ぎるではござりませぬか。眞箇に罰が當りますると、お目に掛かつて申したうござりました。

それから又と、手元の茶に口を濕めして、昨日小梅の前田樣へ上りまする途中、廣小路を向から景氣よく飛ばして來る二臺の車を、不圖見まするると前のは旦那樣、後のは此間芝居で見た代物、貴女樣、これですもののウッかりお目は放されませぬ。

いづれ此方へお見えなされ次第、思ふさま油を絞つてお上げなされませ。癖になりまするると焚付くれば、ほんにまあ油斷のならぬ存分お灸を据ゑて上げねばといふ。そこで旦那樣を酷くお痛めなされて揚句がお詫の印として、いづれお召物とお錦帶の御新調、其時は早速手前へ御用をと切込めば、まあいゝ氣然な、それでは今の言告口も、根は商賣づくから出て來たのかえと、跡は笑に落ちて談話は其儘になりぬ。

表はさり氣なく見えながらも、中は種々なる胸の綾、間もなく清助が歸りし後も、お村は火鉢に凭れかゝりて、又も物思の中に入りぬ。それにつけ此につけ、いよ〳〵ウッかりして居る處でなし。急いで惡からぬ末の身じんまくぐづぐづして居て人に取られて、馬鹿な顏になりて指を啣へて居られやうぞ。

返す〳〵も移り易きは男心、下物にしても持たぬやうな、夏の魚にも劣るほどなれど、それをも女の身にしては頼まねばならず、疎まれぬやうに飽かれぬやうに、氣に入るほどの有る限りは爲盡して、辛うじて縁に繋がれて居ることを思へば、よく〳〵意久地のなきは女なり。

されど、と私かに嗤ふものゝ如く、又思へば男とてもたわいなきもの、身は操りの絲次第に、引けば動く振れば踊る。高が此方の手の中の物、何の案じるほどの事かと嘲る折しも、がらり格子を引明けて、在宅かと這入りながらいふは、紛ふ方なき賢次の聲、お村は氣を變へて空嘯き、誰方樣かは存じませぬが、此方へお出なさる譯はなき筈、お門違ではありませぬか！

（十）下

「何が氣に入らで其樣な眞似をするぞ。言へ聞かうと近寄りて、肩に手を掛けんとするを荒々しく振放し、物を言はず拗返れば我には一向譯が分らず、慰みにするならば惡い洒落なり」と言はせも果てず癇癪聲に、「誰が好きで此樣な事を冗談にもなりまする事か」といふ。「それならば飽氣味の逃口か」と笑へば、さも口惜しさうに睨附けしが、言はんとして言得ざる如く、顏に袖を當てゝ其處に泣伏したり。

賢次は煙管を一拂きして、此方を見て居たりしが、獨言のやうに「人をつけ面白くもなし、ちよッ歸らう」と急に立上れば、お村ははッと身を起しさまに掛隔たり、涙組みたる眼にぢッと見上げて、どうせ貴郎はお歸りなされたかるべし。構はず捨てゝお歸りなさるほどに、貴郎はお變りなされしか」と、悲氣なりしか振仰ぎて「歸るならば歸つても御覽なされ。我が此執念にても何歸すものぞと、折れて折れぬやうに言ふ。歸れば止める居れば當る。「それでは我は何う

すればよいのか。希有なる目に遇ふものかなと獨語けば、當るも拗るも腹を立つも、爲せる人のあればこそ爲るなるを、胸に覺えもないやうな其まざ〳〵しさが悸らしと聞えよがし。「我が何をした」と賢次は開直れば、「私よりは御自分にお聞なされ」といふ。「其樣な事を言へばいつまで果しがなし。何もかも有體を並べて見よ」と氣色立てば、「まだ其樣な事をおいひなさるか。それもこれも貴郞の不實からなり」。

「不實？不實とは」と、聲を荒らぐれば、「じら〳〵しい」と鼻の先でいふ。獨合點の同じやうな事を、幾度繰返すとも覺えのなき我には通ぜず、蒔かぬ種をほじくるよりは、外に何とか仕種もあるべきに、「智惠のない」と冷笑ひ顏聞くよりお村は急込みたる如く、「此方がいふまでは何處までも隱さんとのお思召か。よもやと高をお括りなされても、ちやアんと知つて居りまする」と言放つ。「何を」と返せば少し笑を含みて、「此間の歌舞伎座は、さぞ面白うござりましたらう」。「あれか」。何だ彼か。あればかりの事を其樣に仰々しく騷ぐのか。あはゝゝはゝ「何の事」と態とらしき高笑、「貴郞には如何にも彼ばかりの事なるべし。さ

れど私の身に取りて、其まゝ濟まして居られましやうか」といふ。「それは全體誰の告口ぞ。よしなき事に尾鰭を添へて、さも大げさに吹立てしなるべし。褄先から上へ取上ぐる程のものでなし」と事もなげに見すれば、間に合せに能いやうなお言葉、種は殘らず上がつて居るものを、鵜呑にしてかゝらんとするお氣が凄まじ。それに昨日は、昨日は重ねてお樂しみ」と又微笑む。それも早聞いて居るのか。何處の豆藏が鐵棒か知らねど、正を明かせはたわいもなき事、取るにも足らぬ一寸した拍子の、ほんに一時の出來心」といふをも待たず、「其樣な口先ばかりの調子を、誰が眞實にして聞きますものぞ。貴郎はなと力任せに突轉して、「私は口惜しい、欺されたのが口惜しい」と泣聲になりて前に突伏しぬ。

申さば數ならぬ身の果敢なさは、よしお心が變ればとて、飽かれた曉がそれ迄の、恨み返しもされぬ私なれど、それでは餘り可哀さうではござりませぬか。何處までも實ある方と見拔きたればこそ、此樣に末を賴上げて、命をかけてまで、と言葉を切りて取亂れたる如く情ないは此身の成行なり。

いゝえ何と仰有るとも、それは氣休めと申すもの、私は見替へられました。此上はしたなく言へば言ふほど、愛想をつかされるばかりなれど、いふのが無理かいはぬのが尤か。あゝ、思へば此身になる最初にも、お母樣は種々末を案じて、いはゞお前の身の大事、いゝかえ、いゝかえとよく〳〵念を押して、幾度も私に聞直したを、迷つた目からは何處も彼處も頼もしく、いゝよ、大丈夫、決してお案じでないと繰返し〳〵、安心させて置いたればこそ、其通りと一筋に思込みて、いつとても旦那樣のお蔭にてと、口癖のやうにして喜んで居ますものを、若しもこれ〳〵と聞きましたなら、まあ何の樣に泣かせる事であらう。それだから初めにあれほどといはれたらばまあ何と返事を致しましやう。それもこれも私のいたづらからと思へば、身を刻んでも私は足りませぬ。

これが餘所外の人のやうに、風が變れば又外の口をと、探がすやうな移氣の、そんなものとお思ひなさるか知らねど、此樣な一圖な馬鹿ものには、さうした事は死んでも出來ませぬ。されど、如何程此方で思ふたりとも、最早お心の殘らぬならば、いつまであせりても詮なき事、それなればそれと寧そ打明けて下さ

りませ。此樣なものをいつまでもお釣りなされるは、餘り罪といふものでござりまする。お言葉次第で私は、私は直にも覺悟を極めまする。

「最ういゝわと賢次は押止めて、女といふものは氣の小さい、噂を聞いて影を踏んで最早見替へられたか何ぞのやうに、血道を上げて騷ぐ奴があるものぞ。我の平素を知らぬやうにと言へば、其平素も最う斯うなりては、當にしたくもなりませぬ。これにつけても、貴郎には歷とした奧樣のある身、何の道心細いは私の身躰といふ。それとても其方は知つて居る筈、いつも話す通りなればといへど、貴郎の仰有る事は最早賴みにならじ。近い證據が昨日のやうな事のあるものをと合點せず、疑へば何處まで行くとも切はなし、それほど賴みにならぬならば、我を箱入にして錠を下して置けと笑ふ。他の話を茶にするやうに、貴郎は平氣でお出なれば、いふ事の半分も取上げなさるまじ。今迄おつきあひなされた義理ばかりにも、さう水臭くはなさられぬ筈なるを、餘りといへば情のないと歎ち言。「さらば何うすればよいのかといへば、それは貴郎のお心にあるものを、かうと註文のされまする事か。されど、少しは此身を不便

とも思召すならば、せめて平素のお言葉の半分だけも、仰有つた事が眞實ならば、こんなものなれど安心させて遣らうかとも、思つて下されてもよいでは御座りませぬか。」

「口でこそそれとは言はね、胸には其より上に思へど、かゝる道には不得手の我は、何うしてよいものか一向に分らずといへば、又其樣なはぐらかしを、それならば何故此間のやうな事をなされました。よしそれも奥樣の身分なら、男の働と少しは大目にも見られましやうなれど、考へても御覧なされ私の身の上にて、餘所事らしく笑つて濟まされましやうか。何をいふにも日蔭者の打付には手出しもならぬやうな、敢果ない、敢果ない分際にて、思ふお方の浮心に胸を痛めぬが尤な事か。あれにつけ是につけ、いろ／＼行末を考へて行けば、何うせ終局は除物と、思はなくてはならぬなれど、貴郎に離れるやうなれば、寧そ、寧そと後は言ひ得ざる如く、暫く聲を途切らせしが、」それにしても何故此樣に迷はせて下されし。今更ながら貴郎がお恨めしいと、思入深く見込みたる風采、草も靡く木も靡く。動くは人の心。

（十一）上

軒の時雨か窓打つ風か、それより外に訪ふものもなき此頃の住居を、遽かに驚かす人の氣勢は、誰かとばかり立上れば、生家の母親と國許なる叔母の雪江、暫く遇はざりし從妹の綱子と打連れて入來るに、浮かぬ心も一時は取紛るゝ珍らしさ懷しさ、ようこその言葉に代へて打笑む顏の愛想らしさを自慢たらだら母親は妹の方へ振向き、備はりたる奧樣姿を見てくれがしに喜ばしげなる態にて座敷へ通りぬ。

父親母親の慈愛に次いで、芳子は此叔母に一方ならず最惜しがられぬ。雪江は芳子の名付親なり。過ぎし三歲の秋までは、雪江も未だ此地に住居して、折每の問慰めも親しき血筋の一入に深く、贈ひ物にも水引掛くるほどの見得を離れて、中味に籠むる心の色は其外にあらはれ、芳やと呼ぶ雪江は母の如き目を向くれば、叔母樣と振仰ぐ芳子もさながら生の子の如き心、綱子とは殊に同い年なり。芳子の胸には敵といふものを持たねば、仲の好惡をいふが啌なる

べし。

此家へ嫁入したりと遠くにて聞きたりし時、身にかへての雪江の喜悅は寔に一方ならざりき。心ばかりの祝ひとして送來りし品は常々秘藏するもの丶一つなり。打添へたる手紙の長々しき中には、節々こもる情の溢出づるばかり、それにつけても其後の樣子を詳しく知らせてと、思へばこそ案じたる筆のあとは今に忘れず。綱子も又優しき心を籠めて、同じ思を細々と文に書はせぬ。嬉し羞かしかりし芳子の返事は、幾度か二人を喜ばせけむ、されど其時は過ぎぬ。

妻となりたる芳子の姿を、見たしと思ふ雪江の心は中々に止まらず、此度綱子の緣談につきて、上京すべき用事の出來たると其儘、心せはしく此時とはかり俄かの發足、それと前觸もなく清浦の家に着きて、姉の顏を見るが否や、芳に遇はせてと直ぐに言出し、談話は後にと言葉の半ばに立上り、少しは疲勞を休めてといふ姉をせき立て丶、綱も久し振にて、何れほどか遇ひたがつて居ればと早立出てかゝる容態、政尾(芳子の母)も人知れず心に媚ぶる嬉しさなるべし。

遙々と重きを厭はぬ手土産物の數々を、芳子は有難く受納めたる中に、良人にと態々心に懸けての贈物を見て、あゝ未だ顏をさへ知らぬ叔母樣までが、これほどにも思うて下さる良人、それには引かへてと徐ろに又思入りしが、涙を隱す笑顏作りて、良人も今に歸りましてから、何れほど喜ぶ事でござりましやうと、いふも苦しき胸の中なり。

雪江は珍らしげに兎見角見、肝向ふまゝに一人して談話を持切りぬ。多く問はれて多く答ふる芳子の、口には忍びあへぬ空事をも、左もあるべしと言はぬばかり打笑む叔母の顏を見ては、假にも眞實は打明けられず。問はるゝは多く良人の事、人と爲りの一々日頃の身持、芳子への仕向、餘所にての振舞、癖は道樂はと事細かなるを、庇保ふを誰が惡しとはいふ、我は此家の妻なるにと、よからぬ事は露ほども聞かさねば、雪江は尙笑傾けて聞惚るゝばかり、其方はそれほど樂な身躰か、かねてより度々の音信に、必ず左樣ぞとは思ひながらも、逢ふて聞かぬ中は何とやら心にかゝりしに、此今日の嬉しさはと、政尾の方へ振向きて、改めて姉樣にお喜びを申しまする。私もこれほどの喜ばしき事はなし

と言ひつゝ又も綱子を顧み、其方も追つけ嫁といはるゝ身なり。芳にあやかれ。芳に見習へ。芳や、妻といふもの〻心得を、よく了解むやうに教へて遣つてたもれと言へば、綱子は羞かしげに打笑みしが、流石に俯向きて答もなし。芳子は竊と母を見れば、同じ心かほく／＼したる機嫌よさ。何をも御存じなくてと、裏悲しくもなりかゝるをぢッと堪へて菓子を薦むるに紛らすも辛し。幾度繰返しても芳は幸福なり。これを苦勞なる姑はなし。鬼の手足の小姑はなし、其日此後に足らぬ處もなくて、良人は又何處までもよしとは、誂へてもかゝる家があるべきか。あだに思うては濟みませぬぞ。樂に居たれて我儘、すな。いよ／＼優しくさるゝほど、尚更大事にかけねばならぬぞと言聞かさるゝ芳子の、唯と答ふる言葉は如何なる思を過ぎて出けむ。知らぬ雪江は又重ねて、それから見れば此綱の今度事によれば極まるといふ先は、舅姑二人に小姑が三人、良人が是非にと望まれてなれど、綱の骨折が今から見えすいて、思ふほど尙いとほしくてならぬ。其方は寔に樂な月日の下に生れたる身なり。かくても我は羨まれる身か。それは叔母様にのみ限らざるべし。餘所にも

其様に思はれてか。これが世の態かも知れず、さてもとばかり、打つけに言ひあへぬ芳子の傍より、政尾は執成し顔に口を開きて、姑小姑と強ちにはいへど、一がいに何處も彼處も同じとは限らず、案じるほどの張合もぬけて呆れるほど心よき人々かも知れず、如才なく念入れる其方なれば、いづれ其事もよく知れ渡るべし。よし又少しの申分は、ありても良人が優れて餘所に立越えたる人なれば、それに枉げてといふ事もありと言へば芳子は其後につきて、かう申すも差出がましけれど、何よりかより大事なは、良人と頼む人の心、それさへ最う慥かなれば不足をいふ處はござりませぬ。女は男ほど氣強いものではなし、此家にも姑などのお出なされたらば、お話相手にもなつて下されて、さぞかし賑かに、面白い事もあらうなどゝ、良人の留守に一人勝の折は、淋しいまゝに種々思ひまする。

綱子様も遠からぬ中に、餘所へお嫁きなさるゝとか。改めていふもをかしけれど必ずともに、うかとした心でお出なさるな。嫁入といふものは、樂しいやうな悲しいものでござりまする。一旦妻と定まつてからは、取つて返しはな

りませぬ。これから一生の幸福ともなり、これから一生の不幸ともなる、大事な、大事な瀨戶際といふことを、よく／＼身にしめてお出なさらねばなりませぬ。いふなり次第人任せに生涯を縛るやうな事を決してなさるな。表面は成程目覺ましく、美しく、探がしても瑕のなければとて假にも裏を見定めず、唯とは必ずお言ひなさるな。其中にも取分けて、容姿をのみ悅ぶやうな移氣な人に努々お添ひなさるな。親々の膝元にて、御覽なされた世間とは、踏んで見れば一々思の外な事ばかり、笑ふてのみ暮されるものと、身分から推してお極めなさるやうな氣では、中々人の中へは立交られませぬ。憂いめ辛いめ悲しいめ、其樣な事にも折にふれては遇はねばならぬ、眞實の淚といふものは芝居を見て落すやうなものとは、決して一つにはなりませぬぞえ。

おほゝゝゝ、まあ私にも其樣な事があつたか何ぞのやうに……けれども綱子樣、必ず聞捨てにして下さるな。私の知合の中にも、種々とお笑止な方がありまする。お氣をつけねばなりませぬ。と日頃に似氣なき口吻、年上の二人は耳を傾けて居たりしが、芳もいつの間にか大人になつて、其樣な事をいふや

うになつたか。こはいものと雪江は微笑みながら、分つたかえと綱子に向へば、綱子はいとゞ極まりわるげに、唯、能くは分りましたれど、最う其樣なお話はお止しなされ。お嫁なんぞ私は嫌といふ。其方はまだ孩兒と打笑ふ雪江、芳子は半ば獨語のやうに、其孩兒の時の方が、いくら樂しいか知れませぬ。綱子樣、急いでお嫁になるには及びませぬ。自身に慥かな分別のつくまでは、必ず早まつて下さるなと顏を打守るに、此子はまあ何をいふ。一日も早く身の固まるを、喜んでとも〳〵勸めねばならぬにと、政尾は早口の怪訝顏、芳子は眼を背けて暫くは返事もなし。

（十二）中

同じくは今日婿殿にも遇うてと、其中にも雪江の心にかけて待詫びしが、談話は漸く盡きても遂に歸らず、さりとは何に手間取られてかと、一方ならず望を失ひながらも流石に微笑みて、とはいへ今日に限つてといふ事ではなし、折は未だ〳〵いくらも有るに、重ねて〳〵と心よく暇乞すれど、政尾は何うやら氣遣はしげに、それとなく芳子の顏を見て、此頃此家へ來る度每、賢次殿は言合したやうにお留守なが、いつも其樣に外出勝かと、聞かれて芳子ははッとしながら、いゑ〳〵其樣な事はござりませぬ。いつも折の惡い時ばかりに、母樣はお出なされまする。良人も後で歸りましてから、左樣かと申して其度每に殘念がつて居りまするといへば、それならばよいけれど斯うも不思議に出違ふものか、何といふ異しな廻合、さらば今日もよろしく言うてたもれと機嫌を直して立らかゝる罪なさ。これも芳子の人知れぬ涙なるべし。

明日は其處此處、久し振の見物に、其方も是非つきあうてと、雪江は言殘して立

別れぬ。綱子は後に付添ひながら、今度は唯二人きりにて、いろ〳〵お談話をしたき事のそれは〳〵山ほどもあれば、近い中に、屹度々々と呼きて出でぬ。あとは又一しほに淋しく、思込めば徐ろに悲しくなりしが、されどこれから暫時の間は、叔母樣の此地にお出の中は、此侘びしさも少しは忘らるゝべし。吁、打絶えて世間へも出ず。明日もし行くならば、我も久々の見物なり。

日は稍傾きて軒の樋を日影の横に差す頃、ゆくりなく賢次は歸來りぬ。惜しい事を致しました。最う少しの中留めて置きましたらば、皆も何れほどか喜びましたらうに、實はいつぞやお話し申した國許の叔母と從妹が、母と連立つて先程尋ねて參りましてね、貴郎にもお目にかゝりたいとて、長い間お歸りを待つて居りました。これは詰らぬものながら、貴郎へと持つて參りました手土産でござります。それから母もくれ〴〵よろしくと申して歸りました。眞箇に未だ半時間とも經ちませぬに、僅ばかりの違ひでと、取交ぜて莞爾やかなる風情を見するも、良人の心を柔らげんとて怨を忍ぶも流石妻なり。躰のよい事をいふなと、冒頭に撲消したる賢次の言葉、留守に人を寄せて勝手

に騒ぎちらして、何だ、待つて居たも無いものだ、其様な持つて付けた文句よりは、平つたく何もかも露出しにして、度々家を明けて下さい、さうすれば留守の洗濯に種々な事して保養しますと打付に言つた方が却つて腹が立たぬ。萬事に我をだしにして、くろめやうとするが癪に障る、其樣な手で乘せられる我と思ふか。此鹽梅では陰で何をして居るかも知れず、手前のやうな奴に油斷がなるものかと、嚙付くばかりの毒々しさ。芳子は呆果てゝ言葉もなかりしが、餘りといへば餘りな御無理、私が何うして其樣なと、言ひさす中にも早堰來る涙、聲を途切らせしがそれなり打伏して、仰有りやうにも程がございまする。私は根が愚かなれば何がお氣に障りしやら知らねど、心に濟まぬ事は假にもした覺えはございませぬ。お留守に人を寄せてとは有られもない。明日にも叔母が參りましたらば、直々にお聞きなされて下さりませ。思ひも寄らぬ御無理ばかりは、それは私をいぢめると申すものでございまする。

窘める？　手前が窘められるやうな風かい。無理とは何だ。何が無理だ。泣いて威せば直ぐに折れると思ふか。人前ばかりの涙が何の役に立つ、見た

くでもない泣面をといよく出づる無法、咾僞りに此涙が出ましやうか。其樣に胴慾な、酷たらしい事を聞かせて下さりまするな。餘り餘り、餘りなお情ないと、芳子は唯泣伏すばかり。いつまで同じ事をするのだ。泣くより外の藝無し猿、切無思案の涙三昧は、幾度も見飽きて面白くもなし。最些つと氣の利いた所作でもしろ。全體手前は我の出歩くのを不足に思つて其樣な勝手な事をするのであらうが、誰がすき好んで出歩きをする。もとはと言へば皆手前の不行屆からだ。手前が其樣に楯をついて、我に當る氣ならばそれでよし、爲たい放題に何でも爲ろ。我にも其上の了簡がある。不貞腐れめ。手前のやうな奴は打捨つて置けば、留守にはいまに藝人でも呼集めて鐘太鼓で騷ぎ立たるであらう。不埒極まつた事とさんぐの不興、芳子は尙も聞くに堪へず、沸きに沸返る涙の隙より、其樣な事を致す私か私でありませぬか、常々よく御覽なされて、何もかも御存じてありましやうに、貴郞は私を何と思召してか。

外に何とも思ふものか。飛んだ脊負込みをしたと思ふばかりだ。我なれば

こそ今まで添つて居ても遣る。ぶッきらぼうな働きのない、有つても無くても同じとは手前の事、口數をいふだけが置物よりは厄介だ。これ、腹を押せば泣く位ゐの事は、麥藁細工の蛙でも爲るぞ。喰つて寢るばかりが能ならば、猫を飼た方がまだしも優しだ。かうして居るほどいよ〳〵嫌になる。目障だ。片隅へ引込んで香箱でも作つて居ろ。

それは最う私は足らはぬもの。それならば何故如彼、如此とお敎へなされては下さりませぬ。私は他人ではござりませぬ。

えゝ、つべこべと喧ましい、此家の女房で候ふと、恩に着せて振廻されて合ふものか。何、何が何うしたと、手前が惡い？　惡いのは知れた事だ、ナニけれども？　けれども何だ。えゝ默れ、まだ〳〵ぐづ〳〵言ふか。默れ、默れ、默れ、えゝ默り居らう。

矢庭に立つて我が居間へ、隔ての襖の八つ當、外にはわッと泣伏す芳子、いひたき事の千萬言も、淚の外に知るものもなし、袖も袂も雨霰哀れなり。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

腫物に觸る如き一夜も過ぎて、明くれば日曜の空美しく、冬木立の珍しくも今年は幾度かの返り咲、淋しき梢にちらほら見ゆる薄紅も、往還はさぞと車の音も賑はしく覺ゆる日和なれど、思はしからぬ二人が間にはそれも餘所々々しく、朝餉の膳も言葉少なに、濟まぬ顏してむつかしく仕舞へば、賢次は居間へと引籠りしが、稍ありて芳！　と呼ぶ聲す。打絶えて名を呼ばれたる事もなき芳子の耳にはそれも嬉しく走行きて、何の御用と手を支ふれば、賢次は一通の手紙を出して、淸浦殿に用があれば是を持て直ぐに行け。御返事には及ばぬ。お渡し申せば夫でよしとの事。見れば何うやら機嫌も直りたる樣子に、同く生家へ行くならば、昨日叔母樣の仰有りし事もあり、旁々お願ひ申して見るべきかと、是非にと誘はれたる由を語りて、彼處へ行けは又强ひられるかも知れませぬ。一所に參つても宜しうござりまするか。叔母も其中に歸る身なれば、一度は何處ぞへと存じますれど、それも貴郎の御都合次第で、何うなりともと許容を乞へば其方の望むまゝにするがよし、最早此方には用もなければとの挨拶、それならば參つても宜しうござりまするか、有難うござりまするとを、部

屋へ歸つて仕度もそこ〳〵絶えて餘所をも水淺黄の羽織を脱いで今日此頃、いとゞ深草野とやなる鶉小紋の曠小袖、いつか願ひの糸織の大名筋も一筋のお納戸繻珍の四季模樣、陰と日向の花はあるとも、つれなき風に縮緬の、襦袢は嫌と取除けて、斯う紅羽二重一樂織、半襟かけてたのむの雁の縫も嬉しやこれこそと、つい後れ毛を取上げて、それなら行つて參りまする。車の支度もそこはかと漸々にして往還へ出れば、往來ふ人々も物珍らしく、いつしか變りたる流行唄に思はず耳を傾くるも、裏を見れば憫む人もあるべし。

常盤木の影深く屋の棟の朝日に輝きて、一際目覺ましき生家はいつ見ても懷しさのと、中の口より上りかけて、直に母親の許へ行けば、久しく顏を合さゞりし里が珍らしくも其處に來合はせぬ。此頃生れしと聞きたる男の子を抱きて、御無沙汰の御詫やらお祝物のお禮やら、一つは此子も御覽に入れたさに、漸つと今日參じました。これからお屋敷へも上りましやうと存じました處、其後は手前にかまけまして、つい御機嫌をも伺ひませず、此間は又お心にかけられまして、種々と有難う存しまするど、姿は少し痩せて見ゆれど、口まめに平素

の元氣なり。芳子も懷かしげに挨拶して、母樣、今日は良人の用で參りました。父樣は何方にと聞けば、今お客樣で座敷にといふ。それならば暫くお待ち申すべし。そして叔母樣は。綱子樣は。

雪江は今南の間で綱も一所に髮を結つて居る。今日は御馳走に早くから風呂を立てたれば、其方もざッと這入りやらぬか。それは左樣と、其方は今日雪江と一所に行くかと聞く。唯、よいとお許容が出ましたほどに、お伴のつもりで支度をして參りました。里や、其方も別に用がなければ、叔母樣が御見物のお附合をせぬか。久し振にて其處等を一所に歩かうではないか。

有難うござりまする。お邪魔にさへなりませねば、それは最う願つたり叶つたりでござりまする。あゝ貴女樣のお供を致しましたは此お正月に柳島へ參りましたのが最尾でござりまする。早いものではござりませぬか。最う此樣なものを抱いて參るやうになりました。

眞箇に見るほど容貌のよい兒、私にも一寸抱かせてと、芳子は受取り、無器用に抱上げながら、馴れぬ中は何とやら恐いもの。抱手が窮屈なか、あれむづかし

い顔をして、おゝ、誰がよく／＼と綾なしつゝ、暫くぢッと打見やりしが。此様なものが出来て其方は嘸可愛からう。あゝ、思へば其方が羨ましい。

いゝえ未だ今の中は、手が掛かゞばかりで仕様がありませぬ。されど是ばかりは、貴女様も眞箇にお働きのない。順を申せば貴女様の方が、先に可愛いものをお拵へ遊ばして、これ見よがしにお差付けなさる筈でござりますに、何故私などにお負け遊ばしたと笑出せば里、其様な事を言はずに、些と手傳つて遣つてくれぬかと政尾の言葉、二人等しく笑出すに、芳子も流石に打笑みしが、それと知られぬ胸の中は、さりとも同じく笑傾けしか。

かゝる間に客も歸れば、芳子は直に父の許へ行きて、良人よりの手紙を差出しぬ。別段御返事には及びませぬとの事でござりましたと言付けられたるままを述べて、我身に關係らぬ用事と思へば、それなり母の方へ引返さんとしぬ。父は口の内にて讀下せしが、思はず振仰ぎて芳子を屹と見、立出でかゝるを待てとばかり、芳其處に直れといふ。

これは何だと突付けられたる手紙、事の意外に驚きながら、何事と急がはしく

差窺けば、芳は心に叶はぬ事あれば、當分の中お預け申す。手道具其ほかの物は、あとより悉皆お屆け申すとの書面、えッ！これは何でござりまする。何だとは此方でいふ事、譯を言へ、譯をと烈しき父の言葉に、漸く我に返りし芳子、胸は張裂く口はさかれず、衝來る涙の瀧津瀬の中に亂れてわッと一聲、絶入るばかり泣倒るれば、驚く母親、里も後より目を丸くして駈來るに、芳子は何とあるにもあられず涙に堰かるゝ聲振絞つて、其樣な事をされる覺えはござりませぬ。何を咎に此樣な……、私は歸りまする。逢つて聞かねば此胸が濟みませぬ。何の過失何の落度、さら〱覺えはござりませぬ。此文言は何たる事と、いふ言葉さへ半ばゝ途切れ半ば狂つて駈出さんとす。これ待て、醉狂で此樣な手紙がよこされるものでは無いぞ。此失躰の原因は何だ。氣を落付けて始終を話せ。言ふ事があらば存分言つて遣る。話せ。話せと膝を進むる父親、私は何も存じませぬ。これから直に參りまする。こんな事がござりましやうか。父樣お願ひでござりまする、どうぞ遣つて下さりませもおろおろとして又立上る。待て、これ待てといふに待たぬか。

折しも髪を結終りたる雪江と綱子、物騒がしきは只事ならじと等しく此處へ入來りしが、此體見るよりあッとばかり、左右せはしく問懸かる事の起因、三方四方せつなき思の、せぐり苦しき芳子の胸には、あゝ叔母樣にも綱子樣にも寔に合はす顔もござりませぬ。私は口惜しうござりまする。酷い辛い悲しい目に遇ひましたと、いろ〳〵心の有丈も涙に言はせて聲も得立てず、お氣の毒とも、お笑止とも、里はうろ〳〵狼狽つくばかり、あゝ彼の烏は何といふ嫌な鳴音ぞ。

（十一）下

人行き車走り、犬鳴き猫眠る今此時、高間の家に差向ひの二人あり。何處かで酒、事の歸りかあらぬか、一人は居住居も漂ふ如く、横に手をつきて僅かに身を支へぬ。

眞實に奥樣を何うなされたのと、流石少しは氣遣はしげに、身を進むるはお村なり。何うするものか御覧の如くだ。荷物も何もたゝき返した。二度とは足を踏込まさぬ。先刻媒妁の禿頭め、しかつべらしく遣つて來たが、一も二もなく追返した。親元預けの重ねておさらば。下らない彼樣なものに、いつまで辛抱して居られるものぞ。これで其方も言分はあるまい。あゝ、土で丸めた姉樣のお傅役は、懲り〳〵と賢次は煙管を把る。

聞けばお村も腹の中には氣の毒とも思ひぬ。芳子は如何なる人か知らねど、去られる譯のあつて去られたとは思はれねば、さながら古足袋を捨たる如く、見向きもやらぬ賢次のさまを、極めて道理とは點頭かれず。酷い事をと他人

奥　様

並よりはいくらか耳にも痛く、これも私の故ではないかと、幽かに一時は胸に持ちしが、されども先はよい御身分、假令此家を出て行けばとて、又よい處へ嫁かれる身躰、言つて見れば僅かの損なり。此方は其樣に自由な掛替としてもなし、地道で行かばかゝる家へは來られぬ身の上、脊に腹は替へられず。あゝ脊に腹は替へられず。去られて呉れるも一つの功德と、あとは又氣にも留めず、其身の幸福に笑掛けて、貴郎も餘程情なしな方、此樣な事にして仕舞はずともと、口先ばかり善兒なり。

其情なしには誰がした。恩に着せて心中立でもないが、思ふ方には何の道引かれる。其樣に言ふならば、後へ直るは嫌かと微笑む。嫌だと誰が何時いひました。けれども少し口籠れば、けれども何だと追掛調子、お村は物思ひげに身をくねらせて、濟まないやうですねえ、と御挨拶かな。

それならば强てとは賴むまじ。何處をか探して拾つて來やうわ。ちと新出來を稼がうかといへば、爪先ばかりでも手を出して御覧なされ。只置くものかと早口にいふ。藁の人形かと冷かし掛かるを、そんな事で濟みますものか。

覺えてお出でなされ。生かしては置きませぬからと笑ひ顔、何の簪で十番斬が出來ると思ふか。小癪なと落し付くれば、其氣でいつまでもお出なされ。怨念といふものがありまする。眞實に、取殺すわと態とらしきあどけなさ。はヽヽヽ、恨み重なる賢次殿か。飛んだ淨瑠璃が出來さうだ。いやはや恐ろしい事、さうなつたらば胡麻をすつて、さしづめ社でも建てるとしやう。お村稻荷か。はヽヽヽと重ねて笑へば、たんとまあお茶になさるがよし。貴郎は眞實に賴もしくない。

それだから箱入りにして、鍵は腰附にして置くがよしと。賢次は尚もそヽり出す。箱の中でも虫はつきまする。貴郎のやうなお方には百貫目の樟腦でも追付きませぬ。飽きるのを樂みにして居るやうな貴郎に、油斷も隙もなりますものか、今度奥樣のお話とても、人事とばかり聞いて居ると、見る中に此方のお倉へ、飛火が來るかも知れませぬ。何うでも斯うでも取殺します。覺悟をなさいと色を含む。

それほど取殺したい執念ならば、寧そこれからの浮氣止めに、今こヽで殺して

は何うだと言ふ。其樣に平氣でお出なさるな。殺さうと思へば直にでも出來ない事がありますものか。其代り宥してなどと、弱い音を決してお吐きなさるな。前からお斷り申して置ます。さあ、あやまりましたかと婀娜ながら威丈高、誰が何のあやまるものか。面白い、何うして殺すと乘出せば、屹度あやまると仰有なると念押す、言はぬ、決して言はぬ。さあ何うすると詰寄れば、斯うします。擽つて殺しますと突入る腋の下、此奴は喰つた。參つた〱と支ふる賢次、あゝお村は何とて今日は斯くあどけなき事のみをするぞ。

暫くして又愛嬌作りて貴郎、もし貴郎、貴郎と言ふのにうッかりしてお出なさる。眞實に聞いて下さいと言ふのに、眞劍ですよと聲を強むれば、其方は眞劍でも此方はぢやん拳だと笑ふ。其樣な事を仰有らずにさと眉を顰めて見すれば、よし、さらば承はらうかと膝を四角にす。あのねえ、付かぬ事を言ふやうですがね、一躰男といふものは、女の思ふほど何故思つてくれないのでしやう。そしてまあ無理ばかり言つて、其癖いふなり次第になれば、意久地なしだと蔑して仕舞ふし、溫柔しくすれば氣が利かないと言ふし、少し口を出せば猪口才

なと叱付ける。そんな風に邪慳で居て、おまけに氣が多くつて目移りばかりして居るの。何故左樣てしやうと顏を見上ぐれば、それは原が生身だもの、物指てさしたやうに行くものかと事もなげの返事、それ其樣の事を態々お言ひなさる。左樣して此身に心配させて、面白がつてお遊びなさる。眞實に憎らしいと少しも憎からぬ顏、又取殺しは御免だぞと賢次は弄るばかり、最う貴郎には身に染みたお話はしませぬ。癖になるから此方も邪慳になつて、無暗に高飛車をきめましやうか。さうすれば逐出される。おや〳〵〳〵と態と打笑ひながら、矢張何うしても勝たれませぬと、其眼は活きて働く。

それお茶がお膝へこほれました。よいわではありませぬ。手で拂ふとは何といふ事、餘計な處まで汚點を拵へて仕樣がありませぬね。貴郎に美服を着せるのは冗な事と眞面目なる口吻、何だ最う女房らしく世帶染みた事を、餘り早いわと賢次は高笑、おほゝゝゝ、眞箇にもし左樣なつたらば、これからは毎日のやうに、荷厄介にして妬きますが、ようございますかと嬉しげに言へば、それなら此方も根かぎりに、叱言を並べるがよいかと言ふ。それも何だか樂みの

やうな、なんなら今から飯事で、稽古をしましやうかと顔を見合せて莞爾、例の物いふ眼なり。

かくの如くにして芳子は終に離縁となりぬ。青筋見せたる母より先に、烈火の如く狂立ちたるは雪江なり。世界に彼人ばかりが男かと、綱子の事も捨置きて血眼になれば忽ち見付出したる目覺ましき嫁入先嫁け、嫁つて見事に顔を見返してやれといきり立ちぬ。芳子は目を拭ひながら、私は賢次樣の外に、良人は持ちませぬ、と答へて又泣きぬ。政尾は聞いて更に又泣きぬ。

淸浦の家に行く人は、半窓の朝孤燈の宵、悄然として坐する寡婦を見るべし。彼女は絕えて人に近寄らず、兩親の前へ出づるにも、心苦しくてあるにあられぬ態なり。幾夜淋しき閨の中に、忍音の悲しきを聞きしものは、あはれ枕ばかりなるべし。美しかりし顔も艶なく得堪へぬまでに身は細りて、よろめき立てる姿の心元なけなる時も來つ。藥師は近しく音訪るゝやうになりぬ。此頃は病身になりましてと、人に向つていふ母の聲尻は、埋もれ果てたる糸に絡

れて濕みたる響を傳へぬ。

かくして日は來り月は去りぬ。賢次を罵る口々は家内に絶えねど、芳子はただ庇ふのみなりき。天に聲あり其聲は聞くべからず。地に人あり其人は見るべからず。芳子は獨り悵然として物を思へり。

星影寒く雲暗く夜は偏へにいつまでも長し。芳子は賢次の再び娶れるを聞きぬ。風は霜を打つて氷は流を閉ぢんとす。芳子の胸には墳墓あり。あゝ長安輕薄の兒。芳子は今も尚賢次を慕へり。

うつせ貝

上

萑は鎌の刃に苅こぼせども、戀草の月代いつの世にか果つべき。何の蒜の上の伽羅、骸の添伏嬉しからずと悟りながら鴫立つあとの夕暮に、獨身のつくづくと淋びしき事あり。呉竹の根岸の里に桂木華舟といふ男、丹青を其身の技として心安く世を渡りけるが、今年三十にして未だ定まれるものを持たず、親もなく兄弟もなき身の浮世を氣まゝにしなし、内弟子一人に何事も埒明けさして、朝寢の床の前に煙草盆の火いつか灰となる世帶。鉢の木は水をやる事を忘れて、松に一歳の色もなく、着物の綻びは我慢のならぬ迄差置いて、餘所目の見苦しきを構はず。無頓着は大家の常、自墮落は男の持前と、塵を忘年の友として、畫堂は十疊の廣きも畫帖粉本に取亂れ自身の座蒲團をのけては、足を容るべき隙間もなき中に寬々と胡坐かいて、繪筆に脣を染めながら指先を

働かし、明石の月も鹽竈の煙も、居ながらにして知る名所はこれなり。朝夕それを樂みにして外に望みもなかりけるが、松の心にも自ら春風わたりて、いつぞやの寐覺に不圖身の末を考ふる事あり。我もかくて世に立つ上は、老を契るものなくては叶はず。一人貰受けなば、是迄の樣に手桶の底ぬけて、月も宿らぬ不仕末はあるまじ。さらば娶るべきか。こゝぞ大事、人生一代の關所うかと通過ごすべきにあらず。罷間違ッて飛んでもなきものに添當て、座敷の中もお高祖頭巾着せて、向ふ火鉢に顔を避けて坐わるは厭な事なり。娶るならば我望むほどの美女、先顔は面長に、色は白くして光澤あるべし。黑味勝の眼涼くして釣方に口傳あり。鼻眉口元これぞ桂木流三箇の大事なり。身内は花車にして骨節高からず。高慢ならず輕卒ならず。氣立溫柔にして其中に氣のきゝたる取廻し。此外別に望む所なし。地位は如何なるものにてもよし。資産は我願にあらず。なるならば丸裸の嫁御寮、婚禮の日に莚の衾して今の世の木下藤吉郎と世間を笑はしてやるべしと、此一念思立ッたるは二年前の如月上旬、それより眼を鷹の如くにして廣く世間を見渡せども、長し短

かし丈が揃はぬ裏表いづれ我着物と肌に着べきものもなし。たま〳〵それかと見れば早く餘所の庭の内に眺められて、折る事も高根の花や。さてもさても世になきものは比久尼の差櫛と尋ぬる美人、我國の人員あらましは四千萬の其半ばを女性として、此多き中に我望むものはなきか。そも〳〵上代に小町あツて、今の世に板額ばかりといふ筈はなし。縱令なきに極めし上も我一念の此まゝ止むべきにあらず。我一代の間は、魂を蝶にして、あるかぎりの花の色を尋ぬべしと心に誓文さら〳〵と男の胸固く、其後露霜たのみなく置き變りて、月日は旅人の休みなく、二年は繪具解く間になくなりて、今月只今いまだに獨身の桂木華舟。「せくなせきやるな浮世は車」、その辛棒の續くかぎりはと、繪卷物を卷きかけて、今日も又暮れるさうな。

折しもは四月のはじめ、先師の紀念會として兩國まで行く事あり。日の影南の窓に廻る頃急がはしく家を立出しが、歸途は少し酒に亂れて、足つきをかしく、上野の廣小路より、山の邊を便りて池の方に近寄れば、春風やはらかに醉顏を掠めて心よさ得も云はれず。東叡山を見れば、雲か雪か一面心のまゝに咲

きかけて見殘す春もなし。今日來ずば明日は雪とぞいふ内、浮氣は風にもたせ身の花片、ちら〳〵目の前に散來れば、何處の誰樣の眺めを避けて、此處へは散來る花ぞと笑ひながら、とてもの事に木の下蔭に立寄りて、優しき主人殿に一枝の眺めを惜むべしと、花ある方に登り行けば、入相の鐘早くも人を散らして、山内は思ひしよりも靜かなり。夕日枝を爭ひ、花は素肌の姿自慢、これを見捨て歸る奴は燒團子の串にさゝれて死んだがよしと、獨りつぶやきながら只ある床几に腰掛けて、命々〳〵と浮かれけるに、しほらしや暮れ行く春を惜みていまだに花の本を去りあへぬ一群の人あり。いづれも年若の女性、世には頼もしき方もあるかな。天晴今日の情知りとつく〴〵見れば、其中に一人これは〳〵、矢がすりの小袖に蝦夷織の帶しめたる息女、年來思ひかけたる雛形に少しも變る事なし。尚しげ〳〵と見るほど割符を合す面ざし恰好。暫くは眼もくらみて心身を飛去り、花ははしたなく餘所になりて、一念凝ッたる化石の如く、滿山狹からねど其方のよりの姿はなかりしが、思は限なくして時に定めあり。程なく塒あらそふ鳥の聲に驚きて立去る人々、其中にも息女は足後

れて、尚殘惜しげに梢を見返り勝なるをうれしく、ならばその梢に登りたき願ひ、それも暫しありて後影次第に遠くなれば、此まゝの別れ一しほに悲しく、身はいつか床几を離れて現に跡を慕ふて行くに石段を下りて、其處に待たせ置きし車に乘らるゝが最期、黑鴨は韋駄天の如く駈出せば、華舟翼なき身の跡追ふこともならず、車の紋を花菱とばかり覺えて、後影ぢッと見詰むれば、姿は車のうちに埋もれて、紀念は一點文金の島田髷、それもまたゝく中に柳の蔭に隱れて、殘る砂烟を散すは、えゝ見たくでもなき鐵道馬車！森の色夜を急ぎ、闇は黑幕のうちより、星の影は世界にさしたる光なくて、花は一簇の綿を浮かすほどになれば、茶店の老婆も最期の足音を極めて、葭簀卷きかけながら、賣れ殘りの燒團子を最惜しがる時、笑止や桂木華舟、山は我一人の闇となるも知らず。五官に働くとをなくして、悄然として立ッたりしが、程近き時の鐘空蟬の耳を驚かして我に歸れば、誰に見らるゝともなけれど、流石に今迄の仕打何とやら耻かしく、そこ〳〵に山を下りて我家へ急ぎしが、戀は四面の暗きより覆ひかかりて、何處とはなけれど身に添ふ面影、次第に踏み行く土を忘れて、うつゝの

如く我宿に歸れば、出迎に立出づる弟子の華山、彼樣もし我妻と定まらば、此の薄黑き華山の首は、先程見たりし笑顏にかはりて、お歸りませの聲も細く淸く、さぞや品よかるべしと、一念唯それに亂れて、華山が云ひし事も耳に入らず。

言葉はなくして居間の眞中にどッかと身を投ぐれば、灯びなき闇はあやなし。

花の香小窓より吹入れて、暖みし春の風に心ふら〳〵と搖ぎ、面影目の前にありありと美くしき、時華山「らんぷ」を心得顏に持ッて這入るに、えゝ入りもせぬにと思はず口走れば、華山けゞんな顏して入りませぬかといふ。いや〳〵その事ではなしと餘の事に紛らせしが、まことや戀は實をくらまして月花を黑くし、物の音の調を狂はして耳に怪しき響あり。先程垣間見の時よりの我は、心に日頃の覺悟離れて、あるよりは一しほの白痴となりたり。何の名も知ぬ――素性も知れぬ――況して心樣も覺束なき女を、今の思は我ながら氣の知れぬ話。あゝ厄體もなし。此邪念拂ふに若かずと、つら〳〵と思切りて、最愛の畫帖取出し、心をそれに移さんとせしが、戀は蓮の糸の幾條となく折口より繫がりて、いつとなく前の心となり、一念もや〳〵のうちに亂れて、魂の入物ひ

とつ、身の置所を忘れ、あるにもあられず。畫帖を投出して華山床取れと燈火吹消し、夜着の中に潜りて枕は棧橋——賴むは夢の中のお言葉。逢はぬむかしとは誰がいひそめし言の葉ぞ。物思ふ身となりては、前後不覺の心狂はしく、もどかしく、歯痒く、佗しく、あとは涙を足して此思ひ我と我身で手のつけられぬ苦しさ、古へより戀に惱みし人皆かゝる憂目に遇ひしか。忘れては夢かとぞ思ふ、その思の間も跡より責め來るは戀。如何にもして彼の息女の名所人と爲りを知りたく、それより思はぬ花に浮かれ人となりて、人の出盛る向島飛鳥山、上野の舊跡はもとより、足音の繁き所は見殘すかたもなく廻ぐりめぐれど、逢はぬは此道のならひか、早く半月を過せど悲しや似た人もなし。いつしか花も散りて青葉がくれに鳴く時鳥、我も血を絞る思ひ盡じ。あまりに堪へかねて、せめては俤を坐右に眺め、逢ふまでの切なさをそれに忘るゝ事もと、燒筆をおッ取り、眼に深く刻み込みし御姿を繪絹のうちに寫し、羽箒に淸めて、丹精はこゝ一念絞込んで仕上にかゝれば、腕の鈍さよ、筆の拙さよ、あられもなき繪姿見るも厭なり。我はこれほどの下手かと愛想は癇癪に盡

さて一枚ずた〳〵に裂捨てぬ。それより筆を洗ひ心を洗ひ、身の一大事魂を籠めて又一枚に筆を染むるに、これも同じき虎の猫、いらだつ手の内に又眞二つになしぬ。三度目の油汗も墨黒々と塗消し、四度も仇となり、五度も氣に入らず。果は精神疲れ果てゝ、とても筆捨の美人と、横に倒伏してあとは夢となりしが、戀は繼矢のきびしく、又も心を取直して、畫いては捨て、畫いては裂き、合せて三十五枚は反古の山を築きぬ。此上もし成らずんば、繪筆を燒捨てゝ一生丹青を取るまじと心に誓ッての上、丁寧周密芥子粒ほどの一點にも滿身の血を濺いて、一面畫き終れば、出來たり〳〵。まざ〳〵と任すが如き繪姿、生氣凝成して今にも動き出んず有樣に、筆を握りしまゝ思はず躍上り、顏は喜びに溢れて心の在家を知らず。見るほどふるひつきたき花顏笑を含む目尻、睫の一筋だも繪は其まゝの鏡なり。現は早く拔けて華山を經師屋へ走らし、日ならず表裝見事に作らせ、これを座右の掛物として朝夕眺めを離さず、酒もこれに樂しみ茶もこれに浮かれ、逢瀬を願ふうちにも思ひの遣場出來て、聞えぬ耳に心を囁きて暮しぬ。此上の欲いつか燃立つ時あるべし。胸の烟心元なや。

中

同じ繪の道に無二の友とせし若菜芳村といふものあり、如月のはじめに大和廻りと志ざして、日夜行交ひの袂を分ちしが、只今無事歸京のよし門口より申入れて、旅の衣を脱ぎもあへず、芳野の土を踏みし靴そのまゝに此處へと語れば、華舟喜びて座敷に通し、先づは健固の大慶双方の口より走りてそれより猿澤の池春日神社、二月堂三月堂さては名譽の七堂伽藍、法隆寺の什物はこれこれと、古人の手柄を今にして目新らしく物語に時を移し、我留守中の都――殊に其方の上に耳の役に立つほどの話はなきかと云へば、華舟膝を進めて、あるとも〳〵。それは何?何と容易くいひ盡すべき話でなし。我は戀の奴となりたりといへば、芳村大笑ひして、其方が戀に?さては木晒柿の秋をも待たずして自ら落ちしなるべし。さすが選好み強き其方も待つにもどかしく、あらぬ花の色に心を入れたかといふ。華舟聞きもあへず心を見切賣にする我ならず。先方は誂通りの美女妻を持たば陰麗華と古人の手前も鼻高きものなり

と、少し反身になッていへば、芳村笑ひながら、こゝ聞所なり。先はじめより委しく話せよと、呑みかけし煙草をはたけば、華舟乘地になッて、上野に初見參のそも〳〵より、思ひを繪姿に洩らせし事まで、親しき交情とて少しも隱さず、胸の闇を打明けて話せば、深くも思込みしものかな。年頃の好誼はこゝ、我一臂の力を惜しむべき時にあらず。先其繪を見せよといふ。直に畫堂へ導き、最愛の繪姿、我が心をこめし處を見よと幅を指させば丹青の妙これはと驚き、目もあやにつく〴〵と眺めしが、振向いて、此姿に少しも違はぬかと聞く。問ふまでもなし。面ざしは三十五枚むだにせし程の骨折、微塵粟粒ほども似ぬ所はなし。衣裳も帶も見たまゝに餘計の筆を加へず。化粧の色合髮の亂れは、眞を失はじと無量の心を苦しめたりといふ。芳村座に歸りて暫く言葉なかりしが、まゝならぬを定めの戀、殊更緣は怪しき働きあり、人の力の及ぶ所でなし、其方これほどの思を重ねても、首尾よく手に入れる事ならずして、悲しくも添はれざる曉はいかにと聞けば、其上は詮なければ……。潔く諦むるや？何として、諦めのつくほどの淺き思にあらず、我戀は終初物此外に一人と心は運

ばじ。不幸にして願ひ叶はざれば、世に埋木の花を捨てゝ枯木のうちに此繪姿を抱き、これを一念執着のすがり所とすべし。それにしても未練は……といひかけしが、少しせはしく、あゝ不吉々々その思だも厭なり。成りもせぬ前によしなき事をと、獨言のやうにいふ。芳村その顔をしげ／＼見て居たりしが、世界は廣し、花は一つのみに限るべからず。これより上に立優る美色はいくらもあり。さりとは近頃狹い了簡といへば、華舟首を掉ッて、優劣といふは餘人の眼なり。我にはひとつ――これより外に魂を打込むべきものなし。そも／＼二年以前の如月より、世間にあるほどの花は見て／＼見ぬきたれど、一つとして褄先から上へ取上ぐべきものなかりしに、今や最期の眼にうつりしものはこれ、さればそれにつけての我思ひは、とても人間にあるほどの言葉で云ひ盡し得べきにあらず。優劣の兎角は何にてもあれ、惜まず濺ぎこみし我が一念、縱令ば仁王が黒鐵の挺でも動くべきや。世界は廣しと云はれたれど、我には此姿の外に世界なければ、餘所に芳野あるを知らず。松島あるを知らず。我には天下一品、其方の知る所でなしと語氣前よりは鋭し。芳村俯向

きたる顏を上げて、駿馬痴漢を載せて走るとか、世間は一筋繩のものならず。菜花に蝶を風が邪魔する類ひは、大方の世の定めなり。才子も痘痕面に滿足し、絕代の美人もつまらなき男に添當てゝ終ると、二足三足世に出なば直に眼に入ることとなり。世間皆思ふものを娶り得べきものならば、惡女は生涯身の置所なく、缺脣の男生れながらにして出家すべし。殊更先方は如何なる身の上とも知れぬものを、一圖に思込んで、もしそれが虫食ひの花ならば、其方は何とする心ぞといへば、華舟せき心になッて、其方は我望にけちをつけて、戀は叶はぬと云ふかの口吻。先程よりの言葉は我に氣落させんとの腹かと佶となれば、芳村ぢッと見て、さる了簡はなけれど、繪姿に少し心當りあればといふ。華舟思はず聲を上げて、さては彼樣を知ッてかと聞けば、芳村急に立上ッて、それは此處では云ふまじ。仔細は四日のうちに知らすべければ、兎角は胸を沈めて待つべし。これは思はぬ長居と、華舟が次の言葉をも待たず、足早に外へつ——い。

下

心も心ならず。待宵の苦を初めて知りて、立つもつらし、坐るもつらし。千里の道を牛の脊に任す心地して、もどかしさの千秋――浮世の三日をやう〳〵過せば、四日めの東雲に一通の手紙ひら〳〵と舞込みたり。としや遅しと封を解けば、

三日三晩少しも睡まずして、かきくらす思ひに乱れ申候。胸中廻はらぬ筆にものし候へど、とてもこれにて書盡したるには無之候へば、半の上は賢察を仰ぎ候。其方が命かけたる戀人は、誰あらふ兼て其話し申せし我が許嫁の妻藤にて候。先日繪姿をながめし時は、一日見るよりはッと致し候ひしが他人の空似といふ事もあり、もしや餘の人かとつく〳〵見れば見覺えある矢がすりの小袖、其上蝦夷織の帯は去ぬる日旅立の前に贈りしものに寸分違はず。さてはと心騒がれし時、はしなく眼に入るは挿込に打ッたる花菱の紋、これにて紛れなしと胸を衝き申候。人もあるべきに、知らぬ事とは

いへ我妻と定まりしものをと、世に無う情なく、それより其方の心をそれとなく承はり候ひしに、なみ〳〵の浮きたる戀にはあらで、淺からぬ心のまことを聞くほどつらく、悲しく、恨めしきに、其思ひを包む苦しさ。果は席にも堪へず逃歸り申候。あれほど迄に思込みしものを、もし我物と聞くならば、其時の落膽は何れほどゝ思へば、其方が無念の顔色目の前にあり〳〵として心苦しさ譬へん方もなし。同じくは藤に熨斗をつけてと、胸に問ひし事幾度か知れず。そも〳〵年久しく陳雷の心を盡して、もし骨肉と生れてもこれほどの交情はと語ひし其方に、身も命もさら〳〵惜しむべしとは思はねど、こればかりは如何にしても力及ばず候。此事も御耳に入れじとは存じ候が、藤は大恩ある都筑の娘にて、昨年都筑が死去る時にも、くれ〴〵藤に不便を加へてよとの遺言、殊更病床の前にて、内祝言の盃を交はし候得ば、此縁を切ッて其方に讓らん事は、幾度思返へしても成がたく、それのみならず申しては異なものなれど其方に何隱すべき。縁定まッてより此方、末は女夫の心深く、月に思ひ花に思ひ、年頃相馴れて、二の玉の緒を一つ戀にからみ

つけし結び目、火水の中にもこれは解かじと言葉をかはし、變るな變らじ一念五百生と語ひしものを、これを捨てんは凡夫の我にてはとても忍びがたし。今年は婚禮も遠からねば、其後にて旅の空に笠草鞋のたしなみは覺束なし。まだ獨身の心安き時に、かねて望みの大和廻りを果すべしと旅支度すれば、藤は我が爲に旅の衣裳を縫ひ、暫しの別れも心憂けれど、御身が願を妨ぐるはよしなしと、逢はぬうちの思出に二人立並んで寫眞を撮り、それを止めて我は天涯の客となりしが情の衣と寫眞は身を離さずして、孤天に東を望むうちにも、其方を思ひし外は皆藤の事なり。これほどの思を引裂かんとする心の中の苦しさは、其方に察せられぬ事はよもあるまじ。身の勝手には似たれども、此事よく〳〵賢慮を廻らされ度候。されど其方の心中を推測れば、此事知れし曉に其方の悲しみには、我餘所目に見流して怺へおほすべきにあらず。これは如何すべきと、立歸りし夜はそれが爲に寢られず。其方の戀は一目の結果、隣の人だも時によれば顏をも知らで過すならひもあるに、相知らざりし身を何とて藤を其方が居合す時上野には居たり

しかと、笑ふべき愚痴を獨言ちし時もあり。兎や角と心亂れて、二日の夜も腕を組みしまゝに明かし、三日の夜も同じく過ぎ、つく〴〵思へどもよき思案も無し。さりとて此事其方に知らさで過ごすべきにあらず。約束の日も來りぬ。手紙を認めかけたれど、其方が讀む時の心を思へば書續く氣力も出ず。此迄書くうちにも幾度筆を捨てしか知れず候。我今滿身の血を絞ッて其方に願ふ事あり。年來の舊誼を思ひ、しかも其交の膠漆も只ならざりしを思ひ、我をあはれと思はゞ、普天の下に都筑藤といふ娘ある事を忘れて、我妻に若菜藤あるを思ひ、是迄の戀を捨てゝ一人の妹を持ちたる心となり、美くしき交を新に結ばれん事、これ我一生の願なり。其方の胸苦しさ萬々推察致し候へども、憂身をやつす我に免じて、狂げて此義を叶へられ候へ。されど、其方若しこの爲に世を捨物となす如き事あらば、我も藤を娶りて安閑とそれを見過す事は成りがたし。一生獨身の境遇に身を果すべきなり。たゞ〳〵我心をあはれんでさらりと心を入れかへられ候へ。さらば我一身の力を盡して、藤に百段も立優りしものを必ず御手に入れて見

すべし。御所存如何にや。返事待入候。頓首。

四日午前三時認　　芳村

華舟盟兄

胸は塞がりて言葉なし。華舟手紙を握りつめしまゝ、前にひれ伏して居たりしが、起直りて、此戀忘れねばならぬかと、思はず絞り出せし一言、目を上ぐれば、莞爾々々として此方を見る繪姿、其笑顔が命を刻む。我を地獄へ落す氣かと突と立上り、兩手にばらりずんと引裂捨つれば、軸の端花瓶に當りて、插けてありし。牡丹の花は散り〴〵。

絃聲

(一)

痩細つて糸のやうになつた手を膝の上にかけて、涙の目にぢッと窺込んだ事ばかりが心に殘つて、芳樹は遂に最愛の妻を失つた。誰あらう都に琴の名手として遙かに儕輩を挺んでゝ居つた上に、美色の噂は料らぬ處にまでも高かつたのである。しかも其身と同じく都の住居を厭つて、結婚の式を擧げて間もなく、此一村に身の置處を求めて、其妻琴は此横笛に合はされて只二人の世の外に萬事を忘れて暮らして來たのである。其妻を芳樹は遂に墓の下に送らねばならぬやうになつた。

春の初め料らず風邪を引いたのがもとで、僅かの間に病は重つて妻の手足は次第に細く、夏の暑さに憔悴れた身體は猶更痩せて、秋風のそよりと立初めた頃より遂に寐返りもならぬ程になつてしまつた。醫師は素より手の盡せる

だけは盡したが、良人は殊に戀女房の女もならぬほどの介抱に心を碎いたが、あゝこれも天命であらう。

午後の九時は芳樹が妻を失つた時刻で、其頃になると有るに有られず、只野に出て草花を踏しだいて、其處等あたりを驅廻つて、一時なりとも此悲しさを忘れやうと勉める。勞れゝば其を幸に閨に入つて寐るといふよりは倒れてしまふ。醫師は少からず心配して切りに其不可を說いた。芳樹は其言葉に點頭かねではないが、悲歎の涙は道理もなく止まらぬので、果は醫師の言葉をさへ、此悲みは妻を失つだ人でなくば到底分らぬ、彼はそれを知らずに說くのだと無理に理窟を付けて、なか〳〵に煩さくなる。聞くまいとする。歸る途すがらの醫師の歎息、其折は芳樹が泣いて居るのである。

或日例の思ひに堪へなくなつて、又も表へ飛出さうとした。折節秋雨はしめやかに降つて、外は將に暮れんとして居る。餘りの事に雇婆は其袖を引止めた。氣はたゞ前へあせつて居るので、振返りもせず其を拂はうとする。

「あれ御覽なさいまし。彼樣に降つて居りますのに。」

と言はれて見れば成程今朝からの雨で、餘りの事と氣が付くと同時に、力のない吐息と共に其處へ腰を下してしまつた。

「勘、何時だ。」

「はい、最う七時すぎで御座いましやう。まア何う遊ばしたので御座います。あんまり氣をお遣ひ遊ばすとお毒でございますよ。」

「うむ、然し何うも堪らんのでなア。俺は何うかしたのか知らん。毎晩まるで寢ないからかも知れんが。」

と絕えず俯向いて居た。是は妻を失つてからの癖で、昔はかういふ事はなかつたのである。お勘は傍に寄つて、

「お寢ないので御座いますか。」

「うむ寢られんのだ。寢ると夢を見るからなア。」

「それがお惡うございます。其樣にお考へ遊ばしたつて奧樣は。」

と言掛けたが、また思を增させる種と口を噤んでしまつた。芳樹は力のない吐息を洩して、

「やつぱり其が可かんのだらう。けれども忘れられんよ」俺と玉枝とは通常の夫婦とは譯が違ふ。よし通常な仲でも悲しくない事は無論ない。お前に言ふたとて分るまいが、鬱霽しだ、聞いてくれ。玉枝はもと身分あるもの丶娘で、立派に世の中に立つて居られるのだ。都の眞中に立派な淑女として立つて行かれる身體だ。殊に琴は都でも第一とまで言はれた名人で俺も知つて居る。音樂會から招待を受けぬ事は一度もなかつた。けれども或事からして、甚だ心面白からぬ日を送つて居た。其時俺は國風音樂校の教師をして居た時分であつたが、譯があつて都に居るのが非常に厭になつた其譯は、お前に言ふても分らんから止さう。自體俺はあんまり人の中で樂器を持つ事が嫌ひで、たゞ潜心一意生徒に教へて、何の事も考へなかつた。もとより世の中の榮華も幸福も願はず、たゞ其儘に世に埋れやうと思つた。すると、或日校長からの頼みで、初めて或音樂會に出て笛を吹いたが、恰度其時玉枝が來て居て、俺の笛を聞いたと見える。其翌日親友が來て或音樂に熱心な女に笛の出稽古をしてくれぬかといふ。素より職分であれば、次の日から教へに行つてや

る事にした。そこで逢つて話をして見ると、名人と噂に聞いた玉枝で、一曲所望したが成程凡手でない。殊には同國人といふ事も分つて、それから繁く往來する中に、遂に結婚するやうになつた。互の心を明して見れば都に居るもつまらん、何處か世の中の事が聞えぬ處で、一生を樂しく送りたいと、相談が出來ると、矢も楯も堪らず都が厭になつて、玉枝に少しの財產あるを幸ひに、後見をして居た叔父といふのが、承知せぬのを無理に此村に引籠つた。それから全五年の間、俺は實に幸福であつた。此上もなく樂しかつた。お前の目にもさう見えたらうと思ふ。其玉枝が死んだのだ。言はんでも分らう、俺の心の中は言はんでも分らうと思ふ。なア勘。」

と涙を拭ひつゝ言葉をつゞけた。お勘は慰める事も忘れて、老の目の涙は止度もなく返事も出來ぬ。芳樹はそれをぢッと見詰めて居たが、

「泣くからには分かるのだらう。」

と獨り點頭いて、稍勢ひが付いた膝を一搖り進めた。

「なア勘、おれも玉枝も慥かに未だ樂みは盡きなかつた。人間は一度死ぬの

位は知つて居る。けれども二十五では壽命とは言はれんぢやないか。俺が死ぬか狂氣にならんのがまだ不思議なのだ。あゝ最う言ふまい。幾度言つても同じ事だからなア。」

憮然として長大息の後に、ごろりと其處に横になつて、雨に暗い天を當途もなく見詰めて居る。お勘はやう〳〵涙を拭ひ終つて其傍に寄りながら、

「お風を召すと可けません。もうお休みなさいまし。御酒でも召上りませんか。お燗を付けましやう。」

「いゝや、酒も飲む氣にならんよ。最う寢やう。頭が痛んで仕樣が無い。明日は二七日の逮夜だなア。早いものだ。」

とすご〳〵我部屋へ行つてしまつた。お勘はあらゆる雨戸を閉めて、最後に臺處の戸を閉めに行つた。折から雨は止んだ、星影が水瓶に映つて居る。小犬が蹲踞つて居る納屋の陰に、風が藁を弄ぶ音を聞いて居ると、芳樹が閨て、

「勘、勘、」

とけたゝましい聲がする。お勘は驚いて行くと何の事はなく

「何うも堪らん。暫く其處に居てくれ。」

「はい。宜しうございます。何うか遊ばしましたか。」

「なに、何うもせんけれども何だか堪らんよ。あゝ。」

とばかり。外は風の聲も次第に更けて、幽かに水車の音が響いて來る。

（二）

けろりと晴れた天氣は夜まで續いて、宵月は前の端山に上つた。役僧が逮夜の經を終へて歸つた後、お勘は明日の膳拵へに、忙しく臺所に立働いて居る。芳樹は獨り縁側に出て、見るともなく月を見て居たが、

「あゝ此春の朧夜、さうだ、未だ櫻の花が咲くか咲かない頃であつた。あの夜は玉枝の琴の音が著しくはづんで、自分ながら不審がつて居た。自分も笛を止めて聞惚れて居たのであつた。彼時の曲は……、さうだ長恨歌だ。久振だ。吹いて見やうか。玉枝も何處かで聞いて居てくれるだらう。」

と珍らしくもふら〳〵と笛を吹く氣になつて、やがて持つて來たのは秘藏の横笛である。

吹出す音はさながら暗愁を含んで、さし入る月に訴ふるが如くに響渡る。一むら闇い庭の木の下に、いさゝ小川はさら〳〵と音を立てゝ、渚に月の影を碎いて居る。垣を越えて彼方は鳴子の綱より上に、高く低く岡は南の方に流れ

て、遙かに水番小屋の灯が幽かにほのめいて、村は靜かに月の下に眠つて居る。歌の半ばになつて、俄かに芳樹は笛を捨てゝ立上つた。四邊は一段靜かさを增して、蟲の音はしきりに聞え、月の光はさなきだに青い顏を照して、芳樹はただ拳を握つて立上つたまゝ、暫く庭の木立のあたりを見詰めて居たが、次第に目を閉いで來ると俄かに其處に倒れて大の字なりになつてしまつた。近くに人の聲も聞えず、折々臺所で器具の音がする。そよ〳〵と吹起つた風は、松の梢を落ちて芳樹が裾を掠めて去つた。

やゝ暫くあつて芳樹はむつくと立上つたが、

「勘、勘、」

と急に叫ぶ聲にお勘は驚いて飛んで來た。

「何か御用て、」

と言終らぬ中、

「下駄、下駄、下駄を早く、」

「はい、あの何方へかお出遊ばしますのでございますか。」

「うむ行つて來る。早く、」

「あの何方へ、」

と今の樣子がたゞならぬので、氣遣はしさと驚きとに呆れて居る。芳樹は只せき込んで、

「下駄を早く、墓參だ。」

「おや左樣でございますか。あの明日お出遊ばすのではございませんか。」

「うむ、明日も行くが、今も一寸行つて來る。」

と氣はせきゝつて居るのでお勘は逆らはず下駄を出すと、芳樹はそれを履くや否や枝折戸も明放して、宙を飛ばんばかりに馳出した。

尾花の深い中を通りぬけて、只有る岡の麓を廻つて行くと、其處に多くの墓がある。芳樹はたゞ一散に一つの墓の前に着いた。其處には玉枝が浮世に思ひを殘して長き眠に就いて居る處で、墓の上を蔽ふて居る柿の一株、そこらは、只蟲の音で埋れて居る。芳樹はたゞ露深い草の中に腰を下して天を仰いだ。水を手向けるでもなく、花を供へるでもなく、無念の半眼を開いて月光を浴び

て居た。

「早乙女樣、」

と俄かに聲を掛けられたのに驚いて我に返つた芳樹は、聲の方に振向くと、例の醫者である。

「やア、」

と力のない聲で言つたばかり、更に何の言葉もない。醫師は傍に寄つて、

「何うもそれでは可けませんなア。夜の出歩きはお止しなさらんければ、少しは私の言葉も用ゐて下さらんければ困ります。强壯な身體でも、さう貴所のやうに絶えず腦をなやめて居ては堪りません。まして此頃はお惡いのではありませんか。お歸りなさい。何ですな、一週間ほどは寐て居て下さいませんか。藥もなにもそれでは利きません。」

と醫師は深切にも今芳樹の家を見舞ふと、お勘がこれ〳〵との話に驚いて、其儘こゝに駈付けたのである。

「はい歸りますから、何うぞお先へ。」

「いえ、御同道致したいですな。出來るならば御墓參は當分止めて戴きたいのですけれど、已むなくば何うか晝間散歩かたがたとして下さらんでは。」と其袖を取つて引立てやうとした。芳樹はそれを振拂つて、

「今暫くです。はい、誓つて歸りますから何うぞお先へ。」

と禮も言はず言葉は角立つて來る。醫師は別に怒りもせず、

「はア左樣ですか。それでは必ず早くお歸りなすつて下さい。必ずですよ。」

と念を押して去つた。餘り逆らうのも爲でないと思つて、程近い木陰に身を潛めたのである。間もなく芳樹は歸る氣になつて立上つた。さらばと誰に言ふでもなく別れを告げて、よろめきながら三間ほど草を踏分けたが、不意に立止つた。墓は柿の木の月影になつて半ば黑く、傍の柳が折からの風に散りかゝつて居た。

芳樹は一町ほど俯向きながら歩いて居たが、首を上げるや否や又も宙を飛ばんばかりに我家に立戻つて來た。お勘は走出てゝ、

「お歸りなさいまし。眞實にお詣りをしてお出遊ばしたのですか。」

「うむ、お前に宜しくと言つたよ。」
冗談かと思へば、さうでもない樣子、お勘は愕然として其顏を見詰めたが、芳樹は委細構はず、何と思つたか、亡き玉枝の部屋に入つた。お勘は猶更恐くなつて、身の中は寒く毛穴の立つのを覺えたが、如何にも氣に掛るので、竊と窺いて見ると、芳樹はいつも玉枝が座つて居た處に胡座を組いて、子供のやうにしくしく泣いて居る。
此時、門に人の足音がするので、お勘は其處へ出て見ると、醫師が跡を追ふて來たのである。
「おや先生、まア寔に御深切樣に有難うございます。如何でございました。」
と襷を外し／＼問掛ける。
「何うも困るねえ。心配になるよ。どれ何んな樣子だか一寸見て來やう。」
「彼の只今ねえ、寔に變でございます。何うか遊ばしたのではでざいますまいか。」
やがて連立つて、部屋を窺いて見ると、芳樹は只默然として居る。二人は息を

凝した。

（二）

芳樹は只當途もなく見詰めて居る垣の外を、東西から人の足音がして、今其處で行逢つたらしい樣子で、

「おや治兵衛さん、大分お遲く、」

「はい、少し用事が御座いましてな。もう何時頃でございましやう。」

「左樣、かれこれ九時、過ぎましたかな。氣を付けてお出なさいまし。」

と互に挨拶をして立分れた。九時といふ聲が聞えるや否や、芳樹は立上つて目を据ゑた。

月はやゝ影更けて、小窓に薄の影がゆらめいて居る。折から虫の音を亂して稍、強い風が吹いて來た。其と同時に、幽かな、極めて幽かな、琴の音が不意に續けて聞え出した。外から通ふ響ではない。部屋の口に彳んで居る二人は等しく耳を聳てた。

お勘は次第に足元が亂れて、くひしばる齒も折々合はぬさまである。琴の有

るか無きかの響は、絶えるでもなく、高くなるでもなく、時には草の葉を渡る風の音に紛れて、何處から響いて來るか慥とは聞きとれぬ程である。芳樹は矢張突立つた儘、に眼を光らして庭を見詰めて居た。

稍、あつていつ消ゆるともなく其低い琴の音はなくなつてしまつた。二人は猶去りやらず彳んで居る。

芳樹は軈て其處へ倒れた。四邊が如何にも靜かなので、其音が殊の外高く聞えた。同時にまたもや低い前の響が斷續し初めた。暫時して其音がやゝ高くなつた、俄然芳樹は打たれたやうに起上つて、振向きざまに床の間を屹度見据ゑた。床には琴柱を立てた儘の琴一面彈く人もないに、幽かな響を立てゝ居た。

窺いて居た二人も同じく床の間を見ると、音の源は此主のない琴であるのに、お勘はきやッといふ聲諸共、のめる樣に臺所の方へ逃げて行つた。醫師は猶息を凝して居た。

芳樹はお勘の叫び聲に驚きもせず、一心に琴を見詰めて居たが其膝はぢりぢ

りと床の方へ近寄つて來る。醫師は次第に身體を部屋の中に入れて、今は殆んど半身を入れて仕舞つた。芳樹は這ふやうにして次第に床の間近くなる。琴は猶其幽かな響を斷續さして居た。

芳樹は早床にまで至つた。やゝ暫く琴を打守つて居たが、そッと手をあげて片手を琴にかけた。忽ち其響はばッたり止む。

やゝ暫く、芳樹は掛けた手を其儘に睨んで居たが、やがて手を離すと、亦もや荻の友摺のやうな音が響いて來る、「玉枝。」と一聲急に叫んだまゝ、芳樹はばッたり後に打倒れた。醫師は直ちに其部屋へ駈込むと、芳樹は拳を握りしめて、射るばかりに天井を睨据ゑて居た。

醫師は抱起しながら、

「早乙女さん、何うしました。慥かりなさい。え、早乙女さん」

と言葉をかけたが更に物を言はぬ。己れの手一つではと、お勘を呼んで怖がるのを叱るやうに、やう〳〵閨へ擔込んで辛くも床の上に寢かし付けた。

夜半にも近い頃まで、醫師は傍に付添つて何かと看護に手を盡して居たが、芳

樹も何うやら靜まつた樣子なので、

「それでは私は最う歸るから、能く看病をして上げるやうに氣を付けてね、私は明日の朝また來るから」

と立たうとする。

「はい、あの、」

とお勘はおろ〳〵聲で、目に立つて震へて居た。

「何も怖い事はないよ。琴が鳴るのが少し變のやうだけれど、なに別に怖いほどの事はない。今夜は御苦勞でも傍に付いて居てあげておくれ。明日の朝私が來て代るから。」

「あの誠に申兼ねますが、何うか今晚はこゝへお泊りなすつて下さいますまいか。何ですか何うか私には心細くつて怖くてなりません。」

「何の怖い事があるものか。よく看病をしてあげておくれ。夜の明けるのも最う直ぐだから。」

といひつゝ、芳樹の顏を見ると、たゞ寔に靜かなので、此分ならばと立上らうと

する途端、芳樹が倒れた時止んだ琴は俄かに稍々音を高めて鳴出した。はッと思ふ二人より先に芳樹は矢庭に跳起きて、非常な叫び聲と共に踊上つて其部屋さして駈込まうとする。お勘は驚いて狼狽へるばかり、醫師は力かぎりに抱止めたが、猶身をあせつて行かうとする。お勘もやがて力を合はせて、漸くの事で寢床に納めると四邊はまた夜に歸つて、琴は尚怪しく啼くが如き音を絶えず傳へて居た。

（四）

明くる朝早く、山村醫師は心にかゝる儘に音訪れて來た。もとより別懇の間であるので案内もなく上へ上つて、直ぐに寢室へ行つて見ると、芳樹はうつらうつらと夢に入つて、お勘は獨りまじ〳〵と自分の膝を打眺めて居たが、山村の姿を見たので急に出迎へながら、

「さあ何うぞ此方へ、昨晩は誠に有難う御座いました。まアお早くお出下さいまして。」

と急がはしく其席を設けた。山村は先づ芳樹の寢顏を覗いて、竊と脈を取つたまゝ、何かは知らず考へに沈んで居る。お勘は差寄つて眉を寄せて、

「如何で御座います。」

と片手を下に片手を膝に置いて、氣遣はしさうに顏を打目戍つた。山村は執つて居た手を離して、

「何うも困つたものだねえ。何かね、昨晩はあれから別に騷いだやうな事も

無かつたかね。」
「はい。あれから大分お靜かで、只今迄お寢み通しで御座います。」
話聲が耳に入つたと見えて芳樹は幽かに目を開いた。
「早乙女さん。如何です。お心持は。」
と山村は笑傾けて尋ねかけた。
「や。お早く何うも。」
と起上つた氣色は、更に通常の人と異つた處もない。昨晩の事は全然知らぬやうなさまである。
「何うでした。昨晩のお心持は。」
と山村は膝を進めて竊かに此病者が如何なる心を持つて居るかと尋出さうとする。芳樹は何か記憶を呼起さうとする樣子で、
「左樣でしたなア。」
と目を閉ぢて默想して居たが。やがて、
「いや昨晩は妙でした。はじめ何といふ事はなく笛を吹いて見る氣になり

ましてなア。まア笛を吹いて居たです。するとつい昔の事を思出して來て言ふに言はれぬ心持になつたです。それから笛を捨てゝ外を見て居る中に、急に其何へ、墓へ參りたくなりましてな。何だか少し夢中で、自分ながらよく分らんのです。墓へ行つて見ると、いゝ月夜でしてな。暫く草の中に轉がつて居ましたが、左樣、一時間程も其處に居ましたか。其中に種々雜多な事が心に浮ぶと、それが一々目の前に見えるやうに思はれるです。いや實際見えたのです。さも在るやうに。」

山村はぢつと其樣子を見ながら、

「それから何ういふ氣分になりましたな。」

「其から何でしたな。氣が何だか遠くなつたやうでしたが、急にそこら四邊が眞暗になつてしまつたのです。頭腦は烈しく痛んで來て、堪らんので家へ歸つて來る途中、不圖又妻が臨終の時を思起したのです。其有樣が判然目に見えるですな。其時に、あゝ今頃だ、九時であつたと思つて。いや其時は妻の部屋の中に居ましたよ。すると何でも表の方から、誰であつたか、九時だ。と

言ひながら此方へ飛込んで來るやうでした。其聲を聞くと同時に棒か何かで腦を打たれたやうな感じが起つたですな。それから後の事は少しも記臆がありませんが、何でも妙な夢を見たのです。やはり妻の部屋の中でしたが、不思議にも妻が獨りで琴を彈いて居ると、非常の怪物が今にも嚙付かうとして居るのです。其怪物ですか、まア鬼ですな。大きかつたですよ。雲を衝くやうでな。色は半分金色で、半分は銀色をして居ましたよ。そして其周圍には雨風が非常に烈しくつて、黑雲が渦卷いて居るです。私は驚いて妻を助けやうと思ふと、聲が出ないのです。身軀も更に自由が利かんやうになつてしまつたですな。やう〳〵一聲、玉枝、と僅かに呼ぶ事だけが出來たのですが、其苦みは又非常でした。さうすると又不思議ですな。」

と話はや丶勢ひに乘つて來る。山村は絕えず其顏色動作に注意しつ丶耳を傾けた。芳樹は更に言葉をつゞけて、

「其時俄かに、何とも言ふ事の出來ぬ美妙な音樂が聞えるです。はツとして顏を上げて見ると、天女ですな。慥かに天女です。其怪物の反對の方に、繪に

かいたやうな天女が何時の間にか舞下つて居るのです。背後は一面に光明が赫燿として、何處ともなく異香が薫じて來るやうで、蝶などが舞つて居て鳥が囀つて居るのです。する中に怪物も天女も、次第に妻の方に近寄つて來るので、何うなる事かと思つて只見て居ましたが、兩方一時に妻の手を取つて引立てやうとすると、妻は非常に苦み出したすので。身を踠いて居る其有樣が如何にも見て居られんのです。自由にならん身體を這ふ樣にして、妻の肩に手を掛けて助けやうとすると、忽ち前に霧のやうなものが一時に沸立つて、其怪物も天女も妻も一度に其中へ包まれて、見えなくなつて仕舞ひました。すると遙か上の方で、頻りに私を呼ぶ妻の聲がするので、急いで行かうとしたが、身體が何うしても利かんので、踠廻る途端に私は何者にか引立てられて、無理に地の底の方へ連れて行れたやうでしたが、それから後は雲のやうで何だか分らん事になつてしまひました。夢のやうでもあり。夢でないやうでもあり、何とも何うも譯が分りません。妙ですな。」

と漸く語終つた。山村は昨夜の有樣を思起して、猶仔細に芳樹の樣子を打目

護つて首を傾けて居た。

（五）

其日の中は、案じるほどの事もなく芳樹は落付いて、機嫌よく勘を相手に話などをして居たが、夕方近くなる頃から、またも妙に考初めて樣子も次第に變つて來た。勘はまた事のないやうにと竊かに心を配つて居たが、九時の時計が鳴るや、否や不思議にも昨夜の如く床の間の琴は自然に鳴初めた。其音を聞くより芳樹は忽ち自分の部屋を飛出して、琴の前に坐つたまゝ、其を凝視して居る。晝間の芳樹とは全然別人のやうで、慥かに狂人の姿である。

勘は少しも目を放さなかつた。琴は昨夜よりは響を高めて鳴つて居る。今夜は如何なる事に成行くかと、勘は獨り心細い折から、芳樹は急に四方を見廻し出した。やがての事、何やら及び腰になつて庭の方を見て居たが、俄に莞爾として、

「勘。勘。」

と傍に居るのも知らず呼立てる。

「はい。何か御用で御座いますか。こゝに居ります。
と怖々ながら傍へ寄ると、垣の方を指して、
「來たよ。來たよ。」
と果は大聲に笑出すので、いよ〳〵氣味惡く、
「何が參りました。」
と訊ねるのを待ちかねたやうに、
「來た。來た。玉枝が來た。遠くから來たのだ。湯を取つてやれ。湯を。早く、勘。勘。湯をはやく取つてやれ。」
と言捨てゝ緣側に走出した。勘は何といふ事も出來ず。只氣を揉むばかりでおど〳〵して居ると、芳樹は怒つて、
「勘。早く取つてやらんか。馬鹿め。逃げて。仕舞ふではないか。そら逃げる。勘。捉まへてくれ。早く。早く。早く。」
「はい。はい。」
とばかりで勘は途方に暮れてしまつた。芳樹はます〳〵狂出して、

「逃げる。逃げる。逃げるよ勘。そら逃げた。」
と言ひさま縁より飛下りた。勘は驚いて止めやうとしたが、遅い。芳樹は早くも枝折戸を開いて表へ出てしまつた。」
勘は狼狽へてあとを追つたが、月はあるが夜の事で、姿は早くも見えずなつてしまつた。詮方盡きて、暫く其處に立つて居つたが、其儘捨てゝは置かれないので、勘は共々探して貰ひたさに、兎に角主人の最も親しい友の、山村醫師の家へと駈出して行つた。
勘が音訪れて來たので、山村は慌たゞしく玄關へ出て來た、
「早乙女さんが何うかしたかね。困るなア何うも。」
勘は一禮もそこ〳〵に、
「何うも寔に困つた事になりました。夕方から旦那様が又變におなりなすつて、今しがた何處かへ往らしつてしまひました。」
「困るねそれは。何處へ行かれたのだ。」
「何方へでございますか分りませんので。」

「うむ。飛出されたのか。それは大變だ。萬一な事をしてくれなければ宜いが。」

「誠に恐れ入りますが、お手をおかし遊ばして、お探し下さる譯には參りますまいか。」

「無論探さんければならん。直に行かう。少し心當りもあるから。お前はまア家へ歸つて待て居るがいゝ。」

「左樣でございますか、ではお言葉に甘えまして宅へ歸つて居ります。夜中何とも恐れ入りますが何分何卒お願ひ申します。」

と猶も賴み聞えて勘は歸つた。山村は見當を付けて、月明りを幸ひに、先づ例の墓へ行つて見ると、嘗て見覺えのある芳樹の帶が泥まみれになつて落ちて居たので、偖はこゝへ來たと見えるが、何處へ行つたものか、更に當途もないに困じ果てゝ、兎も角も此邊の人に尋ねての上と心當りの家をそちこち聞いて見たが、更に分らぬ。尋ねあぐんで歸つて來る途中で、ばッたりお勘に行逢つた。

「やっ何は歸つて來られたのかね。」
「いゝえ。あの只今、八幡樣の社務所からお使が來まして、あの旦那樣は其處に居らつしやるのださうで御座いますから、それで出て參りましたので。」
「さうか。それはまア知れてよかつた。それでは私が行くからいゝ。私でなくば手に合はんかも知れん。歸つて待つて居な。」
「誠に何うも度々恐れ入ります。」
といふ勘の言葉を聞き捨てに、山村は程近い八幡の社へと志した。
社務所へ行つて禮を述べて、芳樹を迎ひに來たよしを通じた。出て來た神官は、
「早乙女さんは飛んだ病氣が出たものですな。先刻から拜殿の緣の下に這入つてしまつて、何う言つても出られんので、只今迎ひを上げましたが。」
と其處へ案內して行つた。
緣の下の、蜘蛛の巢だらけの中に、芳樹は悠然と構へて、何か嘻々と笑つて居た。
山村は見るより近く寄つて、

「早乙女さん。さア最うお歸りなさいまし。お迎ひに來ました。」
と差覗けば、芳樹は莞爾々々として、
「いや久し振で妻が來ましたから、私は今しばらくこゝに居ります。」
と脇を振向いて、
「御挨拶をせんか。山村さんだ。」
と言つて又山村に向つて
「まアお這入りなさらんか。」
と何か家の中にでも居る心と見える。
いつまで斯うしても置かれんので、山村は及腰に手を執て引立てやうとしたが、芳樹の力は日頃に十倍して、中々動くどころではないので、居合した神官の力を藉りて、何うやら斯うやら引出すと、それなり又急におとなしく、言はれるまゝに連れられて歸つて來た、勘は待ちかねて共々介抱して寢かし付けた。

（六）

芳樹はそれなり生體もなく、次の日の晝過まで寐通しに寢て、二時頃になつて漸く起出でたが、只ぼんやりして、お勘が心持をたづねたのにも返事さへせず、庭の有樣を見るともなく眺めて居た。

夕方から雨になつた。それでなくとも淋しい家の中。しと〳〵と降り下して、あたりは寂として遠い砧の音が幽かに聞えるばかりの、何となく物悲しげな晩である。芳樹は又日が暮れると變になつて、きよと〳〵四邊を見廻しはじめた。

九時の時計が物凄く打つと、例の琴が又鳴初めた。一日ましに其音は高くなつて行くやうである。芳樹はそれを聞くや否や、昨夜の通り矢の如く其處へ行つた。勘ははッとして後から附添つて行つた。

芳樹は一心に琴に向つて居たが、次第に近く膝をすり寄せて、兩手を其にかけてしまつた。やゝあつて、

「玉枝」

と一聲叫んだ後、恰も其人が其處に居るやうに、

「自體お前が餘り無情じやないか。決してさういふ約束ではなかつた筈だ。いくら病氣だつてそんな理窟があるものか　それは人間一度は死ぬものだ。けれども今お前が死ぬといふ譯がない。それが間違て居るよ。ならんね。許せないよ。何うしても死ぬのは承知が出來ないとも。死ぬのなら勝手にするがい、俺はかまはぬ。けれどもお前がそれで濟むと思ふのか。え、なにか、濟みません。すまんだらう。濟むわけがない　俺の此顏のやつれを見てくれるがいゝ。これほどに病氣の癒るのを願つて居る。其心も知らずに死ぬ。甚だ分らんじやないか。ゑ何とおもふ。」

と恰も答を待つが如くに、しばらく琴を見詰めて居た　琴はたゞ例の音を續けて居る。しばらくして芳樹は悲爾として、

「さうだとも、無論なほる。なほらん事があるものか。俺のおもふ心だけでも屹度なほる　なほして見せるよ。安心して養生するさ、なにを泣く。泣く

事はない。」

といひながら芳樹も兩手を琴より放して涙を拂つた。

「それなら何か、やツぱりお前は死ぬといふのか。お前には似合はん分らない事を言ふぢやないか。能く考へて見るがいゝ。お前が死んだら俺の身體は何うなると思ふ。何うもならんで居るものか。そんなそんな、輕薄な心は持つて居ないぞ。」

と嘲けるが如くに獨怒つて居たが、急に色を直して聞耳を立てゝ

「なに癒る。うむ、なほれ。さア早くなほれ。なほらんと承知せんぞ。」

と言續ける處へ、今夜は何んな有樣であらうかと、それを見に山村は這入つて來た。芳樹は其姿を見るより、

「や山村さんよく入らしつた。今勘を迎ひにあげやうかと思つて居た處でした。」

山村は片頰に笑を含んで、

「何か御用ですかね。何なりとも仰有いまし。」

「いや別に用ではないです。實は今日お蔭で妻がよくなりましたから、ほんの心許ですが全快の祝を爲るのです。まアゆッくり召上つて下さい。久し振て例の合奏でもお聞かせ申しますから。」

と滿面靑ざめて居るが、如何にも嬉しさうで、勇ましく其處らを歩きはじめた。

山村は、

「左樣ですか。それはお目出度いですな。」

「目出度いですとも。實に目出度いです。」

と更に烈しく歩行いて居る。山村は徐ろに感に打たれて、其有樣を見守つた。心の中には、あゝ此人が此春までは、夫婦樂しく笛と琴とに日を暮して居たのである。

やゝ暫く往きつ還りつして居たが、俄かに山村の傍に進寄つて、

「山村さん。」

とばかり。打つて變つた悲しさうな調子で、其處にどッかと腰を下した。

「詰らんですなア世の中は。」

とつく／＼思入つたやうな顏色である。山村は溫顏に慰めて、

「何が其樣に詰らんのです。今お目出度いのではありませんか。」

「目出度い。何が目出度い。貴方は失敬な事を言ひますな、」

甚しく機嫌を損じたが、又しほ／＼となつて、

「目出度いどころではありません。私は此間妻を失つてしまひましてね。詰らんですよ。何の樂みもなくなつてしまつたです。實は最う死にたいですけれど……。あゝ、詰らん／＼。嫌だ／＼。」

と淚は頰を傳はつて居る。なほ暫くすゝり上げて居たが、やがて又立上つて運動を初めた。山村は其動作に注目して居ると、芳樹は又も傍へ寄つて來て、

「山村さん。山村さん。」

と如何にも周章た樣子で、

「妻が何だか危いですよ。何うか助けてやつて下さらんか。實に一生の願ひです。よう御座いますか。」

と言ふかと思へば、又も頻りに運動を續けて居る。

傍から勘は山村の袖を引いて、

「如何でございましやう。お癒り遊ばしましやうか。」

と小聲に聞くと、早くも芳樹はそれを聞きつけて、振返りざまに、

「なほる〳〵。今なほるよ。そら癒つた。」

と聲をあげて笑出した。山村は、

「さうさなア。困るなア。昨日から見ると何うやら悪いやうだね。」

といふのを何と聞いたか。

「左樣ですとも、癒らんければならんのです。死ぬなんて、そんな。そんな。」

と嘲けるやうに言ひながら、行きつ戻りつ次第に其足は早くなる。

琴は猶怪しき音を止めず。雨の音は次第に烈しくなつて、夜はます〳〵深くなる、折から芳樹は何とも分らぬ歌を高々とうたひはじめた。

（七）

午後の九時。時刻を違へず琴は不思議にも例の響を立初めて、日毎に其音を高めて行く。芳樹は次第に其狂態を増して、屢勸の手に餘る事もあつた。普通のものならとうに暇を取つてしまふのであるが、長く奉公して居たのでもあり。外に手もない此病人を獨りあとに殘して行きかねて根が實意ものゝ、何うぞして癒るものならばと、年寄だけに神佛などを祈つて、尙心盡しの介抱をして居た。いつも晝間は多く靜かで、今日も芳樹は別に騷ぐ事もなく、たゞ折々妙な事を口走るばかりであつたが。さし込む月が漸く庭の木立を離れて、下の小流に影を見せて來た頃。何を思つたか暫く捨てゝ居た笛を俄かに取出して緣へ出た。勸は又何事もなければよいがと、目を離さずに見て居ると、芳樹は其處に座を搆へて、やがて一聲、思ひも寄らぬ冴え〴〵とした音を立てゝ吹初めた。

かくて暫くは吹續けて居たが、俄かに烈しく氣色立つて來て、息のあらん限を

荒々しく歌口に吹込むやうになつたので、笛は忽ち鳴らなくなつてしまつた。ならぬに益〻疳癪を起して、咽も破れんばかりに吹立つて居たが、折しも例の時刻を過ぎて、琴の響は次第に高く聞えて來る。芳樹は不圖首を上げて、耳を澄してそれを聞いて居たが、俄かに笛を捨てゝ、勢込んで其部屋へ駈入つた。勘は又も如何なる事に立至るかと、あとを追つて行つて見ると、芳樹はたゞ兩の拳を握つたまゝ、一心に琴を見詰めて居たが、病は烈しく起つて來たと見えて、身體は絶えず震へて居る。忽ち、右手の指を口へ入れたかと思ふと、ぶッつり嚙切つたと見えて、血は脣を洩れてぽた〳〵と滴り落ちて來た。勘ははッと驚いて心の中に事なかれと祈つて居ると、芳樹は指を口から離して、つかつかと琴の傍へ進寄つたが、いきなり琴の上に其指を當てゝ、力を極めて無茶苦茶に絲を搔き亂した。見る〳〵血は飛沫のやうにはねて、琴の胴はもとより、床の間一面そこら中に赤い斑點が印せられた。勘は例の狼狽へながら、兎に角寐間の方へ連れて行うと漸やく抱止めて床から引離して、さま〳〵だましつ賺しつしたが、芳樹は耳にも入れず身を踠いて其手から離やうとする。

勘は尙も抱縮めて居たが、芳樹は、折々怪しい聲を出して、叫ぶ度每に其力は增して來る。勘は女の事ではあり。年寄つた身の力があらう筈はない。一生懸命になつて抱縮めて居るとはいふもの丶、次第に腕は疲れて來て、今は早雨腕が折れさうになつて、力を藉りやうにも人はなし、山村は折あしくなか〳〵來てくれぬ。殆んど泣出したくなつて、更に良策を考へる間も何もなく、只成行に任かせるばかりである。

忽ち芳樹は非常な叫聲と共に、勘の手を振解いた。あれッとばかり勘は泣聲になつて取縋たが、及ばゞこそ。芳樹は一散に庭の方へ走出して早くも緣を飛下りた。勘は直ちに後を追つたが、捕へられる處の騷でない。彼方此方と出口のある處を飛び步行く芳樹の早さ。殆んど飛鳥の如くである。然しいづこも鍵が掛けてあつて、表へ出る事がならぬので、ます〳〵猛り狂つて、遂に垣の片隅をばり〳〵と破りにかゝつた。勘の驚は一通りでない、表へ出しては又如何なる事を仕出かすか。誠に危險千萬であるので、辛くも追縋つて腰のあたりへ武者ぶりついたが。一も二もなく跳飛ばされて、あはやと見る間

に芳樹は垣を押破つて表へ飛出した。

（八）

山家の心やすさは只爐を圍んだ一家中。其日の働きを笑聲に語りながら衣食うちに足れば外に何の心配もなく、六十程の老爺は手作り酒に醉うて肱枕に轉げて居る傍に、五十二三の老婆は糸車の響をたてゝ。末の子かとも見える十七八の娘は一心に機を織つて居る。脇の燈火は隙洩る風にしばたゝいて、爐の自在鍵には何やら煮立つ鍋が掛つて居る。

「寢べい。」

と老爺は起直つて、兩手で眼を頻りに擦つた。それが可笑しいとて娘は譯もなく笑出した。老婆は委細かまはず車を廻して居た。

「寢べいよ、なア。」

と老爺は誰にいふともなく言ひながら、大きな欠伸を續け樣にした。其目はとろりとして、顏は眞赤で、ふッくらして、いつも笑つて居るやうで、誠に氣のよさゝうな爺さんである。娘は梭の手を止めて、糸屑を口に啣へながら父の寢

床を取りにと立上つた。老爺は蹌踉めきながら、雨戸をがたぴしと外して背戸へ出て、用を足して、身震ひと共に出た嚔一つ。やをら雨戸を閉てやうとする折から、かたばかりに結んだ垣のあたりで、がさ〳〵と何やら物音がする。老爺は聞耳を立てゝ其方を見たが、音は次第に高くなつて、果は人の呟くやうな聲が聞える。何であらうと又外へ出て、月にすかして物音のあたりを見廻し、突如に、驚いて後ずさりをする途端、垣の熊笹の中からむツくり起上つた人がある。

芳樹は一散に我家を飛出して、此夜は妻の墓へも行かず。道のない處をも構はずひた走りに走つて行つたが、半里ほど先にさまで高からぬ峠が一つある。其麓に人家が二三軒木の間をあやどつて居る。其窓のあかりが見えたので、芳樹は直ちに其方へ駈けて行つたが、家近くなつて全く疲れたと見えて、垣の熊笹の中へ寝轉んでしまつたのである。

老爺は驚いたまゝ其處に立縮んだが、芳樹は起上るや否や。飛鳥の如く家の中目懸けて駈込んだ。母と娘は何の事やら更に分らず。あツけに取られて、

只兩方から目を見張つて、芳樹の顏を見上げて居ると、芳樹はそこらをきよろきよろと見廻して居たが、つかつかと娘の傍へ寄つて來て、血だらけの手で用捨もなく引寄せやうとする。娘は吃驚して飛退くと、芳樹は又も傍へ寄つて來る。色を變じてあとから這入て來た。父親の後へ隱れると、芳樹は猶も追掛けて來る、老爺は慌てゝ中を押隔てながら、

「あんだお前、あにをするだア。」

と謂ひつゝ其顏をつくづく見て、

「や、笛の旦那だア。」

此年老はいつも芳樹の住んで居る村に、炭を賣りに出るのを商賣にして、芳樹の家も其花主の一つである。殊に或夜芳樹夫婦が合奏を垣の外から聞いて、分らぬ乍らも頗る心を動かした事がある。其から笛の旦那と呼び馴れて、日長を一日。緣に腰を掛けて芳樹を面白がらした事も有つた。四五日前やはり炭を持つて芳樹の家へ行くと、お勘は涙乍らに今の有樣を語つた。爺はやがて其を思ひ起したものゝ、こゝへ來る事の不思議さに呆れはてゝ居る。

芳樹は飽く迄も娘を捕へやうと爲る。娘は泣聲を上げ乍ら逃げまはるので、老夫婦は其を取さゝへ樣としたが、中々年老の手には餘つて殆ど困じ果てゝ居た。娘は家の中に居たゝまらず、遂に表の方へ逃げ出して行くと、

「玉枝。玉枝。」

と叫びながら、やらじと後を追うて隙間もなく追縋るので、狂も走れば不狂も走つて、老爺は慌てゝ驀直にあとを追つて行つた。

娘は一散に坂道を走せ下つて、右へ切れて里の方へ急いだ。月夜とはいひながら木の下道は眞闇で、芳樹は右へ曲つた事とは知らず、まつすぐに、

「玉枝。玉枝。」

と叫びながらとある野道へ出た。其處は二道の追分になつて居る。芳樹はきよと〳〵あたりを見廻し、直傍に立つて居る地藏に目がついた。何を思つたかつか〳〵其傍へ行つて、暫くそれを見詰めて居たが、

「玉枝。お前は何故逃げたのか。分らんではないか。何が怖い。今合奏をして見やうと思ふのに、お前が逃げだしては可かんぢやないか。あゝ。それ

だから嫌だ〳〵。世の中は最う嫌だ。俺もお前見たいに死んでしまはうか知らん。それがいゝ。それが何よりだ。」

と獨言を言つて居る時しも、遙か向に提燈が見えて、それが次第に近くなつて來た。

山村はお勘の通知に驚いて、二三の人を賴み處々探しに出で、今しもこゝに來たのである。無事に居たのを喜んで、無理に引立てゝ兎角して連れて歸つて來た。

（九）

芳樹が狂態は日毎に進んで、今は全然何事も分らなくなり了つた。顔も手足も憔悴して、聲は上づッて、目は据りきりになつて居る。一夜近頃に珍らしく芳樹は靜かで、前後も知らず夢に入つて居る樣子故、勘は此分ならば翌朝迄は何事もあるまいと思ふ弛みが心に出ると、日頃の介抱の疲が一時に出て、斯うではならぬと思ひながら、知らず〳〵うと〳〵として、何時の間にか其處へ倒れて寢てしまつた。夜半過ぐる頃、風の音が耳に這入つて不圖目を開いて、偖はいつの間に寐入つたかと驚いて、一と先芳樹が樣子を見た上で、變がなくば床に就かうと芳樹の寐間の口まで行くと、中は如何にも靜かで、あたりの虫の聲が著しく高く聞えるのみである。

勘は耳をすましたが、中には鼾の聲もないので、是はとばかり寢間の中を見れば、床はのべてありながらも主は藻脱のからである。勘はまたも山村へと走つた。

芳樹は夜半ごろ目を覺して、俄かに部屋の中の運動を初めたが、急に走つて緣側へ出る頻に外へ出る處を探して方々を歩き廻つて、臺所の水口の戸が引忘れてあつた處から、また表へ飛出したのである。

それから後はひた走りに、例の墓へと一散に走出した。秋の末であれば月の光も寒く更けて、人影は絶えてない處を、芳樹は何をか口に呟きながら、間もなく墓に走りいつた。

「玉枝。」

と腸より絞出したやうに一聲叫んで其儘其處に倒伏したが、やがて起直つて又さめ〳〵と涙にくれて居た。

「玉枝。早く仕度をしろ。早くだよ。最う餘程遲い。早くせんと間に合はんよ。」

と何を思つたか今迄泣いて居たのを忘れたやうに、勢よく立上つて、

「マア待つて居ろ。今一所に連れて行つてやる。」

と墓の石に手をかけて、遂に押倒してしまつた。それより半時間ほども掛つ

て、やうやく臺石を取りのけたが、やがて傍にあつた卒都婆を引拔いて、頻りに墓の下を掘初めた。

田舍でした土葬であれば、棺のある下もさまでに深い事はない。其棺の中には、玉枝が假の世の姿を止めて居るのである。

稍しばらくの間、芳樹は何かくど／＼いひながら、一心になつて土を取除けて居たが、遂に棺の蓋に達した。卒都婆を投捨てゝ其蓋に手をかけて、また一時間程の後、遂に其蓋をも取除けてしまつた。さて眞面目に其傍に立寄つて、

「玉枝。早く行かんか、其樣處に何をして居るのだ。早く來んかよ。愚圖愚圖して居ると芝居ははねてしまう。」

と獨言をいひながら、棺の中へ手を入れた。折から風はやゝ烈しく吹起つて、月は寒く冴渡つて居る。芳樹は玉枝が亡體の髮を手に摑んで引摺出さうとしたが、髮の毛は引くがまゝに悉く脱けて來る。芳樹はそを投捨て／＼、遂に毛は一筋も殘らずなつてしまつた。

「お前は何故來んのだ。早く來んと遲くなるといふのに。え、何處か心持で

も惡いのか。」

といひつゝ自身穴の中へ入つて、棺に手をさし入れてぐつと抱上げたが、玉枝の死體は間もなく土の上に横はつた。

其儘、芳樹は玉枝の首のあたりに兩手をついて、ぢッと其顏を見守つた。あはれ昔玉の如しと歌はれた顏は、其肉大方糜爛し去つて、眞白な骨が處々あらはれて居る。芳樹は莞爾と笑を含んで、

「うむ。似合ふ、よく似合ふよ。お前は矢張髷の方が何うしても似合ふ。品がいゝな。其帶も非常によくなつた。やはり紋付がいゝな。皆よく似合つた。立派なものだ。」

と絶えず口元に笑うて居たが、やがて亡體を掻抱いて、すた〳〵と我家の方をさして歩出した。月は遙かに其後姿を送つて行つた。

（十）

芳樹は屢〻家を脱出てゝ種々な事を仕出かすので、山村は勘と協議の上、遂に玉枝が部屋を座敷牢にして芳樹を其處へ入れた。午後の九時、例の琴がなり出すと、其處へ行かねば承知せぬので、已むなく其部屋を撰んだのである。芳樹は其處を出たい度に、

「玉枝。こゝを明けてくれ。」

と言暮して居る。

それより後芳樹は次第に狂ふ事が烈しくなつた。冬のはじめ、ある日朝から風は烈しかつたが、晝頃から雨をさへ加へて、嵐はたゞあれに荒れまさつて居た。天地は只騷然として木の折れる音が物凄く聞える。晝ながら四方は薄暗くなつて、木の葉は雨のやうに飛違つて居る。夕方からは芳樹の狂ひやうも益〻烈しく、手とも言はず腕とも言はず、そこら中を嚙みちぎつて其血を壁に吹掛けるやら、衣服を寸々に引裂いて投散らすなど、見るさへ恐ろしい樣

である。外には軒も碎けんばかりの雨。石をも吹飛ばす風の聲。勘は恐ろさに小さくなつて居ると、山村は深切にも此嵐の中を見舞ひに來た。勘は盲龜に浮木の心地で、
「誠にひどい嵐になりました。毎々まことに有難うございます。」
「ひどく荒れて來たね。」
といひつゝ奧の物音を耳につけて、
「や大分早乙女さんは甚いぢやないか。」
「はい今日は何で御座いますか朝からあの通りでございます。まアあれでもよくお成り遊ばしましやうか。」
「困つたものだ。」
と話の中に、九時の時計は嵐に亂れて幽かに時を報じた。突然例の琴は鳴初めたが、いつものやうな低い調子ではなく非常な高い音を上げて、潮の如く鳴響いて來た。嵐は其時一層の度を加へて、芳樹はますゝゝ荒れに荒れて狂廻つた。

既にして嵐は其極に達した。樹の倒れる音枝の裂ける音。物凄まじい外につれて、琴の響はいよ／＼烈しくなつて來た。

どッと一吹ふきつける風に、芳樹が居る處の窓の戸を吹飛ばされて、烈風は驀直に部屋の中へ舞込んで來たので、芳樹は叫びづゞけて飛廻つたが、再び吹入る風と共に琴は殆んど最高調の響を出すと、今迄飛びあるいて居た芳樹は、俄かに琴の前に立止つて、一心にそれを凝視しはじめた。寄付けなかつた山村は、今しも飛入つて取押へやうとする途端、又もや一煽りの風はどッとばかり吹入つて、琴の音は一段急に烈しく、忽ち非常な響を發して懸連ねた糸は一時にばらりと切れてしまつた、芳樹は飛上つたなり、仰向ざまに打倒れた。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

嵐が止んで、月になつて、かれ殘る蟲の音が一時に起つたが、芳樹の家はひッそりとして何の音もなかつた。

船橋

（一）

家の中には塵一つない。目に入る道具のすべてはいつ見ても整然として、さながら定規を當てたやうに正しく置いてある。二間しかない狹い家であるからといつて、女主人であるからといつて同じ長屋の中でも此位手奇麗にして住んで居るものは一軒もないのだ。門口の地は行儀よく箒目の波を打つて、格子戸も、脇の出窓も、何處も彼處もよく拭込んで艶々して居る。この家の障子に穴の明いたのを見た人がない。松田のやうによく住まつてくれると、と差配の何某が、禿頭を振立てゝ感じた位だ。

主人はお新といつて、孀になつてから餘程になる。細面の額の狹い目の凹んだ、鼻の高い、口の小さな、何方かといへば色の蒼い、小作りの瘠ぎすの女だ。いい服ではないがいつも小瀟洒した扮裝をして、髮も油垢を溜めないほどに嗜

みをよくして、小まめで、物事に精を出す事は人一倍で、物を氣にする事も人一倍で、甚く正直だ。良人に別れた時お新は途方に暮れた。やくざで、飲酒家で、取締りのない人で、女房の持つて來たものまで失してしまつた位であるから、あとに餘財といふものは更にない。殘して行つたものは佐吉と言つて、漸つと十歳になつたばかりの、目のぱッちりした、白の色い、美しい男の兒、それより外に何もなかつた。

幸ひに裁縫の手が黒人ほどによく利いて居たので、人仕事を受けて、佐吉を護立てゝ、何うにか其日を送くつて行く事にした。あとの事に付いては、種々の人が種々に言つてくれた。女の瘦腕で中々世帶が張切れるものではない。未だ年も若いから相應な處へ、と忠實だつて再婚を勸めてくれたものもあつた。お新は聽かなかつた。お新は良人を忘れかねた。佐吉が可愛かつた。

十三の歳まで手鹽にかけて、佐吉の爲だと思つて、離れがたなくはあつたが、思切つて奉公に出した、先は、本町の小間物商で、大和屋といふ大きな店だ奉公といふものを何れほど樂みなものかのやうに、勇んで先に立つて行く佐吉のあ

とに附添つて、主人に初の目通りをしてよく〳〵佐吉の上を頼んで、店へ置いて歸つて來る時、行く時とは打つて變つて、流石子供の右も左も知らぬ人の中にてれ返つて、出て行く母を、心細さうに見送る佐吉の顏を見て、今更ながらお新は胸を衝かれるやうな思をした。歸途には日頃信心〳〵して居た地藏樣へ參詣して、誠心こめて佐吉の爲に願を掛けた。其晩は目も合はさず、我子の上のみを思つて明かしてしまつた。二三日は物も手に付かなかつた。

それから此方今になるまで、親の心は片時も子の上を離れた事はない。天にも地にも、お新の身に取つてはこれより可愛いゝものはないのだ。慾も樂みも、命も、何も彼もこれのみに掛けて居る。飽まで後家を立通して來たのも、夜を日に繼いて精を出すのも、つましくして貯金などを心掛けるのも皆一つ佐吉の爲だ。先の勵みにつれて生計も樂になつて、今の處へ移つて來てからは、いよ〳〵後の經營に油斷はなかつた。早く佐吉を一人前にして、立派に世を渡つて行くのを傍で眺めて居て安心したい。とお新の望みはそればかりである。

心遣ひは奉公先、赤痢が流行るといふ。窒扶斯が流行るといふ。もし佐吉は病つて居はしないか。と其度毎に心を痛める。身持はいゝか。何屋の店の者は道樂で解雇つたと聞く。もし佐吉は惡いものに誘はれて、其樣な處へ足を入れはしまいか。某屋の若者は賣掛を持逃したと聞く。もし佐吉は其樣な心得違ひをしはしまいか。一克を言つて憎まれるやうな事はなからうか。放心して遣損ひをしはせぬか、と佐吉の來る度に、旦那樣の御恩を忘れてはなりませぬ。奉公を大事に身躰を大事に、何處までも身を愼んで、と口の酸くなるほど、五月蠅がるほど言つて聞せた。

お新の口を借りれば有難い事に惡い噂も聞かせず、首尾よく勤めて行つて佐吉はそれに仕立てられた若者になつた。をとなし作りの店者風前垂姿のしやんとした扮裝は、如何によく母親の目に見えたらう。丈は低いが、中肉で鼻筋が通て口元が愛らしくつて、目と眉の細工物のやうに美しいのが、如何にいい男態に見えたらう。初めて遇つた隣家の女房にそらさない挨拶をして、思の外の愛敬を振蒔いたのが、如何に怜悧に思はれたらう。來年はいよ〳〵何

處へか店を出さして貰ふと言ふまでになつた。お樂みでございましやうと其女房は通り一遍の世辭を言つたが、お新には全く何にも替難い樂みだ。胸の中には逸早く嫁の心當までをして、さうして何うしてと、末を思へば、老の皺も延びるやうな心持がする。歸つたあとでは佛壇に燈火を點けて良人の位牌に向つて合掌しながら何かくど／＼と心の中に繰返して居た。佐吉の事であらう。

（二）

大和屋の旦那は商用と私用とを兼ねて四五日前に大阪へ發つて行つた。内儀は今しがた女中の一人を連れて其處まで買物に出た。奥は靜かだ。婢達は臺所に立働いて居る。下男は鼻唄交りて水を汲込んて居る。座敷の障子は皆閉切つてある。庭は一面に松葉を敷詰めて、たゝきの池は笘を冠つて蘇鐵は霜除の中にかぢけて居るやうだ。緣の下から、鼬が今向ふへ駈拔けて行つた。

店の方から緣側傳ひに奥藏を指して、庭の前へ來掛つたのは佐吉だ。座敷は南へ掛けて廻緣になつて、曲つて先に又部屋がある。

「誰だへ、其處へ行くのは。」

前を過ぎる時、障子の中から不意に婀娜な聲が起つた。

「私。」

佐吉は立止まつて、聲する方は振向かずに、物に恐れるかの如く其處等を見廻

した。
急がはしく障子が明いて、結綿島田の慄とするほどの容色の、未だ若い、白粉盛りの顔が突と出た。お孃樣だ。お妙といふ此家の一人娘だ。
「佐吉いゝ處で逢つたね。誰も居ないの。」
流石に小聲だ。
「へえ。」
これも忍び聲だ。見交す目と目には笑を含んで物を言つて居る。
「一寸。」
佐吉は、突と傍へ寄つた。
「何でございます。」
「お前今日は屹度、いゝかえ。」
「可うございますとも。」
「忘れるときかないよ。」
「貴娘こそ。」

笑顔を殘して其まゝ行かうとする。

「あらお待ちよ。其樣に逃げなくつても。」

襦袢の袖の緋縮緬と眞白な腕首と指環の光りは同時にじらめいて美しい手は忽ち佐吉の肩に掛つた。

「何ですよ。早く仰有いな。人目が五月蠅いぢやありませんか。」

「それだッても。マアお聞きよ。」

「早く仰有いまし。」

「お前餘り遲くッちやァ厭だよ。此間のやうにお待たせだと眞實に承知しやしないよ。」

「其樣な事は、」

「あらお前冗談ぢやないよ。種々相談があるんだから、本氣になつて聞いて貰はなくッちや可けない事があるんだから、」

「もし行かなかつたら何うなさいます。」

と佐吉は笑つた。

「知らないよ。私は此樣に心配をして居るのに。」

「何樣に。」

お妙は無言ていきなり佐吉の二の腕を思ふさま捻つた。

「あ痛。」

「おほゝゝゝ。」

聲が高かつたので、慌てゝ口に袖を當てる途端に、裏口の引戸が開いたやうなので、二人は急に飛退いて、佐吉は藏へお妙は奧へ引込でしまつた。

「駒や。駒や。」

離れた處でやがてお妙の猫を呼ぶ聲がした。

「あらお前其樣な處へ上つて居ちや可けないよ。」

暫くして抱取つたらしく、

「痛いよ爪を立つちやア、おやお前又首輪を破いちまつたね。」

（三）

内儀は間もなく歸つて來た。大阪の良人から長い便りがあつたので、取敢へず封を切つて讀下して居たが、微笑みながら傍に居たお妙に向つて、二言三言何事か言掛けた。お妙は聞もあへず、

「知らないわ。私厭ですよ其樣な事。」

顏を背けてつんとして、急に立つて自分の部屋へ逃込んでしまつた。

「お妙、お妙」

と母はあとから呼止めたが、お妙はそれ切出て來なかつた。

物も手につかず、何かそは〱して晝になるや否や、兼て約束のある、母の許容をも得て居た乳母の家へ、行つて參りますと言て、途中の事から何や彼や、傍から種々母の心付をするのを五月蠅がつて、取急いで家を出た。佐吉は少し後れて四五軒の得意先を掛けて、誂への品物を納めに行つた。

乳母は名を貞と言つて、お妙が十五になるまで此家に奉公して居た。縁があ

つて嫁付いてからも、始終奥へ出入して居る。お妙を自分の子のやうに眼の中へ入れてしまひたい程可愛いゝものに思つて、善い事、惡い事何につけても、其身になり變つて、喜びゝし憂へもし泣きもした。田舍出で色の黑い體格のいゝ、目の丸い鼻の丸い、唇の厚い縮毛の、人の言ふ事を其通りに聞いて左樣と思込む女だ。亭主は近在廻りの商人て、留子勝で、自分は多く暇なので、よくお孃樣をお呼申しに來る。

乳母の家はしもたや作りで二疊と六疊の、小奇麗な二階がある。東は往來へ向つて、南は窓で、今恰度日が一杯に差込んで、外に出してある盆栽物と、竹格子の影法師が障子に映つて居る。置床の上には、紅絹の重蒲團を敷いた燒物の撫牛が載かつて、煤竹の掛花活に、今朝佛樣の花と一處に買つた椿が無雜作に挿込んである。

其日の午後此六疊に對座で居たのは佐吉とお妙だ。佐吉は四角に坐つたまま片手を膝に差俯向いて考込んで、お妙は涙顏に日當りのいゝのでポッと逆上せて、美しく櫻色になつた頰のあたりへ、後れ毛のかゝつたを取上げるのを

忘れて、

「佐吉何うしやう。」

佐吉は返事もなく顔も上げなかつた。お妙は重ねて、

「此樣な事になりはしないかと思つたから心配で心配でならなかつたのに、遂う〳〵先刻私アまア何うしたら、可からう、實はね、阿父樣がお出發になる前の晩に、阿母樣と薄々其樣な談話をしてお出だッたの。私は一寸聞きさしたのだから能くは分らなかつたけれど、今日のお手紙で見ると相談が決まつて、今度お歸京になる時一處に連れて來て、當分お客分にして置いて見るんだつて。私ア何んな事をしたッて其樣なお婿さんなんか承知しやしないけれど、あの嚴ましい阿父樣の事だから、何んな事になるだらうと思つてそれが苦勞で、先刻阿母樣に其話を聞いてから最う居ても立つても居られないやうな心持だよ。佐吉、眞實に何うしやうねえ。」

佐吉は漸く顏を上げた。今更ではあるが、あゝ惡かつた。申譯のない事をした。何故此樣な事にしてしまつたか、自分で自分が分りかねる、かういふ事も、

前から知らないではなかつたが、迷ひとは言ひながら、大事なお孃樣を、と其時不圖母親を思起して、身を刺されるやうな思で、我にもあらず膝を進めて、

「お孃樣、御勘辨なすつて下さいまし。御恩を忘れて、旦那樣の目を盜んで、大それた事を致しました。此上私は貴娘のお名へ疵を付けるやうな事は致されませぬ。どのやうに辛くとも、私は諦めましやう貴娘も何うぞ、これまでの事は水に流して、すつぱりお忘れなすつて下さいまし。」

お妙は呆れて目を見張つたが、聞きもあへず色を變へて、

「お前さア何を言ふんだえ。今更其樣な、其樣な、」

とばかりで、急に胸が迫つたやうに言葉を詰らせたが、

「私ア死んでもお前と別れる氣はないのに、お前は其樣な薄情な心でお出のかえ。いくら初め私の方から言出して、かういふ譯になつたからのだと言つて、それぢや餘り酷いぢやないか。お前は初めつから逃げるつもりで、これまで私を欺してお出だね。」

佐吉は急はしく其言葉を遮つた。

「お嬢樣そりや餘りでございます。私が何で貴娘をお欺申しましやう。」
「そんなら何故今のやうな事をお言ひなんだえ。矢張私が最う厭になつて、これをいゝ汐に離れてしまふうと、いゝえそれに違ひない、それだから其樣な水臭い事を、」
「まア、お嬢樣よくお聞きなすつて下さいまし。私は貴娘のお爲を思つて、」
お妙は皆まで言はせはしない。
「いゝえ聞かないよ。お爲ごかしの氣まづい事なんか、誰が誰が聞くものか。其樣な實のない人とは思はなかつたに、お前は最う私を捨てゝ居るのだね。捨てるなら捨てるでいゝよ。私は死んでしまうから。」
「困りますねえ。其樣な分らない事を仰有ちやア。」
「分つたッて分らなくつたッて搆やしない。私ア私の了簡があるから。いいよお前の心は最う分つたよ。私アお前に見離れて生きてる瀬はないから一思ひに死んでしまうよ。死んだつてお前は振向きもおしぢやあるまい。さういふお前と知らなかつたのが私アたゞ口惜しくつて、口惜しくつて、」

兩の袂を顔に當てゝ、涙を押へたまゝ、身を投出して前へ俯伏した。

「お孃樣、髪が壞れますよ。まア。お孃樣お聞きなすつて。」

「厭だよ。知らないよ。」

「そんな事を仰有らないで、」

佐吉は摺寄つて抱起さうとした。お妙は振離しさま、肱で手痛く當付けて、

「厭になつたものにお構ひでないよ。打捨つて置きよ。」

突と離れて又平伏した。

「お孃樣私は決して氣まづい心で、此樣な事を申すのぢやございません。身分をお考へなすつて下さい。私は奉公人でございます。旦那樣には子飼の中から、深い御恩を受けた身體でございます。是迄のいたづらでさへ、實に濟まない事でございますのに、此上に罪を重ねて、もし事が現はれた日には旦那樣のお顔には泥を塗る、お店の暖簾には疵を付ける、たつた一人の母親にも、何んな心配を掛けるか知れません。貴娘は又掛替のない大事のお身、御兩親に對しても、お家へ對しても、うツかりした事は出來ない御身分でございます。

今ならば何うにも取返しが付きます。こゝをよくお胸へ入れて下さいましそれは最う私だつても、貴娘にお別れ申すのが何んなに苦しうございましやう。假令こゝでお別れ申しても、餘所へ氣を移すやうな事は決してございません。心は貴娘より外にございません。お孃樣、私の身にもなつて見て下さい。」

お妙は身を起して、此方へ膝を押向けた。

「そんなら何故お前こんな譯におなりなの。」

「さアそれですから重々お詫申して居るのでございます。濟まないとは存じて居ながら、お顏を見ると何も彼も忘れて、二度が三度になつてつい今迄、けれども最う過ぎた事は仕樣がございません。」

「私ア厭だよ。何んな事があつたつて別れはしないよ。」

「それおやアお身が立ちません。」

「立たないツたつて其樣な事で諦めてしまはれやうか。何が何でも私ア厭。お前は私なんぞより家の方を餘計に思つてるから其樣な言をお言ひなんだ

よ。それにお前、」
と事に紛れて未だ言はなかつたのを急に思出して、
「私ア大變な事になつて居るんだよ。」
「何でございます。」
お妙は言淀んで、目をそらして下を見たが半ば口の内で、
「いつかも左樣だつたから何だとは思はなかつたけれど、それが何なの。先刻乳母に。あの何が。厭だよ其樣に顏を見ては、」
僅かに見上げて、直に俯向いて顏を赧くした。佐吉は思はず、
「若し何では、」
お妙は小さな聲で、
「あゝお腹が、」
と羞かしさうに言つて、又更に耳の根までも赧くして俯向いた。
はッとばかり、佐吉は色を失つて前垂の下に手を差入れたまゝ、大息をつくより外はなかつた。

（四）

挿花の稽古にといつものやうに出て行つたお妙がいつまでもいつまでも歸つて來ないのを、何うしたのかと母のお關がしきりに案じて居た時は、手許の金が紛失して居たのを未だ知らなかつた。同時に店の方では又、一寸した用で傳馬町まで行つた佐吉の、歸りが餘り遲いので番頭の清兵衛は眉を顰めて居た。奧から女中が飛んで來て、けたゝましく清兵衛を呼びに來たのは、餘程過ぎてお關が置手紙を見出してからの騷ぎである。事は明了になつた。二人は申譯が無いので家出をしたとの由である。さういへばお妙はお召の方を着て帶も新しい方を締めて行つた。大事にして居た櫛がない。簪もない。指環もない。成程佐吉の様子が變でございました。いつの間にか着更が無くなつて居りまする。皆跡の祭だ。

主人の久四郎が、電報を得て火のやうになつて歸つて來た時は、家内のものは殆んど傍へも寄付けなかつた。昔からして聞かぬ氣の一徹で假にも筋の違

つた事は落雷の如くきめ付る。店も奥も皆なびり〳〵して居るのだ。お關も清兵衛も、待設けて實に胸を冷して居た。

眞先にお關は叱言の雨を浴せ掛けられた。平素からしてお前の躾が惡い。いくら己が嚴しくしても、蔭へ廻つては甘やかすから、とう〳〵此樣な事を仕出かしてしまつた。今になつて言譯があるかい。己は十九の年に家督を受取つて今歳五十になるまで人に後指をさゝれた事はないのだ。此樣な事があつては世間へ對しても先祖へ對しても顏向が出來ぬ。奥を預つて居るお前が前から氣が付かぬといふ事があるか。えゝ謝罪つたらそれでいゝと思ふか。此不始末を何うするつもりだ。第一何の爲に留守居をして居るのだ。年甲斐もないうツかり者と、中々こんな事どころではなかつた。

お關は一言もない。こんな苦しい思をするのも、皆佐吉のいたづらからだ。彼のいたいけな、何も知らぬお妙を誘惑して取返しの付かない事にしてしまつた憎い奴。幼少い時から目を掛けて、氣を付て遣つたをいゝ事に飽まで付上つた太い奴。義理知らず、恩知らず、畜生のやうな奴。何處までも憎くてな

らぬのは佐吉だ。とお關は一筋に佐吉を恨んだ。

淸兵衛も直に呼付けられた。これも散々な首尾である。飛沫は悉る家内のものに及んで、誰も彼も些細な事で嚙付くやうに叱飛ばされた。下男の膏藥を落したのも、子僧の顏に墨が付いたのも、女中の前垂の穴までも、すべて火花の種となつた。近くのものは混雜の中に薄氷を踏む思ひである。

八方に人が走つた。電報が飛ぶ。手紙が飛ぶ。出入の鳶頭が來る。車夫が來る。親類からも人が來る。心當りは遍く搜された。けれども行衛は知れなかつた。

立腹の中にも、澁面の中にも、久四郎の愁ひ顏はあり〳〵と讀まれる。咥へ煙管で目を据ゑて、ぢッと考へて居るやうな時でも、久四郎は決して落付いては居らぬ。食事も進まず、驚くやうに茶を飲むばかり、夜も深更まで寢られぬ樣子で、報知のある度待兼ねたやうに身を乘出して聞く。口にこそ出して言はないが、娘を思ふ心は氣の毒なやうである。

乳母は驚いた。外に仕樣もあつたものを、こんな事をなさるなら、何故前に左

様と言つて下さらなかつたらう。言つたら無體に止めるとてもお思ひなさつてかは知らないが、何んな相談にも乘つて上げたに、まア私が何うにかして、とあれほど申上げたのをもどかしがつて、此樣な氣短かな事をなさつてしまつた。それにしても何故一言でも、と隔てゝくれたのを恨んで見たが、此上は思通り、何うにか二人の緣を纏めて上げて、と裏からお關に縋つて嘆願した。お若い同士でございますから、お手荒な事をなすつては何んな間違ひになるかも知れませぬ。思合つた仲の事、お子までが出來て見れば、お慈悲に佐吉殿を引上げて、丸く納りをお付け遊したなら。と機を見ては、隙を見ては種々に言つた。兎ても、兎ても、毛筋ほども久四郎を動かす事は出來なかつた。何をいふ馬鹿め、其樣な杜漏な事が出來るものか。家を何と心得て居る。と頭ごなしに遣付けられた。そればかりではない、端なく前に二人を取持つた事が露見して、乳母は忽ち出入を差止められた。

（五）

嵐を餘所にお妙は今思通りの日を送つて居る。後も見ず、先も見ず、親を捨て、家を捨て、身を捨てゝ、此滿足を買つた。けれども其位の事はお妙には安いものだ。お妙はたゞ二人で斯うして居たいといふより外に望みはなかつた。佐吉は時々くづをれて、思出したやうに鬱込む。お妙は其まゝ、ぴつたり身を寄て、堪忍しておくれよ。私は何うしても離れる氣はないから、こんなものでも可憫さうだと思つて。と下から顏を覗込む其のわりなさに是迄も何れほどか心を動かされたらう。思はず識らず罪をも犯した。手に手を執つて逃げてまで來た。えゝ兎ても角ても斯うなつた身だ。思はれたのが嬉しくはないか。斯うして居るのが樂しくはないか。別れて必ず諦めが付かうか。まゝよ何も彼も忘れてしまへ。己はこれほどの類のないほどの美しいものを持つて居るのだ。とばかりぢつと引寄せて、最う何も考へはしません。また海邊へでも行つて見ましやう。と手を執つて、身體を持たせ合つて心と心

を搦合せて、笑顔を打交はして濱へ出た。

其隱れ家は遂に知れた。聞くと其まゝ、人手にも任せず取るものも取敢へず久四郎は自身で出掛けて行つた。生木は忽ち引裂かれて、打殺されぬばかりの勢で佐吉は取離されて、お妙は遮に無に引立てられて家に引戻されて、泣いて悶えて、何うでも佐吉と離れてしまふのなら、私や殺されてもと、お妙は情を張通して動かなかつたが、久四郎の手は鐵のやうであつた。面目なさに、疊に顏を埋めて居た佐吉の上へ、お妙は又父の手を振解いて來て、矢庭に身を投掛けて泣入つたが、それも一時、父の怒りは尚加つて、二人は遂に涙の中に引離された。

おめ〱とあとから歸つて來た佐吉は、悔に身を責められて有るに有られなかつた中で、夢にもそれと思寄らぬ事を聞いた。

外ならぬ母のお新だ。二人の始末を聞いた時は寢耳に水で氣が違ふばかりに仰天した。泣きながら大和屋へ詫びに行つたが、お關には散々に恨まれて、久四郎には見るより罵られて、又泣て歸つて來た。不孝者、不屆者これまでの

丹精は何になる。私は最う樂みも何もない。かういふ事もと思つたから、あれほど常々言聞かして置いたに、とそれから先は氣脫けのやうに泣通して居たが、せめて佐吉の身の立つやうにして遣りたい。と一方には諸方を搜がし廻つて、一方には大和屋へ、其身になり變つて魂限りの詫びをした。幾度足を運んだか、いつも萎れて歸つて來たが、何う思詰めたか久四郎へ當てゝ書置をして自害した。其中には、死んだ身に免じて、何うか佐吉の、せめて出入だけも許して遣つて下され、僭上な事ではあるが、お宅へは入れずとも、思合つた二人を連添はせて下さつたら、それこそ寔に浮びまする。と細々書いてあつたとの事である。

寺は小石川の場末、田は埋められて或製造所が建つて、まばらに新しい家が其外に四五軒出來たが見渡すところ生垣と木立と雲ばかりの人の影の稀に見える淋しい處だ。傾きかけた門を這入つて、森閑とした本堂の、處々羽目板が剝落れて壁が露出しになつて居る横手に、大小さま〳〵の墓石が累々として並んで居る。何々孩子といふ小さな墓と、何某之墓と切石に大きく刻んであ

る間に、未だ生々しい土饅頭の墓標の眞新らしいのはお新が此世の記念だ。線香の灰は其まゝに殘つて、手向の花は未だ枯れずにある。佐吉は其處へ來て變つた姿を一目見るより、身を打付けに土へ喰付いて熱い涙をはら／＼と流した。

歎きを掛けるとだけは心にあつたが、此樣な事にまでならうとは掛けても知らなかつた。如何にあせつても、踠いても再び此心の通じる時は來らぬ。何としたら此不孝の罪が贖はれやう、幼少い時から人一倍苦勞を掛盡して、其上に非命で終らせた。假令如何なる事をしても最早お詫の仕樣はない。

旦那樣は彼の通りのお腹立、それでなくとも、お店へ歸參は兎ても叶はぬ。何處へ取着く島もないのだ。お孃樣にも最う逢はれまい。逢つた處で添ふ事はとても出來ぬ。自分は身の遣場がない。よしそれは何うなるにしても、二度と返らぬ親に對して受けた恩を何としやう。

親一人子一人何を樂みに母は生きて居たか。何を望みに生きて居たか。と佐吉は髮の毛を掻毟つて身を悔んだ。墓は默として、風はうそ淋しく樒の上

を吹過ぎて行つた。取亂れて、閼伽桶も其まゝに香花も未だ手向けなかつた事を思出して、急に身を起して用意のものを供へて、力の無くなつた手に水を灌掛けながら、あゝ最う此やうな事をするやうになつたか。今一度顔が見たい。聲が聞きたい。あゝ何と言つても返らぬ事に。とばかり又新しく涙に咽んだ。

日が暮れた。佐吉は未だ其處を去らぬ。五日の月が懸差つた。未だ去らぬ。寺の大戸はやがて閉められた。未だ去らなかつた。佐吉は歸る事を忘れたのである。

明けの日であつた。近くの松の枝に溢れて居たものがある。佐吉であつた。

お妙は何も知らぬ。隙があれば飛出さうとするので、嚴しく守られて押込められて居たが、宿した兒を生落すまで、やがて叔父の家へ預けられて、そこでも油斷なく目を離されなかつた。入替り立替り、叔母と、お關と、久四郎と、さまざまにして不心得を説諭した。お妙は誰が何と言つても聞入れぬ。お關も叔母も終にあぐねて、あれほど深く思込んで居るものを、とても取直させる事は

出來ますまい。據ないから添はせて遣つて、と共々久四郎に言出した。久四郎は何處までも一徹だ。頑として首を掉つて斥げた。

幾度か駈出さうとして、幾度か見付かつて引止められて、お妙はいつそ死んでしまはうと思つた。けれども最う一度何うかして佐吉に逢つて、一目でも顏を見て死にたい。とばかり心を押へて居た。其佐吉は最う此世に居ないのだ。

月が滿ちて子が生れた。お妙は產際の、取逆上せで半ば心を失つた中で、僅かに其產聲を聞いたばかり未練を殘させない爲か其塲から引分けられて、藁の上から他所へ遣つてしまはれた。お妙は其兒の顏をさへ見る事が出來なかつた。

添金を當てに貰兒をする先は諸方にある。其兒は或貧しい家に貰はれて行つた。付けて來た金は即座に遣捨てられた。養親に乳は無いのだ。兒は飢て絕入るばかり泣立てる。お妙は日毎に乳を絞ては捨てゝ居た。

久四郎は嚴として、例の如く目を据ゑて、眉を顰めて屹と口を結んで、しやに搆

へて居た。近く頰のこけたはいよ〳〵顏を銳くして、何となく淋しげに思はれた。

月が變れば婿の何某が來るといふ。

柴栗

（一）

「はア彼の荒物屋から三軒目の何うも有難うございました。」

と一禮して行く車の上の銀杏返しの、片笑靨の、妙に婀娜ッぽい、何とも樣子の知れぬ女の後姿を、今問答をして芋屋の内儀は怪訝な顏で見送つた。車は逸早く敎へられた家の前に着いて、上の女客は樣子を作つて、裾長の御召の褄を一寸取つて下に降立つた。町の幅が狹いのに扮裝が目に立つのに、年若な容色のいゝ女といふので、向ふの鍛冶屋からも、隣りの提灯屋からも、其處等中から種々な物見高い首が出て、其首の骨は言合せたやうに此方へ押曲つた。女は一寸衣紋を直して手產らしい一包を抱へながら、

「御免なさいまし。」

中には恰度こゝの若女房が長火鉢の前に炭いぢりをして居た處で、聲を聞付

けて直ぐに立つて隔ての障子を引明けた。色白な大柄の品はないが愛くるしい顔立で、赤い手柄をかけた大丸髷もよくうつッて、粉飾の爲か何處か世帯染みない華美な處がある。

「おやまアお蓮さん。よくまア私ア何誰かと思つたよ。さアお上りな、眞實によく來ておくれだねえ。」

と昔の仲好だけに甚く珍らしがつて、直ぐと火鉢の向ふへ座を設けて、火は別に取らないよ、さアずッと此方へ。眞實によく來ておくれだねえ。」と懷かしげに、手早く茶の支度にかゝりながら、

「私もねえ、行かう行かうとばッかりでね、それは最う毎日のやうに思暮らして居るんだけれどもね、此樣な身になるとぢれッたい事ばかりで仕樣がないの。おやなにお土産他人行儀な、そんな心配をしておくれぢやア困つちまうよ。斯うして心易くしてお客扱ひもしない仲だのに、其樣な改まつた事をしておくれぢやア可けないねえ。それはまア其方へ仕舞つておくれよ。いゝえ何ッて言つても可けないよ。まアッたつてそれぢやア私が困るから。可

けないッてのに。眞實にさ。困るねえ。まア然う。それぢやア折角の何だから戴いて置かうよ。何うも有難う。こんな事をしてくれちやア眞實に濟まないねえ。」

蓮葉で、おしやらくで、二人共に元氣のいゝ娘であつた。お蓮ちやん、お組ちやん。といつも手を引かれ合つて、對の衣服を着て、對の髮に結つて、親にも隱す事をお互には耳に袖屛風を當てゝ殘らず知らせ合つて、それで長い間睦ましく日を送つて來た。其お蓮ちやんは家の都合で遠くへ引越して行つて、お組は又嫁に行くといふやうに身の上も變つて來て、それから後偶には顏を合せた事もあるが、其中お組も又掛離れた今の處へ越して來るやうな都合になつて心ならずも稍久しく打絕えて居た。お蓮の懷しさもお組と同じ事で、

「私もいつか中から何んなにか來やうと思つて居ても、やッぱり種んな事があつてね、それに家が餘り離れて居るもんだから、ちよッくら一寸といふ譯には行かないし、女といふものは厄介でねえ、まア漸つと今日來られるやうな事になつたの。眞實に昨夜ッから何樣に樂みにして居たらう。」

「然う。そんなら端書でゞも一寸知らせておくれならいゝに。早く知れりやアそれだけ私だつて樂みにして居られやうぢやないか。何しろ來ておくれだから此樣な嬉しい事はありやしない。あの何だらうゆッくりして居るんだらうね。眞實にいろ〳〵話したい事があるんだよ。」

「私も大變にあるの。」

「さういへばお前大層おめかしぢやアないか。先刻表に立つて居た時は、眞實に見違へるやうだッたよ。」

と來る時から目を付けて居た扮裝へ又目を注いで、

「いつの間にまア其樣に種々お拵へなの。羨しいねえ。お前餘程いゝ事があつたね。」

と言はれて相手は少し得意な顏で、

「なに其樣にいゝ事もありやアしないがね、でもまア前のやうぢアないの。何しろ相應に我儘も出來るからねえ。此頃は世帶知らずで寧そ氣さんじだよ。」

「結搆ぢやないか。私なんざアすッかり世帯染みてしまつて、からッきし最う仕様がありやしない。そればかりなら可いけれど、」

と言ひかけて俯向いて、急に鬱出して何やら考込む樣子を、お蓮は憫むやうな眼ざしに見上げて、

「何か氣に濟まないやうな事でもあるの。」

「お蓮さん唐突で吃驚おしだらうが、私ア最うつく〴〵厭になッちまうよ。」

と顏を上げて訴へがましく、

「くさ〳〵して、さう言つちやア我儘かも知れないが、毎日最う壽命が縮まるやうな思ひをして居るんだよ。これから何んな事があつたッて、私ア最うお前と一所に遊んで居た時のやうな面白い事は決して無からうと思ふよ。」

「おや何うしてねえ。斯うやつて居れば外に氣兼はなし內に面倒はなし、二人ッ切で水入らずで」と笑ひを含んで、「私なんざア寧そ妬ける位に思つて居るのに。」

「それが大違ひなの。お前だから言ふがね。私ん處見たやうな人は又と有

りやしないよ。」

「むづかしいの。」

「むづかしいのむづかしく無いのッて、それも一通りなら未だいゝけれど、變にひねくねして、廻り氣でしよッちう邪推で持切ッて居るだもの。」

「さうかねえ、先の家の時分一度見たッきりだけれど、其樣な風ぢやなかつたがねえ。さう言へばお前も何だかお前のやうな元氣も無くなつたやうだし、つらいだらうねえ其樣なぢやア。」

「自分の亭主だから惡く言ひたかアないけれど、尤もこりやアお前だけへの話だよ、私ア最う愛想が盡きてしまつたの。何より彼より一番厭なのは、男の癖に女よりも甚い嫉妬なんだもの。一寸買物に出たつて少し遲くでも歸らうもんなら、それこそ最う顏色を變へて詮議立をするんだよ。通り一遍の物賣りにだッてうッかり口をきく事も出來やしないの。やりきれないぢやないかね。痛くも無い腹を探られるんだから私だつて何樣に厭な心持だらう。そして男のやうにもない竊と私の用簞笥の中を改めて見たり、拔足で餘所か

ら歸つて來たり、最う人にも話されない厭な事だらけなの。私ア實に何の咎で此樣な人に連添つて居るのかとつく〴〵身に染みて思ふ事もあるよ。」

「まアさう。其樣でお前も又よく辛抱してお出だねえ。」

「さアそれもねえ。生家も前のやうならはせめて阿父樣か阿母樣か何方か生きてお出だと思切つて疾うに出戻つてしまうんだけれど、お前も知つての通り兄樣とは義理のある中だから出來るだけは厄介を掛けたかアなし、それにね、兄樣の方にも思はしくない事があつてね、良人のから用立つて貰つたお金の事もあるし、それやこれやで引掛つて斯うしてぐづ〳〵して居るがね、考へて見れば意久地がないやうで、自分ながら最う詰らなくなつてしまうよ。」

此樣な泣事を言ふ人ではなかつたが、變つた事、とお蓮は竊かに瘦の見える頰の窶れにそれとなく目を付けながら、談話に引込まれて慰めかねて居たが、

「まアさうきな〳〵お思ひでないよ。お前も餘程苦勞性になつたね。もともと根もない事なら高を括て居ればそれで可いぢやないかね。最少し圖太くおなりよ。なにお前、罷間違つたつて此家ばかりに日は照りやアしないわね。」

お組は其時よしない事を人に聞かせてしまつた。此樣な耻を明らさまに言ふのではなかつた。何も此場で。と氣が付いて直に調子をかへて、

「最う止さう。顏を見るとつい前の事を思出して愚痴になつてね、折角お出のものを捉まへて、飛んでもない事を言出してしまつたねえ。勘忍おしよ、碌でもないお相伴をさせちやツて。」

「なに其樣な事はありはしないよ。何しろ私の言ふ事に從いて、最つと氣を大きくお持ちな。」

「あゝ有難う。其氣で何か面白いお話でもしやう。」

「それがいゝのさ。いつまで生きるもんかね。鬱ぐだけ減損が立たアね。私なんざア何が來たつて平氣で濟ましたもんだよ。飛んだツて跳ねたツて、なるだけの事にしかなりやアしないから、打捨らかして置くと何うか斯うか片付いてしまうよ。氣樂なものさ。」と投出したやうに笑つて、「おや〳〵私ア自分の事を言ふのをすツかり忘れて居た。私ア又家を移したよ。」

「おや何方へ。」

「恰度先の家の裏通りになるの。町は矢張先と同じで今度は四十七番地なの。家は先より廣いから泊掛けで是非遊びにお出よ、阿母樣も段々年を取るんでお師匠樣も止しちまつてね。今ぢや私が立て過ごして居るの。働きものだらう。」

と言つて又莞爾した。お組も誘はれて微笑みながら、

「そしてお前今何をしてお出なの。」

「私アお前見たいに堅氣ぢやないよ。」

「さう、」と顏を見て。「大概分つたよ。道理で意氣におなりだと思つた。」

「お冷かしでないよ。」

と持前の片笑靨を見せて、

「どうせ又私のやうなやくざ者は、生眞面目なまだるッこい事をしちやア居られないからねえ。」

聞いてお組は興あり氣に、

「其何は、何？　官員？　商人？」

「何とは。」

「何さ。だらう？」

「獨で了解んで居るよ。水を向けると惚話けるからいゝ。」

「おほゝゝゝ、若いの？」

「知らないよ。」

「隱すだけ屹度いゝ人に相違ないよ。」

と言ひながら、思出したやうに急に小膝を打つて、

「おう何は何うしたえ、あの兼さんは。」

「兄樣かえ。」とお蓮は忽ち眉を顰めて、「兄樣にやア實に最う困切つてしまうよ。本當を言へば阿母樣だッて私だッて、引受けて立派に世話をしてくれなくッちや可けない身體で居ながら、お話しにならないほど散々に身を持崩してしまつて、行き處がないもんだから家の二階に轉がつて居るのだよ。其癖お前、いゝ技倆を持つて居て同じ象牙彫の職人の中でも、兼樣位のは中々ないと迄に言はれて居るのだから、少し氣をかへて仕事の方に身を入れてくれ

りやア、何うにだッて自由が利くんだに、それを全ッきり放擲して何も彼も亂脈にしてしまつたの。今ぢや誰も呆れて手も付けやしないやね。此樣な時になつてみじめなのは肉親のものだよ。」

「まアさう。あの堅かつた兼さんが何うして又其樣になつてしまつたのだらう。道樂をおしだといふ事は前に一寸聞いたッけが、其樣にまでおなりだらうとは思ひも寄らなかつたよ。分らないものだね。」と幼馴染の男だけに昔の種々な事を思つて、胸には言葉の外に尚入亂れた綾があつた。お蓮は重ねて、

「恰度お前がお嫁に行つた時分からぐれ出して、それからと言ふものは全て人が變つてしまつたやうなの。今遇つたら嘸吃驚おしだらう。家に居ると言つたッて居ないも同じやうなものなの。不意と飛出したッきり三日も四日も歸つて來ないで、いつも極りで身の皮までを失くなして、外聞の惡い寒さうな扮裝をして、のッそり歸つて來て、晝でも何でもお構ひなしに、寢て居るのだもの。困るぢやないか。眞實を言へば、兄樣さへ確乎して居てくれりやア、

私だツて何も。」
と沈掛けたが、直に色を直して、
「おや〳〵私でもない、詰らない事を言出したね。たま〳〵逢つたのに、泣事の廻り持なぞは下さらないぢやないかねえ。お組さん、お前が惡いんだよ、なまじ兄樣の事なんか言出すもんだから。」
お組は眞面目に、未だ其兼樣を胸に持つて、
「でも兼樣は。」
「最うお止しよ、彼樣な仕樣のない人の事なんか。」
「お前までが其樣に見離して居るの。あれほど仲が好かつたに。」と髯に手をやつて、「此中差は兼樣が慰みに彫つて、ほらお前とお對に拵へてくれたあれだよ。」
「あの時分には眞實に賴もしかつたけれど。あれ又思出させるよ、そりやア私だつて兄妹の事だものを。」
のそりと猫が歸つて來た。煙草の烟が雲になる。

（二）

目白の鐘は夢のやうに江戸川の流を橫切つて、塒を急ぐ夕烏の、幾羽か打連れて鳴過ぎるあとを、後れて一羽聲も立てず翔つて行く。空は稍、暮初めて、岸の櫻の、僅かに殘る枯葉の梢に、星の影がちらほら煌めいて來た。

辨當箱を小脇に抱へて、踊むやうな腰付で、其川添をこつ〳〵歸つて行くのは、近くの工場から今しがた出て來た職工の群の中の一人で、中の橋の袂から連に引分れて日毎の家路を迦つて行くのだ。二十四五の顏の小さい、躰格の小作りな、枯木のやうに骨ばつた男で、髮は濃く、柔らかて、艶々しいまでに美しいが、目鼻立にも、見劣りのする所は更にないが、くすみ返つて、甚だ引立ちのしない風だ。仲間の中ではひね金といふ綽名で通つて、偏窟な處から朋輩の受も餘りよろしからぬ、名は松下金五郞、お組の連添ふ男である。

「金樣ぢやねへか、今歸りか。」

と出合頭に聲を掛けたのは、唐棧の薄綿入に襟の掛つた同じ物の半天を引掛

けた、色の黒い、人の惡さうな男だ。
「爲樣か。何處え。」
言はれてぎよろりとした目に笑を湛へて、
「今日は一寸おつな事があつてね、これから飮みに行かうッてえんだ。烏勝でよ。己が奢りだ。相手は紺屋の德に、石屋の定よ。何うだい、あとから來ねえか。」
金五郎はそッけもなく、
「己ア用があるから行かれない。」
「始めたぜ、折角誘ふのに偶にやア來ねえよ。萬更毒を飮ましやアしねえやな。」と緩みかゝつた三尺を締直して、「珍らしくもねえ女房の顏ばかり見て居たつて初まらねえぢやアねえか。」
いつもの癖で金五郎は忽ちむッとした。
「大きにお世話だ。己なんぞに搆はないで早く行くがいゝ。左樣なら。」
と行過ぎるを、爲は冷笑ふやうな顏で見送つたが、又聲を掛けて、

「山の神に宜しくよ。おい、氣を付けねえ。國が繁々遣入込むツて噂だぜ。」

くるりと踵を返して、くすりと笑つて足早に歩出した。聞くと等しく金五郎は急に立止つて、振返りさま、

「爲樣、おい。」

爲は構はずさッさと行つてしまつた。

戯弄面とは思はぬでもないが、國、國が、とそれにも係はらず胸は騷立てる。さなきだに疑深い男が嘗て怪んだ國松の名を言はれて、安からぬ色は見る〳〵顏面に現はれて來た。國松といふのは金五郎の最も近しくする男で、分けてお組とも一番親しいのである。金樣、お前も餘り男らしくない。何故さう分らないだらう。いゝ加減にしないか。それぢやアお組樣が立切れない。餘り目先が見えなさ過ぎる。と番箇に異見をしたのは此男だ。お前は奎躰馬鹿堅いから可けない。捌けるやうに些少道樂でもするがいゝ、と遊興を勸めたのも此男だ。いつも喧嘩の仲裁に入つて、お組の肩を持つのも此男だ。何でも彼奴は左樣に違ひない。己もとッくに勘付いたが、いゝやうに言括め

られてしまつたのが殘念でならぬ。二人はいよ〳〵と金五郎の血は沸返つた。

脇目も振らず竹島町を疾歩して、息もつかずに小日向の我家へ差懸つたが、不意に立止つて、忍び足に家の前に立寄つて竊と樣子を窺つた。中は靜かで、洋燈の火影が一杯に上框の障子を照して居た。

流石に人目の嘲りを恐れて、脇の小窓から透見をしかけたが、背後を振返つて慌てゝ身を返しさま、手早く格子を引開けて中へ入つた。

お組はそれと直ちに出迎へて、

「お歸りかえ、今日はいつもより遲いぢやないか。」

一日の勞を慰める程な、機嫌のいゝ笑顏であつたが、金五郎は物も言はず、苦り切つてぎくしやくと上へあがつた。

火鉢の前にはちやんと座が設けてあつて、着替の着物は其脇に着るばかりになつて、火は充分に熾つて、湯はたぎつて、茶は入れるばかりになつて居る。

お組は障子を閉てながら、

「先刻國樣が來てね。」

「なにい。」

其聲が餘り鋭いので、何も知らぬお組は驚いて言葉を中止した。

「國が何うしたんだい。」

目を光らして金五郎は重ねて尖り聲に言放つた。お組はぢッと其顏を見詰めながら、

「お前何うかおしなのかえ。」

「何うしたつて可いや。何故物を言ひかけて止すんだい。」

逆らつては惡いと思つて、お組は物和に、

「なにね、先刻國樣が來てね、一寸顏を借りたい事があるから、晩にお前に來てくれるやうにッて。」

「勝手にするが可い。」

今日は髮結が來たので、お組は結立の美しいのに、簪を取替へたのも、手柄の新しいのも目に立つて、容色も爲に引立つて見える。それも誰に見せたのだと

癪に障る。點さなくていゝ口紅を點して居るのも癪に障る。變に優しくして應接ふのも、己に油斷をさせやうと思ふ腹かとます／＼癪に障る。見るにつけて金五郎は何も彼も癪に障る。

お組はかいしよらしく茶を入れにかゝつた。

「茶なんぞ飲みたくない。」

お組は尚機嫌よく、

「ぢやアまアお着替へな、そしてお湯に行つてお出な、其中にお膳立をして置くから。」

と着替を取上げて、

「さア。」

と背後に廻つて勸めるのを、ぢろりと見上げた金五郎は其まゝ目を据ゑて、

「指圖がましい事をするない、打捨つて置け。着替たけりや勝手に着替へらア、湯に行きたけりや勝手に行かア、出過者め。」

「おや惡かつたねえ、それぢやア直ぐにお燗を付けやうか。」

「五月蠅いやい。」

と手酷く灰吹に當り付ける。お組はしやう事なく口を噤んで、なまじ相手になつて居るだけ尚惡からう。と避けて臺所の方へ立つて行くと、忽ち、

「やい。」

「何え。」

とお組は敷居際で輕く振返つた。

「何故突立つたまゝで返事をするのだ。此處へ來い。」

お組は餘義なく又火鉢の前へ座つた。

「金樣、お前まア何うおしなのだえ。何か氣に障つた事があるなら、胸に持つて居ないで言つてしまつておくれな。何だか分らないから私だつて、何うする事も出來ないだらうぢやないか、いつもそれだから私は實に困つてしまうよ。」

「喧ましやい。」

と一言で叩付けたが、屹度なつて、

「おい、お組、いゝ加減に人を馬鹿にしろい。」

「まア何だよ、言つておしまひな。」

「白ばッくれるない、種はちやアんと上つて居るぞ。」

「だからそれを言つて御覽といふのに。」

「己まで白をきりやアがるな。やい、よくも亭主の顏へ泥を塗りやアがつたな、よくも己を踏付けにしたな。外の事とは譯が違はア。やい、手前は假初にも亭主持だぞ。」

「まア、飛んでもない事を言ふぢやないか、いつ私がお前の顏へ泥を塗つたよ。」

「手前の胸に聞いて見ろえ。」

「其樣な無理な事を言つたつて仕樣がないやね。はツきり斯う〳〵と言ふが可いぢやないか。私ア何んな事でも威張つた返事が出來るよ。口幅ッたいやうだがこれんばかりも後暗い事なんぞのある身體ぢやアないから。」

「うぬは己を素引いて見る氣だな、己は何も彼も知つて居るぞ。戯けるない。」

「勝手におしよ最う。」

と流石のお組も堪へかねて

「あゝ厭だ。」

と聞えよがしの獨言。又始つたよと壁隣の耳語。お組樣も可憫さうだが近所でも堪らない。と其家の女房は見榮のせぬ眉を顰めた。

（二二）

我慢に我慢を仕拔いたけれど、積り積つてお組も遂に堪へ切れず、生家の都合、身の外聞、其樣なものにとても替へられず、思切つて兄の家へ駈出してしまつた。金五郎は狂氣のやうに猛り立つたが、其癖離緣といふ事は飽まで承諾しなかつた。媒人は屢々往復する。兄も頗る調和に力める。お組は數人にさまざま說諭されたが、もと〳〵自分の出て來たのは、思案に思案を仕盡した上であるからと死力を盡して拒切つた、金五郎は又、お組の堅く執つて動かないのを聞いて、何としたか急に折れて、是迄のやうな事は決してせぬ、すべてお組の意の如くにするからとまでに言越して來たが、お組は聞かなかつた。

緣は遂に絕たれて、其後金五郎は幾度か自身に訪ねて來たが、お組は避けて逢はなかつた。

思通りに引離れたとはいふもの丶、出戾りの身の、殊に義理のある兄の家に居るのであるから、氣の置ける事ばかりでお組はたゞ鬱々として居た。けれど

も彼の金樣の傍に居て、毎日いびられるよりいくら氣樂だか。と往事に比べて其苦を免れたを竊かに喜んだ。喜んだけれど少しも面白い事はなかつた。近所の友達は多く居なくなつて、殘つて居るのもそれ〴〵縁を定めて旣子供などを拵へたのもある。お組は顔を合せる事もあるけれど、極つた挨拶ばかりでそこ〳〵に別れて仕舞ふ。お組は其當座人と談話するを好まなかつた。世間には顔を見られるやうな心持て、引込勝ちで、娘の時分の活々とした處は少しも見えなくなつた。

あゝ、此樣な時にこそお蓮樣と談話でもしたら、と憂きにつけてお組はお蓮を思出した。斯うなつてからも心配して來てくれて、種々深切に言つてくれたが、お蓮樣なら何んな談話をしても氣が晴れる。是非近く遊びに來いと言つたツけ。屹度又嬉しい事を言つてくれるだらう。と唯一の慰めを求めにお組は早速出掛けて行つた。

生憎くとお蓮は居なかつた。留守の小婢が出て來て旦那のお供で芝居へといふ。折角來たのに、まア折の惡い。とお組は力を落しながら、せめて阿母樣

とても談話をして行かう。と聞けばこれも用足しに出てお留守といふ。けれども最うそちこち歸る時分との事。では少し待つ事にと、なんならお迎ひに行つて來ましやうかと言ふのをなに其樣にしなくつても、と謝りながら上へあがつて、

「兼樣は其後歸つて來て。」

「いゝえ、最う長い間お歸りになりません。」

「まア。」

と呆れる折から裏口の戸を開けて、ズッと入つて來る人がある。小婢は直に立つて行く。途端に間の襖が颯と開いて、お組は思はず其人と顏を見合せた。薄汚れた扮装をして、髭は疎らに伸びかけて、髪も亂れきつて火の付くやうになつて居るから、甚しく見劣りがするが、何處にか其中に人を動かす處のある、丈恰好のいゝ、醜からぬ男である。

「おやッ兼樣。まア久しくお目にかゝらなかつたのねえ。」

男は、お組を見ると同時に、有得るよりは殊の外に愕として、殆んど自失したや

うである。談話には聞いて居たが、お組は目のあたり其姿を見るに付けて、以前の兼吉とは更に思はれない態に驚きながら、膝を進めて。

「だしぬけで吃驚おしだらう。今日はね實はお蓮樣が居ると思つて遊びに來たの。」

と手短かに阿母を待つて居る由を話して、

「眞實に暫くになるのねえ。此家へ來ても駈違つて、一度もお目にかゝらない中に、何處へか行つておしまひだと聞いて何んなに案じたらう。此頃はまあ何しておいでなの。」

立つたまゝ、進みもせず、座りもしなかつた兼吉は、急に愚にも付かぬ笑聲を洩して、

「はゝゝゝ御覽の通りだ。寢る處がなくなつたから又妹の處へ食倒しに來たやうな次第さ。いつも太平樂だよ。飮んだくれでも生きて居るから奇妙だ。御免よ、眠くッてならねえから。」と小婢に向つて、「おい稚少。何とか言つたッけえな、左樣々々お豐だ。豐公、二階は明いて居るだらうな。」

とずか〳〵階子段の下へ行つた。

「あれまあ兼様、まアお話しな、抛出して行くのは酷いぢやないか。」

とお組は急に押止める。兼吉は引返さうともせず振向いて、

「折角だが何にも話す事がねえ。女は嫌だ。其氣で構つてくれねえが可い。

己ア寝るんだから。」

「まア、酷い。お前幼稚い時分からの事をお忘れなの。」

兼吉は默つて二階へ上らうとする。お組は立つて、駈寄りさまに兼吉の袂を

捉へた。二人は顔を見合せた。

「兼様。」

とお組は思餘る目にぢッと見上げる。兼吉は俯向いてしまつた。

「後生だから少しの間私の話を聞いておくれな。」

兼吉は返事をしかねるやうであつたが、

「厭だ。」

と振切らうとする。

「何故其樣な事をお言ひのだらうねえ。私アお前を肉親の兄樣のやうに思つて居るのに、お前は私の心が分らないのかえ。」

兼吉はお組の顏を見返したが、何とも言はぬ。

「まアお聞きよ。」

とお組は隔てもなく手を執つた。兼吉は急に引かうとしたが、お組は無理にもとの座へ引張つて來て下に据ゑやうとする。さながら荒くも振切らず、兼吉は遂に不承々々のさまで其處へ座つた。

「兼樣。」とお組は口を切つて「お前に遇つたら言はう〳〵と思つて居たんだけれど、今迄折が無かつたので、つい言ふ事が出來なかつたがね、お前まア昔馴染の私だけに惡く思はないで聞いておくれよ。何うせそりやア女の言ふ事おやアあるし、人の前で大きな口もきかれない出戻りの私なんぞには出過た話だけれど、」

「なに出戻りッ。」

と兼吉は思掛けぬやうに屹とした。

「おやお前未だ私の事をお知りでないの、私ア面目ないやうな事になつてしまつたの。」

「うむ」

兼吉の顔色は變つた。脣は屹と緊つて、目は据つて、其まゝお組の居るのも忘れたやうに何事か深く考に沈んだ。

「兼樣。さう言つちやア何だけれど、何うして其樣に亂暴になつておしまひなの。お前の事だから、此樣な事を言はなくても分り切つてお出だらうが、いくら何でも餘りぢやアあるまいか。すれば出來るいゝ技倆を持つて居ながら、まア何うしたといふのだねえ。そりやア成程したい事をおしなのも可いけれど、爲るなら爲るやうに身の始末をちやんと付けて、立派に爲るやうにしたら可いぢやないか、此樣にして居て此末何うする積りなの。阿母樣だツて、お蓮樣だツて今ぢやア怒つておしまひだけれど、お腹の中ぢやア何んなに悲しからう。些少はお前自分ばかりの身躰ぢやアないといふ事を考へておくれな。私のやうなものゝいふ事だから、腹が立つかは知らないけれど、何うぞ

ねえ少し心を取直して辛抱する氣を出しておくれな。私のやうなものでも、お前が此樣な風でお出だと、昔の事を思出して眞實に悲しいよ。」

兼吉は不意に顏を上げた。それには答へず、

「お組樣、己ァお前に話したい事がある。聞いてくれるか、え、聞いてくれるか。」

樣子も改まつた。お組は輕く、

「あゝ何でも聞くよ、お話しな。」

「ぢやァ一寸二階へ來てくれねへか。」

「え、此處で可いぢやないか。」

「此處ぢァまづい。詰らねえ事だけれど、お前にだけ聞いて貰ひたいんだから。」

「そりやァ行くがね。」

とお組は少し考へる樣子。

「ぢやァ來てくんねえ。」

と兼吉は先に立つた。お組は身を起したが、何となく落付きかねて見えた。

二人は二階へ上つて行つた。小婢は怪訝な顔で後を見送つたが、長い欠伸をして腋の下から兩手を懷へ差込んで、ぽちねんとして座つて居る。

（四）

「お組様、外ぢやアねえ。如何にも己は馬鹿を盡した。その馬鹿を盡すまでの成行を、お前に聞いて貰はうといふのだ。笑つてくれねえて、少し耳を貸してくんねえ。

己ア言惡い、言惡いがお前の話を聞いて、無暗にぶちまけてしまひたくなつたのだ。己がぐれ出して無茶苦茶になつて、此樣なやくざになつてしまつたのも、もとはと言へばお前から起つたのだ。

未だ親方の處に居る時分だ。ちよく／＼家へ歸つて來る度に、お前に逢ふのを何んなに樂みにして居たらう。お蓮をだしにして、お前の顏ばかり見ちやア一人で喜んで居た。お前も間違つて優しくしてくれた。なまじ如彼いふ風でなかつたら、萬更脈があるやうに自惚れもしなかつたらうが、いつかは己の物になるやうに一人でのみこんで。耻かしいが己ア實にお前に迷つて居た。

朋輩の弟子共は最う道樂を初める時分で、己も種々に勸められたもんだが、お前より外に女は無えやうに思つて、全ッきり其方へは足も向けず、末を樂みにして仕事にも精を出すし親方にも譽められたが、それもお前といふ山があつたからだ。

それまでに思つて居ながら、あの時分は未だうぶで、お前に向つて外の談話はすら〳〵出來て、隨分冗談口もきけたんだが、それを言出さうとすると、妙に手重くなつて、舌が剛ばつて、怯氣が付いていつも止してしまふ。外の仕打で己を嫌つて居ねえ樣子を見て、敢果ねえ馬鹿な喜びやうをして居た。下らねえ談話だ。

其の中に禮奉公も僅かになる。一本立ちになるやうになつたら、かうして、あゝして、と胸に詰まらねえ仕組をして居た眞最中だ。親方の用で何處かへ行つた歸りがけに、家へ寄つて突如にお前の緣談が極まつた事を聞いた時は、あゝ彼時の心持を今言ふ事が出來ねえ。

それから先のやけ道樂だ。何も彼も手に付きはしねえや。片時も眞面目な

事をしては居られねえ。身を崩して、崩して、崩しぬいた。お前の知つた事ぢやアねえけれど、係合だけに左様かとも思つてくんねえ。己ア口惜しいほどお前を思つて居たんだ。」

と兼吉の談話はこれであつた。お組は始めて彼の意中を知つたのである。夢にもそれとは思はなかつた。二人の間を言へば長い事で、互の心を結ぶべきものは種々にある。談話の途中からお組は眞赤になつて、初心らしく顔も上げられなかつた。

聞くほど氣の毒のやうな、言はれるほど、尚つらいやうな、居苦しい思ひでぢッと聞いて居た。けれども何うしやう、最う取返しの付かない事だ。

「兼様、私ア何と言つて可いか分らないよ。愚痴を言ふやうだけれど、何とか前に言つてゝくれなら、私だッて彼様な處へ、と言つたつて初まらない。今になつちやア最う仕様がないぢやないか。私も此様な疵の入つた身體になッちまつて、」

突と兼吉は膝を進めた。

「そこだ、聞いてくんねえ。人は何うだか知らねえが、己ア其樣な事でお前を見替へるやうな、其樣な淺果な心入ぢやアねえのだ。己アお前が何樣な身になつても心が變るやうな事は決してねえのだ。お前の今言つた事が眞實なら先刻下で言つてくれたやうに案じてくれるほどの氣があるなら、出來るなら此先を己ア腹の中を露出しに言つてしまふ、不承だらうが其身體を己にくれねえか。己アそれで蘇生へるのだ。もとの兼吉になる事が出來るのだ。事が極まりやア身の仕末は何うにでも付ける。世間にひけは決して取らせねえ。何うだお前己の一生の頼みだが聞いてくれるか。」

斯うなつた身をも厭はず、それほどまで思つて居てくれるのかと。お組は何とも、言ふに言はれぬ心持がした。前の前から、決して惡く思つて居なかつた人、いゝ事があれば共に喜び、惡い事があれば、人事でないやうに案じもした。其人にこれほど思はれて、何で厭な心が起らう。お組は竊と兼吉の顏を見上げた。固唾を飮んで返事如何にと息をもつかず待構へて居る兼吉の、溢れる

ばかりの熱心の顏は、如何に深くお組の心を動かしたらう。

お組は身に有餘るほどに思つた。流石に口籠つて、又更に顏を赧めながら、

「そりや私でお役に立つ事なら、」

「えッ聞いてくれるのか。」

と兼吉は飛立つやうに、矢庭にお組の手を執つて、思はず識らず淚をはら〳〵と濺掛けた。

「有難え。笑つてくれるな、己ア實に何と、何と言ひやうもねえ。」

「兼樣、お前私のやうなものを其樣にも、」

お組は是迄に、甞て覺えない心地を覺えた。身體は自分のものでないやうで、胸が何となく一杯になつて、殆んど坐にも堪へられないやうであつた。

「それを今言つてくれる事はねえ。己の心は始ッから斯うだ。」

お組はつく〴〵、

「堪忍しておくれよ。些少も知らなかつたんだから、其代り是から先、私の身にかなふ事なら、お前の思通り何んな事でもするから、」

「其言葉で澤山だ。己ア最う何も言ふ事アねえ。あゝ今日が今日まで、己ア自分を捨物にして居たが、」とお組をぢッと見て、「おい此禮返しは屹度するよ。これから先の己の捌きを見て居てくんねえ。」

「何のこれにお禮なんぞ、私こそ何んなにしても盡さなければならないのだわね。」

實と實とで、思ふさま仲好くして行つたら、此先何んなに嬉しからう。とお組は前の世帶に引比べて、今から最う眞に待遠しいやうな思であつた。

（五）

指谷町の、今は軒が立並んで居るが、未だ其時分は一面の原であつた。月は今本郷臺の家と森とを薄墨にして其處の枯草の上へ冷やかな光を投掛けた。暮れて未だ程もないが人通りはぱつたり絶えて、先刻植木屋の職人らしい男が二人連で掃除町の方へ拔けて行つた後は、誰も通らぬ。霧は漸く深く立籠めて、白山あたりを流して歩く按摩の笛が、幽かに風に連れて來る。寒い晩だ。三時頃に本郷まで買物に出て、序でに一寸用足をしたので遲くなつて、お組は家路を急足に恰度其處へ差懸つた。昨日お蓮の家を出てから、お組は全で生れかはつたやうになつた。急に元氣付いて、譯もなく笑つて少しもぢッとしては居ない。買物に行つた最初の店は小間物屋だ、其處で紅と白粉と根掛とを買つた。お組は今朝から急に又おしやらくを始めた。それから其足で直に呉服屋へ廻つて、其處で男物の羽織地と裏地とを買つた。それを兼吉に着せやうといふのである。

歸つたら直に、裁つて、縫つてと心はそゞろに急がれて、前屈みの刻足に原の中程を行過ぎる途端に、

「お組、」

突如に向から呼掛けて突と馳寄つた男がある。金五郎だ。

「お組い〻處で逢つた。今お前の家へ行つた處だ。」

包んで居るのか、穩やかで優しかつたが、お組は少しもい〻顏をしなかつた。あれほど人を虐めて置きながら、今更未練な、男らしくもない。と前の恨みを忘れかねて居る上に、今お組の心を奪つて居るものは、これまで全く覺えのない何にも替難いものであるのだ。お組は金五郎を見るにつけて、却つて快からぬ思を增した。不興氣に、つんとして、

「私アお前さんに用のある譯はありませんよ。御免なさい急ぎますから。」

と其まゝずッと擦違はうとする。金五郎は前に立塞がつた。

「お組、己が惡かつた。免してくれ。腹も立たうが斯うやつて度々足を運んで居るのだ。今は他人だらうが、一度は繫がつた、緣の好誼だけに、賴みだ、少し

の閒話說を聞いてくれ。」
飽まで下手だ。其言葉は胸に入らないでもなかつたが、お組は只、一時も早く此人の前を去りたいのだ。止められるだけそれだけ氣に逆らつて、
「通して下さいよ。これでも用のある身體です。」
「さう言はないでまア聞いてくれ。」
「何も今になつてお前さんに聞く事はありません。邪魔ですよ退いて下さい。」と捨鉢に、
「そりや度々足をお運びなすつたらうさ。けれどもそれはお前さんの勝手だ。私の知つた事ぢやありやしない。」
身をかはしてずッと行つた。金五郎はむづと其袂を摑んで、
「後生だ拜むから。」
「知りませんよ、お離しなさい。」
「おい、」と語氣は稍荒くなつた。「男が頭を下げてこれほど賴むのだ。鬼でも蛇でもなからう、からうまで耻を搔かしてくれるにも當るまい。」

お組は棒立ちに立つたまゝ、ぢろりと見たばかりてある。金五郎は又折れて、

「然し前を言へば己が惡かつたのだ。かうされてもいゝ筈の事があるのだ、お組、何處までも己が惡かつた。よく〳〵左樣思へばこそ、斯うやつて男を潰して笑はれるのも承知で、度々お前の家へも行つた。此處でも此樣にへたあやまりに謝罪つて居るのだ。己はついぞ人に向つて、此樣にまでして詫を言つた事はない。如何にもお前が氣の毒と思つたからだ。己は實に始終邪推ばかりしてお前をいびり通した。然しそれも決して意地惡くやつた譯ぢやない、お前を思過したからだ。そこを汲んで少しは可憫さうだとも思つてくれ。あゝ實に己は惡かつた。お組免してくれ、己は此通り謝罪る。お組これほど謝罪つても堪忍は出來ないか。己は今後決して前のやうな事はしない何んな事でもお前の言ふまゝにしやうから、何うかふしやうして元の鞘に納まつてはくれまいか。何も隱さずに言ふが、お前に分れてから、自分ながら馬鹿のやうに一日もお前を忘れる事が出來ないのだ。此寠れ方を見て察してくれ。お組頼む、何うか我慢して最一度縒を戻してくれまいか。」

お組は流石に氣の毒だと思つた。思つたけれども動かされなかつた。一面には兼吉の事を浮べて、何だか身を責められるやうな心地がする。一面には昔の苦しさを浮べて、とても、何と言つてもあの氣性が直るものか。厭な事、と思ふのが先に立つて、其言葉も何を言ふのかとも思はれる。未練らしくも思はれる。意久地がないやうにも思はれる。前とは打つて變つて、人を馬鹿にしたやうにも思はれる。どの道お組は元へ歸る氣はないのだ。あとを考へて態と手強く、

「お前さんも男らしくない。濟んだ事をぐづ〳〵とあとを引くだけ器量が下りますよ。私一人が女ぢやあるまいし、外様をお當りなさるがいゝ。」と執られて居る袂を絞つて「さ離しておくんなさい。私やいつまでも泣言を聞いて居るやうな閑人ぢやありませんよ。」

「其様ならこれほどに言つてもか。」

「くどいねえ。」

力を極めてぐッと袖を引離して、見向きもせずばら〳〵と駈出した。血相變

へて金五郎は、忍びに忍んで居た怒を一時に發したるかの如く、飛付きさまに取つて押へて、

「うぬア眞底心が變つたな」

逆立つ髮の毛怒れる眉、睨据ゑたる眼の光、お組は忽ち、

「あれー、誰か來て下さいよう。」

「うぬ何うするか見やアがれ。」

「あれー、人殺しッ、」

呼ばせも敢へず引づり倒して、履いたる下駄を取るより早く、怒に任せて二打三打狂氣の如く打下せば、額は忽ち裂破れて、颯と亂れる血汐と共に、中より二つに折れたる得物、益々怒る金五郎、血走る眼に忙はしく、見廻す傍へに手ごろの石塊、掴む諸共振下す目とも言はず鼻とも言はず口とも言はぬめッた打、尚も打たんと振上ぐる途端に迫る背後の靴音、

「こら待て何をするかッ。」

此場は遂に此樣な事になつてしまつた。

お組の受けた傷は、非常に重かつた。絶え〳〵の息の下から、兼様を、兼様を、と辛くも呼んでくれとの意を通じた、兼吉は電報を掴むと其儘、宙を飛んで駈付けて來た。お組は僅かに見る事を得る片目を開いたが、物も言はれなかつた。

寐覺

(一)

二次會の盃は吾が先棒に立つて擧げたのだ。宴を徹して車に搖られながら我家近く差懸つた頃は夜も餘程更けて居た。何處の町でも起きて居る家は一軒もない。霜は白く置渡して、物凄まじげな下弦の月は、光を据ゑて都會の寢姿を打目守つて居る。時候の上に醉醒際で寒さは骨に徹する程だ。二重廻しの襟を立てゝ、頭巾目深かに、袖をかたく引纏つて、車の上に吾はまじ〳〵と車夫が吐く息の、白く霧を結んでは消えて行くを見て居たが、不圖思つた。さぞ迷惑に感じて居るであらう。此寒空に、斯く遲くまで待たせられて、雇はれた身の悲しさには、一言の不平を鳴らす事も出來ず、身を挺し足を空にして飛廻はる、それも何かと言へば益もない我が逸樂の爲だ。昨夜も斯うであつた。車に乘るもの、挽いて行くもの怪しげな天分だ。彼は名を平吉といふ。

母もある。妻もある。待たれて居るであらう。と少し眞面目になる途端に、

「あ痛ッ。」

躍上つて平吉は立止つた。

「何うした、踏拔きでもしたのか。」

「へえ。」

と身を屈めて、片足に立つた古釘のやうなものを取捨てた。

「甚く痛めたか、なんなら降りてやらうか。」

「えなに宜しうございます、最う直てございますから。」

其まゝ彼は又驀直に走出した。氣の毒な、と思ふ中に我家の影は逸早く目を襲ふ。門は開放してある。玄關の障子にぱッと燈火がさして居た。勢よく門内に引入れて、

「お歸りーッ。」

梶棒を下すと同時に叫立てた平吉の聲より先に、颯と障子が開いて、書生の内田、高梨、後れて仲働の清も共に出迎へた。皆起きて居たのか。次の間に外套

を脱ぎながら、時計を見れば既に一時に近い。部屋へ通つた。歸る時刻を計つて、火鉢に入れてあつた火は半ば灰になつて居た。淸はかいしよらしく、火を搔起して炭を加ぎかける。

「遲くなつて氣の毒だな、眠かつたらう。」

「いゝえ些少も眠くはございません。あの、お茶を召上りますか。」

「うむ、紅茶がいゝな、ついでに林檎を出してくれ。」

內田は留守に來た手紙と、訪ねて來た人々と其傳言を委細に通じた。其中の一人は昨夜も留守に來た男だ。明日また來ると言つて歸つたさうな。これも氣の毒だ。

「よし、皆退がつて早く寐るがいゝ。」

御機嫌ようの挨拶して皆部屋へ引取つた。手紙は三通ある。二つは職業の上の用事だ。あとの一つは廣島に居る親友の佐久間から、今度新婚に付いての前後の樣子を、情の行くまゝ事細かに報じてよこしたのだ。長い、丈に餘るほどの手紙を、其場を見るやうに、さも愉快らしく書續けて、近く手を引かれて

上京するが、妬いてくれるな、笑つてくれるな。君に見せたい、鴛鴦だよ分つたかい鴛鴦だよ。と目尻を下げた文言である。

面白く讀終つたが、首を上げて、壁に掛つて居る油繪の肖像を見て思はず歎息した。繪は近く寫眞に據つて書かせたのだ。寫眞よりも美しく、寫眞よりもよく本人に似て居る。黒味勝の、少し力んだ、凛とした目の冴から、しなやかな眉のかゝり、笑つて居るやうな頬のあたり、口元、鼻筋、襟首から肩へかけて見るほど其まゝである。名は絹と言つた。其名の響きも我耳には如何にもよく聞える。此時十七今は二十一になる。何處に何をして居るか。いつ又佐久間の如き身になる事を得るであらう。或は遂に再び逢ふ事も出來ぬのであらうか。

繪は物言はぬ。物言はぬけれど笑ましげに吾を見て居る。我心の傷みはこれだ。幾度かこれと相對して、幾度か此堪へられぬ思を馳せたらう。心にもない遊興に悶を遣つて、僅かに欝を慰めて居るが、更に、更に面白くはないのだ。いつもの、底の知れぬ淋しさを覺えて、稍、久しく悵然として坐して居た。湯の

沸騰つたのに心付いて、役目のやうに茶を飲んだが、味も分らなかつた。二時の時計に氣付けられて、寢やう、とばかりで次の寢間へ行つた。しよんぼり立つて居る屛風に圍はれて、物淋しく寢床が取つてある。寢衣に着更へて、例の侘びしく、丸くなつて寐た。

（二）

相の鵠沼に、今は其時分と趣を異にして居るが、引地川のほとり砥上が原の方へ寄つて、誰の目にも着く物數寄な別莊があつた。茅葺屋根に、撥釣瓶といふ侘びた作りで、周圍を池にして、橋を面白く掛渡して、小鴨を幾羽となく飼付けてある。梅から始めて菊の末まで、手廣い庭は眺めに自由で、鏡のやうな、海を前に、相摸と伊豆の波の限り、沖の白帆、幾島蔭、近くは大山、足柄、箱根天城の續き、富士の雪は小松の上に雲を拔いて、濱の眞砂の、舟から岩から、網干すあたり、苫屋の烟、磯の此方を汽車が馳せて、松の樹の間に隱れて行く、斯ういふ處だ。

吾が此別莊を始めて見たのは今からた年前の二月の初めてあつた。未だ親がゝりの氣まぐれ盛りの、愉快に笑つて、愉快に騷いで、米の直も知らないで、質の味を知つて居る頃であつた。不圖ｒた感冒から、氣管支炎を起して、漸く枕を上げた病後の保養に、何處か空氣のいゝ氣候のいゝ、閑靜な海濱あたりへ暫く行つて居れといふ醫師の勸めで、逗子か、大磯か、熱海か、靜浦か、それとも飛ん

て須磨にしやうか。と定めかねて居た處へ、友の一人が頻りに此鵠沼を說いた。吾も其處は始めてゞ、近くもあり便利でもあり、何かと都合がいゝので行く氣になつて、早速旅裝を整へて出發した。來て見ると、友の言つた通り幽靜な、思ふに違はぬ處であつたので、いゝとなると無上によくなる吾の事であるから、甚く氣に入つて心面白げに一先づ身を落付けた。彼の別莊は我宿に庭を隔てゝ隣合つて居たのだ。

吾が部屋は南に取離れた一棟の、二階の角の見晴しのいゝ座敷で、其庭は直ぐ目の下だ。着きたての物珍らしさに、欄に倚つて眺めに耽つた時、あまた其處等に散見して居る別莊仕立の中に、此家と此庭とは殊に目を惹いた。誰の持物か。心憎い住みなし振だ。と目も移さず眺入つて居た。主は來て居らぬと見えて、座敷の雨戶は殘らず閉めてあつた。勝手の方に留守居の夫婦らしいものが、女は水を汲んで、男は薪を割つて居た。裏の椿の花が、跡から跡から水に落ちて靜かに流れて、例の鴨が其中を搔分けて行つた。

家の婢が來た序でに誰の家と何氣なしに聞いて、東京の、中井といふ唐物問屋

の控家といふ事を知つた。何にしてもいゝ家だ。いゝ庭だ。ならば彼處を貸してくれると、と下らぬ考を起したりなどして、出這入につけて目に入れる度、兎角其風情に心を取られて居た。

三日目の朝、不圖見ると昨日まで閉めてあつた雨戸が悉く開いて居た、庭は其爲に更に引立つて見える。留守居の夫婦は忙しげに、庭を掃くやら、縁を拭廻すやら、朝まだきからさゞめき立つて働いて居る。それも午前の中に終つて、其後はひツそりとなつた。吾は醫師の忠告通り晝から又散歩に出て、歸途を其別莊の前に取つて其處まで來た時、三輛ばかりの空車が門を出て藤澤路を歸つて行く後影を見掛けた。あ、主人が來たのだな。と思つて、池を隔てゝ松の彼方の玄關先を見込んだ。誰も居なかつた。

宿へ歸つて、裏梯子を上つて吾が部屋の横手へ出て、何心なく隣りの座敷を見下して俄かに立止つた。縁の柱に身を持たせて、未だ若い、無法に姿のいゝ、東京仕立の、盛裝した婦人が立つて居た。其人だ、今我家の油繪になつて居るのは。

距離が隔たつて居て、仔細に見る事が出來ないので、不躾であつたが、部屋へ入つて雙眼鏡を取出して來て、竊かに見た。ありくと睫毛の末まで鮮やかに目を射る其立姿。吾は幾度も。これほどの年頃の、公平に言へばこれほどの容色の女を、數へて忘れるほども見た事があるのだ。今更珍らしい事は少しもないのだ。それにも關はらず、吾が心は是迄覺えのないやうに轟いて、其まゝ目鏡を取離す事が出來なかつた。尚も見た。脇目もふらず、穴の明くほど見て、いつまでも、いつまでも飽く事を知らず見て居た。彼人も何も知らぬ、やがて柱を離れて、庭に下立つて、靜かに木の間を池の方へ歩を移して、橋の中程へ來て佇立んで居た。吾が目鏡はたゞ其影を追ふばかりである。

「貴郎何を見て居らッしやるの。」

と不意に耳の傍で聲を掛けられて吾は驚いて振向いた。いつの間に來たか、宿の婢が脇に立つて居た。お政とかいふ、東京出の、小柄な、二十二三の、色の白い、鼻の高い、思切つて目の太きな、丸顏の、笑ふと深笑靨の入る女だ。重ねて、

「何を見て居らッしやつたのですよ。」
知つた顏に人を見て妙な目付をして笑つて居た。
きまりが惡かつたが、隙かさず、
「あはゝゝゝ、」
と笑落して、態と平氣な風で、
「ありやァ何だい。」
目顏で知らせて訊ねかけた。お政は尙にこ〱笑ひながら、
「あれとは、」
「えゝ、ぢらすな、知つて居る癖に。」
「だッて、あれとばかりでは分りませんもの、何ですよ眞實に。」
「ちよッ、何うでも己に言はせやうといふのか。彼處に立つて居る女の事だ。」
「おほゝゝゝ、可笑しい事。」
袂を口に當てゝ、鯨のやうな目をしてお政は吾を見上げた。
「何が可笑しい。」

「貴郎今まで彼の方を見て居らしッたの。」
「其樣な事は何うでもいゝ、あれは彼家の娘かい。」
「まア見た事から片をお付けなさいよ。今迄彼の方ばかり見て居らしッたの。あんなに見惚れて。」
「五月蠅いな。あんな女を何うするものか。」
「まア、知らないかと思つて、其樣な事を仰有ると私が見て居た通り下へ行つて皆に言付けますよ。貴郎、私がいつ此處へ來たか御存じですか。」
吾は全く知らないのだ。腹の中では飛んだ處を見付かつたと思つたが、
「知つて居るとも、」
「知つて居る方があんなに夢中になつて、よくあんな思切つたお顏付をなさいましたね。」
「態として見せたのさ。何うだ巧妙いものだらう。」
「巧妙いの何のッて、其御樣子ッたら、眞實に見て居られませんでしたよ。」
「すッかり擔がれたね。」

「全くですよ。貴郎一寸背後の領の處へ手を遣つて御覽なさい。」

「何だ。」

とばかり手をやると、いつの間に惡戲をしたか、長く切繋いだ紙片が領の中に挾んであつた。

「おほゝゝゝ、」

お政は手を打つて囃立てゝ、凱歌を奏してばたばたと逃げて行つた。いや酷い目に遇つた。

（三）

暮れて主人の許から泊客へ、晩に下座敷で義太夫の催しがございますから、お慰みに聞きにお出遊ばせ。とお磯といふ丸まッちい婢が觸れて來た。聞けばもと宿の手代をして居た男が、流れ渡つて藝人となつて、今東京に見臺を控へて居るのが、今度此最寄へ來た序でに昔の緣故で宿へ顏出しをしたのだといふ。幸ひお客樣に聞かせろとの譯で我等は招かれたのだ。田舍の事でそれも物珍らしいので、何も一興と行くつもりで居た處へ、又迎ひが來た。今度はお政がやつて來た。

何か面白い事のあるやうに、恐悅顏で先に立つて案内して行く途中で、

「吉田樣、貴郎、何かお奢りなさいよ。」

「何故、」

と吾は振向いた。お政は上目遣ひに尚笑ひながら、

「何故でも、お奢りなさる事があるんです。あとでお禮を屹度して戴きます

よ。」

「まア何だよ。」

「何でも可うございます。直に分ります。」

下座敷の廣間を三つばかり打拔いて、招かれた人々は最う大勢集つて居た。正面に高く床が出來て、燭臺、見臺、火鉢、湯呑、何か仔細らしく用意が整つて居る。太夫は未だ出て來ぬ。

「何うぞ此方へ、」

と左手に設けてある席の空いた處へ導かれて、隣りの坐蒲團に坐つて居る人を不圖見て思はずはッとしてお政を見た。お政は弗と咽で笑ひを押殺して脇を向いた。奢れと言つたのはこれだ。

隣りに坐つて居たのは、先刻見掛けた彼の別莊の婦人だ。背後に二人、餘り品のよくない、女中らしいのが付添つた居た。一人はずんぐりとした、首の太い、髮の赤い團子に目鼻を付けたやうな年の若い女で、一人は中肉の中低の、目尻の下がつて道化た顏の女で、丸髷に結つて、れい〳〵しく銀の指環を嵌めて居

た。

後で聞いて知つた。此夜は近所の人々をも招いたので、隣家の主人には前から宿は贔負にされて居たのださうだ。彼の乙女は先妻腹の一人娘で、名はお絹といふ事をも其時に知つた。

「御免なさい。」

と會釋して吾は隣りの席についた彼方もしとやかに頭を下げる、得ならぬ蘭麝の香りが颯と來た。吾は其顔をよくも見る事が出來なかつた。座に直つた時背後から、

「お孃樣、あのお簪が落ちますよ。」

と伸上るやうにして、肥つた方の婢が拔けかゝつたのを注意した。

「おや、さう、」

と美しい手を擧げて、少し首を傾げて、挿直しさまに吾を見た。吾もそれとなく見た。眼を見合せて見入る間もなく瞳を逸らせた。何を恐れたか、吾は周章てゝ居た。

お政の作略か我等の間に、手焙が一つ、兩方からあたるやうに置いてある。あやしく手が出せなかつたが、馬鹿な事を、と思返して、急に差翳しながら、身を捻向けて話掛けた。拙い物の言ひやうであつたが、

「失禮ですが貴娘は慥かお隣りの、」

「はい、今日參りましたのでございます。」

低い聲であつたが、はッきりとして、能く徹る、言はれぬ美音であつた。

「お遊びにいらッしやつたのですか。」

「はい身體がすぐれませんので、暫く此地で保養致さうと存じまして、」

何處も惡いやうな樣子ではないが、其樣な事を聞くでもないと思つて、

「お宅は誠に結構ですなあ、お庭續きで恰度私の今居る部屋の前からよく見えますので、每日拜見してはいゝお家だと終始思つて居りました。」

「いゝえ最うお恥しい處で、祖父の好みで建てたのでございますが、一向何の風情もございません。」

しなしは左樣でもないけれど底に力のあるやうな、思つたよりませた言葉付

であつた。すると丸髷の方の婢が、脇から一寸會釋して、
「あの貴郎樣は何方からお越しでございます。」
「私ですか、」と吾は勉めて氣さくに、「私も東京から病氣揚句の養生に來て居るのです。お前さんはお女中ですか。」
「はい、お孃樣のお供で參りましたのでございます。お蔭でいゝ氣保養を致します。東京に居りましては、なか／＼斯うやつて悠々と遊んでは居られません。お孃樣は度々で面白くないと仰有いますけれど、私共は何も彼も珍らしいものだらけで一々面白うございます。」
と此女なか／＼の多辯だ。彼の頓興な、洒落に付けたやうな下り目に奇怪な光が出て、口の端は鐵醬を付ける時のやうにせはしなく働いた。
「それはいゝ、お供をしてお出だ。」
と吾は老人らしく其時分の年にしては高慢臭く言つて、今一人肥つた方の、物も言はず人の顏ばかり見て居る婢に、
「お前さんもお供でお出なのかい。」

「左様でございます。」

とこれは又口數もなくこれ切てある。丸髷は直ぐ、

「此地も夏になりますと大層賑やかで、いろ〳〵な方がいらッしやつて、寔に面白いさうでございますね。此夏は是非又お供を願はうと思つて居ります。貴郎樣は未だ暫く御逗留でございますか。」

「まア身體が元のやうになるまで、飽きる迄と思つて居るんだが、兎角一人と云ものは淋くつて可けませんよ。」

「私共は女ばかりでお話相手にもなりませんが、ねえお孃樣、偶にはいらッしやつて下さるとようございますねえ。」

吾はそれとなくお絹の氣色を窺つた。お絹は笑ひを含んで、

「折角お出でなすつても、お待遇ひ申すほどのものが何もないから、」

其時八方から拍手の聲が割れるやうに起つた。太夫が現はれたのである。

(四)

「貴郎、お禮を仰有いよう。」

あくる日の朝、お政は茶を運んで來た序に吾を見て、持前の深笑靨を見せた。

「昨夜の事かい。」

「知れた事ですわ。」

「何を上げやう。」

「あら、私は慾徳づくで彼樣なおせッかいをしやしませんわ。けれども貴郎は、」と又笑掛けて、「何を下すつてもいゝでしやう。」

「先づね。」

「冗談のけて、貴郎は眞實に何なの。え、さうですか。」

と稍眞面目であつた。吾は笑つて、

「何とは何だい。一人で了解んで居たつて分らないぢやないか。」

「貴郎眞實の事を仰有いよ。え、さうでしやう。」

「さうとして置かうかね。」

「厭、其樣に茶にして居らしつちやア。私ア戯弄ふ氣で言つてるのぢやありませんよ。此樣なじやうだんものですけれど、これでも偶には本氣になる事もありますわね。あらまだ彼樣な顏をして居らッしやるよ。まア仰有つて御覽なさいまし。いゝぢやありませんか。昨日の事だつて誰にも言やしませんよ。いくらお隱しなすつてもたゞの御樣子ぢやないんだもの、え、仰有いな。聞いたばかりで笑つてしまふつもりなら、此樣に種々な事を並べはしませんよ。私にだつて口もあれば手もありますもの、何うにかして上げやうと思ふんですよ。けれども餘計な醉興ですかね。」

言葉のうちには多少力を籠めた節もあつた。吾は其意を解しかねたのである。初めは冗談らしくあつたのが、俄かに變つて來たやうな思ひでよく見れば、宿屋の婢並とは何處か違つた處もある。妙な女だ。何の爲に、言ふ通り醉興な深切氣を出したのであるか。

「さう急に眞面目になつて言はれると挨拶に困るぢやないか。子供ぢやあ

るまいし、政ちやん抱ッこととも言はれまい。第一お前何で此樣な事にさう肩を入れてくれるのだ。」

「私ア斯ういふ性分なのですよ。些少は覺えもある事ですもの、身につまされてと言つたら嘸お笑ひなさるでしようね。」

「おや、」

「まア私の事なんぞは何うだつて可うございます。貴郎の事を聞いて居るんぢやありませんか。」

「成程お前は東京のものだと言つたね。」

「貴郎其樣な事を言つてごまかしちまふんですか。」

「いやそれよりお前の話が聞きたいね。何だかなか〳〵來歷がありさうだ。」

「厭な、私なぞに何がありますものか。氣の利いた話を持つて居る位なら、此樣な處にまごついて廊下を飛んで廻はつては居ませんよ。」

「なに無い事があるものか。お前の事だから尚聞きたいね。」

「お止しなさいよ最うそれは。今度御退屈でしやうがない時、ゆッくり因緣

話をお聞かせ申しませう。それよりか貴郎の、」
「又かい。」
「まア貴郎は、人が此樣に氣を揉んで上げて居るのに、未だ隱して居らッしやるの。」
「其樣ならまアお前に任せやう。」
「ようございますか。」
「お前なら屹度惡いやうにはしてくれまい。」
「待つてお出なさいまし。何かお土產を持つて來ましやう。」
吾は未だ言はゞ婢風情のものに心を許してしまふ事は出來ぬ。
「然しお前、餘り離れ業をしてくれては困るよ。私も相應に顏もあるのだから。」
「貴郎もほんの浮氣だけなら、眞實に罪ですからお止しなさいよ。え、よござんすか。」
と念を押してぢッと吾を見詰めた。其動かぬ眼の中に何か人知れぬ深い意

味があるやうである。仔細がありさうな。と思ひながら、
「安心するがいゝ、そんなのではないから。」
と言つたが、何となく納まらないやうな氣がして、輕く口早に、
「お禮を何うしやうね。」
お政は眞面目だ。
「好きでするんですものを、お禮なんぞさして何うするものですかね。其代りには、
と又吾を見て、
「出來たあとで心變りをなさると聞きませんよ。おや全で自分の事のやうですね。氣が知れないぢやアありませんか。」
母屋の方で、
「お政どん、お政どん。」
お花といふ婢が見當違ひの方を二三度呼立てた。
「はーい。」

後にとばかりでお政は、急がはしく出て行つた。

（五）

例の定められた運動の時間で散歩に出た。此處等あたりは割合に暖かいので、梅のある家は既花の香を吹送る。今日は引地川の上へと、裏の小松の中に拔けて、三反ばかりの桑畑の先に、玩弄物のやうな小さな祠を、抱へ込むやうに椎の古木が上から蔽重なつて立つて居る路の角へ、急ぐともなく來かゝつて彼方へ行きかゝつた時、

「おや、」

不意に聲を掛けられて、振向いて吾も驚いた。横手の小路から、お絹が彼のずんぐりした若い女中名はお槇といふのを連れて、恰度此處へ差懸つて來た。吾も小腰を屈めて、

「昨晩は失禮を、」

「私こそ、」

又彼の徹る美い聲を聞いた。

「何方へお出掛けです。」

と優しげに問へば、笑顔に受けて莞爾して、

「はい、なにぶら〳〵當てもなく出ましたので、」

「それは恰度よい處でお遇ひ申しました。私も一寸運動がてらに出て參つたのです。御迷惑でなくば御一所に參りましやうか。」

「何うぞ、」

吾等は押並んで、物靜かな田舍道を、菜畑、麥畑、松林、桃林、茅の軒端を其處此處に見て機織る音春く音、長閑な鄙唄を聞流して、餘所目には尚睦ましく話しながら行つた。天氣は極上だ。花やかな日の影に艶々しく、藍を溶かしたやうな美しい空合で、何處の林も鳥の聲だ。

野川の縁へ出た。岸の葎は枯れたまゝに殘つて、水を折曲つて野藤の蔓の八重に搦んださいかち莢の蔭に隱れて行く。向ふは松原で、茅萱の岡がいくつとなく起伏して居る。

「何方へ參りましやう。」

と吾は言つた。

「あちらの方がよさゝうですね。けれども此橋が私には何だか恐くつて渡れません。槇、お前は渡れるかえ。」

「さうでございますねえ。」

と槇も首を傾けた。

前に掛渡してある橋は、丸木を二本無雑作に藤蔓でからげてあるのだ。吾は進んで、

「なに大丈夫てすよ。なんなら手を引いて上げましやうか。」

「でも、」

とお絹は笑を含んで躊躇つた。

「何ともありはしません。」

と吾は半ば渡つて振返つた。

「手をかしましやう、さアお出なさい。」

「槇、何うしやう。」

「參つて見ましやう。」

二つ三つ問答があつた。吾は遂にお絹の手を執つた。美しい、しなやかな、柔とした手の紅差指の見事なルビーを黄金の波に抱かせた指環がけに、我手を執合せて漸く橋を渡越した。槇もこは〳〵渡つて來た。

又行く途すがら、

「貴孃はいつ頃東京へお歸りのおつもりですか。」

「私？」

とお絹は言葉を切つて冗談のやうに

「私は最う東京へは歸りませんの。」

「え、」と吾は怪みながら「いつまでも此處に居らッしやるといふのですか。」

「それも何うだか分りませんの。」

と言つたが、流石に異な答と思つたか、言譯のやうに笑つた。

「それでは東京がお嫌ひなのですか。」

「いゝえ。」

「では何故お歸りなさらないのです。」
「たゞ歸りたくないのですよ。」
「其譯は、」
「何と申しましやう。」
「それを私にお聞きなさるのですか。」
「おほゝゝゝ、其先は分りませんね。」
「何を言つて居らつしやるのだ。」
と吾も笑つたが不思議に思つた。お絹は凛とした眼にさもない方を見詰めて、
「けれども申したつて何うなりましやう。女の身で一人であがきが出來ないのでございますもの、歸らないのが歸らないに立たなくなつてしまふかも知れません。私のやうなものでも、一人で勝手な事が出來たら、何樣に面白うございましやう。」
「貴孃は何かなさらうと思つて居らッしやる事があるのですか。」

「有つたつて出來ない身の上ですもの、しやうがございません。」
「立入つた事ですが何も御不自由はない御身分ではありませんか。」
「さう仰有いますと困りますが、私はあまのじやくですから、何も彼も儘にならないやうに思はれるのでしやう、私はたゞ男の方がお羨ましいやうな氣がして、しようがありませんの。」
「何でも何かお望みがありますね。」
「有りましやうか、」
とそゞろに言つて氣が付いたやうに、
「まア、つい此樣な事を、私はお轉婆でございますね。貴郎は何とかお思ひでしやう。」
吾は眞面目に、
「なに餘所に聞いて居るものはありません。よし又聞かれても差支へのない事です。」
「左樣でしやうか。」

「もつと打明けて下さると、尙ようござんすけれど、」
「あれあんな事を、又言はせやうとお思ひなすつて、」
いつか岡の麓路へ出た。
「貴郎あちらへ行つて見ましやう。おや〱奇麗な花だ事、何といふ草でしやう。御存じですか。」

（十八）

部屋の前の、手摺に寄せて据ゑてある安樂椅子に凭つて、物思はしげに吾はそこはかとなく目の行く方を打眺めて居た、煙草を禁じられて居るので、何となく、口淋しく、胸の思の、更に物憂いやうな心地がする。夏の事でないから、客も少く家は靜かだ。湯殿に水を汲込む音と、籠の目白の高音を張るのと、濱の漁夫の掛聲の風につれて聞えるばかりである。

梯子を蹈んで身輕に上つて來るものがある。お政だ。莞爾々々して來た。

「吉田樣、」

「何だ。」

「い丶ものを上げましやうか。」

と傍へ來て椅子に手を掛けて、

「い丶ものですよ。え、要りませんか。」

「何たよ。何も持つて居はしないぢやないか。」

胸を叩いて、

「此處にありますか。」

「何だよ。大福かい。」

「厭な、其樣な色氣のないものぢやありませんよ。」

「面倒だな。早く出して見せるがいゝ。」

「私ア口を酸ぱくしましたよ。」

「ぢやア何かい。」

と吾は少し聲をはづませた。お政は悟り顏に、

「はア、」

「お見せ。」と吾は立上つた。

「有難うと仰有い。」

「まア可いさ。お出し、口が乾れるよ。」

「そんならまア負けて上げましやう。」

と出したのは手紙だ。吾は案外であつた。それも東京からの何でもない便

りだ。

「何だ。此様なものか。」

「まだ外にありますの。」

「刻ッこなしに出してしまふが可い。何だい。」

「今度こそいゝものですよ。」

「くどいな。早く出さないか。」

「それぢや。さア、」

又手紙だ。けれども女文字だ。吉田小四郎様と見事に書流してある。裏を返して、中井内より、と讀下して驚いてお政を見た。

「これは何うしたのだい。」

「何うしたのッて、其處まで運んで來たのですよ。」

「驚いたね。何うして、」

「まア讀んで御覽なさいまし。」

躍る胸を抑へて吾は開けて讀んだ、何か事があるかといふ望みで。けれども

何もなかつた。すら／＼と一通りの事を述べて、御覧に入れたい書畫もありますから、お遊びかた／＼後ほどお出でを。とそれだけである。さうだらうさて早く深い事を書いてよこす筈がない。と讀んでから思つたが、もしやといふ望み内心に餘程あつたのだ。然しこれで兎に角に橋が渡された。きつかけが付かないので押して行かれもしなかつた。其折からでこれをしも少からず歡迎された。

「御返事は、」

とお政は吾が讀終つたのを見て言つた。

「お邪魔でなくばと言つておくれな。お前彼方へ行つて來たのかい。」

「はア昨日も一寸行つたのですけれど、外に人が居て何も言はれなくつて歸つて來ましたの。」

「それで今日何樣な話をしたのだい。」

「私ア何も彼も言つてしまひましたよ。」

「えッ、何も彼も、」

「だッて貴郎、叶ふものなら早い方がいゝぢやありませんか。何うせいつか仰有らなければならないでしやう、それでも餘程うまく言つたつもりですよ。」
「けれども、それじや行きにくいなア。」
「何ですねえ。うぢ／＼して、これからが貴郎の舞臺ですよ。」
「お前の了簡ぢやさうだらう。何樣な事を言つたのだよ。」
「何樣な事ッてそれは種々、」
「おまけを付けたらう。」
「惡いやうなおまけを付けはしませんよ。安心してお出なさいまし。なんぼ私が目先が見えませんからッて打壞しになるやうな事は言やしませんよ。よしこれッきりになつてしまたッて、貴郎の御器量の下がるやうな事になりはしませんから、其樣なお氣遣ひなら眞實に御無用になさいまし。」
「何しろ氣味が惡くなつて來た。此方に弱處があると何うも氣が伸びないからね。」
お政は見て、いつもの述懷めいた口吻で、

「其中がお樂みです。ようございますねえ貴郎方は、何の苦勞もなくて、すきな事がなされるのですから、此樣な都合のいゝ事はありません。お羨しいやうですねえ。」
「まだ先も知れないのに、」
「なに貴郎方の事ですもの、」
「さう譯無く行くものか。」
「大丈夫ですよ。ぢやアま行らッしやいますね。うまくなさいましよ。あゝ何だか早く纏めたいやうな氣がしてしやうがありません。人事とは思へないからいゝぢやありませんか。」
「何だか妙な工合だなア。」
「おほゝゝゝ可愛らしい事を仰有いますね。あとでお話が承はりたうございますよ。樂みにして居りましやう。」
「何を、」
「あちらへ行らしつての御樣子をさうッかりなさると立聞をしますよ。左

様なら、」

お政は行つてしまつた。其見込みは違つたのである。我等の末は入亂れた。其様な氣樂な、ふは／＼とした事で終らなかつた。お政は吾等を何と思つたのであらう。

部屋へ入つたが落付かれなかつた。再び手紙に目を移してすら／＼と事もなげに書續けてある墨のあとを稍暫し見詰めて居た。今の世の、奥にのみ住んで居る娘の多くは何事にも愼ましげで、深く差障りのない此様な文面にしても、進んで若い男の許へ寄せるといふ事を躊躇する。お政の骨折もあつたであらうが、吾が胸の中を知つてから書いたとすれば頗る大膽のやうでもある。さりながら吾は當時其様な事を何とも思はなかつた。思つて居る遑もなかつた。白狀すれば手紙を得た事が實に嬉しかつた。未だそれほどには言はなかつたが、初めたゞ顏を見た時から怪しく物に魅入られたやうであつた。假令お絹が惡魔であつても吾は必ず其思を捨てる事が出來なかつたらう。

（七）

初めての晩に見た丸髷の女中は居なかつた。何か本宅に急な用が出來て、今朝早く東京へ行つたとの事である。家内はお絹を上にお槇といふ彼の目方のある女中と留守居の夫婦ものゝ外に、誰も居らぬ。其處も此處も多く空室て、奧は深いのに、人氣がないので甚だ物淋しい。南向きの海を前にした小座敷に、お槇の立つて行つた後は、お絹と二人切で、さま〳〵な雜談に時は移つたが、結果は何もなかつた。お政はすべて話してしまつたと言つたが、お絹は氣振にも、吾が心を知つて居るやうな風は見せなかつた。ゆたかに座して、打解けて話掛けて、取繕つて居るやうな處もなかつた。吾は當時輕卒みなものであつたが、流石其態に、うかと底を見られるやうな事も言はなかつた。

吾が造家學を修めて居るといふ事を聞いて、お絹は懷かしげに自分の兄も、久しく外國で同じ學科を修めて居た事を語出した。其兄はいよ〳〵歸國の間際になつて志を齎らして空しく異域の鬼となつたとの事である。

「外に同胞といふものはないのでございますから、亡くなられた時は何樣に力を落しましたらう。此樣な事を申すのも何でございますが、便りにして居たものは其兄ばかりでございましたから、眞實に其時は一處に死んでしまひたうございました。斯うしてうッかりして居りますけれど、先の事を考へますと、私ほど心細いものはございません。」

一人で勝手な事が出來たらと此間散歩の折には言つた。それとこれとは違つて居るやうである。吾は不思議に思ひながら、

「御兩親は、」

とそゞろに問掛けた。

「ございます。ございますけれど母は違つて居りますから」

と言掛けたが、不圖吾を見上げて、急に氣をかへたらしく笑顏を作りながら、

「止しましやう最う此樣な事は。お話申したつて仕樣がございません。」と冴え〳〵しく、「あの何でございましやう。貴郎は最う直御卒業なのでございましやう。」

吾は前の話が聞きたかつたが、問はれたまゝに、

「まア來年は何うか其樣な事になるだらうと思ひます。」

「さうおなり遊ばすと、直ぐ奥樣をお迎へなさるでしやう。」

吾はお絹の顔を見た。お絹はたゞ微笑して居るのみである。

「何うしてさう早く。それに私なぞの處へ、なか〳〵急に來手はありません。」

「最うお心當りがありなさるのでございませんか。」

「飛んだ事を仰有る。未だ修業中の身の上ですものを。」

「お隱しなさらなくつても宜しいてはございませんか。其樣な事を仰有つて、どうにお約束のお方が、おほゝ、お有りなさるのでは。」

「私が其やうに見えますか。」

「見えますとも。屹度さうでございます。」

それとなく吾は先の樣子を見ながら、

「何とでも思つて居らッしやる通りに致しましやう。假令眞實の事を申したつて、さう思込んで居らしッては仕方がありませんから。」

「其様にお隠しなさらないで仰有いましな。」

「嘘でも可いとして、」

「まア仰有つて御覧なさいまし。」

「斯ういふのは何うでしやう、私のやうなものですから、先では何とも思つて居りはしませんがね、此方では馬鹿のやうになつて居るのは。」

「それは前にお断りの嘘の中でございますか。」

「もし眞實であつたら、」

「貴郎はよく御冗談を仰有いますから、」

「よくとは、」

お絹は尚莞爾やかに、

「でもお政なんぞに種んないゝ加減な事を仰有つたてはございませんか。何うせ彼様なものに眞實の事を打明けて仰有る筈はございませんから、初めからまさかと思つて聞いて居りましたが、お政は御冗談を本氣に受けて眞面目になつて私に言ふのですもの。しまひには困つて何う致さうかと思ひま

したよ」
吾は言ふ事を知らなかつた。此言葉に答ふべきものは恐らく胸の中には千百言もあつたらう。吾は未だ若かつた。お絹の顏を赧らめもせず、冗談ごかしにしてしまつた其樣子に對して何も言ふ事が出來なかつた。よしない性情から惡賢く自分を殺して心を隱さう爲に慥か笑つたやうであつた。
「お政が何樣な事を言ひました。」
「をかしな事を申ましたよ。けれども御冗談ですからいゝやうなものゝ、もし私が眞實にしたら何なさいます。」
正面に見られた。其美しく冴えて眼眸に見詰められた、吾が胸は竊かに轟くやうに覺えた。お絹は吾を試みて居るのではないか。と吾は不圖思つたが其思は瞬く中に消えた。譯もなく機が迫つたやうに思はれて意を決して口を開かうとした。途端に近く足音が聞えて、颯と隙が開いて、お槙が敷居越しに手を支いた。
「只今お宿からお政どんがお迎ひに參りました。あの、東京からお父樣がお

越になりまして、直に歸つて來るやうにと仰有つて、お部屋にお待ちなすつて居らッしやるさうでございます。」

吾が名殘惜しさは幾何であつたか。吾は歸らぬ事を得ぬ。暇を告げて立上る時、お絹は誰しも別れ際に言ふ言葉の、

「何うぞこれにお懲りなく、時々お話しに入らしつて下さいまし。」

を言つた後に、何と思つたか、

「貴郎また屹度入らしつて下さいましやうね。」

必ずと言つて吾は立つた。お槇と共に、お絹は玄關まで送つて來た。履脱を離れて別れさまに振返つて、と見た時、差込む夕日を眞向に受けて、艶々しいお絹の顏はかゞやくやうであつた。思はず見入つて怪しく去ねがてゞあつたが、長くも居られず、遂に歸つた。

（八）

父上は何うして來られたのか。と宿に向へば流石に心の急がれて、小走りに戻つて來た吾が姿を見るより、

「や、小四郎、何とも言はずに來たから定めて驚いたらうな。何うぢや、身躰は。大分血色もいゝやうぢやの。最う病後とも見えんやうぢや。」

といつ見てもゆッたりとした溫容で、喜ばしげに吾を迎へて下さつた。吾も同じ懷かしさてあつたが、此時ばかりは、惡い時に來て下さつた。と心の底には小からぬ不平があつた。それとなく來意を聞くと、

「お前には未だ話さんかつたから知らんぢやらうが、今度な、お前もいつか行つた事があるから知つとるぢやらう、大磯の、あの齋藤の別莊をな、都合があつて賣るといふので私が讓受ける事にしたのぢや。此間先へ淺田を遣つて、いつ行つても可えやうに取斗らはせて置いた。それでお前にも彼方へ移つて養生せいと言うてな、淺田を序でに寄らせうと思うたが、幸ひ私も十日ばかり

の閑暇が出來たから、家族のものを連れて行く事になつてな今日皆で出掛けて來たのぢやが、私はお前の處へ寄るので、藤澤から別れて此方へ來たのぢや、皆は最う彼方へ着いとるぢやらう、私はお前を連れて明日行く筈にして置いたぢや。」

定めて喜ぶと思はれたのであらう、父の機嫌はいつに倍してよかつた。吾は何と答へて可いか、入らざる時に見舞に來て下さつたと思つたのも、今はそれ處の騒ぎでは無くなつた。吾はこゝを離れねばならぬ。未だ何の心をも言はぬ中に、早くお絹と別れねばならぬ。

吾は此地の、殊に吾か身體に適して居る事を言つた。甚く氣に入つた事をもさま〲言葉を盡して言つて見た。大磯も素より惡くはないが、未だ急に此處を去りたくないと言出したが、父は聽入れてくれぬ。いろ〲利害を説かれて見ればそれに反對するものを吾は何も持つて居らぬので頗る弱つて居ると、

「それはそうと、此手紙は何處から來たのぢや。」

と父は不意に談話をかへて、脇の小机の上に巻いたまゝ載せてあつた文殼を指さした。先刻お絹の許から來たそれである。や、惡い處へ出して置いた。と思はず父の顏を見たが、あやしく微笑まれて尙氣味惡く、吾は又返事にまごついた。

「女の手ぢやからお前には珍らしいと思ふて先刻一寸見た。この絹と云のは何ぢや。何ぢや知らんが餘り近寄らんが可ゑ。お前は未だ修學中の身分ぢやないか。お前も思慮がないでもなからうから、決して不都合な事をする氣遣ひはあるまいが、言ふまでもない氣を付けんと可かん。何にせい此樣なものには遠ざかるのが第一ぢや。明日は早々大磯に行く事にせい。」

穩やかに言はれるほど、吾は苦しかつた。手紙を讀まれたからは、今迄お絹の許へ行つて居つた事は勿論知つて居られたであらうに、其事は少しも言はず、それなりお絹の事は忘れたやうに、又強く大磯行をしひられた。吾が行く事を澁るのも、大方お絹に引かされてと思はれたのであらう。又それに違ひないのであるから、吾が言葉はたゞ鈍るばかりであつた。

言ふべき事はあるが明らさまに言ふ事は出來ぬので、厭ながら遂に從つたが、まことゝ手の中のものを取落したやうな氣がした。父は笑つて、いろ〳〵吾が好む談話をしかけてくれた。吾が耳には何も入らぬ。其笑顏も心を刺撃して言ふやうなく情なかつた。

夜となる。無情に明けて願はぬ朝日に起きた。父は未だ此土地へ來た事がないので、發つ前に其處等を見物して行かう。と吾に案内させて近傍を廻らせた。出掛けにお絹の家の前を過ぎた時、門の柱に、中井と筆太に記した表札を見て、

「あ此處ぢやな。」

と父は笑つて吾方へ振向いた。氣がさして、力めて平氣な顏で吾は足早に行過ぎた。

其處等を一廻りして、引返して引地川の袂へ出た。お絹の家は其川向にある。池の水口から、心ありげに梅の花瓣が雪を散らしたやうに流れて來た。途端に優しげな琴の音が、水を打つて響いて來た。お絹が鳴らして居るのであら

う。

「おゝ、琴の音が聞えるな。」

と父は不圖言つた。吾は慌てゝ、

「歸りませう。」

と直ちに踵を返した。

宿へ歸ると直ぐ父は車を言附けた。荷物の取片付も濟む宿の拂ひも濟む、行くばかりになつた。僅かの隙に、廊下の片脇でお政に遇つた、何うして手に入れたか、お政は吾にお絹の寫眞をくれた。邪魔があつて、談話をする間もない、そこ〳〵に別れた。

車が來た。父は立上つた。已む事を得ず吾も後に跟いて出た。宿のものは皆門まで送つて來た。ならはしの口々に名殘の聲も吾が耳にはいつもに變つたやうに聞えた。車は矢庭に驅出して行く。路の角から振返つたが、早彼家も見えなかつた。田面、松山、茅の軒、一里の路は時の間に過ぎて、藤澤の停車場は忽ち行手に現はれた。此處は最う鵠沼の村ではないのだ。

（九）

大磯には母も來て居た。姉も居た。妹も居た。兄が來て居らぬばかりだ。吾は其中に立つて、最も興の薄い、あらずもがなの仲間であつた。學校の寄宿舍に居つて、土曜日毎に家へ歸つて來るたび、乾燥した學課の文字の外に圭角の多い交友間の論議の外に、優しい、暖かな、濃やかな眞情に慰められて、吾はいつも愉快であつた。それが今は何を言つてくれても、耳には更に入らぬのだ。いつも片脇に、氣のない答へをして茫然して居た。母も姉も、病氣の爲であらうと思つて、勉めて機嫌を取つてくれた。吾も折々は忘れたやうに元氣を出して興を遣つて見る。それも直に火の消えたやうになつてしまふ。面白くなかつた。

濱へ出れば、同じ浪は此處にも通ふ。風は自由に吹越して行く。舟も行く。汽車も行く。吾は獨り此處に止められて彼方に行く事は出來ぬのだ。同じ雙眼鏡を、今も手にしては居るが、怪しく目を迷はした其姿は再び見えぬ。小

和田の森に隔てられて、家すらも見えぬ。磯の鷗は彼方の濱から來たのであるか。

父は我を連れて、近くの野山へ屢ゝ遊獵に出た。小高い處へ登れば、目はつい彼方の濱に落ちる。獲物を逸して犬の手前も流石に面伏な事もあつた。家には馬もある。砂地を蹴立てゝ其處等を乘廻せば驅を追つて、矢庭に彼處へ飛ばせたくなる。淺ましくも心の散る時はないのだ。

如何に長い十日であつたか。然し時は過ぎた。皆が歸るといふ前の日になつて、吾は始めて身が輕くなつたやうに覺えた。父は吾に、身體も舊のやうになつたやうぢや。遊んで居るのはよくないから、と共に歸れといふ事を命じるやうに勸めた。素よりさう言はれるであらうと思つて居た。何うも未だ本當でないやうだから、猶一週間は止つて居たいと言張つて、漸く其事に決つてほッと息をした。今はたゞ皆が引上げるを待つばかりだ。姉や妹が、事新しく東京の話に餘念もない中に、皆が歸つたら、と吾はそれのみであつた。

停車場まで一同を送出してから、未だ一時間と經たぬ、いゝやうに家の者を言

拵へて直に飛出した。言ふまでもなく鵠沼を指して行つたのだ。藤澤で汽車を下りて、車を馳せて再び村の入口に差懸つた頃は、今から思へば餘り子供らしかつたが氣もそゞろで、譯もなく周章てゝ居た。草も木も、悉く吾を迎へるやうに見える。あと幾程の時の間に、吾は再び相見る事が出來る。今日こそは機會を免がすまい。前のやうに心の上を粧つて、毒にも藥にもならぬ下らぬ言葉を並べて、竊かにもとかしがつて居るやうな事を決してせぬ。見得もなく、飾りもなく、胸の底を打明けてしまはう。吾は最早、一時と忍んで居るに堪へられぬ。とばかりに堰込んで、前の宿へも寄らず車を直ちに彼の別莊の門前へ乘付けた。

何といふ事だ、門は閉つて居た。中には誰も居らぬ樣子だ。何處も彼處も嚴重に閉めてある。門の表札もいつの間にか取去られて居た。呆れて、物も言はず立つたまゝの吾を、送つて來た車夫はぢろ〳〵見て、

「旦那、何うなすたんて、」

何うしたのか吾にも分らぬ。張合もなく以前の宿へ寄つて、聞けば近く彼家

の持主は變つたとの事、お絹は吾が大磯へ行つた間もなく、急に呼戻されて東京へ歸つた。お氣の毒樣と或者は知つた顏に笑つた。お政も既此家に居らぬ。何か主人と物爭ひをして俄かに出て行つたといふ事だ。

氣脫けがしたやうに、大磯へ引返したが今は此處に一人殘つた事も話にすれば物笑にしかならぬやうな事になつた。猶一週間はとあれほど父に向つて言張つたのが、僅か一日を隔てたばかりで、突如に東京へ歸つて來たので家の者は皆驚いた。母も姉も、おや／＼と、言つたばかりで吾が顏を打守つた。何うしたのぢや、と父も訝つた。吾が答は素より矛盾して、何の事はなく笑はれて其場は治まつたが、未だ治まらぬは吾が胸だ。事に托けて家を出て、かねて聞いて居た中井の本宅を直に尋ねた。

再び驚いた。家は他の人が入れ代つて、折しも開店の支度で取込んで居る眞最中だ。一家のものは何處へ行つてしまつたか。彼此聞合せたが、行先も知れぬ。夢を見たやうだ。

（十）

既に五年になる。種々な事があつた。親の脛を離れて技師の仲間入をして、西にも行き、東にも行き、多少世間をも見て多少生眞面目になる時もあるが、不思議にも只彼の一時の言はゞたはいのない、不圖した出來心を、長く、長く忘れる事が出來ぬ。

紀念といへばあれだけで、深く心事を語らつたといふ事もなければ、激しく情を狂はすほどの事もなかつた。人の世に居る間は、かゝる些細な話にもならぬ出來事に比べて言へば、大歡喜、大痛苦、大悲哀、と名付けてもいゝほどの事件は、これまで平和の中に過して來た吾にも少からずある。其少からぬ事々は多く忘れて、唯此一事、風が取持つた花の香を、僅かに身にしめたといふだけの事を、かくまで執念く、何故忘れる事が出來ないのか。吾ながら知るに苦むほどである。

女であるから、美女であるからと言ふか。否、吾は少くともお絹より美しいも

のを幾人となく見た。さらば其內容に於て、かくまで思付くほどのものがあるかと言ふに、それも明かに左樣とは言はれぬ。世は廣い、吾はさま〲お絹に立優つたものに逢つた。さらば何處がと言はれゝば、吾は答に困る。であるが、吾は何故に樂しまぬか。何故に悶えるか。其源はすべてお絹である。此心を何うする事も出來ぬ。

年長のものは吾が爲に結婚を急いで、相當のものを貰つたら、と幾度となく吾に勸めた。父は其中にも氣を揉んで、折につけてはそれをのみ說いた。兄は早く望み通りの人を娶つて、既に子供が二人までもある。姉もいゝ處へ嫁附いた。妹も曩に祝言を濟ました。殘つて居るのは吾ばかりである。膝下を離れて別に一家を持つてから、良久しくなるのであるから、親々の其心遣ひも無理ではない。早く安心をさしてくれ。と母も言つた。吾はいづれも、今暫く、とばかりで謝つた。

言込んで來た緣談の中には、いゝのがあつた。容易に得難いのがあつた。津山の季の娘などは、才色雙絕とまで言はれたもので、初め申込を受けた時は、何

故吾如きものを選んだのかと惑ふほどであつた。勿論親の光ではあるが吾をと殊に名指されて、先の家でも切りに望んで居るし、それよりも當人が進んで居るといふ事を聞いた時は、吾が心は流石に人知れず搖めいた。知らぬ人はそれほどには思ふまいが、あれほどの容色は他に恐らく無い。あれほど多藝のものも恐らく無い。あれほど又欠點のないものもあるまい。吾は其時、これを失ふたら、再び斯ういふものを得る事は出來ぬ。と幾度も思つた。然し吾は遂に斥けた。

今一人、姉の友達で、これも良家の娘で、極めて愛嬌の深い如何なる人をも悅ばす力を不思議に持つて居るやうな、氣立のいゝ婦人に逢つた。四五度姉のもとで談話をして、甚だ心に叶つて蔭で姉に向つて非常に褒めた事があつた。其中に、姉から突然、お前あの方を貰ふ氣はないかえ。と言はれて人知れず怪しげな感に打たれた。實は、と姉は我に呼いた。其呼いた事は何うも自分では言惡いから、明かにこゝへは打出さぬが、何しろ頗る吾れに意があるといふ事である。何ういふ事であつたか、吾には直に謝絶する力がなかつた。よく

考へてから、と言葉を濁して其塲を免れたが、それも最期に、破談で終つた。何うするのであるか。何うしやうと言ふのか。未來に向つて、確乎たる決心は其癖吾には無いのだ。人に對しては快活のやうであるが竊かにたゞ鬱々として居る。津山の娘も、姉の友も、其後皆然るべき人の妻となつた。吾は一人うそ淋しく、手にも取られぬ空を見詰めて居るばかりだ。津山の彼人は愛らしい兒を擧げたといふ事を聞いた。

（十一）

午後六時五十五分、東京行の上り列車は後れて大宮の停車場に着いた。吾は或工事の用で今朝早く此處へ來て今此汽車で歸る處だ。小止まぬ雨に昇降の乘客は一しほの難義で、彼此混雜の中を吾は刻足に急いで中等室の戸を開けて、傘の水振ひをしながら突と乘移つて、不圖中を見て礑と立止つた。思寄らぬお絹が乘合せて居た。吾は一時自失したやうであつた。

逢つた。遂に逢つた。折よくも外に乘客は無い。吾が胸は躍るまゝに躍つた。面差は稍變つたが、美しさは其昔の美しさである。凛とした目の張、描いたやうな、優しげな眉、少し痩せて、如何にも恰好のよかつた以前の姿は、いよいよ華奢に、いよ〳〵しなやかになつた。

黒の、斜綾の吾妻ゴートが其姿によくうつッた。右にも、左にも指環が光を爭つて居る。髮の事などを吾はよく知らぬが、妹が好んで結ふ何とか結びといふ束髮に結つて居た。不圖目に入つたのは、膝の脇の、脫捨てた頭巾の上に載

せてある洋書である。華美な飾りの付いた表紙の、小形の、小說のやうなものであつた。

吾等は目を見合せた。お絹は忽ち、

「おや、まア、」

一日も忘れなかつた其笑顔だ。今に耳に付いて居る其徹る聲だ。吾は直ちに進寄つて、其隣りへ席を占めた。別れて其後の言葉は、互ひに口を衝いて出た。吾は汽車の搖ぎ出したをも知らぬ。幾年振で、初めて底から沸出したやうな樂しさを覺えて、近く、飽かず猶其顔を打守るばかり、前後も、身をも、汽車の中に居るをも忘れたほどであつた。お絹は繰返して、

「誠に暫くでございましたねえ。お變りなさいました事。此處でお目に掛りましやうとは、眞實に思掛けませんでした。」

など其やうな事を言つた。久振で聞いた爲か其聲は音樂のやうで、意味は餘所に何の事はなく身に染渡るやうである。

「今は何邊に、」

と軈て吾は問ふた。

「梅園町に居ります。本鄕の、」

「前からお出でしたか。」

「いえ今年になつてからでございます。それまでは橫濱の方へ行つて居りました。實は昨年移る筈でございましたが、普請が後れて漸く一月の末に參るやうな事になりました。つまらない處でございますが、何うぞ彼方へお出の節はお寄り遊ばして下さいまし。」

「有難うございます。必ず伺ひましやう。お家は今何をなすつて居らッしやいます。」

「何も致しては居りません。女暮しでございますから、眞實に意久地がございません。」

「未だお一人で、」

「唯、繼母はとうから居りませんし、親父も昨年亡なりまして、今は最う一人ぼッちでございます。」

一人、其一人といふ事に付いて、是迄幾度思悩んだか知れぬ。今迄一人で居てくれる、と必ず信ずる據處が無かつたので、女は殊に身の定まるを急ぐものであるに、時は空しく流れて、望はいよ〳〵薄くなつて行くを、如何に獨り悶えて居つたか、心にかゝつて居たは只それであつた。今此言葉を聞いた時の、吾喜びをこゝに言ふ事が出來ぬ。吾は又更に胸の轟くを覺えた。

お絹はやがて吾事に移つて、今の住居から身の上など、それからこれと問掛けた。吾は目下の職業から境遇、地位、種々の事を、内輪のものに話すやうに、隔てる處もなく語掛けた。お絹は女の知らぬ事などをよく知つて居て時々人を驚かしたが、急に思付いたやうに、

「奥様は、」

「奥様とは、」

「おほゝお家に居らッしやる奥様でございますわね。さぞお美しいお方でございましやうね。」

「貴孃は左樣思つて居らッしやるのですか。」

「何故でございます。」

「私は未だ獨身です。」

「まア何うして未だお貰ひ遊ばさないのでしやう。私は又最うお幼兒のをお拵へなすつたのだらうと思つて居りましたに。」

お絹は平氣で此樣な事を言つた。吾は如何に慊らなかつたらう。お絹は吾が心を小しも知らぬ。此處で遇ふまでは殆んど忘れて居たのであらう。今の吾が喜びをも更に解して居らぬ。吾は暫し言葉が無かつた。

雨を衝いて汽車は直走りに進行する、機關の響車輪の響、降りしきる雨の物騷がしい中で吾は遂にかゝる所に似合はしからぬ、いとせめて、濃やかな話を初めた。如何に深く思染めたか。如何に長く忘られなかつたか。如何に樂しからぬ、日に送つて居つた。吾は其後の事を細かに語つた。別れて大磯へ行つた時から、再び鵠沼へ引返した事から、それより後の胸の中を殘るところもなく語盡した。或時は既に定まつた人が出來た事を思つて堪へられぬ苦みの中に枕も定めかねた。又或時は目も當てられぬ悲慘の中に陷つて居るや

うに思はれて空しく餘つて居る力を貸す事の出來ぬを悔むやうな事もあつた。或時は不意に愕然として既に世に亡い人になつたのではないか。と思ふばかりに猶豫もなく涙をたばしらした事など、それ等をもすべて語つた。吾はいくらか年を取つて、前のやうに言淀む事もなかつた。飾る處もなく、蔽ふ處もなく眞實に露出しに事長く語終つた。

其中にも、吾はお絹に目を離さぬ。お絹は全く此樣な事に用意して居なかつた。驚いて目を擧げて、直に俯向いて、兩手を膝の上に重ねたまゝ、ぢッとして聞いて居た。吾は屢〻其色の動いたのを見た。語終つてからも深く考込んだやうで、

急に答へもなかつた。

稍、あつて、

「私のやうなものを、何といふ御醉興でしやう。五年の間も其樣なものに。何う致したら可うございましやう。」

汽車は又停車場へ着いた。此處は王子だ。俄かに戸が開いて、見知らぬ紳士

突と入つて來て、吾等の向ふに席を占めた。其不思議さうな、角立つた眼で、吾等をぢろ〳〵眺められた。

思はぬ邪魔に談話は中折がした。脇に人を据ゑて、吾等は此後を續ける事が出來ぬ、彼の紳士は猶しきりに注目して居た。吾は遂に返事を確める機會を得なかつた。

汽車の走る中に當り障らぬ言葉が二つ三つ、心にもなく交されたばかり、お絹は前とは全く樣子が變つて沈返つて、ぢッと考込んで、吾が言葉にさへ耳を逸らせた。

上野へ着いた。彼の紳士は先に室を出た。お絹は立上りさま、

「此頃に又お目に掛かられましやうか。」

「いつでも。」

「あの宅へ入らッしやつて下さいましやうか。明日でも。」

「午後て宜しくば、」

「入らッしやつて下さいますか。屹度、」

「必ず。」

「お待申して居りますから、何うぞ是非お出遊ばして。」

お絹はそれほど吾が行く事を願ふのか。と吾が望みは半ば成つたやうに思はれた。固く約してやがて別れた。吾が車夫は停車場まで迎へに來て居た。お絹のも來て居た。西に挽別れて行く華奢な車の、幌の中の其人は、今は方に吾が事を思ふて居るのである。と其時の吾が心は物に勝誇つた心であつた。

(十二)

「昨晩の御返事を致さなければならないのでございますが、其前に一通り聞いて戴きたい事がございますな、此樣な事を申さなければならないやうな私の身の上を思ひますと悲しい事でございますが、何うせ一度はお耳に入れなければ濟まない事ですから、思切つて申してしまひます。斯ういふ中にも何うかして申さずに置きたいやうな、厭な、厭な事でございます。え其樣な事なら聞くまいと仰有いますか。それほどに思つて下さるお言葉に對しても、言つてしまはなければなりません。何うぞまアお聞きなすつて下さいまし。十五の歳母に別れましてから、私の身は無茶苦茶でございます。二度目に參つた繼母と言ふのは私の口から申すも何でございますが、もとが商賣人上りで、自墮落な鼻元思案の其上心が卑しいものでございますから、物堅い家内の治りやうはございません。親父は人が好いので何事も其人任せですから、家はたゞ情けない事になるばかりでございます。兄は其時未だ存生で居りま

したが、いつかもお話申しました、其前から外國へ行つて居りますし、一番々頭の平兵衛と申すのが、店の方を取仕切つて掛引を充分にしてくれましたから親父は初めから左様いふ事に疎いのでございましたが、店は前のやうに繁昌して居りました。其中に兄が歸つて來たらと其ばかりを待つて居ります矢先に、兄は彼地で亡なつてしまひます、續いて肝心の平兵衛が、これは取る年で間もなく沒してしまひました。

二番々頭の太助といふのが、あとを受繼いで帳場に坐りましたが、繼母の機嫌ばかりを取つてしまひに大それた事をした悪い奴で、繼母と心を合せて、いゝやうに家を搔廻はしてしまひました、親父は繼母に欺されて私が何を申しても取上げてはくれませず、繼母は私を目の敵にして、一から十まで爲る事に邪魔をして、たゞ私をいぢめる工夫ばかり、あゝ此様な家の恥を申すのは辛らうございます。何うぞ此儘聞流してしまつて下さいまし。此處ぎりのお話でございますから。

鵠沼で初めてお目に掛りました時は、家に居られませんで彼地へ參つて居り

ました最期で、彼時は未だそれほどゝは思つて居りませんでしたが、本宅は最うしだらもないやうになつて居りました。お別れ申してから程もなく急に、呼戻されて歸つて見ますと、繼母は一昨日態と喧嘩して出て行つてしまひ、太助は其前に無理暇を取つて行つたといふ仕末、今になつて調べると取換がないほどの大きな引負で、前から仕組んだ事ですから、表立つては掛合の出來ないやうにしてありますし、それに繼母が一處ですから親父をいゝやうにして手の屆くだけは借財をして、それを皆親父に負はして行つてしまつたのでございます。

親父は初めて私を前に引付けて、お前の言葉を用ひなんだばかりに、と涙を流して言つてくれました。平素が好い人でございますから、斯ういふ時の氣の毒さは目も當てられません。けれども最う仕樣のない事で、何うにもならないやうになつてしまひました。斯ういふ事もと前から思つて居りましたが、思つた時とさうなつた時と、は苦しさが全て違ひます。私は此時初めて自分のいふ事を取上げられて爲る事も出來るやうになりましたが、何うしましや

う其時は最う手も附けられないやうになつた時て、何を言つても女でございます途方の暮れるばかりなのを漸と隱して、氣を引立てやうばッかりに、御安心なさいまし、一時こゝは何うなつても、私が居ります間は、お父樣に決して御苦勞はさせません。ときッぱり申したが、胸は一杯で泣出さないばかりでございました。

何も彼も持つて居るのは皆人手に渡して住馴れた町内をあとに、横濱の知邊に便つて行きました時は、悲しいより先に、口惜しくつて、腹が立つて腹が立つて、其爲か氣が張つて却つて勇むやうでございました。萎れて全て力が脱けてしまつたやうな親父に向つてこれからは、私が引受けますから、何も最うくよくよしないでと其樣な事を幾度申しましたらう。假令いくら不自由でも、睦まじく笑つて、暮して行けるのだから、とそれを思つて、足も進んで先に立つて慰めながら參りました。

横濱へ行つて前の住居とは打つて變つた火打箱のやうな家でございますけれども、それでも、まア何うか落付いて、さアこれから一働きといふ時になつて、

悪い事は重なるもので、古い手形の其金も太助がいゝやうにしてしまつたのださうです、その手形が三百代言のやうなものゝ手に買取られて、不意に其人から嚴重な催促を受けました。少い額ではございませんし、直に埒を明けるといふ譯には行かず、それが又因業な男で毎日々々矢の催促でございます、私に向つては貴娘の御決心一つで、何うでもなるではありませんか。と身を賣れど言はないばかりに言ひますし、親父の氣の弱いのを知つて居りますから私を困まらせる爲にいつも取つて掛つて種々な事を言つては脅し付けるのです。親父はあとから私故お前に苦勞を掛ける、濟まない、濟まないと現在其子に手を支かないばかりに言ひ暮らされるほど、猶辛くつて御心配なさいますな。何うにかしましやうからと言つては見ましたが工夫は付かず、思案にあぐねて寢つた晩の其曉方でございました、臺所の板の間へ突如に何か落ちたやうな大きな音がして、その響きに吃驚目を覺まして何であらうと急いで行つ見ますと、まア何うでございましやう、親父が其處に倒れて居るのでございます。首には細引が絡付いて、見れば同じ細引の端が梁から下がつて居りま

した。それが途中で切れたばッかりに、危い處を親父は助かつたのでございます。

私は親父に取縋つて家がいけなくなつてから此時まで少しも飜さなかつた涙を、初めて一時に飜して大泣きに泣きました。手を執つて、引立てるやうに居間へ連れて來て、膝に取付いて、何故此樣な情けない事を、とあとは又咽返へるばかりでございました。

最う一刻も猶豫して居られないやうな氣がしまして、私は何も彼も捨てゝ世間の一番心の足らない人がするやうな事を致しました或者の傳手で、身に過ぎた支度料を貰つて私は外國人の妾になりました。」

と言つて、お絹は暫く言葉を止めて、吾を見た。吾は慥かに色を變へたのであらう。終りの言葉を聞くと等しく、首に劍を當てられたやうな思ひをした。口を結んだまゝ、石のやうになつて、怺へて坐つては居たが、吾は言ふ事を知らぬ。

お絹はやがて語を繼いだ。

「三年の間私は其境界に居りました。主人が歸國するに付いて漸つと暇が出て、あとの生計にと言つて餘るほどの財産を讓られまして、再び自由の身體になりましたが、何う致しましやう私は最う昔の絹ではございません。私は此上身の耻は申しますまい。たゞ一言厚顏ましい事でございますけれど、申して宜しうございましやうか。伺ひたいのは、昨晩聞かせて下さいました彼の優しいお心で私を此罪をお免しなすつて下さいましやうか。此樣な事を言はれた譯ではございませんのは、それはよく存じて居ります。又免さぬと仰有いましても、決して御無理のない事ですから、さら／＼お恨み申しは致しません。よし御立腹なさいましても、何處までも御尤と申すより外はございません。けれども私の身の程を知らない願を申せば、何うぞ目を眠つてお聞きなさつて下さいまし、私は免して戴きたいのでございます。何うかして何うにかしてお免しがあるものなら、私は何樣な事でも致したいと思つて居ります。私は未だ世の中を諦めてしまふ事は出來ません。行末を捨てゝしまふ事は出來ません。一言何うぞ仰有つて下さいまし、昨夜から此事ばか

りて、未だ目も合さないのでございます。貴郎お免しなすつて下さいましやうか。」

まじろぎもせず聞いて居た間の吾が胸は、さま〳〵に變つた。長い月日たゞ深く斯うなつた今になつても其思はなほ一つである。其人の口から此樣な言葉を聞くに吾は更に堪へられぬ。又如何にも氣の毒な境遇で、共に悲む事は少しも猶豫はせぬ。であるがであるが、吾が脣は動かなかつた。

「默つて居らッしやいますのは、此樣なものでも未だ少しは思つて居て下さいますのでございますか。けれども御返事は、それと覺悟致して居らなければならないのでございましやう。斯う申す中にも未練でございましやうか、お言葉の出ない中は、よい御返事がありはしまひか、と未だ賴みにして居ります。寧そ何も隱して居ましたら此樣な苦みをしはしますまい。言つてしまつて此儘緣が切れてしまふよりは何も申さないで、あゝ然し何うして私は貴郎をお欺申されましやう。此樣な言惡い身の上を打明けて申した胸の中の苦しさを、何うぞ御推量なすつて下さいまし。

末は亂れて、言葉も震へた。お絹も今は吾を思ふて居る。と吾が胸は引絞られるやうであつたが。口は猶結ばれた。吾は免さぬといふ事が出來なかつた代りに、免すといふ事があゝ遂に出來なかつた。

(十三)

あれほどのものを何故に發さなかつたか。吾は眞にお絹を思うて居らぬのではないか。其癖片時も心の靜まる時はないのだ。前よりも激しく、前よりも狂はしく、吾はたゞ其事のみに何をも爲る事が出來ぬ。今にも馳せて行つて吾が難面さを詫びたくなる。打亂れて掻口說かれた其時の姿は、絶えず目に、其言葉は猶耳に、今は吾と吾身を憤るほどにまでなつた。

如何にして忘れやう。如何にして思捨てやう。思切つた遠方へ旅行するか。さなくば劇職に追廻されるか。いづれにしても此心を轉ずる事が、とばかりの處へ、父の許から又新しく縁談を申込んで來た。これまで度々謝りつけたのであるから、父も或は二の足を踏んで居たのが、意外にも容易く吾が承諾したのに驚きながらも喜んだ。吾も自分ながら案外であつた。これほど輕輕しく返事をしやうとは思はなかつたのである。

かくて吾は吾が運命を定めて胸の此思を斷たうとするのではないか。吾は

結婚を犧牲にするのではないか。否、決して決して其樣な事はない。父も良緣といひ、友も良緣と言つた。妻となるべき人は最も貞淑の、溫厚の更に申分のないものだ。娶るに少しの不思議もない。と吾と吾に答へた。お絹の許から其後手紙が來た。長い手紙であつた。吾が手は殆んど怺へかねるばかりであつたが、中を見なかつた。見て此上心を動かすに堪へなかつた。吾は返事も此由を書いて、併せて今度結婚するといふ事を言ひ送つた。何といふ冷やかな事であらう。

忽ちにして此緣談を破つてしまいたいやうな心が矢も楯もたまらぬほどに起るのは、何うしたといふのであるか。前に吾は輿入を急いだので、父は待ちかねてと一圖に思はれたであらう。さりながら吾は嫁の事を、約束した客が來るほどにしか思つて居らぬ。實を言へば、貰つた上は何うかなるだらう、と僅かにそれてである。

年頃になつてから、さま〳〵未來に付いての空想を描いた中に、結婚の一事もあつた。其時の豫想は決して今のやうなものではなかつた。極めて樂しい

極めて美しい、何とも言ふに言はれぬものであつたが。

* * * * * *

新婚旅行として妻を携へて、大磯の別荘へ行く事に定めて、新橋の停車場を指して車を連ねて、今や着かうとした時であつた。出口の方から、今汽車を下りた人々が群り立つて來て來た中に、殊に際立つて目を惹いた十人ばかりの一組があつた女一人、あとは取卷のやうな男ばかりで、盛んな景氣でわやわや言つて來た。其女がお絹であつたから吾は少からず驚いた。華美な服裝をして元氣よく笑つて、脇の、肩を凹ませた腰の卑い男に何やら面白さうに話掛けて居た。男は揃ひの着物に、揃ひの羽織で、一言いつては無上に笑ふ。多くは藝人のやうなものであつた。吾は顏を背けた。

車は梶を並べて着いた。妻は何も知らぬ。未だ馴れないので、羞かしさうに吾に引添つて立つた。吾は振向いて一目彼方を見たが、此方に返つて相携へて前の階段を運命の歩むまゝに上つて入つた。

いさゝ川

(一)

場所塞げな、身躰ばかりどた〳〵して、と調子の悪い時には長火鉢の向から鋭い聲で遣り付けられる、眼瞼の弛るんだ、眉の太い、鼻の紅い、脣の厚い、耳の大きない、いかな日にもはッきりした事のない代りには、いかな日にも怒つた事のないと言ふゆるりとした人、これが其御亭主で、名を伊兵衛と言つて、躰量が二十二貫目もあつて、それで女房の尻に敷かれて居るといふ噂がある。身分は或織物會社の小使で、降つても照つても欠勤した事のない辛抱人で、二十四の年から小使をして今年四十一になつて矢張小使である。

女房はお谷といふ、どちらかと言へば瘠せぎすの中丈の、見たところ三十七八の、實はそれより三つ四つ下の婦人で、細面の、眼尻が釣れて、鼻が割合に小さく、腮が妙に長くつて、眼の下から頬にかけて薄痘痕のある、總躰に色澤の餘りよ

くない方である。御亭主とはうちはらの手捷さで、我儘で、其癖我儘と言はれると怒るほどの我儘者で、その代りには我精に稼いで御亭主よりは倍の收入がある内職をする。癪持で、月に幾度かよく寐るが、それで月の中に極まつただけの稼ぎは屹度する。夜の目を寐ないでもする。いつの間にか小金を貯めて、今はそれ相應に福々で、それで油斷をしないといふ事。

此亭主は此女房で、一所になつてから彼是二十年近くになる。其の間に時偶衝突といふのは、いつもお谷が獨角力で、獨喧嘩で、自分ばかり怒鳴つて、自分ばかり腹を立つて居るので、那樣時にはいつまで經つても伊兵衛が相手にならぬので、しまひには根負けがして、つい愚圖々々になつてしまふ。或る場合にはそれだけでは滿足をして居られないので、種々雜多の難題を持出して、虐めて困らせて、いろ〳〵に詫びさせて、それで漸く胸を納める、すると直に、何うも氣の毒で氣の毒で堪らなくなつて、急に此方からあやまつて、機嫌を取つて、ちやほやして、氣に入るやうな事ばかりを工夫して、氣味の惡いほど、人によつては馬鹿にすると撲付けもしかねないほどに好くするのである。といふ有樣

て、それも其後次第に稀になつて、御亭主は長くおいそれで、女房天下は萬々歳で、今になつた。

其天下様のお谷と言つても、分に應じた望みより外に世に向つて持つては居らず、伊兵衛は尚かたの如くの小使で、堆かく笑つて居られる人であるし、夫婦仲は先づ並といふので、家の内には何時もゆとりがあつて、差當つても、其先も、不足はないのであるが、唯一つ、お谷に我慢のしきれない不足といふのは、二人の間に未だ一人も子がないのである。

早く一人欲しいのねえを言つて居た頃には、なか〳〵一人ッ子で止まるどころの了簡ではなかつたのが、何うして出來ないのだらう、とこぼし出すやうになつて、大方身體が惡いのだらうと、其爲に餘分の稼ぎをして、湯治に行つて見たり、醫者にもかゝつたり、いろ〳〵に養生して見たが未だ出來ない。授かりものだといふ人の言葉に從つて信心もし御祈禱もし、お呪ひもした。なに様がいゝ、そこへも詣つた。かに様がいゝ、そこへも行つて、お水を戴いて大喜びで歸つて來た。

彌七稻荷樣といふのがあつて、其御鬮が所謂驗かだとあるので、早速駈けて行つて、一心に祈つて戴いて見ると、凶であつたので、それから爾來稻荷樣も稻荷めになつてしまつた。又某といふ人相見が、お前さんは二十八までに、子供が二人ある。と濁醪に唐辛子を年來喫過ぎた爲に縁を瀾らせた大目玉でぐいと洞察して、もつとも至極な面構へで、ためつすがめつ、いや未だあるなか〳〵の子福者ぢやわい。其先に三人ある。うむ確かにある。喜ばつしやい、皆運がよいわい。待てよ一人、否大丈夫、これは又充分な福がある。珍らしい方ぢや。私も恰度四十年から相を見て居るが、未だお前さんのやうな、子福者を見た事がないわい。と胸まで垂れた白髯の黄ばんだ奴を、勿體ぶつて摑みながら、妙な首の捻り方をして餘所行きに感歎の聲を出された時は、折節問屋から受取つて來た一月の賃銀を殘らず其處へ出しても可いやうにぞく〳〵した。這麼事が未だ幾多もある。それほどにして欲しがつて居るのに未だ出來ないのである。

地躰昔からお谷は子供が好きの好きで、もし小さいのが出來たら、私は甚麼に

兒煩惱だらう、未だ眞面目に那樣事を思はない中から言つて居た位で、それてあるから眞身に然ういふ事を感じて來るやうになつてからは尙更に堪らないのである。其中に歲も三十の聲が掛つて來る。一になる。二になる。三になる。連添つてから何年になるといふ事も數へるやうになる。いろ〳〵の事も仕盡した揚句、早くから嫁付いて、最う二十年にも直にならうといふのに未だ其氣もないのは、とても最う出來ないのぢやあるまいか。とこれまで其事を幾度も〳〵思つては思返して、流石にいくらぢれてもこればかりは仕樣がないので、無據く其儘になつて居た事をいとゞ強く思ふやうになつて來た。今時分は惣領の、立派な娘や息子を持つた私と同じ年の人が幾個もあるのに、這麼事ばかり言つてよぼくたの婆になつてしまつた曉は、と心細い末をさま〳〵氣遣ふやうになる。然うなつて來ると適切に老後が案じられて堪らなくなる。四十になつても、五十になつても初產をした人があるといくら思つてもならぬので、それで遂に、これも前に幾たびとなく寧そと思込んでは、又未練を起して居た貰兒をしやうといふ事に決した。

もとより天下様の御意であるから、いよ〳〵然うとなれば論もなく行はれる。心當りの八方へ、お谷は自分の掛けられるだけ口を掛けると同時に、伊兵衛は仰を受けて、種々の注意を例の諸矣々々で受流して、諸方へ出向いて行つてお使のやうな口上を述べた。

（二）

「困るぢやないか本當に、何故然う分つておくれでないのだらう。」

もとは相應な人の女房であつたのだといふ。見た處二十七ばかりの、何處か色ッぽい風で、襟のかゝつた瓦斯糸の袷に引掛けの帶を横つちよにして立膝をして、長火鉢の前に眞底困つた顔で溜息をついて居るのは、お兼と言つて亡くなつた姉の家を讓受けて今は女主人。

向つて大胡座の、色の淺黑い、眉の濃い、眼のきりゝとした一つ二つ若さうな男は、中柄の二子の袷に小辨慶の浴衣を重ねて、肩を怒らせて、煙管を仰向けに摑んで膝の上に載せて居る手に脈の張つて見えるほど力を入れて、屹となつてお兼を見詰めて居たが、聞くより尚其目を怒らせて、

「べらぼうめえ、それほど白癬にやァ未だされねえや。」

と腹立聲にまくしかけて言放したが、

「おい。」

と一つ開直つてぐつと睨据ゑて、
「お前は俺を、ほんの一時の慰みものにして居んだな。」
聞くや否やお兼も忽ち氣色ばむで、
「何だとえ。」
「何もくそもあるもんかい。其氣なら其氣だと判然言へ。うぬ、たゞで濟むと思やがるな。」
「何を言ふのだねえまア思ひもかけない。」と、お兼は顔を顰めて術無さうに、
「那樣言掛り見たやうな事を言つて、お前はたゞ私を虐ぢめて居るのだね。餘りだと思ふよ。些少は察してくれても可いぢやないか。」
「五月蠅えやい。最う何も言ふにやア及ばねえ。お前の情無しはよく分つた。合せものは離れものだ。お前が其氣なら此方にも未練は無え。だがコウ、野郎を潰された丈のお禮は乾度するぜ。覺えて居やアがれ。」
と急に煙管を棧留の煙草入に挿んで懷に押込みながら立上つて歸りかける、
「直樣、

とお兼は見上げて呼掛けたが、男は默つて衝と入口へ來て既障子に手を掛ける。

「ま、待つとくれよ、直樣。」

と折返してたが顧みもせず、ずッと出やうとする、見るよりお兼は慌てゝ駈寄つて、取縋りさま、

「本當にまアお前は何うしたつていふのだらう。」

と半ばも言はせず、いきなり振切つて、

「何しやがるんでえ。」

横に拂つて、倒れるのを鼻で笑つて、がらり障子を明けて片足早く敷居を踏出した。お兼は起上りさま猶豫もなく飛付いて、力任せに手を執つてあとへ引戻して、下へ据ゑて膝と膝とを擦合せながら、一杯の憂愁を含ませた眼にぢつと見上げて、

「直樣、これほど事を分けて居るのに飽まで那樣仕打をしておくれなのは、お前本當に切れる氣で居るのだね。」

言葉を切つて、既聲を濕ませて、

「お前最う私に飽きが來たのだね。」

と捉へた手を離してさめ〴〵と泣く。流石に立ちも上がらないが、直は尙解けやうともせず、

「べらぼうめ、そりやアこつちで言ふ事だ。分つてらア。最う、いやい。俺は俺だけの事をするんだ、打捨つとけえ。浮氣者め。那樣面せえして見せいときやア可いかと思やがつて、最う甚麼氣休めにも乘るんぢやねえぞ。威嚇さだとばかり思やがるな。腹に了簡がなくつて這麼事を言ふ俺ぢやァねえから、然う思つて居やアがれ。」

お兼は一ゆすり手を搖つて、

「それぢやお前何うすれば可いのだよ。」

「何うも斯うもあるものか。分かるやうにして分からせるが可いや。」

「だから何うすりやア分るといふのだよ。」

「ちよツ、おれツてえなア。すつぱり其方の心意氣を分るやうにしろと言ふ

んでえ。」
「だれッたいのは此方の方が甚麼にだれッたいか知れやしない。心意氣ッたつてお前、私はお前の知つてる通り、お前の爲にや甚麼事をしても情を立てゝ居るぢやアないか。一々言はなくたつて、お前に決して分らないと言はせないよ。」
「えゝ、那樣事ッちやアねえやい。」
「ぢや何だよ。言つて御覽な。」
「勝手にしやアがれ。」
「那樣事を言つたつて仕樣がありやアしない。言つて聞かせてくれる位な事をしたつて可いぢやないか。それともお前、那樣にも私が憎いのかえ。」
「やかましいやい。那樣に聞きたきや言つて遣らう。」
「さア、お言ひな。何だよ。」
「餓鬼の事でえ。」
「お鈴の事。」

「當りめえよ。何故可愛いゝなんてぬかしやがるんでえ。」
「まアそれをお前那樣にも根に持つて居るのかえ。」
「知れた事だ。もとがもとだア。癇に觸らなくつて何うするものかい。」
「そりやお前これまでに幾度だか譯をすつかり言つて「分つた。最う可いや。淸く忘れッちまはう。」とお前も納得しておくれの事ぢやないか。それを今更又洗立てをするお前の氣が知れない。那樣氣でよくまアお前は、いつかの彼の團子坂で邂逅つた時のやうな事が言はれた義理だねえ。そりやア私も杉田さんの………。」
「默らりやアがれ。那樣ちよろッかをいつまで聞いて居るものかい。杉田の野郎を未だ思つて居やアがるのだ。然うだとも。然うでなくつて何うするものかい。さア、それが嘘なら後暗え事のねえあかりを立てろ。俺の得心の行くやうにしろ。」
「そりやアお前に得心が行つてさへくれるなら、此上甚麼事をしたつて厭やしない。この事で疑はれるのは私や本當に口惜しいから、それこそ私ア火水

の中へても飛込めとお言ひなら飛込んで見せるよ。」
「屹度するな。」
「しなくつてさ。念を押すには及ばないぢやないか。」
「屹度だな。」
「くどいねえ。」
「よし、そんなら切出してやるが、先刻も言つた餓鬼の事だ。」
「えツ。」
「それ見やがれ。那樣面付をしやがるぢやねえか言はねえ事ぢやねえ。うぬ、何うするか見て居やがれ。」
お兼の息は稍少し含郤んで來た。脣をきつと締めて、眼には却つて勇氣を持つて、ぢツと直の顏を見詰めて居たが、稍あつて聲を落して、
「それでお鈴を何うしたら可いのだえ。」
直は顰み面の未だ眼を据ゑて、
「さう出て來るからには分つたらう。さア、お前の口前が本當の腹なら、」と

居住居をかへて、

「あの餓鬼を、一生縁切りで何處へでもくれつちまへ。」

二人は燒木杭の此頃燃付いた出來合で、杉田といふのは其昔鞘當筋の人であつたといふ。半分は意地の義理合で其杉田の方へ奪られて、お兼は其人の後添になつてお鈴といふ今年九つの父親肖の兒を擧けて、良人に後れたあとに少し混雜いて、外に子供の二人あるに、自分の腹を痛めた子の可愛さに、女であるを幸ひ女親付きといふ事に話を纒めて、若干かの手切れを貰つて恰度折よく姉が仕出して、兎も角氣樂になつた實家へ戻つて來た。其兒の事である。色白で鼻は低いが、口元が可愛らしくつて、眉の薄い、目に張りのある、瘠せた兒である。恰度其時、少し先の荒物屋の店で、其處の內儀にいろ〳〵なお話をして居た。

「あのう、あたいは、大きくなつてもいつまでも、いつ、まアでも母樣に抱かつて寐るの。さうして起きるとお菓子を二つと半分喫べるの。皆喫べると毒だつていふから。あのねえ、夜になつてね、母樣が居ないとね、私は恐くつて手水

に行かれないから、獨りで泣いてるの。さうすると母樣が歸つて來てねおやッて言つてね、直に傍へ來て、私を抱いて、あの、堪忍おしッて言ふの。然うしていろんなお土産をくれるの。いつかはきんとんだの、蒲鉾だの、あのうお魚だの、いつかは蜜柑だの、それからお玩弄だの、いつかは、あゝ本當に可笑しかつたよ、あのう、何だつたかねえ、あゝ蝶よ、蝶の小ちやな猫がね、踊をゝどるの、本當に可笑しかつたよ。あ、踊は面白いねえ。私も今に大きくなると、菊姉さんのやうな大きな扇を買つて貰つて、踊を習ひに行くの、母樣があの習はせに遣るつて然う言つたよ。あ、何だつけねえ、何のお談話をして居るのだつけねえ。え、母樣のお土産のお談話、あゝ然う〳〵、然うだッたのねえ、すッかり忘れちまつた。あゝ母樣は本當によくお土産をくれるよ。然うしていろ〳〵にして可愛がつてくれるの。それだから私は一番好きよ。それだから始終母樣と一所に遊ぶの。けれども今は可けないの。何故でもあの嘘のお父樣が來て居るもの。あれは嘘のお父樣だよ。鍛冶屋の伯母樣が然う言つたよ。嘘のお父樣だッて、それだからね、此間來た時にね、嘘のお父樣ッて言つたら、私を打つ

たよ。私はあの人本當に嫌ひだよ。でも私が母様といろんな面白い事して遊んで居るのに、いつでも來ちやア外へ追出しちまふんだもの。」

其中に倦きてしまつて、

「あら、美代孃〳〵、」

と友達の姿を見付けて駈出して行つた。

暫くたつて、向ふの空地の春草の傍に四五人集つた中に交つて、ぺん〳〵草を摘みながら、可愛らしい黄色な聲に節をとつて、

「ぺんぺんことかいな。」

（三）

一月ばかりそれでも經つた。時候は夏に移つて、美くしく若葉を染めた日の光も、次第に嚴しく緣には長く出て居られぬやうになつて來た。お兼は此日お鈴を連れて、昨日は芝居だつたから今日は淺草へ行つていろ〳〵な物を見て、歸りはお鈴の最も好きな鰻魚にして、それから二人に分けて持てるだけの玩弄を買つて遣つて、行きに買つた花簪だの帶揚だの、安いのだけれど指環だのを持添へて、お鈴の好むさま〳〵な事をして、燈火の點く頃に歸つて來た。お鈴はころ〳〵して喜廻るばかり、買つて來たものゝ彼を見此を見、彼方の袋の中を覗いたり、此方のぼうるの箱を又開けたり又蓋したり、笑つて〳〵笑ひ續けて居る前に、お兼は歸つたまゝ未だ着物をも着更へず、休息の煙草を喫しながら、嬉しさうに其態を眺めては、囀散らすお鈴の止度のない能辯に、一々身を入れた返事をして居る中にも、時々〳〵急に俯向いては、無暗に溜息をついて居たが、俄かに元氣を付けて、譯もなく笑ひながら

「鈴ちやん鈴ちやん、」
早口に聲を追つて、
「さアこれからね、今夜中お前といろんな事して遊ばう。」
お鈴は躍上つた。
「そいぢや、あの、お隣りごつこだの、お手玉だの、いろは歌留多だの、それから、ほら、此間のやうに、片いッぽ目を閉つて、紙縷で、ほら、お盥を貸しておくれなさいッてのをしやう。それからあの十六武藏をしやう。それからあのなんこをしやう。それから、赤坊ごつこをしやう。それから、何をしやうねえ。何でゞも可いわ。母樣と遊ぶんなら何をしても面白いわ。さア爲やうよ。初まりは、何え、母樣。」
とやうな事で、それから二人で、殆んど何をも忘れて彼から是と遊興じて、笑つたり囃したり、腹さんざ出來るだけの遊びを仕盡した。子供の事で、目先の變る面白さに浮れて、お鈴はいつまでも、張りのある目をいとゞ張開いて、皿のやうにして居たが、やがて俄かに、仕掛けて居た遊びを放擲して、

「母様、私最う厭になつたよ。何かお談話をしておくれな。」

と傍へ寄つて母の膝に兩手をべッたり凭れるやうにして、俯向いて眼をくるりとさせた。

「今度はお談話かい。」

とお兼は退屈もせず機嫌を取る。

「然、何か面白い事。」

「然うさね、何が可からう。何でも鈴ちやんの好きなものが可いね。鈴ちやんの一番好きなのは何だらう。」

「私の一番好きなのは母様よ。」

「えッ。」

と思はず心を打たれるを、お鈴は不審かしげに、

「なアに？」

お兼は我に返つて急がはしく、

「なに何でもないのだよ。」

と言つて、重ねて、

「好きと言へばお前明後日行く今度の母様が、一番好きにならなくつちや行けないよ。いゝかい。此間からいろ／＼言つて聞かせた通りに屹度するんだよ。今度の母様はねお前が一番好きだとさ。」

「然うお。そいぢや私も好きにならうや。」

「然う／＼、お前はいゝ子だから屹度さうおしよ。」

「あい。」

「それからお前、私が幾度も言つて聞かせた事を、よく覺えて居るかえ。」

「なんの事、」

「あら可けないねえ。お前今度の母様家へ行つたらッて、その那麼に幾度も言つたぢやないか。」

「あゝ彼の事なの。私はよく覺えて居るよ。何でも皆知つてるよ。私本當に母様々々つて言ふよ。嘘の母様なんて言やしないよ。あの何だねえ。明後日行つてお泊りするんだねえ。私最う一人で寐られるよ。昨日も一昨日

も寐たもの。今夜も一人で寐るわ。」
と言つた時には、既目を二つ三つ瞬きさして、小さな欠伸をした。
「最う些少起きてお出でよ。」
とお兼は見て言つた。
「あい。」
とは言つたが、何だかがつかりして、又欠伸をして、
「私疲労れちやつたよ。だるくなつちやつたんだもの。」
「それぢや又明日にしやうかね。」
とお兼は何か猶豫らつて居た。お鈴は目を擦つて、
「母様、何かおくれな。」
と欲しいでもなく食べるものを求めながら、それを待つのでもなく、ころりと横になつて、直にうツとりして、母に簪を抜いて貰つたのも知らなかつた。

（四）

例の如く圖拔けに大きな横平つたい靴を履込で、ぼこ〳〵といふ足音と、咳ばかり聞けば社長の價直があると仲間の中で名代の咳拂ひをあとに殘して、伊兵衛殿の十年一日の如き出勤があつて後、折節廻つて來た女髮結のお角といふ三十恰好の小作りな年增を相手に、風通しのいゝ南の肱掛窓に向つて、前に鏡立、肩に浴衣の古を上張に拵へたのを掛けて、お谷は髮を結はせながら、二人の間に斯ういふ會話があつた。

「あ、お角さん、いつかの子供の事ねえ、」

「はア、彼の左官の鐵樣の口入の、姓の惡くない人のお子だとかいふ、」

「えゝ彼とう〳〵貰ふ事に極めましたよ。それで何彼の談話もすつかりついてね、明日つから此方へ引取る事になりましたよ。まいゝ鹽梅に賴むなり口があるなりでね、這麼に早く然うならうとは思つて居なかつたのですよ。お角さんにもよく子供の事ばかり長い間言つてましたねえ、何しろまア子供

の大好きな私の處へ來るんだといふのでねえ、先でも大變喜こんでくれてね然ういふ處なら是非とか言つて、それでもまアいろ／＼此方の事を聞合せたのでしやう、少し手間取れたやうでしたがね、首尾よく纏つて先の何にも逢ひましたよ。此前お角さんが鹽梅が惡くつて、お鹿さんに一度結つて貰つた事がありましたらう、あの日ですよ。可愛らしい子でね、私や最うひよいと見て直に氣に入つてしまつたんですよ。お鈴ッて言ふ名でね、まア明日來ますからよく御覽なさい。御近所づからで贔負にして可愛がつて遣つて下さいよ。何しろ先でも貧窮つて遣らうといふぢやないんですからねえ最う九つにもなつて手の掛かるやうな事はありやしませんし、私もまア腹も痛めず世話もなく那麼可愛いゝのが自分の子になつてくれやうといふんですから、這麼いゝ事はありやしませんよ。私もこれで漸つと安心をしましたよ。

「まア然うでしたか。お目出度うございます。那麼にもまア子供を欲しがつてお出でしたから、さぞお可愛がりなさる事でしやう。本當に其お子もお家のやうな處へ來れば、同じ貰はれるにしてもまア甚麼に仕合せでしやう。

お鈴さんて言ふんですつて、鈴ちやん、いゝお名ぢやアありませんか。聞いたばかりでも何だか容色がいゝやうに思はれますわ。おほゝゝゝ、まア何にしてもお目出度うございます。」

「はい有難う。いゝえ最うね、何だかわく／＼するやうな氣持て、可笑しいやうに物も手に付きませんの、早く來てくれないと私や何も出來やしませんよ。夢にまで見るんですもの。私ア何にも道樂はないけれど、子供ばかりは本當に道樂ですよ。それが餘所の何でもない子供でも然うですもの、自分の子と來た日には本當に舐めるやうにして可愛がるだらうと思ひますよ。あとで見て下さい、彼處の簞笥の上にいろ／＼積んであるものね、ありやア皆お鈴―おや最う阿母樣風を吹かしてさ――まア其子に遣らうと思つて、あれのこれのと氣を配つて昨日までに買つて置いたのですよ。着物なんぞもねえ、先ぢやア數を揃へて持たして遣すさうですから、不自由はないやうなもんですがねえ、何だか私の拵へたものが着せて遣りたくつて、私の貯への中を出してね、いろ／＼見立てゝ買つて來ましたの。それて最う、手取早く裁縫に掛つてま

すの。御覧なさい、あの針箱の傍にある疊紙の中のだの、未だ裁たないであるのだの、其處の隅に押板を掛けてあるのだの、みんな然うですよ。」

「本當に貴女のやうなお方は、生の親にだつて那樣にはありやしませんよ。其鈴ちやんの阿母だつて、甚麼譯があつて縁を切つて遣さうッて言ふのだか知りませんが、大方まア何家へ二度添ひでもしやうと言つたやうな事なんでしやう。それにしてもさ、貴女とは比べものになりはしませんわ。鈴ちやんの運がいゝんですよ。いゝ月日の下に生れたと言ふもんですわね。私なんざア子供を持つて居りやア、一人ッ子だつて構やしません、無理にも貴女に上げてしまひますよ。」

「うまい事を言つて、那樣事が出來るもんですかね。それはまアさうとして私はね、斯うしやうと思ふんですよ。良人はあの通り何にも構つてはくれませんから、私が一人で手鹽にかけて丹精しなけりやならないのでねえ、那樣這麼をいろ／＼考へましたがね、私はまアね、第一に一人で暮して行けるだけの業を充分仕込んで置かうと思つてるんです、さうさへして置けば、何う轉んで

も當人の爲に安心ですからねえ。今はまア學校へ通はせて置いて、其中に當人の好きなもので、先に見込みのある何か職を覺えさせやうと思つて居ますの。何うせ又私共の身分でもつて、僣上な出世でもさせやうなんぞと思つて、立派な家の子の眞似なんぞさせやうもんなら、彼のお向ふのお捨さんのやうな、那麼事にでもならうもんなら、それこそ長い丹精も何も無茶苦茶になつてしまひますからねえ。成丈きりのない慾を乾かさないで、何でも手丈夫な事をと念掛けて居ますのだから。遊藝や何かは除外にして其外には裁縫をみッちり覺えさせやうと思ふんですよ。それでまアいゝ頃に相應な婿でも取つて、其時分迄には私も亦骨を折つてけちな身代ですけれど延びるだけ延して置きあア、其時こそ幾日でも樂寢をして氣樂にして行けますからねえ。とまア這麼眞面目な事まで未だ來もしない中に考へて居ますの。可笑しいぢやアありませんか。」

「なに可笑しい事があるもんですかね。それだから鈴ちやんが仕合せだと言つたのですよ。其氣で丹精してお遣んなされば、それこそ本當に間違ひッ

こはありませんからね。なまじつか藝事なんぞ習はせますとね。浮いた事ばかり覺えてね、碌な事はありませんよ。十に九までいゝのはありまんね。本當に藝事なんぞ出來るものにまつたうの心掛けのあるものはまアないと言つて可うござんすわ。」

「それでもお角さんは清元が那麼によくお出來ぢやアないか。」

「え、なに、だから御覽なさい這麼ざまで、いつまでも芽が出る日がなくつて、飛んで廻つて居るぢやアありませんか。自分ながら愛想が盡きてしまひますわね。」

「だつてお角さんのやうにしてお出なら、それは最も申分はありせんわ。惣樣だつてお前さんの働きて、立過ごして居ると言つていゝ位なんですもの。其癖惣樣は那麼に邪慳におしだけれど、本當によくしてお上げだと思つて、感心して居るんですよ。」

「まア、此位な事でよくして居るんなら、誰でもよくしないものはありやしません。私が又本當によくすれば良人だつて那麼ぢやア居りませんやね。」

「だから惣樣が分らないッて皆が然う言つて居ますわね。」
「ぢやアこれでも一かどの亭主思ひですかね、おほゝゝゝ。」
「然うですともさ。おや談話が飛んだ處へ行つてしまつたのね、先刻何を話しましたつけ。おゝ然う、お鈴の躾の事でしたね、それで、末はまア然ういふ事にして置いてね、此先何うか見つともない扮裝もさせたかアありませんから、私も我勢に精を出して今迄の倍も稼ぐ氣で掛からなけりやならないと思ふんですよ。女の子は金ッ喰ひだといひますからねえ。なか〳〵油斷をしちや居られませんよ。私が付いて居るからには、餘りおしやらくな眞似は成丈けさせないつもりですけれど、女の一通りの身嗜みは是非しなけりやなりませんからねえ、奢つた沙汰は要らないけれど、少しは人にも振返つて見られるやうになんぞと種々んな慾も出て來ますし、何しろ何うかして人に後指だけは指されないやうに屹度しやうと思つて居ますの。今はまアいゝものでなくとも少ざッぱりした扮裝をさせて、髮も氣を付けていつもちやんとして居るやうにさせて、憎まれ口をきかせないやうにして、行儀をよくして買食なん

ぞは決してさせないで、何でも素直にして、何處へ行つても可愛がられるやうにしたいと思ふんです。まア甚麼に樂しみでしやう、私や本當にそればッかり考へて居て先刻も言ふ通り物も手に付かないんですよ。」

「貴女は本當に兒煩惱ですよ。明日つからが思遣られるやうですわ。私も少しばかり他人の手に育てられたものですが、それに付けても何うして貴女のやうな氣が持てるだらうとしみ〴〵思ふんですよ。」

「おや〳〵、お角さんは何處かへ貰はれてでも行つた事があるの。」

「唯恰度十一から十三まで餘所の家へ貰はれて行つてたんですよ。貴女のやうな阿母だつたら、それこそ私は居坐つてゝ首玉へ縄を付けられても動きやしませんがね、そりやア最う本當にお談話にならない酷い人なんですよ。其癖私は兄妹多で、おまけに私の生れた前の前から家の工面は世間並はづれて惡いといふのですから、なか〳〵あまやかされて我儘に育つどころぢやありませんし、自分で言ふと可笑しうござんすが其時分にはこれでも温柔しい兒でしたから、決して逆らうやうな事はなかつたんですがね。貰はれて行つ

た。當座こそ少しは斟酌もありましたがね、それでも行つた初めの日から最うお叱言で泣出すやうな始末で、それから先は箸の上げ下ろしにも打れるんです。本當に身體に生傷の絶えた日はありませんでしたよ、未だ撲たれる位は生優しい中でしたよ。三日も四日も干乾しにされて、ぐる／＼卷きに縛られたまんまで、物置の二階へ拋り上げられて居た事もあつたんですよ。寒に入つた眞夜中に、裸にされて汲置きの水を浴びせられたり、燒鏝だの、燒火箸なんぞはしよッちうなんですもの、それがねえ、何かそれだけの惡い事でもしたのなら又其仕置といふ事もありますがね、罪のない子供心の、眞箇の些細な事で直にそれなんですからね、生みの子でないと如彼までに違ふものかと、今つから思つても慄とするやうですよ。御覽なさい此横鬢の處の大きな傷なんぞも取りにやつた煙管の持つて來やうが遲いと言つて、其煙管を引奪つて突如二つ三つ力任せに打つたもんですから、堪りやアしません直に打切れて其處等中が血だれけになつちまふといふ騷ぎなんです。自分ながら情けないと思ひましたよ。家に居た時は丸まッちくなつてね、思切つて肥つて居たので

すがね、それが本當に糸のやうに瘠せちまつてね、其處等中見える處は傷だらけなんですもの、遂う／＼ね、那樣ひどいめに遇つて居る事が人傳手に生みの親の耳に入りましてね、それは捨てゝ置けないッて言ふんでいろ／＼掛合つて漸つとの事で又もとの家へ戻つて來ましたの。今ですからお談話にして居るやうなものゝ、それは本當に辛うござんしたよ。子供心にも死んでしまはうと幾度も思つた位ですもの、最う一年もあの儘で其處に居やうもんなら、私は本當に今頃は何うなつて居るか知れはしませんよ。

「然う、まア、那樣苦勞をしてお出でだつたの。何て言ふんでしやう。那樣まア、邪慳な人がありましやうかねえ。私にやア出來ませんねえ。私や甚麼事があつても子をいぢらうなんぞといふ氣がてんから出て來やうとは何うしても思はれませんよ。よく餘所の阿母樣が、何か惡戯をしたと言つては自分の子を折檻したりなんかするのを、脇に見てさへ胸が痛くなるんですもの。私は本當に子供ぢアや慾も得も要らずに可愛くなるんですの、あのねえ、一體纔ッ兒なんぞがよく僻見を起したがるのはねえ、私やありやア養ひ親の仕方

が惡いからだと思ひますよ。なに此方から眞底可愛がつて遣つて心に隔てのないやうにしさへすれば、甚麼兒だつて懷かない兒があるもんですかね、私アお鈴が來たらそれこそ自慢ぢやありませんが眞實の親子よりも尚仲がい位にして見せますよ。」

「貴女なら屹度それが出來ますよ。そりやア私も請合ひます。這麼確かな事はありませんから甚麼事して請合つたつて可うござんすわ。可愛がるといふ言ふのを通越して、屹度最う餘所の目にも餘るほどやれこれなさるだらうと思ひますよ。然し貴女が其氣で盡してお遣んなりさやア、鈴ちやんも亦甚麼にか孝行をなさるでしやうよ。」

「そりやアね、此方がそれだけによくして遣れば、些少は身にしみて喜んでくれるでしやうよ。まア後々年をとつてね、足腰の不自由になつた時に、傍から氣を付けて劬はつてくれたり、また鹽梅でも惡くなつた時には、いろ〳〵看病してくれたりなんかするのは、そりやア女の事だから屹度優しくしてくれましやうよ。」

「そりやア最う言ふまでもありませんわ。これからはまアお世話が燒けるとは言ひぢやう、お樂みですねえ、毎日笑つてばかりお出でしやう。私も些少あやかりたいもんですねえ、おや根が上がり過ぎやしませんか。」

（五）

お兼は一人、立つたり居たり、落付かぬさまで、長火鉢は暑くなつたので、隅に押遣られて助炭を冠せてある、其此方のいつもの席に座つて見たり、ふつと出窓の處へ行つて表の方を何か物でも捜すやうに眺めて見たり、又もとの座へ返つて、がつかり氣拔けがしたやうになつて、重くるしい溜息を洩して、稍あつて氣が付いたやうに忍泣きに泣出した、俯向いて片手で目を押へて、稍、逆上せて紅くなつた其顏にきりもなく淚を押流して居たが、情に激して忽ち細く迫つた聲を上げて、ひいッとばかり其處に泣伏した。

途端に勢よく格子戶を引明けて急がはしく突、掛の駒下駄を脫捨てゝ衝と上つたのは、此七日ばかり此處への足を拔いて居た彼の直吉である。見るから滿面の喜色で、片手に一升樽を提げて、がらり隔ての障子を明けて入つて來た。音を聞、付けて慌てゝ泣顏を隱して振返つたお兼は、それと見て強ひて笑顏を作出して、

「おや、最う來たのかえ。

直吉は上機嫌で、お兼の前にどッかと座つて笑ひながら、

「最うたア何てえ。最うたア有難くねえ挨拶だぜ。俺が那樣に五月蠅えかい。ぢやア餘りだぜ。七日の間遠のいて居てくれろといふから、無據え我慢して今日まで待つてたんだ。すると先刻餓鬼め行つちやたつツてえ事を親方の使で仕事場へ來た新の野郎に聞いてよ、俺ア急に繰合はして貰つて仕事を晝仕舞にして歸つて來たんだ。おい、一升持つて來た。直につけてくんねえ」

「おや〳〵晝間ッから始めるのかえ。」

「構あ事アねえぢやアねえか。何もお前晝間飮んぢやならねえといふ奴があるめえ――。」

「そりやア然うだけれども、ぢや何か取らうか。」

「行道に然う言つて來た。最う來るだらう。鰻屋の野郎めえ、俺の面ア見てくす〳〵笑つてやがつたぜ。まア何でも可いから有合せたものを先へ出し

ときねえ。那樣もんで始めやうぢやねえか。それから水貝が來らア。お前の好きな鰌も來らア。さア支度に取掛つてくんねえ。おしつけ此處へ入夫つた日にや、お前を這麽に使立てはしめえと思ふが今日は何しろ前祝だ。まア一つ俺の爲に働いてくんねえ。」

「なに那樣にお賴みでなくつたつて、誰が働かない奴があるもんかね。那樣事を言つてくれるだけみづくさいぢやないか。」

「みづくせえッてば俺も今の中に言つて置くが、お前今泣いて居たんだらう。」

「え、」

「目の縁を紅くしてよ、袖を濡らしてよ、いやに鼻を詰らしてよ、それでなくつたつて大概樣子で分らア。最う斯う成つて來た上で、俺ア下らねえ事を言ひたかアねえが、お前未だ未練を殘して居てくれちやア、些少ばかり面白くねえぜ。お前あれほど俺の爲に情を立てるからにやアと言つて、いろ〳〵立派な口をきいたんぢやねえか。最う斯うなつた曉にやア奇麗さつぱり思切つて、己と二人ッ切の世界になつてくれなくつちや俺ア厭だ。」

「そりやアお言ひでなくつても分つてるよ。いつまで私だつてくよ〳〵して居るものかね。何しろ斯う思切つて遣つちまつたんだから、最う何もお言ひの事はなからうぢやないか。直樣、私やこれほどまでにしたのだから、それで何も勘忍しておくれよ。ね可いかえ兎も角支度をしやう、さア〳〵今日は私も飮むよ」

と終りの言葉は急に元氣よく、其まゝ、勢付いて臺所へ立つて行つて、鼠入らずや蠅帳や其處等をがたごとさせて居たが、やがて用意の膳にそれ〳〵のものを載せて入つて來た。燗が付く中に誂へのものも來る。それこれして居る間に肴が前に並んで盃の獻酬が始まつた。

「まア何しろ可いや」

と直吉はきうと一盃を干して、追掛けて酌をさせながら、

「斯う二人で心置きなく差向つて、ゆツくり樂しく飮まうと思つたのは何時からの事だつたか、古い〳〵二才の時からだ。今日の酒の美え事、十年振で酒の味が本當にするやうな心持だ。愚痴を言ふんぢやアねえが、おいお兼、聞い

てくんねえ。お前は俺に察しろ〳〵ッて言ふけれども、俺もお前にやア存分察して貰はにやアならねえ。俺ア男だから幅の利かねえ這麽事ア言ひたかアねえが、俺ア初まりのそも〳〵から命も遣る氣でお前に掛かつたんだ、それをお前、杉田の野郎に横奪りされた時の口惜さは、そりやア實に人にやア分らねえ、臓腑が煮えくり返へる處の事ぢやアなかつた。お前の老爺の義理せえなりけやア、俺ア本當に杉田の野郎を、一も二もねえ直に踏込んで行つて鱠にしてくれたんだけれど、そいつをぢッと堪へて、虫を殺して居た其又口惜しさは、實に骨身にこたへて忘れられねえ。不意に名古屋へ飛出して行つてしまつたのも外に譯がなにあるもんか、皆それから起つた事だ。それから此方い足掛十年になる。其間お前、斯う言つちや何だけれど、寢た間もお前を忘れやしねえ。それほどにも思つて居る俺だ。お前も實を盡してくれる氣なら、仇敵の片割れの彼の餓鬼を捨てゝくれる位の事は、それに杉田をお前も厭ながら義理で行つたとせえいふぢやァねえか。那樣餓鬼に代へて俺を立てゝくれねえやうな事ぢや、餘り俺を知つてくれな過ぎると思つて、俺アあの餓鬼

の居る間は全く氣色が惡くつて何うしたつて憎かァ思はれねえお前の面までが癪に障つてならなかつた、俺ァ何も妬くんぢやねえ、妬くんじやねえが心持がいゝ者か惡者か、考へて見てくれたら判るだらう。然しまァお前も斯うまでしてくれたんだから、其丈お前の俺を思てゝくれる心も分たといふ者で、樣子でも知れるだらう、俺も今日初めて氣になつて居たたん瘤が取れたやうで全く心嬉しいのだが、繰返して言ふのは此上未練氣を出してくれねえ事だ。後生だから屹度頼むぜ。先刻見たやうに泣顏なんぞして居られると、俺もついまァ厭な心持になつてならねえからなァ　え、おい、可いかい、今ッから頼んどくぜ。俺ァ全くの處、何にもいさくさのなかつた昔に返つて、愚に返つて、二人ッ切りで、過ぎた事はすッかり忘れッちやつてよ　長え間なくなして居た樂みを此處で、殘らず取返さうッて肚なんだ　え、おい、お前だつて前から俺を思つて居てくれたんなら、萬更其氣が無えのでもなからう」

「知れた事だァね、私だつて若い身空を、氣に染まない處でさん〴〵荒してしまつたのだから、些少ァ自分の思ふやうな事をしなくつて埋るものかね、最う

那樣、何の談話は止しておくれよ。お前に那樣に言はれると、私だつて氣が引けて、滅入つてしまつてしやうがありやしないぢやないか。最つと陽氣にして私も共々浮かれるやうに景氣を付けて笑つておくれな。」
「笑はなくつて、先を思やア嬉しくつて立切れめえぢやねえか。此方ア笑ひたくつてうづ〳〵して居る位なもんだ。お前の仕向け次第でいつでも笑はア。」
「それぢや私の仕向けが惡いから笑はないとお言ひなのかえ。」
「なに然ういふ譯ぢやアねえ。」
「ぢやア何ういふのだえ」
「別に何うッて事もねえのよ。まア可いやな。一盃やんねえ。」
と猪口を出す。受ける。注いで遣る。仲のいゝ體たらくで、直吉は只莞爾ついて居た。
「あら、這麼に多くッちやア、」
「多かア助けてやらう。」

「頼もしいねえ。」
「今更知つたのか。」
「當になりやアしないよ。」
「何故、何故々々、言つて聞かせねえ。那樣事を言はれて默つて居られるものか。何でも證據を出して見せねえ。」
「お前は地體浮氣もんだもの。」
「おい。」
「浮氣もんさ。若い時分だつて種々の噂があつたぢやないか。蔭で私を甚麼に口惜しがらせたか知れやしない。別れてから後だつて、此方に引け身があるから強くも言はれないで居るんだけれど、一々洗ひ立てをした日にやア、甚麼襤褸が出るか知れたもんぢやありやしない。」
「那樣、だらう談話を持つて來たつて仕樣があるもんか。言へるなら確かり名を指して見るが可い。俺ア憚りながらこれんばかりも那樣眞似えした事は無えんだ。それだから先刻のやうな事も言ふんぢやねえか。」

「それだつてお前、傍に付いて居て見たのぢやあるまいし、何があつたか知れはしないやね。よしんば又お前が甚麼に堅くして居たッたつて、他が何うして只打捨つて置くものかね。」

「いゝ加減な事を言つてくれるない。其位なら何も這麼に脾腹揉んで騒ぎやしねえや。」

「大層おとなしく出て來たね。それぢやアまア過ぎた事は大目に見て置くとして、これから先、こりやアしんけんに言つて置くがね、浮氣をおしだと聞きやしないよ。」

「そりやア此方で念を押してえ位なもんだ。お前こそ屹度だぜ。」

「それこそ念を押すほど馬鹿らしいやね。私ア此先、何んな無理でもお前の事なら何でもする氣で居るんだもの。其代りにはお前、本當にもし心變りてもしておくれだと、只ぢや屹度濟ませないよ。」

其言葉の切れると同時に、車が俄かに家の前で止つて、泣立てる聲と、慰撫める聲と一つにこんがらかつて聞えた。泣く聲はお鈴ので、慰撫めるのは仲に立

つた左官の鐵樣のだ。お兼は忽ち色を失つて、思はず立つて驅出やうとした。

「やい。」

と低くはあつたが根強い聲で一喝して、猿臂を伸して下に引据ゑた直吉の、眼はぎろりと光つて、酒の氣も加はつた眉間に見る〳〵癇癪筋が現はれた。お兼は俯向いてしまつた。

「お前先刻言つた事を忘れやしめえな。」

「え、なに、そ、そんな事はありやしないけれど、」

「無いものが其ざまは何でえ。お前は未だ俺をいゝやうに釣つて居るんだな。」

「いゝえ決して、決して那樣な氣はないのだけれど、何だか分らないから一寸………。」

「好し、そんなら俺に任かせて置け　俺が行つて仕末を付ける。」

拳を握つて衝と立上つた直吉は、疊を蹴立てゝ其まゝ出て行つて、今しもお鈴を抱下して連れて門口を入らうとする鐵樣の前へ、ぬッと其敵意を含んだ癇

癪面を突出した。

（六八）

あツはゝゝゝ、なにね、といふ調子で鐵様は話掛けた。四十恰好の、髪の毛の極めて薄い、赤ら顔の、小肥りの人の好さゝうな男で、藍微塵の足利結城に、幅の狭い茶献上の帯を締めて、般若の假面の牙彫の根付に大瑪瑙の緒締をつけた二提を腰にして、鱈のやうな脣から奇麗に磨上げた歯を見せて、笑ひながら、太い高い品のない聲で斯う言つた。

「なにね、矢張其里心でね、いや無理はがアせんのさ。彼方へ行くと直ぐ、「母様が居ないし」ツと言ふ理窟でね、さア泣いて泣いて何と言宥めて見ても泣止まらねいのでさ。まア何にしても馴染ませねえぢやア仕様がねえてんで、そりやア最う欺ましたり賺したりね、先がお前さん其兒煩悩だけに、私なんざア眞似も出來ねえ位根氣をよくして、眞實の阿母だつて敵はせねえやうに、まアいろんな事をして綾なして居やしたがね、何うしても可ねえんで、私なんざア、まあ初の中は是非斯だから、二三日我慢しなせえ子供の事だから直に居馴

染んぢまはア、狗兒でせえ泣くものを泣くのは當前だ、又泣かねえやうな情愛のねえ兒ならお前さんも貰らつたつて詰るめえ、何しろまア些少の間斯うしといて柔はり撫でゝ居てやりやア、それ能く言ふ今泣いた烏が最う笑つたゞ。未譯は無えさ。と言つて見やしたがね、何しろお鈴坊の泣樣が餘り甚えんで、だお前さんは御存じあるめえが先のお内儀といふのがね、人一倍其涙脆え方なんだから可憫さうに這麼に泣いて、もし虫でも起しちやア大變だッてえんで、ひどく心配してね、何うか最う一度阿母樣の顏を見せて遣つて、機嫌の直つた上でね、もし何なら、一日阿母樣と一所に來て戴いてね、其上で何とか言拵へて貰ふやうな工風にやアなるめえかッてえんでね、ま種々頼まれて遣つて來やしたが、何ですかい、お兼さんは在宅ですかい。」

中へも通さず、上り口に腰を掛けさせて、堅く割膝をして、前に塞がつて、むづかしい顏をして聞いて居た直吉は、それより先、我家に着くより一際泣聲を高めたお鈴の其まゝ駈上らうとして、日頃から忌憚つて居る例の嘘の阿父樣にぐッど睨まれて立悚みになつて、尙聲高に泣立てるに委細構はず鐵樣の言葉

の終るを相圖に、しかめた顏を上げて、飲込めぬと言つた風を態とらしく見せて、

「それで又お出なすつたので、へえー。」

と稍首を傾斜げるやうにして、向直つて冷やかな眼に相手を見返つて

「そいつア些少遣口が違つてるやうに私にやア思はれますが、まアざッと積つた處がさ、先刻お前さんもお言ひなすつた泣くなア當り前だ。そいつを此方へ連れて來た日にやア、いつまでもお袋を忘る瀨はねえといふもんで、それぢやお前さん限りのねえ先を、しよッちう同じやうな事ばッかりして居なけりやアなるめえと思ひますがねまア私の考へぢやア、早く馴染ませやうと思ひなさるなら、無理にも引止めて置いてさ、つまり斯うやつて泣いて居る日數を切詰めて遣んなさる方が本當ですがね、え、然うぢやアありませんかね、なまじひの斟酌は、情けがあるやうで、却つて此子の爲になりません。お前さんも付いて居ながら、然うかッて言つて此處へ連れて來なすつたのは、私にやア少し分りかねます。お兼も此事ぢやア充分思殘りのねえやうにして、追返して

直に又逢ふやうぢやア、其身の毒なり此子の爲にもよくねえからつて、又は未練氣を出さねえだけの事をして別れたんですから、今又逢はして遣つちやア却つてよかアありますめえ。とばかりぢやねえ義理から言つても、其方へ與げた上は親子と言ふ條他人といふ約束だから、逢はねえ方がまア本當さ。生憎今は居ませんが、えゝ其すつかり忘れてしまふやうにッてね、泊り掛けに先刻餘所へ出掛けましたよ。居ねえを幸に、連れて歸つてお貰ひ申しちや何うてしやう。」

眉を八の字にすると細い目が三角になる、鐵樣のいつもの癖で、今も其皺を見せて、「ふう」とか「成程」とかいふ返事で、間々に直吉の言葉を受けて居たが、こゝで自分の番になつて組んで居た腕をほごして、

「まア言て見りやア然ですがすがね、何にしてもお內儀が餘り氣遣つて、何うぞ最う一遍よく得心の行くやうにしてと言つて、其氣の揉み方が一通りぢやアねえので、那樣に言ひなさるならッてえんで連れて來るやうな譯になつたんでがすがね、子供の事だから理窟ぢやア行かねえ。そこん處を何うか工合よ

くしてえと思ふんだが、」

「お前さんも分らねえ、だから言つてるぢやありませんか。折角お出なすつたもんだけれど、言つた通り爲にならねえから、此まゝ連れて歸つておくんなせえ。」

「そりやア歸りもしやすがね、ならうなら皆のいゝやうにと思ふから、私もわざわざ斯うして來たのさ。まアさ。此方のいふ事も聞分けて、そんなら斯うッてじッくりした相談になつてくんなさらなくつちやア」

「お待ちなせえ、お前さんも分つて居ながら困るぢやありませんか。私も留守を預かつて其前にもお兼の心を充分了解んで居るからにやア、那樣何にもならねえやうな事アしたかアねえ。」

「さア其處だて、其處がね、」

「其處も何もありアしません。改まつて出りやア、此子は最う私共の子ぢやアねえのでさ。其方のものは其方で仕末をするが可いぢやありませんか。」

「そりやアお前さん自分の腹でいふんだらうが、」

「なに私の腹ぢやアねえ。」

「まアさ」それぢやア事が治まらねえ。私も斯うやつて態々來たもんだから、お前さんもまア些少アそこん處を買つてくれて、ね、それにまア何を言ふにも子供の事だから、」

言はせも果てなかつた。堪へきれぬやうに荒々しく、

「ちよツ、いつまで那樣事を並べて居なさるんだい、私ア最う聞いちやア居られねえ」お前さん分りきつてる事を、最う文句は要らねえぢやねえか、私の方ぢやア何うしたつて請取らねえから然う思つておくんなせえ」

（七）

お谷の前に、お鈴は人形のやうに着飾られて、結立の唐人髷に燃立つやうな緋鹿子を掛けて、紅白の房の下つた蝶に牡丹の花簪の色を盛上げて、顏から首から、眞白に塗盡されて、見るから美しい愛らしい姿で座つて居た　今日は此家へ連れられて來てから丁ど四日目で、お谷は其間殆んどお鈴の事にばかり掛かつて居た。愚に返つて子供になつて、あやしたり、そやしたり、少しも早く懷かせやうと思つて、手を盡して氣に入るやうな事をして見せた　流石子供で馴染むのも早く、いろ〳〵面白い事に氣も移つて、お鈴は最早泣通しにもせず、折節に思出しては、急にしやくり上げるが、其涙も漸くに滅つて來た。お谷は始終傍に付切りで、目を細くして、さも樂しさうに、飽きもせず相手になつて、時の移るのも知らずに居る。

「お鈴や。」

「あい。」

「お前最うこゝの家の子になつただらう」

「然。」

と點頭いて、罪のない眼を見開いてお谷を振仰いだ。お谷は更に笑ましげに、

「おゝ能く分るやうになつたねえ　だからこれからはねえ、私がお前の母樣だらう」

お鈴は母樣なるものゝ意味を本當には知らぬ。分けもなく、

「然、さうだわ　あのね、先の母樣もね、幾度も私に然う言つてよ」

「おや、然うかい　私が母樣になるんだつてかい。」

「然。あのう、今度の母樣は、お前が一番好きだから、あのう、溫柔しく言ふ事を聽いて可愛がつて貰ふやうにしなくッちや可けないッて」

「まア然う、本當に其通りだよ　私はね、お前が最う何よりも〳〵最う〳〵一番好きなの。」

「然うお」

とお鈴はあどけなく言つて、前のやうに面を振上げて居た。お谷はひつたり

其顏を打目戍つて、

「お前は？」

「え、私、」

とばかりで、お鈴は笑つて何も言はなかつた。

「言つて御覧、甚麼事言つたつて構やしないから、」

「でも可笑しいもの。」

「可いぢやないか。言つて御覧よ。」

お鈴は默つて、小さな胸に何を思つて居るのか、言得ぬやうに伏目になつて笑顏を見せて居たが、再び促されて、やがての事に何を言ふかと思へば、

「あのお、私はね、矢張好きよ」

「おほゝゝ、それぢや早く言へば可いのに、何故默つて居たの」

「だつて何だもの。」

「何なの」

「何だか知らない。」

「おほゝゝ、可笑しな兒だねえ。」

お鈴も共に、意味もなく笑つたが、不圖思付いたやうに、

「あ、伯母さん、」

「あれ伯母さんて言ふんぢやないよ。最う忘れたの。」

「あゝ然う〳〵、母様。」

「あいよ、何だえ。」

「あのね、ほら、先刻お言ひだつたらう、あのう、今度先の母様が田舍から歸つて來たら乾度連れて行つて遣るつて、私ね、其時にはね、此着物と、此帶と、此帶揚と、そいから、此簪さして、此裂を掛けて行かうと思ふの、」

「おや〳〵、そして何うするの。」

「そしてね、あのう、これは伯母さんぢやなかつたつけ今度の母様に、皆貰つたんだよつて言つて見せて遣るの。」

「おやまア　然うしたら先の母様は何て言ふだらう。」

「乾度ね、おや〳〵好いんだねえッて言ふわ。」

「おほゝゝゝ、まァ、お前は聲色が上手だねえ。」

「そいからね、私はね、あのう、いゝ母樣だから、私すッかり好きになッちやッたよッて言ふわ。」

「本當に。」

「然、本當に、だつて然うだもの」

「可愛いゝねえ」

融けて流れて平な處は、風のない時は、石のないまでは、水は鏡のやうであつた。お谷のやうな質の人を今よく味つて見る危さを、半年ばかり過ぎての結果が明らさまにほごして見せた。それよりも尚、意外な事は、一年ほど經つてから、お谷が酸い物を好み出したのである。お鈴は何も知らぬ。

碧水志

（上）

濱には千鳥、磯馴松、岩から岩の其一角へ、村一番の噂に高い谷の大盡の姉娘よりも、一倍美しいのが不意に出て來たので、濱に押上げてある船の脇で、しきりに苫を作つて居た二人の男は、思はず手を止めて言合はしたやうに振仰いだ。

上着は縞御召の彌太郎立、下着は臙脂に土耳古形の纏紗縮緬、源氏模樣の厚板の帶をお太鼓に結んで、牡丹の絞り紋羽二重の帶揚、藤色に亂菊の、縫入模樣の半襟、磯吹く風に袂を吹かせて、岩を背後にすいと立つた處は、時ならぬ眞砂の上に、遽かに花が咲出したやう。

高髷に、金地蒔繪の片形の櫛、色がくッきりと白いのに、眼の言ふやうもなく涼しいのが、更に麗はしい其顏立を引立たせて見える

未だ裏若い未通女風で、小鳥のやうに身の輕いのが、裾を煽つてひた〳〵と波

打際へ出ると、其處に遊んで居た蜑の子の一群は、見馴れぬ姿に擲つて目を睜つた。

「兄さん、此處は何といふ處なの。」

と笑つて罪のない顏を振向けた。子供は氣が置かれてか、互ひに目を見合はせたばかり誰も答へぬ。

「え、何といふ處なの。」

と重ねて愛らしい聲を掛けて、其儘傍へ寄つて來た。すると中に、年嵩の十一ばかりなのが、

「若浦。」

と羞かみ止んで漸くに口を切つた。此方は更に馴々しく、

「若浦、然う、好い處ねえ。」

とばかり海の彼方を、物珍らしさうに又打眺めた。小春日和の、拭ふやうに晴渡つた日で、沖には漁舟、鷗の影がちらほらして、空と一つの波の色は、遠く〳〵見霞むばかりの、其眼の止まる處に遙かに汽船の走つて行く影が見える。

目を移して、間近の磯山から、左手に簇生へて居る松の崖下を、十間ばかり突出して居る岩と岩との亂立した態を見て居たが、振返つて、

「彼の崖の處から未だ向ふへ行かれるの」

「むゝ、行かれらア、」

見ると、崖に添つて、稍、平な、徑といへば徑のやうなものが、僅かに付いて居る。

「然う　有難う　行つて見やう。」

笑顏に一寸會釋をして、娘は尚も珍らしさうに彼方へ行つた　子供は漸く妨げられた遊びに返つたが、船の脇に居た二人は、未だ手も動かさず目をぱちくりさせて居た。

崖を出離れると、磯外れの前はからりとして、漕いで行く舟歸る舟、風は凪いで來て白帆は弛んで、海は南に果もなく、引潮時の、岩といふ岩は殘らず出て少し進むと、ばつと千鳥が、忽ち目の前を繪のやうに立つた。

娘は何心なく、岩の平な方を撰つて前の出鼻へと歩を移して、稍三四間先へ出たが、不意に吃驚して立止つた

岩の蔭に素裸の眞黑な大男が、今海から出て來たと見えて、雫も拭はず濡れた身躰を一人焚火に干して居た

見ると脇に、捩表が一枚、脱捨てた儘で抛出してある胸まで逞しくは出來て居るが、流石に海賊とも見えぬ優しい顏をして、燃上る火の上に諸手を翳しながら、足音に何氣なく振返つてこれも驚いた

何者とも解らなかつたが、見るほど惡棍らしくもなし、呼べば應へる處に人も居るので、娘にそれほど恐れ氣もなく、自躰人懷かしい生れの、譯を聞かまほしげにたゞ不思議さうに凝と視て居た。

男は猶も眼を放たず、稍暫く、見上げ見下ろしたのみであつたが、やがての事に、鈍聲ながら力めて柔かに、

「お前、何處から來たゞね。」

又も顏を打目戍つた　娘は猶豫もせず、

「私、私は福住から、」

とあどけない聲の綾、

「おう、福住の客か。此處はお前方の來る處でねえに、何だと言つてまア這麼處へ突出て來たゞ。」

「あれ、突出たつてまア、おほゝゝゝ。私ア珍らしいから見に來たのだわ。あのね、裏の路を下りて來たの。私お轉婆だもの。」

「珍らしいか、這麼處が。」

「はア、面白いは、本當に。」

とそれを機に、近く寄つて、

「お前は此處に何をして居るの。」

「むゝ私か。私ア今小鰒を取つて居るだ。」

「え、小鰒、取れたの。」

「むゝ取れた。今日は間が好かつたで夥多取れた。それ、其處にある。」

指さゝれた片蔭を見ると、何樣、手頃の摽の中に、既獲物は一杯になつて居た。

「おや／＼まア、」

とばかり娘は傍へ立寄つて、長い双の袂を膝の上に重ねて其處へ蹲踞んで、首

を伸ばして餘念もなく中を差窺いた。

男は又もつく〲と打目戍つて居たが、思はず知らず、底から出たやうに、

「姉やは佳い阿魔ッ子だなア。」

娘は聞耳を立てゝ直ちに振返つた。

「まア、阿魔ッ子だつて。私ゃ阿魔ッ子ぢやなくつてよ。」

それには答へず、見詰たまゝで、

「姉やが名は何て言ふだ。」

「靜枝といふの。」

と其儘、立つて、

「お前水の中へ潜つて行つてこれを取るのだね。」

と今更のやうに又裸身を打見遣つた。男は夢を見て居るやうに、何もうつゝに聞逸した。

「さぞ冷たいだらうねえ。」

と言つたが返事がない。

「あれ、何をウッかりして居るの、此人は。」
男は氣が付いたやうに、遽かに慌てゝ、
「な、何だね。」
「おほゝゝゝ、何うしたの。」
「なに、なに、つい其暖まつて來たもんだでよ、些少ばかりうッとりして居たゞ。」
ときまりが惡さうに微笑んで、身躰も乾いたので紛らすやうに手早く下の探衣を取つて、一振り振つて手を通した。
「最うお了ひなの。」
「むゝ。」
「では最う歸るのだね。私も歸らうか知ら。」
そこはかとなく、四邊を見廻した。
「姉や。」
娘は笑ひながら眉を顰めて、
「姉や／＼ッて厭だね。名をお言ひな。」

「お前の名は呼難いでな。」

「靜さんとお言ひ。」

「む丶、靜さん。」

「あいよ。何。」

「別に用はねえが…………」

「おほ丶丶丶、何だねえ。可笑しな人だつちやァない。」

「む丶何よ。それぢや私が名も呼んでくれ。」

「何と言ふの。」

「彌吉ッて言ふだよ。」

「彌吉、自家の車夫も矢張彌吉と言つてよ。妙ね。」

彌吉は默つて、腕を組合せたまゝ、又もしげ〴〵と靜枝を見入つて居た。靜枝は目を逸らせて彼方の崖の上を振仰いだが、忽ち聲を上げて、

「あら、此處に花が咲いて居る。」

彌吉は其聲に、呼覺まされたやうに、同じく目を注ぐと、下から屹立つて五丈ば

かり根方に寄せて、汐に晒された生簀の籠、鮹壺、荒繩の球などが一つに搦げて置いてある、其上を飛び〳〵に、松や蔦が辛くも縋付いて居る、端れを冠さつて片枝見事に、果から果まで松ばかりの中を彩つて、古木のしほらしい返り花。

「むゝ、ありやア返り咲きだ。」

「珍らしいのね、今時分。」

と靜枝はそゞろに、

「取りたいねえ。」

「取つて遣らうか。」

「え、」

と振返ると、さも喜ばしげな裏若い其顏色は更に晴渡つた。固より遠慮も何もない。

「え、取つておくれなの。お前那麼高い處へ行かれるの。お土産にして母樣の處へ持つて行きたいわ。取れるなら後生だから取つて頂戴な。」

大承知、彌吉は一も二もなく、

「むゝ、待つて居な。」

言ふなり駈出した。足は踏馴れて、岩角、木の根、猿もそこのけて、流石にはらはらする靜枝を見て打笑みながら、見る中にさら〳〵と上へ登詰めた。　花の諸枝は直に手が屆く。

「姉や、姉やぢやなかつたゞ。　それ、靜さん、何の枝が好いだよ。」

「今お前の手を掛けて居る枝、其枝が好くつてよ。」

と下から張の強い美い聲であつた。

手折つた枝は、五六輪はらりと花を振繙して、彌吉の袖に色を見せたが、見も返らず直ちに引擔いで、とつかは下りて來ると、息もつきあへず急いで傍へ寄つて差出す花に、裏もなく喜返る靜枝の笑顔を、待設けたやうに見て、更に笑傾けた。

「有難うよ。　眞實に有難うよ。」

と靜枝は花を手に取つて、子供のやう。

「むゝ、むゝ、なに這麼事で、それほど喜んで貰へは私ア澤山だ。」

と彌吉はほく〳〵する。
「どれ好いお土産が出來たから早く歸らう。」
彌吉は、俄かに進まぬ色で、
「最う歸るのか。」
「然、」
と振向けた無邪氣な顏、
「もつと遊んで行かねえかよ。」
「でも默つて出て來たもの。」
「然うかね。」
と力無げに、
「ぢやア私も歸るべい、其所まで一處に行かうによ。」
火は消えて、汐木の燃殘りが、崩れて灰の上に黑くなつて居た、身繕ひして、畚を手に提げて立つと。
「おや、」

と靜枝は、
「まア何うしやう。水が那麼處まで。」
と驚いて色を變へた。
「案じるでねえ。潮が上げて來たゞ。今にお前、此處等ア一面に水に浸つて了ふだよ。見な。それ、其處に頭ア出してた岩は、最う見えなくなつたによ。」
「あら、眞個に、恐いのねえ。早く行かうや最う。」
と遽かに急出して、もと來た路を衝と行く。
「待ちな。然う急くでねえよ。」
と後から追付いて、足を揃へると、
「靜さんは東京だね。」
「然うよ。」
「家は何爲てるだ。」
「父様は軍人よ。」
「軍人では戰人の事だなア。」

「當然だわ。何を言つてるのだねえ。」
程もなく、前に來た崖下の端まで來たが、忽ち、
「あれ、」
とばかりで立竦んだ、なだれに低くなつて居る先の徑は、向ふへ五間ばかり泥水になつて、幾つか岩に碎かれて來た餘波ながらも、颯と引き、颯と寄せて、崖を打返して雪を噴く其中を、靜枝の身に何うして渡られやう。今更に慌たゞしく、
「た、大變、まア、何うしたら、」
「何だね。」
と不審顏、
「あれ、見えないのかね。向ふへ行かれなくなつて了つたぢやないか。」
「はゝゝゝ、何の事だ。餘り大業だから何うしたゞと思つた。大事ねえ、緣の足場を傳つて行くだ。」
「足場ッて何處にあるの。」

「それ、そこに處々岩が打缺いてある。それに足を掛けて崖に取付いて行くだア。」

「まア恐い。私に那樣事が出來るものかね。」

「行かれねえかね。」

「何うしやう。」

とうろ／＼した。彌吉は合點したやうに、慰め顔で、

「よしさ。脊負つて行つて遣らう。騷いでねえよ。待ちな。」

と尻を褰げて居た振衣の裾を高く返してぐいと三尺に挾込んで、くるりと脊を向けて腰を落した。

「それ、肩に捉まるだ。」

靜枝は流石に氣の毒さうに、

「有難う。私ア本當に何うしやうかと思つたよ。それぢや濟まないけれど…………」

「はて、濟むも濟まねえもねえだ。負さるに持惡くけりや、花も私が持つて遣

らう。さアよ。搆はずおッ掛かるだ。」

「然うかい。それぢや…………。」

會釋と共に、身を打寄せて肩に手を掛けた。花を受取つて、彌吉は片手に靜枝を輕々と、一つ搖上げて立上りさま、ざぶりと踏入れ、水を渡り出した。むくつげな振衣の上に、遽かに盛上つた彩色は波と松との中を飾つて、得ならぬ香水の薫りは浴せるやうに彌吉の背後から襲掛つた。思はず振向くと、たはゝに縋つた雪のやうな靜枝の手の、指環の寶石が射るやうに光る。

「姉や。」

「あれ又姉やッて。」

「おう靜さん。」

「何だえ。」

「お前は間もなく東京へ歸つて了ふだね。」

と意味ありげな聲であつた。靜枝は何心なく、

「あゝ明日、」

「えゝ、明日、」

「あれ何を吃驚するのだねえ。」

言ふ中に既渡越して、崖を離れて前の濱へ出た。默つて下して花を渡したまま、彌吉は茫然して居た。

すると不意に、

「あれお孃樣、まア、那樣處に居らつしやいましたの。」

と前に靜枝が來た方から丁ど同じやうな年頃の、背の大柄の待女らしいのが見付けてはた／＼と驅寄つて來て、

「まアいつ這麽處へ入らつしやいましたの。甚麽に方々搜しましたらう。いつの間に出て行らしつたか奥樣も御存じないものですから、お跳さんは一人で何處へ行つて了つたんだらうと仰有つてね、先刻からお案じなすつて居らつしやいますよ。さア直に行らつしやいませ。おや奇麗な花ですこと。何處でお採り遊ばしたの。」

と近く差寄つて見る。靜枝は誰にも笑顏て、

「これはね、背後の崖に咲いて居たのを、今此人に取つて貰らつたの。」
「おや、然う、まア。」
と彌吉の方をちらと見て、
「貴孃お禮を仰有つて、」
「あゝ、言つてよ。」
「さア、それぢや奥樣が待つて居らつしやいますから、急いで參りましやう」
「然うかえ。それぢや、」
と振返つて彌吉に、
「あのお前いろ〳〵と本當に有難う。左樣なら。」
彌吉は僅かに挨拶したばかり。
急立てる侍女に靜枝も急ぎ足で、並んで裾を蹴返して、袂も翻れる襦袢の紋縮緬の、燃立つ色のひらめいたのも一時。
彌吉は動かなかつた。

昨日と同じ空、同じ海、同じ濱、舟に、千鳥に、浪の音、若浦の今日は、人も家も昨日に少しの變りもないが、誰一人、其一日の中に全く變果てた人がある。

磯山際に立並ぶ苫屋の方を今朝から餘所にして、獨り誰も來ぬ裏の松林の中に、何の爲ともなく入つたきり彌吉は殆んど我と我が心地を覺えねまでになつた。

松を越して、福住といふ近く名高いものになつた今樣の旅館の、庭から彼方は一目に見える。東の角の座敷に、靜枝の一行は泊つて居るのだ。けれども今は、其方を見やうともしなかつた。

彌吉は昨日、福住の若者から、靜枝の父といふ人は、彌吉などが足元にも及ぶ身分でないといふ事を、それとなく尋ねて、痛かに聞かせられた。

思餘つた悲しげな色は、言ふより強く顔に現はれて、あてどもなく松の中を、行くとも知らず徘徊ひながら立止まる直に吐息で、

「駄目だ。駄目だ。及びもねえだ。」
力無げに首を掉つた。
静枝は今日發つといふ。今日と言つて、餘つて居るのは幾時、
「吁、」
とばかり。言ふ事も知らぬ。
顏は兎角して見る事も出來やう。言葉も仕義に依つては交す事も出來やう。けれども猶、かなぐる事の出來ぬ嚴重な隔ては、依然としてもとの儘だ。
「駄目だ。駄目だ。及びもねえだ。」
生れて以來憂さも知らなかつた其眼も何時か曇り出して、ぽろりと大粒の一雫が、不覺に落ちて砂に泌みて入つた。
時は移るばかり、いつまで愆うして居ても同じ事だ。同じ事とは知つて居ても、外に何うする術をも知らぬ。
「駄目だ。何うしべいもねえ。」
骨も脱けたやうに、がツくり頂垂れて、果も知らず滅入込んだ其時、

矢庭に、耳を貫くばかり、下の磯際に響渡る女の聲、

「あれ！　お孃樣がッ、誰ぞ來て下さいまし。」

我にもあらず彌吉は面を振向けた。見ると眞下の打波際に、昨日靜枝を渡して來た彼の待女が狂氣のやうに立騷いで居る、續いて又も、

「誰か早く、早く來て下さい。お孃樣がお落ちなすつた。來て下さい。來て下さいよう。」

お孃樣は言ふまでもなくそれだ。吶嗟とばかり、彌吉は驚くそれより早く、路も撰ばず驀直に其方を指して驅下りた。足を限りに走付けば、疾く中に其處へ着いて、

「ど、何うしたど。姉やは何處へ落ちた。え、ど何處へ」

待女は半ば夢中で、

「お、お前さんはあの昨日の。早く救けて下さい。お孃樣を、今其處の岩から辷つて海へお落ちなさいました。さア早く、お願ひだからもし、早く早く早く、」

彌吉は固よりそれをも待たず、忽ち着物を脫捨てゝ面も振らず波の中へ躍込んだ。折節濱方のものは大方漁に出て、其處等に居たものは子供と女ばかり、後れ馳に、それ／＼駈付けて來たが、續いて中へ入るものはない。

突として、波を搔分けて彼方へ浮出した彌吉の、片手に引抱へて水の上に銜と出した靜枝の濡れ優つた橫顏を見て、汀の人々は思はずどッと歡呼の聲を揚げた。

彌吉は其迄、私を忘れて遮に無に靜枝を救けるにのみ焦つて居たが、岸の諸聲を聞くと共に、遽かに我に返つたやうに、忽ち目色を變へて、上に浮いたのみ前へも後へも動かなくなつた。

陸へ上るが最期、靜枝は自分のものではないのだ。

菱と抱締めた其手は寒さより外に烈しく慄はれた。矢庭に、頰と頰とがひたと合つたかと思ふと、一聲高い絕叫を終りに、逆波打たせて靜枝諸共水底深く沈んで行つた。

意外の事に驚いた人々は更に立騷いだが、波は知らず顏に跡を消して、長く二

人を此世から隠して了つた。　浦の人は、二人は何とかいふ海の怪に魅入まれたのだと言つて居る。

静枝は十五であつた。

逸樂篇

（上）

中に朱梅の盆栽据ゑたる高麗卓を取圍みて、我は顏なる若殿原の何を恃みて打驕りたる、一に山川、二に齋藤、三に宮岡、四に神崎、五は此家の主人なる松川銑六郎といへるなり。頰先こけて鼻高く、狐の如き眼したるは山川氏、河豚のそれより脹れたる腹して、頰髯豐かに丸顏の布袋に似たるは齋藤氏、や丶面長に下り眼の、里芋其儘の面付したるは宮崎君、一面面皰の中に埋れて、眞晝に出てたる木兎の如きは神崎君、主人の君は金壺眼ぼう〳〵眉、色黑々とお玉杓子に戲謔畫したらんやうに、ぞ見受けられし。

空になりたる麥酒の罎の五つ六つ、二種三種の副食物の前に置かれて、色に出てたる氣振にも見えぬ思ひ〳〵の身のこなしに、談話の聲のやう〳〵聲高になりたる折しも、

「時に、」

と言出したるは肥優りたる齋藤要藏、丸く垂れたる頬のあたりに愛嬌見ゆる片笑靨をほのめかせて、

「何はしかれさ、恁う不思議に落合つたのが面白い、何うだい一つ、」

と未だ言合へぬに、

「例の手合せかね、」

「君の押物も久しいものだ、未だ其癖が、」

と言掛かるを、既夕燒の色を染めて、背後の壁に凭れつゝ一人醉を吹き居たる宮岡の後を受て、

「ふむ、大淀のか、それこそ君が一中の手前燗だ、それよりは玆に一つ、珍妙不思議といふ一條の談話がある、談話と云へばそれなり消えて了ふ奴だが、もし思召があらば直にでもお手に取られるのだ　先づ聞きたまへ、列座の各位が然う先づ生れながらに好物の品だ」

「はてな、生れながらに恁くいふそれがしなどの好なのは、聖人の道君子の道

より外に無い筈だが、それを如何に間違つても母の胎内から横目を使つて生れて來た宮岡君の口から聞かうとは、思ひも寄らなかつた。」
と又洋盃を手にしたる神崎の打笑へば、
「成程聖人の道といふのは、昨日花吉の賞金を猫糞にした彼處の手加減だね。」
と主人の交ぜ返す、
「いやそれならば大に說ありだ。」
と膝立直して神崎のいきり立つに、
「おつと待ちたまへ、先口の此方の談話は何う片付けてくれる。」
と宮岡の遮れば、
「はて御大切のものなら犬糞を避けて竊とそこらへ轉がして置くさ。」
と空嘯く、
「あゝ猫の糞だの犬の糞だの、お人柄な事だぞ、何故然う汚穢くるしい處へ目を付けるだらう。兎角にお育柄は爭はれんもんだね。」
と獨言のやうに山川の嘲ける。

「まアさ、談話か何かこんがらかりさうだ。先づ靜まるさ、靜まつて着々片付けるさ。宮岡君、兎に角君の膏を浮かせて居る其珍妙不可思議といふのを聞かうぢやないか。そこらに御蠟を上げる御信心の方はないかね。」

と仲裁顔に主人の言へば、

「折角勸化僧のいふ事だから一つお慈悲に寄進に付かうかね」

と一人の言ふ。

「いや那樣乗氣のない事では容易に此一大事が話せるものか、何うだ其處等で謹聽の掛聲は出ないか」

と宮岡の座を見廻せば、

「はゝゝ。謹聽の御催促だ。太夫未熟と言はないばかりだね、耻を掻かせるのも氣の毒だから、無據く聞いて遣らうと言ふ處だが、義理にまア承まはらうとても言て置かうかね。」

と齋藤の其方向く、

「どれもこれも度しがたい徒だ」這麼並び大名の相中手合にした處が、此方

の御人品が下るといふのみだから、寧そ手に掛けてくれる奴だけれど、社參の前に血の汚れだ。こゝの主人の忠義に免じて、大目に見免して置いてくれやう　時に主人、頼もしいのは君ばかりだ、世は末法に及ぶと雖さ、君があるので世道人心を今日に維持して居るといふものだね。」

と宮岡は脊を丸くして顔差出す、

「氣の毒な、君も取る年で愚痴になつたね、安心したまへ慥に聞くよ　猛きばかりが武士ならずさ、君の事だから露の情を遣はして、なにさ、それはまアほんの口先ばかりだ。畏つて承はるよ　一つ景氣を付けて」

と一際聲を上げて、

「謹聽、」

としたゝかに言ふ

「いや然う皆が頼もしくない事を言ふなら僕は斷然此儀を撤回する　強て聞いて貰はうとは初めから決して言ひはせんのだ」

と宮岡は身を反らして態とらしく威儀を繕へば、傍より山川の猶豫もなく笑

ひかけて、
「はゝゝ怒つちや可けない、坊はいゝ子だ、坊は強いよ、え、宮岡、我輩なんぞは先刻から君の說を聞かうと思つて、見たまへ、此通り固唾を飮んで控へて居るぢやないか。さア話したまへ。」
と冷かし顏に身を押出す、
「おい、」
と神崎は齊藤の袖を引きて、
「大分風向が違つて來たやうだぜ、こゝは一つ我々の氣前を見せる處だ、可憫さうに奴も浮ぶ瀨がなくなつて來たのだ、卒塔婆の一本も立てゝ遣らうぢやないか。」
と聞えよがしに囁きつゝ、
「おい富岡、それは僕も同感だよ、實を明かせば大旱の雲霓といふので君の聲を待つて居るのだ。さア辯じたまへ。妙不思議いや面白いね。」
とそゝり立つれば、齋藤も又膝を進めて、

「宮岡君、可憫さうに君一人を槍玉に揚げるでもない、僕が付て居るからは賴みある世の中と思ひたまへ。僕も主人公に倣つて一つ、」

と聲高に、

「謹聽、」

と言へば、

「謹聽々々〳〵、」

と彼方此方より笑ひながらの聲の掛りぬ。

「よしさ、お猿の事だから特別の恩典を施してやらう。了簡といふものが人間といふしるしだけに少しでも付いて居るなら、此驚くべき大人の雅量を欣慕するがいゝ。えへん、そこで話說すさ。よしかね、おい〳〵神崎、此貴重な談話をするのに食ひ物に取付いて居るやうな不熱心な事で何うするのだ。箸を置きたまへ、そして手を膝の上に置いて恁ういふ面付をして拜聽したまへ。」

「あッ凄まじい御事だ。はい〳〵承はるで御座りまする。そこで何うした。

拍手御喝采を願ひまするか。」

「えゝ餘計な事を云ふな。よしかね說出すは一個の探險譚だ。事新らしく言ふまでもないが、こゝに拙い顏を並べて居る滿座の諸君は、皆すべて自惚の色男だ。未だ部屋住みの時分或は下宿住居の時分から、下らない眞似をして下らない馬鹿を盡した手合だ。今こそ我々のやうな互に內幕を知らない處へ行けば取繕つたり駄法螺を吹いたり、えへんの勿躰で然らばの肱を張つたり、おつに澄して厭にぶるが、大きな聲でさしのある處へは言はれない今でも止まぬは此道だ。積つても見たまへ齋藤の如きは家にあれほどの美妻を蓄へて居ながら、取柄もない彼の錦唐瓜に熱くなつて居る。それのみならず諸君も御存じの稚少を連ても浮かれ筋などは實に好個の適例だ。待ちたまへ。先づ聞きたまへ。諸君は素より御多分に洩れんばかりか、尙其上を行つて實に仰天すべき事をさへ遣つた方もある。僕などは一朝豁然と大悟して、いよいよ以て馬鹿を盡さうと決した。其一般をこゝに擧げて言ひたいのであるが、氣の毒には兎角肱に緣の淺からぬ諸君をして羨望の至りに堪へざらしむ

る事であるから、今は一先づ預かつて置く。いや談餘事に渡つて濟まない、處で諸君は其通りの方々であるから、それ相應に其道の事は隨分知つて居る位個の冠たるものだ。でありながら、僅かに目と鼻との間に一美人國の天下に肩を比ぶべきものもないと言つて決して不當でないのが、忽然蜃氣樓の如く近頃現出したのを知るまい。斷つて置くが其處の國民は新柳二橋の阿嬌の如きものではない。北國南濱の眉斧の如きものでもない。又某俱樂部に出沒する妖怪のやうなものでもない。諸君の想像する處は悉く外れるから、其氣で耳を傾けてくれなくては可けない。先づ家から言へば目を驚かす玉樓殿だ。其庭園の物數寄に至ては實に千百萬言を費やしても足らぬほどだ。何も大眼鏡の口上見たやうに那樣ものゝ細々しい事を並立てるほどでもないから、それに諸君は恐らく他に虫唾を走らして居る方面があるだらうと思ふから、これから專ら其方を細說する。なに簡單だ。那樣負惜みを言ふものではない。いゝさ、分つてるよ。心得て居るよ。おい神崎、又下卑藏を初るよ。これからが肝心の處だ。性根を据ゑてよく聞かんかよ。そこで其玉だ。玉

と言つては或部類のものゝやうで聞えが惡いから花といはふ。いや花といふのもおつでないから鳥と言はふ。なに當人が椋鳥で丁どいゝ。あゝ不便な奴だ、そろ〳〵猜み出したな。そこで其鳥だ。なに鴨なら首玉へ喰らひ付け。然ういふお天氣屋のやうな下劣な事をよく恥かしくも言へたもんだ。些少は御人躰を考へるがいゝ　そこで其いや口が五月蠅いから何もいふまい、其それだ。諸君にして西施を望まれんか、西施は直ちに前に現はれる　小町ならんか、小町は忽ち膝に凭つて月を授ける。毛嬙ならんか衣通ならんか誰ならんか、彼ならんか、選ぶに任せて如何なるものでも直に來つて媚を呈する。茶の湯香花回碁連俳歌舞音曲、そんなものは朝飯前の談話だ。もし政談を好まるれば、描ける如き眉を昻げ、婉囀たる鶯舌を翻へして天下の經綸を說く美形が現はれる。豫想も出來ぬ宗教談に於てすら、或は滔々として佛の妙智力を說き、或は娓々として上帝の攝理を說く、然も相貌天使のやうなのが來る　尚それら總ての如何に心を奪ふに足るかは一度其境を踏まれたらば、思半ばに過ぎるてある。また其上に愈出でゝ愈妙なる詳細を知らうと思はれ

たら、僕の前に平身低頭して恭しく拜する事三たびに及ぶ時、莞爾として告げて遣る。」

長々しく語終りて左右を顧みたる宮岡、神崎は態とらしく其顏を打目戍りて、次に座したる松川に向ひ、

「何うだい、馬鹿もこゝまで行けば論は無いね。僕は呆れて物が言はれないよ。」

「いや僕も聊か御同感だ。然し何も骨頂になれば譽めて可いと。僕は宮岡君に今日から馬鹿の横綱を許さうと思ふ。」

とおろ〳〵宮岡を見ながら言へば、重ねて神崎の後を繼ぎて、

「それこそ宮岡君の名譽といふものだから、僕は勿論贊成する。もし宮岡君、お言葉でございますかね、當節米は五升何合といふのでございますよ。」

「ふむ、成程、」

と宮岡は輕く受流して、

「いろ〳〵と御配慮を戴くだけに、僕も未だ諸君の結搆な注目から免がれな

いだけのお仲間だと思ふ。仲間といふのは相ずり喧嘩の洗つて見れば啻であるといふ事だ。何も見えすいて居るのに異しく蓋を拵へずともの事ぢやないか。」

といふ。山川は先程より押默りて、まじ／＼と酒の泡に我顏の映るを眺めてありしが、其時口を開きて、

「どの道恁うしたのんきな日があれば、それで可いではないか。顏を合せればお互に苦のない事を言つて、箍を緩ませて話す事が出來るのが有難いさ。浮世の半面を兎に角ふざけて送る事が、容易に出來れば、我々は即ち藁細工の豪傑だ。いや今日は未だ用があつたつけ。」

と時計を曳出して、

「おゝ例刻だ。齋藤君、中座して出掛けやうか。」

と振向けば直に應じて、

「うむ立たう。ぢや兩君これで失禮する。なに宮岡君、君の談話は嘘半分に聞いて僕の手帳へちやんと書入れて置たから安心して居たまへ。恁うといふ

結構な知己を得たらば明日が日に目を瞑つても恨みは無からう。やゝ松川君、いづれ又、」

と立上かる、

「まア可いぢやないか。今君達に行れては、」

と主人の言掛かるを、

「いや其あとの嬉しがらせは此次まで預けて置かう。さゝ山川、」

と二人は席を離れぬ。

とある大路を折たる町筋の、仕出しを重なる屋敷廻りの肴屋、稍大なる車宿、米屋仕立屋それ〳〵に軒を並べて立續ける中を語りつゝ行く齋藤山川、先に立ちたる齋藤は一足待ちかけて立並びつゝ、

「いゝかい、萬々心得て居るだらうが、いつか言た通り充分君の事は吹てあるから、諸事鷹揚にそこいらを拔目なく遣てくれたまへ。何しろ畔倉の方なんぞとは同じあいすと言つても雲泥の相違で、餘程寛なのだから事も爲いゝし、後の仕末も甚だ妙だから、うまく行けば外の方を悉く切替へて、此方へ固め

て了はうとも思つて居るのだ。そりやアいくら寛と言たつたつて商買が商買だから火は矢張火さ、向ふが剛鐵なら此方が地金だ。それが又まるく寛厚な士君子なら這麼商買をてんから爲やしまい。まア〳〵それだから此方もほんの風下を少し離れるだけの談話だ。其中には又氣の利いた風廻りにもなつて來やうさ。」

と銀金具の獅子の首嵌めたる籐の洋杖に小石を弄りながら言へば、

「なに寛といふ奴も所謂地道に取る氣なのさ、でなければ儲けたあとの暖かくなつたので緩んで來たのさ。然し我々には何にしろ其方が仕合せさ。君がこれを生捕つたのは大手柄といふものだ。瓶井なんぞも此方の手で何うか息をつかせて遣る譯には行くまいかね。」

と山川は屈み癖に歩きながらいふ、

「いや瓶井のやうに通り物になつては何處でも繩を張つてなか〳〵急に談話が纒らないよ。僕も瓶井ではお付合の手形で甚く喰て居るのがある。いや彼の男は近頃親戚の慥か伯父に當る人か何かゞ上京して來たので、これが

地方で屈指の財産家でね、彼の男の事だから巧く談話を持込んで、滿と出して貰ふやうな事になつて居るのださうだ。」

「一體瓶井は運がいゝよ。此頃のやうな羽目になると又然ういふ口が自然とぶつかつて來る處が不思議だ。時に其伯父といふのは自然我々の傘の御用といふやうな運びにならないのかい。」

と微笑めば、同じく笑み返して、

「那樣事は素より如才なく疾うの昔にちやんと切込んであるのだ。二三度逢つた曉でさ、あとは覺えの腕にあるからね。」

「ふゝ其腕は甚麼覺えがあるかは知らないが、僕の調査によると、去年種痘をした覺えと馬に喰付かれて病院へ入つた覺えの外に無い。最も賴みにならない心細い腕だ。君の事だから最う其口を當にして、立派に書入れにして居るのではないか。氣を付けたまへ、籔下に住んで居ると見當まで籔になるから、後が思遣られて可笑しいやうにお氣の毒だ。」

「ヘッ入らざるお世話だ。事が出來た曉にあつと驚いて、其時になつて急に

尾を掉つて、下から這込んで來て僕にもなど〻歎願しても、褄先から上へ御採用にはならないから、い〻か今から言つて置くが、君は口惜しくも僕と瓶井との談話が如何なる度まで進んで居るかは全く知るまい。那樣手の筋の見樣て此先の事が何うして分るものか、

と息先荒く小鼻を蠢かす、

「いやはや何とも挨拶に困るほどの恐ろしい見脈だ。何も參考の爲に其口上を覺えて置かう。處でそれほどに熟しかけて居る譯なら、何もこれから行く處なんぞへ行かなくつても濟むではないか。」

「いやそれは何僕は可いがね、然うした日には君が不便だから義理を重んじて、まア付合心で行つて遣るのさ。」

「は〻〻〻、那樣事だらうと思つた。何ともはや恐縮の至りだね。では折角の御志といふものだから、まア御判だけを拜借して置くといふ事にしやうよ。」

と顏を見れば、

「だがね君、然うしたら後で又君の負擔が餘り重くなつて期日に狼狽くのが

可憫さうだから、」

「矢張分配だけを取らうといふのか。」

「はゝゝゝ。」

と相顧みて打笑ひつゝ、やがて稍狹き路を入りて、表を圍ふ漉板塀の極めて高く庭は淺けれど家居のきびしく、見越の松の大字に粕岡と記したる擦硝子の軒燈の上より蔽掛りて、磨立てたる見事なる土藏の目に付く家の前に來れば、

「此家だ。」

と齋藤は馴染顏に先をかけて衝と入込みつ、鈴の付きたる格子戸引明けて熟懇げに案内を乞へば、目鼻の丸き髮の赤き卑しげなる婢の取次ぎて軈て主人の意を傳へて、二人を南面の座敷に請じぬ。折ふし先客のありて今用談の中なれば暫くこゝに待たせたまへとなり。

山川は差出されたる更紗の古びたる座蒲團を取りて打敷きつゝ、きよろ〳〵珍らしげに四邊を見廻はして居たりしが、茶を差置きて婢の去りたるあとに

小さなる聲して、

「成程何うしても金一點張の商賣氣質だね。大方此家も抵當流れといふ譯だらうが、何うも此道具なんぞに少しも目をくれない處が恐ろしい。見たまへ此居廻りの沒趣味の加減を、先づ彼の石摺の幅からさ、石版畵の額からさ、このまア茶碗を見たまへ、茶托を見たまへ、煙草盆を見たまへ、僕等の下宿屋時代のそれも當がひ扶持の時分だつて、這麼しみッたれなものを使ひはしなかつたぜ。廻さう、殖さう、躍らせやう、成程恁うした了簡方でなくつちやア、事が運んで行くまいかね、」

「何だい、今更珍らしくもなく詰らない事を馬鹿々々しく感じて居るぢやないか。當然の談話さ。借りても遣はうといふ我々の了簡と、子に子を産ませやうといふ此處の主人の了簡とは、始めから南極と北極ほどに違つて居るのさ。」

と呼返せしが、主人の居間なる彼方の客の言葉に聞耳立てゝ、

「や、あの客も同じく我々の仲間だな。何だ頻りに言譯をして居るぢやない

か。縷々と辯じるね、あ、那麼言立をする奴があるものか。拙い。奴未だ一向のお坊樣だね。見た事か。さそくに切込まれた。や、究した事を言出して來た。然し可憫さうに腹の中ぢや下らない目腐れ金の爲にと嘸業を煮やして居るだらう。我々とても相去る事遠からぬお身内だ。あいす荒しだとかあいす泣かせだとか、相手が相手だから閙て小氣味のいゝほどの毒手段を使ふ奴がある。我々は那樣事をしないのが、お人柄なのか、お人好なのか、流石に少し裡に考へるだけにいつも付入られてはいつも敗北するよ。」

など言合へる折しも、前の婢の再び入來りて携へたる茶菓子薦めなどしつゝ、

「あの誠に恐入ますけれど、今少々お控へを願ひまする。」

と奥よりの意を傳へて退くを、山川は又見兔がさず打眺めて、

「おいおい此菓子は何だい。君の談話ぢやア幾萬といふ身代ぢやないか。いくら先刻言つた了簡方だつて餘りといへば無情ぢやないか。畔倉の處の十年前の氷砂糖も酷いが、此巻煎餅に惠比壽大黒のおこしとは何事だい。些少は人を見て貰ひたからうぢやないか。」

と戯れながらも不興なるさまして言へば

「また遣り出すよ。那樣始まらない理窟を此處へ來て言ふ奴があるものか。君は最う些少分つた男だと思つたに、這麼場合で愚に返るやうな仕末ぢやア此先が思遣られて一處に來た僕が餘り妙でないぢやないか。いゝ加減に目を眠つて少し鮮やかな畜類でも肚の中で考へて居たまへ。恁ういふ處で變なものが出た時は口の内でお念佛を申して置くに限るよ。

「うむ、ま那樣もんだね。實は先刻あの丸つ鼻の下女が出て來た時、僕は既に念佛氣が出たよ。類は友といふけれども彼の何でも搔込みさうな面附を見たまへ。彼奴も浮ばれない亡者になる事だらう。」

「それでもあの女はいやに君をぢろ〳〵見て居たぜ。」

「人をつけ、君も餘りな事を言つてくれる。僕を何と心得て那樣臺辭を並べてくれるのだ。胸が惡くなるではないか。那麼奴に見られる位なら僕は寧ろ妖怪變化に見込まれた方が遙かに心持がいゝね。なるほど奴は見て居たがそれは此指環を見て居たのだ。それも指環其物を見ないで只此黃金を見

たのだ。君なぞは未だ知るまいが、僕は先刻一寸見たばかりで、いゝ事を知つて居る。彼奴は内々貯金をもして居るぜ。」

囁きちらす中に漸くごとくと客の歸行く物音したりしが、

「や、誠に御待遠でございました。存外談話がつい其纏りませんでな。飛んだ失禮を致しましたわい。」

とばかり其處へ罷出でたるは主人なり。年は六十に近く頭髪は處禿げに禿げて、鋭かるべしと思はれし眼眸は、半は目蓋に掩はれて眠れるが如く、白髪交り眉長く脣少し屹として、身は瘦枯れたる羅漢の如き老爺なりき。

（下）

「宮岡君、おい、宮岡君ではないか。」
と馳行く車を呼返すは今粕岡より戻來れる齋藤山川の二人連、車の上なるは其人なりしが直ちに此方へ引返して、近づくまゝに互ひに顔を見合すより、
「や、先刻は失禮、那邊へ。」
「君は那邊へ。──」
「僕は一寸した用達して紀尾井町まで行つて、今歸る處だ。」
「それは丁どいゝ。兎も角下りたまへ。兎も角一處に歩きたまへ。車は返して了ふさ。まア何でもいゝから然うしたまへ。」
と二人の左右より説立つるに、宮岡も煙に卷かれて二言三言其儘に譯も分らず遂に其意に任せぬ。
「恁う言つたらそれを遲蒔の今知つたかと言ふだらうが、天の配劑といふのは頗る妙だね。今君の噂をして、これから君の家へ押掛けやうといふ矢先へ

君が顏を見せるとは、圖星といふ處へ持つて來たのだ。僕等が如何に君を歡迎したかを知つて居るかい。」

と齋藤の深き髯の中よりいつもの如く、やくたいもなき事をいふ。

「知るにも知ないのにも、無暗に車から引張下されてお先眞暗で歩いて居るのだ。此方はまご／＼するばかりで、何が何だか薩張分りはしない。」

「成程、蛙の子は矢張蛙だ。勿論君のやうな凡眼で我々如き奧の測知られぬものを洞察するといふのは、兎ても及びもない恐多い談話だが、せめて一寸色合を見て取る位の働きは、一生懸命になつたら出來さうに思つたが、いや山川君、矢張これは見切物だよ。飛んだものを車から下して有難く脊負込んで了つたではないか。」

と言掛くれば、

「それだから僕が言はない事ぢやないのを、君が何でも盲探がしに見立てゝしまつて、今更何うにも恁うにも仕末が付かないぢやないか。這麼男を此處へ捨てゝ行つたつて、誰も拾つて行くものはありはしない。」

と相槌打つに、宮岡は堪りかねたる如く、
「おい、おい、おい、言はして置けば何處まで勝手な熱を吹くのだ。踏んだり蹴たりもいゝ、可減にするが可い。取るに足らない兩君の事だから腹を立てるだけ馬鹿々々しい譯だけれど、君等も不思議に物音を聞分けるだけの耳を持つて居るから、一通りは言つて聞かせやう。何だ君等は初め僕に對して、何うしたか覺えて居るか。第一僕の下車を懇願して嘆願して、手の甲を擦つて涙を流して足を戴かないばかりにして賴んだぢやないか。僕は素より進まないけれども、折角の願ひだから聞屆けて下りて遣つたのだ。恁くまでにして下した僕に向つて、今の兩君の言葉は何だ。それを聞かうぢやないか。それを。」
と顏を差付くるに、
「那樣事を言つたつて、君は恁ういふ風に舌の先で鼻を甜める事は、口惜しくも出來まい。」
と山川の譃けかゝりて舌卷出せば、齋藤は宮岡の肩を叩きて、

「最う可いさ。先は兒供だ。勘忍して遣るが可いさ。」

と打笑ふ。宮岡は打上りて、

「なに、例の通り與太の惡戯だから、別に熱くなりはしないけれど、癖になるから言つたのさ。それは然うと最う口上なしに、手短かく譯を言つて了ひたまへ。何うせ僕の知惠を借りなければ手も足も出ない兩君の事だから、と這麼事を言ふと又先が長くなる。何もない事にしてさアこれから何うして何うするといふのだ。」

「餘り騷ぐものだから見たまへ、人立がする。」

と歩を止めて此方を眺むる往來の人々を見廻はして打笑みながら、齋藤は剽輕らしく、

「なに此男は胡亂なものではありません。少々氣が違つて居りますけれど是だけの男です。」

言捨てさまに二人を促がして人なき方へ導きつゝ、

「實はね宮岡、今日意外な都合で二人の懷が無法に暖かくなつたと思ひたま

へ。そこでさね、例の心意氣なかるべけんやとなつて來たのさ。」
と皆まで言はせず、宮岡は手眞似に押へて、
「分つた。そこで僕が見立てられたのだ。よろしい。心得た。すべて僕に任せたまへ。決してお見立を辱しめない。何も僕が方寸の中にある。さアずッと恁う來たまへ。」
と先に立つを、
「待つた。其方寸の中が頗る心細い。拔目は無からうが一通承はつて置きたいね。」
と山川の遮つていふ。
「君の盲目にも困つて了ふ。全體僕を何と心得て居るんだい。」
「外に心得やうがあるものか。式の如くのお猿と心得て居る。」
「や、此奴が。撲るぞ。」
「逃げるぞ。」
見るより齋藤の割つて入りて、

「又始めるよ。餘り御人躰をお安くしたまふな。さア最う彼是なしにずッと行かう。何うだい寧そ松川の方の顏も揃へて、一つ大景氣で事を擧げやうぢやないか。」

「大に妙だ。松川の處ぢや例の合戰が始つたから、未だ皆居るに相違ない。」

「よし、それぢや早速使を馳せやう。」

「勅使には僕が立たう。」

「それも妙だ。さア、事が決つたら先を急がうぢやないか。」

「さア行かう。」

「行かう〳〵。」

風吹烏、物見櫓に、尻もすわらず廻り〳〵て、雲に並べる東向、梅が匂へば柳が靡く、裏の雀が千代と鳴く、煙艸の煙茶の煙、金樽何斗夢を吹く醉。

黃昏

（一）

勝手元には八重といふ若い、脂ぎつた房州出の板額作、生れてから骨惜みを知らぬ極めて氣立の好いのが、明日の廻しの米を既磨上げて、丁ど手を拭いて居た處であつた。主人は會社から未だ歸つて來ず、茶の間の長火鉢の脇に、細君がたゞ一人、何かは知らず面白からぬ色で、ぽつねんと座込んだまゝ、良久しく物思ひの躰の、其中へがら〳〵と車で乘込んで來た女客があつた。

其以前此家の細君と學校友達であつたといふ。顏を見合せると、

「芳枝さん。」

「おや豐子さん。まアよく。さア何うぞ。」

とばかりで迎入れた。南向の八疊の座敷も、既中古の、元が貸家建だけに、鴨居がひぞいて柱が曲りかけて居るが兎もあれ一間の床脇、其一の雞合せの幅が

掛つて、染付の花器に見頃の白梅が挿けてある。此方の隅には南畫の山水の二枚折が立つて向ふの壁際には、座敷に不似合な洋琴が一臺据ゑてあつた。取敢へず出された天鵞絨の坐蒲團へ、暫く空辭義のあとで軈て押直つた客は、いづれも裁下しの縮緬づくめ、白茶に菊桐の金銀通しの繻珍の帶、帶止の金物が黄金で、指環が黄金で、簪が黄金で、僅かに見える時計鎖が黄金で、前齒のお隣りの齒が同じく黄金だ、松本といふさる高等官の秘藏の妻であるさうな、今日此家へ立寄つたのは近頃良人の昇進を吹聽かた〴〵、其昔學校時代に、總ての事暗々裏に競爭して居た此家の細君の芳枝に、妙な婦人氣質で、實は今の身の程を見せ付けに來たのだ。であるから、素よりつけ〳〵と口にこそ出さないが、内心頗る得意であるのだ。女の細かい眼で、芳枝は容易く其消息を看て取つたので、表には何處までも美しく應接つて居るが、中には甚だ快くないのである。其昔女學生の頃は、學課の成績から言つても、家の地位から言つても、持つて生れた縹致さへも、すべてが一枚上てあつたから、何事にも頭を上げさせなかつたのが、今は地を易へて當付がましく下目に見られるので、狹い其胸に

は殊更に面白くないのだ。それもこれも皆良人の今の境遇から延いて及ぼしたので、良人と頼む其荒井厚一といふ人は、去年の秋までに丁ど三度、高等文官の登用試驗に應じて、以上三度とも見事に落第したのである。

それに付いては、是迄面目を失つた事が一度や二度ではないのだ、荒井の兄樣は又いけなかつたの。本當？嘘でしやう、と生家の妹までが言つた。其妹にも去年さる騎兵大尉の許へ嫁付かれてから、姉であるだけに更に肩身が狹い心持かして居る矢先であつた。然も去年は、荒井よりは年も劣つて、三年ばかり後進の兄の義雄が、後から追付いて來て同じく試驗に應じて、兄は易々と及第したのに、荒井は又も日夜勉強を棒に振つたのだ。生家へ行つても、芳枝は顔を見られるやうで、いつも氣を腐らして歸つて來る。

それも一昨年までは、家にも若干か未だ荒井の亡父の遺産があつたので、遊んで喰つて相應に贅澤もして、一意に科目を研鑽して行く事が出來たが、去年の春からはそれもむつかしくなつて、荒井も無據くさる會社の、餘り匂ばしくもない口を求めて、日々出勤するといふ事になり、其片手間に飜譯か何かで、何う

にか是迄通りの家計を遣て來た。來は來たもの丶、有るに任せて、少々大束に遣つた處が、それほど目に立たなかつた今迄とは違つて稍ともすれば支出の方が收入よりも多くなるので、内輪は漸くに苦しくなる。隨つて苦情も出勝ちてあるのだ。

荒井も最早、官途の方はい丶程に思切つて、他の方面で遣れるだけ手を伸ばすのも妙であらうに、それが又此人の行き方にはない。

殊に去年の、再三の不成功からは、荒井の箔は甚だしく落ちて、折も折家政の不始末が種々な處から尾を出した時であつたから、氣の毒にも、其紛紜に付いて、廻つて、出さずとも可い襤褸が押續いて出る、惡くなつて來ると又、傍の芳枝にはいろ／＼のあらが目に立つて、腑甲斐ない人、見損た人末の見込みがないと這麼事が肚の中にこんがらがつて來る。出來るなら今の中に、寧その事緣を切つて了はうか。といふやうな氣も出た、氣まづくなるほど面白くない事が次第に重つて、それから以來氣の伸び／＼したといふ日は一日もない。其中へ此豐子が訪ねて來たのだ。

それでなくとも、僻見も起りさうな立場に居る上を、ちら〳〵匂はせられるのだから猶更に氣に觸る　昔からの見得坊で、常着にも、糸織を重ねて、黑縮緬の羽織を被つて、流石に日髮ではないがいつも結立のやうに頭髮を光らせて稍、肉厚の、ぐいと根の高い丸髷に、古鏡形の平打の、鏡の表を白金にした二十二金の簪を挿してゐるといふ、思上つた婦人であるから更にむづかしい。

（二）

彼是二時間ばかり、それとはなしに良人が昇進の御自慢やら、今度立派な新宅を手に入れた御吹聽やら、兒供の宮詣の衣裳支度の事々しい御披露やら、聞かうともしない日常の生活の華美な有樣までを、御丁寧な註釋付で、散々忌がらせた後で、一轉して何氣ない振で、

「あの荒井さんは矢張會社の方へ。」

輕く問掛けた其顏付に、那麼身空で、未だぐづ〳〵して居るか、と言はねばかりに見えた。芳枝は其儘に受流して、

「はい。なに別に行かなくとも可いのですがね、ほんの道樂で、暇潰しに遣つて居るのですよ。」

と暗に、餘り十分でない今の地位を辯護すると、餘所ながら試驗以來の、樣子を概略知つて居る豐子は、心に笑つて表に態と、

「まア然うですか。お氣樂で可うございますねえ。良人なんぞはね、些少も

遊んでは居られないもんですからね、まア種んな事に手を出しましてね、役所から歸て來ましてもおち〳〵と落付ては居ないのですよ　ですから最う宅に居るのはほんの寢る時ばかりと言つても可いので」
「其代りお骨折だけの事は屹度ありましやう　つまり貴女のお幸福ですわ。」
「何が幸福でしやう。餘所で御覽なさるとは大違ひです。本當に自分の事ばかりかまけて居て、私なぞは些少も構つてはくれませんの。當人の氣おやア躰のいゝ留守番を置いて居るつもりで居るのでしやう」
「まアうまい事を仰有る事、人が知らないとお思ひなすつて。」
「あれ何を。」
「何をもないもんてす。貴女はあの御同棲になりの前に、松本さんが三年越目を着けて居た方ではありませんか。」
「あら厭な、噓ばッかり。」
と娘のやうな挨拶をした。芳枝は這麼事でも、僅に勝味に行たのに直に乘つて、

「此間も何方かのお談話でしたよ。貴女は全で松本さんを、掌の上へ載て三番叟を躍らしてお出でなさるッて。」

「まア酷い事を。何うして冗談にも那樣眞似が出來ましやう、貴女こそ人の事は言はれせんわ。」

「御冗談を仰有つちやァ可けません。私は些少でも貴女に敎へて戴いたら、最少しあがきが付くだらうと思つて居る位ですものを。」

「本當に呆れますね。何うしてたら那樣事が仰有られるでしやう。」

「お弟子になつたらこれどころぢやァ有りませんよ。」

「まア貴女のお口には叶ひませんね。此上又いゝお口に適はない中に、どれそろ〳〵お暇と致しましやう。」

笑ひながら、衣紋を直して既立つ支度。

「あれ、最うお歸りなさるの。本當に。」

と引止めたい顔をした芳枝は、やれ最う歸つてくれるか。と漸くに肩の荷を下しかけた心地になると、

「はい。いつも詰らないお饒舌ばかりして、飛んだお間をお缺かせ申しましたね。貴女も其中に、折を御覽なすつて何うぞお遊びに。」

と豐子は桃、尻になる。

「本當にお歸りなさるのですか　まア宜しいではありませんか。何うせ此通り暇なのですから何うぞ御寛くりなすつて。」

とそら〳〵しい。

「いえ、未だ二三軒ね、廻らなければならない先がございますからいづれ又。」

「然うですか。本當に何もお構ひ申しませんでしたねえ。」

「いえ何う致しまして。ではこれで。あの何うぞ荒井さんに宜しく。」

「はい申聞けます。何うも大變失禮を致しました。」

何の彼のと互の式禮も長い事で、樣子を賣合つて、豐子は軈て立際に、帶の間から女持の小さな金時計を抽出して、

「おや最う四時ですね。遲くなつて了つた。急いで顏を出して參りましやう。最う何ですかね此頃ぢやア望みもしない交際ばかり殖えて厭になつて

了ひますよ。」
と又異な處から持つて來た。芳枝は逸して、
「考へると學校時分の方は嘘のやうに氣樂でしたね。」
「本當に然うですよ。おや又つい饒舌をして、何うも長ッ尻で困りますね、おほゝゝゝ。」
又會釋して漸くに座敷を出た。玄關に待つて居た車夫は、それと見て慌てゝ煙草を捨てゝ吸管を納つて直に飛出して車の準備をした。あとから送つて來た芳枝は、豐子がコート抱込んだのを見て、
「あの何うぞお支度をなすつて。」
「はい。では御免を蒙りますよ。」
コートは紺鐵の吉野御召、緞子の裏をひらめかして颯と着流すと、向直つて頭巾と肩掛とを持添へて、重ねて一挨拶して出て、車夫に一言をくれて、すいと乘移る。車は塗立で鏡のやうに光つて、蹴込みの染皮は燃立つやうで、背後に折返しに豹の皮は、日に照添つてさも美しい。梶が上ると、振返つて此方を見て、

輕く會釋した其姿は、更に芳枝の氣色に障るほど目に止つた。

（一二）

車が去つて了ふと、ほッとして、僅かに身の枷を取除けたやうな氣がしたが、茶の間へ歸つて來ても、二時間あまり虫を殺して居た、腹立たしさは容易に止まない。人を馬鹿にした、用もないのに、那麽事が言ひたいばかりで態と來たのだ。那麽厭な人ッたら有りやアしない。と此氣が執拗く付纏つて、ちよッ、いつか一度は、仕返しに思ふさま見せ付けて遣りたい。と思ふと良人の額もしげない有樣が目に浮んで、日頃の屈托がそれからそれと胸に沸いて來る、沸いて來るほど厭な厭な事ばかりで、氣も腐つて了ふやうに、

「あゝ詰らない。」

と思はず聲を出して、衝と立上らうとした時、今度は勝手口から誰やら音訪ふやうな氣勢がした。立ちかけた腰を落して、我にもあらず聞耳を立てると、出入の洋服屋が、幾度か徒足を運んで未だに取れない懸を、今日は殊に、初めから目色を變へて居る氣味で取りに來たのだ。八重が取次いで、今日はお留守だ

から解らない、と言つて遣ると、では奥樣に、一寸お目に掛つてと返して來る。彼是押問答の、末無據しに引上げると、顏を見るからさア並べられた、苦情やら泣言やら、次第に少からず毒口も交つて汲んで出した茶も飮まず立續けに談じ付けるのである。重ねて這麼時は、聞て居る瀨はないのだが、弱身があるので漸つとの事言宥めて、良人が歸つたら、能く話すからといふ事にして、何うか恁うかして追返して、再び、ほッと息つくと、さらぬだに始末が付かぬほどくさくさして居たのが、更に高じて何うにも我慢がしきれなくなる。

「奥樣あのお魚は燒きましやうか。それともお煮付に致しましやうか。」

八重は何氣なく、次の間から指揮を乞ひに來た。思はぬ飛沫で聞も敢へず芳枝は浴せ掛けるやうに、

「何うでも食べられさへすれば可いぢやないか。ちよッ、五月蠅い。」

ずんと立つて呆れて打目成る八重を見も返らず、室を外へ荒々しく襖に當付けて、座敷を通拔て庭へ出た。

むしやくしやするばかりで、更に身の遣塲もない。

「あゝ厭だ。」

と術なげに其處へ佇立んだ。見立も何もない狹い庭で、ばら〳〵と五六本、申譯ばかりの木が並んで、目も鼻も支へるやうに垣を壓して、隣りの家がぬいと高く、前に立塞つて居る。這麼狹苦しい、庭とも言へないやうな庭を巣にして居ると思ふと、生れた其初めから、荒井へ嫁付いて來た時まで、朝夕目に馴れた生家の廣庭の、水や、石や、樹々の趣きの深かつたのに、何時も慰められた事を思出す。處女の其頃のさも華やかであつた日毎の態を思起した。這麼處に、這麼事になつて居やうとは、夢にも思つて居なかつたに、と言ひ敢へず情けないやうな心地を覺えて、不圖見ると、東の往來に添うた要冬青の垣の隙間から、今しも家を指して歸つて來た良人の姿が彼方に見えた。馬にも車にも乘る處か、塵埃を浴びた古洋服に古帽子、薄汚れた骨ばつた顏に、有るか無いかの薄い薄い髭を僅かに見せて、ほくり〳〵と近いて來た其姿の今日は何よりも倘みぢめに見えた。

それと目に入れたばかり、迎へやうともせず、顏を背けて衝と避けて裏庭の方

へ行つて了つた。

裏の古垣根の倒れかゝつた蔭に、去年の梅の鉢植の其處へ抛出したまゝになつて、今年は花を着けやうともしないのを見て居る態で傍へ寄つた、家を背にして俯向いたまゝで居ると、門の潜戸が開いて、續いて格子戸が開いて荒井は内へ入つた樣子、八重との談話が二聲三聲聞えたと思ふと、荒井は其まゝつかつかと東の縁に出て來た。

「芳枝、」

と見付けて聲を掛ける。芳枝は振向いたばかり、

「おや、お歸りなさいましたの。」

とほんの義理のやうな聲音。荒井は氣にさへやうともせず、

「一寸來な。見せるものがある。」

「何でございますの。」

と同じ氣乘のない調子で、直に來やうともしなかつた、其日も處々の梅の梢を暮殘して、一しきり近くの森の塒に集まつた烏の聲の騷がしかつた頃、芳枝は

外出の扮裝で家を出て先の見當も付けず道を辿つて行つた。

芳枝は今、詰らぬ事から花を咲かせて良人と言爭つて、あゝ最う家に居るほど厭だ、一寸氣晴しに出て參ります。と言ふいふなり許容をも待たず、さつさと支度して家を跡にして來たのである。何處へ行かうと言つて、素より思定める遑もなく、構はず行當り次第に、誰か知邊を訪ねて心を紛らして來やうとばかりで、急に出て來たのだ。出てから幾町の間、殆んど未だ上の空で只身を先へと足を運んだ。するとゆくりなく、後から追縋るやうに、大跨にとッ〳〵と近寄つて、

「や、荒井の奥さん。」

とはきとした調子で聲を掛けた者があつた。振返る途端に香水の香に襲はれて、見上げる眼の前に三十恰好の、色の小白い男容の見事な、切立の洋服姿に見よげな肉置を見せて、目に口元に言はれぬ笑を含んで立た人を見た。

「おやまア、笠原樣。」

見るより向直つて急かはしく挨拶した。

「背容が何うも貴女のやうだと思つたら、果して然うだつた暫くでしたね。那邊へ。」

「はい。あの、一寸其處まで。」

「私も彼方へ參るです。其邊まで御一所に參りましやう。」

歩きながらの談話となつた。

笠原彌太郎といふ、西國出の男。

友人の一人が此男を種變りの白無垢でつかと言つた事がある。以前を知つて居るものは驚くのだ。此方を喰詰めて米國へ渡つて、暫くはスクールボーイのやうな態で、玻璃窓の清拭きやうな事を遣らされて居たのが矢庭に手慰みでドカ當りをして、其まゝ手を收めて、一時過ぎると、實は其金で何うかしたのだとかいふ〓〓の肩書を持つて歸朝して來た。歸つてから二三年の間新聞記者で立廻つて居たが、尤も同國といふばかりでなく、外に種々の關係があつたさうであるが、今度新内閣の組織が成ると、突然某大臣の秘書官となつた。凡そ道樂を持つて居る中に、此男ほどさまざまな道樂を持つて居るものはな

い。銃獵を遣る。寫眞を遣る。義太夫を語る。玉を突く。碁を圍む。骨董を捻る。盆栽をいぢる。數へて行くほど切はないのだ。其中にも最も性質の惡いのは、思ひも寄らぬ手段を廻らして、巧みに色を漁るのだ。例を言ふまでもない。彼は今妙な機會で、不意に落合つた芳枝の楚々たる姿に目を着けた。

芳枝は何と思つたらう。氣の毒にも、笠原のものごしが今日はいつよりも立派に見え過ぎた。恁かる場合に、いつもは妬ましいやうな眼をもつて見るのが、何としてか、自分にも解らぬほど羨ましいやうな心になる。

折が折であつた。

二人は尚話しながら行つた。

日は暮盡して、今迄白かつた水の光も、梅の軒端も、軈て漸く黒み渡つて、空には星が飜れかけて十歩、十五歩の中に、夜の色は全く二人を裹んで、先は見えなくなつた。

塵影

(一)

屹驚した。屹驚して突立つた。

道具屋の忠七といふ分別盛りの四十男だが、今日儲筋で麹町へ出掛けて、まんまと首尾よく嵌込んだのか、賣付けたのか、兎も角美味い汁を波つて歸つて、門口から最う大元氣、寐て居る犬に躓きながら、慌てゝ、內へ上込んで、まアお前さん と呆れる女房に、ぶッくり大鼓の胴のやうに脹らがつた紙入を投出して、甚麼物だと反身になる。おや〳〵と開けて見て一方は眼を輝かす。福德の三年目、晚には飲めるぜといふ段取になつて、頓て一落付き落付くと、寒いな滅法、どれ此間に一寸湯に行つて來よう。おい手拭と石鹼を出しな、と近處の櫻湯といふのへ片足足癖で奇妙に減つた下駄を引掛けて、どんぶり暖まりに先づ飛込んだ。

こゝで番臺に坐つて居た亭主と、二つ三つ話しながら、着物を脱ぐと、寒さに思はずゾクリとして、急いで手拭を摑んで、總身に毛穴を立てながら玻璃戸を引開けて入つた

中は丁ど空いて客はばらりと、五六人。

岡湯を汲んで來た男が出合頭に顏を見合せた。　三軒先の凧屋の亭主、馴染なので、

「よう。今日は。」

「何うです。甚く寒じるぢやありませんか。」

「隨分應へますね。」

忠七は何心なく小桶を返して、片手の石鹼箱と垢擦を置いて、衝と涌槽の方へ進んで行つた。此時だ。中に入つて居たのは只つた一人、近處の事だから見知り越しに知つて居る　向横町の勇吉といふ指物師だ　たツぷりした湯を心持よさゝうに、湯槽の角に頭を持たせて、眼を塞いで、うツとりした姿で居たのが、今忠七が、其處へ差掛つた途端、いきなり其凭れて居た頭が、ずるりと下へ

辷つたと思ふと、一支へもなく、ずぶ〳〵と中へ沈んで行つた

「やッ」

と忠七は我にもあらず叫出した　外の人々は聲に驚いて一齊に顔を振向けた。

頭は沈んだきり直に出ず、中で一つぐるりと返つて、ぶくりと肥つた臀を先に浮出した。

「おゝ湯氣に上つたんだ。おい番頭さん、來てくれ。大變だ。大變だッ」

忠七は憶病者だ。自分では手も付けで立つた儘、で怒鳴つた。居合せた者は總立ちになつた。慌てた顔で、跡から三介が驅付けて來た。人を割つて凧屋の亭主が眞先に中へ飛込んで行つた。

「何うした。何うしなすつた。」

いきなり抱起したが、ぐッたりとして最う正體もない。首も手足も、だらりと力なく垂れて居る。

「串戯ぢやない。おゝ勇さんだ。何うしたッて言ふんだな。おい確かりし

ないかい。勇さん、おい勇さん。」
顔を打目戍つたが、
「可けない。全ッきり性が無いぜ。」
忠七は寒さに胴震ひしながら、
「湯氣だ。湯氣に上つたんだ。」
傍へ來た一人が心付いて、
「然う言へば、此人は先刻から湯の中へ入績けに入つて居た。」
言ふと外の一人が、
「何だか醉つて居るやうでしたよ。」
聞いて凧屋の亭主が、
「然うですかい。全體酒好ですからね、暇さへありやア飲つてるんです。や、併し斯うしちや置かれない。上げて水でも吹掛けて見やう。おい、番頭、手を貸してくれ。肥つてるから又馬鹿に重いや。」
其中に又一人の三介も來た。亭主も番臺を降りて、燒杉の通下駄を穿いて傍

へ來た。皆で手を貸して、兎角して水槽の傍まで伴れて行つた。

忠七は狼狽々々して未だ湯にも入らずに居たが、身體の冷切つたのに氣が付くと突如に大きな嚏して、

「ほい。」

と慌てゝ湯槽の方へ取つて返して、濕しも敢へずそこ〳〵に入りながら、首を伸して、氣遣はしげに此方から樣子を見て居た。

先方の勇吉の方は、寄つて集つて大騷ぎで、水を吹く。呼喚く。奧から有合せの藥を持つて來る。手を換へ品を換へ種々にしたが皆徒になつた。勇吉は何時までも氣が付いて來ない。

「駄目だ。こりやア何うも素人の手には行かないよ。」

と凧屋は眉を顰め出した。

「醫者を呼びに遣るが可い。」

と一人が言ふ。亭主が脇から引取つて、

「へい。今使を出しましたよ。」

一人が又ぢッと見て、
「何うもこりや湯氣に上つたばかりぢやない。」
「えッ」
と凧屋は變な顏をして、再び勇吉の方へ眼を移したが、
「然うでしやうか。だが全で苦しんだ樣子もないぢやありませんか。」
途端に背後の方で、
「湯陀佛。」
と呼ばゝつた者がある。湯槽の縁へ手を掛けて居た忠七はぶるッと慄へた。
「やッ、然う言へば變に冷たくなつて來たぜ。」
と凧屋は色を變へて、早口に脇の三介の一人に、
「何しろ此處、ぢや最う仕樣がない。先方へ持つて行かうぢやないか。醫者だ。醫者の手でなけりや最う追付かないよ。さア、上り場まで兎も角手を貸さう。それ其方の腰の方を持上げたッ。あッ、誰か最一人脇の方へ掛つてくれなくつちや可けない。」

凧屋は勇吉と、別段に懇意といふほどの間でもないが、差掛つて見て居られず世話を燒いて亭主と共々三介二人を指圖して、頓て手を合せて上へ運出して行つた。

忠七は未だ湯の中から目を離さず樣子を見て居たが、此時表から三四人報知が屆いたと見えて、どや／＼と其處へ驅込んで來た。見る中に周圍を取卷いた人々の蔭になつて、此方からは能く見えなくなると、凧屋の亭主は其中に引返して冷えた身體を急いで湯槽の方へ遣つて來た。忠七は待受けて、

「何うしましたい。未だ氣が付きませんかね」

「付きませんよ」いや何うも飛んだ事さね。」と中へ入りながら、「追付け併し醫者が來たら何うかなりましやうよ。まさか是ッきりなんて事は有りますまい。」

「左樣さ未だ廿八九でしやう。それに彼の力士のやうな身體だ。」

「だが些少飲過ぎましたからね。」

「へい、那樣に飲むんですかい。」

「飮むッてよりは浴びるんさア。」

「ふむ、それぢや堪りますまい。や醫者が來ましたね。」と伸上つて「おゝ、經師屋の龜さんも來て居る。」

今の騒ぎで隔ての玻璃戸は未だ開放した儘になつて、其處にも二人ばかり、矢張洗ふのも忘れて見て居るのがあつた。すると變な顏をして番頭の年上の方のが引返して流し場へ入つて來た。凧屋の亭主は直に聲を掛かて、

「おゝ、番頭何うしたい、正氣が付いたかね。」

「可けません。何うも飛んだ事でしたね。」

「えッ可けないッて何かい醫者が然う言つたのかい。」

「はア、駄目だッて事で。」

「えゝッ。」

と忠七は急に氣味を惡さうに、

「然うすりや此湯は何の事はない、湯灌の湯だね。」

と今更のやうに見廻した。凧屋は笑つて、

「はゝゝ、違ひない。」
と言つたが構はぬ男で、平氣でぼちや〳〵と遣つて居る。忠七は顏を顰めて、
「いや餘り好い心地のもんぢやない。」
と早々に出やうとした途端、不意にわッと言つて飛上つた。周圍の湯は唐突に煽りを喰つて、ざぶりと一時に波を揚げた。近くに居た者は皆驚いた。
「美濃屋さん、何うしたので？」
と凧屋の亭主は呆氣に取られて振仰いだ。
「え？」
と外に躍出した忠七は、振返つて、我ながら仰山なのに、流石少し極り惡い顏をしたが、
「なに今ね、あの勇さんの殘して行つた手拭が不意に湯の中で足に搦付いたもんだから……。」
と未だ氣味を惡さうに、凧屋の笑聲を跡に聞いて、足早に岡湯の前に來て、有合ふ小桶で二三杯續けて冠つた。

「はゝ、惡く又怯えたもんだ。」

と凧屋は見て又笑ひながら跡から出て來た。番頭は其中に手拭を探出して、絞つて向ふへ持つて行つた。出口ぢや今、兎も角もと遺骸を運出す處で家は近いので取敢へず手車にして外へ舁出した。勇吉の顏は最う着て居た半纏で隱されて居た。

（二）

「おゝ兄弟！」

と何處か上調子で、剥れた瓢輕な顔を見せた、左官の勝藏と言ふ、友達中の愛嬌者、仕上げた建具を寄掛けてある、店の仕事場へ差掛ると、外から聲を掛けて、いきなり其處へ飛込んで來たが、足元近く轉がつて居る鑿を、危なく突掛けやうとして急に立止つて、

「聞いたか。驚いたよ、實に。」

「何だ。唐突に何うしたんだい。」

と主人の吉次は鉋の手を止めて不審の眼を向けた。勝藏は急がはしく、

「え？　死んだ。」

「誰が？」

「横町の勇がよ。」

「なに勇が？」と聲を急しく、「喧嘩でもしたのかい。」

「うんにや。」

「何うしたんだ。」

「頓死だ。只つた今湯ん中で急に逝つて了つたんだ。」

吉次は受取らず、

「串戯言つちや可けない。つい未だ一時間ばかり前、勇は此處の前をピン〳〵して通つたぜ。俺にも聲を掛けて行つたッけが、何處にも那樣惡さうな樣子は有りやしなかつた。」

「それだから驚いて居るんだ。現に俺も、先刻用達に出た途中で遇つたんだ。何でも贔負になつて居る屋敷の誂物を納めて來たんだつて、いゝ威勢で居たのが用を達して歸つて來る中に、最うお目出度くなつて居るぢやないか。」

「本當かい。」

「本當にも何も、俺ア今見て來たんだ。何の氣もなく其處の路を歸つて來てひよいと見ると、勇の家の前が變に混雑して居るぢやないか。何うしたんだと思つて行つて見るとお前、今湯に行つて突如に這麼事になつたつて、思ひも

付かない佛になつた姿を見せられたんだ。誰だつて此奴ア驚かア。うツて言つたばかりで俺ア、二の句も次ぐ事が出來なかつたよ。」

吉次は呆れた眼をくる〳〵とさせて、

「ふーむ、そりや驚いたらう、俺だつて今本當にしなかつた位だ。だがそれにしても解らない。彼の達者な男が、全體何うしたツてんだらうな。」

「醫者は何だツて言つたさうだよ。﨤の腎ぢやねえ、然うだ、腦溢血だツて言つたとよ。」

「何うにもならないのかい、最う。」

「むゝ仕樣がないんだとよ。」

「飛んでもない事になつ了つたな。串戯ぢやない。今の齡に死ぬツて事があるものか。」

「と言つて何うする事も出來なからうぢやないか。」

「そりやアまア然うでもよ。」

途端に隔ての障子を引開けて、此家の女房のお若といふのが、忿がはしげに顏

を差出した。丁ど今臺所から茶の室の火鉢の脇へ來た處、火を直さうとして坐つた拍子に、店の談話が耳に入つて、驚きながら背後ざまに、中仕切の狹い玻璃越しに隙見したが、急に身を返して其處へ半身を見せた。廿二三の色の黑い、背かなさゝうな女で、髷に結つて前垂掛、剝身屋にした二子の半纏を被つて居た。

「おや勝さん、お出なさい。」

と挨拶して亭主の吉次に、

「一寸誰か亡くなつたの？」

「むゝ、勇が死んだ。」

「えッ、勇さんが？　まア、何うして？　え、何うしてさ。」

と慌てゝ乘出して聞く。勝藏は引取つて直ぐ、

「何よ。今話したんだがね、」

とざッと繰返して、又見て來た樣子を話して、お若の色を變へたのを見ると、尙調子付いて、

「だつて出掛けと歸りとの間で、最うお前息が無くなつて居るのぢやないか。思掛けねえッて何だつて、全で夢見たやうな心持だ。」

お若も寢耳に水のやうな心地で、跡から連りと首肯きながら、

「ねえ本當にねえ。嘸吃驚おしだらうよ。人ッてものは知れないもんだねえ。」と其儘眉を寄せて、前を見詰めてぢッと考込む。吉次は氣が付いて早口に

「お若お前先へ行つて顏を出して來てくれ、俺ァ仕事が最う一ッ切ある。跡から直ぐ行くからな。」

「あいよ。なにお前さん、未だ息があるッて言ふんなら何だけれど、最う可けないんなら少し位遲くなッたつて。」

と仕事の方を庇つて言ふ。吉次は最う急いで鉋を遣出して、

「だがお前、行くには行つてくんなよ。」

「あゝ、了解んで居るよ。」

「瀧の野郎、何處へ行つてやがるんだらう。ちよッ、這麼時にや居やがらねえで。」

勝藏も未だ用のある身體の落付かず歸掛けて不圖、

「瀧ッて言へば、手の怪我は何うしたい。未だ自由にならないかね。」

「むゝ、未だ些少可けねえんで、爲う事なしに遊んで居るよ。」

「商賣道具だ。可くならなくつちや仕樣がないな。」

言ふとそれなり、半ば目顔に言はせて、

「俺ア一寸出直して行く。ぢや後に逢はうぜ。」

と急がしさうに歸つて行つた。吉次は一しきり又鉋の音を立てゝ、せつせと先を急出した。くるりと卷いた鉋屑が、手に隨つてはら〳〵と落ちる。軒の夕日の影は斜に土間へ射込んで、小脇の置圍爐裏に、切落しの燃えさしがちよろ〳〵と焔を立てゝ居る。と恐ろしい大きな猫が、不意に外から歸つて來た。

お若は立つて行つたが、手早く半纒を替へて出て來くと、

「ぢやア行つて來るよ。」

「むゝ、能く言つて置いてくんねえ。」

「何うせ未だ極りも何も付いちや居ないんだらう。彼の阿母さんぢや弔慰

の言榮もしやしない。」
吉次は仕事の手を休めず、
「ふむ、まア仕方がねえや。彼の婆さんも詰らなく跡へ殘つたもんだ。勇と取替りやアそれこそ助かつたんだが。」
「今度はお政ちやんが脊負つて立つんだね。可哀相に。」
と降りて下駄を穿込むと、夕日に軈て影を曳いて足を刻んで身體の緊つた後姿を見せて行つた。吉次は見向きもせず仕事を續けて居た。

（三）

店に飾つてあつた賣物は、出入の路を開く爲に脇へ片寄せて、表は半分大戸を降して、上には最う忌中の簾を掛けてあつた、奥には人の影が七八人、勇吉は次の四疊半の室に、式ばりの屏風に圍まれて北枕にして寢かされて居た。顔を隱した手拭の上に弱い燈明はさながら頼りなけの影を見せて、重い、沈んだ氣が妙に室を押付けて來る。此處には今誰も居なかつた。

すると、此方に集つて居る中から、六十五六の、最う白くなりかけた頭を、小さく玩具のやうな丸髷に結つて、腰を曲げて奇異しく襟を突いた、痩せた、皺だらけの婆さんが、時も構はず苛々した尖つた聲で、

「罰當りめ。酒を喰やアがるから這麼事になつたんだ。那麼親不孝な奴は有りやしない。」

と一人で熬り立つて言出した。死んだ勇吉と、今片隅に眼を泣腫して居る妹のお政と二人の繼母になる、お牧婆さんと言つて近所でも著名なのである。

座の人達は此言葉を先刻から繰返して聞かされるので又かと苦い顏をして、言合はしたやうに眼を見合はして、ろくに返事もせずに居たが、中に一人經師職の龜五郎といふ勇吉の從兄に當るのが、親類だけに見かねて脇から、

「おい困るなア大概にしてくれるが可いぢやねえか。恁うして人樣も居らつしやるんだ。些少は物を考へて言つて貰ひたい。第一お前佛に對しても餘りぢやねえかよ。」

「何が餘りだよ。」とお牧は眼を險しくして、「お前なんざア人の事だから何とも思つちや居ないだらうが……。」

龜五郎は遮つて、態と笑ひながら、

「何だ。己にまで喰つて掛るのかい。」

と言つて人々に、

「皆さん何うも濟みません。何しろ唐突の此騷ぎなんで、叔母も些少逆上せて居るもんですから。」

と繕ふ氣味で挨拶する。お牧は聞敢へず急に向直つて、

「龜さん變な事をお言ひだねえ。私は逆上せても何うもしても居ないよ。」

龜五郎は眉を顰めて屹と眼を返すと、

「ちよツ、好い加減にしねえ。お前見たいに又解らねえものは有りやしねえ。」

「え？何う解らないんだい。言つて貰はうぢやないか。」

「む〻、お前も好い歳をして何うしたもんだな。おい、」と少し乘出して、「勇はお前死んだんだぜ。血をこそ分けねえが、お前の掛つてる子ぢやねえか。可哀相とは思はねえのかい、涙の一つ位顫して遣つたつて、萬更罰も當るめえぢやねえか。勇公だつてお前にやア、然う言つちや何だけれど隨分盡して居るぜ。そりやア酒は飮んだけれど、仕事を休んだ事は有りやしねえ。不孝だ不孝だつて無暗に言ふが、勇公が、一度でも、お前を親らしくしなかつた事が何時有つた。今迄の事を考へたら、餘り那樣事を言へた義理ぢやなからうと思ふ。まア〳〵可いや。せめて佛の浮ばれるやうにして遣りねえ。」

お牧は鼻であしらつて、

「ふん、飛んだ御親切樣だ。這麼倒な事を仕出かした者が不孝でなくつて何

だらう。」

「たつてお前壽命は仕方がねえや。」

「なに、壽命なもんか。己が好きでなつたんぢやないか。死ぬのは勝手だから可いだらうが、置いて行かれた此方の身になつて見るが可い。え！　龜さん、這麼歳になつて、後に殘つた私を何うしてくれるんだい。」

龜五郎は腹立たしさうに又舌打して、

「ちよッ、那様事ア跡の談話だ。現に此處へ佛を控へてるぢやねえか。知らねえ。最う勝手にするが可い、俺アお前と言合ひをしに來て居るんぢやねえ。」

言ふなり衝と座を立つて、次の四疊半の方へ入つて了つた。其處にて何時か、彼方の座を外して最う四人ばかり詰込んで居る、お政も疾うに逃げて來て居る。一人が振返つて直に座を開いたので龜五郎は輕く會釋して割込みながら聲を潜めて、

「あれだから困つて了ふよ。」

「遣切れねえね。」

と今座を開けた大工の源治といふのが言ふ。
「厄介な婆さんだよ。場合も何も全で見境が無えんだからね。自分勝手も如彼なつちや堪らねえよ。」
お政は術なげに脇から、
「龜さん本當に濟みません。嘸心持を惡くおしだらうけれど、知つての通りの人なんだから。」
「なあに俺ア構やしねえけれどね、勇公が氣の毒だけに尚腹が立つてならねえ。可哀相に勇公も彼の繼母ぢやア、甚麼に苦勞したか知れやしねえのだ。」
「はア、そりやア最う然う言つちや濟まないけれど、隨分種々な目に遇つて居るわ。繼母さんは那麼にお言ひだけれど、兄さんのお酒だつて、もとは繼母さんの仕向から來たんだもの。飲まなくつちや紛れないッて、兄さんは現に私にお言ひだッたわ。」
龜五郎は首肯いて、
「むゝ、そりやア俺も知つて居る。だが勇公は、然うかッて別に愚痴は零さな

かつた。心持の可い男だつたがなア。」
「本當に何うして這麼事になつたんだらう」
と思出して又涙組む。源治は前屈みに近く龜五郎の方へ差寄つて、顏を見詰めながら聲を低く、
「何んだッて言ふぢやねえか。去年死んだソレ勇さんの内儀さんも、彼の婆さんが虐り殺したんだッて言ふぢやねえか。」
「然うともお前、誰でも知つて居らア。俺ん處なんざア幾度泣込まれたか知れやしねえ。全體又脾弱の女だつたからね、彼の婆さんに始終揑ちられて、何うして身體が持つもんかな。到頭お前那麼病氣を引出し了つた。いゝ罪を作つて居らアね。」
「ふむ、那樣のが又皮肉に跡へ殘るんだ。あゝいふ人は年を取るだけ旋毛が曲つて來るぜ。」
「全くだ。思遣られるよ。」
と言つてぢッとお政の方を見る。可哀相に此娘も亦身を削られるのか。と

心に思ひながら

「政ちやん、お前は一番力を落したらうね。」

お政はつく〴〵心細さうに

「あゝ、私本當に何うしたら可いだらうと思つて居るの。」

「まア〳〵心配しねえが可い。皆も付いて居る事だから、案じるやうな事はさせやアしねえ。」

言つたが、其下から、

「だがね、彼の阿嬶だけは始末に負へねえよ。」

途端に入口の敷居越しに、今表から入て來た勝藏が

「何だ。此方へ籠つてるのか。おゝ龜さん人足はお前の考通りに決めて來たぜ」

「おゝ、御苦勞々々々々何だ、寺の方は今しがた吉が行つてくれた。」

と持つて居た煙管と一處に下の煙草入を摑んで、此方の室へ歸つて來た、お牧は何時か臺所の方へ行つて、其處には二三人又新らしい顏が見えた。

（四）

一日置いて家に相當した葬儀が、這麼事にも物見高い近所の人々の眼を惹いて此處を出て行つた。忌中の簾は取下されて、表は半ば閉された儘、それから稍、暫くの間、日毎に人の出入はあつたが、店の軒先を日の射す影も淋しさうに見えた。何うするだらうと、餘計な疝氣筋を、近間の誰彼は噂し合つたが、軈て談話が付いたと見えて流石賣家にもせず、馴染の源治が道具箱を擔いで來て、二日三日店の造作に掛ると入替つて吉次が來て建具を取替へた。おや〳〵何か店を出すんだね。と物好の筋向ふのお內儀さんが、時に伸上つて目を止めて居る中に、廣くもない店の事だから仕事は譯なしに捗取つて疊が入る。釣棚が出來る。勇吉が置土產の飾棚なども役に立つて、あゝ屹度お牧さんが彼處へ後妻に來た前から握込んで居たのを吐出したんだよ。ナニ借金だよ。然うぢやない何だよ、彼の政ちやんに旦那が付いたんだよ。と下馬評取り〳〵の中を支度は思つたより早く運んで、一寸見てくれの可い、小ぢんまりした煙

草屋さんが出來上つた。

まねきにはお手前物のお政の標緻で過ぎて居る。盛りの十九で、相應に人も見て、如才のない口も利く。これが當つたか新規の所爲か、開店早々、賣れるは賣れるは、や、繁昌する事。

お政は併し一向に詰らない。兄の勇吉は、飮んだ代りにはお牧への面當もあつたらうが、人の二人前、時には夜を掛けて三人前も働いたので、家には何時も餘裕があつた。お政は其蔭に、死んだ兩親に成代つた兄の保護を受けて、お牧の前を始終庇はれて、目を掛けられて、氣儘な、自由な日を送つて行かれた。今のお牧が、儲が薄いと言つて萬事に儉しく、暇のない、叱言の多い家の中とは比べ物にならぬ。氣の短かい、負けて居ないお政の事だから、奥で顏を合はせると小さな爭ひは、屹度附物のやうになつて居る。

「あゝ厭だ。這麼で何時までも續くんなら、私や最う家にや居やしない。」

一方がつけ〳〵と言ふと、

「何だと恩知らずめ。十の歳からさん〳〵手を掛けさせやがつて、何といふ

口をきやアがるのだ、現に今、誰に喰はせて貰つて居ると思ふんだい。」と一方は又がみ〳〵といふ。お政は聞き敢へず、

「なに人！　頼みもしないのに。」

と滅らず口に言つて退ける。お政は赫として、

「これ、そりや誰に向つて言つてるのだ。」

お政は澄まし返つて、

「知らないよ。」

と立つて店へ出て了ふ。

お政はお牧に對して、義理がないとは思つて居ない。けれども、それは名ばかりで既往を思ふ度、繼しい仲を苛酷に扱はれた、恨めしい記憶の餘りに多いのに、甚麼事にも口惜しいのが先に立つて了ふ。兄さんは男だけに我慢したけれど、私にや彼の眞似は出來やしない。繼母さんの方で分つてくれなければ、私の方で何うかして了ふから可い。と腹では那樣事ばかり思つて居る。

今日は晝から、お牧は何か相談があるとか言つて、深川の姪の方へ出掛けて、お

政は一人、今も一しきり立込んだ客を歸した跡、疎らになつた田毎臺の上の賣物を、棚の仕入箱から出して、新しく置足して居る處へ通掛つて、馴染の勝藏が不圖寄つた。

「入らつしやい。」

と俯向いて品を揃へて居たお政は、ふりの客と思つて振仰いだが、顔を見て急に、

「おや勝さん。」

と嫣然する。勝藏は立つた儘、

「今日は政ちやん一人なのかい」と丁ど開いて居た奥の方を見ながら「繼母何處かへ出掛けたのかね」

「はア用が有るツて深川まで。」

「然うか。ぢやア其間一寸肩拔けだね。」と横に框へ腰を掛けて、「何うだい其後商賣の方は?」

「有難う。まアお蔭様で、一日も閑暇な事は無いよ。」

「其奴ア豪氣だ、矢張お前の愛嬌が助けてるんだ。お、朝日を二つばかり貰はう」と受取つて直ぐ封を切つて引出して吸付けながら、「俺なんざァ最負の引倒しだけれど、これでも數の中だ。はゝ、其氣で居る處が可いぢやないか。」

と自分で嘲つて、氣の好い笑顏を見せた。お政は能くも聞かず打消すばかりに、

「あれ、那樣事があるもんかね、皆で這麼に、やれこれ言つて最負にしておくれなりやァこそ立つて居るんだわね。それでなくッて、商賣だつて碌に知りもしない者が、何うして這麼にして行かれやうかよ。これと言ふのも、死んだ兄さんにしてくれる皆さんの好誼だらうと思つて、私は其度に何だか兄さんが思出されるやうでならないの。」

と少し俯向き氣味になる。勝藏は前へ烟を返して、

「むゝ、俺はまァ何にもしやしないが、然う思つてくれりやァ皆も甚麼に悦ぶか知れない。今だから話すけれど、店を出す時だつて、彼繼母の手前勝手にや、

皆も相應に小腹を立つ了つたんだ。だがまア佛に免じ了つて、ナニ彼の婆さんにするんぢやねえ、佛と妹にして遣るんだ。と言つて又氣を直して掛つたんだよ。皆の骨を折るのは勇さんとお前ばかりの爲なんだ。」

「はア、そりやア私も知つて居るわ。だからそれを徒にしまいと思つて、これでも一生懸命に店を遣つて居るの。」

言ふ時ばた〳〵と來て、

「おくんなさい。敷島を一つ。」

と十二ばかりの女の兒が使に來る。

「はい、毎度有難う。」

と渡して代を受取ると、未だ座にも着かぬに、

「おい、オリエントを二つくれ。」

と今度は髭の生えたのが來る。お政は身を輕く、

「はい〳〵。」

と取つて愛想よく手渡しすると、間も措かず、又一人刻煙草を買ひに來る。勝

藏は默つて此方に見て居たが、客の歸るのを待つて、

「賣れるぢやないか、能く。何かい、始終這麼風なのかい。」

「あゝあア大抵恁うなの。賣れる時にや面白いやうに能く賣れるわ。此處は全體場所も好いんだねえ。」

「なアに矢張お前の縹緻が呼ぶんだ。」

「おや憚り樣。」

「はゝゝ、だがそれにア違ひないからね。」

「お止しよ最う那樣事。」と口早に打消して急に眞顏になつて、「いゝえね、場所とそれに、今も言つた皆で贔負にしておくれだからだよ。先刻も二丁目の棟梁ん處から、何家かへ遣物にするんだッて十箱入の不二を買つて行つてくれたし、源さん處ぢやア菖蒲の大きいのを購りに來てくれたし、八百辰さんからも同じなのを買つてくれたの。皆お前近所にあるのを通り越して、態々此方まで來てくれるんだもの。」

「むゝ、ぢやア一日の賣上げは、相應に好い額になるだらうね。」

「でも儲が割合に無いんだからね、何でも數でこなさなくッちや仕樣が無いの。」

と又も來る客に暫く妨げられたが、座に返ると、

「けれどもまア有難い事にや、恁うして傍からお客はあるし、全く皆さんのお蔭でね、這麼店にや過ぎた商ひをして居るの。そら、前から兄さんが御贔負になつて、私も先達中、三月ばかりお手傳ひに行つて居た彼の竹町の倉橋さんね、」

「むゝ、板紙の大將か。何だッて言ふぢやないか、本所にある彼の旦那の工場は何でも大したもんだッて言ふぢやないか。」

「然うださうだね。私も行つて見ないから知らないけれど談話に聞くと大層な收得があるんだとさ。だからお家ぢや、そりやア最う好きな贅澤な眞似をしてお出でなんだよ。私共の此間の不幸の時にも、尤も平素から兄さんが、那麼に御贔負になつて居たのぢやあつたけれども、私共にや過ぎた香奠を下すつたからね、いつか印ばかりの配物を上げた時、お禮かた〱一寸伺つたんだよ。すると旦那樣がわざ〱逢つて下すつて、跡は甚麼事にすると仰有る

から、恁う〳〵で煙草屋を始める事になりましたと言つたらばね、全體彼處等の御用なんぞ、兎ても私共の出す小賣店なんぞで受切れるもんぢやないけれどねそれでもお情けでね、然うか然ういふ譯なら家の取付けにして遣らうと仰有つて、店を出してから此方始終御註文を受けて居るの。那樣這麼でねえ、店も此鹽梅ならまア皆さんのお骨折も徒勞にしまいと思つて居るよ。」

勝藏は喫んで居た朝日の殼を、傍の店火鉢の中へ差込みながら、

「それぢやお前、すつかりお釜を起し了ふぜ。其拍子でのゝして行つたら兄貴が居たつて敵はないかも知れないぜ。」

「おほゝゝ、那樣に調子よく行つて堪るものかね。でもまア今に好くなつたら、それこそ皆さんを招んで精一杯のお禮をするわ」

「あゝ恁うと知つたら婿に來て置くだつたね。」

「おや何處へ?」

「はゝゝ、然う來るだらうと思つた。」

と笑つて直に談話をかへて、

「串戲はまア串戲にして、店は何しろ大出來だ。これで彼の繼母が居なけりやア、此上の文句はないんだがね。」

「繼母さんかえ。」とお政は急に氣のない顏で、「だつて那樣事は出來ない談話ぢやないか。」

「だから皆が可哀相だッて言つて居るんだ。だが繼母も、今度は凭るのは最うお前一人だから、些少ア我を折つてくれさうなもんだがなア。年を取つて憎まれたつて仕樣があるまいに、困り者だよ。」

お政は眼を落して、

「でも何と言つても親だからねえ」

「むゝ、お前も飛んだ貧乏鬮を抽い了つたね。だが何うでも折合が付かないとなりやア、何とか又法の付けやうもあるだらう。」

「けれども何う行つたつて、外に好い付けやうが有るものかね。愚痴を言や切りがないから最う言はないけれど、私や本當に何うなるんだか解りやアしないよ。いくら若いからッて私だッて些少は先の事を考へるからね。」と調

子に連れて沈み掛けたが、不意に口早に「最う止さうよ。那樣事を思ふとくさくさして仕樣がない。勝さんそれよりか、一昨日の晩吉さんと一處に行つて來た家の談話でもおしよ。」

「えッ、最う知つてるのかい。」

と勝藏は驚き顏に、少し狼狽きながら、

「だ、誰が饒舌つたんだい。」

「おほゝゝ、誰でも可いよ。勝さんは何でも大當りだつッて言ふ談話ぢやないか。」

「へッ、飛んだ事たア。」

途端に客が來たので、お政は又立つた。勝藏は煙草を收つて、其間に歸仕度をして居たが、客が出て行くと共に立上つた。

「どれ俺も行かう。あゝ飛んだ油を賣つ了つた。」

「あれまだ可いぢやないか。」

「むゝ、待つてるからね。」

「おや氣が附かなかつたよ。おほゝゝゝ。」

「はゝゝ。」

と笑つて店を出て行つた。お政は手の明いたのを機に、そちこち最う傾いて來た日射の、お牧の歸つて來ぬ間にと晩の手廻しに奧へ入つて行つた。

（五）

お牧は丁ど點燈頃奥と店とをお政一人で忙しがつて居る中へ歸つて來た。襟の掛つた茶の萬筋の秩父の上に、年數物の黑の紬の羽織を引掛けて、同じ古さの黑繻子の帶に、藤筒の小さな煙草入を差込んで、跡齒の下駄を小刻みに、何かせか〱として入つて來た。

「おやお歸り。大層緩くりだッたわね。」

とお政は流石笑顏で迎へた。お牧は併し愛想ッ氣もなく

「あゝ家ほど邪魔にされないからね。つい腰が落付いて了ふよ。」

お政は慣れては居ながらも、つい眉を顰めて、

「何だねえ繼母樣、歸り早々最う那樣人の氣を惡くするやうな事をお言ひなんだね。」

お牧は空々して笑掛けて、

「おや、然うだッたかい。濟まなかつたね。私は正直な事を言つたんだが、惡

かつたかね」
お政は能くも聞かず、
「可いよ。解つたよ最う。」
とばかり横を向いて了つた。お牧はぢろりと見返つたが、
「ちよツ氣を附けるが可い。」
と言捨てゝ奥へ行く、お政は態と相手にならず、聞かない振で眼を逸らして居た。恰も其處へ、毎日通ふ御定連の一人、時には行歸りで二度も寄る若い書生さんで淸水さんといふ名前まで最う知られて居る二十三四の、氣の弱さうな其癖野面な、時に厚顔しいのを通越した男、地方の富んだ家の子と自稱して、まア道樂に學校へ行くのだと、言つて居る恐ろしい見得坊で、お政には初めから、いけ好かない人なのであつた。
「入らつしやい。まア大層お嬌飾で。」
とお政は商買づくの愛想を言ふ。お牧に對する爵勃の、其方へ紛れやう爲に人も擇まず、元氣よく立つた。

「はゝゝ、これでも矯飾して居るやうに見えるかね。」

「はア何處の若樣が入らしつたかと思ひましたよ」

何樣今日は裁下しの五つ紋、帶も小袖も、何か綺羅びやかに反身になつてヌウとして居る。いつものインバチスが見えないのは、例の見得坊で下に合せて餘りに古びたのを氣にしたのである。

「や、飛んだ若樣だね」

とは言つたが内心得意で、羽織の襟先を跳ねてゆらりと腰を掛ける。火鉢を前へ出して、お政は何時より愛想よく、

「今日は那邊へ行らしつたの？」

と火箸を取つて火を直しながら言ふ。

「なにこれから出掛けるんだ。」

と横に火鉢の上へ手を翳して上目遣ひに微笑みながら、

「何うだ一處に行かないかね。」

「えゝ？　まア何方へ。」

「いゝ處だ。政さんの大好きな處だ。」
「おほゝゝ、まア御串戯ばッかり。」
「いや本當だよ。」
とぢろ〳〵と見て、少し乘出しながら、
「え？ 出られるのかい。」
と乘勢みかゝる。誰が、那樣男に、と思ひながらも、
「おほゝゝ、まア、調戯ふのも好い加減になさいよ。這麼私のやうなものを何うして伴れて歩かれるもんですかね。」
「何故？」
「何故も何も有りやしません。御人體に障るぢやありませんか。」
「政さん僕は本氣なんだよ。」
と清水は不意に又調子をかへて言出した。お政は取合はず頭から笑掛けて、
「あれ、まだ言つて居らつしやるよ。おほゝゝ、いくら那樣お顏をなすつても本當にはしませんよ。」

清水も無據く笑つて頭を搔きながら、

「や、何うでも逃げて了ふ。仕樣がないな。」

と言つて急に心付いたやうに、

「おゝ、談話に紛れて買物を忘れて居た。其處の手近の富士を三個ばかりくれたまへ。」

「はい。」とお政は直に取つて、「何うも毎度有難う。」

何だ。僕に那樣改つた世辭にや及ばない。」

と受取つて上の一個の口を開ける、お政は空笑ひして、

「何うもね、何分未だ素人ですからね。」

「いや然う黑人になられた日には又堪らないが……。」

「おや何うして？」

「僕なんぞは全て相手にしちやくれなからうから。」

「おほゝゝ、まア飛んでもない。」

途端に奥から、用ありげな繼母の聲て、

「お政。一寸。」

と障子越しに呼ぶ。お政は立たず振返つて

「今お客よ、阿母さん。」

清水は機が悪いと思つて立上つた。

「や、邪魔したね。」

「あれ可いんですよ。」

と別に止めたくはないが言つた。清水はそれなりに串戯交りの置土産を言つて歸つて行つた。と店で送出した言葉の未だ切れぬに、

「お政や。」

と又奥で呼ぶ。お政は五月蠅さうに、

「あいよ。何だねえ。」

と口小言で入つて行つて見ると、お牧は未だ歸つたまゝの扮装で、火鉢の前に長煙管を持つて座込んで居る。

「何だよ阿母さん。」

とお政は座にも就かず、脇から見下して言つた
「お座りッ。何だえ突立つた儘で。先刻から呼んでるのが聞えないのかえ。」
「だつてお客が有つたんだもの。」
と火鉢を向前に膝を折つて、胡散らしい眼で顔を見ながら、
「まアそれよりも用は何なの。」
「家の事だよ。」
とお牧は言葉を切つて、煙管を吸付けながら、
「お前にも好い談話だから、早速悦こばして遣らうと思つて居るのに、人の氣も知らないで直ぐに來もしない。」
お政は尙怪訝な色で、
「まア然うなの。濟まなかつたわね。家の事ッて甚麼談話？」
「お前のお婿さんの談話だよ。」
「えッ何ですつて。」
「何だね。喫驚する事はないぢやないか。お前だつて其位の事は考へて居

るだらうに。」
「でも餘り唐突なんだもの。」
「唐突だつて好い談話ならお前、何も尻込みして居る事はありやしないやね。」
「だつて何も今が今那樣事を……。」
お牧は聞敢へず、白髮交りの小さな頭を左右に掉つて、
「お前はそれだから可けない。那樣のほヽんな氣で居られて堪るものかね。那樣了簡で何時私を安心さしてくれるんだい。お前這麼儲の薄い商買だけで、此先樂にして行かれると思つて居るのかい。資本だつてお前最う手元にや幾等も殘つちや居やしない。當分新店の珍らしい内賣れるからツてこれで好い氣になつた日にや、それこそ甚麼目に遇ふか知れない。何方にしろ危ッ氣のないやうに用心して置くに越した事があるかよ。」
お政は何時か眼を伏せて、前に沸騰つて居る鐵瓶の口から、湯氣を噴いて居るのをまぢ〳〵と見詰めて居たが、顏を上げると、
「だつて其と前の事とは全で談話が違ふぢやないかね。」

「何が違ふ。詰りこれが元で起つた事ぢやないか、譯を能く聞きもしない中に兎や角う言出すから、つい口數が多くなつて了ふんだ。」

「然う。それぢや私が惡かつたね。で、阿母さんはまア何うしやうと言ふの？」

「さ、それを今話すのぢやないか。お前も最うこれ子供ぢやアなし、勇吉も居なくなつて見れば、何處までも確かりして、一ぱし家の爲に遣つて貰はなければならないんだ。今の處喰繋ぎだけの事は出來たやうなもんの、これですッかり安心が出來るといふのぢやないから、先達深川のへもそれを話したんだが、彼方でも心掛けて置いてくれたと見えて、今日行くと耳よりの談話が直に出たらうぢやないか。だから私は早速お前に聞かせやうと思つてゝ、大喜びに歸つて來たのさ。」

と一人了解で何時になく乘調子で話掛けた。お政は答へず、又眼を下にして跡を待つて居る。お牧は長くも口を休めず、拔上つた額越しに、落込んだ眼の、小さな瞳を据ゑてぢッと顏を視たが、それなり言葉を繼いて、

「先は深川の彼の勘之助のね、矢張遠い引掛りになつて居るんて、鎌倉の在の人なんだがね、家は百姓だけれど内福て、何でも確かりしたもんださうだよ。來ようッてのは四番目の息子でね、若いに似合はない堅いんださうだが、跡を取るんぢやないから、相應の持參で何處かへ遣らうッて言つてるんだとさ。處で當人がね、百姓業が嫌ひなんて、此方へ出て來て何か遣つて見たいといふ望みでね、それから談話が持上つたんだがね、金に直して千圓ばかりの田地を付けやうッて言つて居るんだよ」

お政は聞くと其儘、再び考へやうともせず、面を切つてつけ〳〵と、

「阿母さん、折角だけれどそりや斷つておくれ。厭な事た那樣田吾作なんぞ。」

と一口に跳付けた。お牧は赫として急に聲を強く、

「何だ、未だ談話を半分も聞かない中に……」

「聞かなくつたつて澤山だよ、私の厭なのは同じ事だから、餘計な口數を掛けるだけが徒ぢやないか」

「お默りッ、那樣我儘は言はせないッ。聞かなきや聞かないで、默つて決めて

了まふから其心算で居るが可い。」
「まア呆れて了ふのね。那樣無理押付けな事ッて有るもんかね。」
「そりやお前の了簡柄ぢやないか。」
お政は少しも讓らうとはせず、態と脇を向いて、
「知らない。それぢや思ひ〳〵にするばかりだわ。其方で那樣勝手な事をおしなら、私だつて了簡があるわ。」
「な何だと。其口上は誰に向つて言つて居るのだ。」
「おほゝゝ、那樣事言つたつて最う恐がりはしないよ。」
「罰當りめッ。何を言やがるんだい。」
同時に煙管が振上げた手の上に光つて、お牧の身體は衝と前に伸びた。
「あれ。」
とお政は素早く身を退いて、
「何をするんだね。那樣亂暴な事をしたつて、聞かないものは聞きやアしないよ。」

「なに聞かせないで置くものかい。來い此處へ。」
と血相を變へて居る。お政も自分の言つた事の穩やかでないのは知つて居ながら、仲の惡いだけに尚反抗つて、
「そんならお手柄に、何うでもして見るが可い。其時になつて後悔しないやうにおし。」
「何を生意氣な。」
と又立掛る。途端に店へ今湯歸りの龜五郎が、濡手拭に石鹸箱、丸い赧ら顏を光らして、好い心持さうに入つて來た。
「今晩は。」と上り框に一寸透して見たが、只ならぬ樣子を見て取ると、又かと眉を顰めて、つか／＼と直に入つて來た。
「何だ。珍らしくもねえ。又おッ始めて居るのかい。お前達は能まァ根も盡ずに然ういがみ合つてるね。」
お牧は急がはしく振返つて、
「おゝ龜さん。まア聞いておくれ。這麼不貞腐れの奴は有りやしないよ。」

と立下しに浴せやうとする。龜五郎は頻りに首肯きながら、手眞似で脇から押へるやうにして、

「まア可い。阿嬶。然う逆上せて居ちやア仕樣がねえ。いゝ加減にしねえ。見ッともねえぢやねえか。些少ア近所の前も考へるが可いよ」

「何だえ。お前は譯も聞かないで私しばかり言込める事はありやしない。そりやお前はお政が贔負だから……」

「始めたぜ。困らせるなア。何方が贔負もあるもんかな。譯も聞からが、まア少し落付くが可い」

お政は退いて居た膝を押向けて、

「いゝえ、龜さん、係うなんだよ」

お牧は聞きもあへず、

「えゝ、手前の出しやばる處ぢやない。默つて引込んで居ろ。手前に口を利かれると腹が立つてならない。畜生ッ」

と又打つて掛かる。龜五郎は言ふ迄もなく押隔てゝ、

「おい。俺が來たのにも免じるが可いぢやねえか。那樣手荒え事ア止てくんなよ。仕樣がねえな。政ちやん、まア兎も角此處を外すが可い。おゝ何だ、內の荊妻が何かお前に是非賴みてえ事があるツて言つて居た。幸ひだ。一寸の間行つて居てくんねえ。跡は俺が何うにかするから。」

お政の答へるのも待たず、お牧は傍から引奪るばかりに、

「いゝえ此處へ置いて貰はうよ。今夜は思入れ性を付けて遣らなきやならない。いゝと思つて增長しやあがつて、人を人とも思やがらねえ。龜さん、本當に癖になるよ。」

「いゝよ。まア可い。何しろ年が若いんだからね。屆かねえ處は俺が又能く言つて聞かせやう。政ちやん可いからまア內へ行つて居ねえ。」

と言つて店の方を振返つて、

「おゝ、お客樣だ。浮かりして居ちや可けねえぢやねえか。」

とお政を立たして遣つて、さて押直つてお牧の方へ顏を向けたが、又お定まりの愚痴を聞くのかと、腹ぢや少からずうんざりして居た。すると店で客を歸

したお政が、
「龜さん一寸」
と呼ぶ。龜五郎は立たず、奧から聲を掛けて、
「宜いッて事よ。俺が引受けたよ。今言つた用は本當なんだから其處が濟んだら一寸驅出して行つて來てくんねえ。」
と實はお政に耳打して置く事もあつたんだが、お牧に又僻まれるのもと思つて出なかつた。で向直つてお牧に、
「阿嬶、催促するやうで濟まねえが、茶を一杯飲ましてくんねえ。湯上りで馬鹿に咽が渇くよ。

（十八）

其處から龜五郎の家は一町足らず、角の小間物屋から一寸入つた處、表の仕事場は最う綺麗に片付いて、奥の洋燈が隔ての障子越にぼんやり影を見せて居る。若い二人の弟子は用が無いので遊びに出て、子供も晝の疲れに最う寢て了つた。留守を一人女房のお蔦は、燈火に近く針仕事を持出して、先刻からせッせと手を動かして居る。と裏口の腰障子の中へ、

「御免なさい。」

と若い嬌めいた聲が聞えた。お蔦は坐つた儘、

「何方？」

「私」

言ひながら其處へ入つて來た。お蔦は針を持つたなり顏を上げて、

「おや。政ちやん。まア。今良人がお前ん處へ行きやアしなかつたえ」

「はア來てよ。いゝえね、つい又始め了つたの。」

「え？　何を。」

「喧嘩を。」

「まァ良人のがゝえ。」

「あれ私がさ。

「誰と。」

「おほゝゝ。解らないねえ。家の繼母さんとさ。

「何だね、お前の話しやうが解らないんだァね、まァ何うしたんだよ。初めッからお話しな。」

と又裁縫を始め出す。お政も遠慮のない先で火鉢の前へ來て手を翳しながら、事の始終をざつと話して、

「私が居て又喧嘩を大きくしても何だと思つたから、龜さんの然う言つてくれるのを幸に外して來て了つたの。捉まつた龜さんこそ好い災難だね。」

お蔦は颯と絲を扱いて、微笑みながら、

「其氣が付いて居るんなら、餘り喧嘩をしないが可いぢやないか。本當に犬

と猿だねえ。阿媼さんもそりや何だけれど、お前も餘り可かァないよ。」

「はア、そりやア私も可くないとは思つて居るけれども、だつて溫柔しくして居ても方圓がないんだもの、」

「だつて那樣に商買のやうにして言合はなくつても可からうぢやないか。」

「能く〳〵性が合はないんだねえ。這麼で本當に何うするんだらう。先が案じられるよ、全く。」

と流石にほッと吐息つく。お蔦は歛色立つて、

「然う思つたら最う些少何うかするが可いよ。亡くなつた勇さんを御覽な。」

お政は聞くと共に、

「私にや兄さんの眞似は兎ても出來ないよ。男とは言ひながら能く彼の我慢が出來たねえ。それを思ふと本當に可哀想になるよ。」

と急に沈み掛けたが、不意に顏を上げて、

「義姉さん私寧その事、家を駈出して了はうかと思ふよ。」

「まア、何だねえ。」

とお蔦は眼を睜つて、思はず顔を見上げながら、
「それぢやお前の我儘になつて、お前の方が惡くなるぢやないか。氣をお付けよ。腹は借りない迄も、親は矢張親ぢやないか。」
「義姉さん、そりや私も隨分考へたよ。」
「けれども私は、其考へやうが惡からうと思ふよ。」
「そりやア私も思はないぢやないけれどね……。」
と眼を落したが、急に振直ると、氣をかへて口早に、
「止さう。那樣事思ふと鬱いで了つて仕樣がない。義姉さん何か私にお頼みの用があるッてのは何？」
お蔦は不審らしく、
「えッ、私今別に那樣用もないが、誰かお前に那樣事でも言つたのかね。」
「然う。まア。それぢや龜さんが、ばつを合せるだけに只お言ひなんだね。」
と笑つて顔を打目戍る。お蔦は一寸眼を動かして、
「尤も良人ぢやお前に話す事があるんだがね。あゝ解つた。私に話さして

お前の了簡を聞いて見やうッて言ふんだらう。先へ阿媼さんに言つて了つて、お前が頭を掉るやうな事でもあつちや、又揉めの種だからッて言つて居たから。」

「まア何の談話よ義姉さん。」

お蔦は留針をした糸を切つて、顏を上げると嫣然して、

「政ちやん、お前もあやかり者だね。彼方此方で引張凧で。」

「あら、何をお言ひなの？」

「だッて然うぢやないか。其方ぢや那樣お婿さんが來るッて言ふし……。」

と皆まで言はせず、

「まア厭だ。義姉さん、いゝ加減にお止しよ。那樣知りもしない人の事で兎や角う言はれて間尺に合ふものかね。」

「でもお前、何の道一人は定めなけりやならないんだらう。那樣事言つて居ないで、談話があつたら、些少考へたら可いぢやないか。」

と態と言つた。お政は言下に、

「厭な事だ。私や那樣事考へやうとも思やしないよ。假令考へるにしたからッて、私や一人身になるまでは決して自分の身を定めやうとは思つちや居ないからね。死んだ嫂さんの事を思ふと、私や今でも竦然とするよ。彼の繼母さんが居る間は何して治つて行くものかね。知つて來るなら碌な人ぢやなし、知らないで來りや長持ちはありやしない。だから私は然う決めて居るの。」

お蔦は何時か又針の手を止めて、氣の毒さうに打目戍つたが、

「お前那樣事言つて居た日には、何時の事だか先は知れやしないぢやないかね。」

「だッてそりや仕方が無いやね。」

「那樣仕方が無いなんて言つて居ないで、もつと好い分別を付けるやうにおしな。」

お政は聞入れず烈しく頭を掉つた

「お止しよ、私最う決め了つて居るんだから勘忍しておくれよ。私の剛

性ッ張は今始まつた事ぢやないけれども。」
と取つて付けたやうに笑つて、急に心付いたやうに、
「然う言へば今しがたお言ひの私に龜さんの話す事ッてのは何なんだえ。」
「いゝえそりやア、勸めて可い事ぢやないんだよ。でもね、何でもと言つて頼まれるもんだから。」
「あれさ。事から先へ話してくれなくつちや、何だか譯が解らないぢやないかね。」
「おほゝゝ、お前もせッかちだね。一體綾を付けて話すと餘ッ程面白いんだけれど、お前が焦躁ッたがるから手ッ取早く言つて了はうよ。先方は家のお出入の、彼の倉橋さんの旦那なんだがね、お前も勇さんが居た時分、一寸行つて居たから能く知つてお出だらう。良人ぢや一昨日から彼方へ仕事に行つて居るがね、今日歸り際に旦那の居室の方へ呼ばれて、其お談話が出たとお思ひな。詰りね旦那はお前を世話したいと仰有るんだよ。」
「何處へ？」

「あれ、察しが悪いね。」
「まア、何を言ふかと思つたら……」
と流石に人前を、我にもあらず面差げの色を返したが、態と、
「厭だ。義姉さん、人を調戯つて居るんだよ。」
「何だね、那樣罪な事をするものかね。いゝえ本當なんだよ。旦那は甚く躰裁を惡がつて、いつもに似合はずおこつ、こつ、いて、居らしやつたさうだがね、何でも口裏て見ると、旦那は前に、一寸那樣事をお前に匂はした事があるやうだッて良人で言つて居たよ。え、那樣事が有つたのかね」
顏を見られて急がはしく、
「邪推だよ。那樣事は有りやしないよ。」
「然う。だが隱して居るとすれば可笑しいね。おほゝゝゝ。」
「何だね義姉さん。よし有つたにした處が何でもなければそれだけの談話ぢやないか。」
お蔦は未だ笑ひながら、

「御免よ。そりやアまア可いとしてね…………。」

「なに可かアないよ。」

「おほゝゝ、あれさ、まアお聞きよ。何しろ旦那の方の御執心は大變でね、金なら幾等でも出すが、何うか談話は付くまいかと仰有るんだよ。承知をしてくりやア直ぐにも家へ呼んで、隨分贅澤の思もさせやう。年も若い事だから先へ行つて若し手を離れるやうな事があつても、後々までの世話は勿論充分にして遣らうと仰有るの。」

「まア。」

「なに捌けて出りやアお前、それやア旨い談話さ。彼の旦那の事なら何う轉んだつて惡いやうになさりはしないからね。榮耀は出來るし、それよりもお前の爲に何よりなのは、彼の阿媼さんと離れて居るだけ、那樣に喧嘩ばかりして始終厭な思をして居る事が無からうと思ふがね…………。」

「…………。」

「それにね、」

とお蔦はお政の答へぬのを見て、顔を見上げながら、

「彼家ぢやお前も知つて居る通り、奥様も病身で始終別荘の方へ行つてお出なんだから行きやアお前の天下のやうなもんだからね。旦那も實の處俺は子供が欲しいんだ、家のは彼の通りで、兎ても其方は最う望みがないからな、と仰有つたさうだがね。若しお前一人でも拵へて御覧な、外にやア居ないんだから、直に最う彼の大身代の跡取ぢやないかね。お前は何うお思ひだかは知らないけれど、同じ事ならお前、其方へ轉んだ方が當世かも知れないよ」

お政は未だ默つて居る。お蔦は再び顔を上げて、

「おほ丶丶、氣に入らないかね。」

お政は其美しげな眉を下に、紛らすやうな笑顔を見せて、

「義姉さん、私何て言つて可いか知らないよ。」

「え？」

「だつて直に返事は出來ないもの。」

お蔦は首肯いて、

「尤もね、これが眞面目に身を堅めるといふのぢやないからね、私の方でも無理に勸めやうとは思はないんだよ。なに良人ぢやアね、お前も家ん中が如彼、ぢや詰らなからうと、ちよッくら一寸彼處へ納まるやうな婿もなからうから、寧その事お政の爲に可いだらうッて言つて居るがね、そりやア何方にもお前の了簡次第さ。旦那の方も惡く思はれないやうに斷る仕方は幾等もあるからね、私共が口を利いたからッて遠慮をする事は些少もないよ。」

「はア有難う。折角然う言つておくれだから能く考へて見やうよ。何だらうね繼さんは、彼方で今繼母さんに此事を言つて了やしないだらうね。」

「あゝ、それや言はないよ。先刻も話した通り、お前と繼母さんの事は能く知つて居るもの。お前の了簡を聞かない中に言つて、跡でお前を困らせるやうな事をしないよ。尤もお前が承知なら、那樣用心も何も要りやアしないけれどね。」

と頓て一しきり裁縫の片を付けて、火鉢に近く差向ふと、

「いゝえ、そりやア彼の阿媼さんの事たから、話しやア二つ返事に決つて居る

よ。お前が何うだらうと那樣事ナニ構ふものかね。然う言つちや惡いけれど慾張つてる方ぢや誰にも負けはしないからね。」
「そりや本當だよ。今度のお婿さんの談話だつて、持參のお土産があるッてのが最う何よりなんだからね。本當に甚麼押付物だか知れやしないのに、わアわア言つて騷いでるんだもの、厭になつ了ふぢやないか。」
と言つて、急に、
「あゝ〳〵。何だか最う儘にならなくつて、焦れッたくつて仕樣がない。義姉さん、私何時になつたら一人で自由に思ふ通りの事が出來るんだらう。」
「え？ それぢやお前倉橋さんの方の談話も餘り進まないのかえ。」
と顏を打目成る。お政は投げたやうに、
「あゝ、正直言やア有難かアないよ。」
「そんなら詰り斷る氣かえ。」
と追掛けて言ふ。お政は一寸言難さうに見えたが、
「だつて厭なものは仕樣がないもの。でもまア私の我儘ばかり言ふのが能

でもないからよく兄さんとも又相談しやうよ。」

と幾等か折れて出て、不意と

「然う言へば兄さんは大層遲いねえ。」

（七）

「お政。お政。」

と夜明前の未だ薄明りも映さぬ中で、お牧の次の室から呼覺ます聲が聞えた。

お政は昨夜枕に就いてから、長い間人知れぬ物思に更けたので、勞れてたはいなしに寐込んで居る。お牧は舌打して又聲を高く、

「お政ッ。起きないかよ。おい。お政ッ。何うしたんだね。」

と手を伸ばして襖にどんと當つて、

「おい、お政ッ。」

「あいよ」

とお政は漸くに答へたが、思はず生欠伸して、重い瞼をやッと見開くと、雨戸の方を見透して、

「何だね。未だ眞暗ぢやないか。」

「暗いッたつて用がありや起きなけりやならない。愚圖々々言つて居ない

で起きないかよ。」
「用ッて何だよ。這麼に早く。」
と襖越しに顔を向けたが、未だ枕が離れずに居る。お牧は聲を尖らして、
「何を恍けて居るんだい。これから深川へ行つて都合次第で、話した田舍の家へ行つて來なけりやならないぢやないか。」
「あれ其事なら昨夜歸つてからも彼程厭だッて言つたぢやないか。私が何うしても不承知なのをお前何うする心算なの。」
「なに生意氣な。親が恁うと思つてして遣る事を承知も不承知もあるものかい。さア、さつさと起きないかい。」
「厭だよ私那樣用なら起きないよ。串戲ぢやない、最う好い加減に止しておくれよ。」
「馬鹿をお言ひでない。可し起きなけりや私が一人でする。お前なんぞ賴むものか。不貞腐れめ、年寄を使つて濟むと思つて居るのだな」
言ひ〳〵洋燈を點けやうとして燐寸を擦初めたが、怒つて手荒くするので四

五本を徒に折つて、漸と火を點けると、吃言の中から衣服を着替へて、がたぴし其處等へ當散らして、通らなくても可い枕元を、どし〳〵音をさせて通つて、臺所へ出て行つた。

「まア仕樣が無いねえ。」

とお政は澁々起上つて寢衣を脱替へる。其間にお牧はがら〳〵と其處の雨戸を引開けて、頓て流しの手桶を振動かして、

「ちよッ、水も有りやしない。」

言ふなり投付けるやうに柄杓を拋出して、手桶を提げて水を汲みに出た

「あれ、お待ちよ。那樣事までしなくつたつても……。」

とお政は此方から呼掛けたが、耳にも掛けず、態と足音を荒く出て行つた。

お政は眉を寄せたが、再び言はず、寢衣を疊んで床を揚げに掛つた。途端に井戸端で、

「あッ。」

といふ聲と諸共、綱でも切れたか、只ならぬ物音が聞えたと思ふと、續いて中へ

眞倒に落込んだ水音が高く響いた。

お政は驚いて思はず手を掛けて居た蒲團を下に落した。色を變へて直に驅出さうとしたが、俄かに釘付けのやうになつて其處へ立佇んで了つた。餘所では寐て居るか、誰も聞付けたものはない。井戸に一番近いのは、自分の家と此頃空屋になつた東隣の家ばかりだ。お政は赤くなり蒼くなつた。ぎらぎらと眼が異樣に光る。胸の鼓動が、息を止めるやうに烈しく身を襲つて來る 身體は全で波に搖られて居るやうな思がした。

お政は再び行かうとして、又立止つた。途端に空耳で、背後に何か聞えたと思つて驚き顔に慌たゞしく燃えるやうな眼を振向けた。誰も居ない。お政は額に時ならぬ汗を微かに見せて居た。

矢庭にお政は下の蒲團に身を投掛けて、其處へ突俯して了つた。

僅かの間ではあつたが、凡そ此間に、お政の胸に亂れる限りの思は種々に亂れ戰つたのであつた。闇を向ふにお牧の臺所に置いて行つた洋燈は、外と此處とを等分に照らして居る。春ながら未だ寒い風が颯と中へ吹込んで來る。

同時に遠く東の方で夢を覺ますやうに汽笛の聲が、半空を掠めて響いた。

お政はがばと身を起した。色は眞蒼であつた。すツくと立つと最早猶豫もせずばら〳〵と駈出して、洋燈を持つと其儘跣で外へ出た。

見ると果して綱が切れて居る。手桶が横に脇へ轉がつて、穿いて居た下駄の片足だけが脇へ飛んで居る影を見ると、今更ながら又はツとした。思はず知らず、聲を振絞つて、

「あツ大變です。誰方か來て下さい。」

駈寄りさまに二度三度叫立つた。曉近い事で表を通掛つた新聞配達を先に、呼覺された近所の誰彼は頓て跳起きて駈付けて來てくれた。

* * * * * * *

引上げられたお牧は、人々の介抱で間もなく息を吹返した。深川行は其爲に中止にはなつたが、身體は別に負傷もなく年寄ながら外に案じるやうな結果にもならずに濟んだ。お政は其日一日何も手に付かず、一人深く考込んで居たが、晩になつて用事の序に駈出して總五郎の家へ寄つた。お蔦は出違ひに

買物に行つた跡だつたが、お政は居ないのを却つて幸ひにして、朝の出來事の談話が濟むのを待ちかねたやうに、

「龜さん、私今夜は又我儘を言ひに來たのだよ。」

「え？　何だ我儘たア。」

と龜五郎は訝かしげの眼を返す。お政は微笑みながら、

「なにね、私昨夜の談話の、彼の倉橋さんの旦那の方へ行くからね、お前家の繼母さんの方へ能く話しておくれな。」

龜五郎は驚いて、

「何だ。お前昨夜の口吻とは全で違つて居るぢやアねえか。」

「違つて居るよそりやア。」とお政は嫣然して、

「だつて私最う諦め了つたんだもの。何うせ儘にならないもんなら、些少でも自由の利く方へ行かうと思ふから。」

龜五郎は未だ了解めぬ色で、

「むゝ、だが何で然う急に氣が變つ了つたんだい。」

「おほゝゝ、急に人が惡くなつたんだらうよ」

「妙だぜ。おい、確かゝい。」

「大丈夫だよ。だから何うぞねえ。」

「むゝ、お前が可いんなら、ナニ談話は何時でも付けるけれどね……」

「然う、それぢやお手數でも一つ骨を折つておくれな、あれ、未だ變に思つてお出だよ。本當に、氣が知れないやうにお思ひだらうけれど、私だつて覺悟をしなくつて、昨夜の今夜でわざ〳〵這麼事を言つて來やしないよ、龜さん、私の剛情なんて言つたつて、高が知れたもんだと、自分で思つて了つたよ」

* * * * * * *

龜五郎が其倉橋の家とお牧の家とを、往復したのは幾度でもなかつた、お牧は譯なしに金の前に好い顏を見せて、暫くして倉橋の奧に、お政は見違へるやうな美々しい姿で、此頃は一中の稽古を始めたといふ事である。

眉山全集第一卷終

明治四十二年七月十五日印刷
明治四十二年七月十八日發行

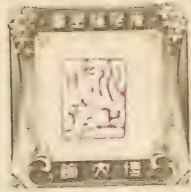
（定價金壹圓八拾錢）

眉山全集
第一卷

著者　川上亮

發行者　東京市日本橋區本町三丁目八番地　大橋新太郎

印刷者　東京市京橋區西紺屋町廿六七番地　石川金太郎

印刷所　東京市京橋區西紺屋町廿六七番地　株式會社秀英舍

發兌元　東京市日本橋區本町三丁目
振替貯金口座東京二四〇番
博文館

名家小說文庫

明治の世新文學ありてより僅に未だ三十餘星霜を閱せしに過ぎずと雖も、其間思想の起伏、文運の變遷一にして足らず、大家相踵て出で、雄篇傑作又少しとせず。或は艷麗に、或は崇高に、或は平淡に、或は怪奇に、皆競うて其特色を發揮し、春花の爛熳、秋草の温雅、人情の機微を寫し、心理の複雜を描き、文章思想共に美を盡にし粹を極む。まことに聖代の偉觀と稱すべき也。されど珠は聯珠の美しきに如かず、雄篇傑作また時ありて散逸す。本館玆に思ふ所あり、名家小說文庫を發刊し、毎卷千頁の大冊子となし、諸大家の集中苟も錄すべきものは悉くこれを輯め、裝釘を美にし、價を廉にし、逐次刊行して、以て讀書社會の渴を醫さんことを期す。竊に惟ふ、本書完成の曉は明治文學の偉觀燦然としてそれ讀者諸君の眼前に輝かん乎。

第一編 露伴叢書 前編

洋裝菊判總クロース金文字入
特製美本表紙意匠高雅
紙質精良紙數九百七十二頁
正價金貳圓 小包料金拾六錢

今回第一集として、露伴叢書成る、露伴先生は當代の大家、崇高なるその思想と、奇嶄なるその文章とは既に久しく文壇の誇りとする所、その內容に就いては編者また何をか言はん、今左に其目次を錄す。

目次

△二日物語 △夜の雪 △僥倖 △縁の絲 △休暇傳 △毒朱唇 △ひげ男
△新學士 △迷霧 △和合樂 △川舟 △大珍話 △縁外縁 △夢がたり
△是は〳〵 △醉鄕記 △珍饌會 △獅子庵 △伊能忠敬 △まき筆日記 △客舍雜筆
△地獄溪日記 △元祿時代の雜劇 △折々草 △將棋雜考

博文館發行

文學士 大町桂月君著

關東の山水

露を吸ひ霞を喰ひ飄々乎として行き悠々然として止まる高山の巓幽谷の底健脚到らぬ隈もなく靈筆縱横關八州の名所細大漏らさず文章山水渾然一致し高士紙表に躍動し雲煙机邊を撩繞し人をして遺世超俗の思あらしむ洵にこれ大町桂月先生特得の文境加ふるに地圖あり數十葉の寫眞あり中村不折、小杉未醒、丸山晩霞、高村眞夫諸先生の挿畫あり皆當代の逸品錦上花を添ふるの觀あらむ

全一冊

洋装中判特製表装高雅
風景寫眞版三十餘圖入
紙數五百五十頁
正價金壹圓 小包料金八錢

行雲流水

全一冊洋装小判
紙數三百二頁 正價金參拾錢 郵稅四錢

大和田建樹君著

散文韻文 野菊

大和田先生の近作出づ。漫筆の清楚輕快なる、紀行の諧趣詩味多き、歌篇の流暢瀏喨燦爛たる、特色集めて小冊子にあり。壺中の天地、眞に作文の模範たるべし、徒然の淸友たるべし。

全一冊洋装袖珍
紙數四百九十頁 正價金四拾五錢 郵稅金六錢

博文館發行

小説界の新福音

海賀變哲君編

新式 小説辭典

本書の内容は、遠くは春の家氏が書生氣質より、近くは二葉亭氏が平凡の時代に至るまでの間、千有餘の著作中より、當時傑作と稱せられたるもの三百餘篇を選み

絢爛の辭句、巧妙の叙事、輕快の會話等を抜萃し、之を容姿、扮裝、動作、會話、叙情、叙景、構造、叙事、怪異、滑稽

の十門に分類したるものにして、且つ其字句も、片言隻語に止まらず、短きも原作の梗概をも附記したれば、始めて小説をものせんとする者の、座右に欠くべからざるは勿論、一の美文集として、各作家の作風を窺知するを得べき近來の好辭典なり。

全一册洋裝三六判總クロース 表裝高雅 製本堅牢 紙數千三十四頁 正價金壹圓貳拾錢 小包料金八錢

田山花袋君著

小説作法

全一册 洋裝中判美本 紙數三百餘頁 正價卅五錢 郵税金六錢